

# 石 揚 遺 跡

—手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

## 第 1 分 冊

1 9 9 4

千葉県教育委員会  
財団法人 千葉県文化財センター

# 石<sup>いし</sup> 揚<sup>あげ</sup> 遺 跡

—手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

## 第 1 分冊（旧石器時代編）

1 9 9 4

千葉県教育委員会  
財団法人 千葉県文化財センター



遺跡空中写真



旧石器時代石核



方形周溝墓玉類



1・4号方形周溝墓



2号方形周溝墓



3号方形周溝墓

## 序 文

手賀沼周辺には、旧石器時代から歴史時代にいたるまで数多くの遺跡が所在しており、古くから自然環境に恵まれた地域であることがうかがえます。

近年、首都圏の拡大に伴って、東葛飾地方の人口も急激な増加傾向をみせ、住宅建設ばかりでなく社会教育関連施設の建設が望まれるところとなりました。そこで、千葉県教育委員会は当該地域における少年の健全な育成を図ることを目的に、手賀の丘少年自然の家の建設を計画しました。このため、千葉県教育庁生涯学習部文化課と同社会教育課は、建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて調整をすすめ、記録保存の措置を講ずることで協議が整い、平成元年12月から財団法人千葉県文化財センターで発掘調査を実施してまいりました。

発掘調査の結果、旧石器時代の石器群、縄文時代・古墳時代の集落、弥生時代終末から古墳時代初頭の方形周溝墓群、古墳時代後期の方墳など数多くの遺構と、それらに伴う遺物が検出され、特に旧石器時代の石器群のなかには、石器を製作した工程を解明するうえで良好な接合資料の発見がありました。また、県内でもめずらしい縄文時代前期初頭の集落や古墳時代中期の集落は各時期の集落形成の研究に多大な成果をもたらすとともに、方形周溝墓群の発見は弥生時代終末から古墳時代にかけての基制を研究するうえで貴重な資料となりました。

このたび、これらの成果を本書として刊行することとなりました。本書が学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のために広く一般の方々に活用されることを願っております。

おわりにあたり、今回の調査に際しご協力をいただいた千葉県教育庁生涯学習部社会教育課をはじめ、同文化課、沼南町教育委員会のご指導、ご助言にお礼を申し上げますとともに、寒暑のなかで調査に関係された各位に厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理 事 長 奥 山 浩

## 凡 例

- 1 本書は千葉県教育委員会による手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告である。
- 2 本書に所収した遺跡（市町村コード-遺跡コード）は、平成元・2年度に発掘調査した石揚遺跡（305-005）である。
- 3 発掘調査から報告書作成にいたる業務は、千葉県教育委員会（社会教育課）との委託契約に基づき、千葉県教育委員会（文化課）の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査に関わる各年度の組織および担当職員は下記のとおりである。

### 平成元年度

組織 調査部長 堀部昭夫、部長補佐 西山太郎 阪田正一、班長 上野純可  
担当職員 主任技師 太田文雄 藪淳一 糸川道行  
技師 安井健一

### 平成2年度

組織 調査部長 堀部昭夫、部長補佐 阪田正一 佐久間豊、班長 上野純可  
担当職員 主任技師 太田文雄 藪淳一  
技師 沖松信隆

- 5 整理作業に関わる各年度の組織および担当職員は下記のとおりである。

### 平成3年度

組織 調査部長 天野努、部長補佐 阪田正一 佐久間豊、班長 上野純可  
担当職員 班長代理 太田文雄

### 平成4年度

組織 調査部長 天野努、部長補佐 佐久間豊 深沢克友、班長 上野純可  
担当職員 班長 上野純可、班長代理 太田文雄  
技師 沖松信隆

### 平成5年度

組織 調査研究部長 高木博彦、事業課長 西山太郎、所長 田坂浩  
担当職員 分室長 太田文雄  
技師 大鷹依子 安井健一

- 6 本書の執筆は、太田文雄、安井健一が行なった。なお、縄文土器の基礎整理・分類の一部については沖松信隆が行い、大鷹依子の協力を得た。

- 7 本書の編集は、調査研究部長 高木博彦、所長 田坂浩の指導のもとに、太田文雄、安井健一が行った。
- 8 本書に使用した地形図のうち、第1図は国土地理院発行の1:25,000取手、白井を用いた。
- 9 写真撮影のうち、遺跡・遺構の撮影は発掘担当者が行い、遺物写真は堀越知氏によるものである。ただし、周辺地形空中写真については京葉測量株式会社、ほかの空中写真については、株式会社パスコの撮影によるものを使用した。
- 10 本書に使用した図面の方位は、座標北を示すものである。
- 11 遺構・遺物挿図に示す用例は下図および以下のとおりである。

縄文土器・石器は、原則としてを出土位置上段に、通し番号を下段に示した。遺物写真の番号は、各遺構の遺物番号に対応する。挿図の縮尺についてはキャプションの末尾に記した。

#### 住居・土坑



焼土



火床部



ローム混入土



攪乱

#### 方形周溝墓



ローム混入土



ロームブロック混入土



攪乱

# 第1分冊 目次

序文

凡例

序章	3
第1節 調査の経緯と方法	3
第2節 遺跡の環境	3
第1章 旧石器時代	9
第1節 概観	11
第2節 各ブロックの概要	11
第3節 まとめ	193

## 挿図目次

第1図 周辺地形図	第17図 5ブロック石器実測図
第2図 遺跡位置図	第18図 6ブロック器種別分布図
第3図 遺跡全測図	第19図 6ブロック母岩別分布図
第4図 基本層序図	第20図 6ブロック石器実測図
第5図 旧石器時代ブロック配置図	第21図 7ブロック母岩別分布図
第6図 1ブロック器種別分布図	第22図 8ブロック器種別分布図
第7図 2ブロック器種別分布図	第23図 8ブロック母岩別分布図
第8図 2ブロック母岩別分布図	第24図 8ブロック接合資料分布図
第9図 2ブロック石器実測図	第25図 8ブロック石器実測図
第10図 3ブロック器種別分布図	第26図 8ブロック接合資料1実測図(1)
第11図 3ブロック母岩別分布図	第27図 8ブロック接合資料1実測図(2)
第12図 3ブロック石器実測図	第28図 8ブロック接合資料2実測図
第13図 4ブロック器種別・母岩別分布図	第29図 8ブロック接合資料3実測図
第14図 4ブロック石器実測図	第30図 8ブロック接合資料4実測図
第15図 5ブロック器種別分布図	第31図 8ブロック接合資料5実測図
第16図 5ブロック母岩別分布図	第32図 8ブロック接合資料6・7実測図

- 第33図 9ブロック器種別・母岩別分布図
- 第34図 9ブロック石器実測図
- 第35図 10ブロック器種別・母岩別分布図
- 第36図 10ブロック石器実測図
- 第37図 11ブロック器種別分布図
- 第38図 11ブロック母岩別分布図
- 第39図 11ブロック石器実測図
- 第40図 12ブロック器種別・母岩別分布図
- 第41図 12ブロック石器実測図
- 第42図 13ブロック器種別分布図
- 第43図 14ブロック器種別・母岩別分布図
- 第44図 14ブロック石器実測図
- 第45図 15ブロック器種別・母岩別分布図
- 第46図 15ブロック石器実測図
- 第47図 16ブロック器種別分布図
- 第48図 16ブロック母岩別分布図
- 第49図 16ブロック接合資料分布図
- 第50図 16ブロック石器実測図(1)
- 第51図 16ブロック石器実測図(2)
- 第52図 16ブロック接合資料1実測図(1)
- 第53図 16ブロック接合資料1実測図(2)
- 第54図 16ブロック接合資料1実測図(3)
- 第55図 16ブロック接合資料1実測図(4)
- 第56図 16ブロック接合資料1実測図(5)
- 第57図 16ブロック接合資料1実測図(6)
- 第58図 16ブロック接合資料2・3・4実測図
- 第59図 17・18・19ブロック母岩別分布図
- 第60図 17ブロック器種別分布図
- 第61図 18ブロック器種別分布図
- 第62図 19ブロック器種別分布図
- 第63図 17・18・19ブロック接合資料分布図
- 第64図 17ブロック接合資料1石核別分布図
- 第65図 17ブロック石器実測図
- 第66図 17ブロック接合資料1実測図(1)
- 第67図 17ブロック接合資料1分割模式図
- 第68図 17ブロック接合資料1分割図(1)
- 第69図 17ブロック接合資料1分割図(2)
- 第70図 17ブロック接合資料1実測図(2)
- 第71図 17ブロック接合資料1実測図(3)
- 第72図 17ブロック接合資料1実測図(4)
- 第73図 17ブロック接合資料1実測図(5)
- 第74図 17ブロック接合資料1実測図(6)
- 第75図 17ブロック接合資料1実測図(7)
- 第76図 17ブロック接合資料1実測図(8)
- 第77図 17ブロック接合資料1実測図(9)
- 第78図 17ブロック接合資料1実測図(10)
- 第79図 17ブロック接合資料1実測図(11)
- 第80図 17ブロック接合資料1実測図(12)
- 第81図 17ブロック接合資料1・2実測図
- 第82図 17ブロック接合資料2実測図
- 第83図 18ブロック石器実測図
- 第84図 18ブロック接合資料3実測図
- 第85図 18ブロック接合資料5・6実測図
- 第86図 18ブロック接合資料8・11実測図
- 第87図 18ブロック接合資料10実測
- 第88図 19ブロック石器実測図
- 第89図 19ブロック接合資料4実測図
- 第90図 19ブロック接合資料4・7実測図
- 第91図 19ブロック接合資料9実測図
- 第92図 20ブロック器種別分布図
- 第93図 20ブロック母岩別分布図
- 第94図 20ブロック石器、接合資料1実測図
- 第95図 21ブロック器種別・母岩別分布図、石器実測図
- 第96図 22ブロック器種別分布図

第97図 22ブロック母岩別分布図  
第98図 22aブロック石器実測図  
第99図 22bブロック石器実測図（1）  
第100図 22bブロック石器実測図（2）  
第101図 22cブロック石器実測図  
第102図 22dブロック石器実測図  
第103図 22eブロック石器実測図  
第104図 22fブロック石器実測図（1）  
第105図 22fブロック石器実測図（2）  
第106図 22gブロック石器実測図  
第107図 22hブロック石器実測図  
第108図 23ブロック母岩別分布図  
第109図 24ブロック器種別分布図  
第110図 24ブロック母岩別分布図  
第111図 24ブロック石器実測図  
第112図 24ブロック接合資料1・2実測図  
第113図 25ブロック器種別分布図

第114図 25ブロック母岩別分布図  
第115図 25ブロック石器実測図  
第116図 25ブロック接合資料1実測図  
第117図 26ブロック器種別分布図  
第118図 26ブロック母岩別分布図  
第119図 26ブロック石器実測図  
第120図 27ブロック器種別分布図  
第121図 27ブロック母岩別分布図  
第122図 27ブロック石器、接合資料1・2実測図  
第123図 27ブロック接合資料3実測図  
第124図 28ブロック器種別分布図  
第125図 28ブロック母岩別分布図  
第126図 28ブロック石器、接合資料1実測図  
第127図 単独出土石器実測図  
第128図 表採石器実測図（1）  
第129図 表採石器実測図（2）

## 表 目 次

表1 2ブロック石器属性表  
表2 2ブロック石器組成表  
表3 3ブロック石器属性表  
表4 3ブロック石器組成表  
表5 4ブロック石器属性表  
表6 4ブロック石器組成表  
表7 5ブロック石器属性表  
表8 5ブロック石器組成表  
表9 6ブロック石器属性表  
表10 6ブロック石器組成表  
表11 7ブロック石器組成表  
表12 8ブロック石器属性表

表13 8ブロック石器組成表  
表14 9ブロック石器属性表  
表15 9ブロック石器組成表  
表16 10ブロック石器属性表  
表17 10ブロック石器組成表  
表18 11ブロック石器属性表  
表19 11ブロック石器組成表  
表20 12ブロック石器属性表  
表21 12ブロック石器組成表  
表22 14ブロック石器属性表  
表23 14ブロック石器組成表  
表24 15ブロック石器属性表

表25	15ブロック石器組成表	表47	22 e ブロック石器属性表
表26	16ブロック石器属性表	表48	22 e ブロック石器組成表
表27	16ブロック石器組成表	表49	22 f ブロック石器属性表
表28	17ブロック石器属性表	表50	22 f ブロック石器組成表
表29	17ブロック石器組成表	表51	22 g ブロック石器属性表
表30	18ブロック石器属性表	表52	22 g ブロック石器組成表
表31	18ブロック石器組成表	表53	22 h ブロック石器属性表
表32	19ブロック石器属性表	表54	22 h ブロック石器組成表
表33	19ブロック石器組成表	表55	23ブロック石器組成表
表34	20ブロック石器属性表	表56	24ブロック石器属性表
表35	20ブロック石器組成表	表57	24ブロック石器組成表
表36	21ブロック石器属性表	表58	25ブロック石器属性表
表37	21ブロック石器組成表	表59	25ブロック石器組成表
表38	22ブロック石器組成表	表60	26ブロック石器属性表
表39	22 a ブロック石器属性表	表61	26ブロック石器組成表
表40	22 a ブロック石器組成表	表62	27ブロック石器属性表
表41	22 b ブロック石器属性表	表63	27ブロック石器組成表
表42	22 b ブロック石器組成表	表64	28ブロック石器属性表
表43	22 c ブロック石器属性表	表65	28ブロック石器組成表
表44	22 c ブロック石器組成表	表66	単独出土石器属性表
表45	22 d ブロック石器属性表	表67	表採石器属性表
表46	22 d ブロック石器組成表		

## 図版目次

巻頭図版 1 遺跡全景、旧石器時代石器、方形周溝墓出土玉類

巻頭図版 2 方形周溝墓出土土器

図版 1 遺跡周辺航空写真

図版 2 遺跡空中写真(斜め)

図版 3 遺跡空中写真(垂直)

図版 4 旧石器時代ブロック出土状況(1)

図版 5 旧石器時代ブロック出土状況(2)

図版 6 旧石器時代ブロック出土状況(3)

図版 7 旧石器時代ブロック出土状況(4)

図版 8 旧石器時代ブロック出土状況(5)

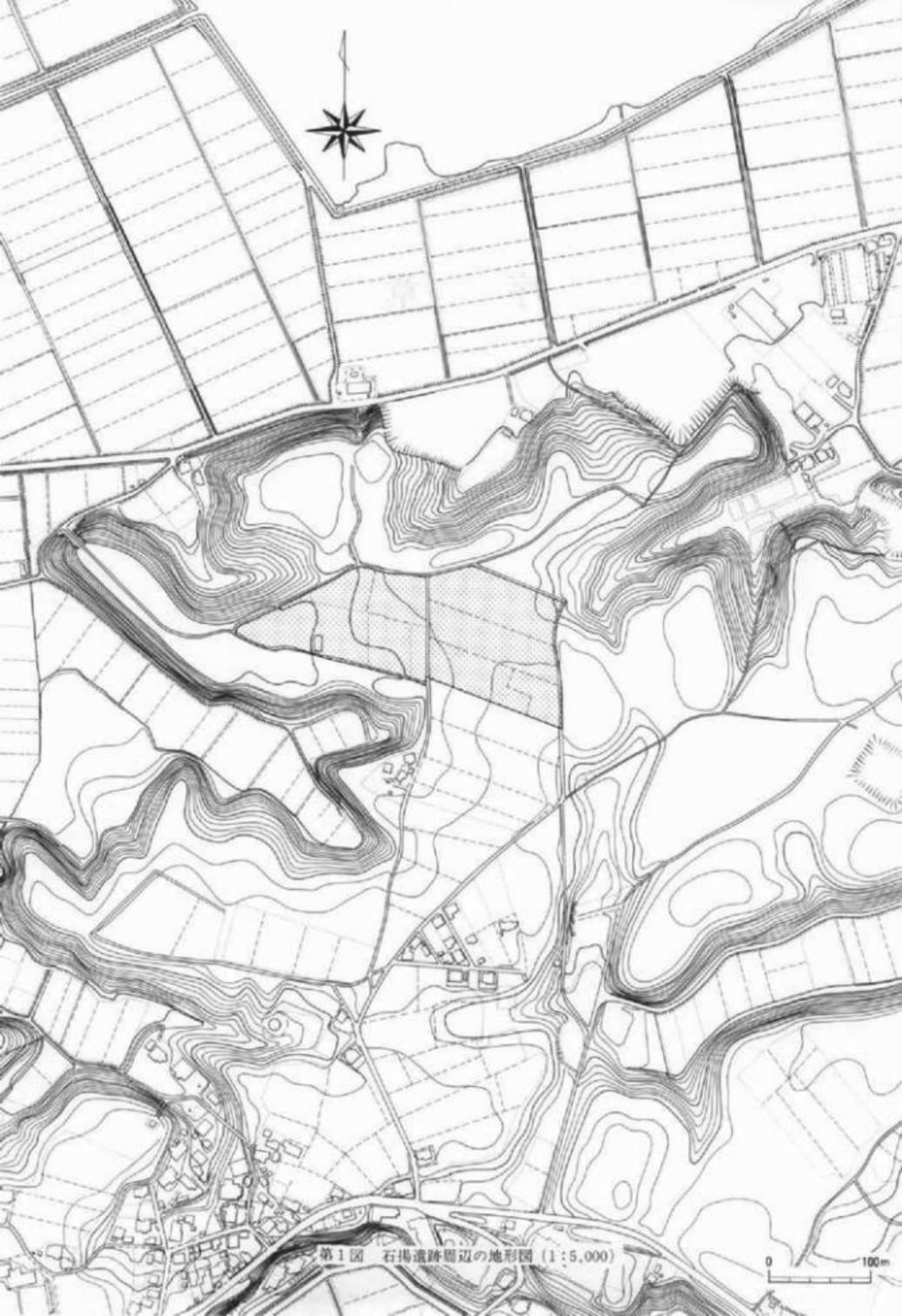
図版 9 旧石器時代ブロック出土状況(6)

図版 10 旧石器時代ブロック出土状況(7)

圖版11 旧石器時代石器 (1)  
圖版12 旧石器時代石器 (2)  
圖版13 旧石器時代石器 (3)  
圖版14 旧石器時代石器 (4)  
圖版15 旧石器時代石器 (5)  
圖版16 旧石器時代石器 (6)  
圖版17 旧石器時代石器 (7)

圖版18 旧石器時代石器 (8)  
圖版19 旧石器時代石器 (9)  
圖版20 旧石器時代石器 (10)  
圖版21 旧石器時代石器 (11)  
圖版22 旧石器時代石器 (12)  
圖版23 旧石器時代石器 (13)  
圖版24 旧石器時代石器 (14)

# 序 章



第1図 石馬遺跡周辺の地形図 (1:5,000)

0 100m

# 序 章

## 第1節 調査の経緯と方法

### 1 調査の経緯

千葉県教育委員会は、少年の健全育成をはかることを目的に、県立としては県内で3番目の手賀の丘少年自然の家の建設を計画し、事業地内の埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果、記録保存の措置を講ずることとなり、平成元年12月より当文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成元年12月から同2年10月まで行われたが、28,000㎡の事業範囲のうち10%の確認と、12,000㎡の上層本調査を元年度に実施し、2年度は13,000㎡の上層本調査と事業範囲のうち4%の下層確認および2,670㎡の下層本調査、さらに当初事業範囲の外周をめぐる1,360㎡の町道部分の整備のため、前記の確認率で上下層の確認および上層本調査900㎡、下層本調査40㎡を実施した。

### 2 調査の方法

発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、40m×40mの方眼の大グリッドを東西9区画、南北5区画設定し、西から東に向ってA・B・C・・・、北から南に向って1・2・3・・・とし、1A、2Bと呼称した。さらに、大グリッド内を4m方眼の小グリッドに分割し西から東へ00・01・02・・・、北から南へ00・10・20・・・とした。したがって、各々の小グリッドは2C-50、3G-99となる。

上層の確認調査は畑の区画にそって、幅2mのトレンチを10%の割合で設定し、傾斜部および用水管設置部分を除くほぼ全域に遺構遺物の所在を認めた。上層の本調査は重機による表土除去後全域の遺構を調査した。また、遺物包含層はテフラ上面で表土除去をとどめ、手作業で行った。

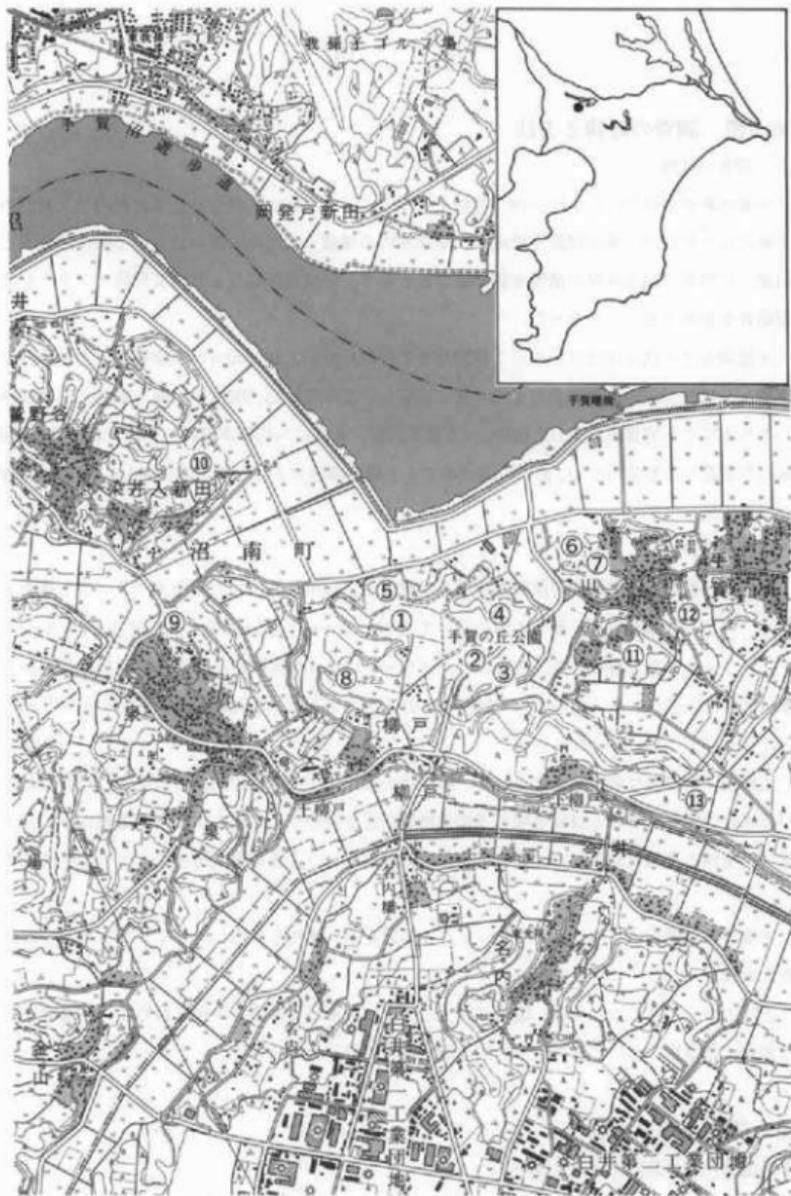
下層の確認調査は2m×2mグリッドを4%設定し、遺物を検出したグリッドを拡張し本調査を実施した。

遺物の取り上げについては、遺構に伴って出土したものは遺構内の通し番号で、包含層や旧石器時代の遺物についてはグリッド内の通し番号で取り上げている。

## 第2節 遺跡の環境

### 1 遺跡周辺の地理的環境と層序

千葉県北西部に位置する沼南町は、手賀沼の南側に広がる沖積平野と洪積台地とからなり、手賀沼に流入する大小の河川の開析により、さまざまな枝谷が入り組む複雑な地形を呈してい



第2図 遺跡位置図

る。西は大津川で柏市と画し、東から南は金山入り落とし(川)で印西町、白井町と、さらに、手賀沼で我孫子市と画されている。

石揚遺跡の所在する沼南町泉は、手賀沼と金山入り落とし(川)の間の台地が狭まった地域であり手賀沼に向って開析する小支谷が多数認められる。染井入新田と泉の間には染井入り落とし(川)が手賀沼に流入している。石揚遺跡は、手賀沼に向って開析する小支谷のうち、染井入り落とし出口から東へ二つ目の手賀沼に面した台地上に位置する。

遺跡の所在する台地は、ヤツデ状に手賀沼に向って張り出し、その基部付近の標高20m～22mに調査地が広がっている。沖積地との比高差は12m～15mで現在の手賀沼の南岸300mほどの地点にある。

本遺跡の層序は第4図のとおりであり、各層の概要は以下のとおりである。

- I 表土層。黒褐色土を主体とし、耕作により深さは一定しない。
- II b 橙褐色土層。新期テフラを含む層で方形周溝墓以降の遺構はこの層を掘り込んでいる。
- II c 暗褐色土層。縄文時代の包含層である。
- III 黄褐色軟質ローム。ソフトロームである。樹脂状に軟質化している。
- IV～V 褐色硬質ローム。IV層とV層の分層はできなかった。IV層上部は軟質化している。
- VI 黄褐色硬質ローム。乳白色パミスを含む。
- VII 暗褐色ローム。立川ローム第2黒色帯上部。
- IX 暗褐色ローム。立川ローム第2黒色帯下部。分層はできなかった。VII層より暗い。
- X 褐色ローム。立川ローム最下層。
- XI 暗灰褐色軟質ローム。武蔵野ローム最上層。

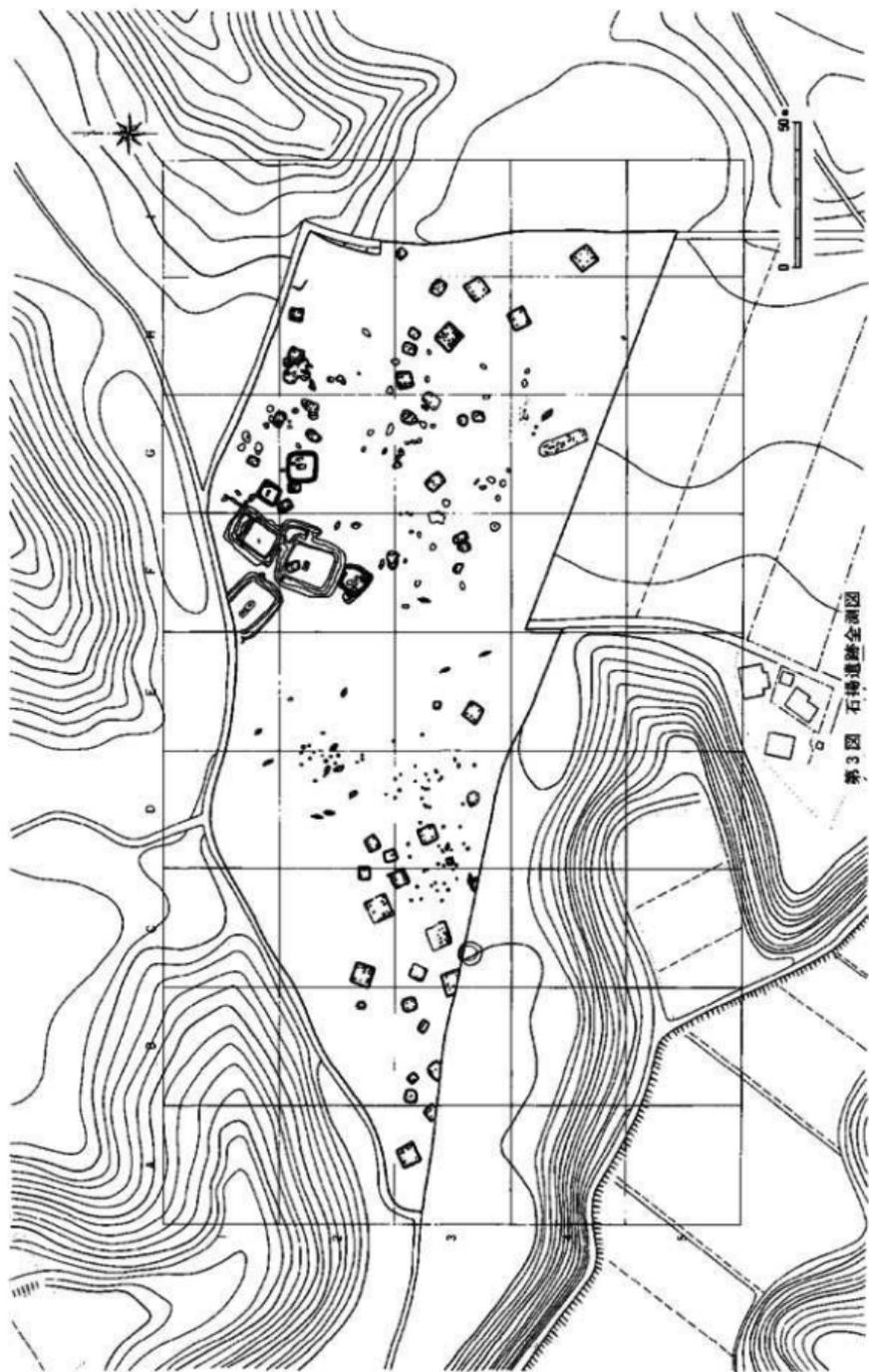
## 2 遺跡周辺の歴史的環境(第2図)

本遺跡(1)は、旧石器時代から古墳時代にいたる複合遺跡であるが、周辺部での旧石器時代の調査はほとんどなく、最も近接した遺跡は、本遺跡の所在する台地東端の片山古墳群D地点遺跡(2)一か所である。IV層およびVI層下部からVII層にかけての良好な接合資料を伴っており、後者は不純物を多く含む黒曜石製のもので、石材に本遺跡と共通した要素がある。

縄文時代は早期条痕文系土器を出土する手賀西小裏遺跡(9)、摺糸文の稲荷峠遺跡(10)、前期黒浜期には遺跡数も増加し前出2遺跡のほか、小支谷を隔てた南側台地の中山山遺跡(8)、さらに東側台地の荒久遺跡(11)、明坊池遺跡(12)がある。片山古墳群D地点遺跡や近接するA・B地点遺跡(3)に中期末の集落や土坑群を認める。

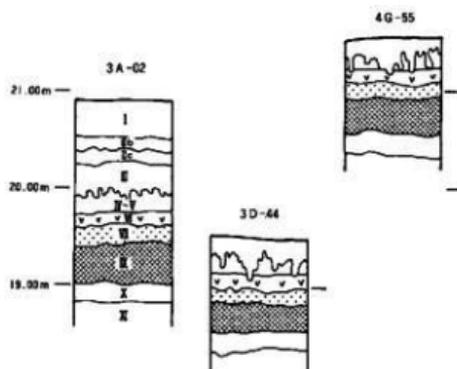
弥生時代は柏作A遺跡(13)、手賀西小裏遺跡が知られている。

古墳時代は小支谷を隔てた東側台地先端部には当地域では最も古い段階の前方後方墳の北ノ作古墳群(6)が、さらに片山古墳群が本遺跡の同一台地東側に円墳を主体に80基ほど群集している。また、本調査区から北側にのびる台地先端部にはオツコシ古墳群(5)(5基確認でき



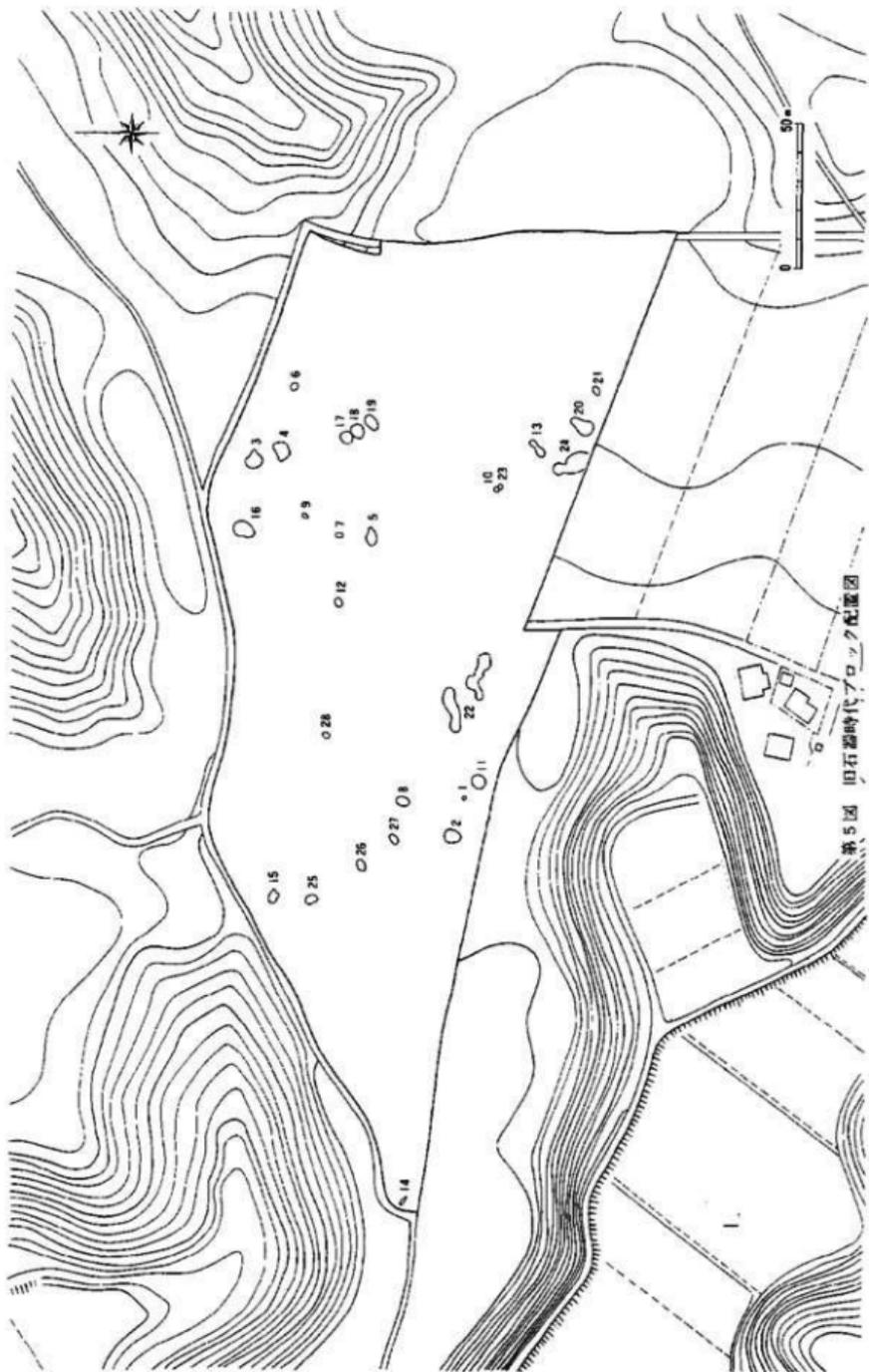
第3圖 石埭遺址全圖

るが、いずれも高さ1mほどの低墳丘で、方形周溝墓の可能性が高い。)が所在している。集落は、片山古墳群A、B、D地点に前期から中期にかけての大規模な集落が展開し、北ノ作古墳群に接して経塚遺跡(7)がある。また、中台山遺跡でも畑表面に住居が黒く浮き上がり、周囲からは古墳時代前期の土器が多量に採集できることから、同期の集落の存在が予測できる。弥生時代末から古墳時代中期におよぶ集落は、本遺跡の所在する台地周辺に多数連続して営まれていることから、築井入り落とし出口の台地から北ノ作古墳群の所在する台地付近の手賀沼南岸にまとまった村が形成されていた可能性がある。大津川の流域は戸張作遺跡を中心としたグループが考えられる。



第4図 基本層序図

第 1 章  
旧 石 器 時 代



第5図 旧石器時代ブロック配置図

# 第1章 旧石器時代

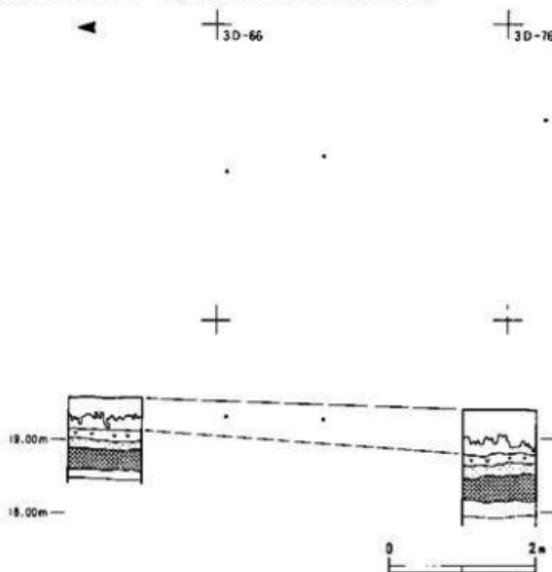
## 第1節 概観

遺物の集中地点は調査区の全域から検出した。地形的には台地の中央部よりも谷がしらに多くを認めるが、きわだった集中ではなく、IX層からの出上地点が南から開析する小支谷の谷がしらを取り巻く傾向が認められる。遺物では、VI層からVII層にかけて良好な接合資料を得ている。遺跡における各ブロックの分布を第5図で示した。

## 第2節 各ブロックの概要

### 1ブロック (第6図)

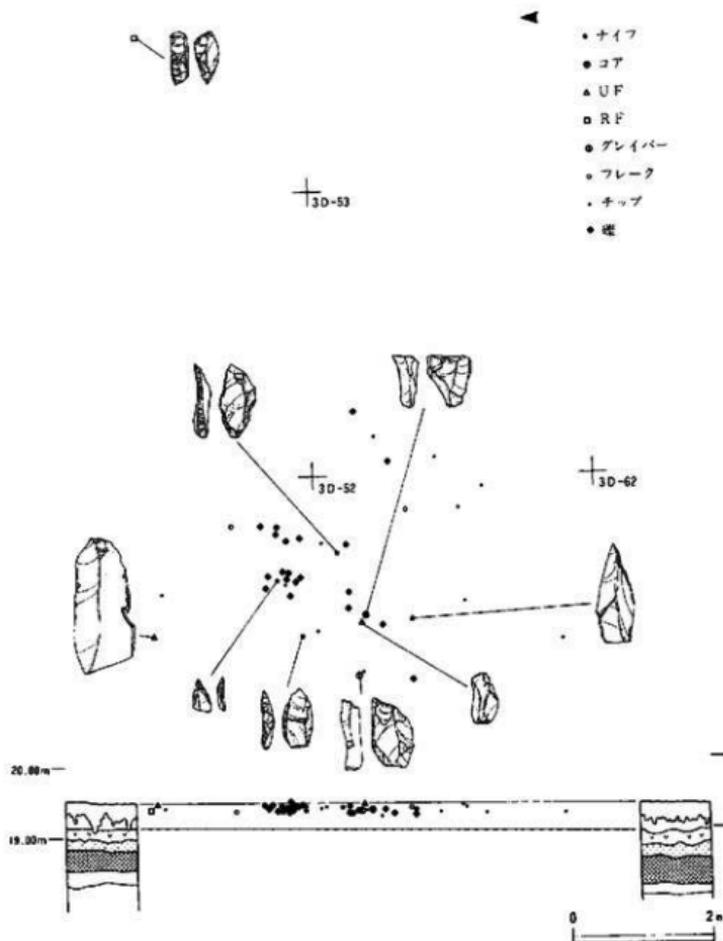
状況 調査区西側地区の3D-66区から検出した。遺物分布図のみを掲載した。遺物は2点で1mほどの間隔で出土している。出土層位はIII層下部である。



第6図 1ブロック器種別分布図

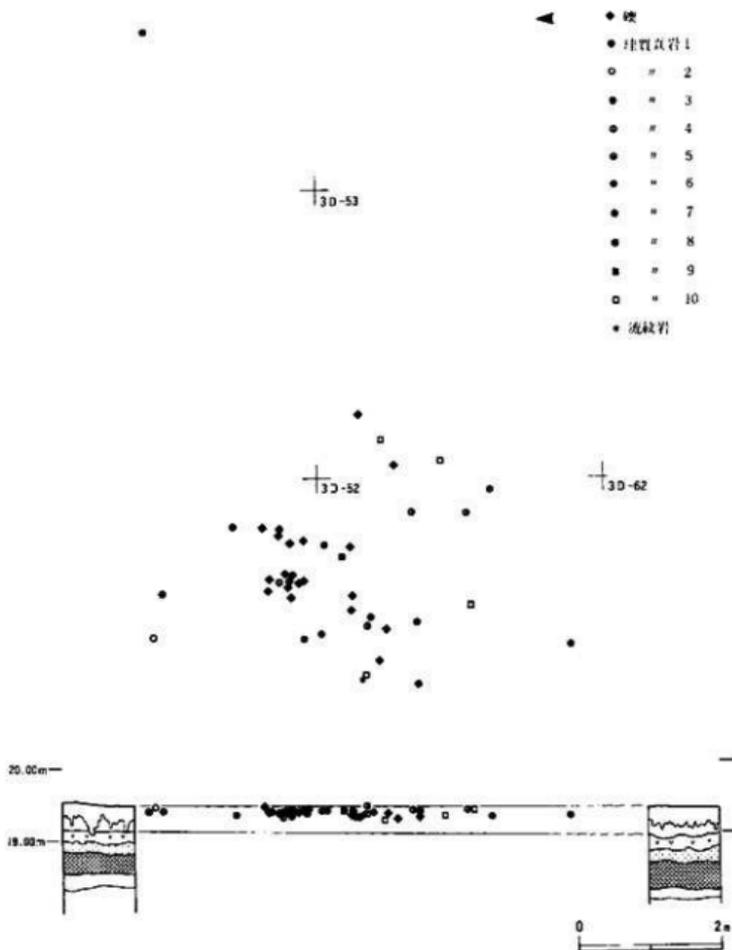
### 2ブロック (第7～9図、図版4・11)

状況 調査区西側地区の3D-42・44・52・53区におよぶ南北4.6m、東西9.0mの範囲に42点の遺物を検出した。そのうち、20点は礫である。礫は1.5mほどの範囲に集中し、石器はその



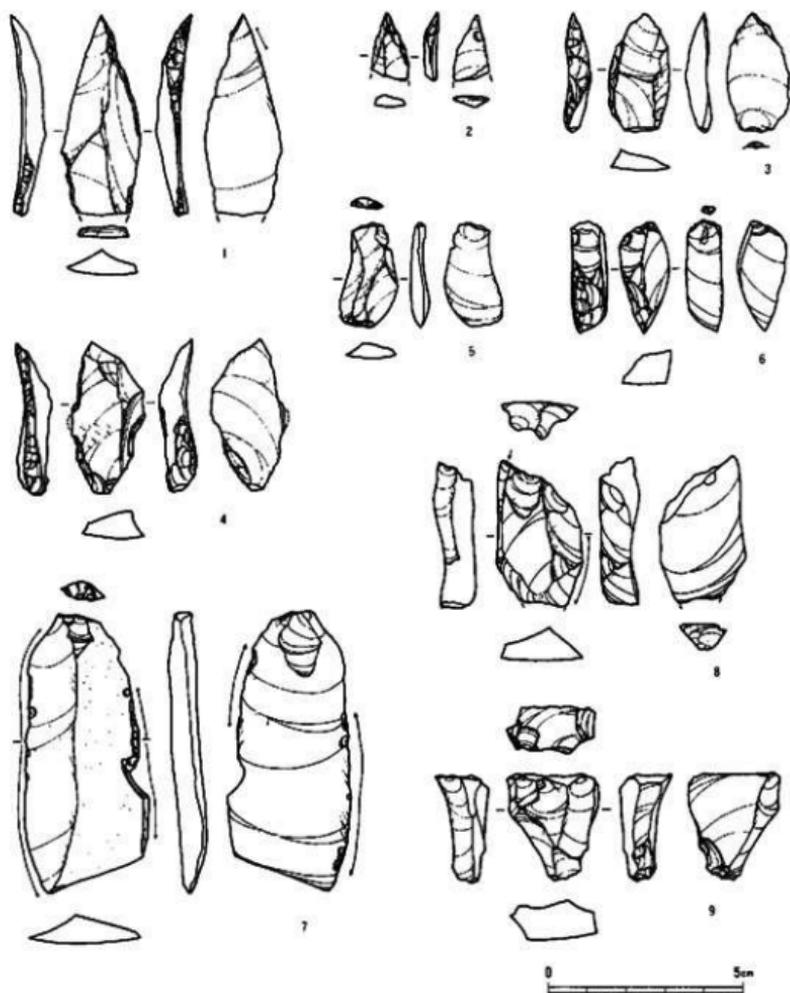
第7図 2ブロック器種別分布図

周囲に散在している。石器の石材は珪質頁岩がほとんどで、1点流紋岩を含んでいる。珪質頁岩は10の母岩に分離できる。出土層位はIII層上部から下部に認められ、ほぼその中位で集中している。器種構成はナイフ形石器4点、影器1点、二次加工を有する剥片1点、使用痕を有する剥片2点、剥片3点、碎片10点、石核1点、礫10点である。



第8図 2ブロック母岩別分布図

遺物 1～4はナイフ形石器である。1は基部を欠損するナイフ形石器で、縦長剥片の二側縁に調整を加えている。打点部は先端側にありプランティングにより打瘤をとどめない。左側縁には直線的な刃部を設け、欠損する基部側はさほど厚みをもたない。刃部先端付近の主要剥離面側に使用痕を看取できる。2はナイフ形石器の先端部の欠損品である。比較的小形で、遺存する縦長剥片の右側縁に調整を施している。3は小形なナイフ形石器で、基部に打点を残



第9図 2ブロック石器実測図

置し、左側縁全体に調整を加えている。ブランティングは急傾斜である。4はナイフ形石器としたが台形様石器の可能性もある。打面部は右側縁のオーバーハング気味なブランティングで除去し、左側縁は先端部までの調整が加わる。比較的厚みのある縦長剥片を素材としている。8は彫器である。厚手の縦長剥片を使用し、左端に彫刻面を作出している。なお、左側縁には使用痕が認められる。

6は二次加工を有する剥片で、左側縁には急峻なブランディングが認められ、主要剥離面により切られている。比較的厚みのある製品の側面を剥離したものと考えられる。

5、7は使用痕を有す剥片で、5は先端部に微細剥離痕を認める。7は大形のブレイドで背面には自然面を残している。両側縁のほぼ全域に微細剥離痕を認める。

9は石核である。上部の打面から左側縁で1枚、正面で2枚の縦長剥片を剥離している。下部には調整を加えており、残核を再利用したものと考えられる。

礫はほとんどが焼けており、赤化している。また、破碎したものが目立つ。大きさは2cm～3cmのほどもものから7cm～8cmのものまである。石材は砂岩である。

特徴 礫部を伴うブロックで、石器は点数の割に製品の数が多く、母岩数も珪質頁岩が10個体、流紋岩が1個体である。石器の製作はさほど行わず、製品を消費したブロックと考えてよいであろう。

2ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 破石器	形	器	器	器	ビス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	殻石	礫片	合計
珪質頁岩	1	1													1
"	2								1						1
"	3	1													1
"	4	1													1
"	5							1							1
"	6									1	1	1			3
"	7								1	1	1				3
"	8									1	3				4
"	9	1													1
"	10											5			5
流紋岩			1												1
不明														10	10
合計	4	1	1					1	2	3	10	1		10	32

2ブロック石器属性表

No.	グリッド 番号	遺物 番号	簿記 番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	断面	接合資料
1	3D-52	0010	1	ナイフ	珪質頁岩	51.5×19.4×5.3	4.66	N	-	III	H	
2	3D-42	0016	2	"	"	16.4×9.3×3.5	0.39	N	-	I・II	B	
3	3D-42	0005	3	"	"	29.2×15.0×4.9	22.2	H(1)	-	I・N	-	
4	3D-32	0013	4	"	"	37.7×18.6×6.8	4.27	N	-	I・III・N	-	
5	3D-52	0005	5	U・F	"	25.0×12.9×3.4	1.17	H(1)	D	I・II	-	
6	3D-44	0001	6	R・F	"	28.1×14.7×8.6	2.94	H(1)	T	I	-	
7	3D-42	0001	7	U・F	"	79.3×31.2×6.9	15.01	H(2)	-	N	I	-
8	3D-32	0001	8	形器	流紋岩	39.1×21.7×19.3	7.64	N	-	I・II	-	
9	"	0006	9	石塊	珪質頁岩	26.2×22.0×12.6	6.33	-	-	-	-	

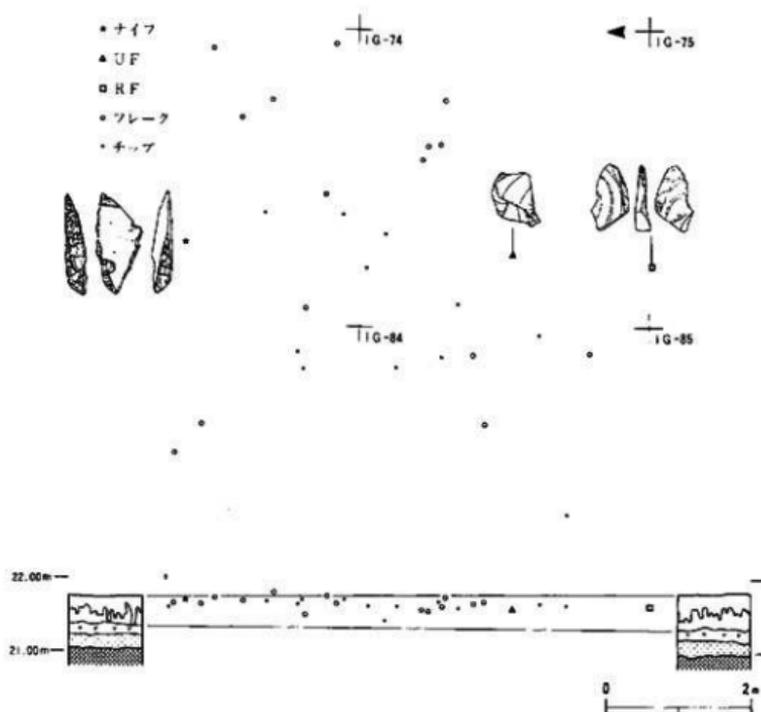
### 3ブロック (第10～12図、図版4・11)

状況 調査区東側地区の1G-73・74・75・84・85におよぶ南北6.4m、東西6.4mの範囲に28点の遺物を検出した。石器は密集した部分はなく散在している。石器の石材は黒曜石が主体で、チャートがそれに次ぐ。出土層位はⅢ層上部からⅣ層にかけてで、Ⅲ層の下部からⅣ層上部にかけてピークがある。器種構成はナイフ形石器1点、二次加工を有する剥片1点、使用痕を有する剥片1点、剥片12点、碎片13点である。

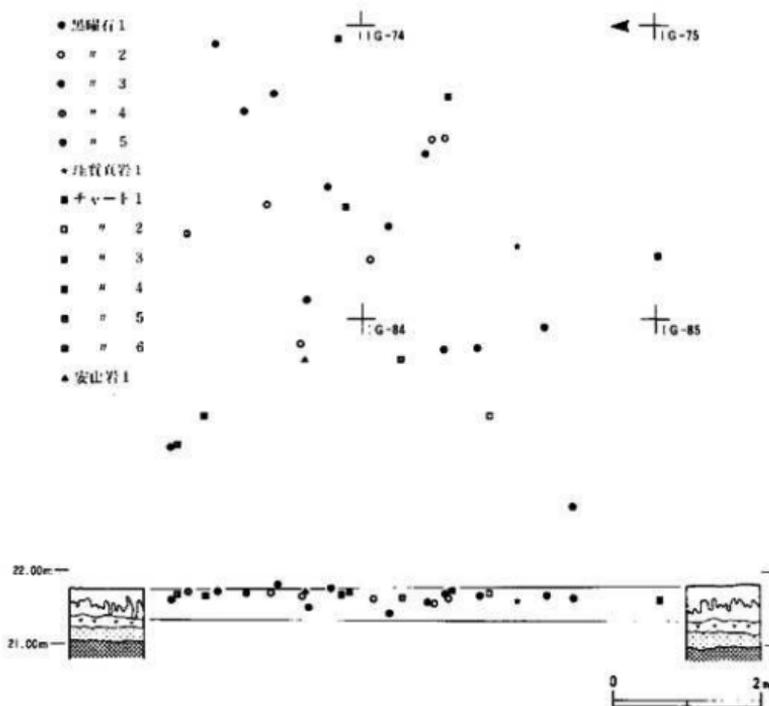
遺物 1はナイフ形石器で、幅広の縦長剥片をほぼ半割する形で右側縁に急峻なブランティングを加え、左側縁も直線的な調整を施している。したがって、形状は三角形を呈す。背面は自然面が全面に残る。打面はブランティングで除去されている。

2は縦長剥片の先端部に調整を加えた二次加工を有する剥片で、打点部は折損している。

3は不整形な剥片の側縁に使用痕を認めるものである。



第10図 3ブロック器種別分布図



第11図 3ブロック母岩別分布図

特徴 ナイフ形石器は黒曜石製であるが、同一母岩の黒曜石片はなく、製品で持ち込まれたものと理解される。他の黒曜石は剥片、砕片であり、その伴う製品は認められていないことから、石器製作に伴う製品は持ち去られたものと考えられる。

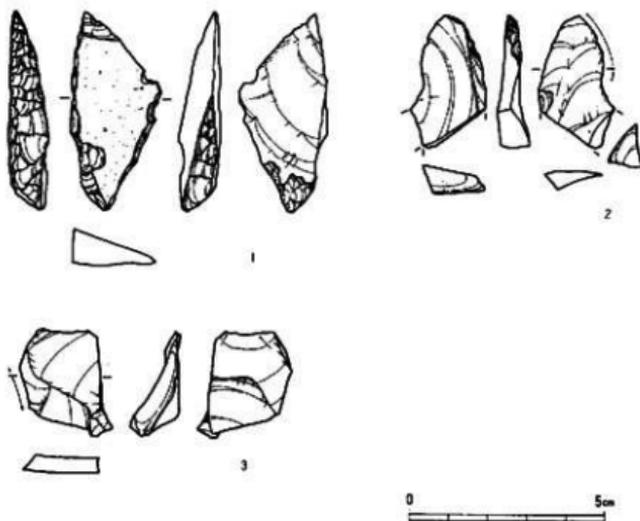
3ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ型石器	獲器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	敲石	剥片	合計
黒曜石	1							4	6				10
"	2							1	4				5
"	3							1					1
"	4	1											1
"	5							1					1
珪質頁岩	1						1						1
チャート	1					1							1

# 2					1				1
# 3					2	1			3
# 4						1			1
# 5					1				1
# 6					1				1
安山岩 1						1			1
不明									
合計	1			1	1	12	13		28

### 3ブロック石器属性表

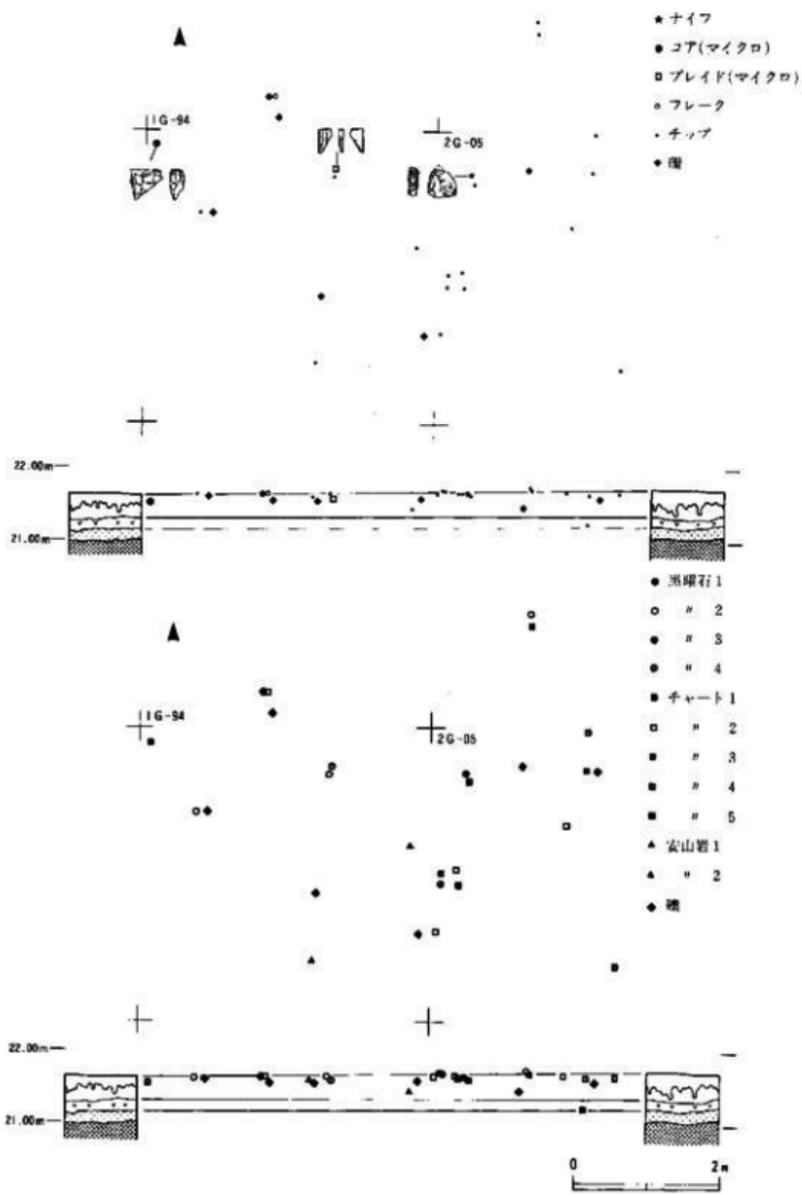
No.	グリッド番号	遺物番号	検出番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	打製形状	打痕調整	発出構成	断面	接合資料
1	1G-73	0004	1	ナイフ	黒曜石 4	27.6×30.8×9.0	7.99	N	-	N	-	-
2	1G-73	0001	2	R・F	チャート 1	32.3×19.1×7.4	3.09	N	-	II	H	
3	1G-74	0008	3	U・F	珪質頁岩 1	20.5×28.0×7.5	3.77	N	-	I・III・IV	M	



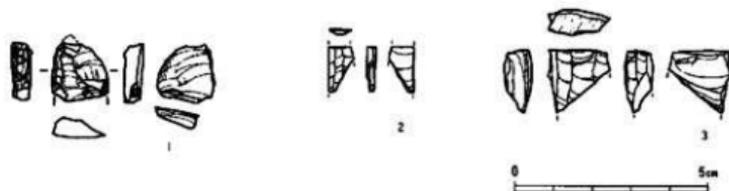
第12図 3ブロック石器実測図

### 4ブロック (第13・14図、図版4・11)

状況 調査区東側地区の1G-94・95・2G-04・05区におよぶ南北5.0m、東西6.4mの範囲に27点遺物を検出した。そのうち、礫は7点である。礫と石器の分布はほぼ同一で、散漫な



第13図 4 ブロック器種別・母岩別分布図



第14図 4ブロック石器発掘図

状況を示している。石器の石材はチャートを主体としている。出土層位はIII層上部からVI層にまでいたるが、III層上部にピークがある。器種構成はナイフ形石器1点、細石刃1点、細石核1点、剥片1点、碎片16点、礫7点である。

遺物 1は黒曜石製のナイフ形石器である。縦長剥片を使用し、左側縁には急峻なプランティングを施し、右側縁にはわずかな調整を加えている。先端部のみの折損品であるため全容は不明である。

2は黒曜石製の細石刃で、上下とも欠損している。背面には縦方向に細長い剥離面が看取できる。3はチャート製の細石核で下部を欠損する。節理面を打面として左から右方向に打点を移し細石刃を剥離している。

特徴 遺物の垂直分布にかなりの幅が認められる点で、文化層が混在している可能性も否定できないが、細石刃を伴う層準の資料といえよう。

4ブロック石器組成表

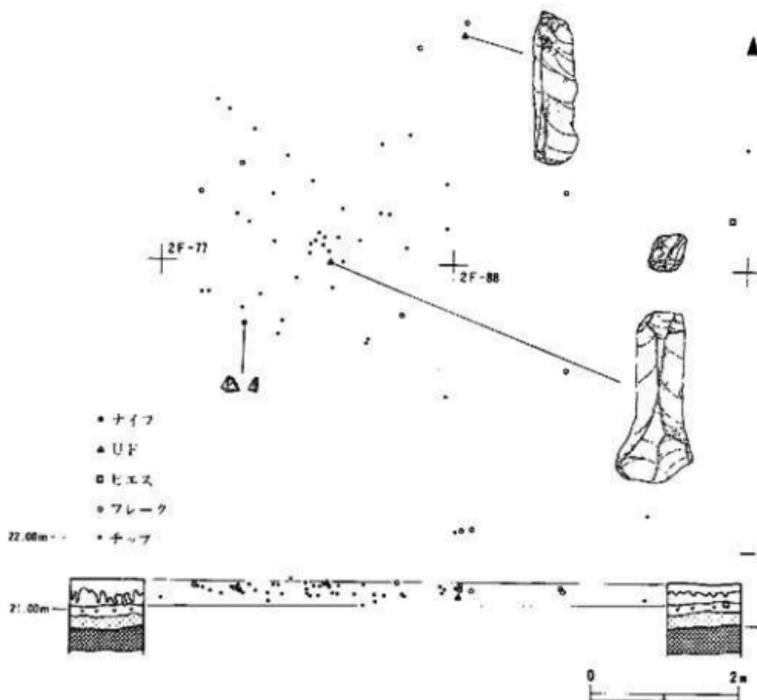
石材	器種	ナイフ形石器	細石核	細石刃	ピエス	R・F	U・F	剥片	碎片	石核	礫石	剥片	合計
黒曜石	1	1											1
"	2								3				3
"	3								1				1
"	4			1									1
チャート	1								4				4
"	2							1	3				4
"	3		1										1
"	4								2				2
"	5								1				1
安山岩	1								1				1
"	2								1				1
不明												7	7
合計		1	1	1				1	16			7	27

#### 4 ブロック石器属性表

No.	グリッド番号	遺物番号	検出番号	部 種 石 材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打製形状	打製痕跡	背面構成	断面	接合資料
1	2G-05	0007	1	ナイフ	黒曜石 1	14.4×14.0×4.5	1.08	N	-	I	M
2	2G-04	0004	2	短石刀	黒曜石 4	11.9×6.4×1.7	0.13	H・M	-	I	-
3	2G-04	0001	3	短石核	チャート 3	14.7×16.1×6.4	1.69	C	-	-	M

#### 5 ブロック (第15～17図、図版4・11)

状況 調査区西側地区の2F-76・77・78・87・88区におよぶ南北7m、東西9mの範囲に69点の遺物を検出した。遺物の分布は2F-77・87を中心にして東側に広がりを見せ、外方部では散漫な分布となる。石器の石材はチャートを主体に、黒曜石、砂岩、安山岩である。出土層位はIII層からVI層上面まで認めるが、ピークはIV層と考えられる。器種構成はナイフ形石器1点、ピエス・エスキューユ1点、使用痕を有する剥片2点、剥片9点、砕片56点である。



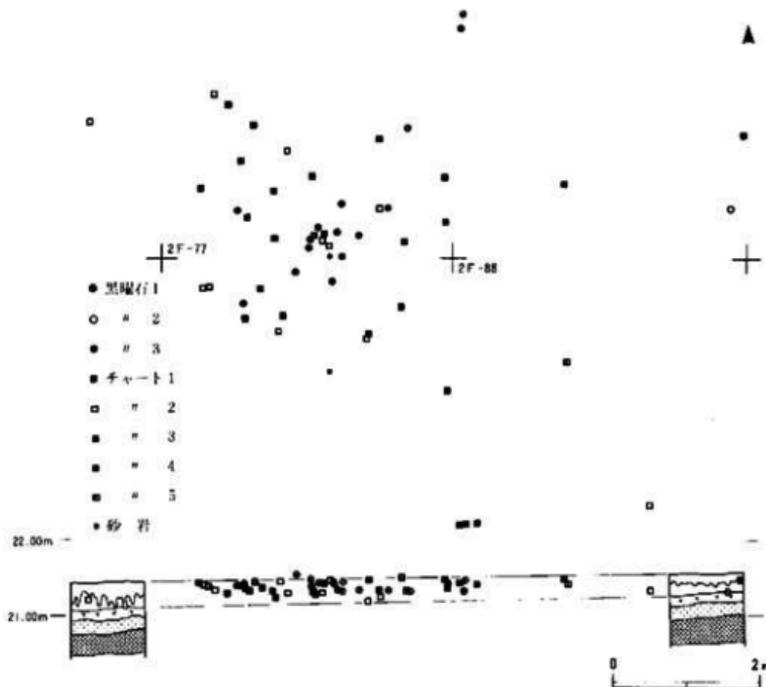
第15図 5ブロック器種別分布図

遺物 1はナイフ形石器の先端部と考えられる小片で、右側縁に調整を加えている。打面はブランディングにより除去されている。

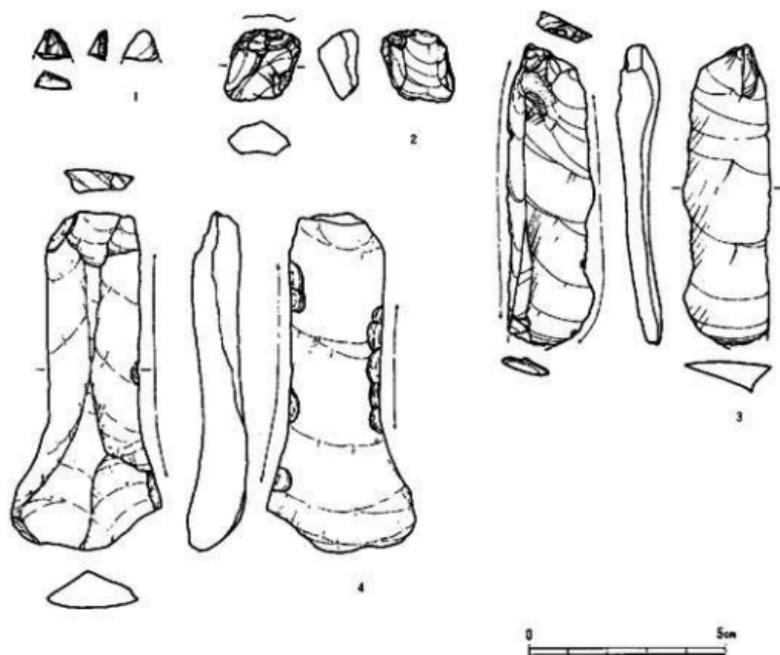
2は両極打法による変形のピエス・エスキューである。上端は表面に階段状の剥離が、裏面には縦に長いしの字状の剥離面と階段状の剥離が着取できる。打点部は線状である。

3は縦長の石刃で、先端部をわずかに欠損する。両側縁全体に使用痕が観察できる。4も縦長の石刃で、両側縁に使用痕が認められ、なかには小形の剥離痕も観察できる。3は黒曜石製、4は安山岩製である。

特徴 チャートが主体にしたブロックであるが、そのほとんどは破片で、それに関連する製品は遺存していない。石器製作のブロックと考えてよいであろう。



第16図 5ブロック母岩別分布図



第17図 5ブロック石器実測図

5ブロック石器組成表

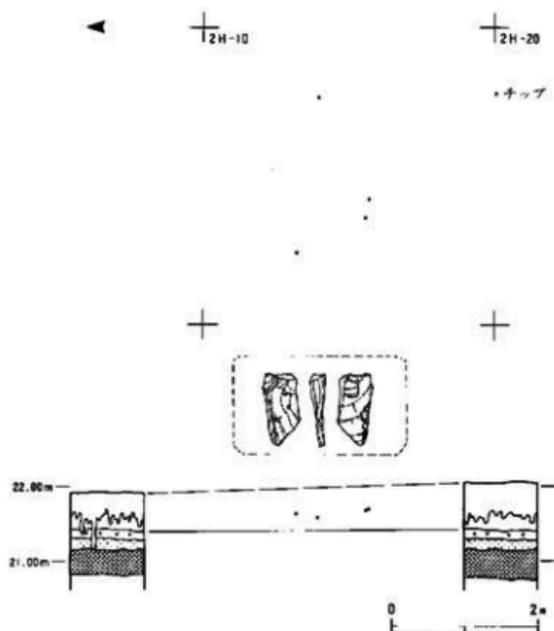
石材 器種	ナイフ 型石器	獲器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	敲石	礫片	合計
黒曜石	1					1						1
〃	2			1								1
〃	3						1	16				17
チャート	1						4	17				21
〃	2							10				10
〃	3						2	8				10
〃	4						1	3				4
〃	5	1						1				2
砂岩	1					1						1
〃	2						1					1
安山岩	1							1				1
不明												
合計	1			1		2	9	56				69

### 5 ブロック石器属性表

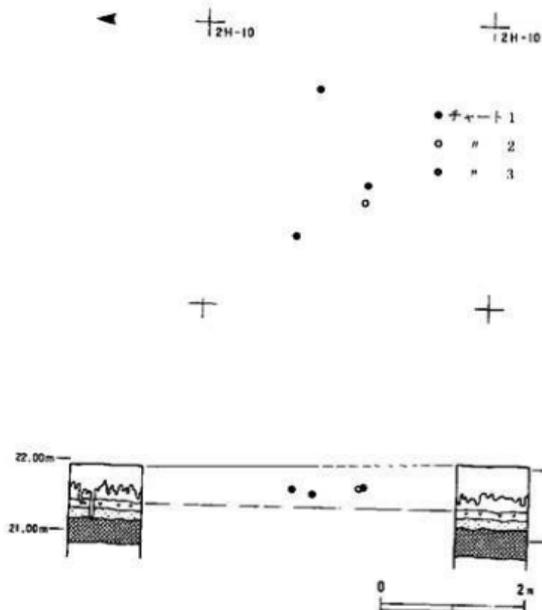
No	グリフ F番号	遺物 番号	検出 番号	器 種	石 種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	断面	接合資料
1	2F-87	0010	1	ナイフ	チャート5	6.9×8.8×4.0	0.23	-	-	II・IV	H	
2	2F-78	0004	2	ピエス	黒曜石2	17.4×15.6×9.1	2.90	N	-	I・IV	-	
3	2F-78	0002	3	U・F	黒曜石1	75.7×21.5×9.2	12.10	H(2)	T・D	I・III	-	
4	2F-77	0018	4	U・F	砂岩1	85.0×37.5×11.3	29.61	H(2)	T	I・III	-	

### 6 ブロック (第18~20図、図版11)

状況 調査区東側地区2H-10区の南北2.2m、東西3mの範囲に5点の遺物を検出した。そのうちの、黒曜石製の石器1点は攪乱中の出土であるが、この付近から発見したブロックは本ブロックのみであることから、ここに含めた。出土層位の明確なものはチャート4点で、IV層からの出土である。器種構成は黒曜石製の二次加工を有する剣片1点とチャート製の碎片4点である。



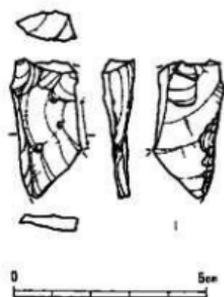
第18図 6ブロック器種別分布図



第19図 6ブロック母岩別分布図

遺物 1は黒曜石製の二次加工を有する剥片で、右側縁と先端部を折損する。比較的幅広い縦長剥片の左側縁の主要剥離面に鋭角な剥離を連続して施している。折損する右側縁には微細剥離痕が観察できる。

チャートは色調で3母岩に分離できたが、碎片であるため確証はない。



第20図 6ブロック石器実測図

6ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 型石器	掻器	削器	ピエス	R・F	U・F	割片	碎片	石核	敲石	磨片	合計
チャート	1							2					2
#	2							1					1
#	3							1					1
黒曜石	1					1							1
合計						1		4					5

6ブロック石器属性表

No.	グリッド 番号	遺物 番号	検出 番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	打製形状	打製調整	背面構成	折刃	接合資料
1	2H-20	0005	1	R・F	黒曜石	32.0×26.6×8.7	4.16	H(1)	-	I-II・IV	B・R	

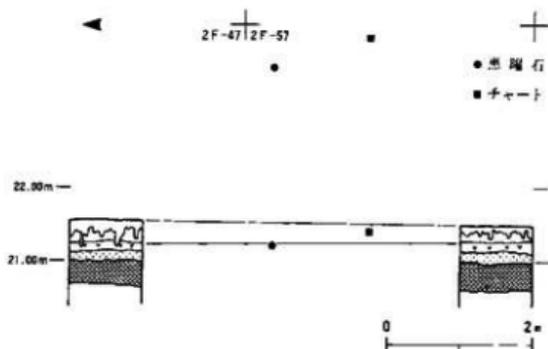
## 7ブロック (第21図、図版5)

状況 調査区東側地区の2F-57に2点遺物を検出した。黒曜石とチャートの碎片である。  
出土層位はIV層下部からVI層上面である。

わずか2点の出土であることから、性格は不明のブロックといえる。

7ブロック石器組成表

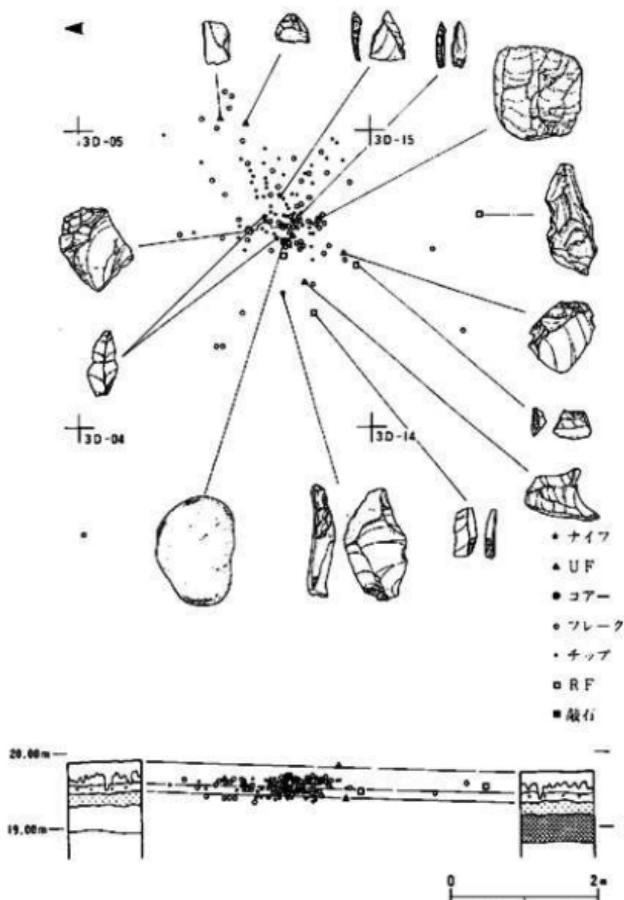
石材	器種	ナイフ 型石器	掻器	削器	ピエス	R・F	U・F	割片	碎片	石核	敲石	磨片	合計
黒曜石									1				1
チャート								1					1
合計								2					2



第21図 7ブロック母岩別分布区

8ブロック (第22~32図、図版5・11~13)

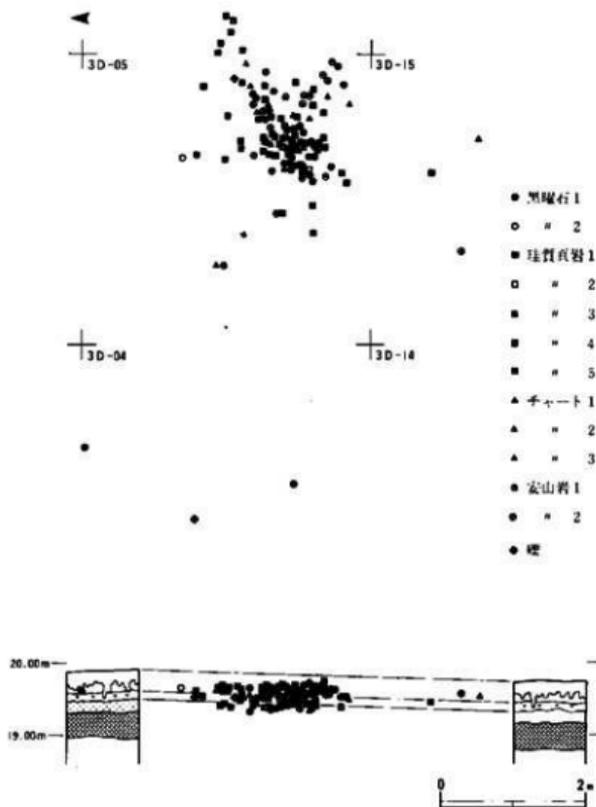
状況 調査区西側地区の3D-04・05・06・15区の南北5.4m、東西6.0mの範囲に136点の遺物を検出した。そのうち礫が2点含まれる。石器は径2mでとくに集中するが、外方にも単発で散在するため、ブロックの範囲は前述のとおりとなる。石器の石材は珪質頁岩と安山岩がなかば拮抗し、黒曜石、チャートが加わる。出土層位はIV層からVII層上部にかけてレンズ状に分布している。器種構成はナイフ形石器4点、二次加工を有する剥片4点、使用痕を有する剥



第22図 8ブロック器種別分布図

片5点、剥片58点、碎片60点、石核2点、敲石1点、礫片2点で、さらに接合資料も豊富で、7個体の資料を得ている。

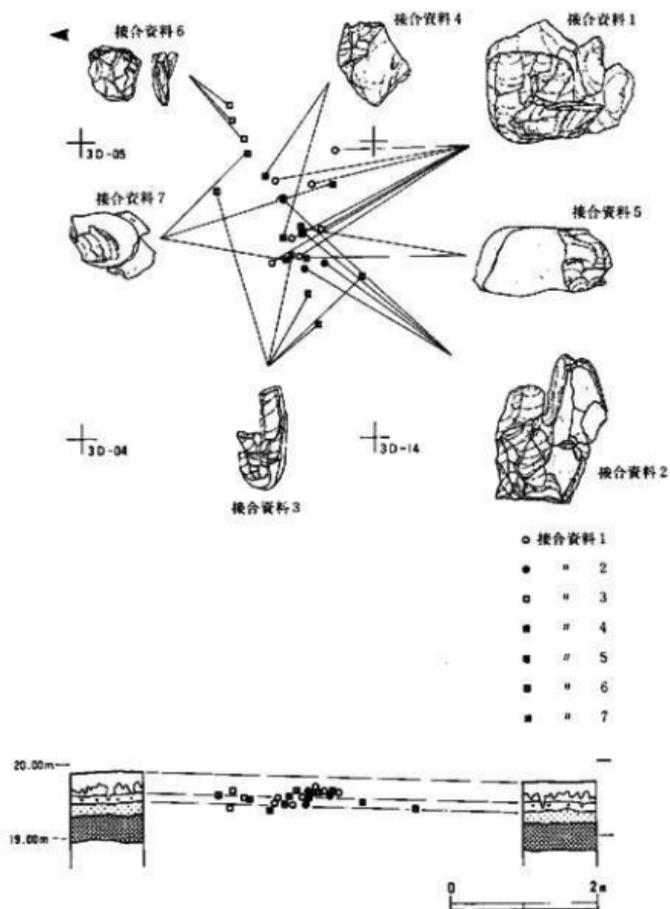
遺物 1～4はナイフ形石器である。1は基部を欠損するがほぼ完形で、一側縁に調整を加えている。基部右側縁に直線的なブランティングを施す小形品である。2はさらに小形で、全長が2.5cmほどである。細身の縦長剥片を素材にし、左側縁は全体を直線的に、右側縁には基部側にそれぞれブランティングを施す。3は基部側を折損し、打面は左側縁の調整で除去している。4は自然面を残す縦長剥片を素材とし、基部の一部と中位より先端寄りの左側縁に調整を施している。先端側の調整は背面より行われ、厚みのあるほぼ垂直な面を作出している。右側縁には微細剝離痕を観察する。



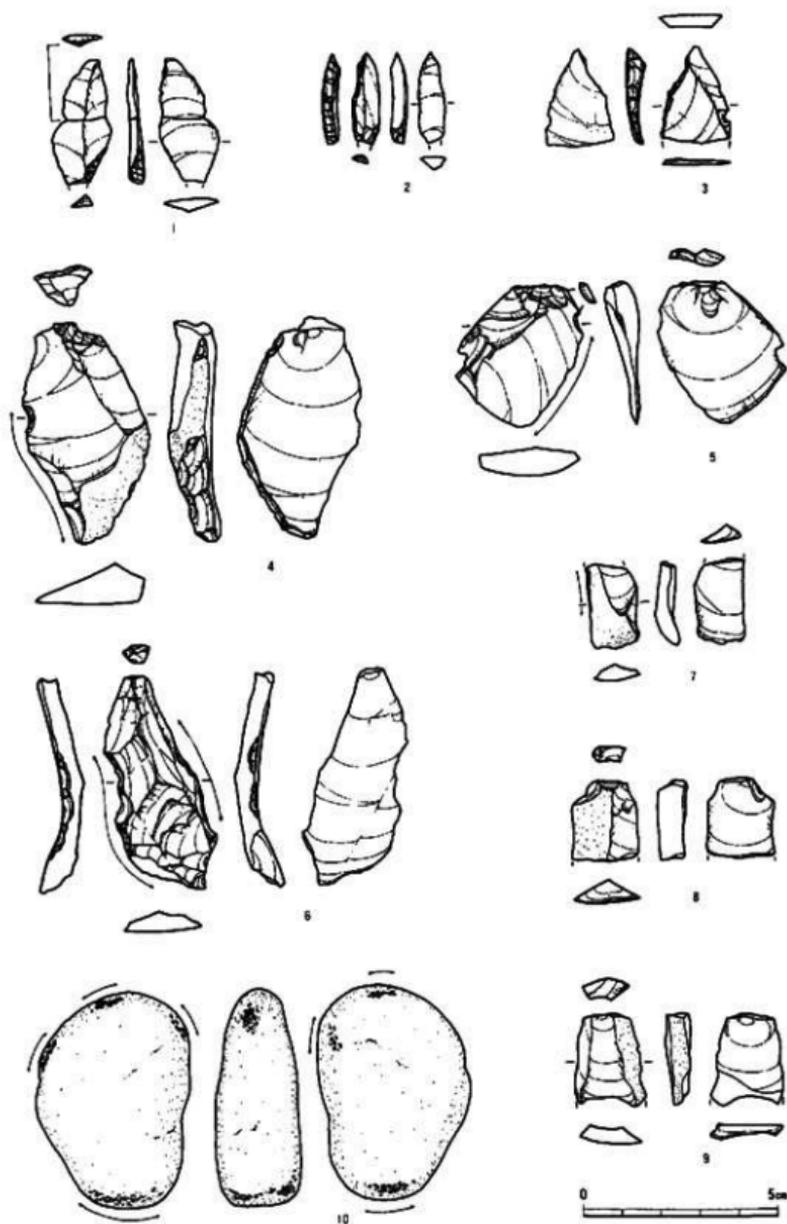
第23図 8ブロック母岩別分布図

5、7は使用痕を有する剥片で、5は比較的幅広の縦長剥片の右側縁に使用痕を認める。また、頭部調整も顕著である。7は小形の縦長剥片の左側縁に使用痕を認めるもので、背面には表皮が残り、中間で折損している。8、9とともに接合資料3と同一母岩から作出された剥片を使用している。

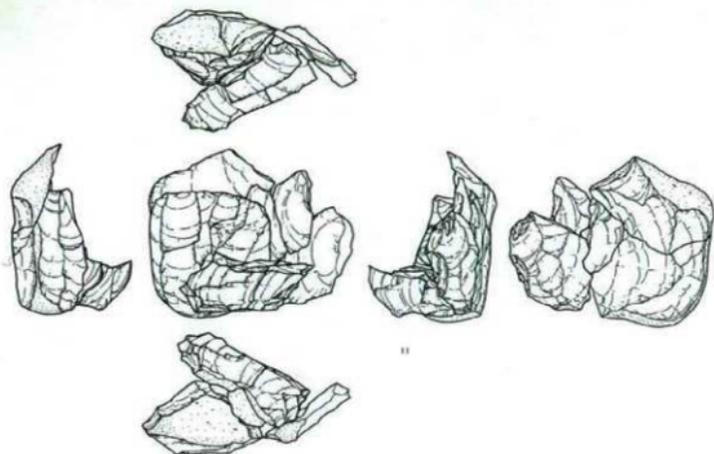
6はしの字状の縦長剥片の両側縁に小規模な二次加工を施したもので、先端部には厚みを取るための剝離を加えている。



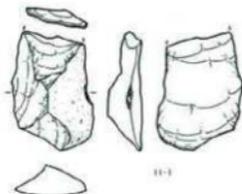
第24図 8ブロック接合資料分布図



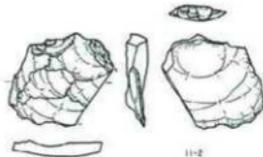
第25図 8ブロック石器実測図



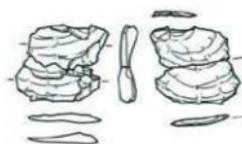
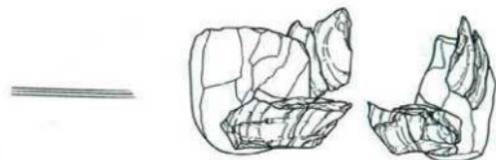
11



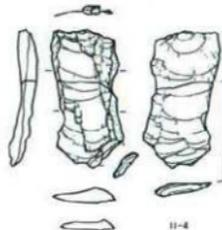
11-3



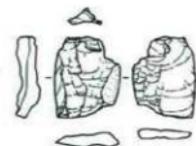
11-2



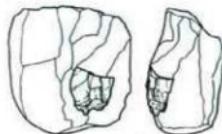
11-3



11-4

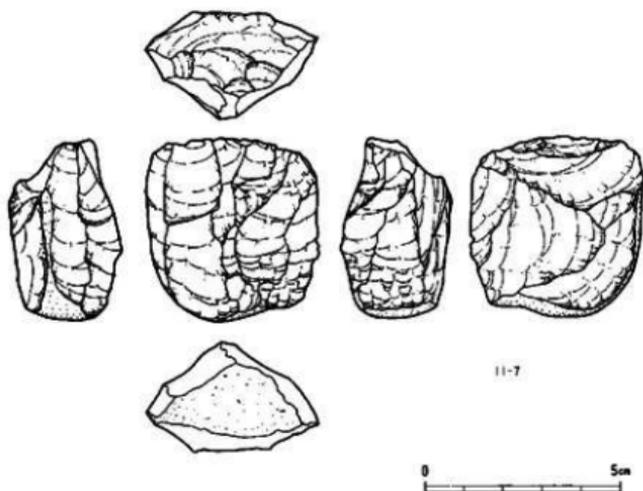


11-5



11-6





第27図 8ブロック接合資料1実測図2)

8、9は同一母岩から作出した剥片で、幅の狭い小形な資料である。表皮が残存している。10は安山岩製の敲石である。楕円形を呈し、やや扁平な形状で、両端の尖った部分に敲打痕が認められる。

#### 接合資料1 (11)

安山岩製で石核と剥片6点が接合する。現状で7.5cm×6.2cm×4.5cmを測るが、表皮の遺存状況から母岩はそれより多少大きめの角張った楕円形を呈するものと考えられる。裏面には長軸に沿った幅広の剥離を繰り返し表皮を除去したようすが看取でき、長軸右側に打面を形成して11-1、2を剥離している。その後、同一面に打面を再生し、表裏から11-3、4、5を剥離する。さらに、打面を90°転回し、石核11-7の頭部に打面を作出して、右から左に打点を移動しながら縦長剥片を得ている。11-6はその折損品である。

11-1は縦長剥片で背面には自然面を残し、ノッチ状の剥離を左側縁に施している。11-2は幅広の縦長剥片である。11-3も同様で、中位で切断している。11-4は縦長剥片である。11-5は前者と同様の打面より作出した縦長剥片で、厚みはあるが短い縦長の剥片である。11-6は打点を石核の再生打面におく幅広の縦長剥片の先端部欠損品である。11-8は本接合資料の石核である。正面から側面にかけては上部の打面からの縦方向の剥離面が規則的にはしり、上部打面の打角は鋭角的である。裏面には横方向の大まかな剥離が認められる。

#### 接合資料 2 (12)

安山岩製で剥片 6 点が接合する。現状で7.5cm×5.6cm×3.0cmを測るが、下面は下方からの剥離を行うための打面がしめている。高さ 8 cm～9 cm前後の横に長い母岩であった可能性が高い。下面を打面とする剥離は、右側面に最も古い剥離として認められる。遺存する資料は上部から剥離されたものである。

最初の剥離は、12-2で右の側面から表皮を除去する剥片である。ついで、打面を上部に設定して、表皮を背面にとどめる12-1、3の縦長剥片を剥離する。さらに、打面を1.5cmほど下位に設けて12-4、5、6の縦長剥片を剥離している。

#### 接合資料 3 (13)

珪質頁岩製で剥片 4 点が接合する。現状で5.2cm×2.5cm×1.6cmを測る。楕円形の母岩の長軸にそって表皮を残す縦長剥片が3点(13-1・2・3)とられ、ついで打面を90°転回して幅広い縦長剥片(13-4)を作出している。各剥片は比較的小形品である。

13-1は先端部および基部を欠損する。背面右側縁に表皮を残し、その下部に調整を加えている二次加工を有する剥片である。13-2はやはり細身の縦長剥片の欠損品で先端部が遺存している。背面には表皮と3枚の剥離面が観察できる。推定の長さは5cm程度と考えられる。13-3は5.6cmの縦長剥片で、2か所で切断され3等分している。背面には表皮を残す。切断剥片のうち頭部の剥片は切断面に調整を加え、自然面を刃部とする台形礫石器である。13-4は右側縁と頭部を欠損する幅広い縦長剥片である。主要剥離方向は前者より90°転回している。したがって、背面には横方向の剥離面を観察する。自然面が残る先端部に微細な剥離をもつ使用痕を有する剥片である。

#### 接合資料 4 (14)

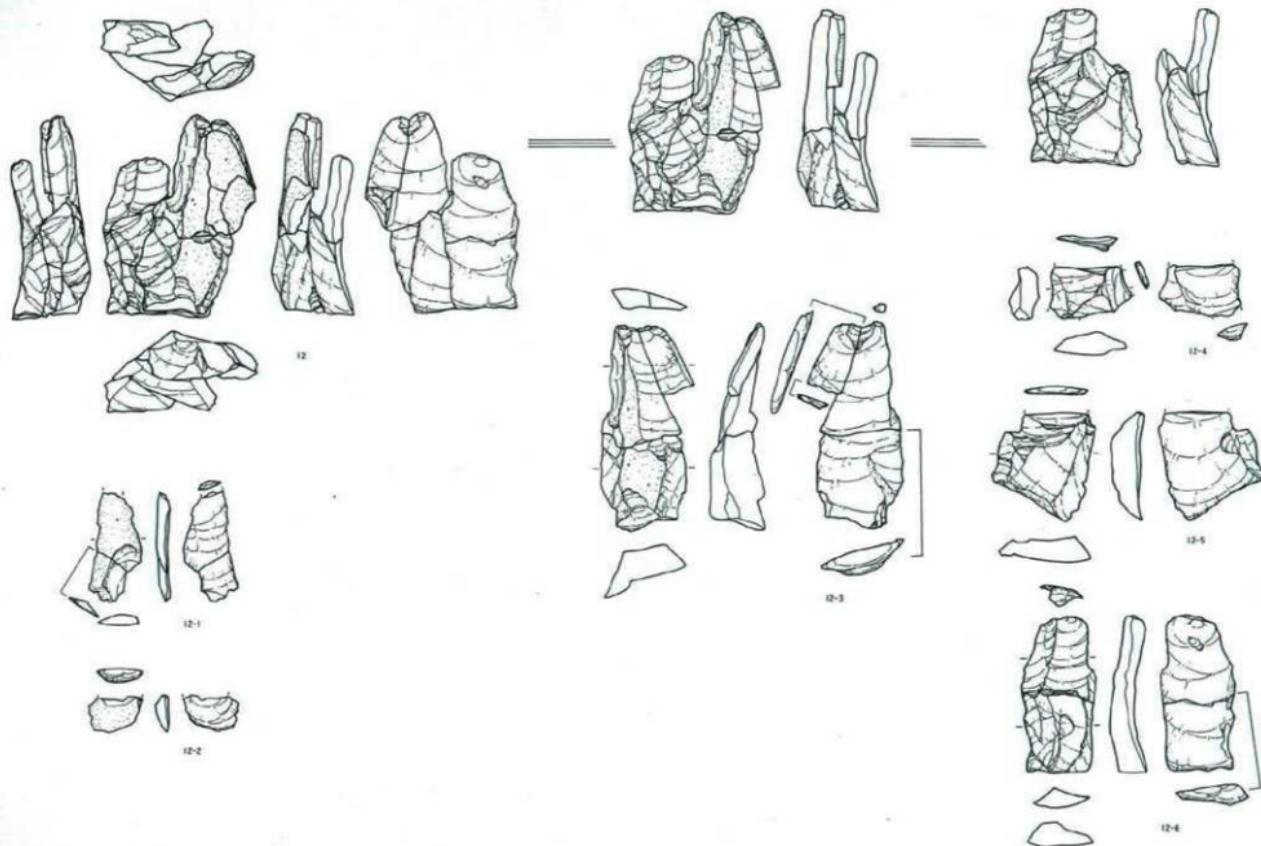
珪質頁岩製で、石核 1 点と剥片 1 点が接合する。剥片はきわめて小さく、同様の剥片を何点か剥離している。

14-1は剥片素材の石核で、背面には自然面を残している。上部から数枚のきわめて小さい縦長剥片を採取したのち、再度上面に打面をつくり、左から右へ打点を移動しながら14-2をはじめとする小形の縦長剥片を剥離している。14-2は1cmほどの長さの剥片である。

#### 接合資料 5 (15)

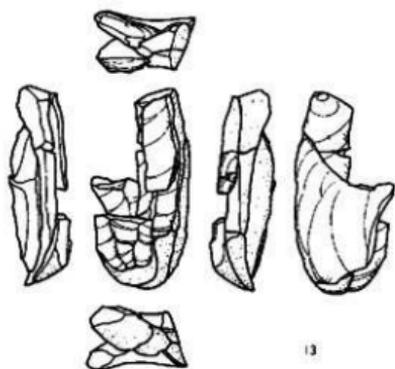
珪質頁岩製で横長剥片と幅広い縦長剥片が2点が接合する。扁平な母岩の自然面を打面とし、剥片を採取しているようである。この2点を剥離する前段階には下方右側で数枚の小形剥片を剥離している。

15-1はきわめて幅広い横長剥片で、背面には下方から剥離した剥離面と自然面が認められる。また、下端には微細な剥離をもっており、使用痕を有する剥片と判断した。15-2は自然面を打面とする幅広い縦長剥片で、背面には自然面を残す。

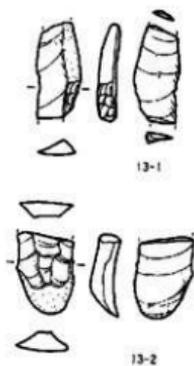


第28図 8ブロック接合資料2実測図



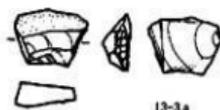
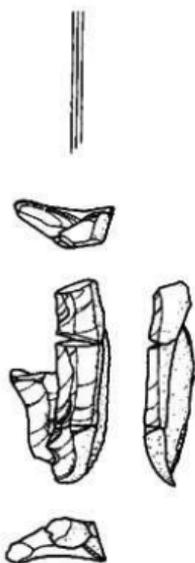


13

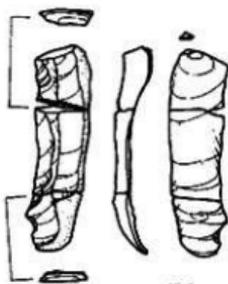


13-1

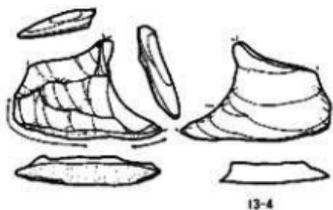
13-2



13-3a



13-3



13-4



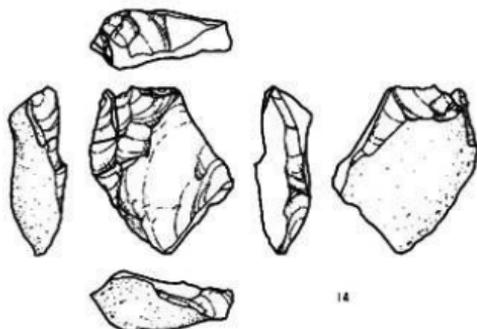
第29図 8ブロック接合資料3実測図

接合資料 6 (16)

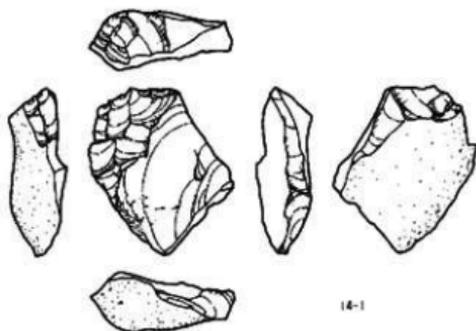
珪質頁岩製で剥片 3 点が接合する。16-1・2・3 の順に剥離するが、打点は 16-1 が上方左端で、16-2 は 5 mm ほど右に移動し、さらにはじめの打点付近にもどって 16-3 を剥離している。16-1 は幅広の縦長剥片、16-2 も同様の縦長剥片、16-3 は小形で幅広の縦長剥片で先端部には使用痕を認める。

接合資料 7 (17)

チャート製で剥片 2 点が接合する。表皮付近の接合資料である。自然面を背面にもつ幅広の縦長剥片の 17-1 を剥離し、90° 転回して打面をつくり、縦長剥片 17-2 を剥離する。



14



14-1

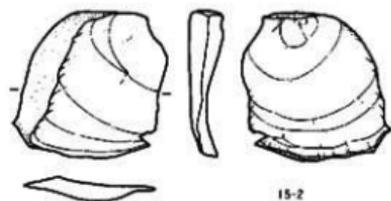
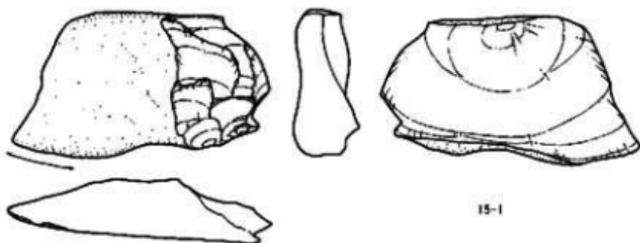
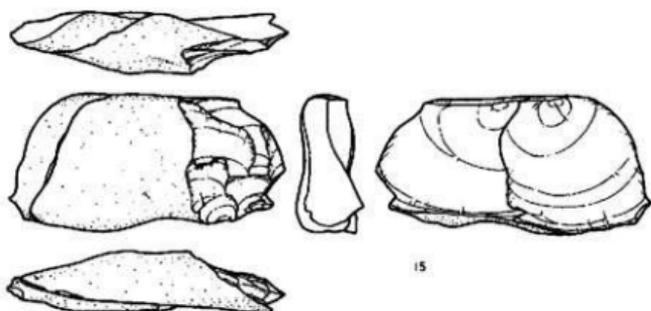


14-2

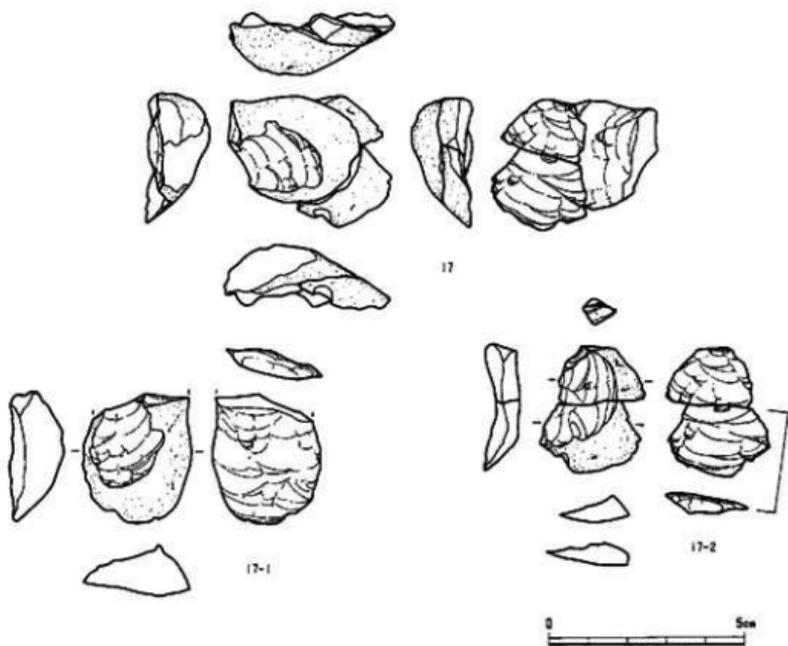
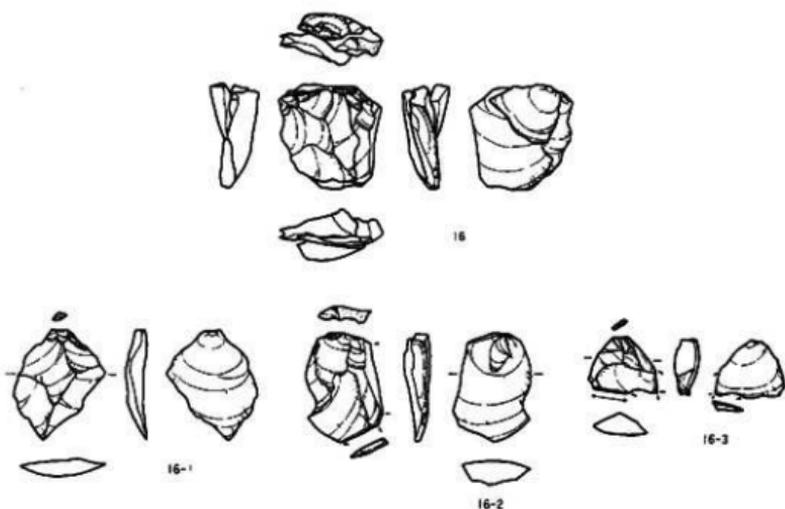


第30図 8ブロック接合資料4実測図

17-1は中間部で折損している。背面には表皮を剥ぐ剥離面と自然面がある。17-2は剥離面打面からとられた不定形な縦長剥片で、中間部で折れている。背面には17-1の横方向の剥離面と自然面が残る。



第31図 8ブロック接合資料5実測図



第32図 8ブロック接合資料6・7実測図

特徴 安山岩製の接合資料1および2は11ブロックと接合する。ともに、初期段階の剥片が11ブロックより出土していることから、11ブロックでは石核を整える段階（接合資料2）や初期の縦長剥片剥離の段階（接合資料1）を行い、当ブロックでは良好な縦長剥片を剥離したものと考えられる。接合資料1は当ブロックで石材を消費しきっているのに対して、接合資料2は石核が遺存していないことから、縦長剥片の剥離作業は行なうが、母岩のすべては消費せず残核は他の地点に運ばれたのちに、その消費を完結するものと考えられる。また、縦長剥片剥離方向が、接合資料1では90°転回しているのに対し、接合資料2は上下180°の転回である点で対照的である。製品は1、2のように比較的小形の剥片を素材にしたものが多く、珪質頁岩の接合資料3や7～9の剥片などはその素材となり得る大きさである。

8ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 型石器	磨器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	敲石	磨片	合計
黒曜石	1							2	1				3
#	2							1					1
珪質頁岩	1	2				3	4	26	25				60
#	2								1				1
#	3	1					1						2
#	4								1	1			2
#	5							1					1
チャート	1							7	9				16
#	2							1					1
#	3					1							1
安山岩	1	1						20	23	1			45
#	2										1		1
不明													
合計		4				4	5	58	60	2	1		134

8ブロック石器属性表(1)

No.	グリー ド番号	発掘 番号	検出 番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打削角度	背面構成	折面	接合資料
1	3D-05	0097 0103	1	ナイフ	珪質頁岩1	31.3×14.6×3.0	1.09	N	-	I	M	
2	#	0090	2	#	# 1	23.3×6.7×3.0	0.54	N	-	I	H	
3	#	0038	3	#	# 1	23.8×17.1×4.3	1.26	N	-	I・II	L	
4	#	0004	4	#	# 3	55.1×28.9×10.8	15.18	H(3)	T	N	I・IV	-
5	#	0052	5	U・F	# 3	37.1×27.0×7.7	6.18	H(3)	T	I・IV	-	
6	3D-15	0003	6	R・F	チャート3	56.7×22.6×5.6	7.92	H(1)	D	I・II・ III・IV	-	
7	3D-06	0003	7	U・F	珪質頁岩1	20.5×11.7×4.0	1.13	N	-	N	I	H
8	3D-05	0007	8	剥片	# 1	20.1×17.0×6.5	2.81	H(2)	-	N	I	M
9	3D-06	0002	9	剥片	# 1	23.0×18.3×5.8	2.37	H(1)	-	N	I	M
10	3D-05	0065	10	敲石	安山岩2	54.1×39.2×22.1	69.92	-	-	-	-	

11-1	3D-77	0005	11-1	U・F	# 1	46.0×29.1×11.7	12.93	N	-	N	I・W	M	接合資料1
-2	3D-77	0002	11-2	剥片	# 1	38.2×33.4×7.0	9.36	H(2)	D・H	N	I・II・W	R	#
-3	3D-06	0059 0081	-3	#	# 1	30.5×29.7×4.6	3.86	H(2)	-	-	I・II	M	#
-4	#	0017 0096	-4	#	# 1	53.0×24.2×6.1	7.42	H(2)	T	N	I	M・B	#
-5	#	0045	-5	#	# 1	22.8×29.1×17.1	4.93	H(2)	T	N	I	M	#
-6	#	0070	-6	#	# 1	14.2×17.0×4.2	1.10	N	-	-	I・II	B	#
-7	#	0013	-7	石核	# 1	46.0×42.5×28.3	64.88	-	-	-	-	-	#
12-1	3D-67	0011 0015	12-1	剥片	# 1	42.3×16.0×4.0	2.70	N	-	N	II	H・M	接合資料2
-2	#	0015	-2	#	# 1	12.0×21.7×4.4	1.12	-	-	N	-	B	#
-3	#	0006 0007 0014	-3	#	# 1	84.9×32.2×12.1	29.28	H(1)	-	N	I・II・W	M・R	#
-4	3D-05	0092	-4	#	# 1	29.5×17.9×7.8	4.19	N	-	-	I・II・III	M・B・R	#
-5	#	0088	-5	#	# 1	33.2×39.8×10.3	13.59	N	-	-	I・III	H	#
-6	#	0008 0009	-6	#	# 1	63.9×25.7×9.7	15.99	H(2)	-	-	I・II・III	-	#
13-1	3D-05	0005	13-1	R・F	地質頁岩1	27.2×13.1×3.5	0.67	N	-	N	I	H・B	接合資料3
-2	#	0015	-2	剥片	# 1	21.3×15.5×5.9	1.44	N	-	N	I	M	#

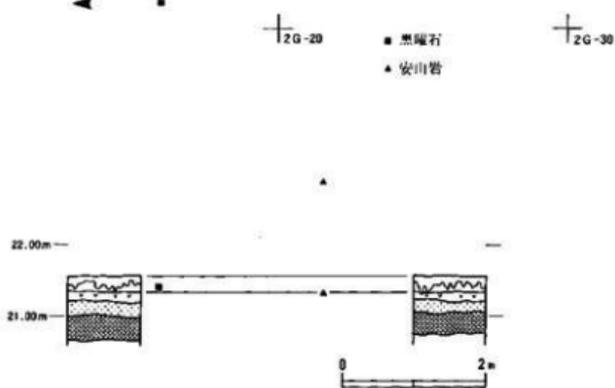
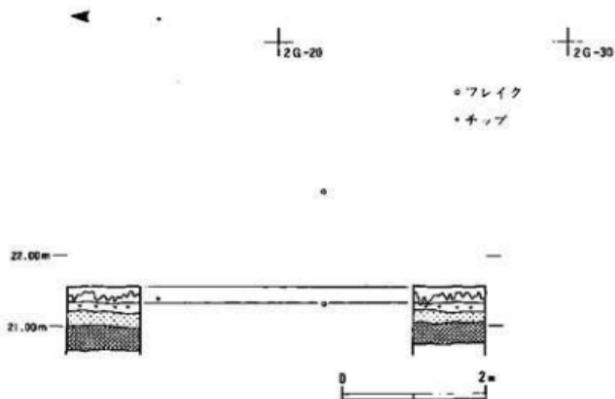
### 8 ブロック石器属性表(2)

No	グリッド番号	遺物番号	検出番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料	
-3	3D-05	0016 0011 0025	-3	剥片	地質頁岩1	56.2×13.6×5.4	3.21	H(1)	-	N	I	H・B	接合資料3
-3a	#	0016	-3a	R・F	# 1	18.3×13.6×5.4	1.52	H(1)	-	N	I	H	#
-4	#	0006	-4	U・F	# 1	24.2×38.4×5.5	4.82	N	-	N	II	H・R	#
14-1	#	0095	14-1	石核	# 4	37.4×29.6×12.0	17.30	-	-	N	-	-	接合資料4
-2	#	0116	-2	剥片	# 4	12.8×8.9×2.3	0.26	H(2)	-	N	I	-	#
15-1	#	0057	15-1	#	# 1	34.6×63.5×10.9	27.55	C	-	N	III	-	接合資料5
-2	#	0079	-2	#	# 1	34.0×35.2×6.2	6.43	C	-	N	I	-	#
16-1	3D-06	0006	-1	#	# 1	24.2×20.4×3.5	1.81	H(1)	-	-	I	-	接合資料6
-2	#	0004	-2	#	# 1	27.9×19.8×6.6	3.44	C	T	-	I・W	R・B	#
-3	#	0001	-3	U・F	# 1	14.6×17.8×5.8	1.16	H(1)	-	-	I・II	R・B	#
17-1	3D-05	0071	17-1	剥片	チャート1	34.8×27.2×13.2	11.30	-	-	N	I	H	接合資料7
-2	#	0028 0047	-2	#	# 1	33.6×23.3×6.6	5.08	H(2)	T	N	W	M	#

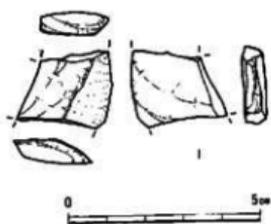
### 9 ブロック (第33・34図、図版5・13)

調査区東側地区の2G-11・20区に3.4m離れて2点の遺物を検出した。石器は黒曜石のチップと安山岩の剥片である。出土層位はIV～VI層上面である。

1は安山岩製の剥片で、右側縁をのぞき折損している。背面には自然面を残す幅広い縦長剥片のようである。



第33図 9ブロック器種別・母岩別分布図



第34図 9ブロック石器実測図

9ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 型石器	擧器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	敲石	鏝片	合計
黒曜石									1				1
安山岩								1					1
不明													
合計								1	1				2

9ブロック石器属性表

No.	グリッド 番号	遺物 番号	検出 番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
1	3G-20	0001	1	剥片	安山岩 1	23.8×19.5×6.8	4.28	N	-	N	N	M・B・L

## 10ブロック (第35・36図、図版6・13)

状況 調査区西側地区の3G-82-91区におよぶ南北4.0m、東西2.8mの範囲に4点の遺物を検出した。石器の石材は黒曜石が3点、安山岩が1点である。出土層位はⅦ層～Ⅸ層におよぶが、Ⅶ層のなかに収まるものとする。

遺物 図示できるものは少なく、1は自然面を左側縁に残す黒曜石製の縦長剥片で、先端部は幅広となっている。頭部で折れたものが接合した。背面は右側からの古い剥離面があり、打点を90°転回して上部からの剥離が加わる。右側縁端部は欠損している。

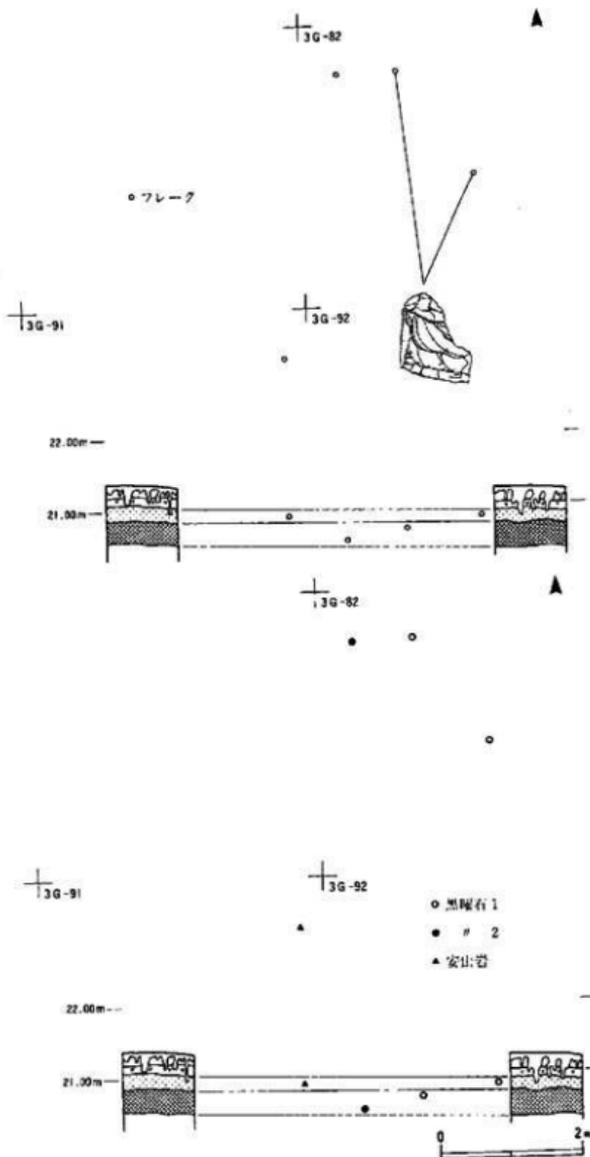
特徴 接合品はⅦ層上部からとⅨ層上部からの出土で遺物の上下差は大きい。もう一種の黒曜石はⅨ層の下部に位置するが、上下の移動の結果と考えられる。

10ブロック石器組成表

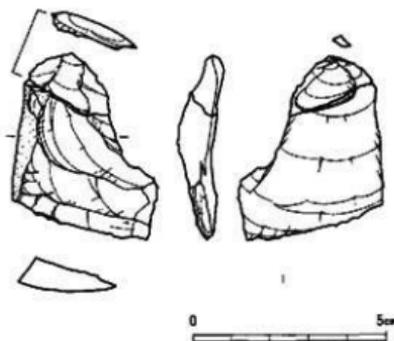
石材	器種	ナイフ 型石器	擧器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	敲石	鏝片	合計
黒曜石	1							2					2
	2							1					1
安山岩	1							1					1
不明													
合計								4					4

10ブロック石器属性表

No.	グリッド 番号	遺物 番号	検出 番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
1	3G-82	0002	1	剥片	黒曜石 1	50.8×37.1×9.0	11.04	H(1)	-	N	I・II	M



第35図 10ブロック器種別・母岩別分布図



第36図 10ブロック石器実測図

11ブロック (第37~39図、図版6・13)

状況 調査区西側地区3D-48・57・67・77区におよぶ南北10m、東西4mの範囲に26点の遺物を検出した。特に集中するのは3D-67・77の2mの範囲である。ここでは珪質頁岩と安山岩で構成され、1点礫が混じる。外方にはチャートが散在している。出土層位はIV層からVI層であるがVI層中にその中心がありそうである。器種構成はナイフ形石器1点、二次加工を有する剥片1点、使用痕を有する剥片2点、剥片13点、碎片8点、礫1点である。

11ブロック石器組成表

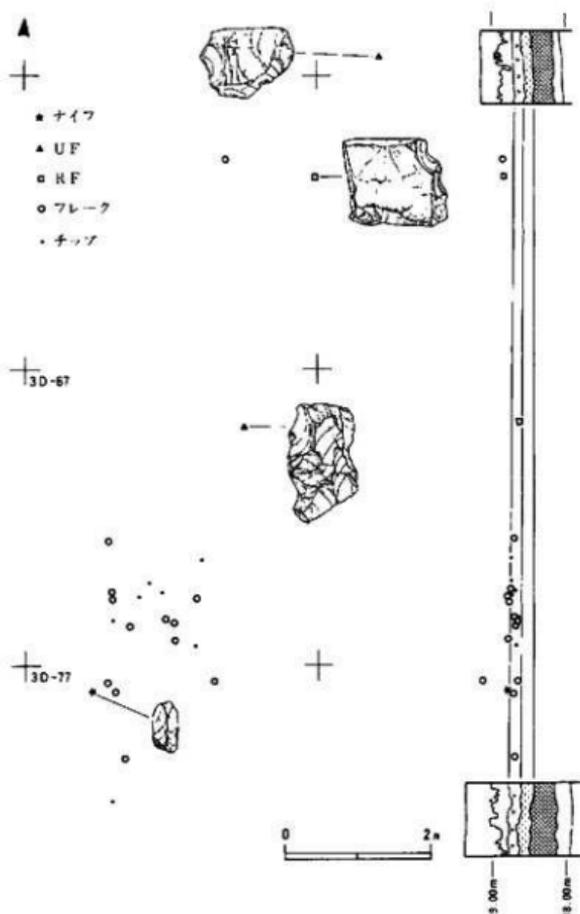
石材	器種	ナイフ型石器	鑿器	削器	ピュス	R・F	U・F	剥片	碎片	石核	敲石	礫片	合計
珪質頁岩	1							1					1
#	2							3	4				7
安山岩	1	1						9	4				14
チャート	1					1							1
#	2						1						1
#	3						1						1
不明													
礫												1	1
合計	1					1	2	13	8			1	26

11ブロック石器属性表

No	ブロック番号	遺物番号	検出番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(m)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
1	3D-77	0004	1	ナイフ	安山岩1	25.2×12.8×4.6	1.94	N	-	I・III	H・B	
2	3D-57	0001	2	R・F	チャート1	43.3×49.8×20.3	72.89	-	-	IV	-	
3	#	0002	3	剥片	珪質頁岩1	30.3×22.7×8.3	5.62	H(1)	T	I	-	
4	3D-67	0001	4	U・F	チャート2	52.8×49.0×14.4	34.30	N	-	I・III・IV	-	
5	3D-48	0001	5	U・F	チャート3	47.9×35.3×21.7	35.97	C	-	S II・III・IV	-	

遺物 1は安山岩製のナイフ形石器で基部および先端部をわずかに欠損する。縦長剥片を素材に、基部側の両側縁に調整を加えて打瘤を除去している。プランティングは右側縁は比較的細かく行うのに対し、左側縁は大まかに加えている。

2はチャート製の二次加工を有する剥片で、上下は自然面、表裏は節理面のマッチ箱状の扁平な剥片を素材に右側面に裏面から数回の打撃を加え、調整を行っている。剝離が大きく裏面が打面として適することから、小剥片を剝離する石核である可能性もある。

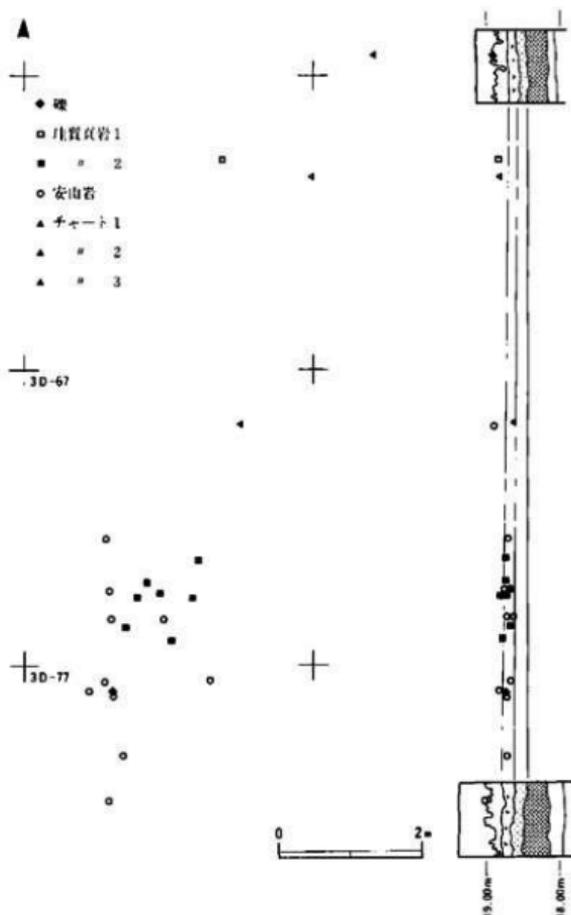


第37図 11ブロック器種別分布図

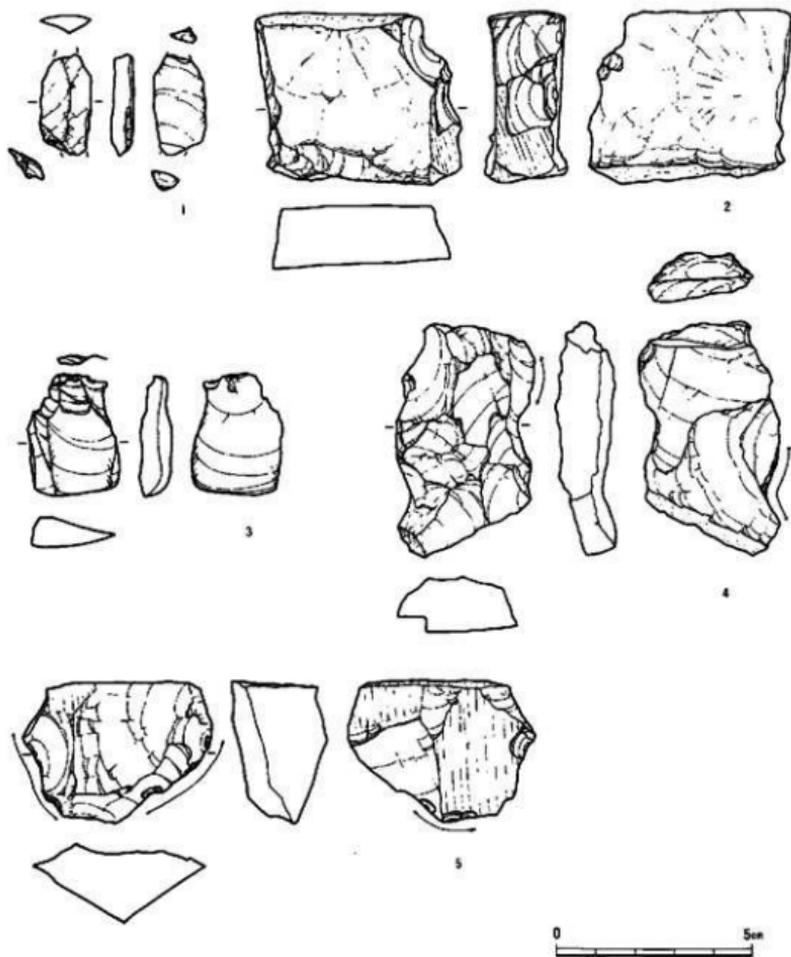
4、5は使用痕を有する剥片で、比較的大形の剥片を素材としている。ともにチャート製で4は右側縁上部と左側縁下部に、5は右側縁から左側縁にかけて微細剝離を認める。後者は節理が発達している。

3は珪質頁岩製の縦長剥片である。

特徴 珪質頁岩と安山岩については剥片、チップが多いことから当ブロックで石器を製作していたことがうかがえるが、チャート製の石器3点については製品をそのまま搬入したものである。



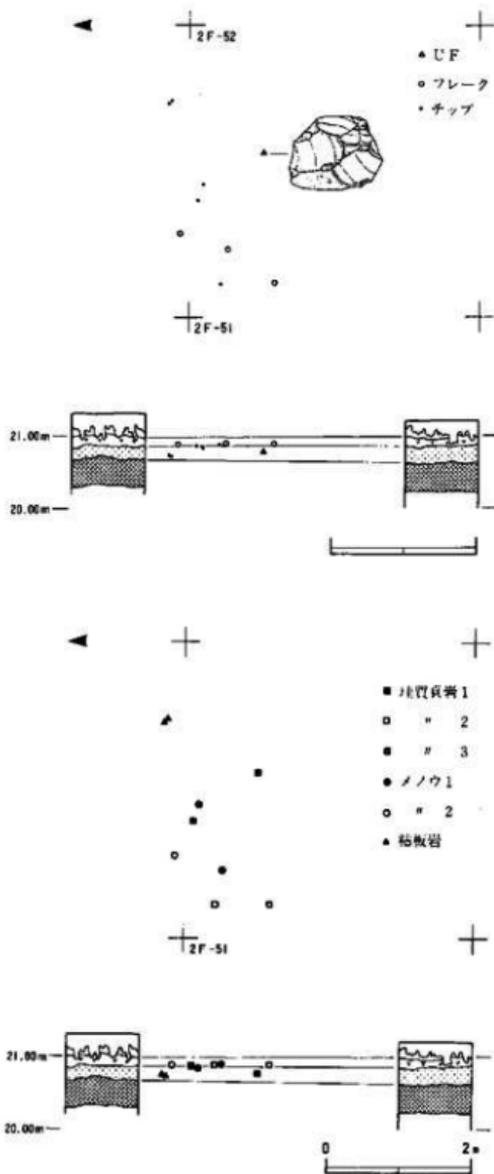
第38図 11ブロック母岩別分布図



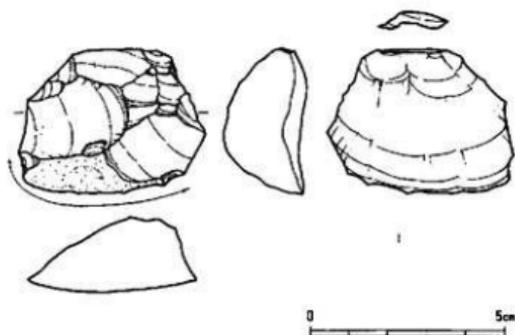
第39図 11ブロック石器実測図

12ブロック (第40・41図、図版7・13)

調査区東側地区の2F-42・52区におよぶ南北1.5m、東西2.3mの範囲に集中して9点の遺物を検出した。石器の石材は珪質頁岩4点、メノウ3点、粘板岩2点である。出土層位はVI～VII層にかけてである。器種構成は、使用痕を有する剥片1点、剥片3点、砕片5点である。



第40図 12ブロック器種別・母岩別分布図



第41図 12ブロック石器実測図

遺物 1は珪質頁岩製の使用痕を有する剥片で、横長の剥片を素材にする。主要剥離面の同時に2か所に打撃が加わるため二つの打瘤をもっている。背面は円みの強い素材の表皮剥離のための剥離面がいたる方向から入り、先端部には自然面を残している。打角は打面からほぼ直角に入っているため、比較的分厚い剥片として仕上がっている。自然面の残る先端部には微細剥離痕が認められる。

#### 12ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 型石器	掻器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	碎片	石核	敲石	礫片	合計
珪質頁岩	1						1						1
#	2							1	1				2
#	3								1				1
メノウ	1							1	1				2
#	2							1					1
粘板岩	1								2				2
不明													
合計							1	3	5				9

#### 12ブロック石器属性表

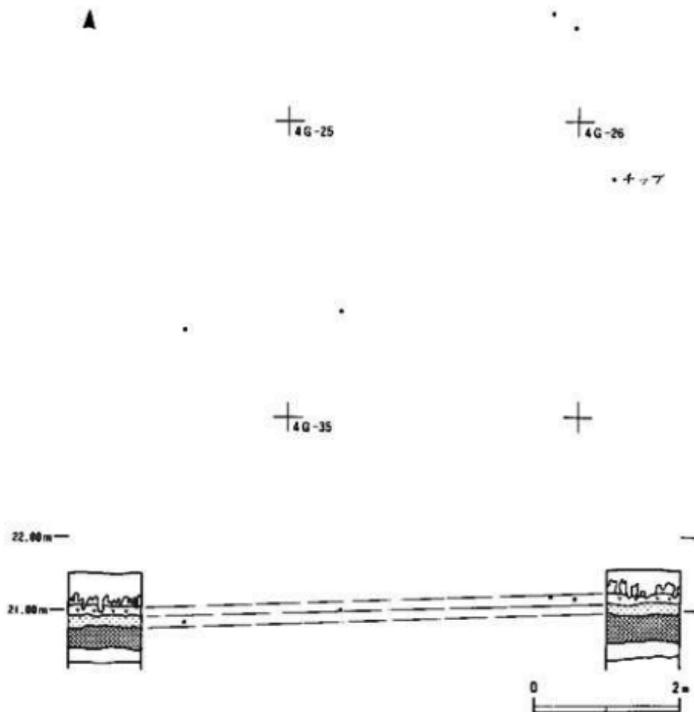
No	グリッド 番号	遺物 番号	地区 番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	埋合資料
1	2F-52	0006	1	U・F	珪質頁岩1	37.9×47.7×18.6	32.63	H(1)	-	N	I・II・ III・IV	-

### 13ブロック (第42図)

遺物分布図のみを掲載する。調査区東側地区の4G-15・24・25区にかけて5mほどの範囲に4点の遺物を検出した。出土層位はVI～VII層にかけてである。

13ブロック石器組成表

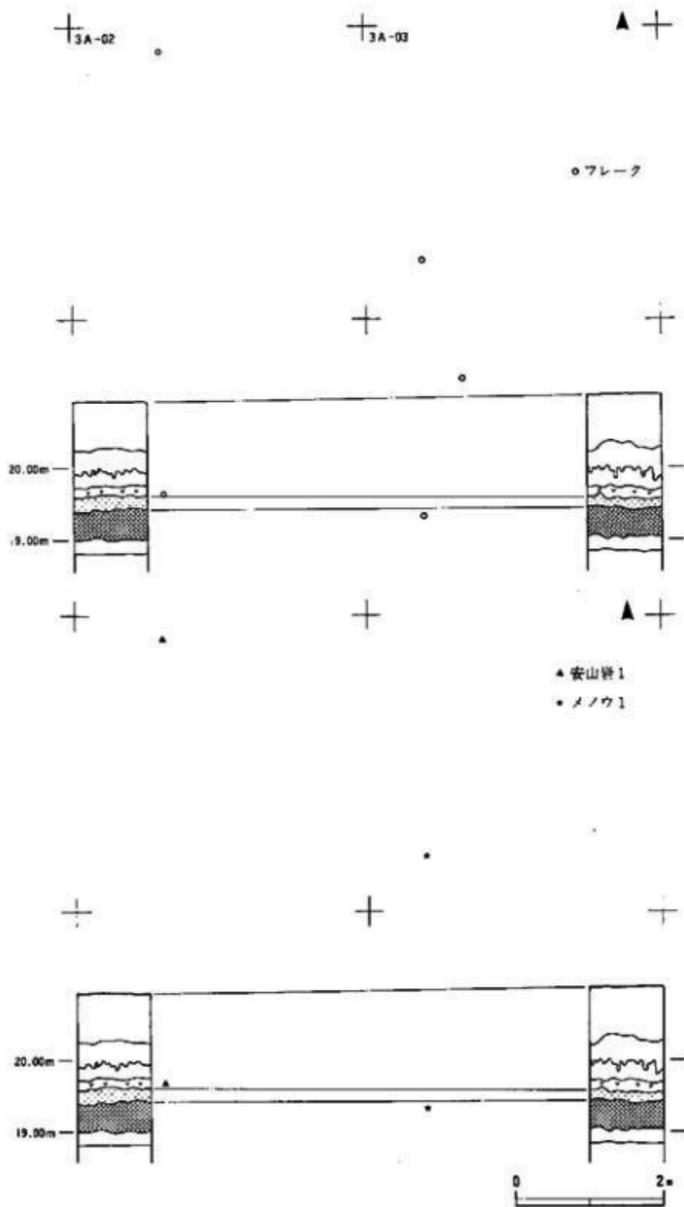
石材	器種	ナイフ 型石器	鏃	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	燧石	礫片	合計
不	明								4				4



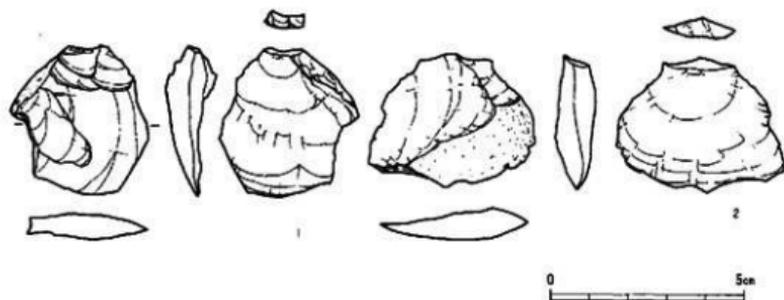
第42図 13ブロック器種別分布図

### 14ブロック (第43・44図、図版7・13)

状況 調査区西側地区の3A-02・03区にかけて2点の遺物を検出した。石器の石材はメノウと安山岩である。出土層位はVI層下部からIX層上部である。



第43図 14ブロック器種別・母岩別分布図



第44図 14ブロック石器実測図

遺物 1はメノウ製の剥片で、左側縁に自然面を残す。背面はポジティブな剥離面に上部および左側縁部から剥離が加わっている。したがって、縦方向の断面形はレンズ状をなす。2は、安山岩製の自然面を残す横長剥片である。

#### 14ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ型石器	掻器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	碎片	石核	敲石	撥片	合計
安山岩								1					1
メノウ	1							1					1
不明													
合計								2					2

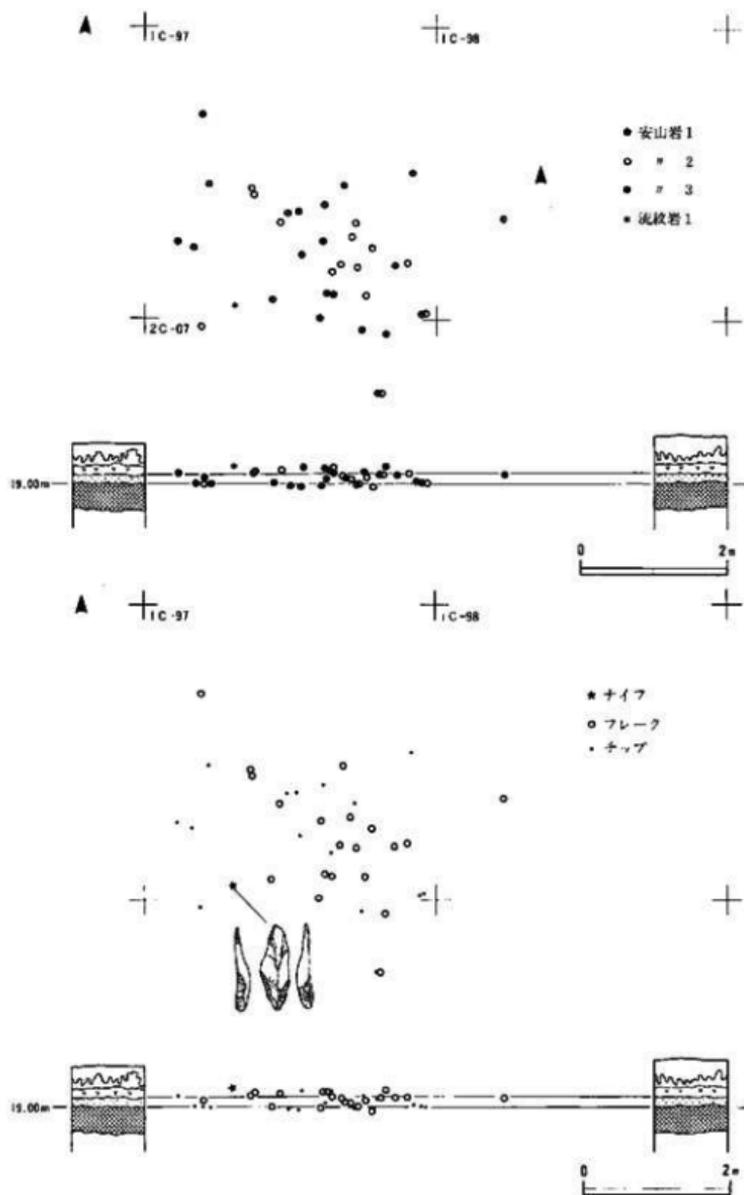
#### 14ブロック石器属性表

No	グリッド番号	遺物番号	標記番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	打型形状	打置調整	背面構成	断面	接合資料
1	3A-03	0001	1	剥片	メノウ	33.1×39.3×11.5	10.90	H(3)	T	I・IV	-	
2	3A-02	0001	2	"	安山岩	34.4×43.8×9.0	12.98	H(1)	-	N I・III・IV	-	

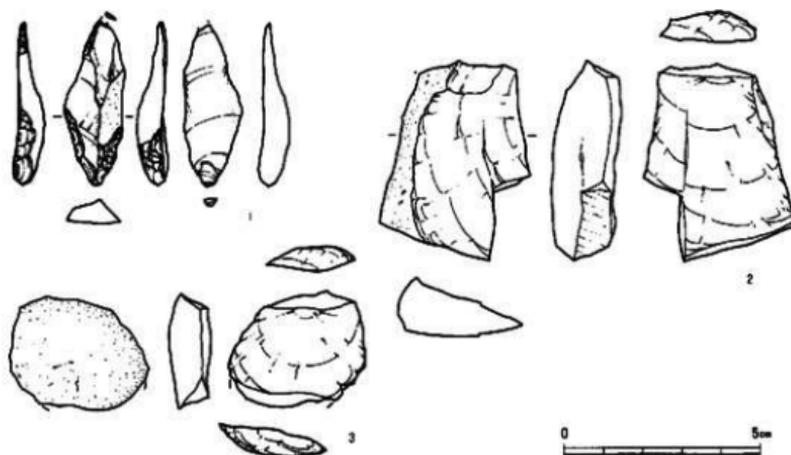
#### 15ブロック (第45・46図、図版7・13)

状況 調査区西側地区の1C-97・98・2C-07区におよぶ南北2.0m、東西2.6mの範囲に37点の遺物を検出した。石器の石材は安山岩が主体で、流紋岩が1点加わる。出土層位はVI～VII層である。器種構成はナイフ形石器1点、剥片20点、碎片16点である。

遺物 1は流紋岩製のナイフ形石器である。縦長剥片を素材に、基部側の両側縁と先端部左側縁に調整を加え、右側縁を刃部としている。基部の調整により打瘤は除去され、プランティングは直線的に施されるため、変則的な平行四辺形をなす。先端部と基部の一部はわずかに欠損する。背面には節理面が残る。



第45図 15ブロック器種別・母岩別分布図



第46図 15ブロック石器実測図

2は安山岩製の縦長剥片である。左側縁には自然面を残している。背面は横方向からの大きな剥離面があり、打面を90°転回して上部から剥離した剥片であることがわかる。先端は欠損する。3も安山岩製の剥片で、背面は自然面のみで、剥離面打面から最初に剥離した剥片である。先端部は欠損する。

特徴 ナイフ形石器は唯一の流紋岩製の製品で、製品で持ち込まれたものである。安山岩の母岩は3種類あるがいずれも剥片、チップ類で完成品はない。製作跡としての性格が強く、製品は持ち出されたのであろう。

#### 15ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ型石器	掻器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	砕石	破片	合計
安山岩	1							2	1				3
#	2							10	4				14
#	3							8	11				19
流紋岩	1	1											1
不	明												
合	計	1						20	16				37

#### 15ブロック石器属性表

No.	グリッド番号	遺物番号	標号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	備合資料
1	1C-97	0026	1	ナイフ	流紋岩1	41.8×15.0×6.7	2.98	N		N I・III	-	
2	#	0028	2	剥片	安山岩2	52.3×35.7×16.2	33.13	H(1)	-	N II	B	
3	#	0016	3	#	# 2	28.7×37.8×11.0	12.62	H(1)	-	N	L	

## 16ブロック (第47～58図、図版8・14～16)

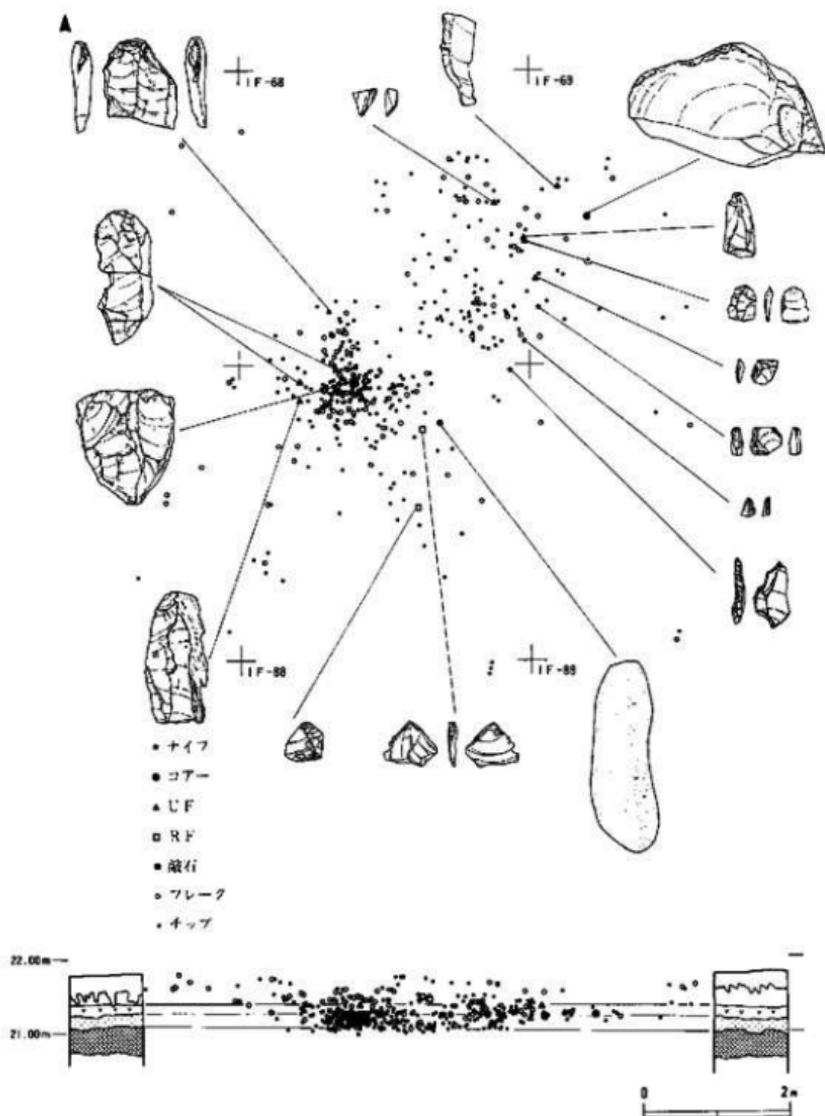
状況 調査区東側地区の1F-67～69・77～79・88におよぶ南北7.2m、東西7.4mの範囲に442点の遺物を検出した。特に、1F-78から88にかけて南西から北東方向に楕円形に遺物の密集が顕著で、その南西側の2m×3mの楕円形の範囲で当ブロック全出土石器の83%を占める黒曜石が集中し、北東側には2m強の円形の範囲に13%を占める珪質頁岩の集中が認められる。残念なことに、VII層の深さまでの掘り込をもつ2号方形周溝墓の周溝がブロックの北西側から中央部を通るため、黒曜石の集中箇所は二分され、中央部は遺物の分布が希薄となる。器種ごとの遺物の垂直分布をみると、剥片や石器などの比較的大形な遺物については上位からの出土が多く、砕片などの小形品は下位に集中する度合いが強い。また、接合資料と同一母岩から産出したと考えられる砕片についても同じ傾向を示している。特に集中する部分は、長軸を北東方向にもつ4.2m×2.5mの楕円形の範囲に、最下部がIX層最上面でほぼ水平をなし、最上部はIV層付近までいたる分厚いレンズ状をなしている。周辺部に散在する遺物はVI～VII層付近に多く、ほぼ遺物の密集地域の集中の高さと一致する。遺物の垂直、平面分布からなんらかの遺構の存在も想定できそうである。

器種構成はナイフ形石器6点、二次加工を有する剥片2点、使用痕を有する剥片9点、敲石1点、剥片96点、砕片326点、石核2点である。また、接合資料も充実しており、33点接合する接合資料1をはじめ、4接合資料を得ている。

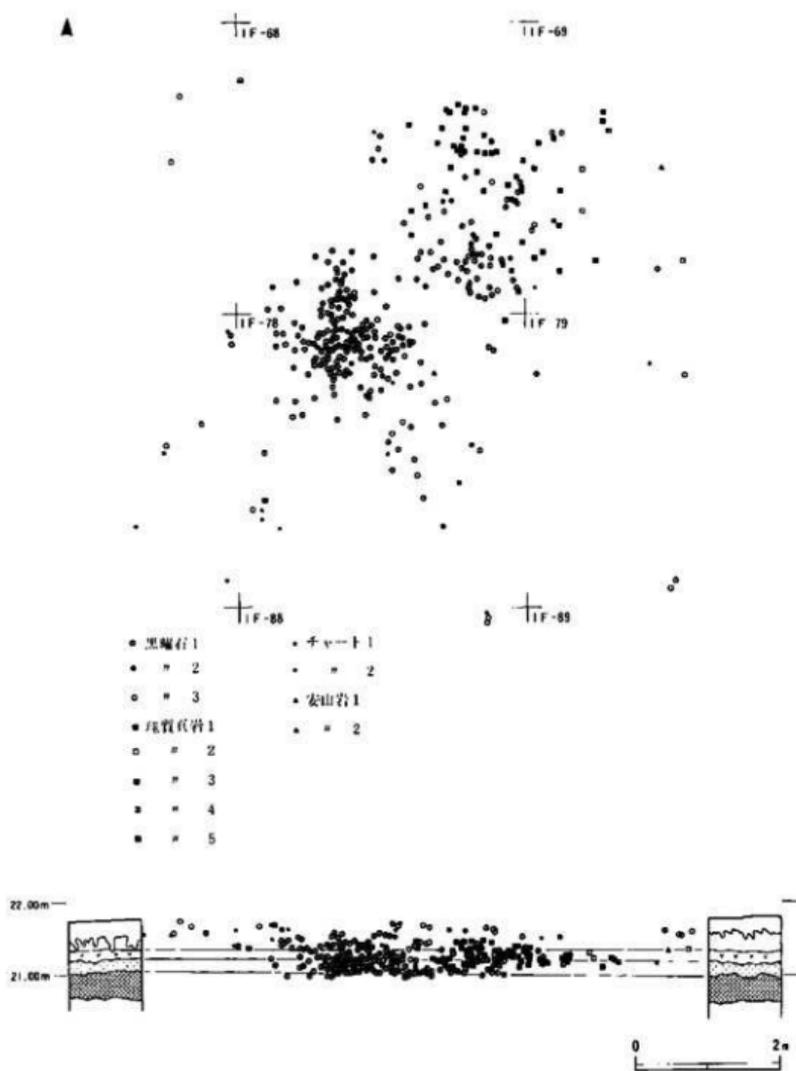
遺物 2、3、6は珪質頁岩製のナイフ形石器である。2は先端部のみが遺存する欠損品で、右側縁に調整を加え、刃部と考えられる左側縁には使用痕を認める。3は基部から中間部にかけて遺存する縦長剥片を素材にしたものである。基部の左側縁には調整を加えるが打痕は残されている。右側縁には中間部から先端に向かう調整がうかがえる。背面は頭部調整を施している。比較的小形品である。6は幅広の縦長剥片の直線的な右側縁を刃部とし、基部と左側縁に調整を加え、素材となる剥片は中央から右側縁にかけて調整で消失し打痕は除去される。左側縁のブランディングは鋸歯状で、先端部は右側縁からのわずかな調整が加わることで鋭く尖っている。

1、4、5、7は珪質頁岩製の使用痕を有する剥片である。1は縦長剥片の右側縁の主要剥離面側に微細剥離痕を認める。先端部は欠損する。4は先端部の欠損品である。5は縦長剥片の右側縁に使用痕を認める。7はかなり細長い縦長の剥片の先端部に使用痕がある。10、11は黒曜石製の使用痕を有する剥片である。10は小形な剥片の先端部に微細剥離痕がある。11は縦長剥片の中間部の切断剥片の頭部側に微細な剥離があり、先端側は切断面が残る台形様石器に似た製品である。

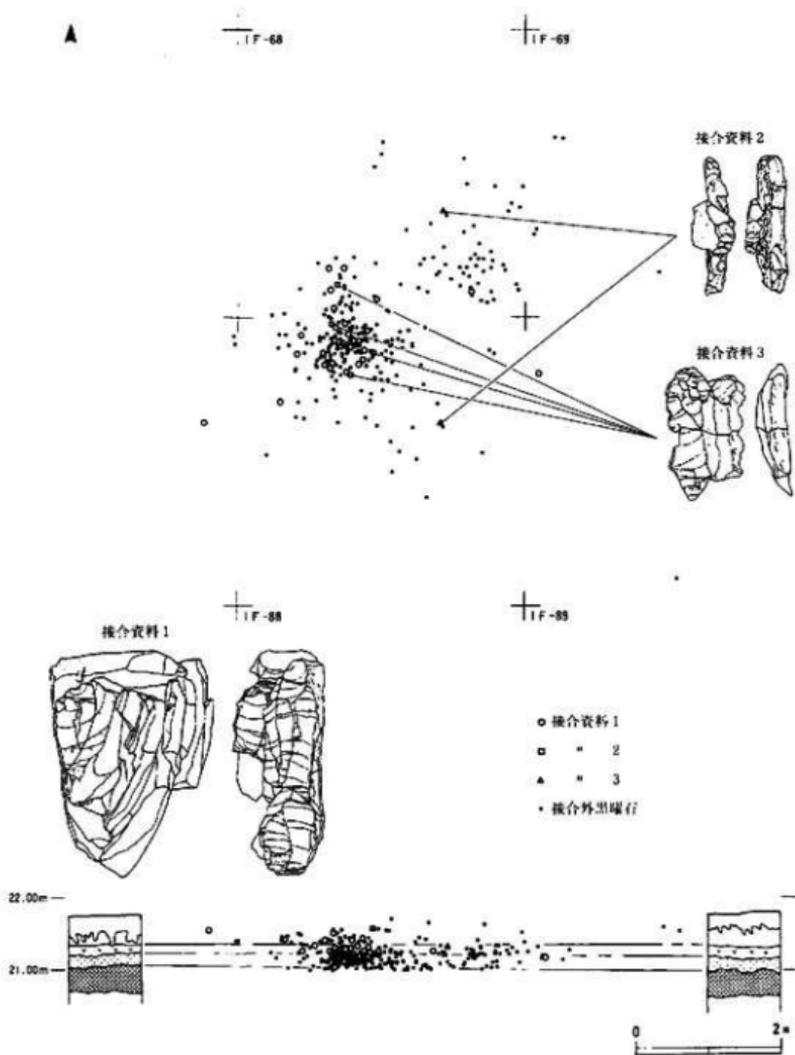
9は黒曜石製の二次加工を有する剥片で、先端部は欠損するが、基部側にブランディング状の調整を背面より行う。打痕は除去している。



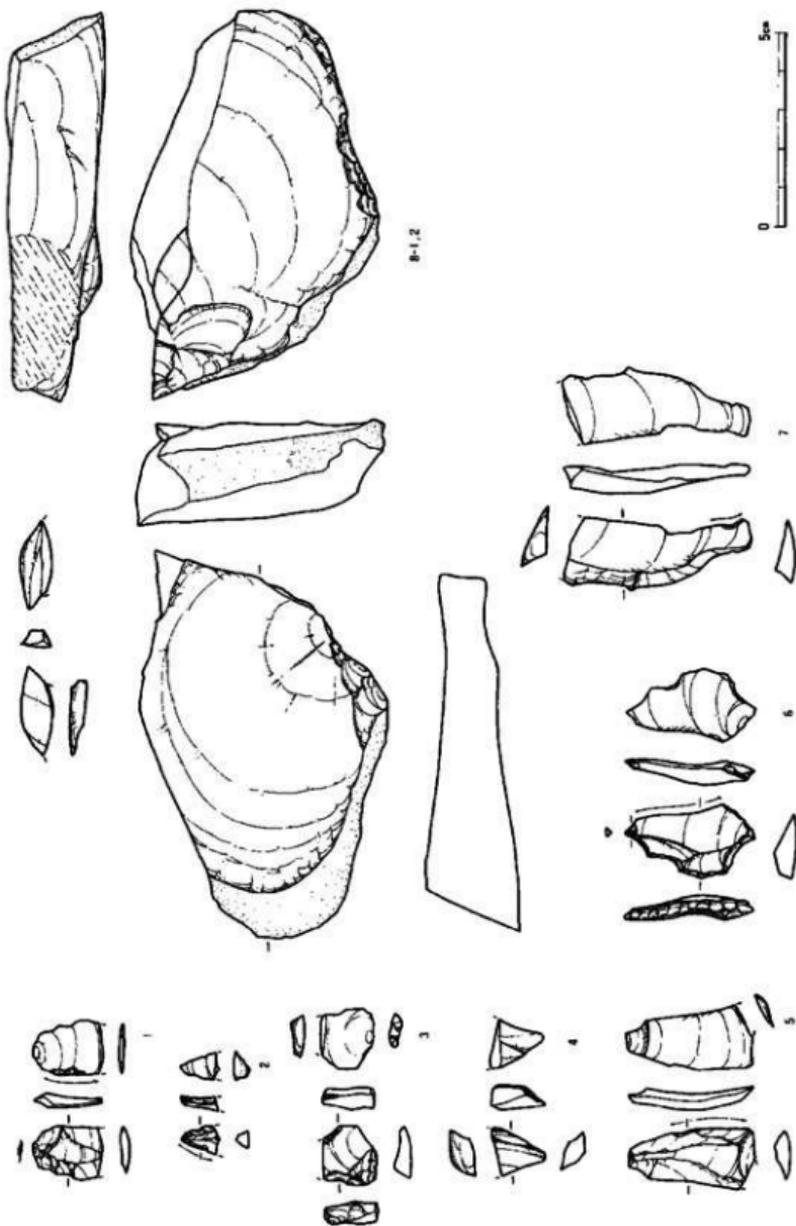
第47図 16ブロック器種別分布図



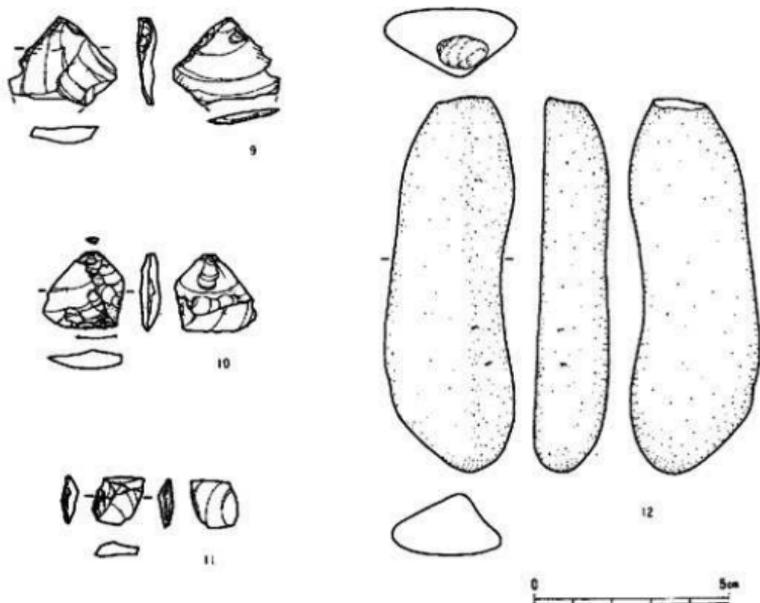
第48図 16ブロック母岩別分布図



第49図 16ブロック接合資料分布区



第50図 16アロック石器実測図(1)



第51図 16アロック石器実測図(2)

12は安山岩製の敲石で先端部に打撃痕を認める。

8は珪質頁岩製の石核と考えられる大形剥片で、大形母岩から輪切りにする形で剝離されたもので、扁平な盤状を示す。上部は切断されている。側辺には自然面が残り、周辺部には小剝離痕が認められる。切断面には切断の際にはじけた8-1が接合する。

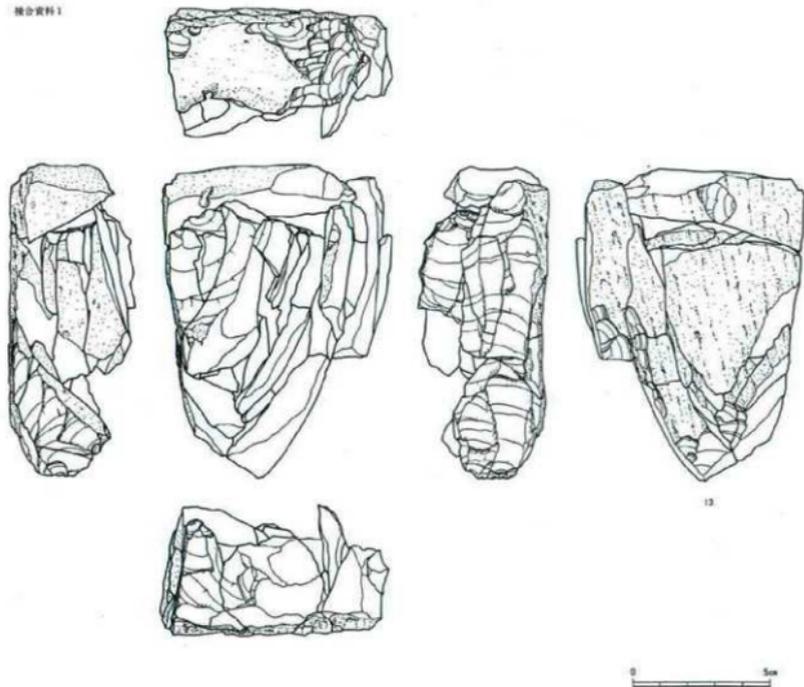
#### 接合資料

黒曜石1を母岩とする接合資料が2点と、黒曜石2を母岩とする接合資料が2点出土している。

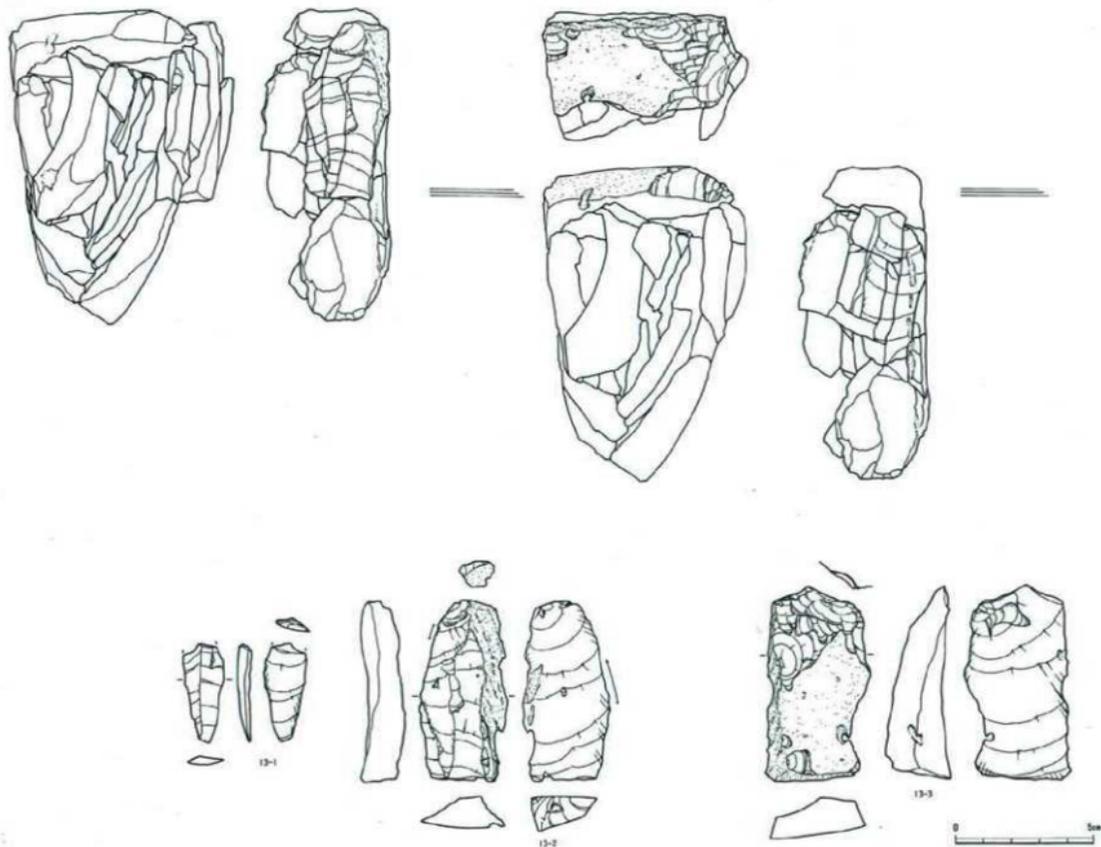
#### 接合資料1 (13)

黒曜石1を母岩とする33点が接合する。折面で接合する剥片があることから23点の剥片と1点の石核で構成される。同一母岩から剝離した接合資料3も含めると、剥片数は25点となる。現状での接合資料の大きさは、石核を正面に据えた場合（初期段階では石核の右側面方向が正面となり、順次打点が時計まわりに移動する）、長さ11.5cm、幅8.1cm、厚さ4.5cmを測る。接合資料3は右側縁で剝離したものと考えられることから、横幅は10cmを超えるものと推測できる。母岩の表皮は裏面では気泡、不純物を多く含む縦方向のしま状に起伏のある平坦面、左辺は磨

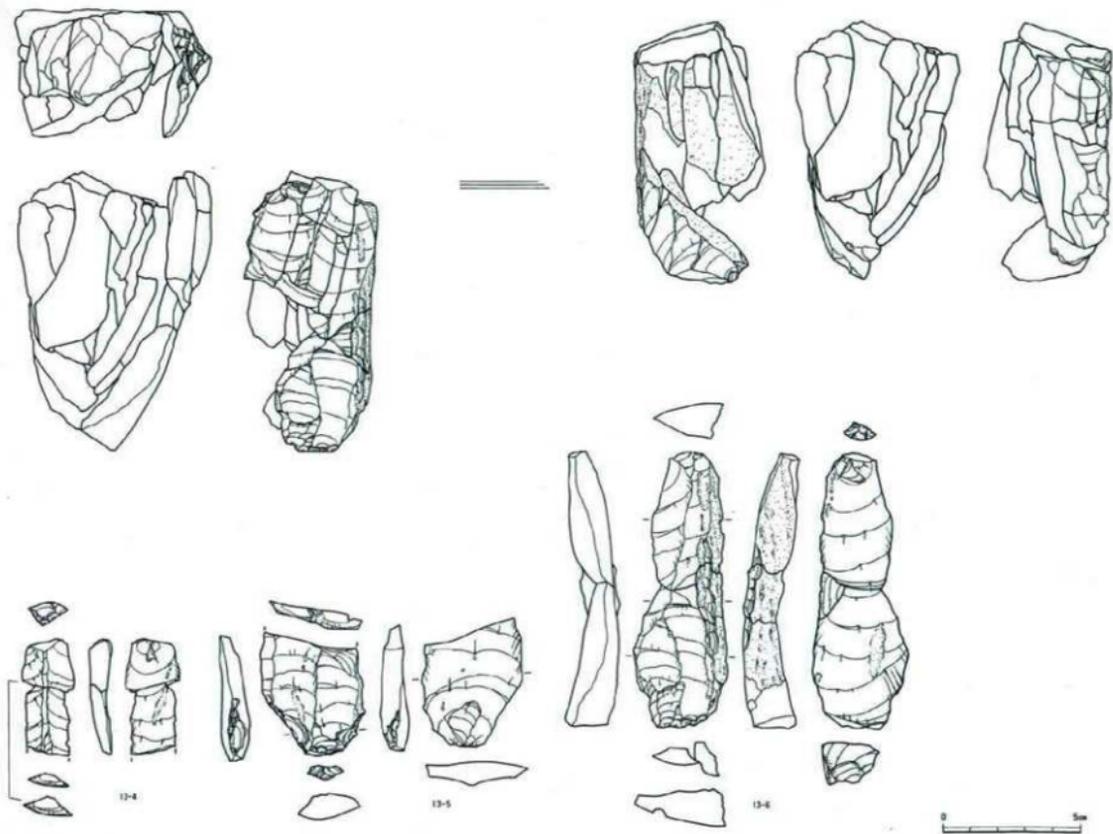
接合資料1



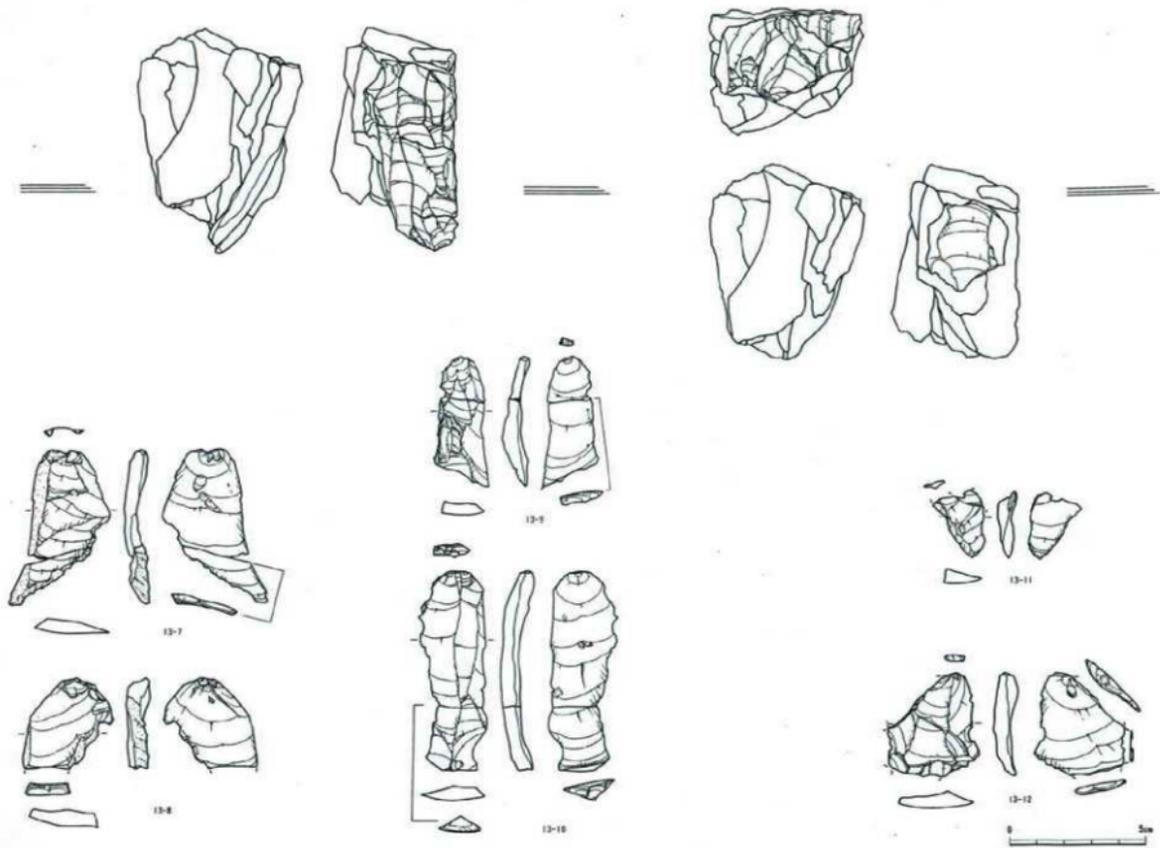
第52図 16707接合資料1実測図1)



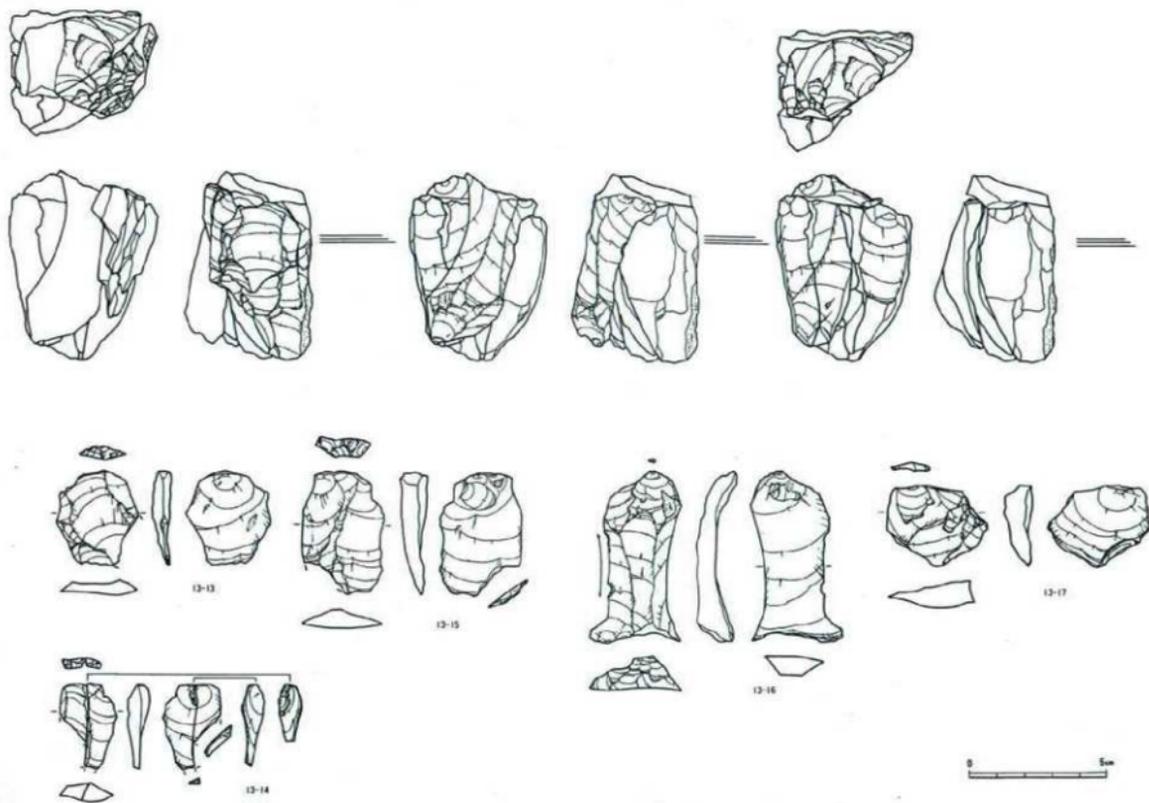
第53図 16アロック接合資料1実測図(2)



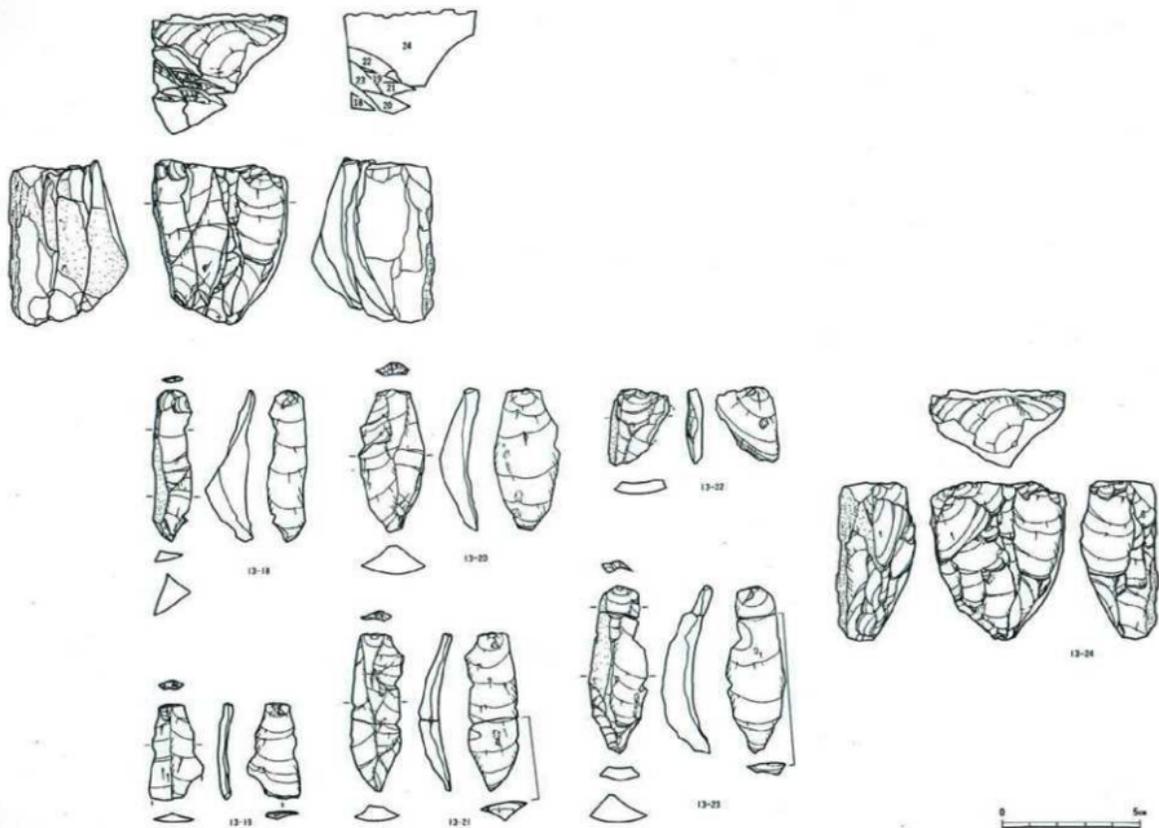
第54図 16ブロック接合資料1実測図3)



第55図 16ブロック統合資料1実測図4)



第56図 16ブロック接合資料1実測図5)



第57図 16アロック接合資料1実測図(6)

りガラス状の表皮におおわれた平坦面、上部はやや円みのある直線的な面、表面にも裏面と同じ部分が認められることから、母岩の形状は厚さ5cmほどのマッチ箱状を呈していたものと考えられる。

当該資料の剥片剥離工程は、接合資料3も含め、何段階かの剥離工程を経てから13-1の剥離を行っている。以下、剥離作業工程にしたがって石核にいたるまでの過程を復元していくこととする。

**前段階** 下位打面からの剥離面が13-1、2の背面に観察できる。右側辺には自然面をとどめているものと思われる大形の縦長剥片である。接合資料3はこの大形剥片剥離以前の表皮に近い部分の剥片接合資料である。

**1段階** 上位の自然面に簡単な調整を加え打面とし、3点の縦長剥片を搾取している。打点は順次左に移動し、13-1、2の左側縁にある剥離痕が最初の剥片と考えられる。ついで、13-1、2を剥離する。13-2は中位で折れているが、下端まで剥離がおよぶ可能性が高い。

**2段階** 下位の13-6の先端部平坦面および13-7の背面を打面とした剥片が2点剥離されていることが前者の背面構成から看取できる。打点は左に移動しており、さらに剥離作業を試みているが良好な剥片は得ていない。

**3段階** 上位の13-3の背面に調整を加えて打面をつくり、1点縦長の剥片を剥離している。左側面には自然面を残すものと考えられる。

**4段階** 右側面（現段階では正面）から13-3を剥離し、上位に打面をつくっている。作業面をつくるために何枚かの調整剥片を剥離するようで、この段階で剥離される13-4、5、6は打点の高さを減じ、13-4で打面再生剥片の主要剥離面から2mm、13-5は4mm、13-6は6mm下がっている。13-6は下端まで剥離がおよぶが、しの字状を呈す。さらに、打点を右に移動し、13-10の先端部に見られる2点が剥離される。正面にみえる幅広の縦長剥片もこの段階で剥離している。

**5段階** 下位の13-7を斜め後方に向けて剥離し、鋭角的な打面をつくっている。この段階の剥片は未検出のため、何点搾取されたか不明であるが、13-14の背面に認められる3点の剥離痕のうち、中央の下位からの剥離痕がこの段階でつくられたものであろう。

**6段階** 5段階の打面からさらに13-8を剥ぎ、同位置前方に打面を再生している。この段階での剥片数は3点であり、打点を右から左に移動している。

**7段階** 13-11、12を剥離して上位の打面を再生し、剥片を4点剥離する。打点は時計まわりに移動し、13-13、未検出の幅広い縦長剥片、13-14、さらにもどって未検出の剥片の打点の後方から13-15を剥離している。この段階の剥片は幅が広く、長さ

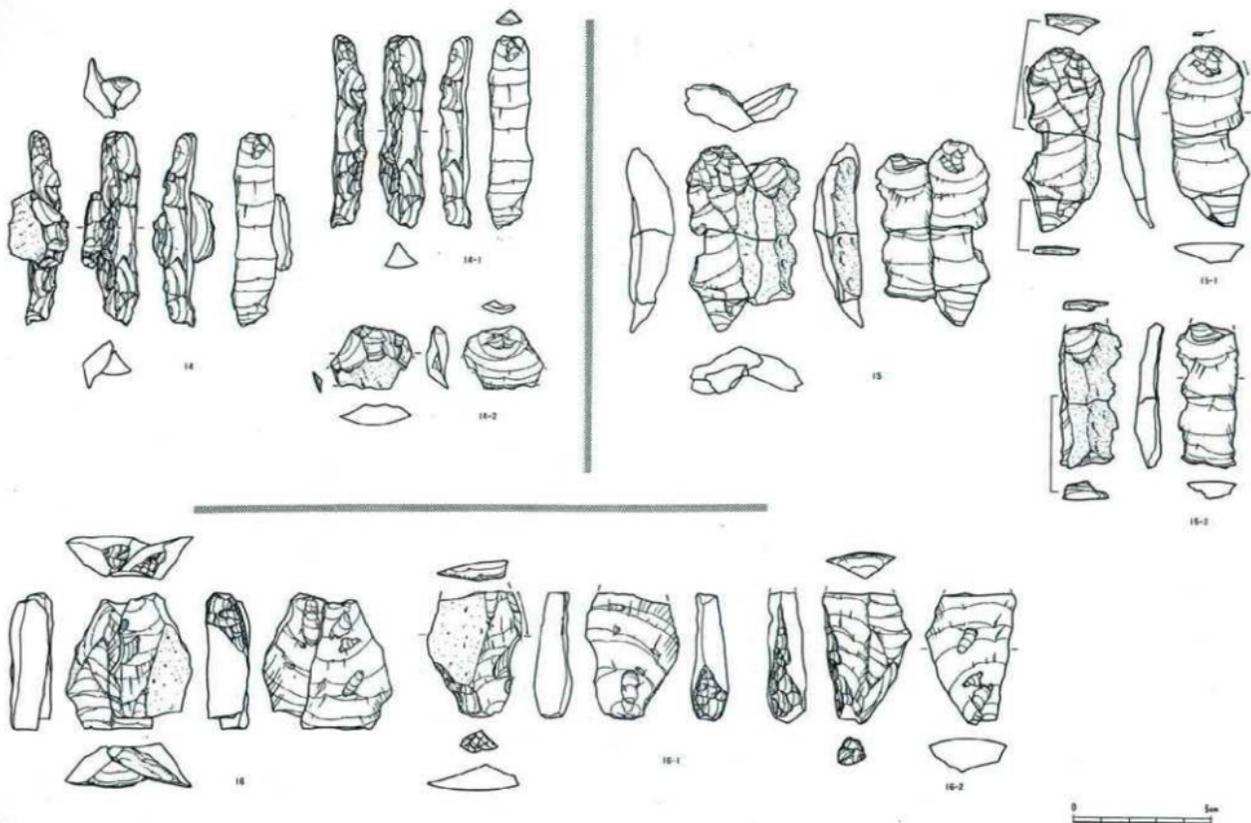
も短いものが多い。

8段階 6段階の打面からさらに打面再生剥片をとり、新たな打面から2点の剥片を搾取る。13-16を剥離し、さらに打点を右に移動して未検出の縦長剥片を得ている。

9段階 上位の13-17を剥離して打面を作出し、打点をジグザグに移動しながら一気に8点の剥片を剥離している。接合したものは13-18から23までの6点で、剥離の順は18→未検出品→20→23か未検出品→21→19→22である。しの字状の剥片からしだいに小形や短い剥片しか剥離できなくなり、13-24の石核が残る。

#### 各石器の説明

13-1は中間部で折損する幅の狭い縦長剥片である。13-2は右側縁に自然面を残す厚手の大形の縦長剥片の左側縁に微細剥離が認められる使用痕を有する剥片である。中間部で折損するが、接合面の観察から全長11cmほどの長さをもっているものと考えられる。13-3は打面作出を目的に剥離された縦長剥片で、背面には自然面を残した長方形の大形品である。背面上半部には打面を整えるための剥離が頭部および左側縁から行われるが、打面としては使用していない。きわめて分厚い剥片である。13-4は細身の縦長剥片で先端部は折損している。頭部と中間部は折面で接合する。13-5は幅広の縦長剥片を素材にしたナイフ形石器である。中間部から先端部にかけて欠損する。基部側の両側縁には調整を加え、頭部調整も認められる。打痕は残っている。右側縁には自然面をわずかに認める。13-6は若干しの字状を呈する縦長剥片で、中間部で剥離方向が分散し、3点に分離し小剥片を弾いている。先端部は平坦面をつくるが、ここは下位方向からの打面として使用している。13-7は打面再生のための縦長剥片で、先端部は折面で接合する。左側縁と中間部以下の右側縁には自然面が残る。13-8も打面再生のための縦長剥片で先端部は欠損する。両側縁には自然面が残り、形状は13-7と同じである。13-9は折面で接合する縦長剥片である。13-10は先端部寄りの折面で接合する縦長剥片で、先端部には上位方向からの打面部分が認められる。細身の長い剥片である。13-11、12は上位打面形成を目的に剥離した打面再生のための剥片である。後者の左側縁および先端部は欠損している。背面には多方向からの剥離面が観察できる。13-13は比較的幅広の縦長剥片で、先端部側の右側縁が欠損する。13-14は中央縦方向の折面で接合する縦長剥片で、左側の剥片の折面には調整状の剥離が加えられる。13-15は幅広の縦長剥片、13-16は左側縁に微細剥離を認める使用痕を有する剥片で、若干しの字状を呈している。先端部は平坦で、上位からの打面として下端左側の剥離痕が剥離されている。13-17は打面再生のための幅広の剥片である。背面には打面調整をした剥離痕がところどころ認められる。13-18～23は縦長剥片で、しの字状の剥片も多くみられる。13-22は幅広の小剥片で、この石核から行われた剥片剥離工程の最終段階の剥片である。13-24は石核で上部は平坦な打面部を形成し、下方に向ってしだいにすぼまる形態で、裏面には自然面を残す。上部の打面からは、時計まわりに打点を移動しながら剥離した



第58図 16ブロック接合資料2・3・4実測図

7点の縦長の剥離痕と2点の幅広の剥離痕が観察でき、最終剥離は幅広の短い剥片である。下方からの剥離痕は両側面に3点分が識別できる。

#### 接合資料3 (15)

接合資料1の初期段階の剥片接合資料で、表皮から浅い部分の縦長剥片である。右側縁の表皮は接合資料1の裏面にあたる。出土地点は前者の分布範囲内である。下方からの剥離工程を経たのち、上位に打面を形成し本資料の剥離作業にあっている。本資料の剥離以前に上部打面からは2～3点の表皮をもつ縦長剥片が剥離されているものと考えられる。

15-1は中間と先端の2か所の折面で接合する縦長剥片で、右側縁に磨りガラス状の自然面をもつ。先端部と頭部側の左側縁に微細剥離を認める使用痕を有する剥片である。15-2は中間の折面で接合する縦長剥片で、中央には磨りガラス状の、右側縁側には接合資料1の裏面と同様のしま状の自然面がある。頭部側は折損するが、15-1と同じ高さの打面から剥離されたものと考えられる。

#### 接合資料2 (14)

黒曜石2を母岩とする剥片2点の接合資料で、左右両側縁の打面が角錐状を呈す剥片と、その打面から剥離された剥片が接合している。

14-1はスポール状の縦長剥片で、背面の両側縁に打面を形成している。断面は鋭角な三角形を呈す。14-2は幅広の剥片で先端側に表皮をとどめている。打面は前者の右側縁側の剥離面を作業面としている。

#### 接合資料4 (16)

黒曜石2を母岩とする表皮に近い部分の縦長剥片を素材にしたナイフ形石器が2点接合している。16-1は表皮を背面にとどめ、基部側の左側縁に調整を加えている。ブランティングは主要剥離面側からほぼ垂直に施され、直線的に仕上げている。右側縁には使用痕が認められ、刃部と考えられる。先端部は破損している。16-2も基部側から中間部にかけての左側縁に調整を加えている。ブランティングは直線的で角度も直角に近い。左側縁の調整により打面の半分は除去している。先端部は欠損している。

#### 特徴

石器の接合例や器種別分布から、本ブロックが石器製作を中心として営まれていたことはまちがいない。また、それぞれの石材分布から黒曜石の母岩を加工した地点と、珪質頁岩を加工した地点が多少ずれていることがわかる。また、小破片の垂直分布が全体に下位に集中することは興味深い。先にも触れたように、遺物の出土状況からなんらかの遺構が存在したことも考えられる。

接合資料1は石器製作工程を把握するうえで非常に良質な資料となった。打面を180°転回して上下より交互に剥片を剥離している。上位打面からの縦長剥片剥離を主眼においているようで、

打撃方向を垂直に加えられるように、打面再生剥片の剥離はほぼ水平な面をつくるように剥離作業が行われている。下位打面は上位打面から剥離される剥片の先端部が内側に弯曲するため、その弯曲にそって形成され、打面は上位打面と平行にはならず、斜めの打面が形成されている。剥離した剥片はほとんどが縦長で、縦長の剥片が剥離できなくなった段階で、剥片剥離工程が終了している。東京都鈴木遺跡VI層文化の接合石器の技法に類似した剥片剥離である。

16ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ型石器	擡器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	敲石	剥片	合計
黒曜石	1	1				2	5	65	211	1			285
"	2	2						8	14				24
"	3							5	22				27
珪質頁岩	1	3					4	11	33				51
"	2								3	1			4
"	3							1					1
"	4							1					1
"	5							1					1
チャート	1							2	6				8
"	2							2	4				6
安山岩	1										1		1
"	2								1				1
不明(黒曜石)									32				32
合計	6					2	9	96	326	2	1		442

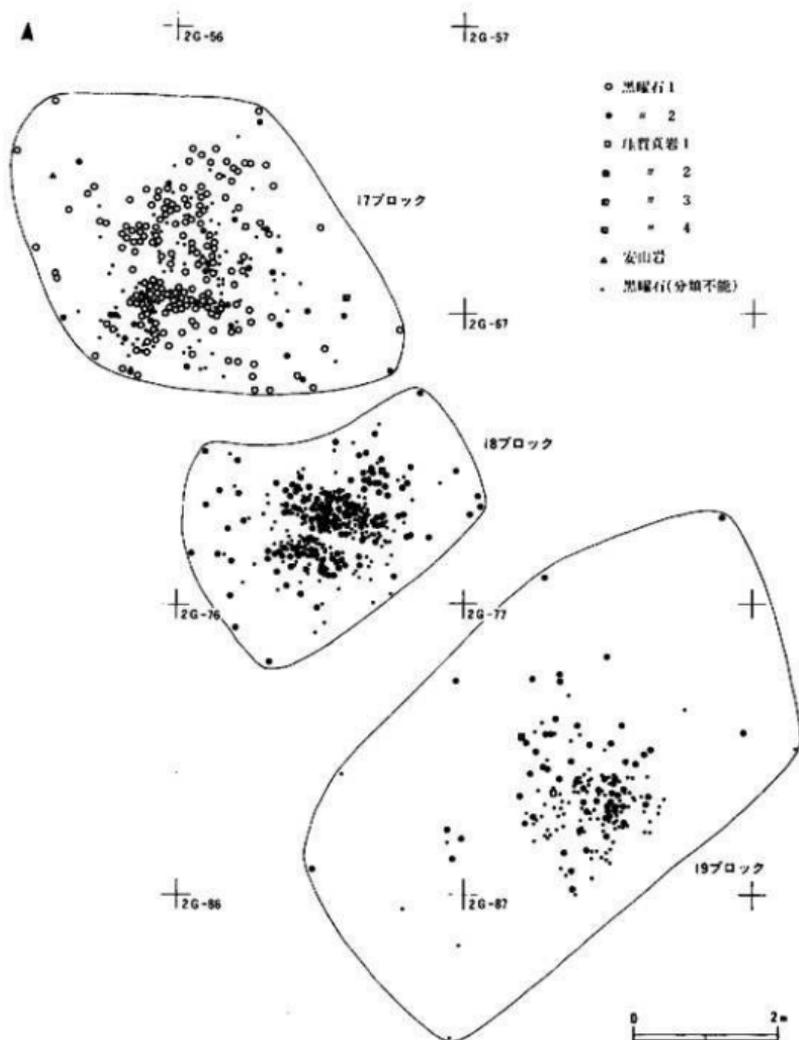
16ブロック石器属性表(1)

No	グリッド番号	器物番号	検出番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
1	1F-68	0010	1	U・F	珪質頁岩	17.6×13.2×3.0	0.68	L	T	I・III	B	
2	"	0095	2	ナイフ	"	7.2×8.7×3.5	0.16	N	-	III	H	
3	1F-69	0006	3	ナイフ	"	13.4×13.6×4.0	0.98	H(3)	T	I	M	
4	1F-68	0141	4	U・F	"	12.0×11.9×5.5	0.64	H(3)	-	I	M	
5	"	0046	5	U・F	"	31.9×15.6×3.5	1.82	N	-	I・III・IV	H・B	
6	1F-78	0066	6	ナイフ	"	33.0×16.5×5.2	2.45	N	-	I・II	-	
7	1F-69	0015	7	U・F	"	48.6×17.1×6.0	3.75	N	-	I・II・III	H	
8-1	"	0021	8-1	剥片	"	7.6×22.6×4.3	0.71	-	-	-	-	
-2	"	0011	-2	石核	"	61.4×104.2×25.2	161.40					
9	1F-78	0016	9	R・F	黒曜石	20.7×27.0×3.8	1.71	N	-	II	B	
10	"	0009	10	U・F	"	19.5×21.8×4.4	1.57	H(1)	T	N	I	-
11	1F-69	0002	11	U・F	"	10.8×11.9×3.6	0.49	N	-	I・IV	-	
12	1F-78	0070	12	敲石	安山岩	95.7×31.9×8.3	74.28					
13-1	"	0208	13-1	剥片	黒曜石	36.6×14.6×3.8	1.74	N	-	I・III	H	接合資料1
-2	1F-68	0102	-2	U・F	"	65.8×31.6×13.3	28.59	H(1)	-	N	I・III	-
-3	1F-78	0185	-3	剥片	"	70.9×37.8×24.6	52.48	H(1)	T	N	I・IV	-
-4	1F-78	0133	-4	"	"	18.8×20.0×8.1	2.52	H(2)	D	I	H	"
"	"	0106	"	"	"	26.7×17.7×6.4	2.73	-	-	I・III	H・B	"

-5	1F-68	0101	-5	ナイフ	#	1	50.1×38.0×10.2	14.23	H(3)	T	N	I	M	#	
-6	1F-68	0108	-6	剥片	#	1	53.0×23.5×10.4	9.65	H(1)	D	N	I	M	#	
		0081			#	1	22.7×15.4×6.4	1.79	N	-	N	-	-	#	
	1F-78	0161			#	1	32.5×34.0×15.0	27.43	-	-	N	I・III	M	#	
-7		0049	-7		#	1	11.8×36.6×4.1	1.43	N	-	N	I	H	#	
		0218			#	1	38.6×32.5×7.1	6.28	H(1)	T	N	I	B	#	
-8		0206	-8		#	1	33.0×32.2×8.0	7.43	N	T	N	I	B	#	
-9	1F-77	0004	-9	剥片	黒曜石	1	16.7×14.7×3.6	1.26	H(2)	-	I	M	接合資料1		
	1F-68	0081			#		32.2×18.8×7.2	3.64	N	-	N	I・III	H	#	
-10	1F-78	0060	-10		#		50.5×24.6×9.2	9.04	H(3)	D・T	I・III	B	#		
		0096			#		24.4×21.9×7.4	3.11	N	-	I・III	M	#		
-11		0029	-11		#		24.4×17.1×5.2	1.39	N	-	N	I	M・R	#	
-12		0026	12		#		39.7×34.6×7.2	6.32	H(1)	T	N	I・IV	L	#	
-13	1F-68	0115	-13		#		34.5×29.0×6.1	4.87	H(1)	D	I・III	B	#		
-14	1F-68	0116	-14		#		30.4×11.6×7.6	1.83	H(2)	-	I	L・B	#		
	1F-79	0005			#		20.2×12.3×11.6	1.50	H(2)	D	I・III	R・M	#		
-15	1F-78	0059	-15		#		46.4×31.7×8.8	9.25	H(1)	D	I・III	B	#		
-16	3号方形		-16	J・F	#		63.0×33.1×13.1	16.19	H(1)	T	I・III	-	#		
-17	1F-78	0023	-17	剥片	#		30.7×35.9×8.9	8.25	H(1)	D	I・II	-	#		
-18		0217	-18		#		56.2×10.9×15.1	6.27	N	D	N	I・III	-	#	
-19		0039	-19		#		35.3×19.6×4.8	2.22	H(3)	D・T	I	B	#		
-20	1F-68	0108	-20		#		53.0×23.5×10.4	9.65	H(1)	D	I・III	-	#		
-21	1F-78	0183	-21		#		33.8×17.3×6.8	3.42	H(1)	D	I	M	#		
		0102			#		26.4×17.6×6.7	2.32	N	-	I・III	M	#		
-22	不明		-22	剥片	黒曜石		28.1×22.4×6.8	2.85	N	T	N	I	R	#	
-23	1F-78	0036	-23		#		15.4×11.7×2.7	0.42	H(3)	-	N	I	T	#	
		0055			#		53.1×21.6×16.6	10.33	N	-	N	I・III・IV	H	#	
-24		0168	-24	石槌	#		56.9×49.5×27.7	77.68	-	-	-	-	-	#	
14-1		0068	14-1	剥片	#		71.7×15.5×11.3	10.17	H(1)	-	II・IV	-	接合資料2		
-2	1F-68	0023	-2		#		6.5×8.6×2.7	0.10	H(1)	T	N	I	L・R	#	
15-1	1F-78	0097	15-1	U・F	#		36.1×30.5×8.5	7.35	H(1)	T	N	I	M	接合資料3	
		0118		剥片	#		27.2×25.5×6.6	5.20	N	-	N	I・III	M・B	#	
	1F-68	0060		R・F	黒曜石	1	12.7×16.6×2.6	0.58	N	-	I・III	B	#		
15-2		0107	-2	剥片	#		27.9×21.6×5.7	4.15	N	-	N	I	H・M	#	
	1F-78	0047			#		28.1×20.3×8.3	4.48	N	-	N	I・III	M	#	
16-1	3号方形		16-1	ナイフ	黒曜石	1	45.3×34.5×13.0	15.44	H(2)	D	N	I・II・III	B	接合資料4	
-2			-2	ナイフ	#		47.2×32.4×13.4	18.05	H(4)	-	I・II・III	B	#		

#### 17～19ブロック (第59～91図、図版8・16～21)

調査区東側の2G-55～87区にかけて17・18・19ブロックが近接して直線的に位置し、ともに黒曜石を主体としたブロックで同一母岩を共有していることから、同時に存在していたことが想定できる。各ブロックの出土石器のうち黒曜石の占める割合は、17ブロックが98%、18ブロックが99%、19ブロックが98%である。それぞれの中心からの距離は17・18ブロック間が4m、18・19ブロック間が5mである。出土層位はともにVI層からVII層にかけてであり、文化層はおそらくVI層下部からVII層上部になるものと考えられる。



第59図 17・18・19ブロック母岩別分布図

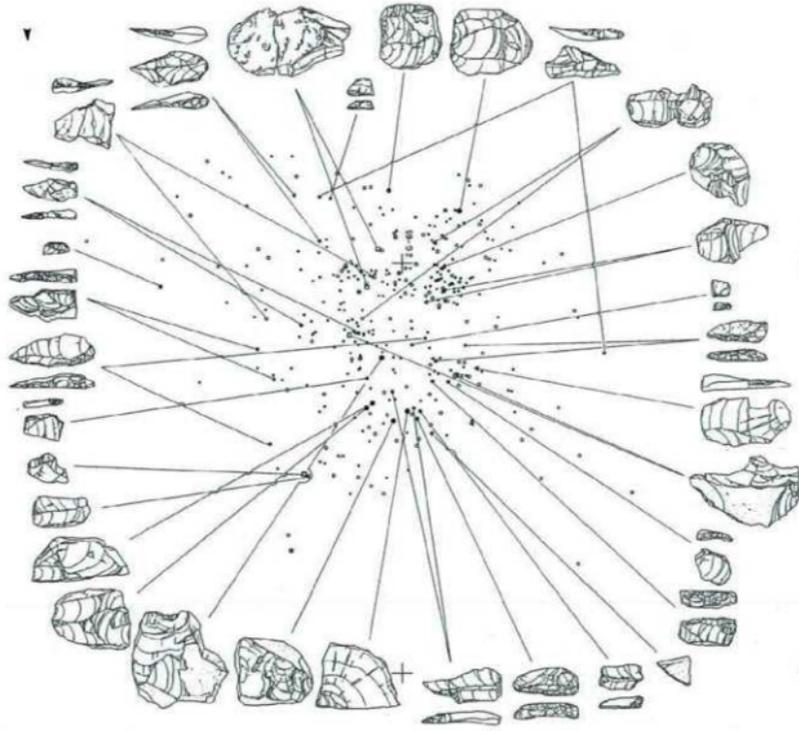
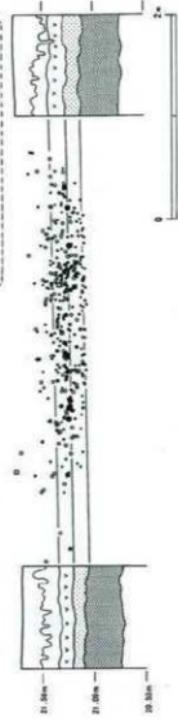
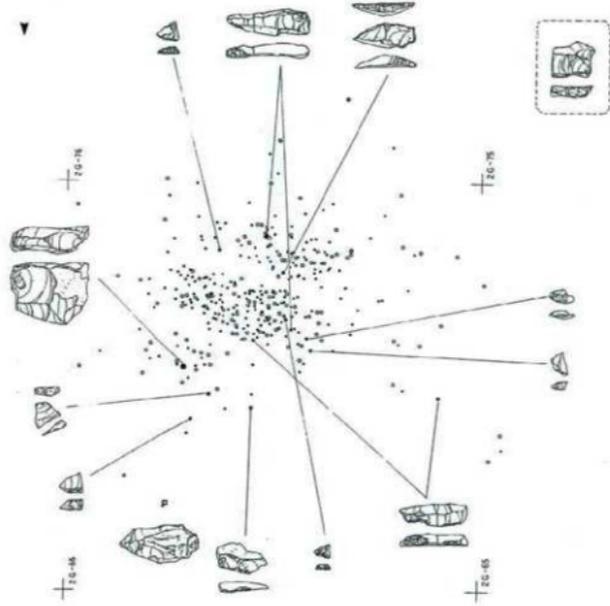


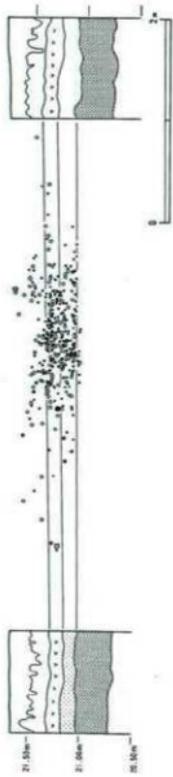
Fig. 43    \*ナイフ    \*フレイク  
 \*石部標記    \*チップ  
 REF    \*37  
 AUF



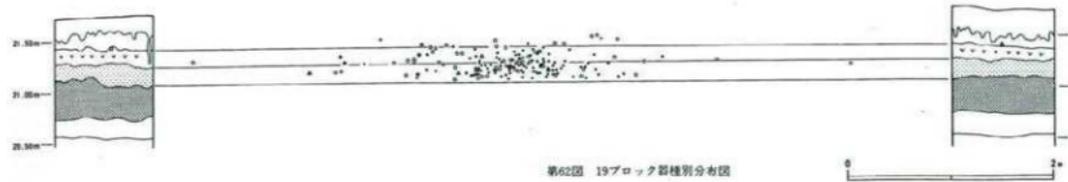
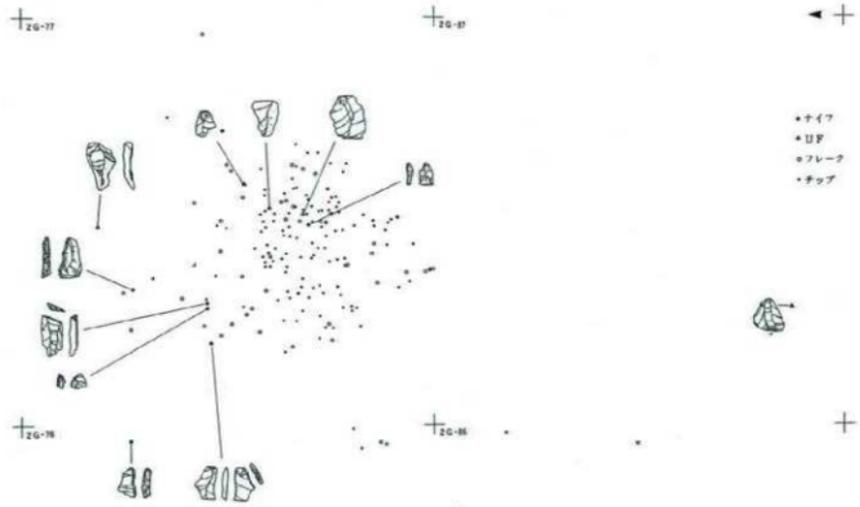
第66図 177ロープ層横断分布図



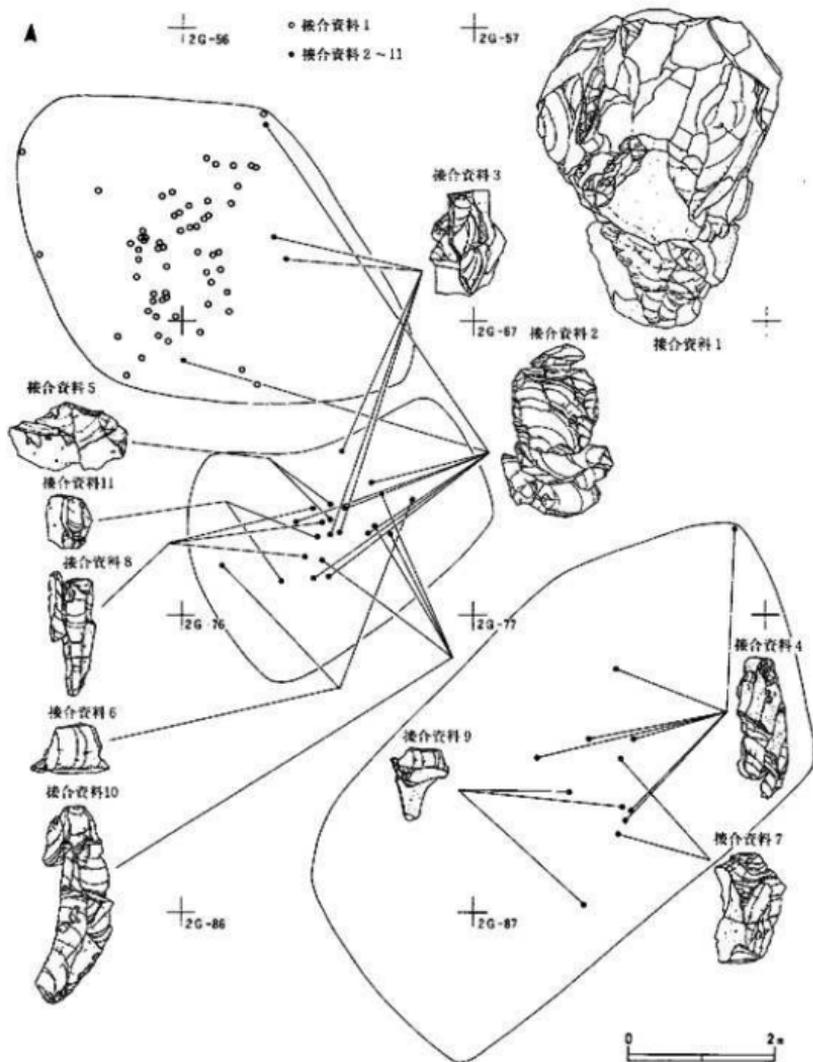
- 447
- 37
- RPF
- ▲ 片形塊(片)
- △ 7レーク
- ◇ ナーフ
- 分選後



第61図 1870年代の地層分佈図

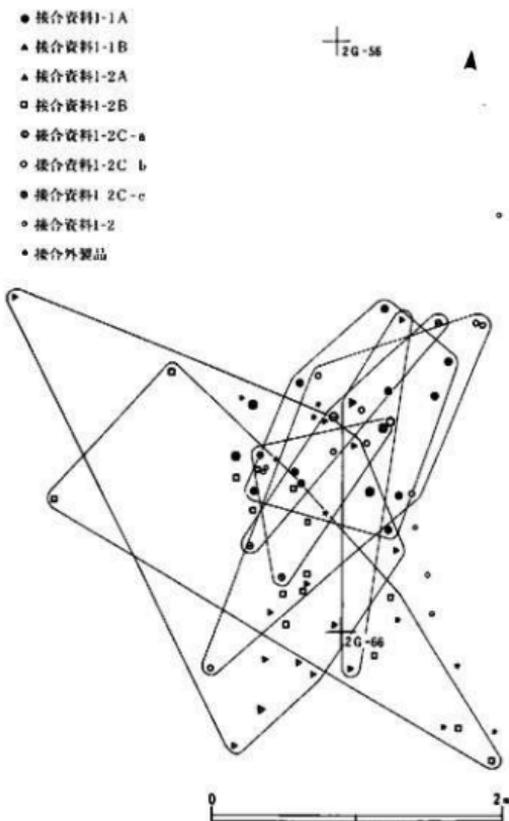


第62図 19ブロック群種別分布図



第63図 17・18・19ブロック接合資料分布図

17ブロック状況 2G-55・56・65・66区におよぶ南北4m、東西5.5mの範囲に442点の遺物を検出した。そのうちのほとんどは黒曜石1が主体的で、黒曜石2が2割程度である。その他には珪質頁岩が5点、安山岩が1点含まれるだけである。黒曜石2は18ブロック側に散在している。出土層位はIV層から少量ずつ増加し、VII層の最下面にまでいたる。ほぼレンズ状の垂直分布を示し、VI層下部からVII層上部にピークがある。なお、耕作のトレンチャーが2条にわたり文化層を掘り抜いているため遺物分布に空白部が存在する。器種構成は、ナイフ形石器22点、台形椀石器1点、二次加工を有する割片5点、使用痕を有する割片7点、割片102点、碎片298点、分割礫片6点、石核7点である。



第64図 17ブロック接合資料1石核別分布図

18ブロック状況 2G-56・66・76区におよぶ南北4.0m、東西4.1mの範囲に465点の遺物を検出した。ほとんどが黒曜石2で珪質頁岩が3点混入するだけである。出土層位はIV層からIX層最上面にまでおよぶレンズ状の垂直分布を示すが、ピークはVI層下部からVII層上部にかけてである。器種構成はナイフ形石器12点、台形様石器1点、二次加工を有する剥片1点、使用痕を有する剥片2点、剥片132点、碎片314点、分割礫片2点、石核1点である。

19ブロック状況 2G-67・76・77・78・86・87区におよぶ南北7.5m、東西6.8mの範囲に188点の石器を検出した。2G-77区の径2mに遺物分布の中心があり、外方にも遺物が散在しているためブロックの範囲を大きくしている。石材は18ブロックと同じように黒曜石2がほとんどで、珪質頁岩を3点混入するだけである。出土層位もやはりVI層下部からVII層上部にかけてピークがある。器種構成は、ナイフ形石器7点、使用痕を有する剥片5点、剥片57点、碎片119点である。

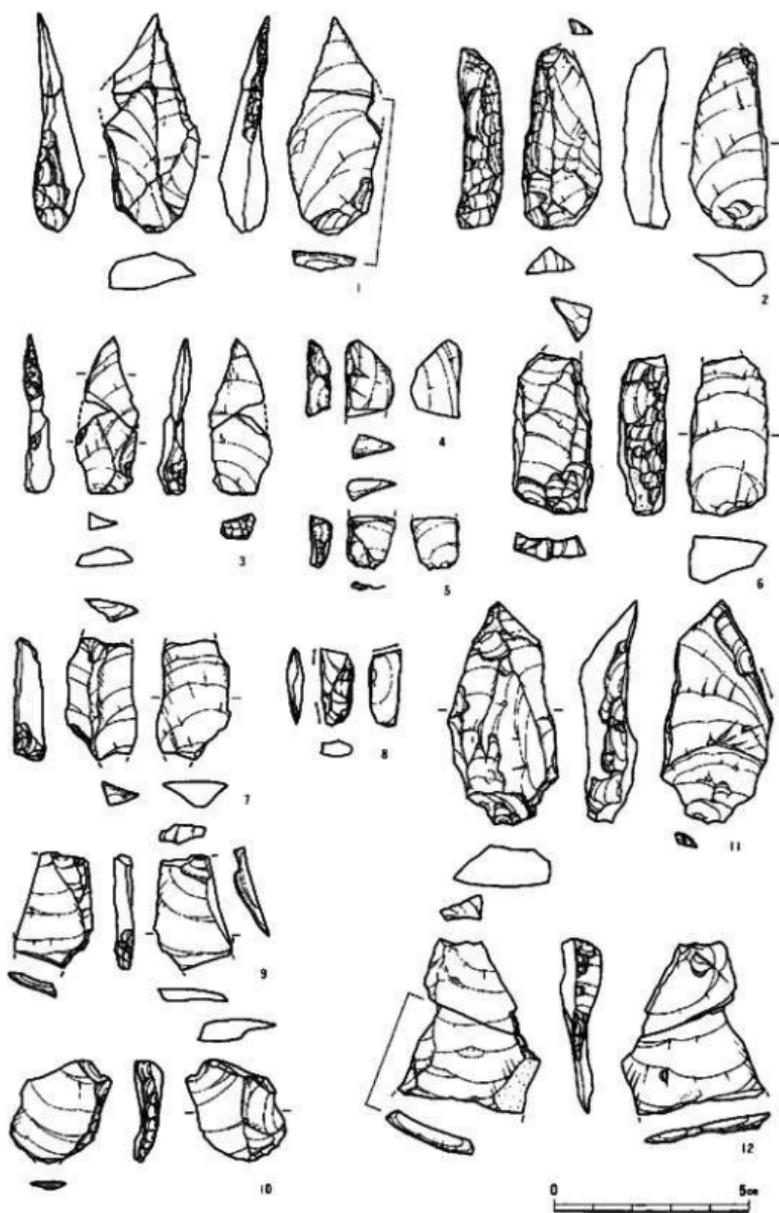
#### 接合資料の状況

11点におよぶ接合資料が検出できたが、そのうち黒曜石1を母岩とするもの1資料、黒曜石2を母岩とするもの10資料である。各ブロックの接合資料内訳は、17ブロックが黒曜石1を母岩とする接合資料1、18ブロックは接合資料5・6・8・10・11、19ブロックは接合資料4・7・9で、接合資料2・3は17・18ブロック間で接合している。接合資料1については、接合破片点数が多く、ほぼ原型を復元できるほどの状態にいたっている。その結果、1母岩を七つに分割して石核とし剥片剝離作業を行っていること、二か所の作業地点で行われていることが判明した。

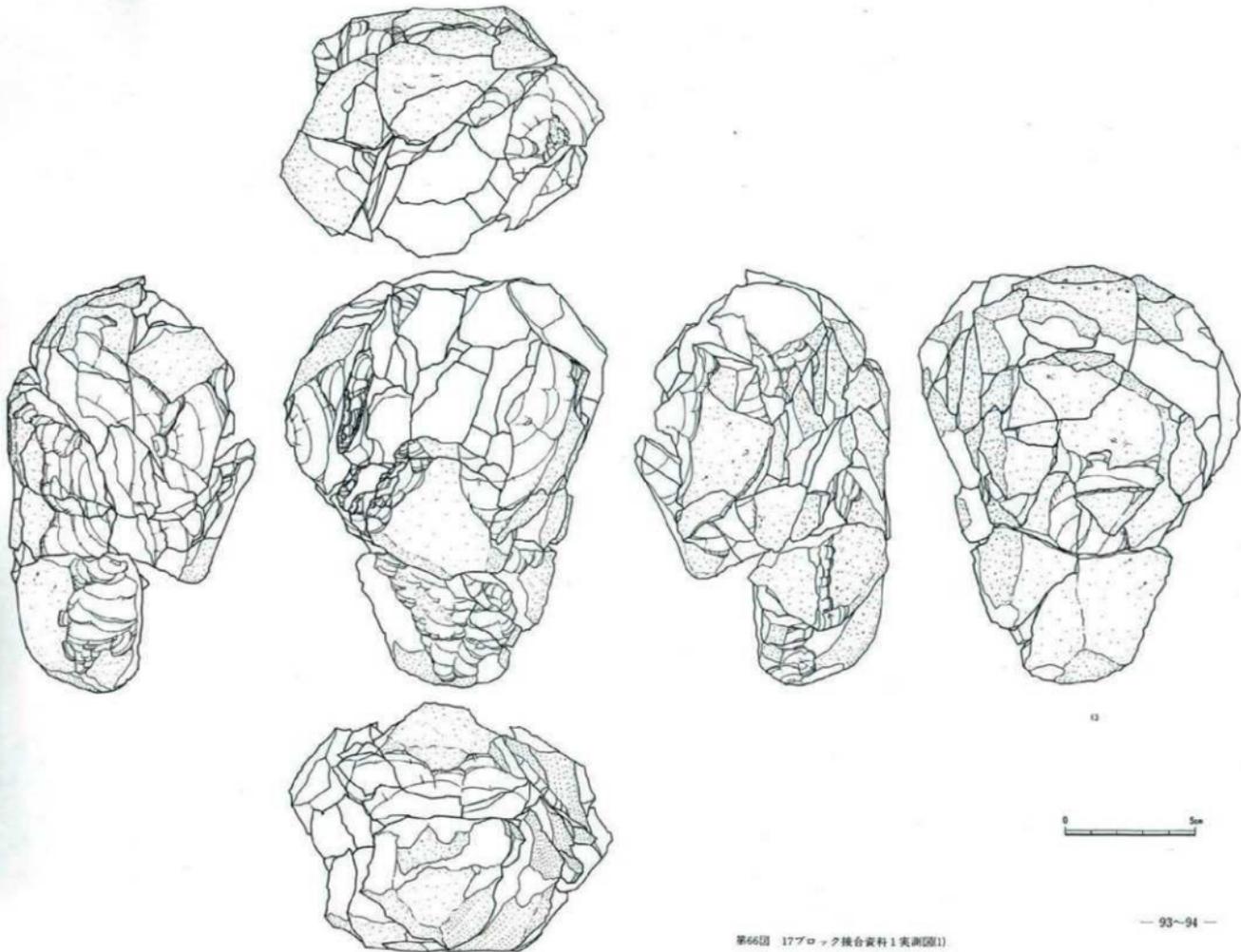
17ブロック遺物 1～7、9は黒曜石製のナイフ形石器で、9以外は黒曜石1を母岩としている。1、3は縦長剥片を素材に両側縁加工のナイフ形石器であるが、基部側の片側縁と対面する先端部側の片側縁に調整を加えている。打瘤は基部側の調整で除去している。7、9は欠損品であるが、同様の手法によるものと考えられる。2、6は片側縁に直線的な加工を施すもので、ブランディングは直角に近く、剥片の形状変更が大きい。また、2は背面からの調整が主であるのに対し、6は主要剝離面方向からである。ともに打面は残している。4は横長剥片を素材にしたもので、背面から調整を加えている。5は基部側が遺存する小形品で、左側縁に調整を加えている。

8は珪質頁岩製の小形の台形様石器で、縦長剥片の頭部側を切断し、切断面に微細な調整を、打面側には頭部調整状の加工を加えている。刃部には微細剝離痕を認める。

10～12は二次加工を有する剥片である。10は幅広の縦長剥片の左側縁に調整を加えるもので、打瘤は除去している。調整は背面から主要剝離面に向かって鋭角的に行なわれる。11は縦長剥片の右側縁に大雑把な剝離を加えたもので、左側縁の中央部には微細剝離痕が認められる。比較的厚手の剥片である。ナイフ形石器に近い形態である。12は幅広の縦長剥片の右側縁の切断面



第65図 17ブロック石器実測図



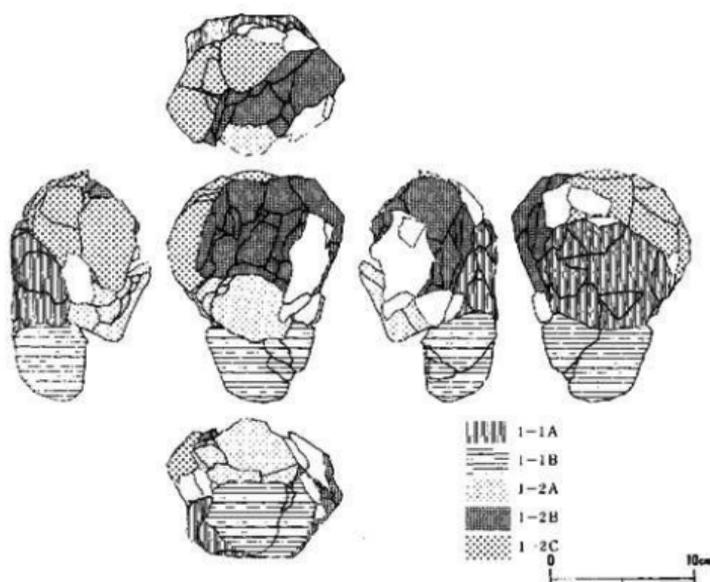
に調整を加えたもので、先端部は折損する。また、背面には自然面をとどめている。

#### 接合資料

黒曜石1を母岩とする接合資料が1資料、18ブロック出土品と接合するものが2資料出土している。後者のうち接合資料2については、石核が本ブロックで出土していることから17ブロックで扱い、接合資料2については剥離工程の後半段階が18ブロックで行なわれることから18ブロックで説明することとする。

#### 接合資料1 (13)

黒曜石1を母岩とする71点が接合する。折面で接合するものもあることから、剥片48点、石核6点で構成する。長さ16.3cm、幅12.4cm、9.8cmを計測し、接合復元により洋梨形を呈す母岩の原型を知り得た。表皮は風化の進んだ磨りガラス状の面と、リングが観察できる風化した剥離面とがあり、前者は平坦面をつくっている。石質は黄白色の気泡を多量に含み、斑文状に黄白色の不透明な縞が認められる。全体に透明度がなく黄色にくすんだ黒色を呈している。母岩は剥片剥離を行なうにあたり上下に二分され、さらに七つの石核に分割している。二分されたうち上方を接合資料1-2、下方を1-1とした。



第67図 17ブロック接合資料1分割模式図

母岩分割工程1 上下の分割は母岩の中心に帯状に含まれる不純物帯にそって行われ（裏面中央からの打撃で、不純物帯に力が分散した結果、上下に分割されたものと考えられ、分離面の周縁部はその爆発的な力の分散のため、細かくはじけた小剥片が剥離している。）、下部の不純物を多く含む部分と比較的良質な上部とに分かれる。この段階で、上下の分割と下部（接合資料1-1）の分割が同時になされ、三分割されることとなる。

母岩分割工程2 表皮部分を若干剥離し石核調整をしたのち、上部（接合資料1-2）の斜め上部から打撃を加え1-2A・2Bと1-2Cに二分割している。

母岩分割工程3 工程2で分割した1-2Aと2Bを中央から下方に向かって打撃を加え分割する。また、楕円形の1-2Cは扇状に3分割され、2Ca・2Cb・2Ccとなる。

状況 17ブロックの中央部の広範囲に分布する各剥片は、母岩ごとの接合分布に南北に長いものと東西に長いものの二つのグループがあることが看取できる。南北方向に細長く分布するものは1A・1B・2Ca・2Cb・2Ccで、石核の出土地点はその中央に密集する。東西に分布するものは2A・2Bで前者の石核は南端部で検出している。後者については石核はないが接合外製品が同一石核より剥離された剥片を素材にしているものと考えられる。2Aの接合資料とほぼ同じ分布を示していることもそれを裏付けている。このことから、前のグループは石核が集中して出土した地点付近で、もう一つのグループは南端付近で剥離作業を行っていたものと考えられる。なお、各石核に分割する作業は、石核調整を行なった表皮部分や母岩分割工程1で発生した小剥片の分布から、前のグループの作業場所で剥片剥離作業に先行して行われたものと考えられる。

#### 各遺物の説明

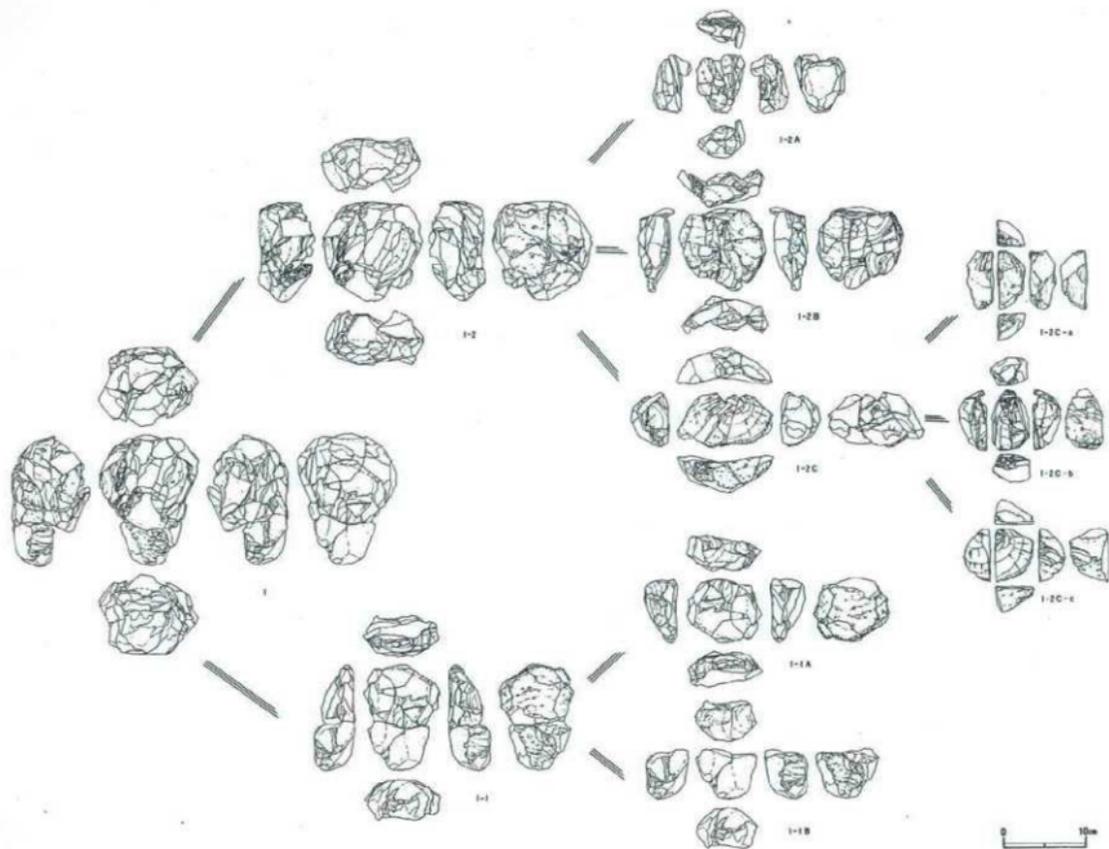
当該資料は七つに母岩分割していることから、それぞれの母岩ごとに説明を加えていくこととする。

#### 接合資料1-1

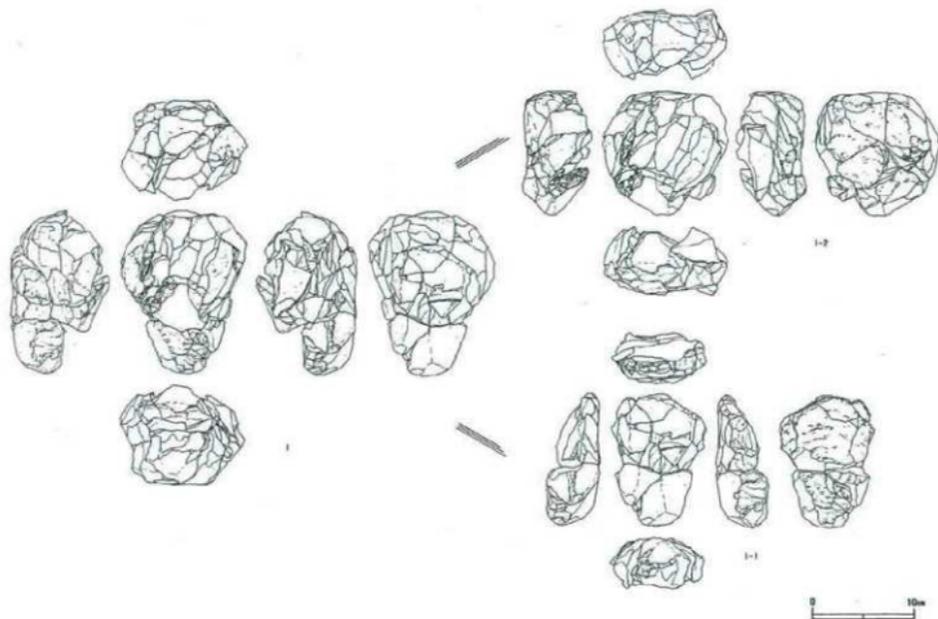
自然面を打面にかなり強い打撃を加えて1Aと1Bに分割している。その際、不純物層にそって1-2とも分離している。

#### 接合資料1-1A（13-1～7）

比較的不純物を多く含んでいるため、材質が悪く、良好な縦長剥片は獲得していない。1Bと分離する剥離面を打面に表皮部分の13-1が最初に剥離される。幅広の縦長剥片を素材とするナイフ形石器で、先端側の左側縁に調整を加えている。基部側は欠損する。石核に残った剥離痕から長さ5cmの剥片を加工していることがわかる。背面は全面が自然面で、断面は扁平な台形を呈す。13-2は母岩分割工程1で発生した小剥片である。13-4、5は裏面の不純物層



第68図 17アロック接合資料1分割図(1)



第69図 17ブロック核合資料1分割(図2)

を打面として剥離されたもので、13-4は一回の打撃で5点が破砕するように剥離している。13-5は幅広の縦長剥片である。13-3は打面作出剥片である。その剥離面を打面に13-6をはじめ2点の縦長剥片が剥離されている。13-6は右側縁を破損する幅広の縦長剥片でしの字状を呈している。13-7は残核で、優良な剥片剥離ができないため、大きいにもかかわらず剥離作業は終了している。比較的良好な剥片は上部から1点(13-1)と右側面から1点(13-6)取れただけである。

#### 接合資料1-1B(13-8~11)

1A同様良好な剥片はまったく剥離できていない。1Aとの剥離面を打面に13-9が分割され、それに伴って13-8、13-10が弾けて剥離される。13-11は石核であるが、13-9を剥離した段階で剥片剥離は終了している。

#### 接合資料1-2

接合資料1-1よりも良質な材質であるため、多くの縦長剥片が剥離され、製品も多く含まれている。長さ、幅とも12cmのほぼ円形を呈し、厚さは6.7cmを測る。上部の自然面を打面として2-1・2と2-3が分割され、表皮を取りのぞく石核調整を行なったのちに2-1と2-2が分割されている。石核調整で剥離された大形縦長剥片を素材にしたナイフ形石器50が認められる。

#### 接合資料1-2A(13-12~20)

剥片剥離作業工程にしたがって、石核にいたるまでの工程を復元する。

- 1段階 下がすばまった長球形の母岩から、最初の段階で2Bとの剥離面を打面にして13-12を剥離する。石核の正面から奥に向って剥離した幅広の縦長剥片である。
- 2段階 石核上面に打面調整を施し、石核右側面から打点を右に移動しながら上位方向からの縦長剥片を3点剥離し(未検出剥片と13-13)、さらにもどつてもう1点(13-14)剥離する。
- 3段階 左側面側で2段階より多少打点の低い位置から未検出の剥片と13-15を2点剥離する。
- 4段階 打面調整を加えながら13-17、16、18、19の順に縦長剥片を剥離している。

#### 各石器の説明

13-12は幅広の縦長剥片で、石核の正面から奥に向って剥離しているため背面には横方向の剥離面が目立つ。13-13は細身の縦長剥片の中間部の折損品で、剥離痕の観察からは13-14と同じくらいの長さをもっている。13-14は縦長剥片を素材としたナイフ形石器で、先端側左側縁に調整を加え、先端部は若干欠損するものの尖っている。ブランティングはほぼ直角に近く、左側縁を大きく抉っている。13-15は背面および主要剥離面ともにポジの状態では自然面を残す。先端部は欠損する。13-16は薄手の縦長剥片である。13-17は比較的厚手である。

13-18はしの字状の剥片で、中間部で不純物の影響を受けて破損している。13-19はきわめて薄く細長い剥片で、中間と先端で折れている。剥離工程最後の剥片である。

13-20は残核である。扁平な楕円形で、打面調整痕を上部に残し、打面のある上部は薄く、先端部は厚く残っている。縦方向に剥離痕が4条確認できる。側面は横方向の石核調整剥離痕が目立ち、裏面には自然面をとどめている。

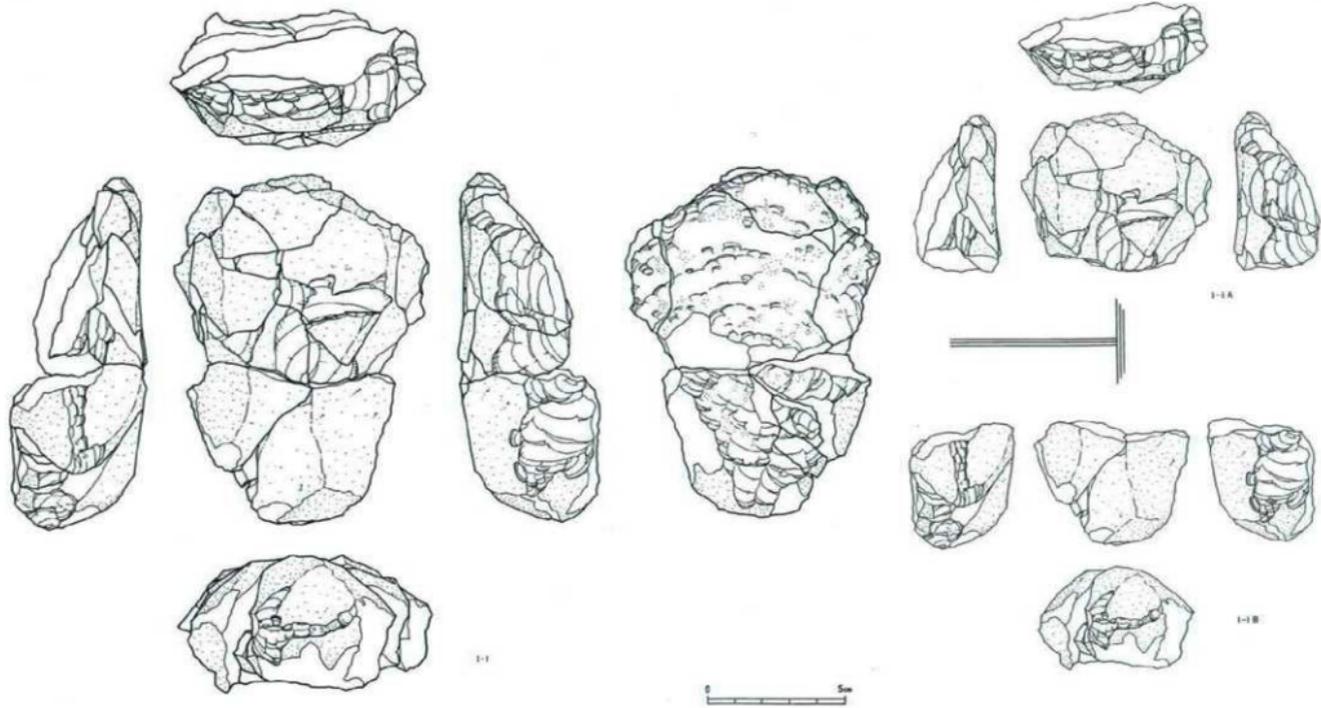
#### 接合資料1-2B (13-21~34)

剥片剥離工程にしたがって説明する。

- 1段階 10cmほどの円形に近い形状の母岩で、厚みは5~6cm程度と考えられる。1-2Cとの剥離面側を正面としている。まず、1-2Aとの剥離面を打面として、13-24を剥離する。他に剥片を剥離した痕跡は看取できない。
- 2段階 1段階と同じ面に打面を設定するため、13-22を剥離し、その剥離面を打面に13-23、25の2点を剥離する。
- 3段階 再度、同部位に打面を設定するため、13-27を剥離し、その剥離面を打面に13-31の1点を剥離する。この作業面は上位打面として以降も頻繁に使用されている。
- 4段階 左側面から13-33が1点剥離される。
- 5段階 3段階と同一打面から未検出の縦長剥片と13-32、26の3点を剥離する。
- 6段階 4段階の前方で幅広の縦長剥片13-34を1点剥離する。打面は折損しているため不明である。
- 7段階 13-34の剥離面を打面として横幅の広い13-21を剥離している。この剥離面が下位の打面となる。下位打面からは13-28、29をはじめ3~4点の剥片が剥離されている。
- 8段階 3段階と同一打面から左側縁に13-30が剥離されている。他にも剥離されている可能性は高い。剥離工程は上位から左側面、下位に打点を転移しながら縦長剥片を剥離している。

#### 各石器の説明

13-24、26、32はナイフ形石器である。いずれも折面で接合し完形となる。13-24は横長剥片の頭部から左側縁にかけて直線的に加工し、右側縁の基部側にも若干調整を加えている。背面は1-2Cとの分割剥離面でボジ状をなしている。中間から先端部にかけてのブランディングは主に背面側から行われ、基部側の両側縁は主要剥離面方向から調整される。左側縁のブランディングは垂直に近い立ち上がりを見せている。また、打瘤は完全に除去されている。13-26は左片側縁に加工を施し、打瘤を半分除去している。やはり直線的な調整で、先端部は鋭く尖っている。また、右側縁の基部付近と先端部には微細剥離痕を認める。13-32は右側縁に直線的な加工を施したもので、打瘤は調整によって除去している。先端部は幅広となる。



第70図 17アロック接合資料1実測図2)

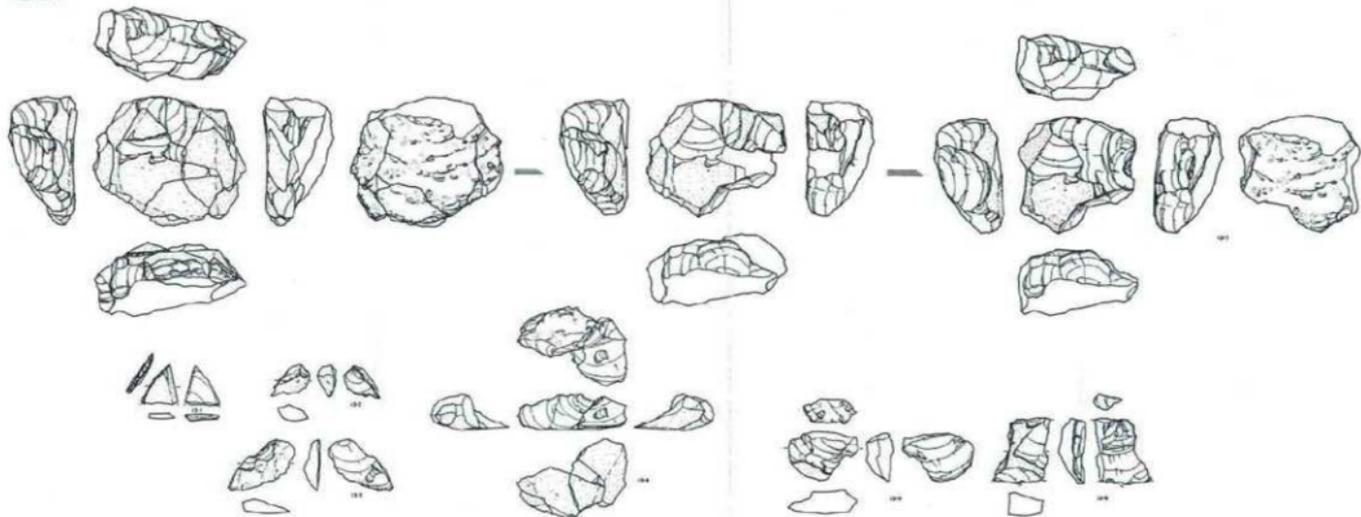
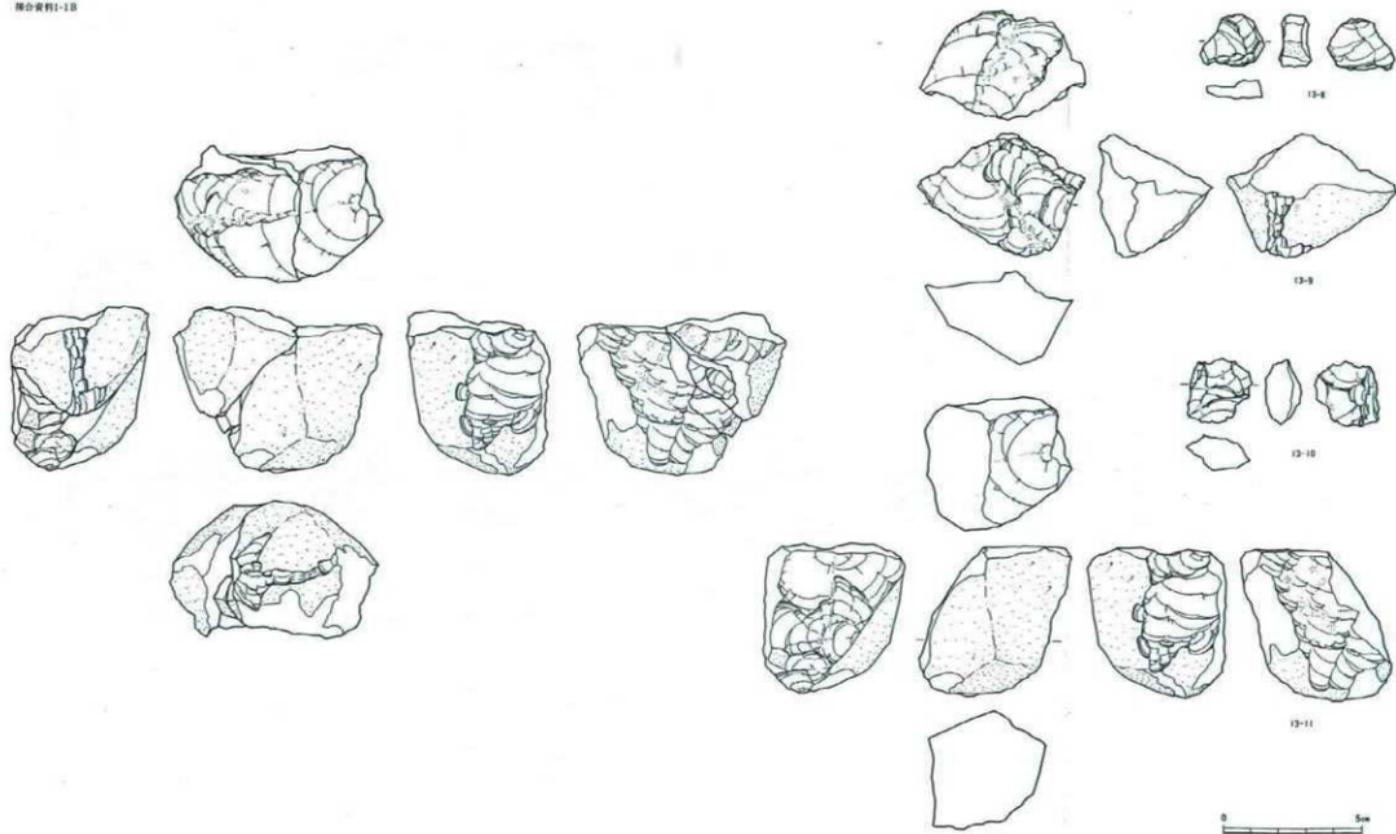
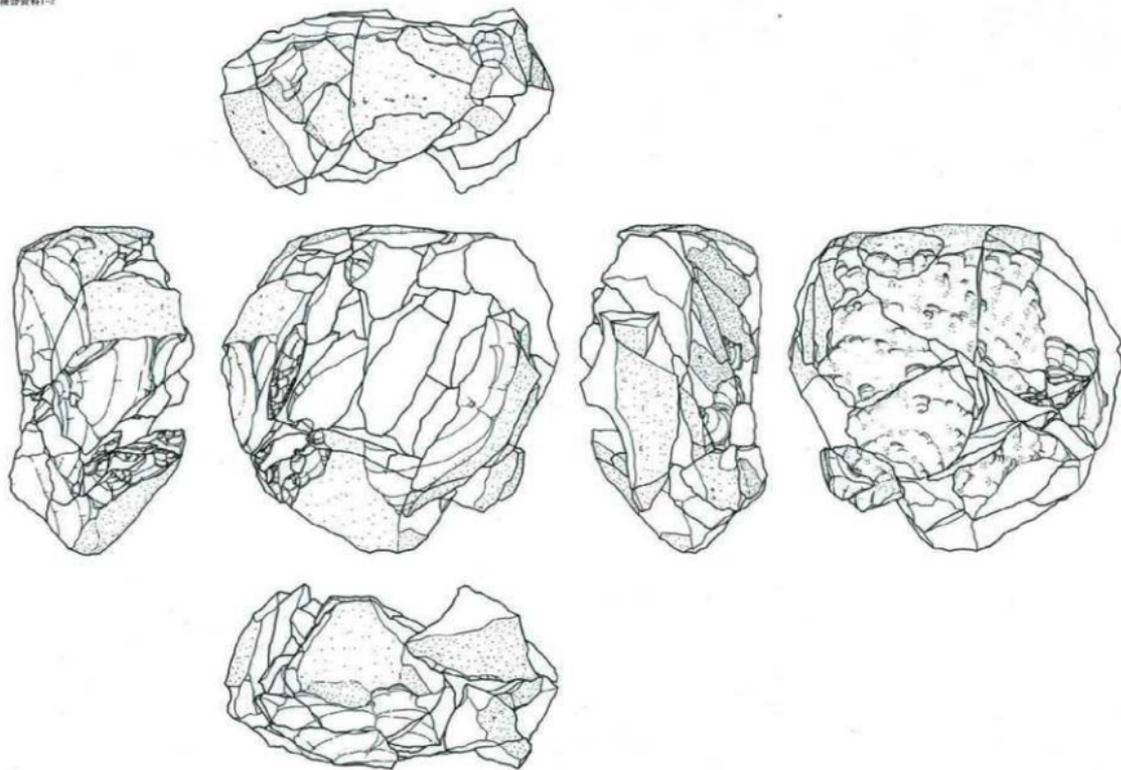


圖 114 1770—子集石器類(見圖 113)





第72図 17ブロック接合資料1実測図(4)



第73図 17ブロック様合資料1実測図(5)

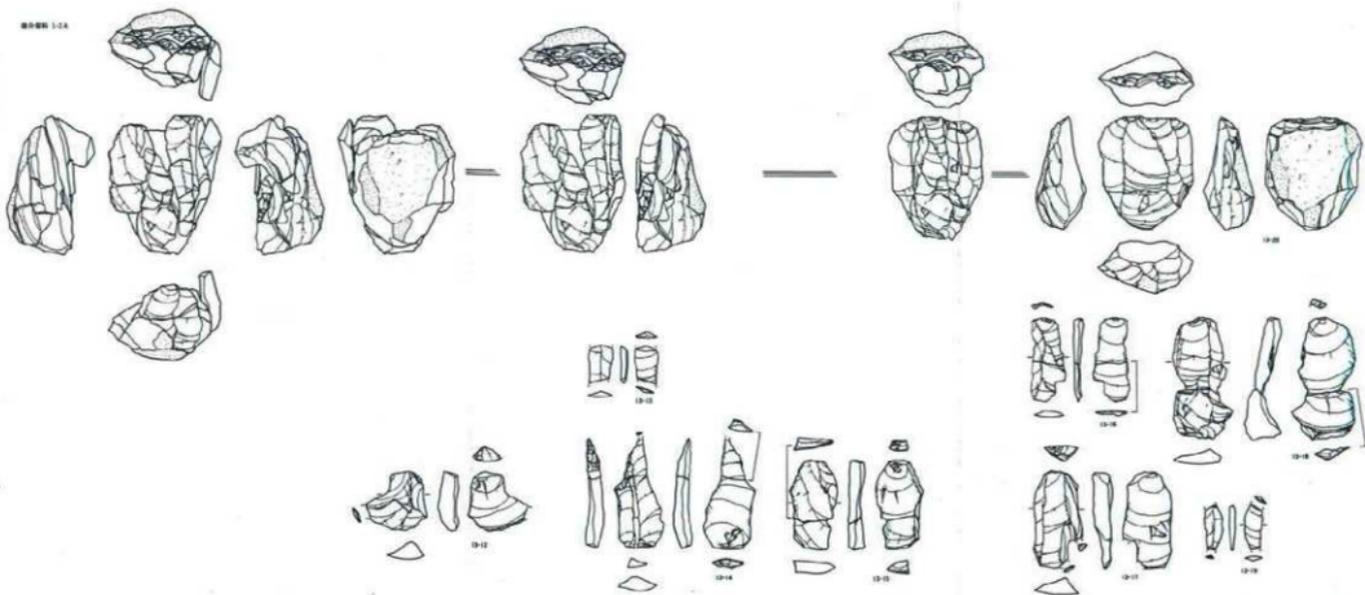
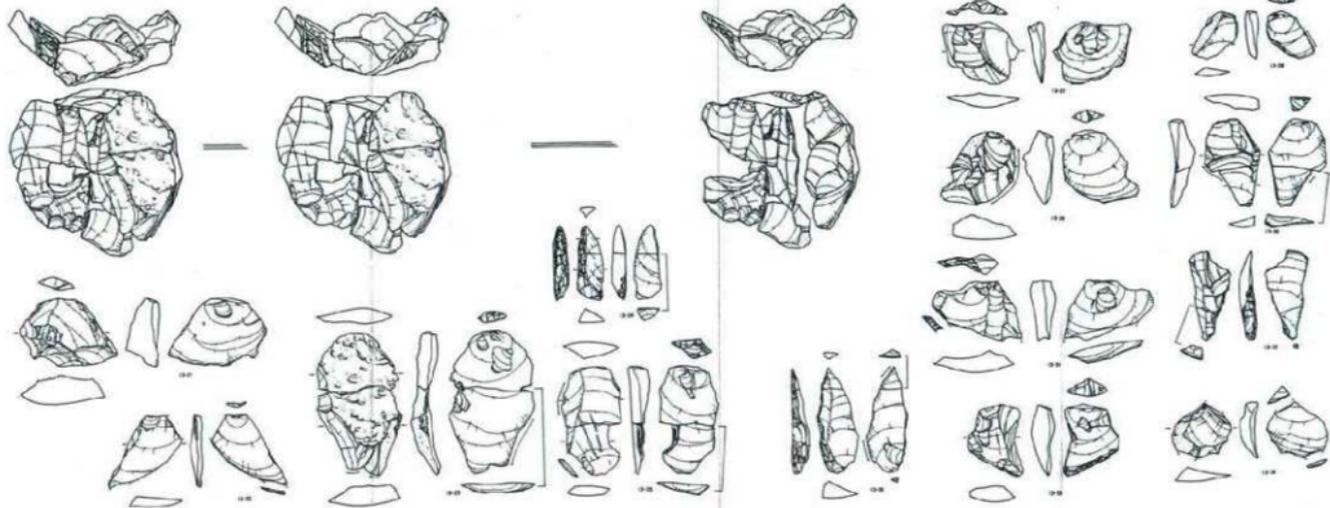


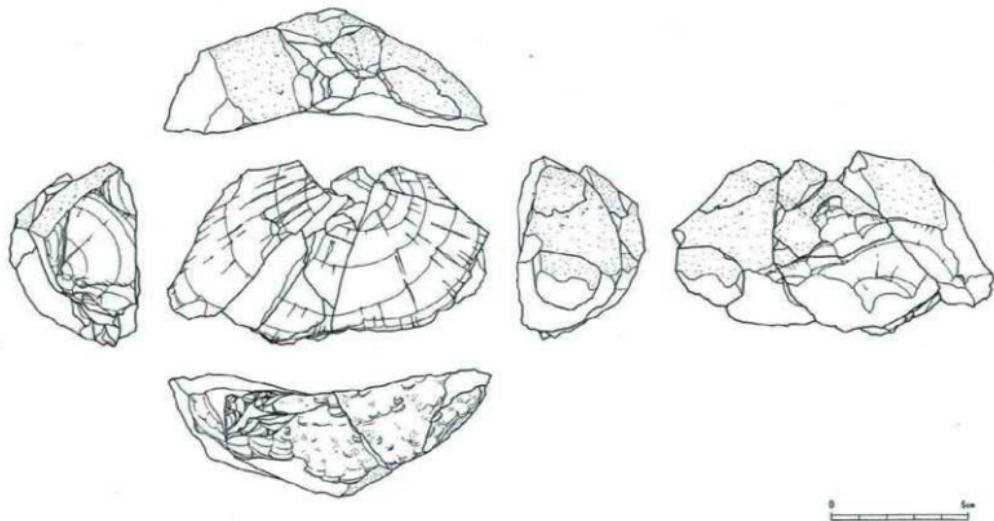
图34 117号フツ器台資料1 複製図1

图版 112

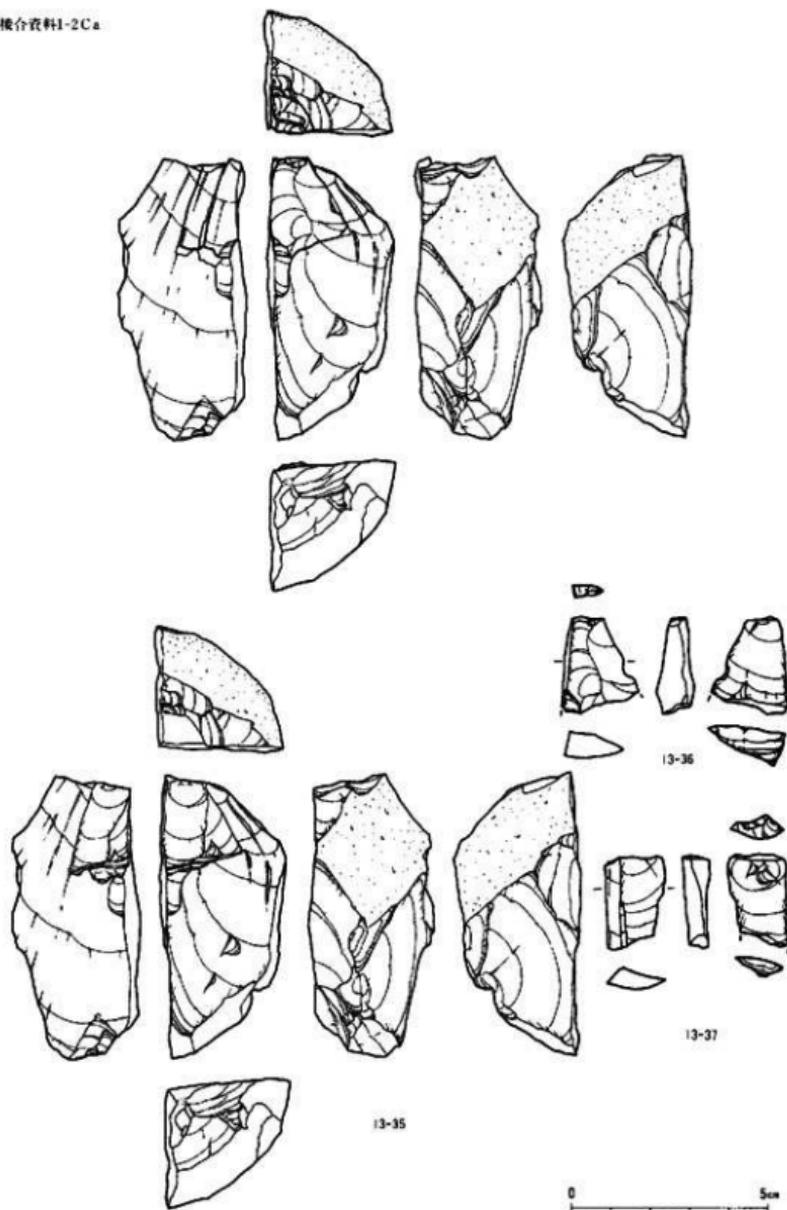


图版 112 112a-112h 陶器残片

接合資料1-2C



第76図 17ブロック接合資料1実測図⑧



第77図 17ブロック接合資料1実測図(9)

13-23、25、31、33は二次加工を有する剥片で、13-23は幅広の大形縦長剥片を素材に、右側縁に剥離痕を認める。また、左側縁と先端部には使用痕が観察できる。背面は不純物帯の剥離面が主体を占めている。13-25は縦長剥片の中間で折れているが、頭部側の左側縁には微細剥離痕が、先端部側の右側縁にはノッチ状の調整が認められる。折損後、それぞれ違った用途に使用されたものであろう。13-33は幅広の縦長剥片を素材にしている。先端部は欠損するが接合の様子から長さは5.5cmを測る。打面部には挟むような調整が加わり、左側縁には主要剥離面方向からの調整痕がみられるが、どこまで調整が加えられているか折損するため不明である。13-33は幅広の縦長剥片で、左側縁には背面側に大雑把な調整剥離が、先端部には背面から主要剥離面に向う細かな調整が行なわれている。

13-28、29、30は使用痕を有する剥片で、13-28は小形縦長剥片の左側縁に、13-30も左側縁に微細剥離痕を認める。13-29は幅広の縦長剥片の右側縁全体に使用痕を認める。

13-21、22、27、34は打面再生剥片で全体に幅が広く横長のものも認められる。

#### 接合資料1-2C

長さ7.5cm、幅11.7cm、厚さ4.6cmの偏球形を呈した大形で横長剥片を素材にする石核で、自然面を打面に頂部から放射状に三分割してそれぞれを石核としている。裏面には自然面が残っている。正面から向って左側を1-2Ca、中央を1-2Cb、右側を1-2Ccとした。

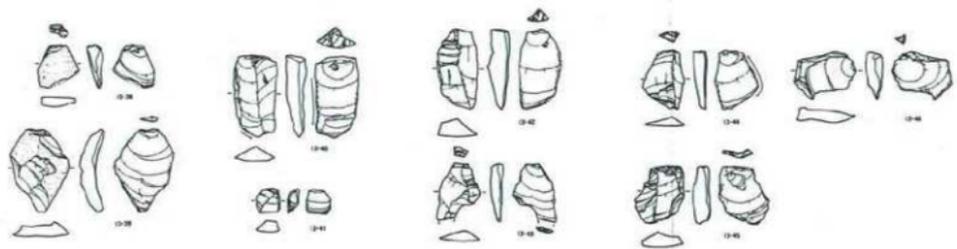
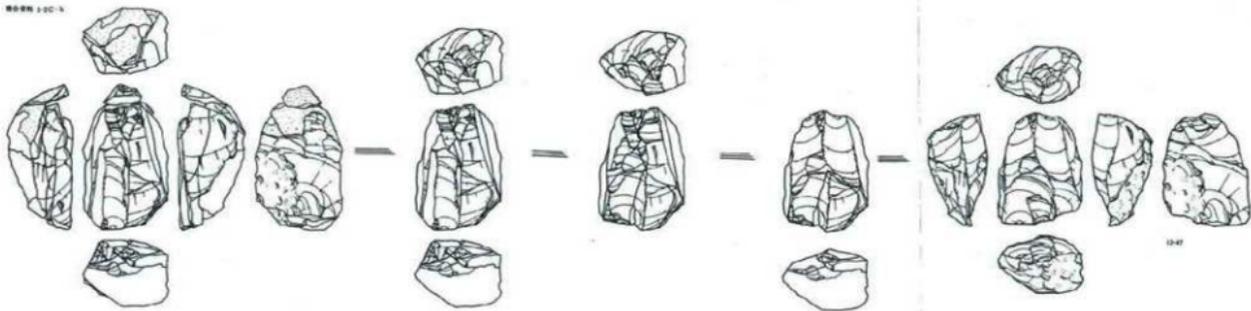
#### 接合資料1-2Ca (13-35~37)

長さ7.2cmで、円を四分分割したような断面形状を示し、頭部に打面調整を丁寧に施し、縦長剥片の獲得を試みている。剥片は2点剥離されるが、いずれも打撃が末端まで抜かず途中から剥片を折っている。剥片はともに小形の縦長剥片(13-36・37)である。下位からも打面調整を施し、剥片剥離を行うが小剥片しか取れていない。この段階で剥片剥離作業は放棄している。

#### 接合資料1-2Cb (13-38~47)

長さ7.5cmで、断面は台形状を示し、上部および下部に打面調整を施し打面を作出し、上下に180°打面転回しながら縦長剥片を剥離する。

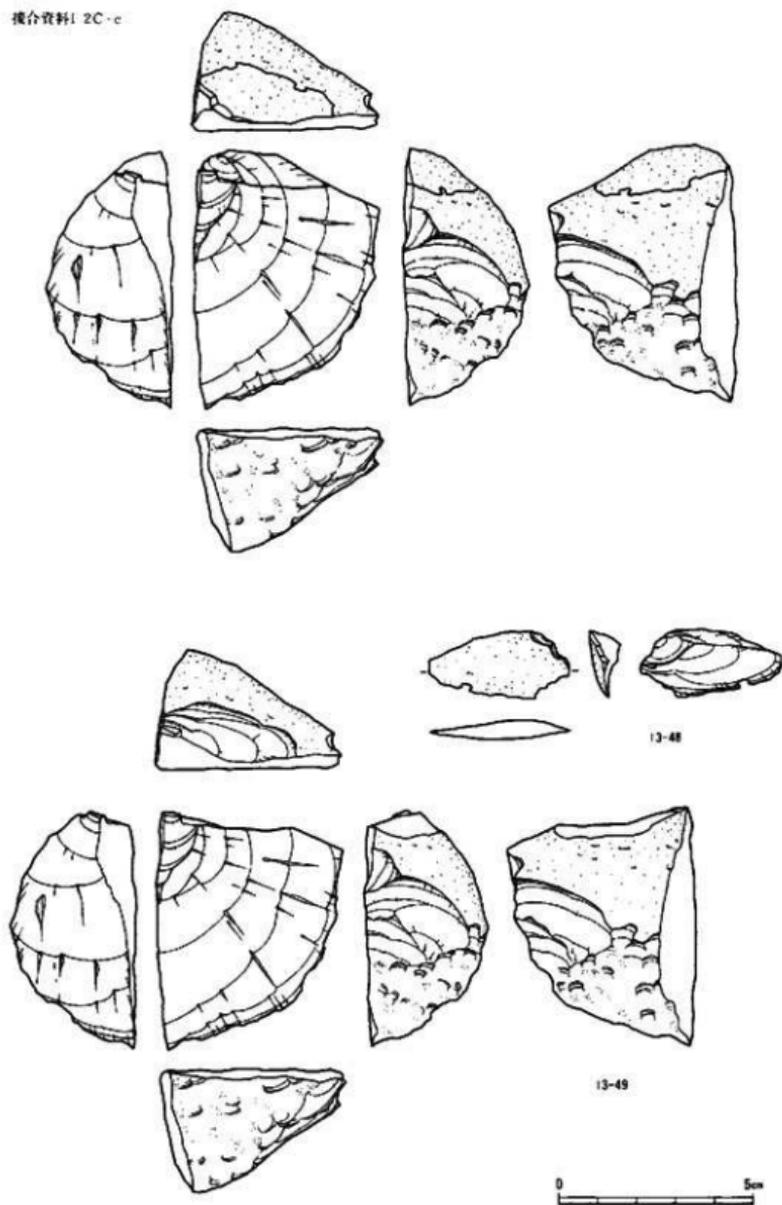
- 1段階 まず、下部に打面を設定し、13-40の背面にある剥離痕の未検出剥片を前者とともに剥離している。
- 2段階 打面を上位に移し、わずかな打面調整を加えたのちに13-41を剥離する。この段階では短い剥片しか剥離できない。
- 3段階 前段階で期待した剥片が得られないことから、打面再生剥片13-38、未検出の剥片および39を剥離し、打面として13-42、43を剥離している。前段階に比べやや大形の剥片である。
- 4段階 下位に打面を移し、13-44、45、46を剥離している。さらに、もう一度打撃を加えているが期待した剥片が得られないため、この段階で剥片剥離は終了している。



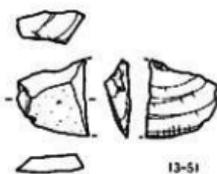
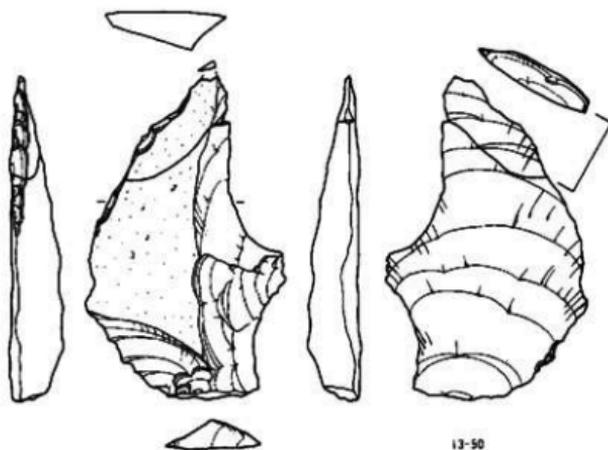
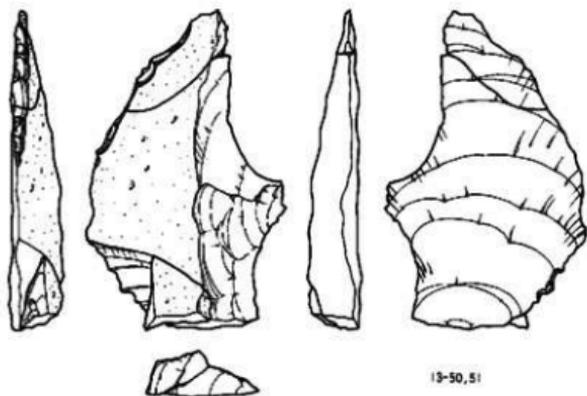
図版 12C-4 石器の断片 1 実測図



接合資料I 2C-c

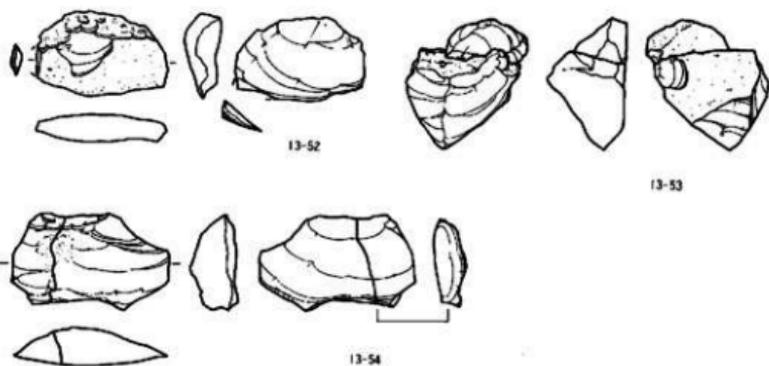


第79図 17ブロック接合資料I実測図(1)

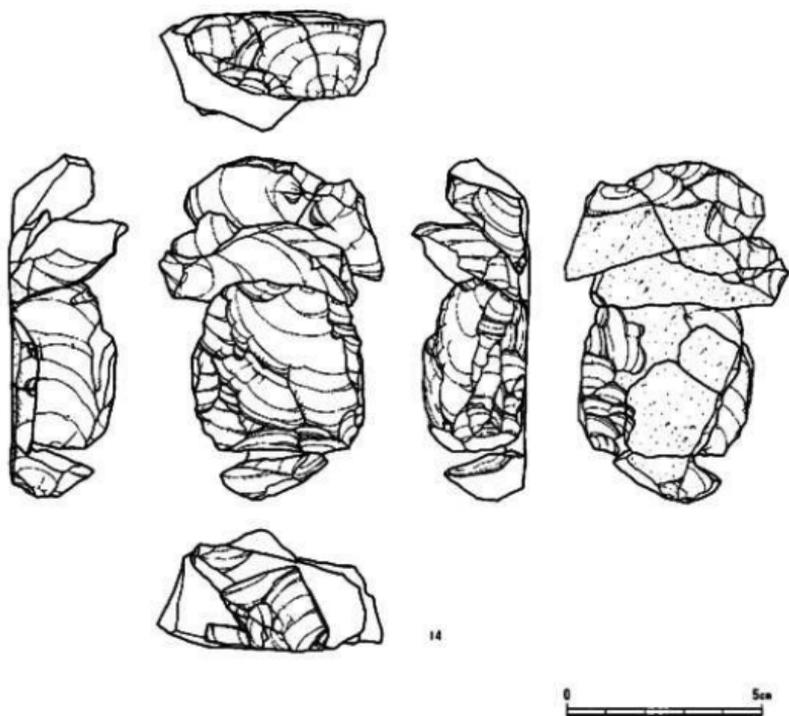


第80図 17ブロック接合資料 1 実測図②

接合資料1



接合資料2



第81図 17ブロック接合資料1・2実測図

#### 各遺物の説明

13-38、39は打面再生剥片で、背面には自然面をとどめている。

13-40、44は使用痕を有する剥片で、13-40は先端部に、13-44は左側縁に認められる。

13-41~43、45は比較的小形の縦長剥片である。13-46は横長剥片である。

13-47は残核で、両側面は石核に分割するときの剥離面となる。上下に打面調整を加えて縦長剥片を剥離しているが、中央部がふくらむため長めの良好な剥片は得られていない。

#### 接合資料1-2 C C (13-48・49)

長さ6.6cm、幅4.7cmの半円形の形状を示し、上部から剥片剥離を試みている。最初は自然面を打面に短い剥片を得ているが、2回目には途中で弾かれ1cmほどの剥片を得たにすぎない。そこで、正面から打撃を加え打面作出のためと思われる横長剥片(13-48)を剥離しているが、その後、その剥離面を打面に使用した形跡はなく、剥片剥離作業を終了している。残核は扇形の形状をとどめている。

#### 接合資料1その他の石器(13-50~54)

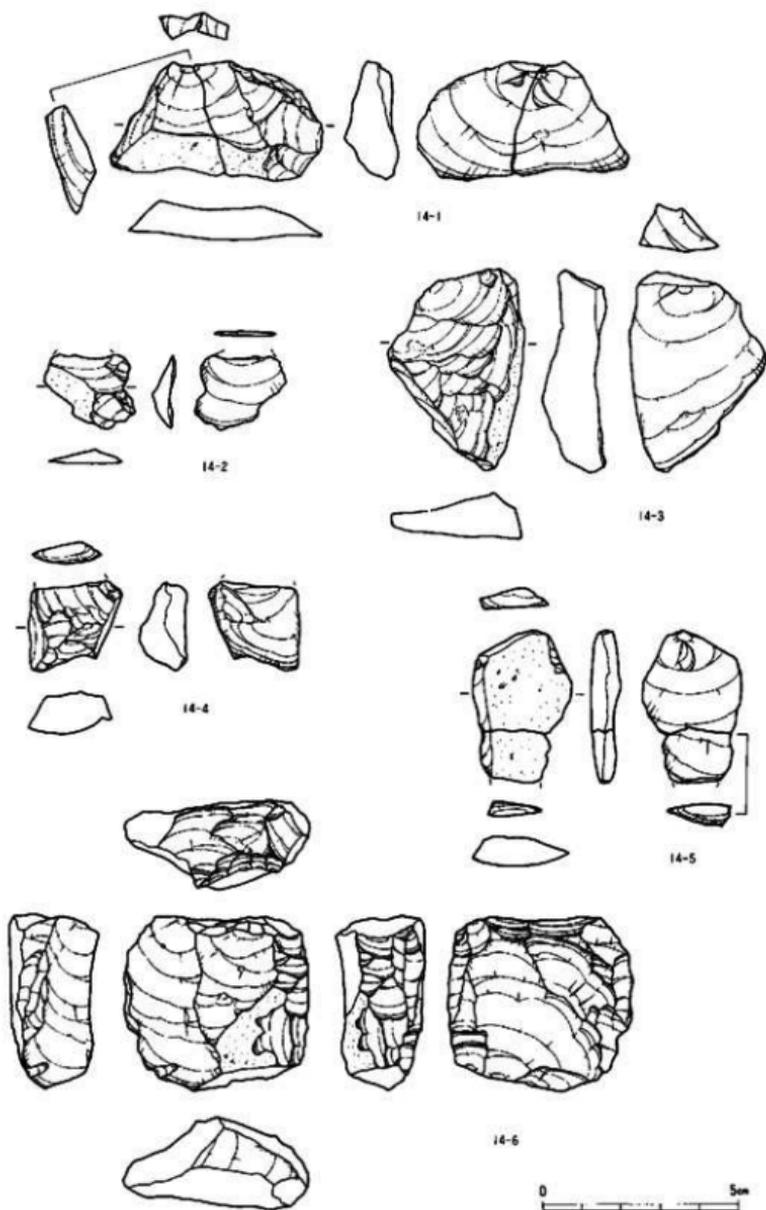
13-50は接合資料1-2 Aと2 Bに接合する表皮をとどめる縦長剥片素材のナイフ形石器である。石核調整剥離の段階で産出した大形の縦長剥片を利用したものと考えられる。左側縁の中間部から先端部にかけて調整を加えている。ブランティングは比較的小丁で、主要剥離面方向から行われる。基部から中間部にかけてもわずかな調整がみられる。基部背面には13-51が接合する。前者と同様の打面から剥離したもので、比較的横長の剥片である。

13-52~54は接合資料1-1と2を分割したときに伴って剥離した小剥片で、打点のはっきりしない横長剥片や不整形な剥片である。

#### 接合資料2(14)

黒曜石2を母岩として8点が接合する。折面で接合するものもあるが剥片5点、石核1点で構成する。長さ8.7cm、幅5.8cm、厚さ3.0cmを計測し、裏面はリングが観察できる風化した自然面が残っている。石質は黄白色の気泡を多く含む透明度の少ない漆黒色を呈すが、黒色のしまが観察できる。剥片剥離工程ははっきりしないが、古い外側の剥離は上方から行っているものが多く、比較的幅広の縦長剥片を得ているようである。ただ、上方に接合する剥片は背面を打面として使用した形跡がほとんどなく、むしろ打点を横に転回しながら剥片作出に主眼をおいているものが多いように感じられる。下方からの剥離作業は、13-4の背面を打面にして未検出の縦長剥片を、また13-4の剥離面を打面として縦長剥片の14-5、さらに打面調整を行って残核に残された未検出の縦長剥片を剥離しており、上面からの剥片剥離とおもむきを異にする。

14-1は横長剥片で、背面に自然面をとどめる。14-2は小形な縦長剥片、14-3は幅広の縦長剥片である。14-4は縦長剥片であるが、頭部側を欠損している。14-5は背面に自然面



第821図 17ブロック接合資料2実測図

がおおきく残る縦長剥片である。

14-6は石核で、扁平な直方体を呈している。上位の打面は打面調整を丁寧に行い縦長剥片を作出しているが、下位の打面は単一剝離面を使用し、幅広い剥片を剝離する。さらに、数回剝離作業を行っているが、良好な剥片は得られず、剝離作業を終了している。

17ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 型石器	振器	部器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	敲石	礫片	合計
黒曜石	1	16				3	7	73	105	6		5	215
"	2	6				2		22	10	1			41
珉質頁岩	1								2				2
"	2							1					1
"	3												
"	4							1					1
"	5		1										1
安山岩								1					1
不明(黒曜石)								4	175			1	180
合計		22	1			5	7	102	292	7		6	442

17ブロック石器属性表(1)

No	グリッド ID番号	遺物 番号	検出 番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
1	2G-66	0142	1	ナイフ	黒曜石 1	24.1×15.7×4.6	1.03	N	-	Ⅲ	B	
	"	0131	"	"	"	38.3×24.0×10.5	8.97	N	-	Ⅱ・Ⅲ	B	
2	2G-55	0072	2	"	"	47.7×20.0×10.0	10.73	H(1)	-	I・Ⅲ	B	
3	2G-56	0009	3	"	"	17.8×17.7×4.2	0.68	N	-	I	M	
	"	0129	"	"	"	20.2×16.3×7.2	1.97	N	-	I	M	
4	2G-66	0134	4	"	"	11.0×19.3×5.8	1.18	N	-	Ⅲ	B	
5	2G-55	0017	5	"	"	15.2×14.0×4.6	0.76	H(1)	-	I	M	
6	"	0063	6	"	"	39.4×25.1×12.2	12.77	H(2)	D・T	I・Ⅲ	B	
7	"	0120	7	"	"	30.4×18.3×6.7	3.74	N	-	I・Ⅳ	H・B	
8	2G-56	0001	8	台形礫石器	珉質頁岩 5	19.5×7.7×3.7	0.56	H(1)	T	I・Ⅳ	H	
9	2G-56	0132	9	ナイフ	黒曜石 2	27.9×17.2×3.4	2.79	H(1)	-	I・Ⅲ	B・L	
10	2G-55	0023	10	R・F	" 1	29.1×22.0×7.5	3.75	N	-	I・Ⅱ	B	
11	2G-66	0098	11	"	" 2	58.3×26.7×13.2	19.98	H(2)	T	I・Ⅱ・ Ⅲ・Ⅳ	-	
12	2G-56	0007	12	"	" 2	25.5×27.7×3.9	4.11	N	-	N I	M・B	
		0015	"	"	" 2	18.8×27.1×19.2	3.72	H(1)	-	I	M	
13-1	2G-35	0039	13-1	ナイフ	" 1	29.2×18.7×4.1	2.10	N	-	N -	M	接合資料 1-1A
-2	2G-56	0032	-2	剥片	" 1	19.3×25.7×10.6	3.39	P	-	N I	-	"
-3	"	0097	-3	"	" 1	30.0×41.0×8.2	7.02	N	-	Ⅱ	-	"
-4	2G-55	0090	-4	"	"	10.2×17.4×10.1	1.20	-	-	N -	-	"
	"	0116	"	"	"	10.8×11.5×3.7	0.32	N	-	N -	-	"
	2G-56	0047	"	"	"	41.9×29.2×15.4	11.48	N	-	N -	-	"
	"	0061	"	"	"	48.7×25.9×20.0	24.32	N	-	N -	-	"
	2G-66	0137	"	"	"	12.0×6.3×20.1	1.15	N	-	N -	-	"

-5	2G-56	0089	-5	#	#	30.5×42.0×15.6	16.23	H(1)	-	N	I	-	#
-6	#	0044	-6	#	#	42.5×28.7×15.3	16.77	H(1)	-	N	I・M	R	#
-7	#	0036	-7	石 核	#	70.0×69.6×38.7	189.06	-	-	-	-	-	#
-8	2G-66	0384C	-8	剥 片	黒曜石 1	23.0×18.0×10.1	4.28	-	-	N	-	-	接合資料 1-1B
-9	2G-56	0056	-9	#	#	54.3×41.8×42.5	65.54	H(1)	-	N	-	-	#
-10	2G-66	0271	-10	#	#	24.9×22.0×13.5	5.79	-	-	-	-	-	#
-11	2G-56	0048	-11	石 核	#	68.1×53.1×44.3	143.82	-	-	-	-	-	#
-12	2G-65	0018	-12	剥 片	#	31.3×33.6× 8.3	7.11	H(1)	D	I・II	-	L	接合資料 1-2A
-13	2G-55	0034	-13	#	#	20.8×13.5× 3.6	0.72	N	-	I	-	M・B	#
-14	#	0073	-14	ナ イ フ	#	37.8×24.9× 7.7	6.63	H(3)	T	I	-	B	#
	2G-56	0121		#	#	23.3×11.1× 6.2	1.25	N	-	I	-	B	#
-15	2G-65	0025	-15	剥 片	#	33.5×26.3× 5.8	5.85	H(1)	D	N	I・II	M	#
	2G-55	0056		#	#	16.0×18.5×17.8	2.84	N	-	II	-	M・B	#
-16	2G-65	0006	-16	#	#	23.6×15.7× 3.9	1.53	H(2)	-	I	-	M	#
	2G-66	0384J		#	#	19.8×19.2× 2.8	0.93	N	-	I	-	M	#
-17	2G-55	0079	-17	#	#	50.4×24.7× 8.1	10.42	H(1)	D	I・M	-	-	#
-18	2G-65	0024	18	U・F	#	39.3×27.3× 8.2	8.55	H(2)	-	I	-	M	#
	2G-56	0106		剥 片	#	26.7×32.3×18.6	12.65	N	-	I・III	-	M	#
-19	2G-55	0022	-19	#	#	22.4× 8.9× 2.3	0.46	N	-	I	-	H・B	#
-20	2G-65	0019	-20	石 核	#	58.6×49.4×25.0	65.76	-	-	-	-	-	#
-21	2G-55	0103	-21	剥 片	#	41.0×62.5×16.9	36.67	H(2)	-	N	III・IV	-	接合資料 1-2B
-22	2G-66	0267	-22	#	#	49.7×26.0× 6.3	7.32	H(1)	T	N	I・M	B・R	#
-23	#	0145	-23	R・F	#	43.0×50.8×10.0	17.92	H(1)	D	I	-	M	#
	2G-56	0014		#	#	54.5×48.3×12.4	29.55	N	-	N	I・M	M	#
-24	2G-55	0021	-24	ナ イ フ	#	11.1×19.3×7.5	1.30	N	-	I	-	M	#
	#	0018		#	#	27.9×15.6× 8.1	3.99	N	-	I	-	M	#
-25	#	0067	-25	U・F	#	36.0×35.5×11.4	15.03	H(2)	-	I・III	-	M	#
	2G-66	0384b		R・F	#	31.2×31.9× 6.6	6.17	N	-	I・III	-	M・L	#
-26	2G-56	0065	-26	ナ イ フ	黒曜石 1	15.0×12.4× 4.8	0.67	N	-	-	I	B	接合資料 1-2B
	2G-55	0016		#	#	51.0×23.8×10.3	10.44	H(1)	-	I	-	B	#
-27	#	0031	-27	剥 片	#	35.6×47.8× 8.4	10.16	H(3)	T	-	I・II	-	#
-28	2G-66	0384d	-28	U・F	#	33.6×20.8× 6.8	3.95	H(3)	D	N	III	-	#
-29	2G-55	0083	-29	U・F	#	44.5×45.0×15.2	20.75	H(2)	T	N	I・II・III	-	#
-30	#	0050	-30	U・F	#	30.6×34.5×12.2	10.33	H(1)	-	I・III・IV	-	M	#
	#	0125		#	#	24.8×25.0× 6.9	3.24	N	-	I・III	-	M	#
-31	2G-66	0384a	-31	R・F	#	36.2×53.0×13.8	19.13	H(1)	D	-	I・III	M	#
-32	#	0132	-32	ナ イ フ	#	20.9×11.7× 8.6	1.48	N	-	I	-	M	#
	2G-55	0028		#	#	39.7×26.3× 8.8	6.35	N	-	I・M	-	M	#
-33	剥片(F)		-33	R・F	黒曜石 1	44.0×33.0×14.5	10.50	H(3)	-	I・II	-	-	#
-34	2G-55	0117	-34	剥 片	#	32.1×36.1× 8.0	7.38	N	-	N	II・III	H	#
-35	2G-56	0091	-35	石 核	#	71.7×43.0×30.2	66.45	-	-	-	-	-	接合資料 1-2C-c
-36	2G-55	0051	-36	剥 片	#	23.6×19.5× 7.1	3.11	H(1)	-	I・III	-	M	#
-37	#	0092	-37	#	#	22.7×14.1× 6.1	1.68	H(1)	D	I・III	-	M	#
-38	#	0075	-38	#	#	24.3×29.4× 7.4	2.39	H(1)	D・T	N	-	-	接合資料 1-2C-b

-39	2G-56	0050	-39	#	#	32.3×32.6×7.5	8.83	H(1)	T	N	II・IV	-	#
-40	#	0099	-40	U・F	#	42.8×21.4×9.8	7.61	H(2)	D	-	I・III	-	#
-41	2G-55	0071	-41	剥片	#	12.1×12.3×4.5	0.80	N	-	-	I・III	-	#
-42	#	0052	-42	#	#	40.5×21.1×10.0	7.19	H(1)	D・T	-	I	-	#
-43	#	0062	-43	R・F	#	28.9×20.8×4.5	2.65	H(1)	D	-	I・III	B	#
-44	2G-66	0384e	-44	U・F	#	29.7×26.0×6.2	3.17	H(1)	D	-	I・III	-	#
-45	#	0097	-45	剥片	#	34.8×23.0×7.3	5.49	H(2)	D	-	I・II・III	-	#
-46	2G-56	0037	-46	#	#	23.5×29.0×6.0	4.12	H(1)	-	-	II・III	-	#
-47	#	0092	-47	石核	#	59.5×48.0×29.8	64.24	-	-	-	-	-	#
-48	2G-55	0076	-48	剥片	黒曜石1	18.1×35.5×17.9	3.00	H(1)	-	N	-	-	接合資料 1-2C-a
-49	#	0074	-49	石核	#	60.3×48.2×30.1	76.66	-	-	-	-	-	#
-50	2G-56	0082	-50	ナイフ	#	34.4×12.1×6.3	2.45	N	-	N	-	B	接合資料 1-2
	2G-55	0093		#	#	69.5×52.6×13.2	33.27	H(1)	-	N	I・IV	B	#
-51	2G-66	0384g	-51	剥片	#	19.8×19.4×5.3	1.48	N	-	N	-	R	#
-52	2G-56	0059	-52	#	#	21.3×32.7×7.4	5.26	-	-	N	I	L	接合資料1
-53	#	0067	-53	#	#	29.9×19.3×27.5	11.70	-	-	-	-	-	#
	2G-55	0127		#	#	16.7×20.0×9.2	2.37	-	-	-	-	-	#
-54	2G-56	0012	-54	#	#	23.5×32.6×10.1	6.54	-	-	-	-	L	#
	2G-66	0146		#	#	11.9×12.9×7.0	2.09	-	-	-	-	R	#

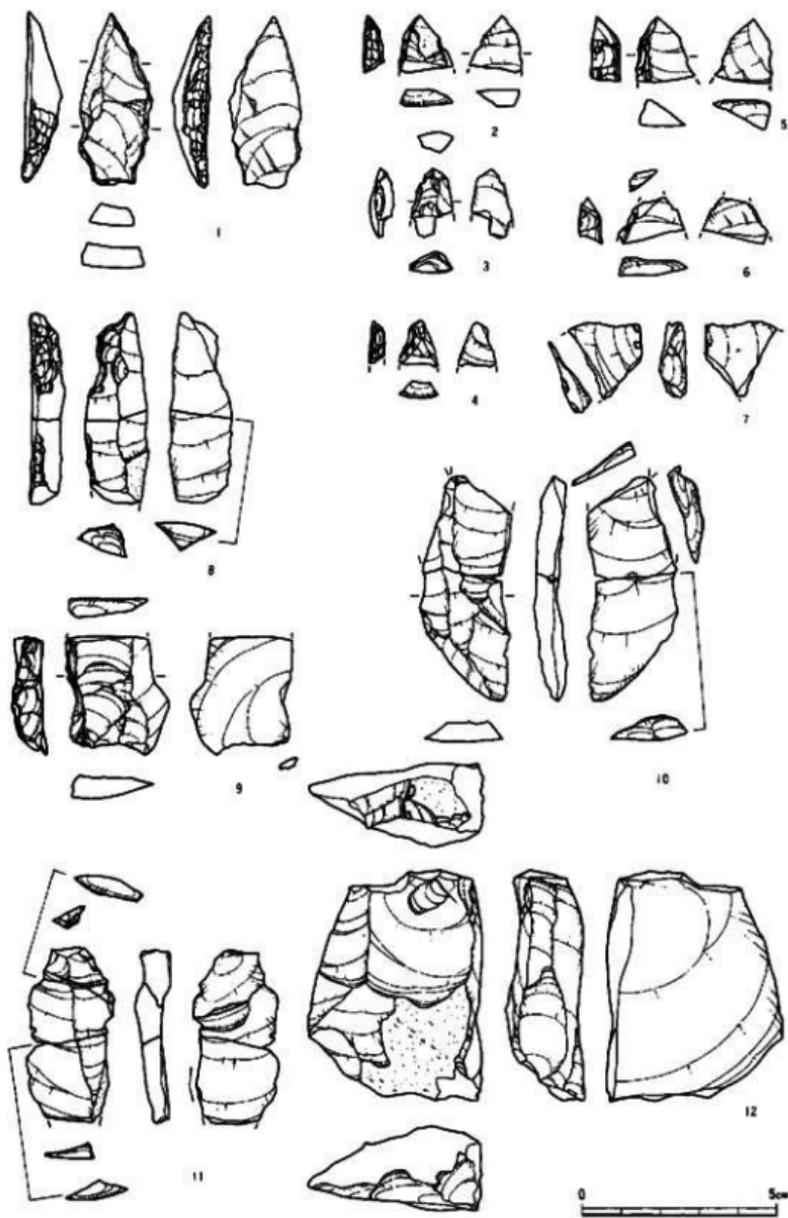
18ブロック遺物 1～6、8は黒曜石製、9は珪質頁岩製のナイフ形石器である。黒曜石製はすべて黒曜石2を母岩とする。1は柳葉状で、右側縁と基部側の右側縁に調整を加え、左側縁の自然面を刃部としている。打瘤は除去している。2～6は先端部のみが遺存する欠損品で、5は横長の剥片を素材にしているようである。8は縦長剥片の左側縁に調整を加えたもので、先端部のブランティングは湾曲し中央が突出している。また、背面から加工を加えた後に主要剥離面方向からの丁寧な調整を施している。基部は欠損する。9は幅広い縦長剥片の左側縁に調整を加えたもので、先端部は欠損する。ブランティングにより打瘤の半分を除去している。

7は台形様石器である。頭部側に表裏から大まかな加工を加え、中間部は折っている。折面には粗雑な調整を加えている。

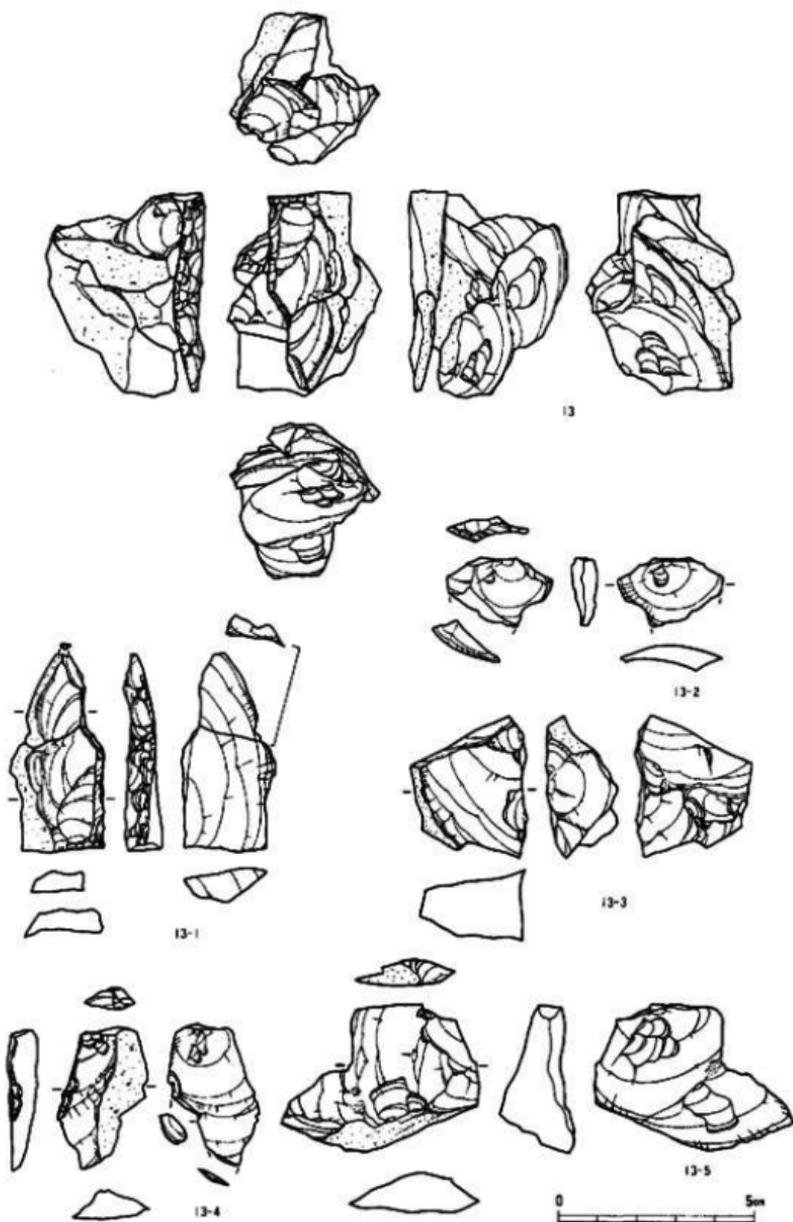
11は縦長剥片素材の使用痕を有する剥片で、先端側の右側縁に微細剥離痕を認める。数か所で折れ、先端部は欠損する。

10は縦長剥片である。頭部側を欠損している。

12は珪質頁岩製の大形剥片石核である。自然面を打面として剥離した幅広い大形剥片の右側面に数枚の剥離痕が認められる。先端部側に打面調整を加え、下方から4点の縦長剥片を剥離している。石核の原型の半分ほどまで剥離が進んでいることから、右側面で連続して剥片剥離作業が行われたものと考えられる。



第83圖 18ブロック石器実測図



第84図 18ブロック接合資料3実測図

#### 接合資料 3 (13)

黒曜石を母岩とし6点5剥片が接合する。左側面の自然面を打面にして横長剥片を2点剥離し、うち1点が13-1で17ブロックで出土している。その剥離面を打面に縦長剥片13-2、3を挿取、他に1点未検出のものも剥離している。その後、下方から不定形な剥片13-3を、さらに左側辺の自然面を打面に13-5を剥離している。

13-1は横長剥片を素材にしたナイフ形石器である。右側縁に調整を加え左側縁の自然面が刃部となる。打痕はブランディングで除去されている。基部は剥片側面の平坦面がそのままの状態に残っている。

13-4は削器とも考えられる二次加工を有する剥片で、左側縁に調整を加える。右側縁には自然面を残している。

13-2は縦長剥片で先端部を欠損する。13-3は不整形な剥片である。13-5は幅の広い横長の剥片である。

#### 接合資料 5 (14)

表皮部分の剥離を行った横長剥片が2点接合している。ともに自然面を背面にとどめている。14-1は不純物で力の方向が変化して剥離されたもので、14-2の背面の左側の剥離痕にあたる。打面は後者と同一面と考えられる。14-2は頭部調整が細かく施されている。

#### 接合資料 6 (15)

黒曜石の幅の広い剥片が2点接合する。前段階の剥離面から打面を90°転回して、15-1、2を剥離している。15-1は頭部と左側縁を欠損する横長剥片で、先端部には自然面を残している。15-2は自然面を打面とする幅の広い縦長剥片である。先端部には自然面を残している。背面の剥離方向は左からで、打面転回を行っていることがよくわかる。

#### 接合資料 8 (16)

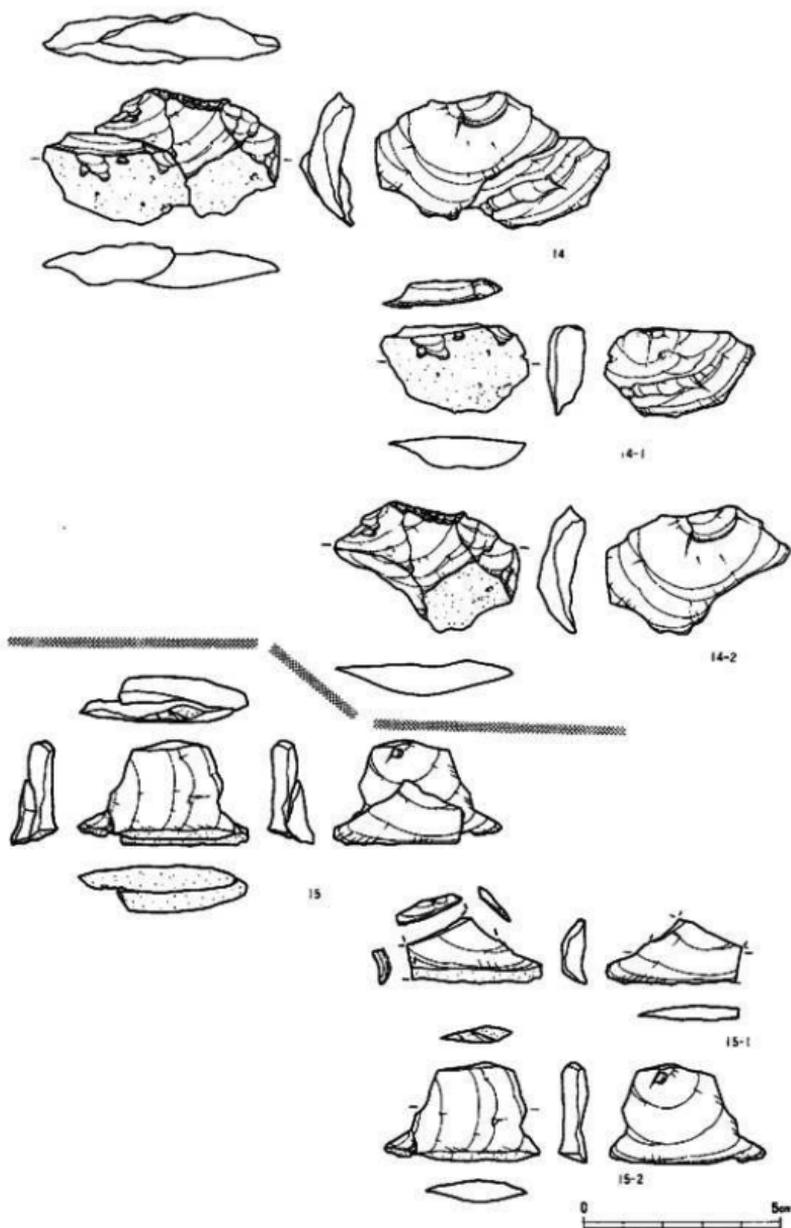
縦長剥片が2点接合する。はじめの剥離面が側面となるように剥離面が90°移動している。打面は5mmほど下位に設けられる。この接合資料からは比較的良好な縦長剥片が多く作出されている。

16-1は縦長剥片を素材にしたナイフ形石器で、先端部左側縁に調整を加えている。比較的厚手の剥片を使用しており、ブランディングは垂直に近い立ち上がりを示す。左側面には自然面が残っている。

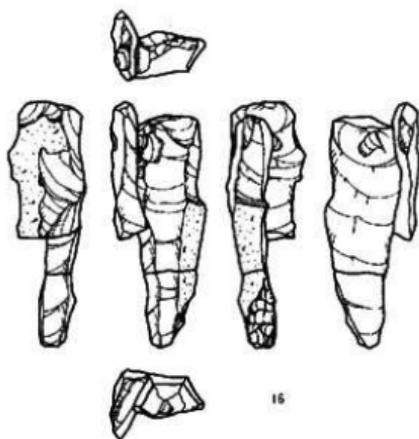
16-2は縦長剥片で、中間部から折損している。全長は17-1よりも若干長い。左側縁には自然面が残っている。

#### 接合資料11 (17)

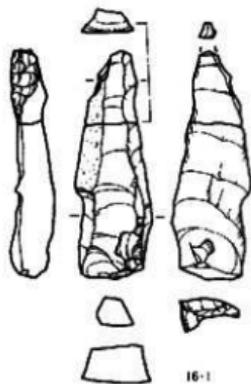
同一打面から小剥片を2点剥離している。背面に残る剥離痕からさほど大きな剥片が得られていないことがわかる。



第85図 18ブロック接合資料5・6実測図



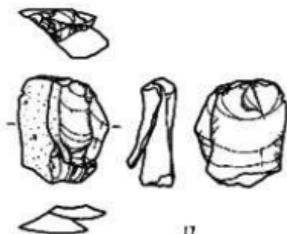
16



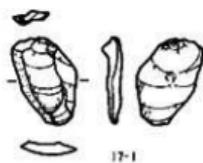
16-1



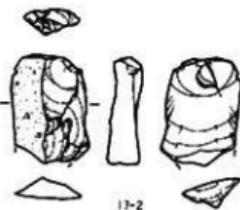
16-2



17



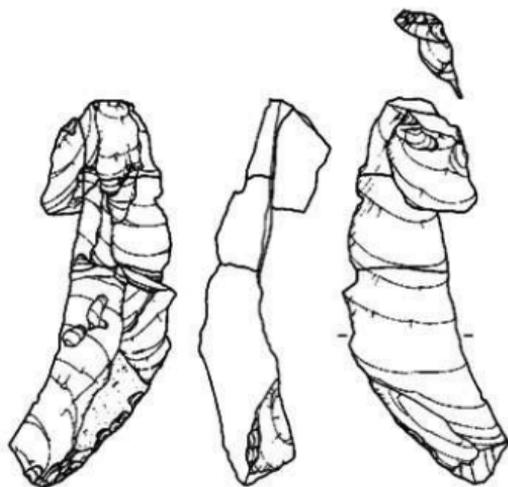
17-1



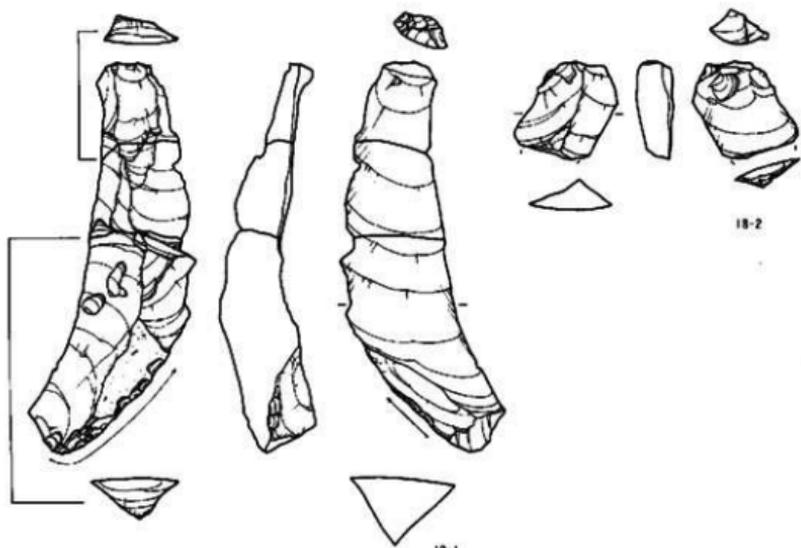
17-2



第86図 18ブロック接合資料8・11実測図



18



18-2

18-1



第87図 18ブロック接合資料10実測図

17-1は小形の縦長剥片、17-2も小形で、先端部は欠損する。

#### 接合資料10 (18)

良好な縦長剥片の接合例である。先端部は下位打面となり、石核の全長が剥片の長さと同じ、10cmを測る。背面観察から、上位方向からの剥離と下位方向からの剥離を何回か繰り返して行っていることがわかる。なお、上位打面の高さはほとんど変わらず、同一打面から行なわれる。

18-1は良好な縦長剥片で、若干しの字状を呈している。頭部側と中間部の折面で接合する。先端部には微細剥離痕を認める使用痕を有する剥片である。先端部付近には自然面が残っている。18-2は前者と同一打面から剥離された縦長剥片で、先端部は欠損している。

#### 18ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 型石器	鑿器	能器	台形 石器	R・F:U・F	剥片	砕片	石核	敲石	無片	合計
黒曜石	1	2					2	8	3		1	16
"	2	9			1	1		117	64		1	193
珪質頁岩	1											1
"	2											
"	3								1			1
"	4						1					1
安山岩												
不明							6	247				253
合計	12				1	1	2	132	314	1	2	465

#### 18ブロック石器属性表(1)

No	グリッド 番号	遺物 番号	検出 番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背出構成	折出	接合資料
1	2G-66	0286	1	ナイフ	黒曜石 2	44.8×18.0×8.4	6.21	N	-	N I・III	-	
2	"	0006	2	"	"	12.0×15.2×4.6	0.72	N	-	I	B	
3	"	0089	3	"	"	17.3×10.8×4.6	0.65	N	-	III	B	
4	"	0228	4	"	"	11.8×10.0×4.0	0.40	N	-	I	B	
5	"	0120	5	"	"	16.1×14.7×7.2	1.24	N	-	III	B	
6	"	0001	6	"	"	14.8×16.2×4.7	0.67	N	-	I	H	
7	"	0119	7	台形標石	"	15.3×19.2×5.2	1.33	N	-	I	M	
8	"	0104	8	ナイフ	"	24.6×15.5×8.1	2.90	N	-	I	M	
		0174		"	"	23.8×15.6×7.1	2.93	N	-	N I	M・B	
9	"	0384Q	9	"	珪質頁岩 1	31.7×36.5×7.9	4.98	N	-	II・IV	R	
10	"	0308	10	剥片	黒曜石 2	25.8×23.3×6.6	3.29	N	-	I	H・M・L	
		0189		"	" 2	32.5×24.0×6.6	2.53	N	-	I・III	M	
11	"	0018	11	剥片	"	14.1×19.4×4.1	1.14	H(2)	D	I	H	
		0151		"	"	15.7×22.3×5.1	1.57	N	-	I	H・M	
		0088		"	"	20.6×20.2×4.9	2.24	N	-	N I	M・B	
12	"	0239	12	石核	珪質頁岩 3	60.1×55.4×19.1	54.05	-	-	-	-	

13-1	#	0015	13-1	剥片	黒曜石 2	28.7×25.5× 5.4	4.02	H(1)	-	I	K・L	接合資料2
		0217		#	#	33.7×27.3× 9.9	8.21	H(1)	-	N	I・II	L
-2	#	0085	-2	#	#	18.0×21.2× 3.8	1.32	N	-	I・II	H	#
-3	2G-56	0066	-3	#	#	48.8×35.7×11.7	20.40	H(1)	-	N	I・II・IV	-
-4	2G-66	0198	-4	#	#	20.6×23.6×10.7	5.09	N	-	I・II・III・IV	H	#
-5	#	0015	-5	#	#	28.7×25.5× 5.4	4.02	H(1)	-	N	I	M
		0020		#	#	17.4×14.7×1.48	1.47	N	-	N	I	M・B
-6	#	0138	-6	石核	#	44.5×47.2×19.9	48.29	-	-	-	-	#
14-1	2G-56	0038	14-1	ナイフ	#	26.0×14.8× 5.5	1.90	N	-	N	I	H
	2G-66	0100		ナイフ	黒曜石 2	31.2×24.1× 6.8	6.27	N	-	N	I・II	H
-2	#	0205	-2	剥片	#	17.2×27.0× 6.0	1.92	H(2)	D	I	B	#
-3	#	0253	-3	#	#	36.0×30.5×18.0	15.37	-	-	-	-	#
-4	#	0382	-4	R・F	#	35.4×24.0× 7.1	4.31	H(1)	D・T	N	I	B
-5	#	0129	-5	剥片	#	34.6×50.4×16.2	19.60	H(2)	-	N	I・II	-
15-1	#	0230	15-1	#	#	21.4×37.9× 8.4	6.21	H(1)	-	N	-	接合資料5
-2	#	0215	-2	#	#	30.5×46.2× 9.1	8.26	N	T	N	I	-
16-1	#	0224	16-1	#	#	20.9×32.4× 4.7	2.24	N	-	N	I	M・L
-2	#	0042	-2	#	#	24.2×39.5× 7.0	4.84	H(1)	-	N	IV	-
17-1	#	0260	17-1	ナイフ	#	19.0×13.3× 8.8	2.19	N	-	N	I	B
		0212		#	#	39.8×18.7× 9.6	9.27	H(3)	T	N	I	B
-2	#	0211	-2	剥片	#	35.4×19.0× 6.2	4.62	H(1)	D	N	I・II	M
18-1	#	0165	18-1	#	#	20.6×17.7× 2.7	0.96	H(1)	D	N	I	接合資料11
-2	#	0035	-2	#	#	27.5×18.0× 8.0	3.95	H(2)	D	N	I・IV	M
19-1	#	0262	19-1	#	#	21.9×18.5× 6.9	3.01	N	D・H	I・IV	H	接合資料10
		0113		#	#	24.3×25.2×12.0	7.26	N	-	I・IV	H・M	#
		0050		#	#	63.0×29.1× 6.4	27.58	N	-	N	I・III	M
-2	#	0391	-2	#	#	24.5×19.3× 8.4	4.12	H(2)	-	I・IV	B	#

### 19ブロック遺物

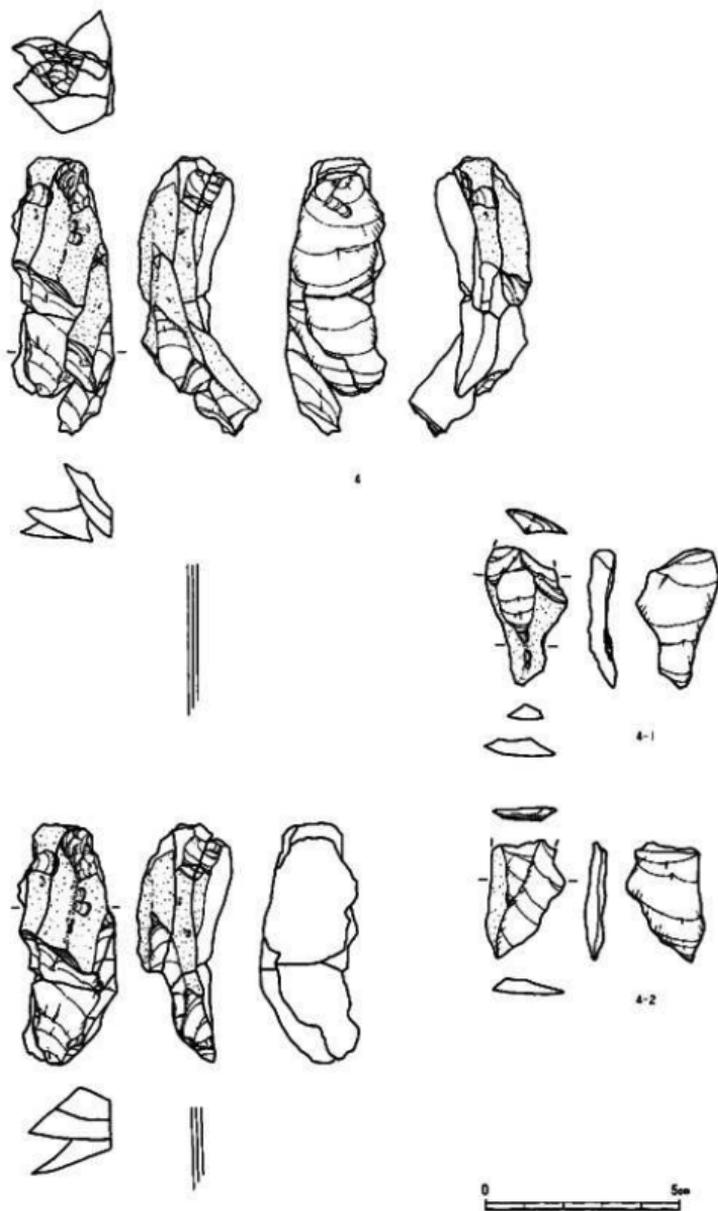
1～3、5、6は黒曜石製、4は珪質頁岩製のナイフ形石器である。ともに縦長剥片を素材にし、1は左側縁と基部側の右側縁に調整を加えている。基部側は中間で欠損する。左側縁のブランティングは直線的で、背面は横方向の剥離痕が占めている。2も左側縁に調整を加えたもので、ブランティングは背面から主要剥離面方向に向って行われている。先端部は欠損する。3は縦長剥片の先端部に斜めに直線的な調整を加えるものである。基部側は欠損する。4は珪質頁岩製で、基部側の右側縁に背面から主要剥離面方向に向って調整を加えている。打痕はブランティングで除去される。先端部は欠損している。5、6はナイフ形石器の先端部破片である。

7、9、10は縦長剥片を素材にした使用後を有する剥片である。7は先端部に、9は左側縁、10は両側縁に微細剥離痕を認める。

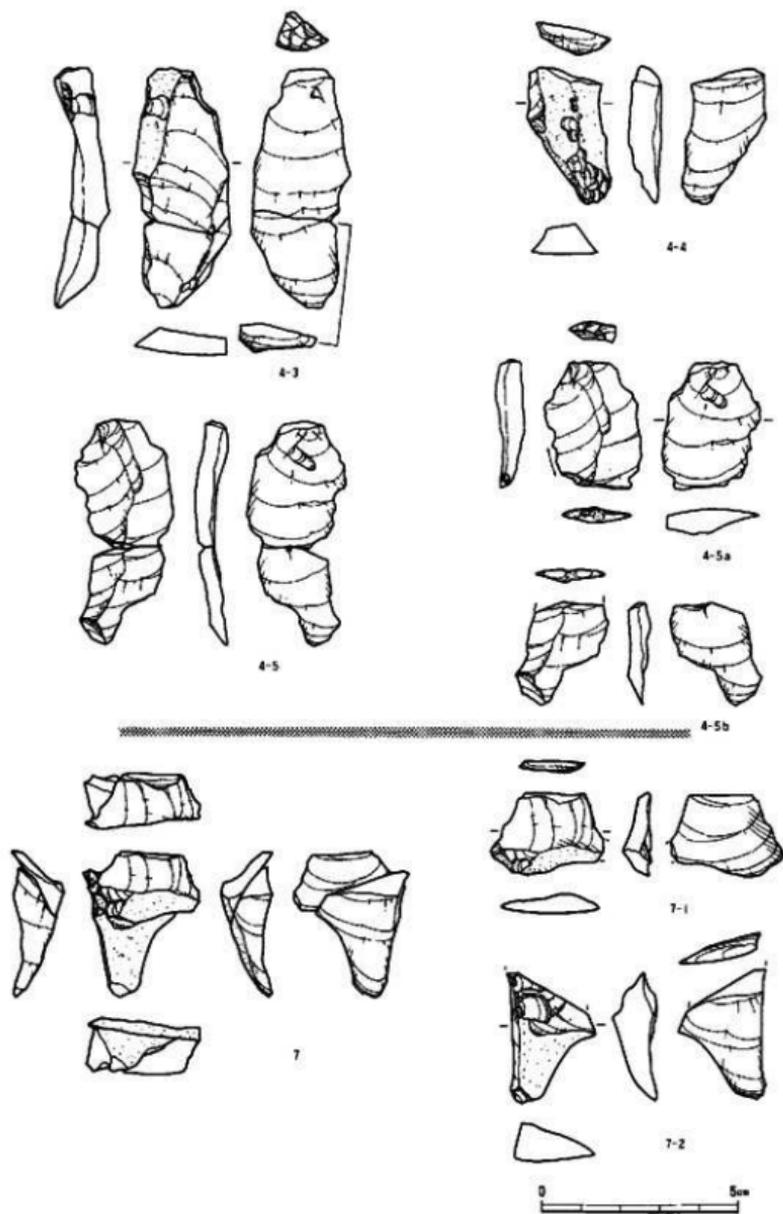
8、11は縦長剥片である。8は中央から二分され、さらに両破片とも先端部を折損する。意識的な切断である可能性がうかがえる。11は大形な縦長剥片である。



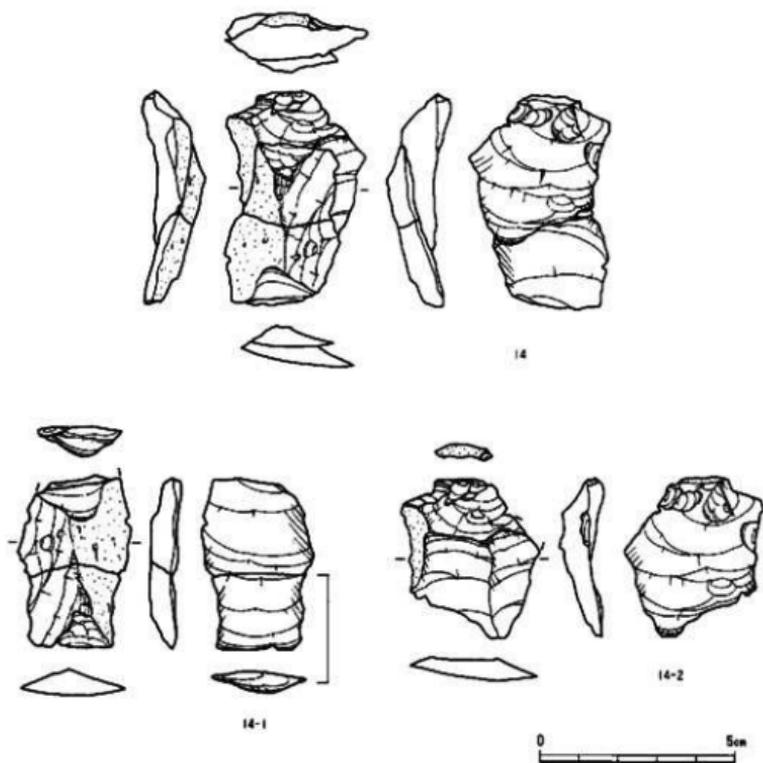
第88図 19ブロック石器実測図



第89図 19アロック接合資料4実測図



第90図 19ブロック接合資料4・7実測図



第91図 19ブロック接合資料9実測図

#### 接合資料4 (12)

比較的幅の狭い石核を使用し、剥片5点が接合する。母岩の断面形は角張った長方形で、三方が表皮でおおわれる。下方から連続して剥片を5点（未検出2点）剥離するが、角張った表面を石核調整するように剥離している。各剥片とも折損しているため打面観察はできない。次に上位に打面を設定し、打面調整を加えながら剥片を2点剥離する。

12-1、2、4は下方から打撃を加えて剥離した縦長剥片で、中間部で折れ頭部側は欠損している。背面には自然面を多くとどめている。12-3、4は上位から剥離された縦長剥片で、丁寧に打面調整されている。12-5については、途中で切断し、頭部側の剥片(12-5a)の切断面に調整を加えている。また、左側縁に微細剥離痕を認める。

#### 接合資料9 (13)

表皮に近い部分の剥片2点が接合している。13-1は背面に横方向の剥離痕を有する。頭部は

欠損する。13-2も頭部を欠損する。

#### 接合資料7(14)

縦長剥片が2点接合する。上面に接合する剥片は下位方向からの剝離、下面のものは上位方向からの剝離である。

14-1は頭部を欠損する縦長剥片で、背面右側縁に自然面を残す。左側縁は横方向の大きな剝離痕が占めている。14-2は自然面打面の幅広縦長剥片である。左側縁に自然面を残す。

19ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ型石器	掻器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	碎片	石核	敲石	礫片	合計
黒曜石	1												
#	2	5					5	56	10				76
珪質頁岩	1								1				1
#	2	2											2
#	3												
#	4												
安山岩													
不明								1	108				109
合計	7						5	57	119				188

19ブロック石器属性表

No	グランド番号	遺物番号	検出番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折衝	接合資料	
1	2G-77	0002	1	ナイフ	黒曜石 2	28.5×16.9×6.8	2.71	N	-	I・II	H・B		
2	2G-76	0007	2	#	#	20.9×13.5×5.0	1.14	H(1)	-	III	B		
3	2G-77	0162	3	#	#	28.7×19.0×5.0	1.86	N	-	I	B		
4	#	0006	4	#	珪質頁岩 2	24.2×15.0×3.3	1.18	N	-	I	-		
5	#	0093	5	#	黒曜石 2	5.9×10.2×4.5	0.68	N	-	I	B		
6	#	0008	6	#	#	9.0×11.0×5.5	0.51	N	-	I	B		
7	2G-87	0001	7	U・F	#	23.6×22.9×4.8	2.17	H(1)	-	I	-		
8	2G-77	0138	8	剥片	#	26.8×36.7×9.1	7.60	H(2)	T	N	I・II	L M・R	
		0101											
9	#	0142	9	U・F	#	18.9×14.3×4.2	0.91	H(1)	D	I・IV	M		
10	#	0060	10	#	#	25.9×19.2×4.3	1.58	N	-	N	I	M	
11	#	0004	11	帆片	#	53.5×50.7×14.26	15.64	H(4)	-	I・II・IV	B		
		0158											
12-1	#	0001	12-1	U・F	#	35.3×21.3×6.7	2.73	N	-	N	I	M	接合資料4
-2	#	0136	-2	剥片	#	28.8×21.7×4.5	2.23	N	-	N	I	M	#
-3	#	0009	-3	#	#	66.0×25.8×9.4	13.19	H(2)	D	N	III	M	#
		0063											
-4	#	0055	-4	#	#	36.7×22.1×8.0	5.28	N	-	N	I	M	#
-5	#	0106	-5	R・F	#	33.5×23.8×6.7	5.12	H(4)	-	I	M	#	
-6	#	0006	-6	ナイフ	珪質頁岩 2	24.2×15.0×3.3	1.18	N	-	I・III	M	#	

13-1	#	0639	13-1	剥片	黒曜石 2	21.1×19.1×5.9	2.31	N	-	N	IV	M	接合資料7
-2	#	0054	-2	#	#	33.6×22.3×10.8	3.60	N	-	N	I・II	M	#
14-1	#	0137	14-1		#	#	46.8× 29.4× 7.3	8.03	N	-	N	I・III・ IV・H・ M	接合資料9
		0032											#
-2	#	0105	-2	#	#	41.4×34.7×10.4	9.33	C	T	N	I・III	-	#

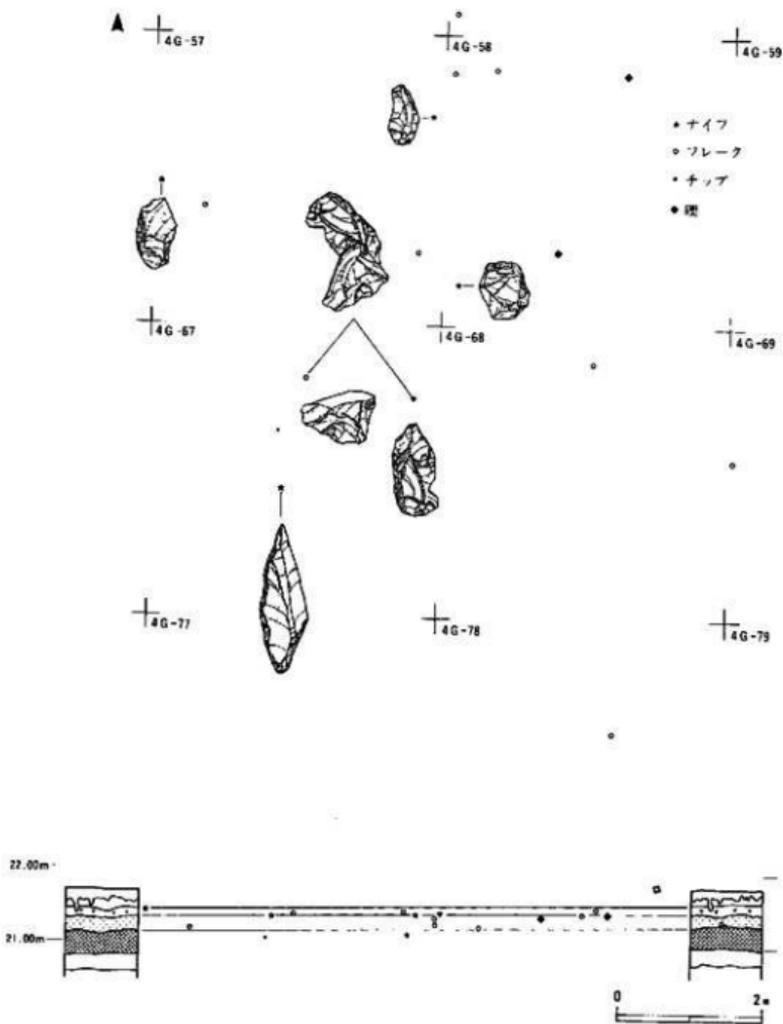
特徴 3ブロックは互いに近接し、石材組成では黒曜石が97%以上を占める共通の要素をもっている。また、同一母岩の共有からも、独立した領域ではなく互いに関連し合うブロックであることが推測できる。ことに、ブロック間の石器接合で興味深い関係を認めた。

接合資料2および3は両ブロック出土石器が接合する好資料で、接合資料2の剥片剥離工程の途中段階までに剥離した剥片(14-1~5)は18ブロックで検出し、剥片剥離工程の終了段階までの剥片と石核(14-6・7)は17ブロックで発見している。また、接合資料3においてははじめの段階で剥離した横長剥片を素材にしたナイフ形石器が17ブロックで、その後の剥片剥離工程で産出した剥片は18ブロックで検出している。これは、いくつかの状況を想定できるが、接合資料2の在り方からすると17ブロックに剥片を移動し製品化しているか製品を持ち込んでいる可能性が高いように思える。また、接合資料1の母岩である黒曜石1は17ブロック固有の石材で、分割石核から剥離された剥片は2グループの分布域があり、母岩分割作業を行ったと想定できるブロック北側で剥片が南北方向に分布するグループは、1A・B、2Cおよび石核調整剥片があり2Cbを除いてさほど良質の剥片を得ていない。それに対し、南側で東西方向に分布するグループは2A・Bで、接合外のナイフ形石器を中心とした製品の分布と一致し、良質の剥片を獲得し製品化に成功している。このことは、17ブロック内で作業地点の移動もしくは複数人の製作者を想定することができ、後者のグループの分布域に黒曜石2を母岩とする接合資料2の石核や接合資料3の製品が所在することは18ブロックから17ブロックへ作業地点の移動を示唆している。

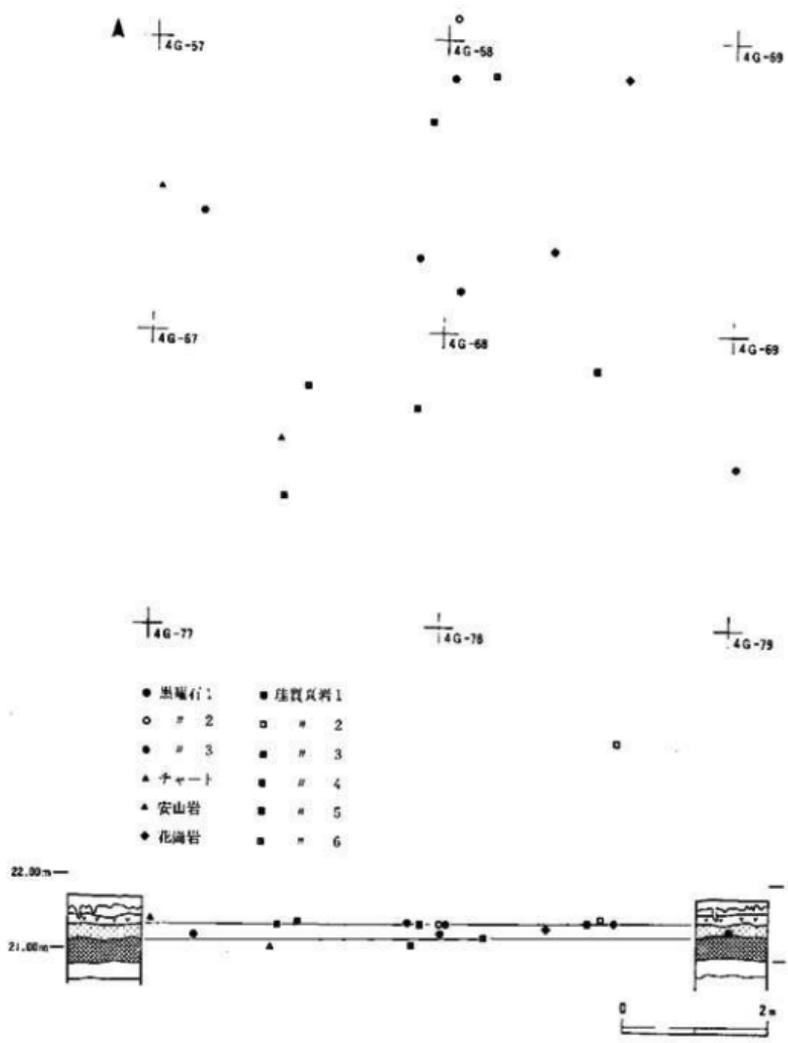
## 20ブロック (第92~94図、図版8・22)

状況 調査区西側地区の4G-48・57・58・67・68・78区におよぶ南北10.0m、東西8.0mの範囲に17点の遺物を検出した。広範囲に分布するが、特に集中する地点はなく分散した分布状況を示す。石器の石材は黒曜石と珪質頁岩が主体を占めるが、単独の石材が多く、製品の頻度も高い。出土層位はVI~VII層でVI層下部からVII層上部にかけて集中する。器種構成はナイフ形石器5点、剥片9点、碎片1点、礫2点である。

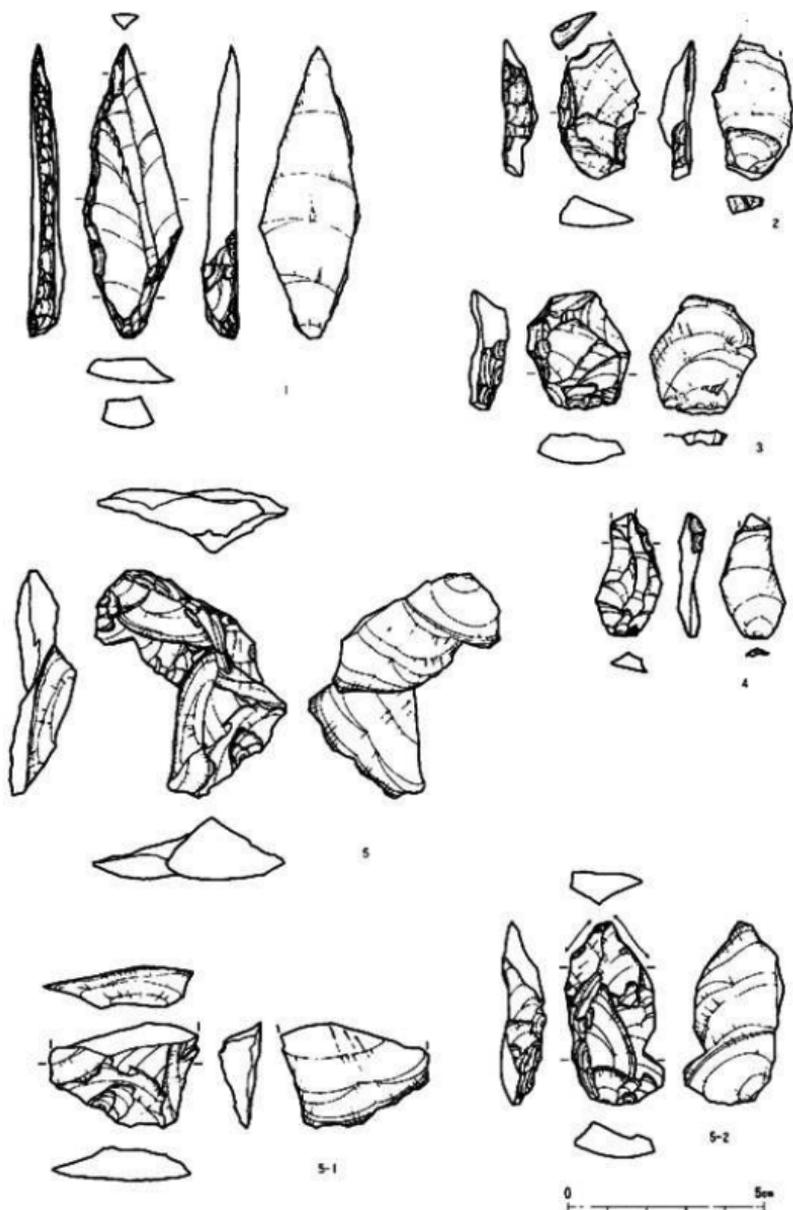
遺物 1~4はナイフ形石器である。1は珪質頁岩の縦長剥片を素材にした細身の大型なナイフ形石器で、両側縁に調整を加え、左側縁の中間から先端部にかけて刃部を設けている。ブランティングは丁寧で、左側縁は主要剥離面方向から、右側縁は背面方向から調整を加える。打瘤は除去している。2は安山岩製の縦長剥片を素材にしたもので、先端部を欠損する。左側



第92図 20ブロック器種別分布図



第93図 20ブロック母岩別分布図



第94図 20ブロック石器接合資料1実測図

縁の中間部と右側縁の基部に調整を加え、打縮は残す。右側縁刃部裏面には微細剥離痕を認める。3は黒曜石製の幅広い縦長剥片を素材にした寸づまりな形態のナイフ形石器である。比較的丁寧な頭部調整を施し、左側縁の中間部から基部にかけて調整を加える。ブランティングは背面方向から行われている。4は珪質頁岩製の小形縦長剥片を素材にしており、先端部は欠損する。右側縁中間部から先端部にかけて調整を加えている。

5は縦長剥片2点の接合資料である。ともに剥離方向は同じであることから同一打面を使用している可能性が高い。背面の状況から剥片剥離工程における打面は多方向に設定しているようである。5-1は幅広い縦長剥片の先端部のみが遺存するもので、背面構成は複数方向からの剥離痕が観察できる。5-2は縦長剥片を素材にしたナイフ形石器である。左側縁に調整を加えている。ブランティングは背面方向から行われ、比較的大きな剥離である。先端部両側縁に微細剥離痕を認める。

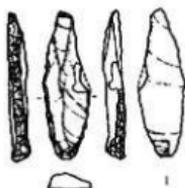
特徴 石材の種類が多く、破片がほとんどないこと、製品の占める割合が大きいことなどから石器消費の場所と考えられる。

20ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 型石器	掻器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	破片	石核	敲石	礫片	合計
黒曜石	1	1						3					4
#	2							1					1
#	3							1					1
チャート									1				1
安山岩	1												1
珪質頁岩	1	1											1
#	2							1					1
#	3	1						1					2
#	4	1											1
#	5							1					1
#	6							1					1
花崗岩												2	2
合計	5							9	1			2	17

20ブロック石器属性表

No	グループ 番号	遺物 番号	検出 番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
1	4G-67	0004	1	ナイフ	珪質頁岩4	72.1×26.6×8.7	11.77	N	-	I	-	
2	4G-57	0001	2	#	安山岩1	35.8×21.5×5.42	5.42	H(2)	-	I	-	
3	4G-58	0001	3	#	黒曜石1	29.8×26.8×8.7	6.36	H(1)	T	I・II・III・N	-	
4	4G-57	0008	4	#	珪質頁岩1	17.5×30.3×5.1	1.93	H(1)	T	I	B	
5-1	4G-67	0001	5-1	ナイフ	珪質頁岩3	40.7×40.3×10.1	9.57	H(1)	T	I・II	-	
2	#	0002	-2	剥片	#	30.3×36.4×9.0	8.15	N	-	I・II・III	M	



4H-70

- ナイフ
- ・ チップ
- フレーク



4G-79



4H-70

- 黒曜石 1
- ▲ 佳質頁岩 1
- チャート 1

4H-79



第95図 21ブロック石器実測図、器種別・母岩別分布図

## 21ブロック (第95図、図版22)

状況 調査区東側地区の4H-70区に3点の石器を検出した。石材は珪質頁岩、黒曜石、チャートで、出土層位はVII層である。器種構成はナイフ形石器1点、剥片1点、砕片1点である。

遺物 1は珪質頁岩製の縦長剥片を素材にしたナイフ形石器である。左側縁と右側縁の基部から中間部にかけて調整を加えている。ブランディングは丁寧に施し、右側縁に刃部を設けている。左側縁の調整で打痕は除去している。

特徴 単独に近い出土状況を示し、石器消費の場所と考えてよい。

21ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 型石器	掻器	削器	ピアス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	燧石	礫片	合計
黒曜石	1							1					1
珪質頁岩	1	1											1
チャート									1				1
合計	1							1	1				3

21ブロック石器属性表

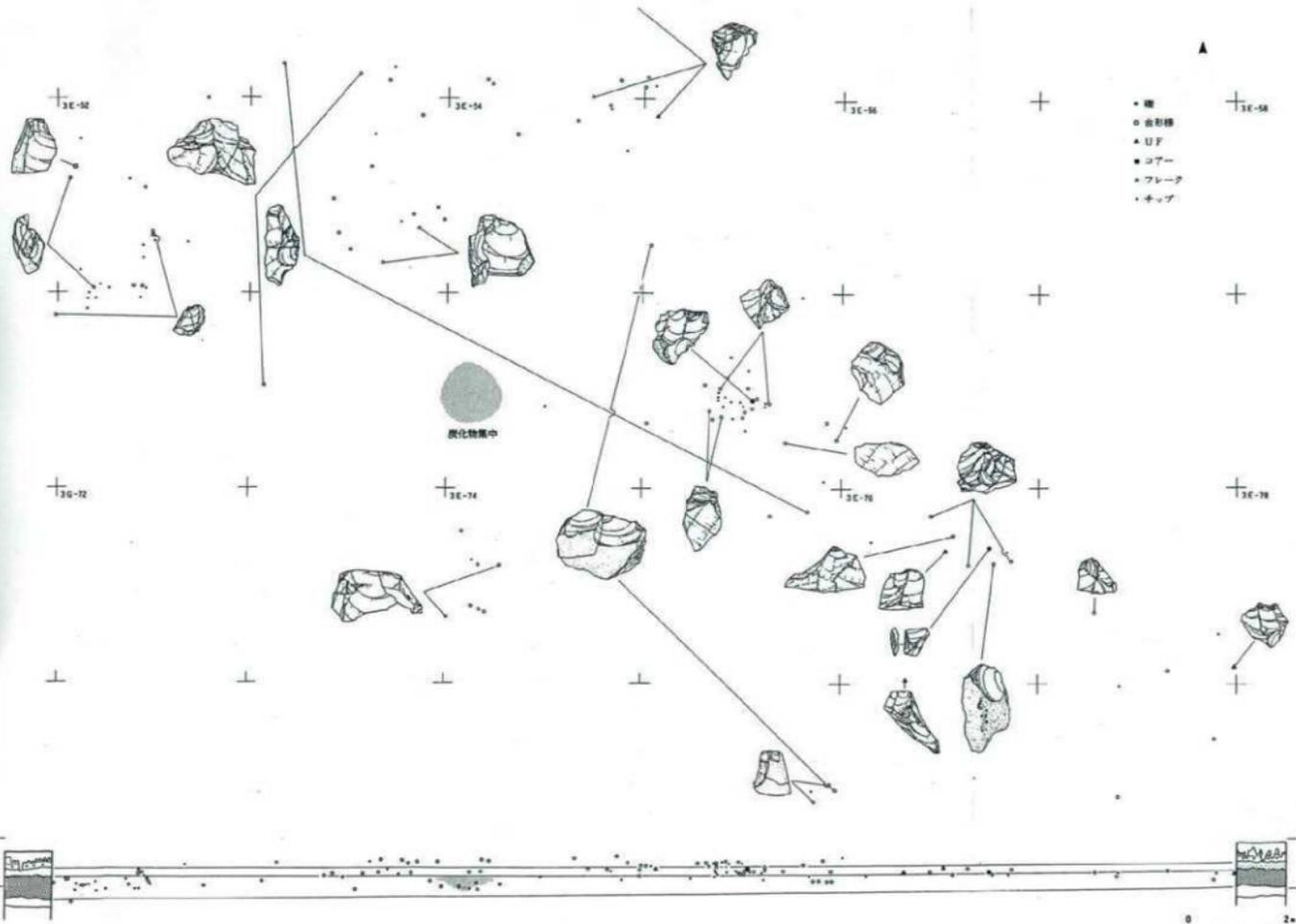
No.	グリッド 番号	遺物 番号	検出 番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打痕形状	打痕調整	背面構成	折面	検査資料
1	4H-70	0002	1	ナイフ	珪質頁岩	52.3×16.2×6.3	5.45	N	-	-1	-	

## 22ブロック (第96～107図、図版9・22・23)

調査区西側地区の3E-52～87区におよぶ南北21m、東西24mの広範囲に123点の遺物を検出した。出土層位はVII層からIX層にかけてであり、若干南傾斜であるため上下差はあるが、ほぼIX層上部に分布の中心をもつものと考えられる。調査時は切れ目なく遺物が散在したため、単一のブロックとしてあつかったが、整理を進めていく段階でいくつかのクラスターに分れることが判明した。いくつかの密集する地点を中心に7クラスターと1炭化物集中地点があり、各クラスターを東から22ブロックa、22ブロックb・・・22ブロックhと呼称した。

22ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 型石器	掻器	削器	台形 石器	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	燧石	礫片	合計
黒曜石	1								1				1
砂岩									1				1
流紋岩	1							8	17				25
#	2							4	2				6
#	3							2					2
安山岩	1							26	16				42
#	2							3	1				4



- 塊
- 金形標
- ▲ UF
- コア
- ◐ フレイク
- ◑ チップ

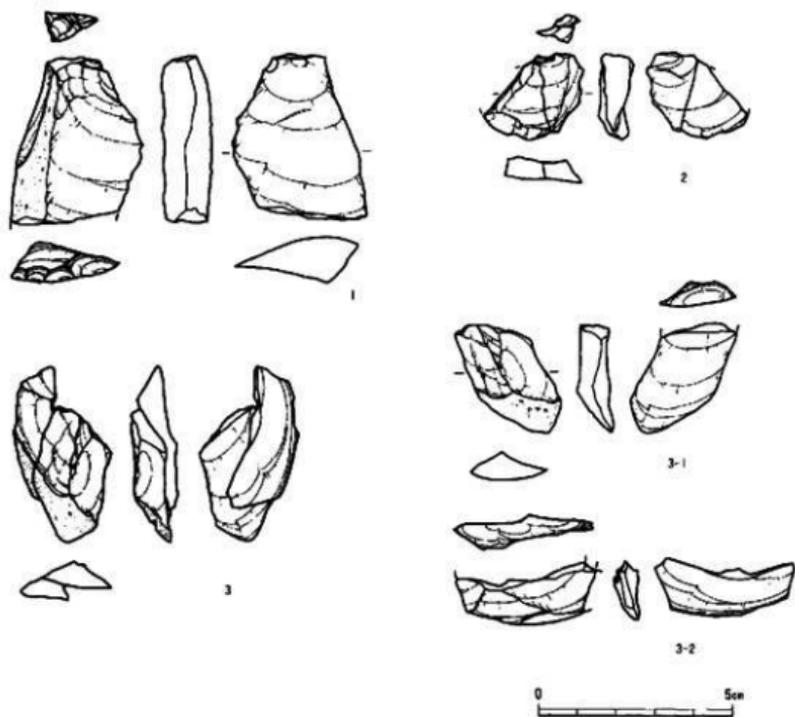
炭化物集中

第44図 22ブロック群種別分布図

0 2



メノウ 1				1	8	4			13
＃ 2				1	3	2			6
＃ 3					1				1
チャート						1			1
珪質頁岩 1					3	2			5
＃ 2					5	2			7
＃ 3							1		1
＃ 4					3	1			4
＃ 5				1					1
＃ 6				1					1
＃ 7					1				1
＃ 8			1						1
合計			1	4	67	50	1		123



第98図 22aブロック石器実測図

## 22ブロック a

状況 3E-52・62区にあり、南北3.6m、東西2.8mの範囲に24点の遺物を検出した。南側に分布の中心があり、北側は散漫である。石材は流紋岩1が主体で珪質頁岩、黒曜石、砂岩が混在する。器種構成は二次加工を有する剥片1点、剥片8点、碎片15点である。クラスター内で剥片の接合がある。

遺物 1は流紋岩製の縦長剥片を素材にした二次加工を有する剥片で、先端部の切断面に調整を加えている。背面には自然面を残す。2も同一石材の縦長剥片である。中央部の折面で接合する。左側縁は欠損する。

3もやはり同一石材の縦長剥片同志の接合資料1である。3-1は頭部側を欠損する縦長剥片で、背面の左側縁は横方向の彫離の打面として用いられている。また、自然面も残す。3-2は幅広の剥片の先端部のみが遺存するもので、先端部には自然面を残す。

22 a ブロック石器組成表

石材	器種	台形機器	R・F	U・F	剥片	碎片	石核	合計
流紋岩	1		1		6	10		17
珪質頁岩	1				2	3		5
黒曜石						1		1
砂岩						1		1
合計			1		8	15		24

22 a ブロック石器属性表

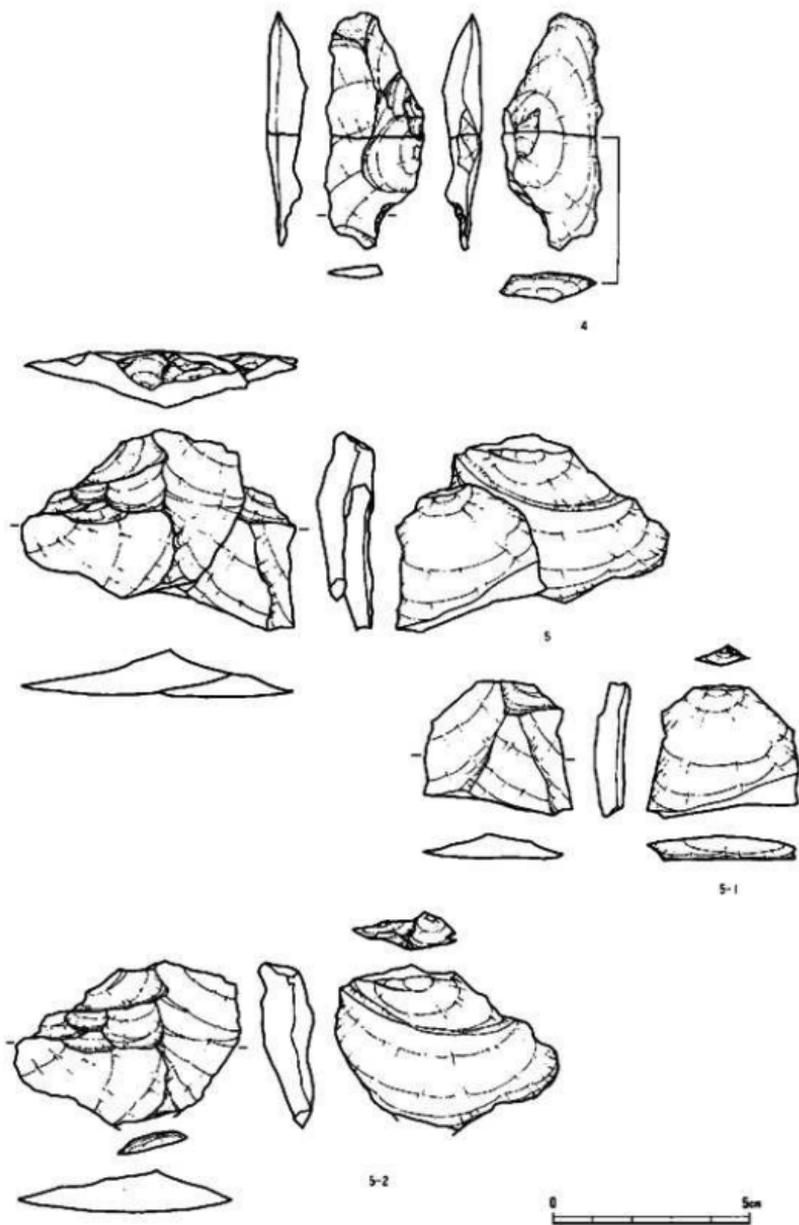
No.	グリッド番号	遺物番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
1	3E-52	0015	1	R・F	流紋岩 1 42.6×29.9×30.6	14.47	H(3)	D・T	N	I・N	B
2	3E-52	0010	2	剥片	# 20.8×21.5×6.6	2.45	H(2)	T		I・N	L
	3E-62	0001									
3-1	3E-52	0014	3-1	#	# 34.7×18.8×8.0	3.26	N	-	N	I・N	M 接合資料1
-2	#	0002	-2	#	# 11.7×36.5×6.7	2.74	N	-	N	I	B #

## 22ブロック b

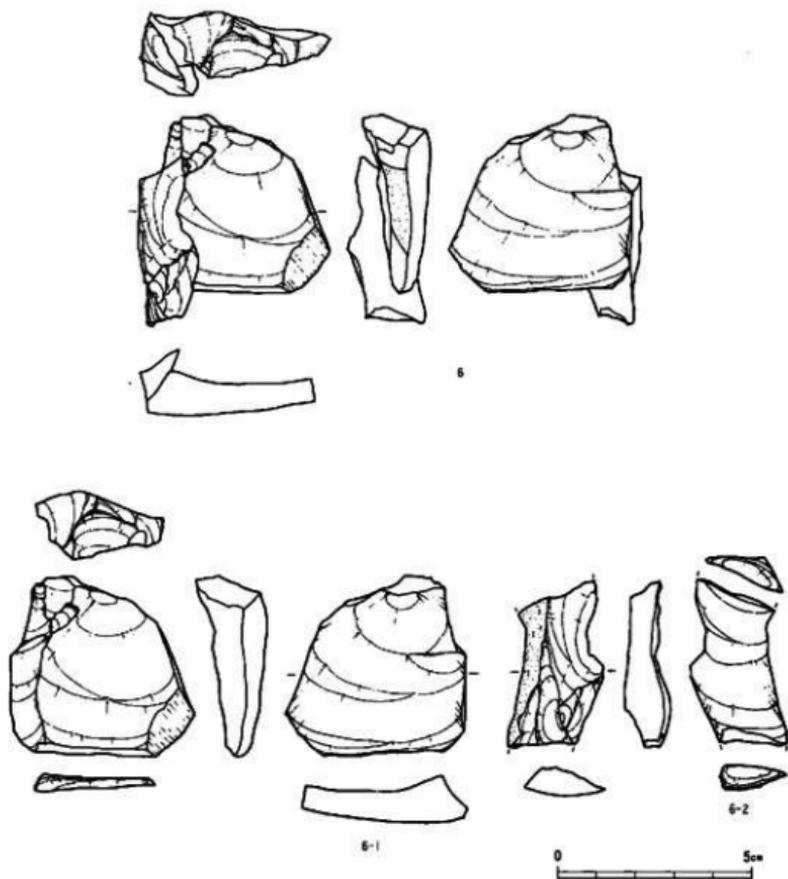
状況 3E-43・52・53・63区にあり、南北6.6m、東西5.0mの範囲に18点の遺物を検出した。全体に散漫な分布であり、石材は安山岩1、流紋岩2が主体である。クラスター内で1点、ブロックを越え22ブロック e と1点接合資料がある。器種構成は剥片15点、碎片3点である。

遺物 4は安山岩製の横長剥片の中間の折面で接合する二次加工を有する剥片である。頭部調整で側面を薄く仕上げ、右側縁の先端付近に調整を加えている。調整は背面から行われる。背面には自然面を若干残す。

5は安山岩製の幅広縦長剥片の接合資料2である。最初の打面から1cmほど下げて2点目の



第99図 22bブロック石器実測図(1)



第100図 22bブロック石器実測図(2)

打面の高さとしている。5-1は縦長剥片で中間で欠損し先端部を欠く。打面調整を施している。5-2は横幅の方が広い剥片で、背面には鱗状の小剥離が基部側に認めるが、当該資料の剥離にあたり打面調整を丁寧に施し、剥離を行っている。主要剥離面は節理により階段状を呈している。

6は流紋岩製の剥片の接合資料3である。同一の打面を使用して剥離している。両側に自然面が認められることから、母岩の幅をいっぱいに使って作出した剥片であることがわかる。6-1は横幅の広い大形剥片で、先端部は欠損する。背面に認める剥離痕から幅広いの剥片を剥離していることがわかる。6-2は縦長剥片の頭部と先端部を欠損する。左側縁に自然面が残る。

22b ブロック石器組成表

石材	器種	台形模石	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	合計
安山岩	1				9	1		10
"	2				1			1
流紋岩	1				1			1
"	2				4	2		6
合計					15	3		18

22b ブロック石器属性表

No.	グリッド番号	遺物番号	押印番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料	
4	3E-43	0001	4	R・F	安山岩	1	32.6×63.3×8.7	10.26	H(1)	T	N I+II	M	
	3E-75	0003											
3-1	3E-63	0001	5-1	剥片	"	31.2×28.7×6.7	9.53	H(1)	D	- 1	M	接合資料2	
-2	3E-43	0004	-2	"	"	38.8×57.7×13.1	22.77	H(1)	D	I・M	B	"	
6-1	3E-53	0007	6-1	"	流紋岩	2	45.5×46.5×14.7	31.47	H(3)	T	S 1	B	接合資料3
-2	3E-53	0001	-2	"	"	41.2×20.2×11.1	8.33	N	-	N II	H・B	"	

## 22ブロックc

状況 3E-43・44・53・54区にあり、南北6.5m、東西4.0mの範囲に16点の遺物を検出した。全体に散漫な分布である。石材はメノウ1が主体を占め、最も外方から出土した珪質頁岩7の剥片が22ブロックhと接合する。器種構成は二次加工を有する剥片1点、剥片10点、砕片4点である。

遺物 7はメノウ製の縦長剥片が3点接合する接合資料4である。古い剥離面は左側面の自然面を打面に幅広の剥片を剥離し、打面を90°転回して上位を打面とし、7-3を剥離している。ついで、1cmほど打面を下げ7-1・2を剥離している。

7-1は狭小な剥離面を打面とした縦長剥片で、先端右側縁に自然面を残す。7-2は不整形な小形縦長剥片である。7-3は幅広の縦長剥片の右側縁に小剥離痕を認める使用痕を有する剥片である。頭部側には階段状の剥離が認められる。

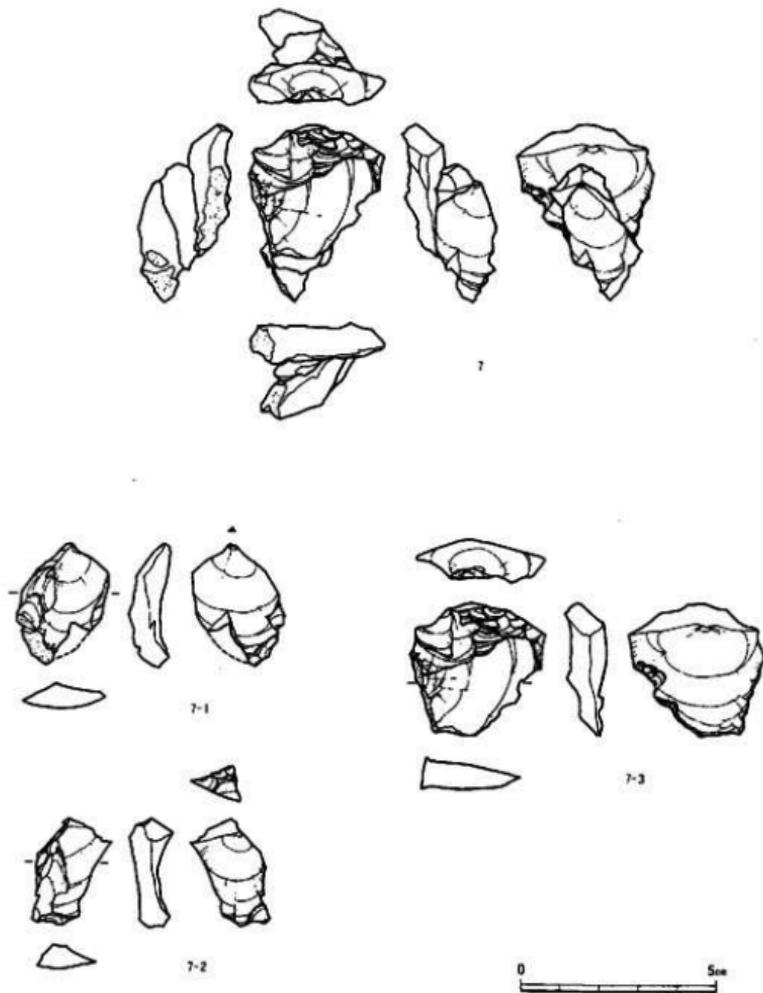
他に、珪質頁岩製の接合資料があるが、22ブロックhで触れることとする。

22c ブロック石器組成表

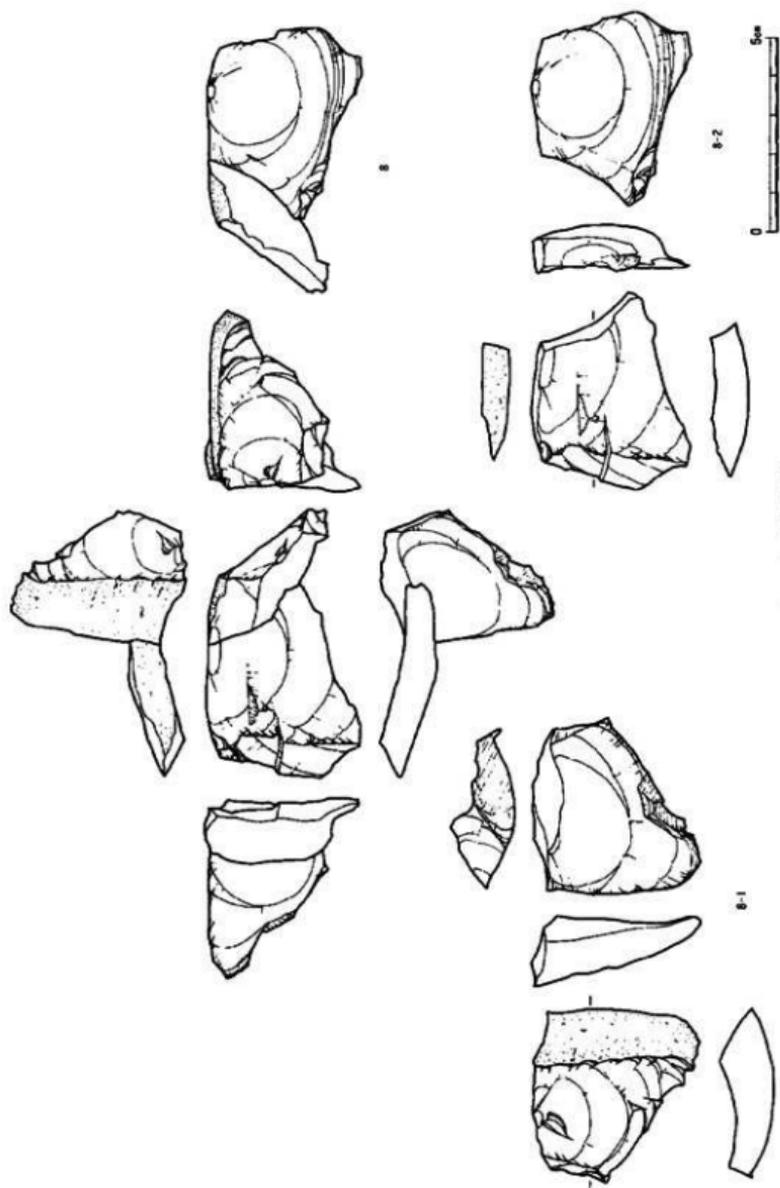
石材	器種	台形模石	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	合計
メノウ	1		1		10	3		14
チャート						1		1
珪質頁岩	7				1			1
合計			1		11	4		16

22cブロック石器属性表

No.	グリッド番号	遺物番号	検出番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	打撃形状	打撃痕跡	背面構成	折痕	接合資料
7-1	3E-44	0005	7-1	刮片	メノウ2	27.3×20.3×7.1	4.05	H(1)	-	N I・II	B	接合資料4
-2	"	0003	-2	"	"	26.6×14.7×8.2	2.64	H(1)	T	I・III	-	"
-3	3E-55	0001	-3	"	"	34.2×35.5×10.5	10.25	H(1)	T	N I・III	-	"
23-2	3E-55	0001	23-2	"	珪質頁岩	48.4×60.6×15.2	38.98	H(2)	T	N I・IV	-	接合資料7



第101図 22cブロック石器実測図



第102図 22.dアロック石器実測図

## 22ブロック d

状況 3E-74区にあり、南北2.0m、東西1.4mの範囲に8点の遺物を検出した。小範囲にまとまった分布を示している。石材は珪質頁岩2が主体で、安山岩2、メノウ2を1点ずつ混入する。器種構成は剥片7点、碎片1点でブロック内で接合資料が1点ある。

遺物 8は珪質頁岩製の剥片2点が接合する接合資料5である。正面上位の自然面を打面にした剥離痕が前段階での剥離作業となり、その剥離面を打面にして側面に残された剥離痕を剥離し、さらに同一打面から8-2を剥離している。その後、打面をもとの自然面にもどし8-1を得ている。

8-1は右側縁に自然面を残す幅広の剥片で、打面は節理面で一部剥落している。背面の剥離痕も幅広である。8-2はやはり幅広の剥片で、打面は自然面打面である。右側面には8-1の打点を観察することができる。

22dブロック石器組成表

石材	器種	台形塊石	R・F	U・F	剥片	碎片	石核	合計
安山岩	2				5	1		6
珪質頁岩	2				1			1
メノウ	2				1			1
合計					7	1		8

22dブロック石器属性表

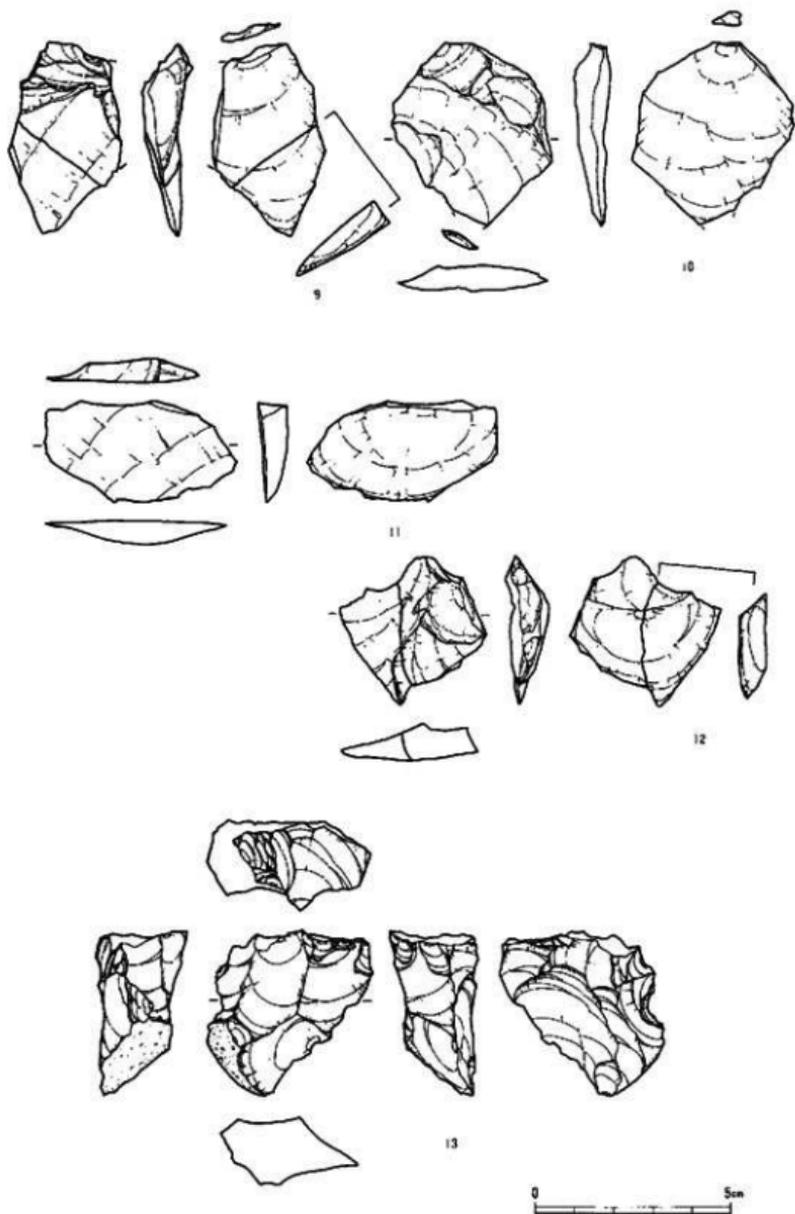
No.	グリッド番号	遺物番号	層位番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折衷	接合資料	
8-1	3E-74	0006	8-1	剥片	珪質頁岩2	45.9×44.3×15.7	24.6	直(2)S	-	N	I・IV	-	接合資料5
-2	"	0005	-2	"	"	37.4×50.2×9.9	22.38	C	-	-	I・III	-	"

## 22ブロック e

状況 3E-64・65・66・75区にあり、南北3.3m、東西6.1mの範囲に32点の遺物を検出した。遺物は北寄りの径1.5mの範囲で集中し、東側に広がりを見せている。石材は安山岩1を主体としており、安山岩2、珪質頁岩3、メノウ1を1点ずつ混入する。器種構成は剥片17点、碎片14点、石核1点である。

遺物 9～12は安山岩製の剥片、13は珪質頁岩製の石核である。9は右側縁を欠損する扁平な縦長剥片、10は幅広の縦長剥片、11は横長剥片、12は中央の折面で接合する横長の剥片である。背面構成は横方向からの剥離痕が主体を占め、打面調整は行わず、剥離面を直接打面としている。

13は上部に打面をもつ円錐状の石核で、打面左側には丁寧な打面調整痕がうかがえる。下部には自然面があることから、さほど大きな母岩ではないようである。上位から縦長剥片を数点剥離しているほかは、側面に横長剥片の剥離痕を認める。



第103図 22eブロック石器実測図

22eブロック石器組成表

石材	器種	台形様石器	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	合計
安山岩	1				16	13		29
"	2				1			1
珩質頁岩	3						1	1
メノウ	1					1		1
合計					17	14	1	32

22eブロック石器属性表

No	グリッド番号	遺物番号	器種	石材	長さ×幅×高さ(mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
9	3E-65	0029	9	剥片	安山岩 1	47.50×28.50×9.3	13.46	H(1)	-	I・II	M・R
		0006									
10	"	0021	10	"	"	40.2×28.7×7.4	12.83	H(1)	T	I・II・N	B
11	"	0019	11	"	"	49.5×25.4×6.2	7.52	H(2)	-	II	-
12	"	0015	12	"	"	36.5×28.5×8.2	9.44	H(1)	N	I・II	M
		0003									
13	"	0013	13	石核	珩質頁岩 3	50.3×31.9×21.3	28.95	-	-	-	-

## 22ブロック f

状況 3E-76区にあり、南北3.5m、東西3.0mの範囲に10点の遺物を検出した。集中地点は北寄り小範囲にまとまり、南に1点離れて使用痕を有する剥片が出土する。石材は珩質頁岩が主体で、安山岩、メノウが少量混在する。器種構成は台形様石器1点、使用痕を有する剥片2点、剥片5点、砕片2点である。

遺物 台形様石器1点、使用痕を有する剥片2点、接合資料などがある。

15は珩質頁岩製の台形様石器で、縦長剥片の中間部を切断し、台形状の形態に整え、左切断面に調整を加えている。右切断面には微細剥離痕を認める。

14、16は珩質頁岩製の縦長剥片を素材とする使用痕を有する剥片である。14は斜めに細長い剥片で、断面形は薄い台形を示し、右側縁に使用痕を認める。16は中間部以下を欠損する幅広い縦長剥片で、左側縁に使用痕を認める。

17はメノウ製の縦長剥片、18は先端部を欠損する安山岩製の横長剥片である。

19は珩質頁岩製の剥片3点が接合する接合資料6である。右上部および右側面を打面として19-2、19-3が剥離され、ついで上部に打面を移して19-3を剥離している。19-1および19-3は横長剥片、19-2は小形な縦長剥片である。

22fブロック石器組成表

石材	器種	台形様石器	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	合計
安山岩	1				1			1
"	2					1		1

珪質頁岩 4				4	1		5
#	5			1			1
#	6			1			1
#	8	1					1
メノウ 3				1			1
合 計	1			2	5	2	10

22f ブロック石器属性表

No.	グリッド番号	遺物番号	標頭番号	器 種	石 材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
14	3E-76	0010	14	U・F	珪質頁岩 6	59.7×23.7×17.5	17.21	H(1)	-	N I・III	-	
15	3E-76	0006	15	台形礫石器	珪質頁岩 8	20.2×25.3×5.5	1.87	N	-	- I・III・IV	R	
16	#	0004	16	U・F	#	32.4×32.6×8.9	9.05	H(2)	T	- I	B	
17	#	0007	17	剥 片	メノウ 3	35.0×67.0×19.9	40.33	H(3)	-	N II	-	
18	#	0003	18	#	安山岩 1	38.7×60.4×11.2	17.63	H(1)	T	N I・III	M	
19-1	#	0002	19-1	#	珪質頁岩 4	22.3×44.1×8.0	7.33	N	-	- I・II・IV	B	接合資料6
-2	#	0005	-2	#	#	13.9×22.1×5.8	1.46	H(1)	-	- I・III・IV	-	#
-3	#	0009	-3	#	#	25.3×43.2×11.7	12.41	H(1)	T	- I・II	-	#

## 22ブロック g

状況 3E-77・87区にあり、南北3.8m、東西3.0mの範囲に7点の遺物を検出した。全体に散漫な分布を示している。石材はメノウ1、2である。器種構成は使用痕を有する剥片1点、剥片4点、砕片2点である。

遺物 20はメノウ製の不整形な幅の広い剥片を素材にした使用痕を有する剥片で、背面頭部には頭部調整風の刻痕が認められる。右側縁上部に微細刻痕が観察できる。21は幅広の剥片である。

22g ブロック石器組成表

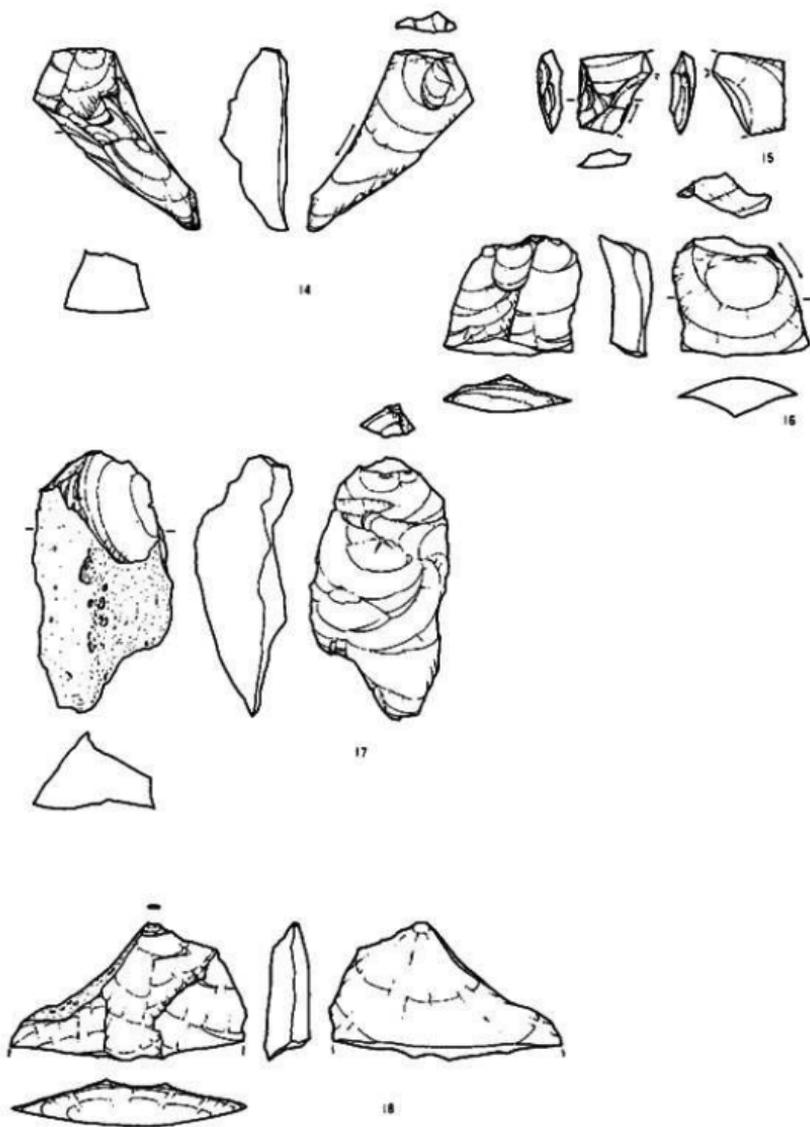
石材	器種	台形礫石器	R・F	U・F	剥 片	砕 片	石 核	合 計
メノウ 1					2			2
# 2				1	2	2		5
合 計				1	4	2		7

22g ブロック石器属性表

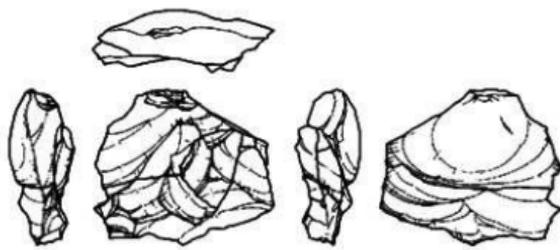
No.	グリッド番号	遺物番号	標頭番号	器 種	石 材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
20	3E-77	0005	20	U・F	メノウ 2	32.7×35.9×10.5	8.47	H(1)	T	- I・III	-	
21	#	0001	21	剥 片	#	26.5×29.6×12.7	7.23	H(1)	T	- I・IV	-	

## 22ブロック h

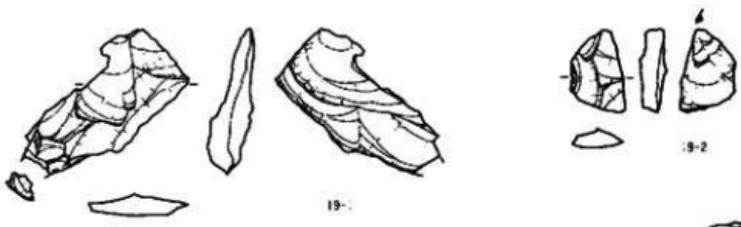
状況 3E-86区にあり、南北0.4m、東西0.6mのきわめて小範囲なかで4点の遺物を検出した。石材は流紋岩を珪質頁岩で、22ブロックcとの接合資料が1点ある。器種構成は剥片



第104図 22fブロック石器実測図(1)

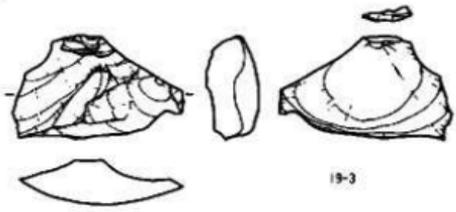


19



19-1

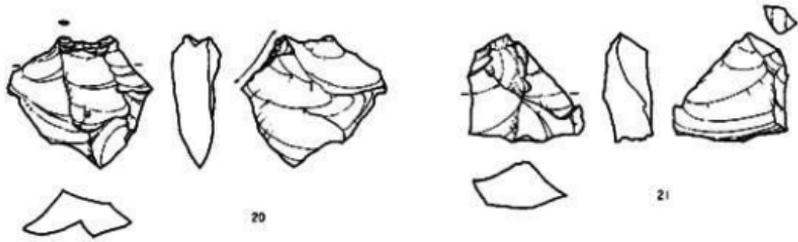
19-2



19-3



第105図 22f ブロック石器実測図(2)



20

21



第106図 22g ブロック石器実測図

3点、碎片1点である。

遺物 22は流紋岩製の縦長剥片で、頭部および先端部を欠損している。背面には自然面が大きく残されている。23は珪質頁岩製の剥片が2点接合する接合資料7である。上面および側面に自然面が確認できることから、母岩の大きさはこれよりきほど大きくはならないようである。石核の上面部分の接合資料と考えられるが、裏面の剥離面では右側面の自然面を打面にした打瘤を本剥片が切って剥離していることから、剥片石核の可能性が高い。なお、23-2は22ブロックcで出土したものである。

23-1は23-2を剥離する際、打撃が分散して剥離した剥片の可能性が高い。左側縁の小剥離痕は角を落とすための剥離と考えられる。23-2の調整痕も角を落とすための剥離と考える。

22hブロック石器組成表

石材	器種	台形横石	R・F	U・F	剥片	碎片	石核	合計
流紋岩	3				2			2
珪質頁岩	2					1		1
#	7				1			1
合計					3	1		4

22hブロック石器属性表

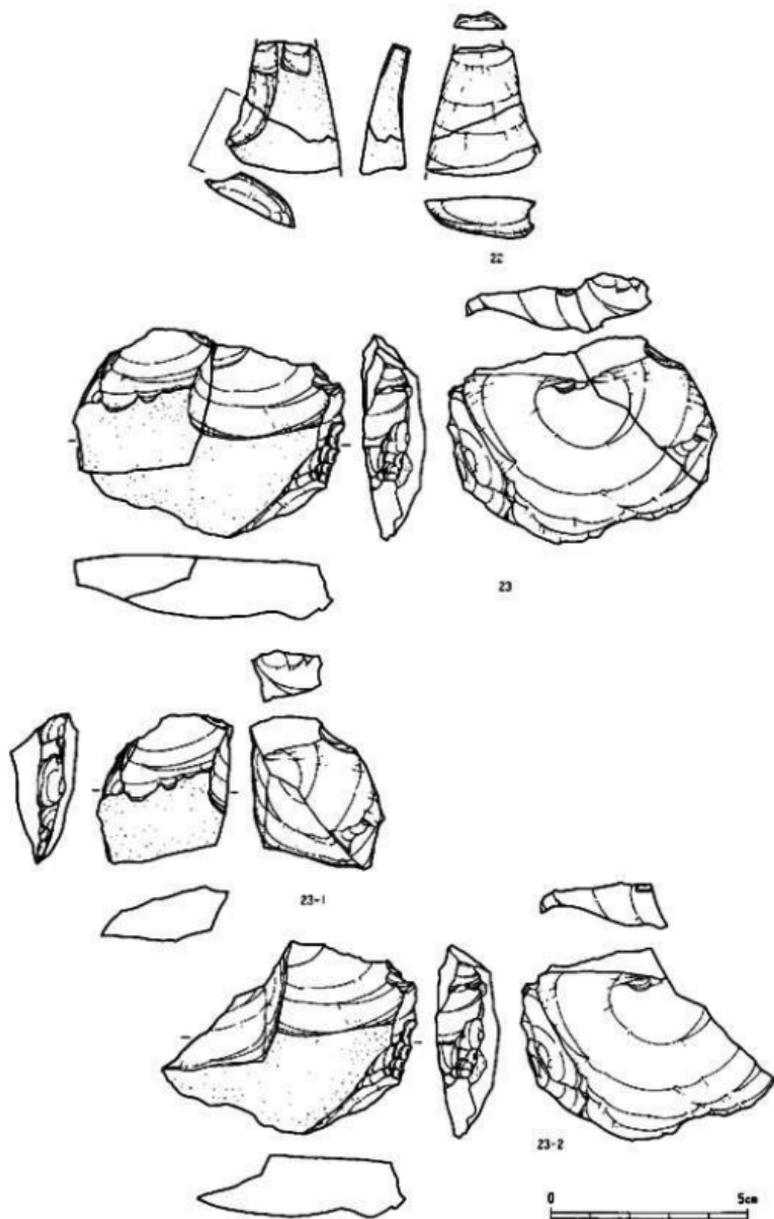
No	グリッド番号	遺物番号	探査番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
22	3E-85	0002	22	剥片	流紋岩3	33.50×27.9×9.4	8.88	N	-	N   I・N	H・B	
#		0003	#	#	#							
23-1	#	8004	23-1	#	珪質頁岩7	32.1×36.6×15.1	17.49	H(1)	-	N	-	接合資料7

### 炭化物集積地点

状況 3E-64区にあり、南北1.2m、東西1.2mの円形を呈し、遺物は伴わなかった。検出面はIX層上面でその段階で平面分布のピークであった。垂直断面は皿状を呈し、中央部で炭化物粒子が密集している。最下底面はIX層下部であった。おそらく22ブロックのなかで機能していたものであろう。炭化物粒子の分布する範囲での土層の乱れはなく、ロームは水平堆積している。

### 特徴

出土層位、分布状況からIX層上部に文化層をもつブロックである。各クラスターごとに主体をなす石材があり、客体的に存在する石材の多くはクラスター間の接合資料や製品で、22ブロックbとfで接合する安山岩2、22ブロックcとhで接合する珪質頁岩7、珪質頁岩8の台形横石などがある。また、安山岩1や珪質頁岩2、メノウ2はクラスター間で共有する石材で、各クラスター間での石材の移動が頻繁に行われたことがわかる。



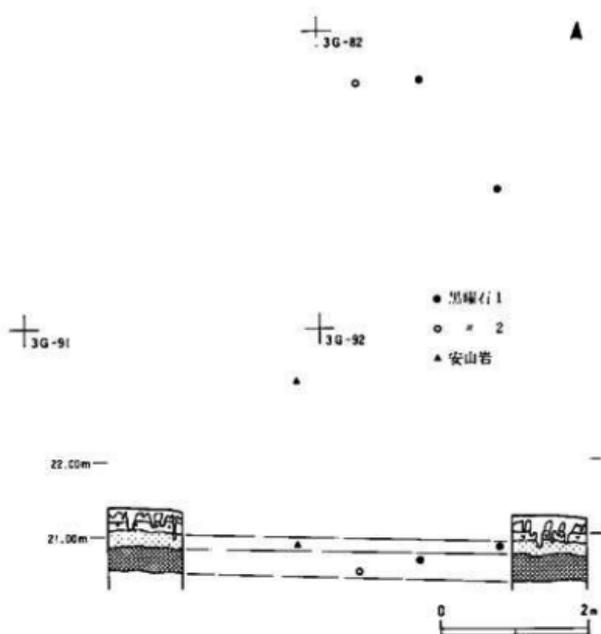
第107図 22bブロック石器実測図

### 23ブロック (第108図)

3G-82・91区に南北4m、東西2mの範囲で4点の遺物を検出した。すべて碎片で黒曜石3点、安山岩1点である。出土層位はⅧ層からⅨ層である。

23ブロック石器組成表

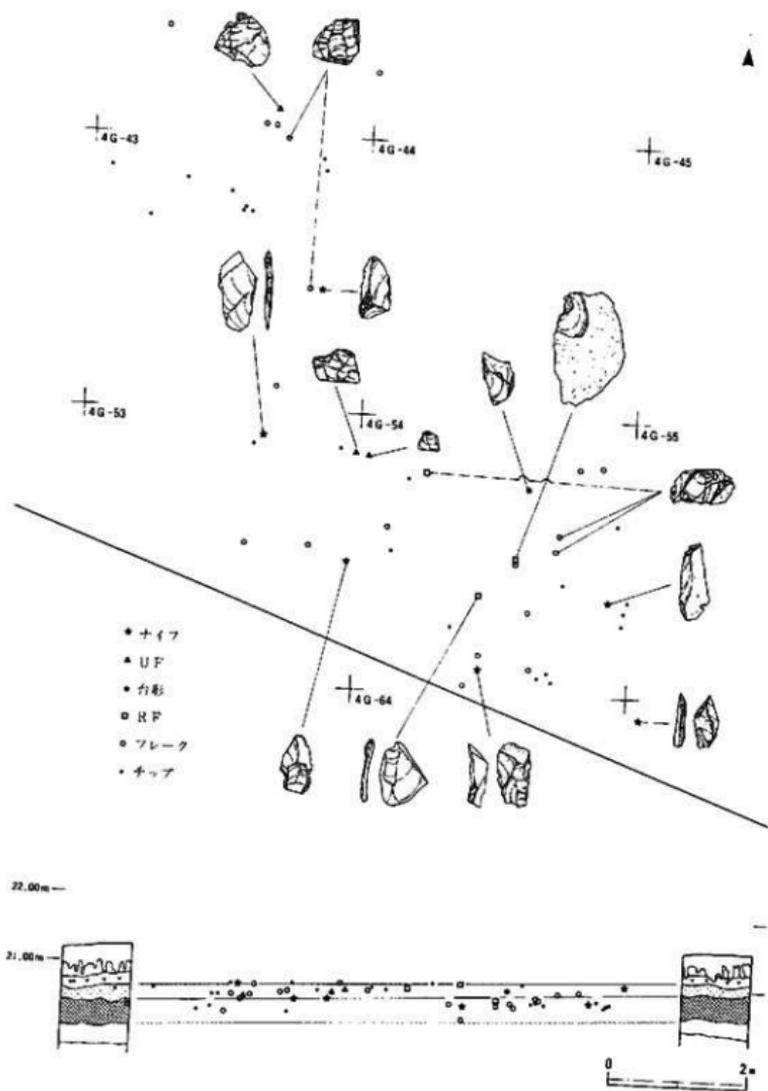
石材	器種	ナイフ 型石器	擗器	削器	ピンス	R・F	U・F	裂片	砕片	石核	敲石	燧石	合計
黒曜石	1							2					2
#	2								1				1
安山岩								1					1
合計								3	1				4



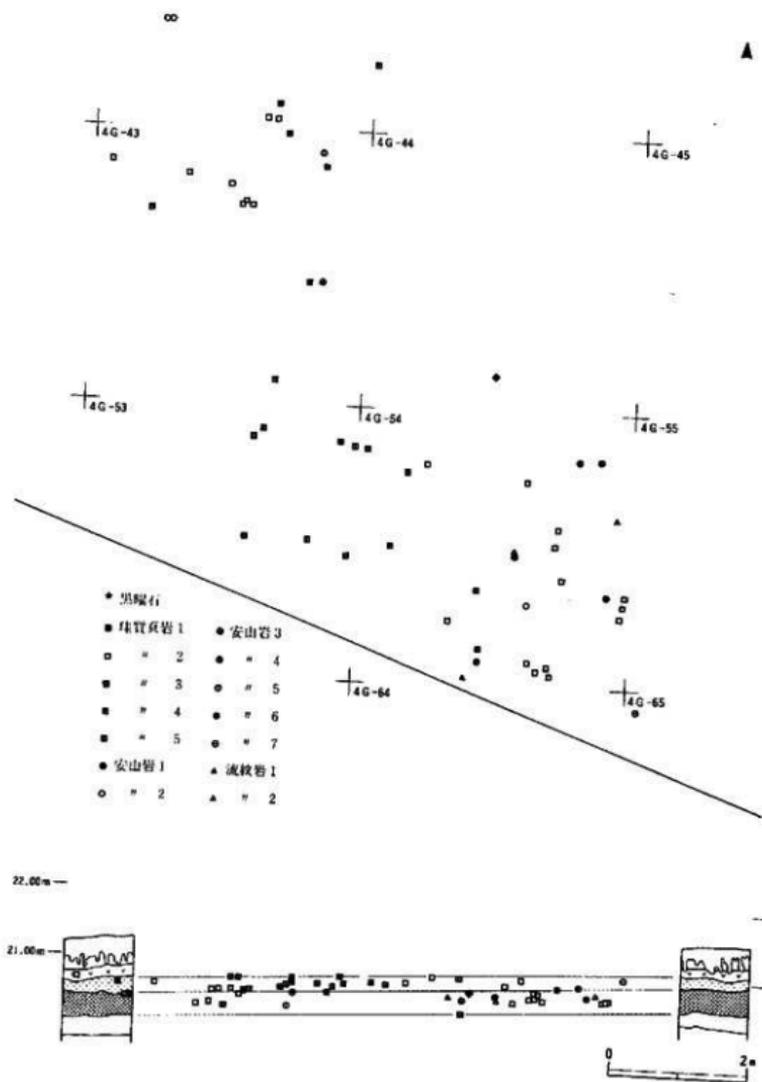
第108図 23ブロック母岩別分布図

### 24ブロック (第109～112図、図版9・23)

状況 調査区東側地区の4G-33・43・44・53・54区におよぶ南北9.8m、東西8.0mの範囲に56点の遺物を検出した。南側は調査区の境界となっているため、遺物分布はさらに南側に広



第109図 24ブロック器種別分布図



第110図 24ブロック母岩別分布図

がるものと考えられる。遺物の分布状況は南側と北西側に集中する地点があるが、ともに珪質頁岩2を主体としていることから、単一のブロックと考えた。両者の中間には珪質頁岩5が散在している。本ブロックの主要石材は珪質頁岩で、他に安山岩、黒曜石、流紋岩が少量混在する。出土層位はⅦ層からⅨ層におよび、Ⅸ層上面に分布のピークをもっている。器種構成はナイフ形石器6点、台形様石器1点、ピエス・エスキュー2点、二次加工を有する剥片3点、使用痕を有する剥片3点、剥片17点、砕片24点である。

遺物 1～5、7はナイフ形石器である。1は比較的小さい安山岩製の縦長剥片の左側縁と右側縁基部側に調整を加え、右側縁中間部から先端部を刃部としている。2は珪質頁岩製の縦長剥片を素材にしたもので、基部側の両側縁に調整を加えている。ただし、基部は欠損する。先端部右側縁には自然面が残る、微細剥離が認められる。3は安山岩製で厚手の縦長剥片の左側縁にプランティングがある。右側縁はほぼ垂直な剥離面で、刃部は左側縁先端部と考える。4は珪質頁岩製の薄い縦長剥片を素材にし、右側縁に調整を、自然面の残る左側縁先端部付近には微細剥離が認められる。5は流紋岩製で左側縁には自然面をとどめ、基部側に調整を加えている。右側縁中央には微細剥離が認められる。7は安山岩製で左側縁先端部と基部に調整を加える。右側縁には自然面が残る。

8は珪質頁岩の台形様石器で縦長剥片の左側面に調整を加え、先端部の右側縁は切断して平坦面をつくっている。刃部には微細剥離痕が観察できる。

10、11は二次加工を有する剥片で、10は流紋岩製の大形縦長剥片の頭部側に比較的大きな調整剥離痕を認める。背面は自然面でおおわれる。11は珪質頁岩製の幅広い縦長剥片を素材にし、頭部左側に小剥離を加えている。

6、9、12は珪質頁岩製の使用痕を有する剥片である。6は小形剥片の左側縁に、9は幅広い縦長剥片の中間折損部に、12は両側縁の一部に使用痕を認める。

#### 接合資料1 (13)

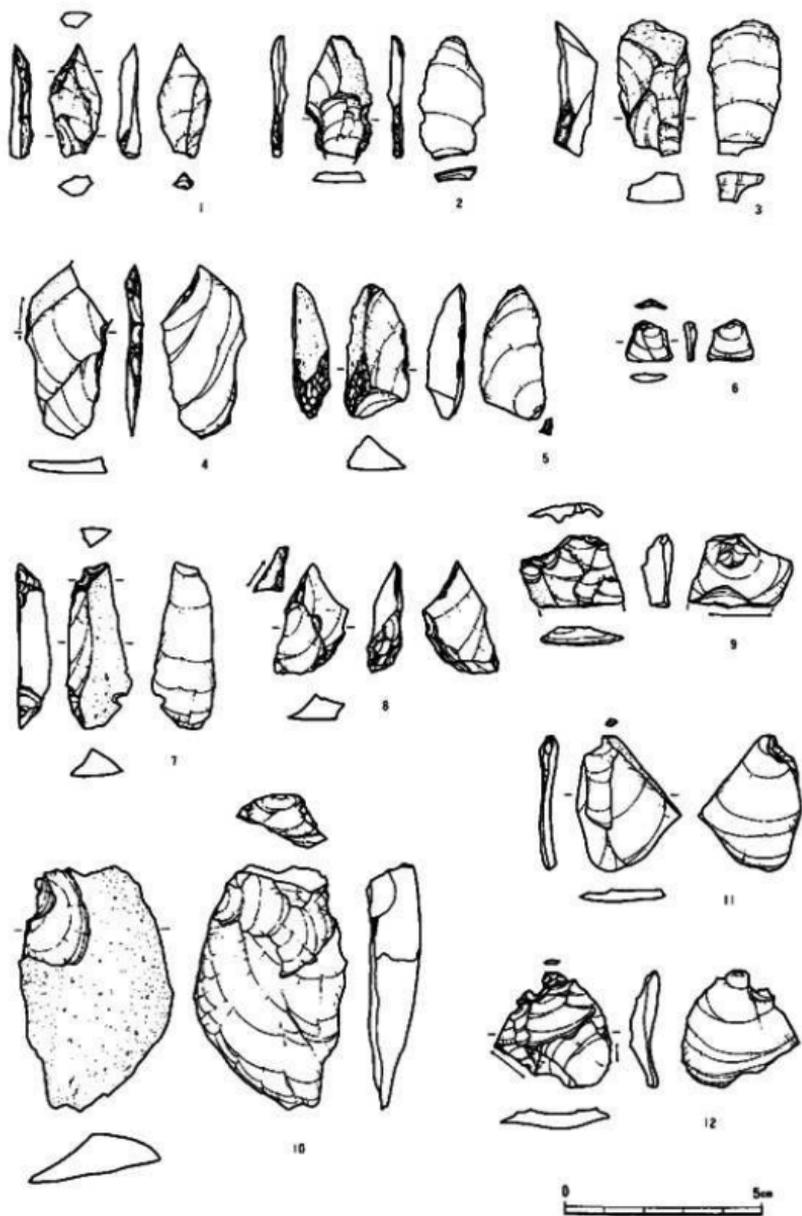
珪質頁岩製で小形の剥片3点が接合する。そのうちの1点は使用痕を有する剥片である。下方から斜めに13-1を剥離し、打面を上部に移動して13-3・2を剥離している。

13-1は縦長剥片で断面はかなりの厚みをもっている。右側面には自然面が残る。13-2は断面三角形の剥片で、頭部付近に微細剥離痕を認める。13-3は厚みのある横長の剥片で、先端部は13-1の剥離面である。

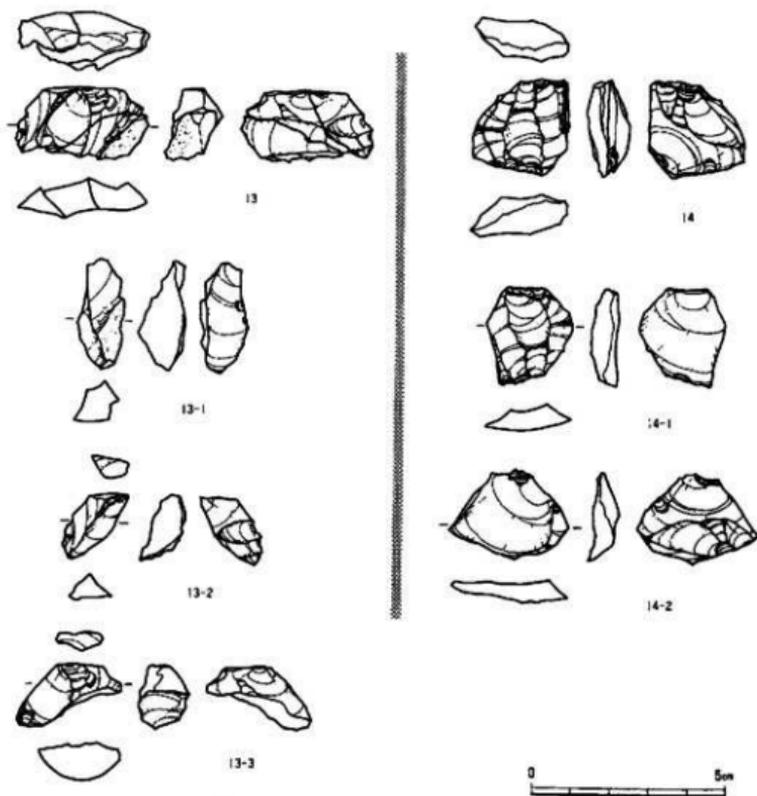
#### 接合資料2 (14)

珪質頁岩製の高極打法で二分割された剥片の接合資料である。正面の剥離は上下から打撃が加わり両方向の剥離痕がぶつかり合っている。裏面も小剥離痕が中央に向っている。

14-1の背面には上下方向からの剥離面が中央でぶつかり合っている。主要剥離面先端にも剥離痕が認められる。14-2は上部に小剥離痕を認める。



第111図 24ブロック石器実測図



第112図 24ブロック接合資料1・2実測図

特徴 珪質頁岩を主体としたブロックで石器の占有率の高いのが特徴である。また、安山岩については特にその傾向が強く、ナイフ形石器4点、二次加工を有する剥片2点、剥片5点、砕片2点である。また、母岩数も多いことから石器消費の領域である可能性が高い。

24ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 型石器	掻器	台形 石器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	敲石	礫片	合計
黒曜石	1								1				1
珪質頁岩	1				2		1						3
"	2			1				4	14				19
"	3	1					1	2	6				10
"	4							1					1
"	5	1					1	4					6

安山岩 1						2				2
# 2				1		2	1			4
# 3	1									1
# 4	1					1				2
# 5				1			1			2
# 6	1									1
# 7	1									1
流紋岩 1							1			1
# 2				1			1			2
合計	6		1	2	3	3	17	24		56

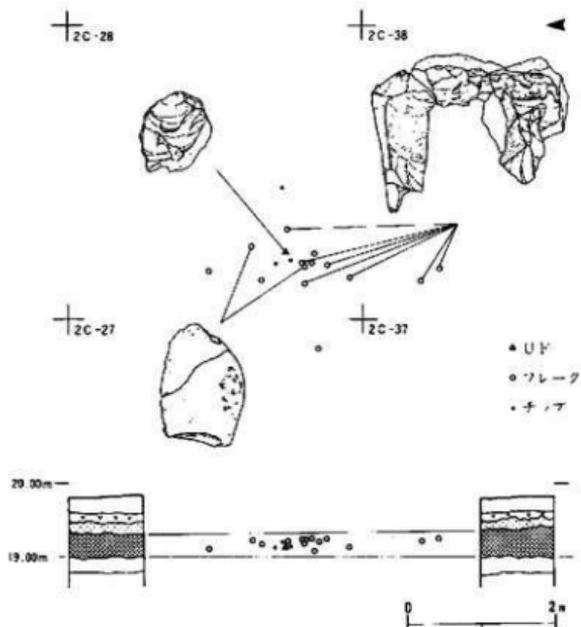
24ブロック石器属性表

No.	グリッド番号	遺物番号	検出番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料	
1	4G-65	0001	1	ナイフ	安山岩 7	28.4×12.7×4.6	1.77	H(1)	-	-	I・III	-	
2	4G-53	0001	2	#	珪質頁岩 3	23.8×27.4×3.6	16.1	N	-	N I	H		
3	4G-54	0011	3	#	安山岩 3	35.1×18.2×10.5	6.58	H(1)	-	N I・II・IV	-		
4	4G-53	0008	4	#	珪質頁岩 5	35.7×27.9×3.8	2.94	N	-	N I	H		
5	4G-43	0002	5	#	安山岩 6	15.6×34.4×8.9	4.37	H(1)	-	N I	-		
6	4G-54	0031	6	U・F	珪質頁岩 3	9.8×11.4×1.8	0.19	H(3)	T	-	I	-	
7	4G-54	0024	7	ナイフ	# 4	42.2×16.1×8.0	4.54	N	-	N I	-		
8	4G-54	0022	8	台形礫石	# 2	29.1×16.9×8.6	2.93	N	-	-	IV	-	
9	4G-53	0002	9	U・F	珪質頁岩 5	21.1×28.3×5.5	2.85	H(1)	T	N I	B		
10	#	0016	10	R・F	流紋岩 2	61.6×37.9×11.8	27.48	H(3)	-	N	-		
11	#	0021	11	#	珪質頁岩 5	33.8×26.2×4.3	2.31	H(1)	-	N I	-		
12	4G-33	0002	12	U・F	# 1	30.1×28.7×5.1	3.11	H(1)	T	-	I・III	-	
13-1	4G-54	0030	13-1	削片	# 2	28.1×11.0×11.1	2.76	N	-	N I	-	接合資料1	
-2	#	0018	-2	R・F	# 2	13.2×17.3×9.3	1.44	H(1)	-	-	I・IV	-	#
-3	#	0019	-3	削片	# 2	28.9×13.6×11.6	3.79	H(1)	T	-	I・IV	-	#
14-1	4G-43	0010	14-1	ピエス	# 1	24.6×21.8×6.3	3.49	N	-	-	I・III	-	接合資料2
-2	#	0003	-2	#	# 1	24.2×25.0×5.7	3.33	N	-	-	I	-	#

25ブロック (第113～116図、図版9・23)

状況 調査区西側地区の2C-27・28・38区におよぶ南北3.6m、東西2.2mの比較的小範囲のなかに20点の石器を検出した。石器の石材は珪質頁岩が主体で、7点が接合する接合資料がある。ほかに、安山岩が少量混入する。出土層位は、IX層でその上部から中位に集中している。IX層を上下する遺物はない。器種構成は使用痕を有する削片1点、削片14点、碎片5点である。このなかには7点接合の接合資料1が含まれる。

遺物 1は珪質頁岩1の使用痕を有する削片である。幅広の縦長削片を素材にし、左側縁に微細刻離痕が多く認められる。背面には自然面を残している。2は安山岩製の大型縦長削片で先端部が欠損している。背面は自然面が全面をおおう。刻離打面は線状打面である。

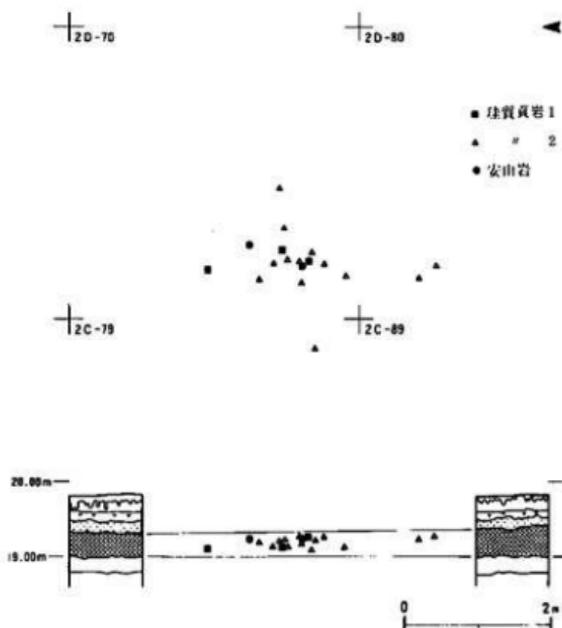


第113図 25ブロック器種別分布図

### 接合資料1(3)

珪質頁岩2の剥片7点が接合する。現状で長さ8.3cm、幅10.0cmを測り、上面および左側面に表皮部分がある。上位の自然面を打面に正面に剥離痕が残る大形剥片を剥離し、ついで3-5・6を剥離している。その後、打面を下位に置き3-1・3、3-2・4を剥離する。節理が発達しているため、不規則な剥がれ方をしているが、基本的には上下から交互に剥離作業が進められる。

3-1は幅の広い縦長剥片で、頭部を欠損する。背面には自然面を多く残している。3-2は背面に石核上位自然面打面からの剥離痕を数枚認める。主要剥離面の剥離方向は下方からである。3-3は下方から剥離された縦長剥片で、右側縁に自然面を残す。頭部は破損している。3-4は厚みのある幅広の縦長剥片で、頭部側を欠損する。先端部には当初打面の自然面がある。3-5は縦長剥片で、不純物の影響で力が分散した結果、剥離した剥片である。打点付近には不純物がある。3-6は幅広の剥片で、上位自然面を打面としている。背面上部には頭部調整風の階段状剥離を認める。

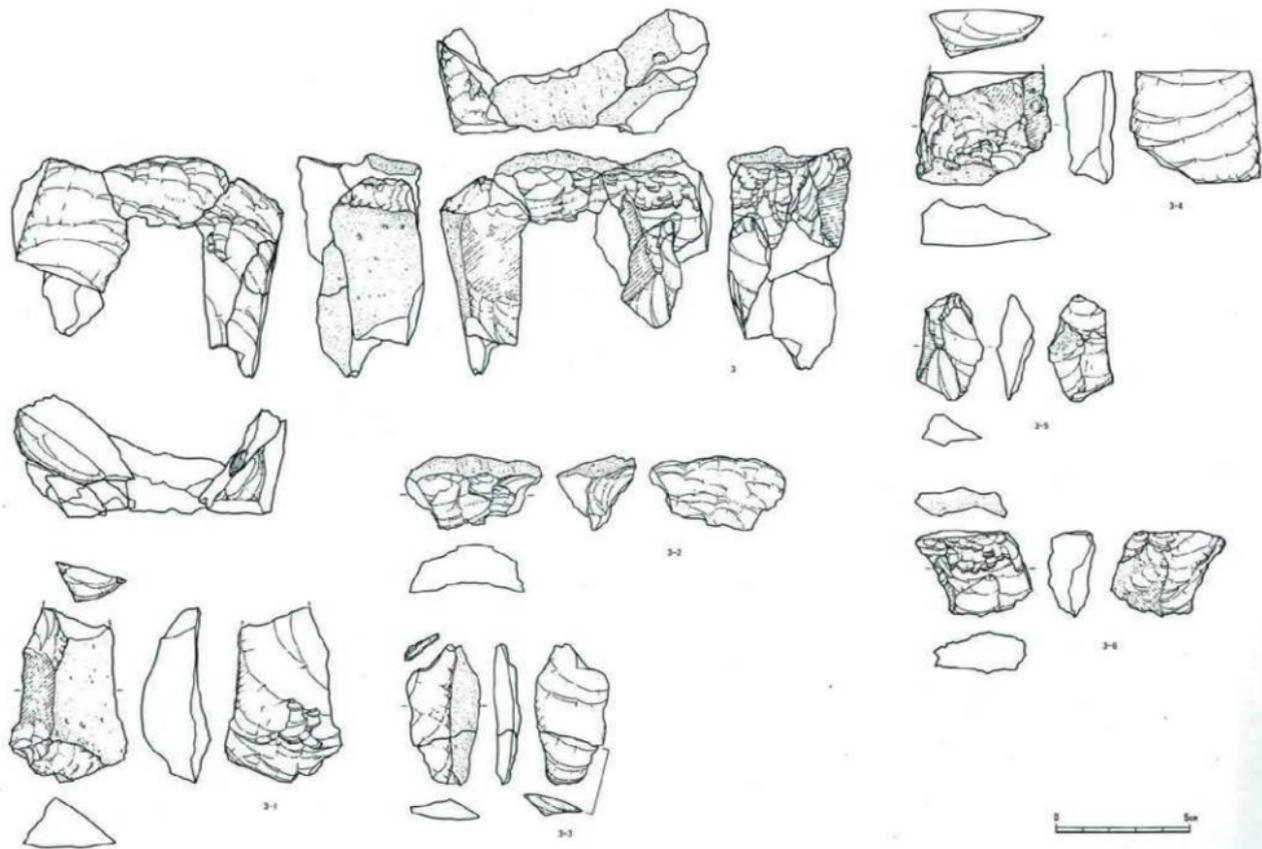


第114図 25ブロック母岩別分布図

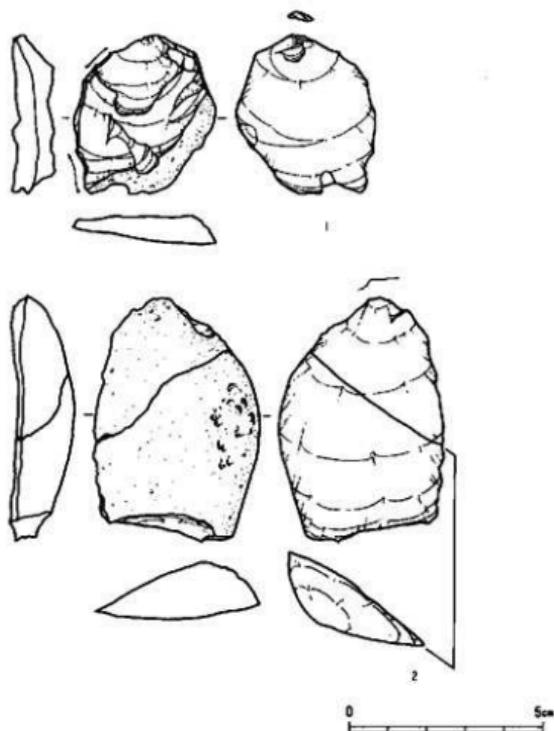
特徴 珪質頁岩2の接合資料は、周辺部に砕片もあり、本ブロックで剥片剥離作業が行われたことをものごとっている。しかし、剥離した剥片は、石材に節理が多くはしるため良質なものが作出できなかったため本ブロックに置きざりにされたものと考えられる。

25ブロック石器属性表

No	グリッド番号	遺物番号	採掘番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
1	2C-28	0008	1	U・F	珪質頁岩1	40.8×40.8×9.3	14.78	H(1)	-	N I	-	
2	#	0011	2	剥片	安山岩1	62.0×41.2×14.3	41.79	L	-	N W	M	
		0015										
3-1	2C-38	0002	3-1	#	珪質頁岩2	64.5×43.6×21.5	47.69	N	-	N-S W	T	接合資料1
-2	2C-28	0013	-2	#	#	50.7×23.0×23.1	25.43	N	-	N I+W	L	#
-3	#	0001	-3	#	#	44.7×34.1×8.0	9.63	N	-	N W	H+B	#
	2C-38	0001										#
-4	2C-28	0004	-4	#	#	41.0×48.0×18.8	46.93	N	-	N-S W	M	#
-5	#	0002	-5	#	#	39.0×2.9×12.6	8.58	P	-	S I-II	-	#
-6	#	0007	-6	#	#	37.5×29.3×14.0	17.86	C	-	I	-	#



第115図 25ブロック接合資料1実測図



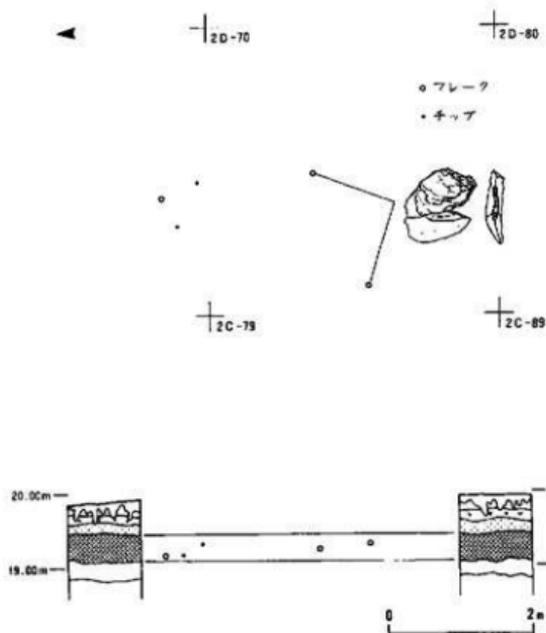
第116図 25ブロック石器実測図

25ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 型石器	擲器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	碎片	石核	敲石	礫片	合計
珧質頁岩	1						1	4					5
"	2							8	5				13
安山岩								2					2
合計							1	14	5				20

26ブロック (第117~119図、図版10・23)

状況 調査区西側地区の2D-60・70に南北3.0m、東西1.6mの範囲に5点の遺物を検出した。石材は珧質頁岩と安山岩である。出土層位はIX層である。器種構成は、二次加工を有する剥片2点(剥片2点が折面で接合)、剥片1点、碎片2点である。



第117図 26ブロック器種別分布図

遺物 1は安山岩製の幅広の縦長剥片の中間で切断し、両剥片に調整を加えている。先端部背面には自然面をとどめている。

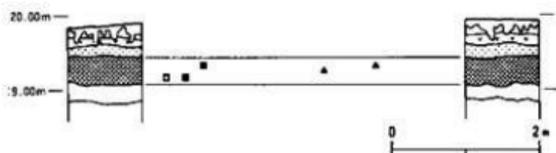
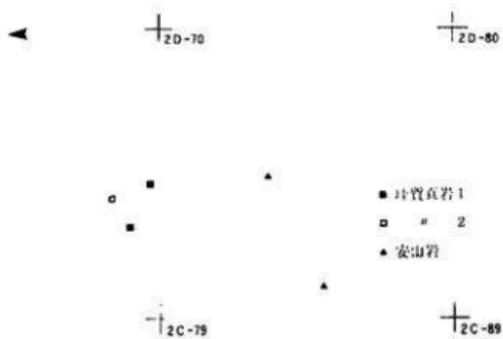
1aは頭部側の切断剥片で、右側縁の切断面から頭部に向かって調整を加えている1bは先端部側の切断剥片で、1aと同様の部分に調整を加える。

#### 26ブロック石器組成表

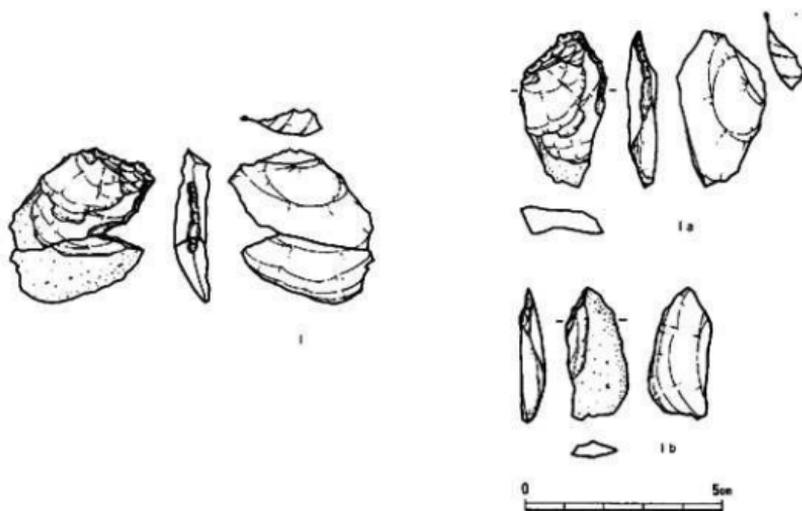
石材	器種	ナイフ型石器	掻器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	製石	礫片	合計
珪質頁岩	1								2				2
#	2							1					1
安山岩						2							2
合計						2		1	2				5

#### 26ブロック石器属性表

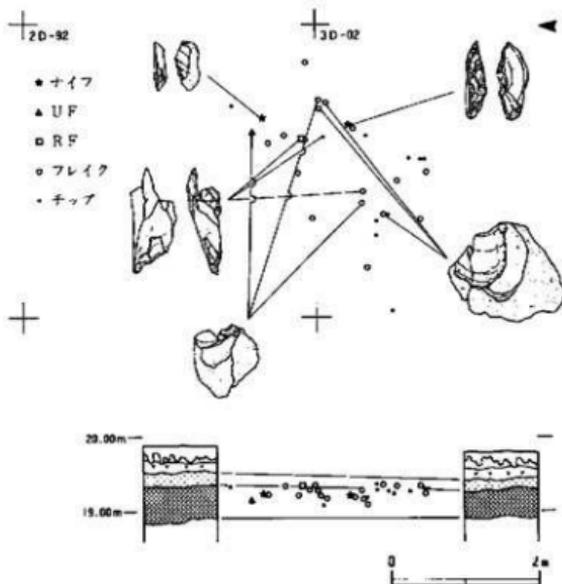
No	グリッド番号	遺物番号	標記番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	断面	接合資料
1-1a	2D-70	0001	1-1a	R・F	安山岩	21.7×38.3×6.1	6.00	H(1)	T	N I	M	
-1b	#	0002	-1b	#	#	14.9×33.2×6.5	3.60	N	-	N I	M	



第118図 26ブロック母岩別分布図



第119図 26ブロック石器実測図



第120図 27ブロック器種別分布図

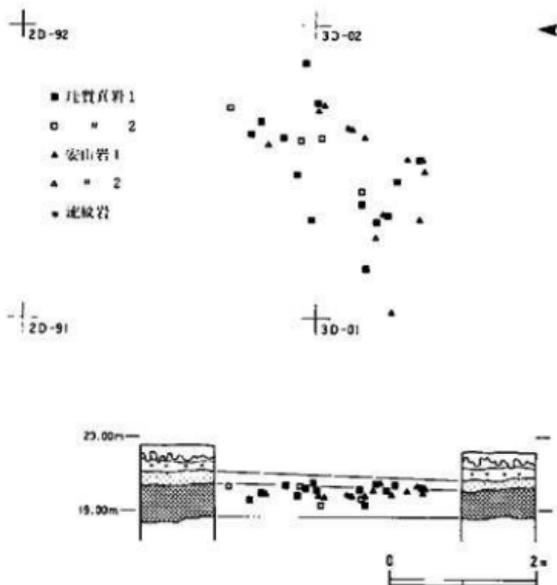
## 27ブロック (第120～123図、図版10・23)

**状況** 調査区西側地区の2D-92・3D-02区におよぶ南北2.8m、東西3.6mの範囲に30点の遺物を検出した。かなり小範囲に集中した出土状況を示す。石器の石材は珪質頁岩、安山岩がほぼ半数ずつの割合で、流紋岩が1点混入する。出土層位はⅦ層下部からⅨ層下部にわたるがⅨ層上部に集中のピークがある。器種構成は、ナイフ形石器2点、二次加工を有する剥片1点、使用痕を有する剥片2点、剥片15点、砕片10点である。なお、接合資料が3点ある。

**遺物** 1、2はナイフ形石器である。1は流紋岩製の横長剥片を素材にしたもので、打点側にあたる左側縁と右側縁基部側に調整を加えている。プランティングはほぼ垂直に立ち、背面方向からの剝離を左側縁先端部付近に行ったのち、主要剝離面方向から全体に加えている。打痕はプランティングで除去されている。2は自然面の残る珪質頁岩の小形縦長剥片を素材に左側縁基部と右側縁先端部に調整を加えたもので、左側縁の自然面を刃部としている。プランティングは簡単に行われている。

### 接合資料1(3)

珪質頁岩製で剥片1点と使用痕を有する剥片2点が接合する。表皮に近い部分の接合資料で



第121図 27ブロック母岩別分布図

あるが、打点は順次下位方向に再生され、幅広の小形剥片を剥離している。

3-1、2は使用痕を有する剥片で、前者は先端部寄りの左側縁と基部寄りの右側縁、後者は左側縁に微細剥離痕を認める。ともに背面には自然面を残している。3-3は幅広剥片の先端部破損品である。

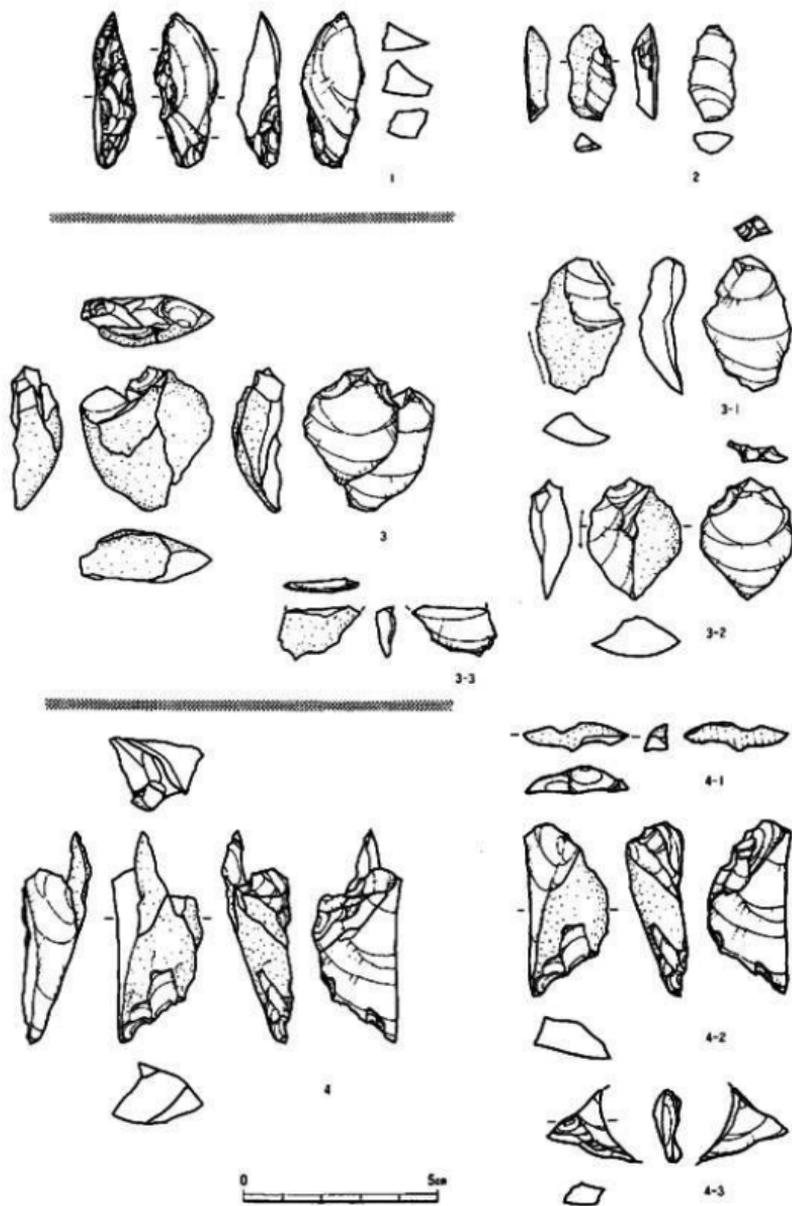
#### 接合資料2(4)

珪質頁岩の自然面をとどめる大形剥片を石核とし、剥片2点と二次加工を有する剥片1点が接合する。右側面の自然面を打面に幅広の剥片を剥離し、その作業面を打面として石核を縦割りにするように剥片(4-2)を剥離している。

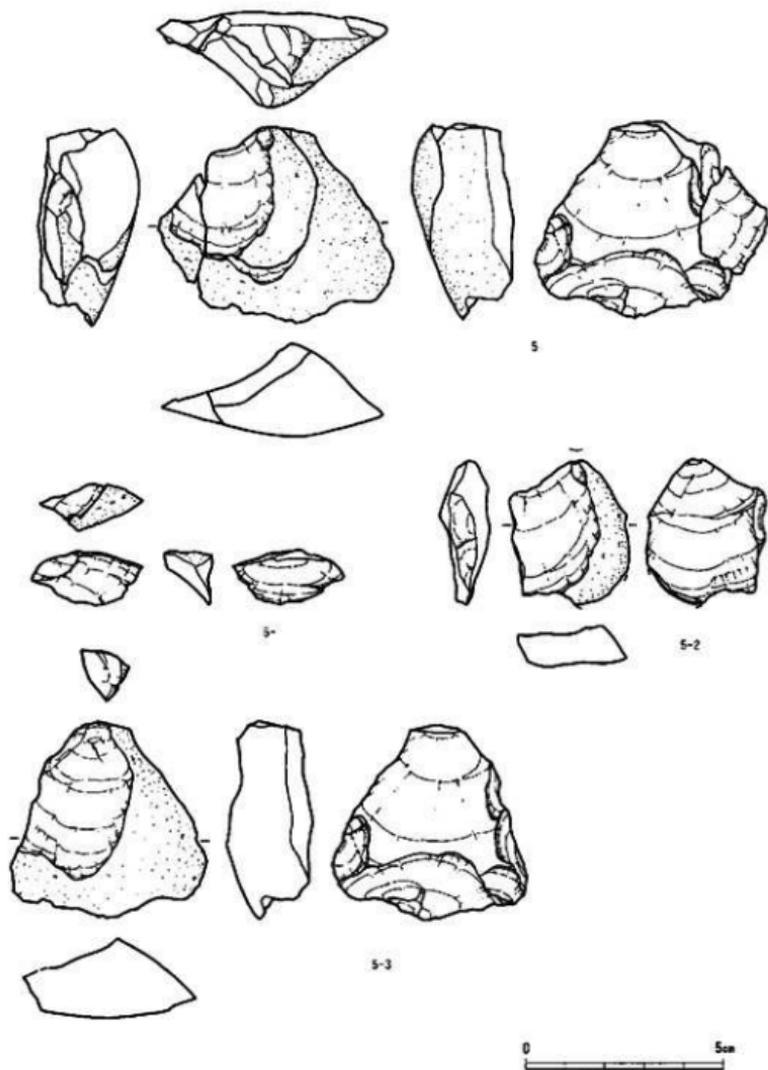
4-1は節理面から弾かれるように剥落した剥片である。4-2は先端部に調整を施した二次加工を有する剥片である。4-3は横長剥片の先端部が遺存するものである。

#### 接合資料3(5)

安山岩製の幅広い大形剥片を素材にしている。剥片2点と剥片石核1点が接合する。正面に表皮を残し、大形剥片の打面を利用して未検出の剥片が剥離され、ついでその作業面を打面に小形剥片と5-1が左側面で剥離される。さらに、再度もとの打面にもどり5-2を剥離する。



第122図 27ブロック石器接合資料1・2実測図



第123図 27ブロック接合資料3 実測図

また、剥片石核先端部でも、背面の自然面を打面とした小剥片が数点剥離されている。

5-1は横長小形剥片である。5-2は幅広の縦長剥片で先端部を若干欠損する。5-3は剥片石核の残核である。

特徴 剥片石核を多用した石器製作の場所で、小形剥片を多く作出している。製品も2のような小形品がある。1は単独母岩の製品であることから持ち込まれた石器と考えられる。

27ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ型石器	徹器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	敲石	礫片	合計
埴賀頁岩	1	1					2	7	3				13
#	2					1		1	2				4
安山岩	1							5	4	1			10
#	2							1	1				2
流紋岩	1												1
合計	2					1	2	14	10	1			30

27ブロック石器属性表

No	グリッド番号	遺物番号	検出番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
1	3D-02	0016	1	ナイフ	流紋岩 1	5.6×40.1×8.9	5.28	N	-	I・III	-	
2	2D-92	0006	2	#	埴賀頁岩 1	25.1×10.8×6.2	1.67	H(1)	-	N III	-	
3-1	#	0007	3-1	U・F	#	34.4×22.3×8.0	5.41	H(1)	T	N I	-	接合資料1
-2	3D-02	0012	-2	U・F	#	30.5×24.8×10.5	5.51	H(3)	T	N I	-	#
-3	#	0020	-3	削片	#	12.3×21.7×4.3	0.99	N	-	N -	B	#
4-1	#	0017	4-1	砕片	# 2	5.3×26.5×5.4	0.71	-	-	-	-	接合資料2
-2	2D-92	0003	-2	R・F	#	44.3×19.7×20.8	9.39	N	-	N I	-	#
-3	3D-02	0013	-3	削片	#	15.0×23.5×5.4	1.07	N	-	I・II	R	#
5-1	#	0005	5-1	#	安山岩 1	28.2×17.7×8.2	2.88	H(1)	-	I・III	-	接合資料3
-2	#	0019	-2	#	#	36.3×32.8×12.7	13.13	L	-	N I	B	#
-3	#	0018	-3	石核	#	50.6×48.8×20.8	41.48	H(1)	-	N I	-	#

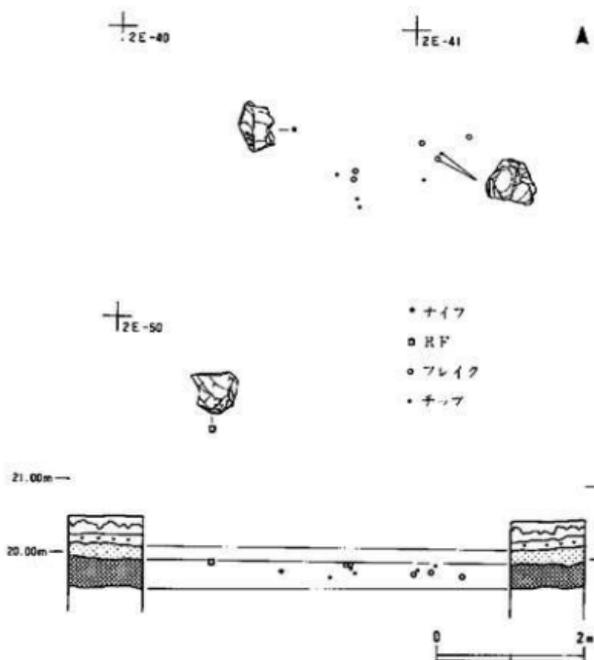
## 28ブロック (第124～126図・図版10・23)

状況 調査区西側地区の2E-40・41・50区に南北4.0m、東西3.5mの範囲に12点の遺物を検出した。主体はチャートで北側に集中し、単独で2mほど南側に黒曜石製のスクレーパーがある。出土層位はIX層で、器種構成はナイフ形石器1点、スクレーパー1点、剥片5点、砕片5点である。

遺物 1はチャート製のナイフ形石器で、先端部を欠損する。左側縁中央部に調整を加え基部側の側縁には節理面があり、その上部に弱い調整が認められる。2は黒曜石製の縦長剥片を素材とするスクレーパーで、中間から頭部は欠損する。先端部には主要剥離面方向から調整が加えられる。ほぼ垂直なブランディングである。

### 接合資料1 (3)

チャートの小形剥片2点が接合する。打面を左側面から上面に移し、2点の剥片を剥離している。



第124図 28ブロック器種別分布図

3-1は横長の小形剥片、3-2も小形で不整形な縦長剥片である。

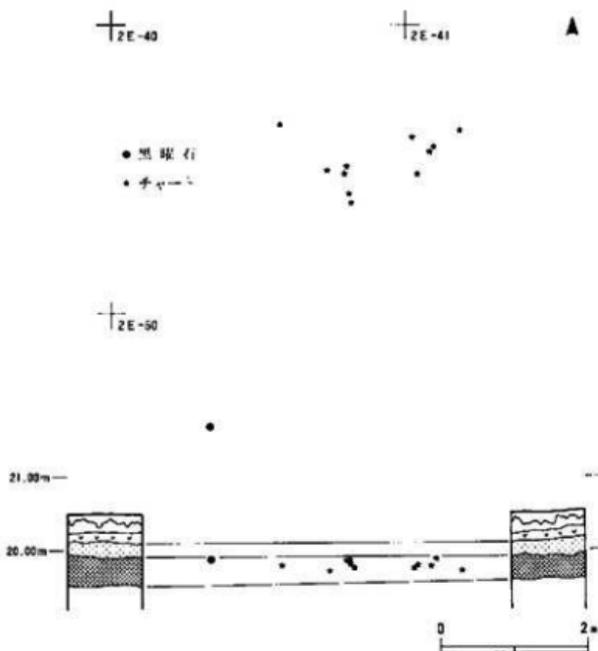
特徴 チャートを石材とした小形剥片が多く、石器製作の場所と考えられる。

28ブロック石器組成表

石材	器種	ナイフ 藍石器	擗器	削器	ピニス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	巖石	燧片	合計
黒曜石			1										1
チャート		1						5	5				11
合計		1	1					5	5				12

28ブロック石器属性表

No.	グランド D番号	遺物 番号	検出 番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	折面	接合資料
1	2E-40	0001	1	ナイフ	チャート1	26.2×17.8×6.4	2.73	H(2)	-	I	B	
2	2E-50	0001	2	R・F	黒曜石1	20.3×23.7×7.1	3.03	N	-	I・II	M	
3-1	2E-41	0003	3-1	剥片	チャート1	13.3×18.2×6.1	1.69	H(2)	-	I・III	-	接合資料1
-2	#	0005	-2	#	#	19.8×19.6×3.7	1.83	H(1)	-	I・N	-	#



第125図 28ブロック母岩別分布図

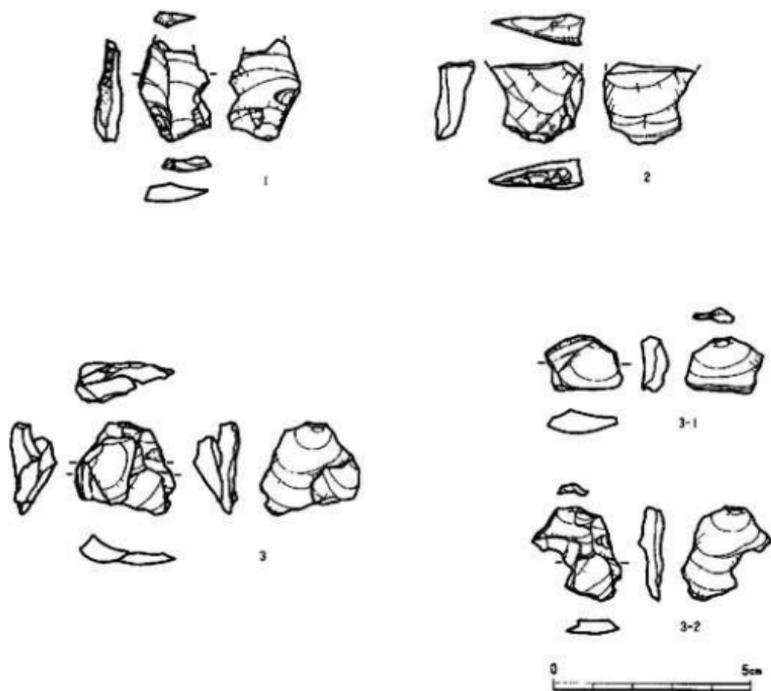
#### 単独出土石器 (第127図、図版10・24)

1は2E-79区から出土したナイフ形石器で出土層位はVII層下部である。珪質頁岩製の縦長剥片を素材として、背面には自然面を残している。右側縁には、背面の自然面から主要剥離面方向に向って大きな剥離を行い打窟を除去し基部としている。左側縁には微細な剥離痕が全域に認められる。

2は3F-25区から検出した剥片で、出土層位はVI層上部である。安山岩製の縦長剥片の基部と先端部を欠損している。背面には自然面を残している。

3は2H-24区から出土した使用痕を有する剥片で、出土層位は不明である。珪質頁岩製の縦長剥片を素材とし、左側縁に微細剥離痕を認める。比較的大形の剥片で、背面には自然面を残している。

4は4I-02区から出土した二次加工を有する剥片で、出土層位はVI層上部である。安山岩製の大型縦長剥片を素材とし、背面には自然面をかなり残している。右側縁の中央部にノッチ状の小剥離を行っている。



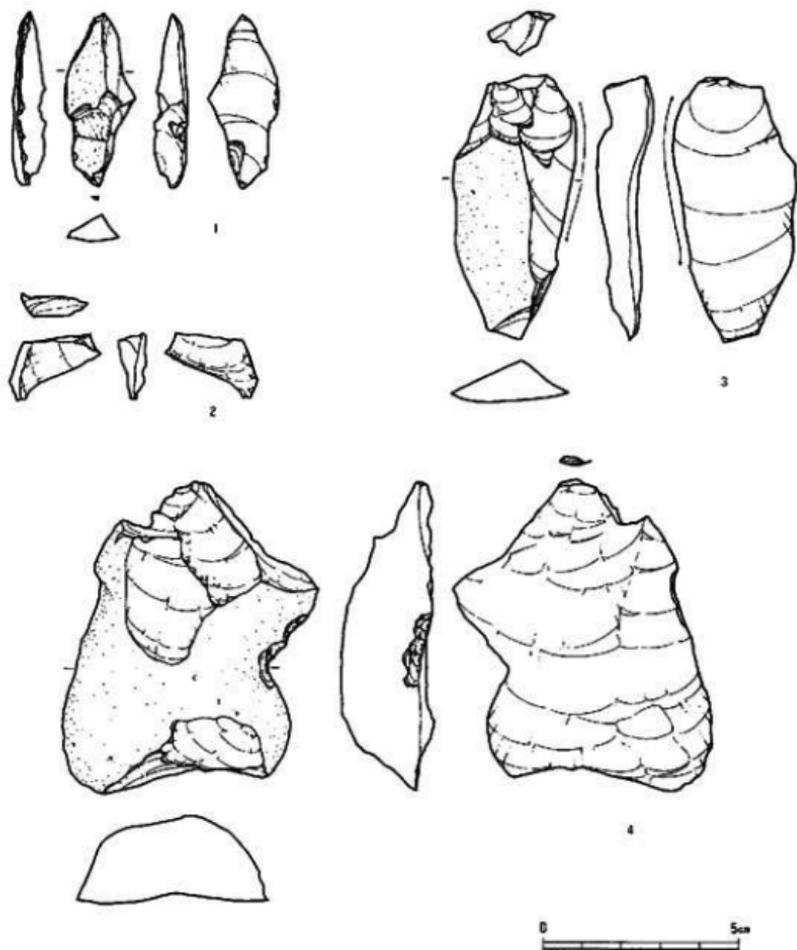
第126図 28ブロック石器・複合資料1実測図

単独出土石器属性表

No	グリッド番号	遺物番号	検出番号	器種	石材	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	打面形状	打製調整	背面構成	折面	複合資料
1	2E-79	0001	1	ナイフ	珪質頁岩	45.0×17.0×7.4	4.54	N	-	N・IV	-	
2	3F-25	0001	2	剥片	安山岩	15.1×24.6×6.5	1.61	N	-	N・II	M	
3	2H-24	0007	3	U・F	珪質頁岩	68.2×30.8×11.9	21.45	H(2)	T	N・I・II・III	-	
4	4I-02	0001	4	R・F	安山岩	79.3×57.8×20.8	107.39	H(1)	-	N・I・III	-	

単独出土ブロック石器組成表

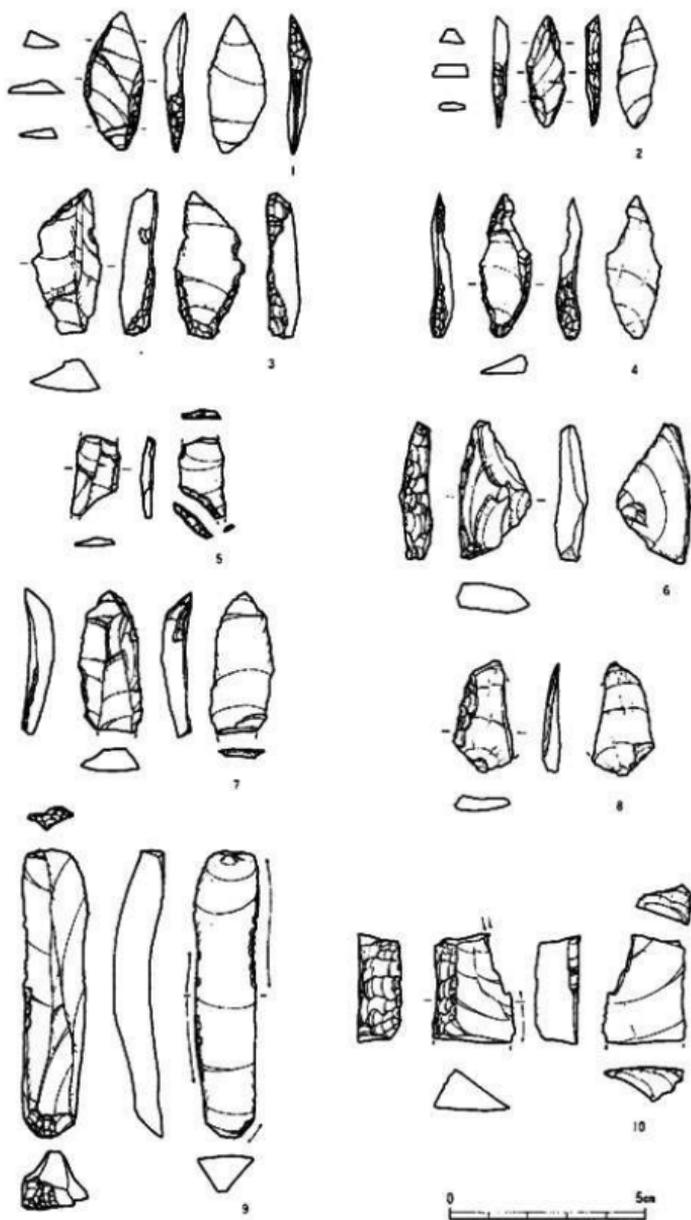
石材	器種	ナイフ型石器	掻器	削器	ピエス	R・F	U・F	剥片	砕片	石核	敲石	燧片	合計
安山岩	1					1	1	4	1				8
チャート									1				1
合計	1					1	1	4	2				9



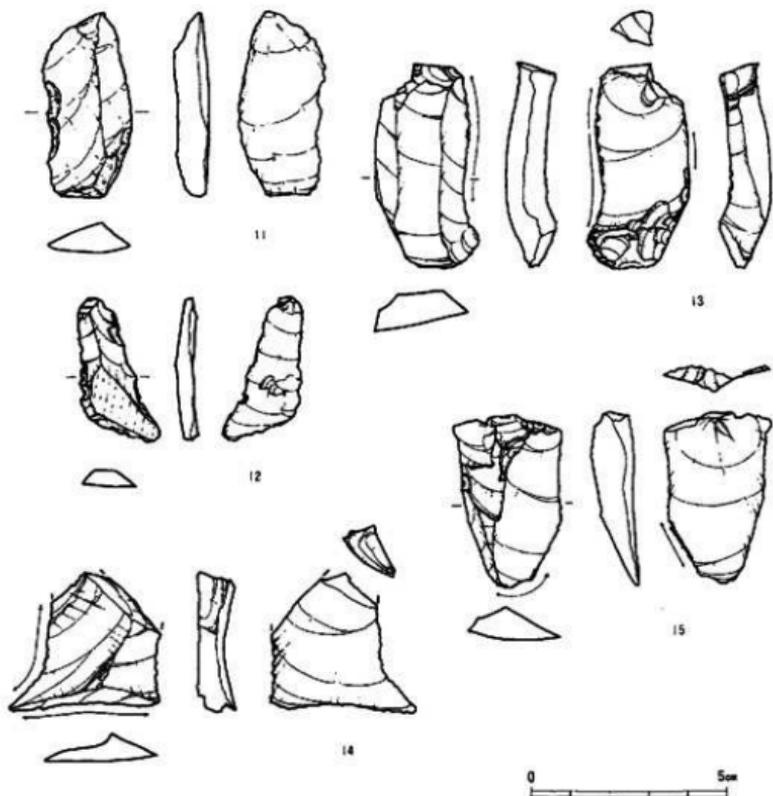
第127図 単独出土石器実測図

表採石器 (第128・129図・図版24)

ナイフ形石器 8点、槌器 1点、彫器 1点、二次加工を有する剥片 3点、使用痕を有する剥片 2点を上層の調査段階で検出している。出土地点が特定できないため表採品として扱うこととする。



第128图 表採石器尖測器(1)



第129図 表採石器実測図(2)

1は珪質頁岩製で両側縁加工を施す。2も両側縁加工で打瘤は除去している。刃部を左側縁先端にもつ。3は黒曜石製で両側縁加工であるが先端部のブランティングは剥片を斜めに切るように行われ、基部側の調整は背面方向から行っている。4は珪質頁岩製で両側縁加工である。刃部は右側縁先端側にあるが、ノッチ状の剥離面をあてている。5は珪質頁岩製で、欠損する側が基部と考えられる。先端部に3と同じ手法のブランティングがある。6は珪質頁岩製で横長剥片の先端部に調整を加え、打面側に刃部を設けている。7はメノウ製で左側縁の基部側と右側縁の先端部に調整を加えている。8は右側縁部を欠損するが、安山岩製の縦長剥片を素材に、左側縁に調整を施している。

9は張器である。珪質頁岩製の細く厚みのある縦長剥片の先端部に調整を加えたもので、両

側縁に微細剥離痕を認める。

10はメノウ製の彫器である。両端を切断し、左側面には丁寧な調整を施している。切断面から縁に二回剥離を行い彫刻面を作出している。右側縁には微細剥離痕を認める。

11～13は二次加工を有する剥片で、11は安山岩製の縦長剥片で左側縁に、12はチャート製の縦長剥片で左側縁に調整を施している。13は珩質頁岩製の縦長剥片で、主要剥離面の先端部にと基部に調整を行い、右側縁には微細剥離痕を認める。

14、15は珩質頁岩製の使用痕を有する剥片で、15は先端部に、16は先端部と左側縁に使用痕を認める。

表採石器属性表

No	グリッ ド番号	遺物 番号	検出 番号	器 種	石 材	長さ×幅×厚さ (mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	背面構成	断面	接合資料
1			1	ナイフ	珩質頁岩	35.1×14.8×5.0	1.93	N	-	III	-	
2			2	#	#	28.4×9.4×3.7	0.96	N	-	I・III	-	
3			3	#	黒曜石	36.2×17.6×8.1	4.20	N	-	I・III	-	
4			4	#	珩質頁岩	36.1×13.1×4.2	1.79	N	-	I	-	
5			5	#	#	20.5×10.9×2.6	0.59	N	-	I・III・IV	M	
6			6	#	#	34.7×18.2×6.2	4.16	N	-	I	-	
7			7	#	メノウ	36.6×15.6×6.7	3.58	N	-	I・III・IV	H	
8			8	#	安山岩	28.1×15.7×3.5	1.44	N	-	I	R	
9			9	播磨	珩質頁岩	72.8×17.0×13.0	12.53	H(5)	T	I・III	-	
10			10	彫器	メノウ	28.2×20.3×10.4	6.38	-	-	I	M	
11			11	R・F	安山岩	47.6×21.0×8.6	9.19	P	-	N I	-	
12			12	#	チャート	38.5×21.2×5.0	2.64	P	-	S I・III	-	
13			13	#	珩質頁岩	52.3×23.9×11.2	15.77	H(1)	T	I	-	
14			14	U・F	#	34.1×37.3×8.7	7.57	-	-	I・II	H・R	
15			15	#	#	42.9×27.2×10.6	8.78	H(2)	T	I	-	

### 第3節 まとめ

本遺跡では大小のブロックを合わせ28ブロックを検出している。ほぼ、調査区全域に分布する。ことに、VI層下部からVII層上部にかけて検出した16、17、18、19ブロックは黒曜石を母岩とする良好な接合資料を提供しており、石器製作工程を考えるうえで貴重な資料となった。28ブロックの層位はIII層からIX層までおよび、ことにVI層からVII層にかけての遺物量が豊富である。以下、各層位ごとに触れていく。

#### III層

1、4ブロックで細石器を中心とした石器群といえる。遺物量が少ないため器種は貧弱であるが、ナイフ形石器を伴出する。

#### N～V層

2、3、5、6、7、9ブロックである。縦長剥片を素材にした両側縁加工のナイフ形石器、彫器、縦長剥片素材の使用痕を有する剥片などで構成される。

#### V～VI層

8、11ブロックである。石刃技法による縦長剥片を多く生産する接合資料が、両ブロック間で接合している。安山岩製の8ブロック接合資料1では、表皮を取りのぞく調整剥片及び縦長剥片を搾取したのちに、打面を90°転移して単設打面で縦長剥片剥離が行なわれている。接合資料2においては両設打面での剥片剥離である。また、珪質頁岩製の接合資料では小形な縦長剥片が目立ち、ナイフ形石器の中にはきわめて小形なものが認められる。

#### VI～VII層上部

16、17、18、19ブロックである。黒曜石を主要石材とする良好な接合資料を多数検出した。16ブロックでは黒曜石が全体の83%を占め、珪質頁岩13%の割合で混じる。黒曜石1の接合資料から、以下のような剥片剥離技術を観察し得る。箱状の形状をした母岩の上下両端に打面を設定し、上部打面からの剥片剥離を主眼においている。上部打面は水平な打面を設定するため順次ほぼ水平方向に調整を加えているのに対し、下部打面は上部からの剥離がしの字状に内弯することから、その角度に直行する打面を設定するため、斜め方向に調整剥片の剥離が行なわれている。どちらからも比較的良好な縦長剥片を獲得している。1回に行なう剥片剥離は上部からは2～4回程度で、下部からはそれより少ない。最終段階ではきざりほど優良な剥片は得られていないが8点分の剥離がなされている。この母岩には1点ナイフ形石器が接合しているが、比較的幅の広い縦長剥片を素材にしている。また、同ブロックで検出した黒曜石2のナイフ形石器も同様のもので、比較的幅の広い縦長剥片の基部側に調整を加えたものである。

17ブロックの黒曜石1の接合資料は長さ16cm強の洋梨形をした母岩を分割し、複数の石核に分離している。比較的不純物の多い材質であるため、有効に剥片を搾取したものは3つの石核のみであるが、16ブロック例と同様に両設の打面から縦長剥片を得ている。また、ツールの多くも接合しており、両側縁加工や片側縁加工のナイフ形石器がある。片側縁加工のナイフ形石器はブランティングが直線的で比較的厚手の剥片が多く見られる。また、ナイフ形石器全体に打窟を除去するものが目立っている。これは、18、19ブロックで発見されたナイフ形石器についても共通した事柄である。また、この3つのブロックについては黒曜石の占める割合が他の石材を圧倒し、90数%に及んでいる。これは、八千代市権現後遺跡などVI層段階での黒曜石を多様することと合致するといえる。また、16ブロック接合資料1や17ブロック接合資料1は両設打面から縦長剥片を搾取しており、その技法は東京都鈴木遺跡VII層のそれと共通している。なお、横長剥片を素材にして、打点側にブランティングを加えたナイフ形石器も少数ではあるが認められる。

## Ⅶ層

10、12、13、15、14、20、21ブロックである。安山岩、メノウ、珪質頁岩を中心とした石材で、縦長剥片を素材にしたナイフ形石器を認めるが、比較的幅広の剥片が多く、作業面を打面とした平坦打面が目立ち、打面調整はあまり見られない。ブロック内の遺物分布は散漫なものがほとんどで遺物量が少なくなっている。

## Ⅶ～Ⅸ層

22、23、24、25、26、27、28ブロックである。作業面を打面とした平坦断面より搾取した横長もしくは幅広の剥片が主体をなしている。遺物分布は比較的散漫なブロックが多く、22ブロックのように散漫ではあるが広範囲に遺物の分布が認められ、各クラスター間での接合もあり、調査区外に遺物分布域の広がりを予測させる。25ブロック以降は遺物の垂直分布がⅨ層の範囲に収まっており、27ブロック1は横長剥片を素材にしたナイフ形石器と比較的小形な縦長剥片を用いたナイフ形石器2が認められる。また、接合資料3は剥片石核の好資料である。

# 写 真 图 版





遺跡空中写真  
(南から)



遺跡空中写真  
(東から)

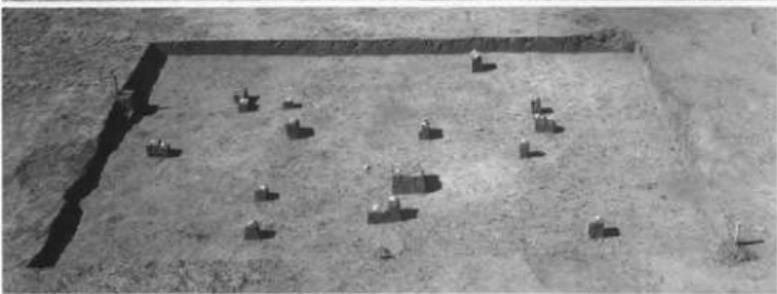




27007



37007



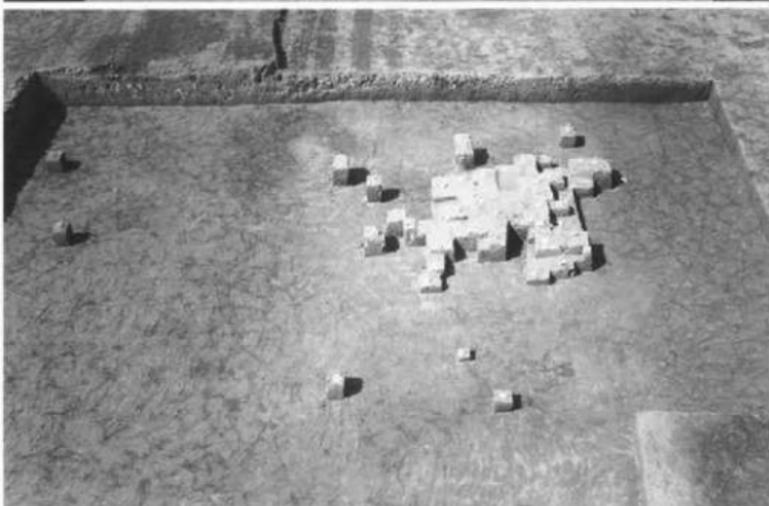
47007



57007



77



88



97



10a ブロック



10b ブロック



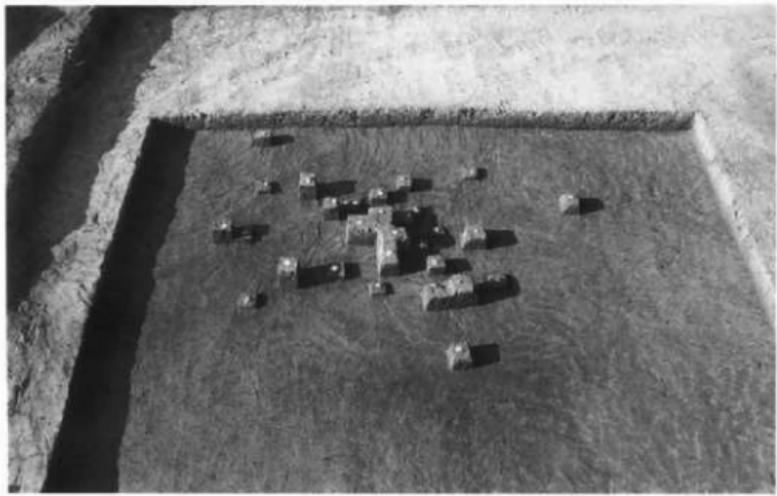
11 ブロック



127ロック



147ロック



157ロック



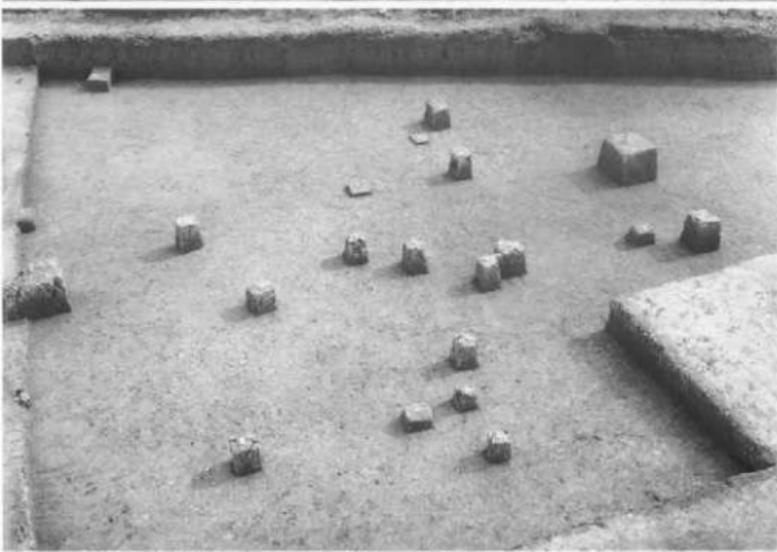
167ロック



177ロック

187ロック

197ロック



207ロック



227 ロック



247 ロック



257 ロック



267ロット



277ロット



287ロット

41-02  
単独出土

2ブロック



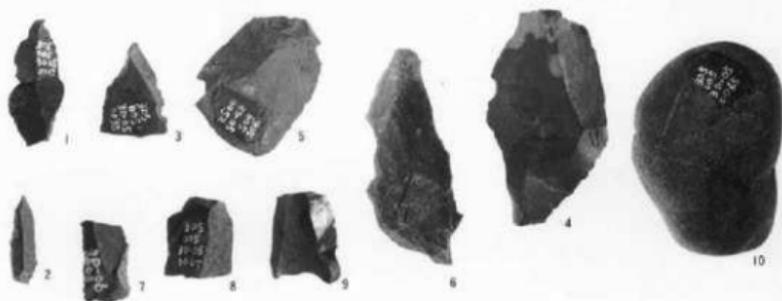
3ブロック(左)  
4ブロック(右)



5ブロック(左)  
6ブロック(右)



8ブロック





8ブロック  
接合資料 1



8ブロック  
接合資料 2



8ブロック  
接合資料 3



8ブロック  
接合資料 5

8ブロック  
 接合資料4(左)  
 " 6(右)



14-1



14-2



16-1



16-2



16-3

8ブロック  
 接合資料7(左)  
 9ブロック(中)  
 10ブロック(右)



17-1



17-2



1



1

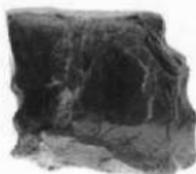
11ブロック



1



3



2

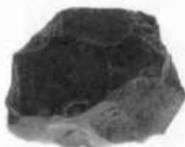


4



5

12ブロック(左)  
 14ブロック(右)



1



1



2

15ブロック



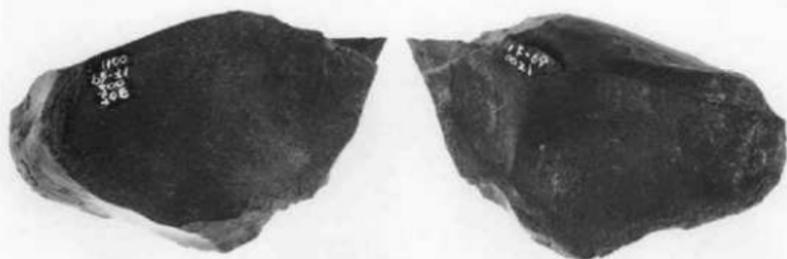
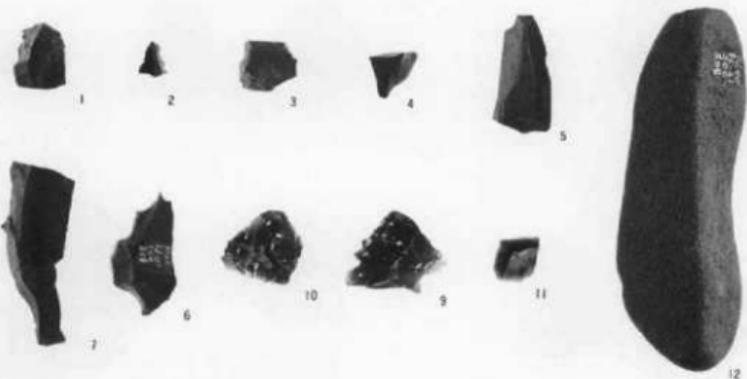
1



2

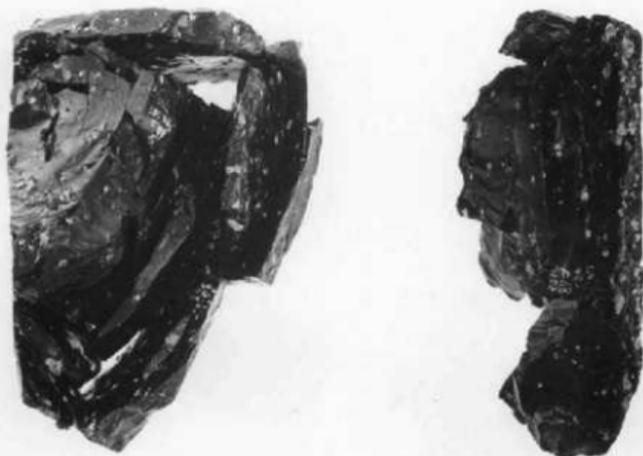


3



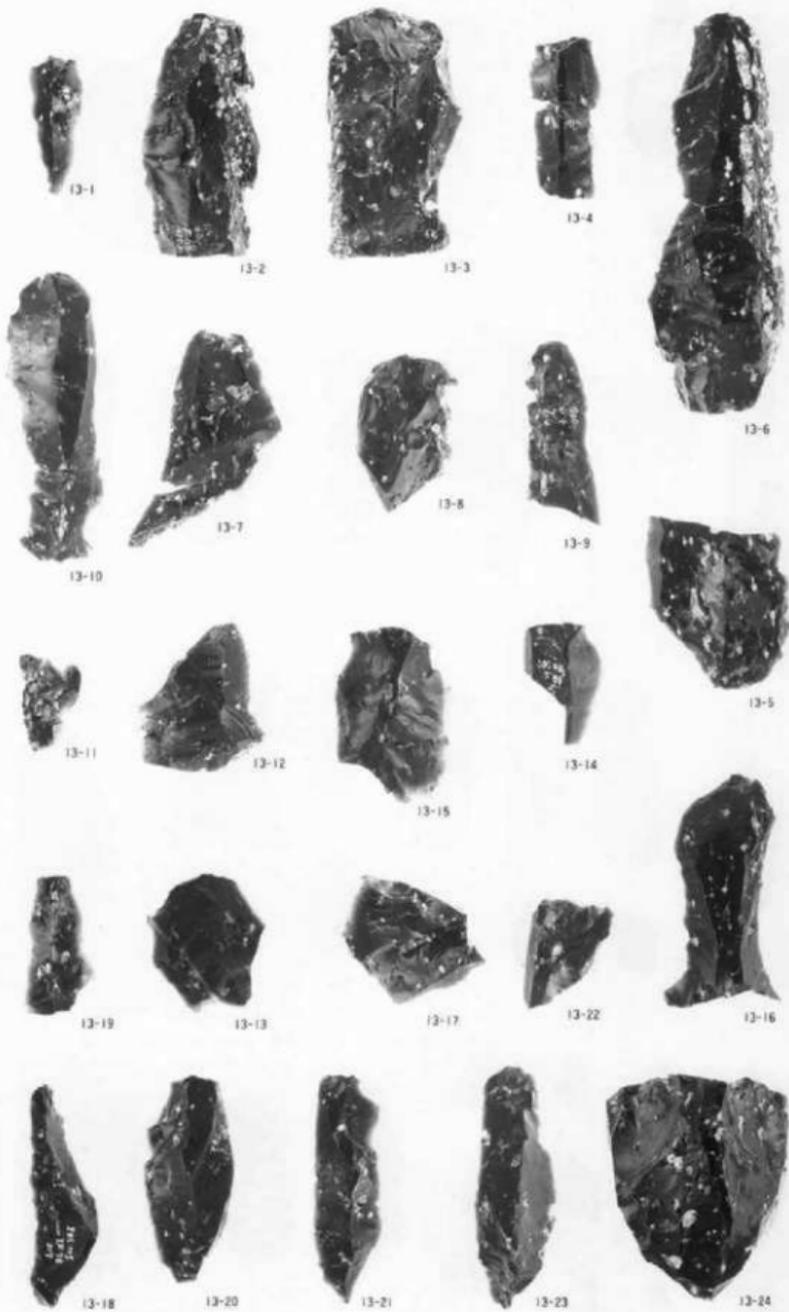
8-1,2

16ブロック



13

16ブロック  
接合資料1



16ブロック  
 統合資料1



14



15



16



14-1



14-2



15-1



15-2



16-1



16-2

16ブロック  
接合資料2(左)  
" 3(中)  
" 4(右)



1



2



3



6



7



12



11



5



4



8



9



10

17ブロック



1



8



3



7



5



6



9



11



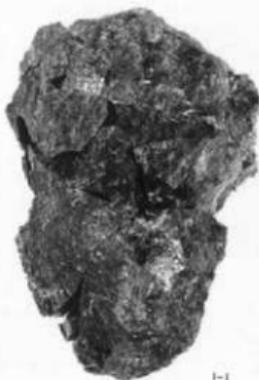
12

18ブロック

17ブロック  
接合資料1



接合資料1-1

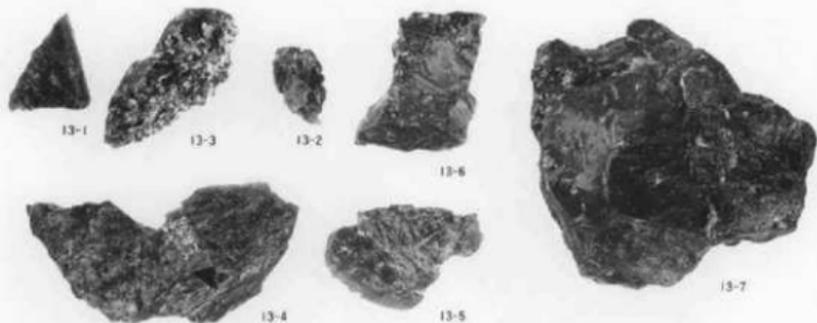


1-1

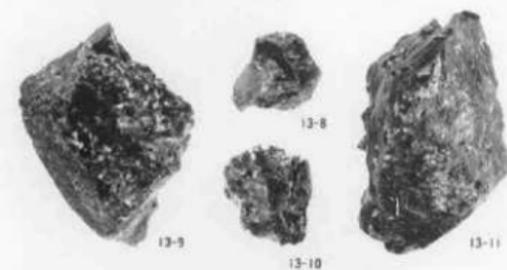
接合資料1-2



1-2



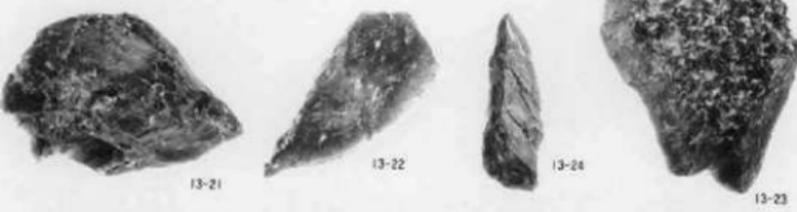
17ブロック  
接合資料1-1A



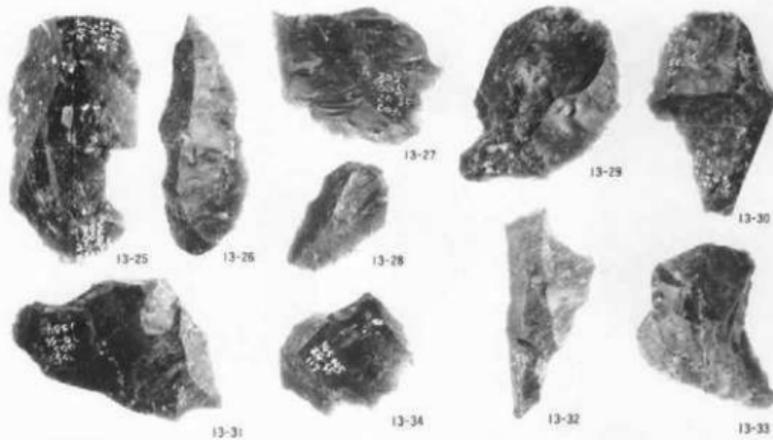
17ブロック  
接合資料1-1B



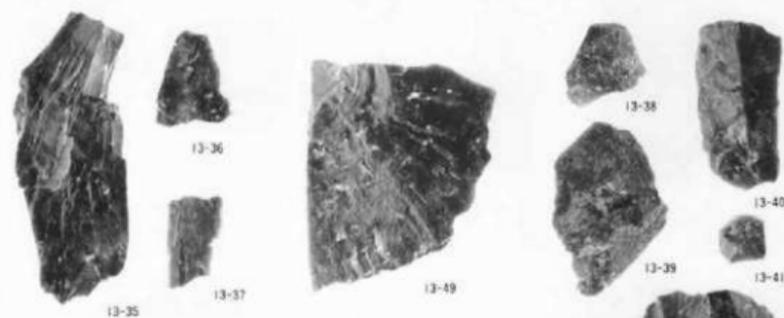
17ブロック  
接合資料1-2A



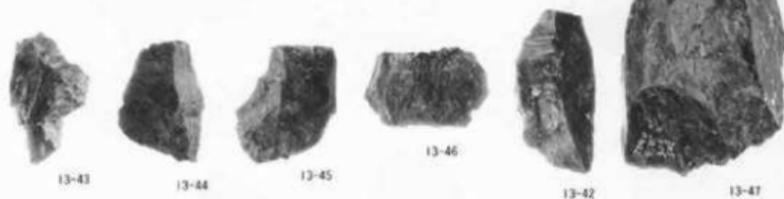
17ブロック  
接合資料1-2B



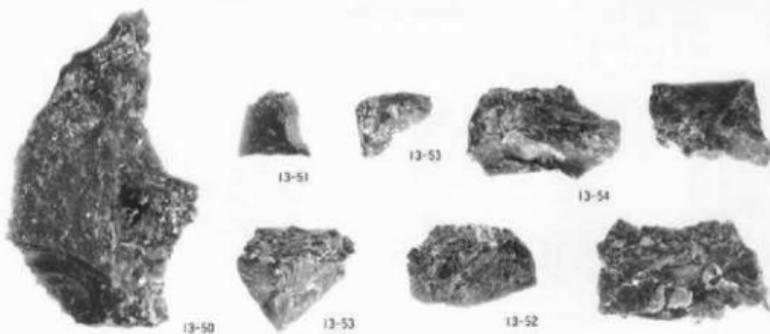
17ブロック  
接合資料1-2B



17ブロック  
接合資料1-2C-a(左)  
# 1-2C-c(中)  
# 1-2C-b(右下)



17ブロック  
接合資料その他





14



14-1



14-2



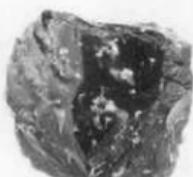
14-4



14-3

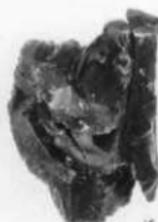


14-5



14-6

18ブロック  
接合資料2



15



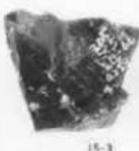
15-1



15-2



15-4



15-3



15-4

18ブロック  
接合資料3



16



16-1



16-2

18ブロック  
接合資料5



17



17-2



17-1

18ブロック  
接合資料6



18



18-1



18-2



19



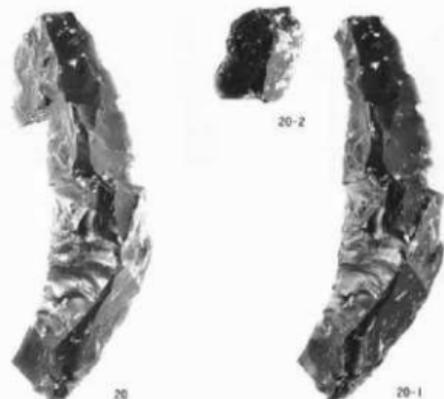
19-1



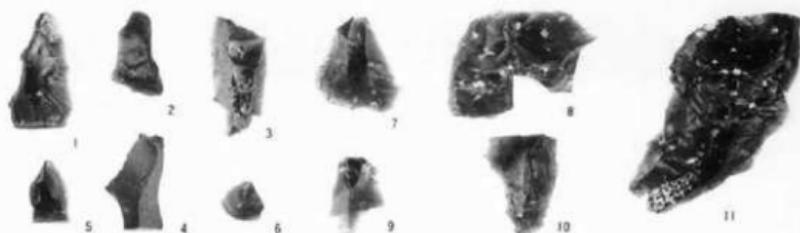
19-2

18ブロック  
接合資料8

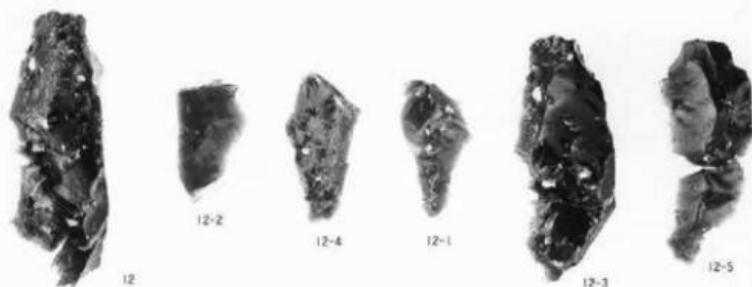
18ブロック  
接合資料10



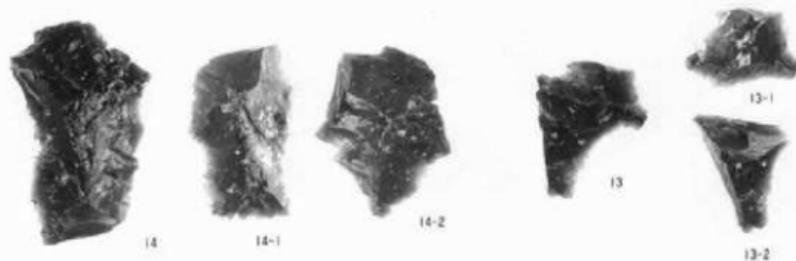
19ブロック



19ブロック  
接合資料4



19ブロック  
接合資料9(左)  
" 7(右)

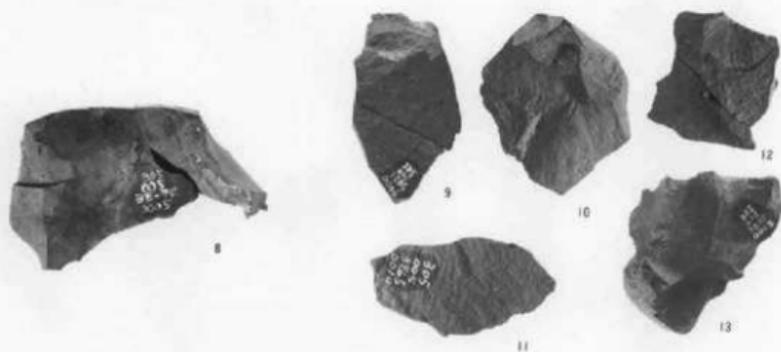




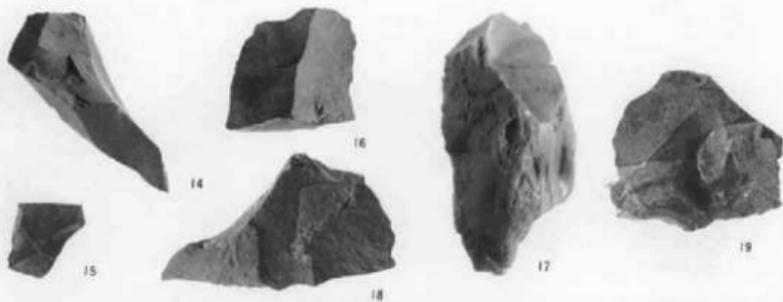
20ブロック(左)  
21ブロック(中)  
22aブロック(右)



22bブロック(左)  
22cブロック(右)

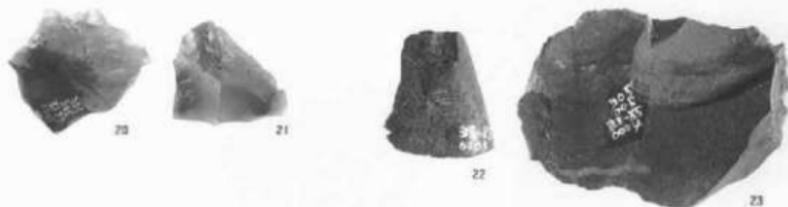


22dブロック(左)  
22eブロック(右)

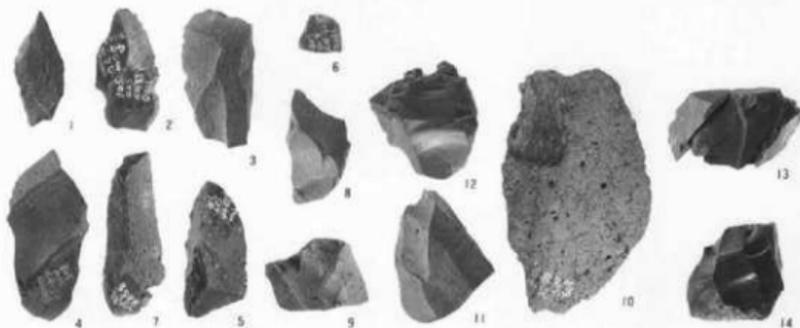


22fブロック

22gブロック(左)  
22hブロック(右)



24ブロック



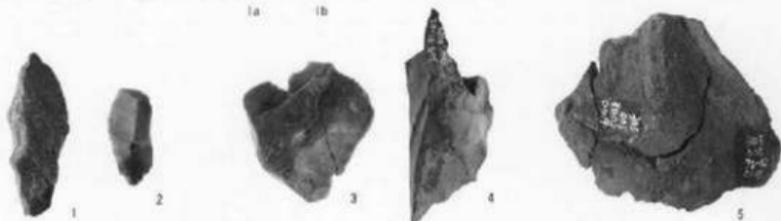
25ブロック



26ブロック(左)  
28ブロック(右)

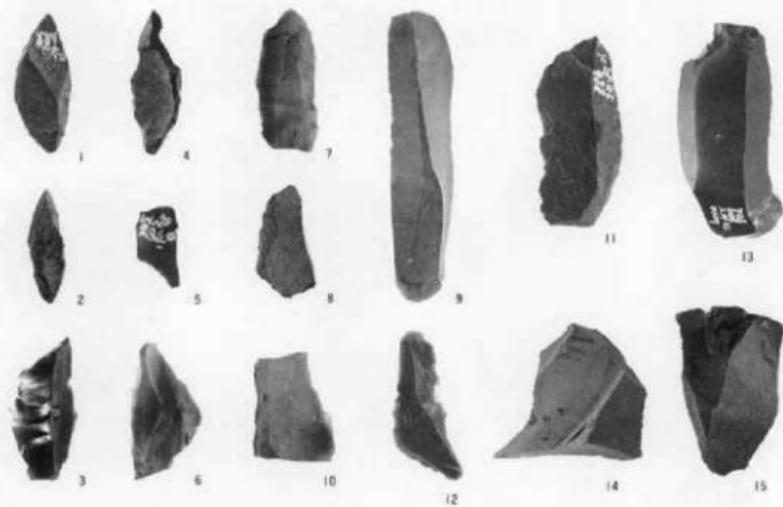


27ブロック





单独出土



表採

千葉県文化財センター調査報告第255集

## 石 揚 遺 跡

—手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

### 第 1 分 冊

---

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月31日 発行

発 行 千 葉 県 教 育 委 員 会  
千葉県千葉市中央区中央4丁目13番地28号

編 集 財 団 法 人 千 葉 県 文 化 財 セ ン タ ー  
千葉県四街道市鹿渡 809 - 2

印 刷 株 式 会 社 弘 文 社  
千葉県市川市市川南 2 - 7 - 2

---

# 石 揚 遺 跡

—手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

## 第 2 分 冊

1 9 9 4

千葉県教育委員会  
財団法人 千葉県文化財センター

いし あげ  
石 揚 遺 跡

—手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

第 2 分冊 (縄文時代編)

1 9 9 4

千葉県教育委員会  
財団法人 千葉県文化財センター

## 第2分冊 目次

第2章 縄文時代 .....	199
第1節 概観 .....	199
第2節 遺構 .....	199
第3節 遺物 .....	244
第4節 まとめ .....	375

## 挿図目次

第130図 縄文時代遺構配置図	第152図 炉穴実測図 (3)
第131図 005住居実測図	第153図 炉穴実測図 (4)
第132図 011住居実測図	第154図 炉穴実測図 (5)
第133図 016住居実測図	第155図 陥穴実測図 (1)
第134図 006・007住居実測図	第156図 陥穴実測図 (2)
第135図 009・018住居実測図	第157図 陥穴実測図 (3)
第136図 010住居実測図	第158図 陥穴実測図 (4)
第137図 012住居実測図	第159図 陥穴実測図 (5)
第138図 017住居実測図	第160図 陥穴実測図 (6)
第139図 019住居実測図	第161図 早期土坑 (1)
第140図 020住居実測図	第162図 早期土坑 (2)
第141図 030住居実測図	第163図 前期土坑 (1)
第142図 031・045住居実測図	第164図 前期土坑 (2)
第143図 032住居実測図	第165図 中・後期土坑 (1)
第144図 033住居実測図	第166図 中・後期土坑 (2)
第145図 046・047住居実測図	第167図 中・後期土坑 (3)
第146図 048・049住居実測図	第168図 中・後期土坑 (4)
第147図 055・056・057住居実測図	第169図 早期出土遺物 (1)
第148図 043住居実測図	第170図 早期出土遺物 (2)
第149図 029・054住居実測図	第171図 早期出土遺物 (3)
第150図 炉穴実測図 (1)	第172図 早期出土遺物 (4)
第151図 炉穴実測図 (2)	第173図 早期出土遺物 (5)

第174區 早期出土遺物 (6)  
第175區 早期出土遺物 (7)  
第176區 早期出土遺物 (8)  
第177區 早期出土遺物 (9)  
第178區 早期出土遺物 (10)  
第179區 早期出土遺物 (11)  
第180區 早期出土遺物 (12)  
第181區 早期出土遺物 (13)  
第182區 早期出土遺物 (14)  
第183區 早期出土遺物 (15)  
第184區 早期出土遺物 (16)  
第185區 早期出土遺物 (17)  
第186區 早期出土遺物 (18)  
第187區 早期出土遺物 (19)  
第188區 早期出土遺物 (20)  
第189區 早期出土遺物 (21)  
第190區 早期出土遺物 (22)  
第191區 早期出土遺物 (23)  
第192區 早期出土遺物 (24)  
第193區 早期出土遺物 (25)  
第194區 早期出土遺物 (26)  
第195區 早期出土遺物 (27)  
第196區 早期出土遺物 (28)  
第197區 早期出土遺物 (29)  
第198區 早期出土遺物 (30)  
第199區 早期出土遺物 (31)  
第200區 早期出土遺物 (32)  
第201區 早期出土遺物 (33)  
第202區 早期出土遺物 (34)  
第203區 早期出土遺物 (35)  
第204區 早期出土遺物 (36)  
第205區 早期出土遺物 (37)  
第206區 早期出土遺物 (38)

第207區 早期出土遺物 (39)  
第208區 前期出土遺物 (1)  
第209區 前期出土遺物 (2)  
第210區 前期出土遺物 (3)  
第211區 前期出土遺物 (4)  
第212區 前期出土遺物 (5)  
第213區 前期出土遺物 (6)  
第214區 前期出土遺物 (7)  
第215區 前期出土遺物 (8)  
第216區 前期出土遺物 (9)  
第217區 前期出土遺物 (10)  
第218區 前期出土遺物 (11)  
第219區 前期出土遺物 (12)  
第220區 前期出土遺物 (13)  
第221區 前期出土遺物 (14)  
第222區 前期出土遺物 (15)  
第223區 前期出土遺物 (16)  
第224區 前期出土遺物 (17)  
第225區 前期出土遺物 (18)  
第226區 前期出土遺物 (19)  
第227區 前期出土遺物 (20)  
第228區 前期出土遺物 (21)  
第229區 前期出土遺物 (22)  
第230區 前期出土遺物 (23)  
第231區 前期出土遺物 (24)  
第232區 前期出土遺物 (25)  
第233區 前期出土遺物 (26)  
第234區 前期出土遺物 (27)  
第235區 前期出土遺物 (28)  
第236區 中・後期出土遺物 (1)  
第237區 中・後期出土遺物 (2)  
第238區 中・後期出土遺物 (3)  
第239區 中・後期出土遺物 (4)

- 第240図 中・後期出土遺物 (5)  
 第241図 中・後期出土遺物 (6)  
 第242図 中・後期出土遺物 (7)  
 第243図 中・後期出土遺物 (8)  
 第244図 中・後期出土遺物 (9)  
 第245図 中・後期出土遺物 (10)  
 第246図 中・後期出土遺物 (11)  
 第247図 中・後期出土遺物 (12)  
 第248図 中・後期出土遺物 (13)  
 第249図 中・後期出土遺物 (14)  
 第250図 後・晩期出土遺物  
 第251図 土製品 (1)  
 第252図 土製品 (2)  
 第253図 土製品 (3)  
 第254図 縄文石器実測図 (1)  
 第255図 縄文石器実測図 (2)  
 第256図 縄文石器実測図 (3)  
 第257図 縄文石器実測図 (4)  
 第258図 縄文石器実測図 (5)  
 第259図 縄文石器実測図 (6)  
 第260図 縄文石器実測図 (7)  
 第261図 縄文石器実測図 (8)  
 第262図 縄文石器実測図 (9)  
 第263図 縄文石器実測図 (10)  
 第264図 縄文石器実測図 (11)  
 第265図 縄文石器実測図 (12)  
 第266図 縄文石器実測図 (13)  
 第267図 縄文石器実測図 (14)  
 第268図 縄文石器実測図 (15)  
 第269図 縄文石器実測図 (16)  
 第270図 縄文石器実測図 (17)  
 第271図 縄文石器実測図 (18)

## 表 目 次

- 表68 炉穴一覽表  
 表69 陥穴一覽表  
 表70 早期土坑一覽表  
 表71 前期土坑一覽表  
 表72 中・後期土坑一覽表  
 表73 土製品一覽表

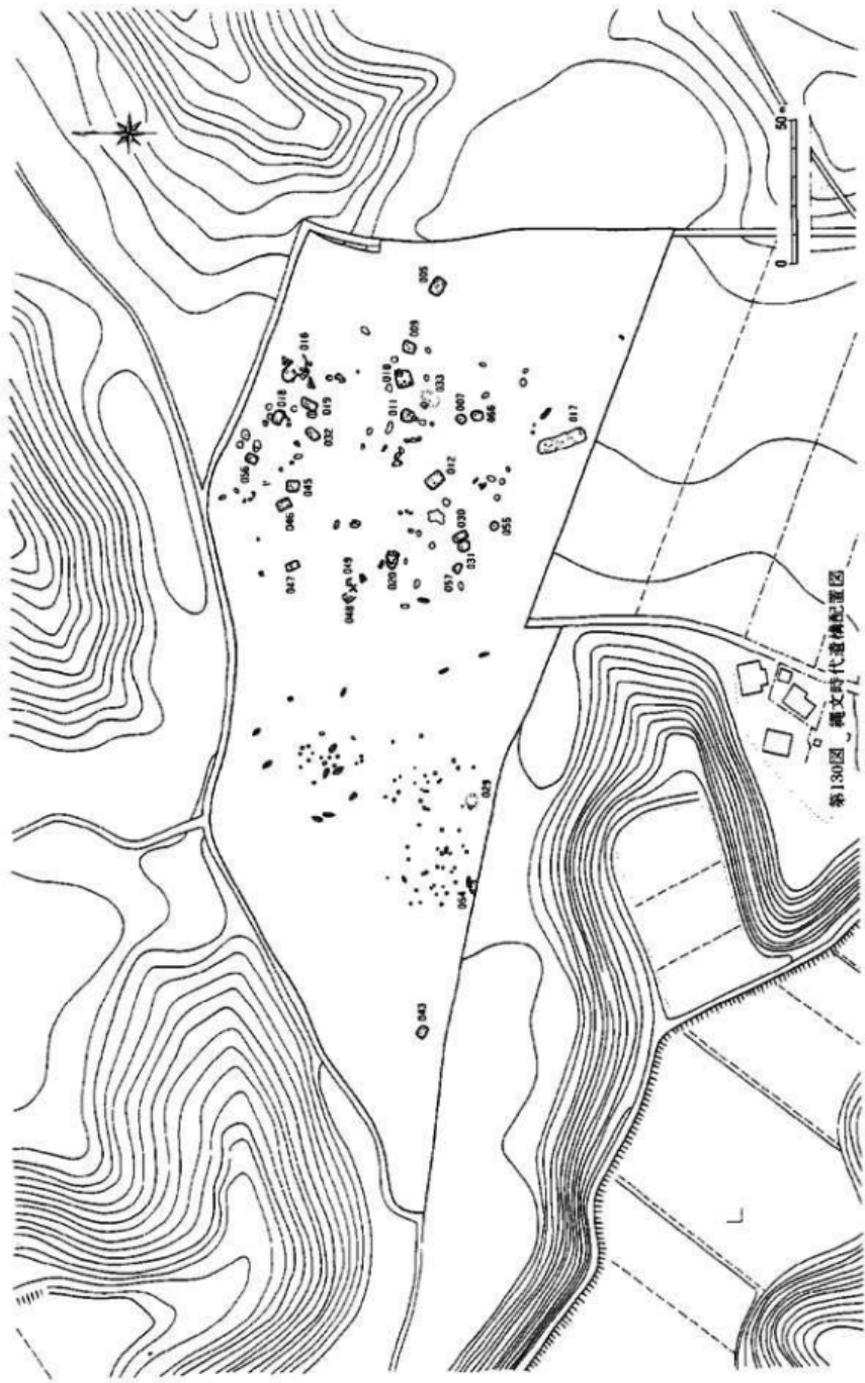
## 図版目次

- 図版25 縄文時代遺構 (1)  
 図版26 縄文時代遺構 (2)  
 図版27 縄文時代遺構 (3)  
 図版28 縄文時代遺構 (4)  
 図版29 縄文時代遺構 (5)  
 図版30 縄文時代遺構 (6)  
 図版31 縄文時代遺構 (7)  
 図版32 縄文時代遺構 (8)  
 図版33 縄文時代遺構 (9)  
 図版34 縄文時代遺構 (10)  
 図版35 縄文時代遺構 (11)  
 図版36 縄文時代遺構 (12)

- 図版37 縄文時代遺構 (13)
- 図版38 縄文時代遺構 (14)
- 図版39 縄文時代遺物 (1)
- 図版40 縄文時代遺物 (2)
- 図版41 縄文時代遺物 (3)
- 図版42 縄文時代遺物 (4)
- 図版43 縄文時代遺物 (5)
- 図版44 縄文時代遺物 (6)
- 図版45 縄文時代遺物 (7)
- 図版46 縄文時代遺物 (8)
- 図版47 縄文時代遺物 (9)
- 図版48 縄文時代遺物 (10)
- 図版49 縄文時代遺物 (11)
- 図版50 縄文時代遺物 (12)
- 図版51 縄文時代遺物 (13)
- 図版52 縄文時代遺物 (14)
- 図版53 縄文時代遺物 (15)
- 図版54 縄文時代遺物 (16)
- 図版55 縄文時代遺物 (17)
- 図版56 縄文時代遺物 (18)
- 図版57 縄文時代遺物 (19)
- 図版58 縄文時代遺物 (20)
- 図版59 縄文時代遺物 (21)
- 図版60 縄文時代遺物 (22)
- 図版61 縄文時代遺物 (23)
- 図版62 縄文時代遺物 (24)
- 図版63 縄文時代遺物 (25)
- 図版64 縄文時代遺物 (26)
- 図版65 縄文時代遺物 (27)
- 図版66 縄文時代遺物 (28)
- 図版67 縄文時代遺物 (29)
- 図版68 縄文時代遺物 (30)
- 図版69 縄文時代遺物 (31)
- 図版70 縄文時代遺物 (32)
- 図版71 縄文時代遺物 (33)
- 図版72 縄文時代遺物 (34)
- 図版73 縄文時代遺物 (35)
- 図版74 縄文時代遺物 (36)
- 図版75 縄文時代遺物 (37)
- 図版76 縄文時代遺物 (38)
- 図版77 縄文時代遺物 (39)
- 図版78 縄文時代遺物 (40)
- 図版79 縄文時代遺物 (41)
- 図版80 縄文時代遺物 (42)
- 図版81 縄文時代遺物 (43)
- 図版82 縄文時代遺物 (44)
- 図版83 縄文時代遺物 (45)
- 図版84 縄文時代遺物 (46)
- 図版85 縄文時代遺物 (47)
- 図版86 縄文時代遺物 (48)
- 図版87 縄文時代遺物 (49)
- 図版88 縄文時代遺物 (50)
- 図版89 縄文時代遺物 (51)
- 図版90 縄文時代遺物 (52)
- 図版91 縄文時代遺物 (53)
- 図版92 縄文時代遺物 (54)

## 第 2 章

# 繩 文 時 代



## 第2章 縄文時代

### 第1節 概観

石場遺跡において縄文時代の人々の活動痕跡が認められるのは早期からであるが、その様相は時期によってかなり異なっている。燃糸文系土器期、沈線文系土器期においてはほとんど活動痕跡が認められないのに対し、条痕文系土器期にいたって、急激に多数の遺構、多量の遺物が残されるようになる。この時期の遺構として住居跡が4軒、炉穴が39基、土坑が17基検出されており、これらの分布と重なるように厚い遺物包含層が堆積している。いずれも調査区東側に集中して検出されており、この時期の活動拠点が調査区東側にあったことが分かる。また、陥穴が全部で21基検出されている。遺物は全く出土していないが、早期に属するものと思われる。これらは住居跡などとは違って調査区北西部に集中する傾向が見られ、狩猟活動の場は居住域とはやや異なっていたものと思われる。

前期初頭の花積下層式期になると遺構数、遺物量ともピークを迎える。住居跡が21軒、土坑が11基検出されている。これらの遺構もほとんどが調査区東側から検出されており、活動拠点は引き続き調査区東側にあったとみられる。なお、花積下層式期の集落遺跡は、この周辺では松戸市の幸田貝塚以外にはほとんど確認されていない。その意味でも貴重な資料になるといえる。

前期開山式期以降は、黒浜式に属する住居跡が1軒検出されているほかは、中期半ばまで遺構は全く見られなくなる。ただ遺物量は少なくなるものの時期的な切れ目はほとんどなく出土しており、何らかの活動が行われていたことがうかがえる。

中期後半から後期初頭に属する土坑は、全部で69基検出され、ほとんどが調査区西側に集中して検出されている。プランはかなり正確な円形であり、平坦な底面とほぼ垂直に立ち上がる壁面をもっていることから、ある程度規格性をもたせてつくられたと思われる。これら土坑群の集中ぶりとは対照的に、同じ時期に属する住居跡は2軒しか検出されなかった。地形から考えて調査区の外側に住居跡群が存在する可能性は低く、通常の集落遺跡とは異なる様相を示しているといえる。土坑群の用途と住居跡を含めた遺構群の性格の解明が今後の課題となろう。

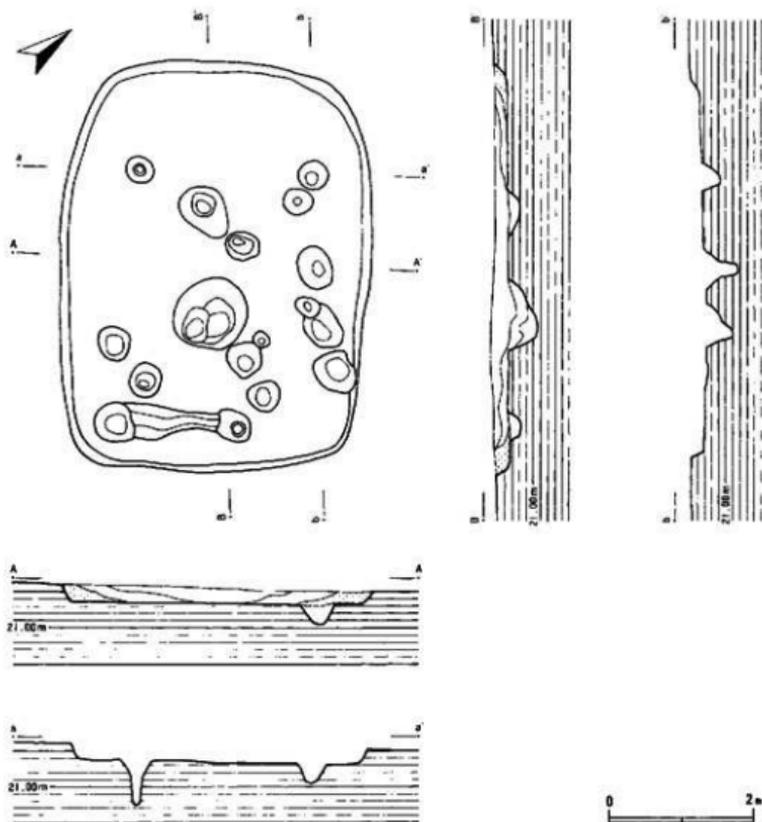
### 第2節 縄文時代の遺構

#### 1、竪穴住居跡

##### (1) 早期の住居跡

005 (第131図、図版25)

調査区の東端、3H区に位置する。



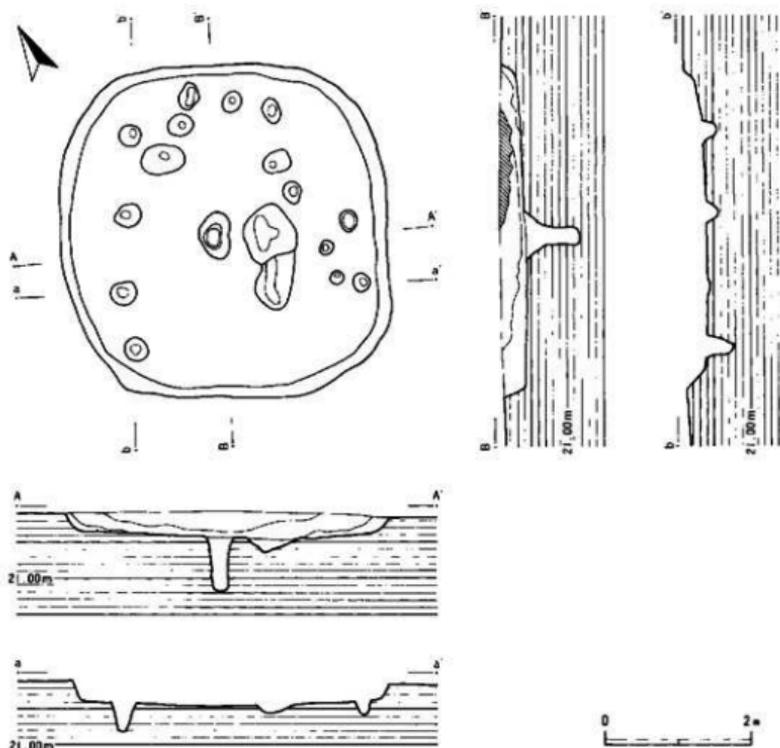
第131図 005住居実測図

大きさは、主軸5.57m、横軸4.3m、深さ34cmを測る隅丸長方形のプランで、主軸方向はN-57°-Wである。柱穴と思われるピットが15基検出された。床面直上部の覆土はしまりが強い。床面はロームブロックが散在し、硬化も進んでいる。遺物は少なく、ほとんどが覆土上部から出土した。

011 (第132図、図版25)

住居跡群の中ほどの3G区に位置する。

主軸4.65m、横軸4.5m、深さ38cmを測る隅丸正方形のプランで、主軸方向はN-25°-Eである。ピットが18ヶ所から検出されている。覆土は極めてしまりが強く、ローム粒・焼土粒を多量に含んでいるほか、炭化物の混入も見られる。床面はハードロームまで掘り込まれており、



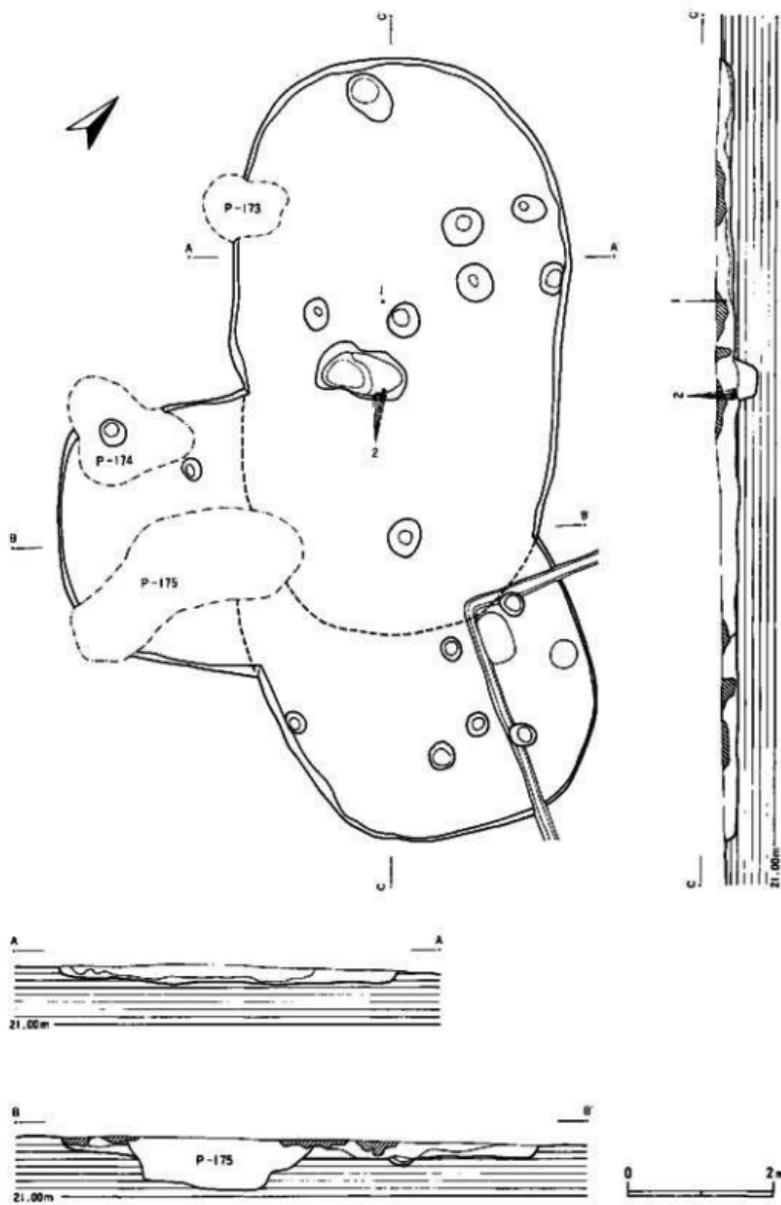
第132図 011住居実測図

かなり硬化が進んでいる。鶯ヶ島台式土器を多量に出土している。

016 (第133図、図版27)

調査区北東部の3H区に位置する。

早期の包含層に掘り込まれていたためプランの検出が極めて困難であったが、最終的には2軒の住居跡が切り合っているものと判断した。西側の住居跡のほうが新しく、この住居跡の主軸は7.84m、横軸4.65m、深さ40cm、主軸方向はN-45°-Wである。覆土は、西側の住居跡はローム粒をやや多く含み、その上に条復文土器を多量に包含した黒褐色土が堆積している(図版27)。東側は焼土粒が目立つ。いずれもしまり強い。床面は、西側はロームブロックを多量に含んだ貼り床になっており硬化が進んでいる。東側は、住居中央部は硬化しているものの、壁際はやわらかい。一部015住居跡に切られている。南側の張り出しのような部分は包含層を掘りすぎたものであって、016住居跡に伴うものではない。



第133图 016住居実測図

(2) 前期・花積下層式期の住居跡

006 (第134図、図版25)

住居跡群の南側、3 G区に位置する。

主軸3.85m、横軸3.5m、深さ13cmを測る不整隅丸方形のプランで、主軸方向はN-0°-Wである。ピットが3本検出されたが、柱穴になるかどうかは疑わしい。覆土はやや赤みの強い暗褐色土で、小さいブロック状の貝層が検出されている。床面は浅く、硬化面もない。炉は比較的大きく、硬化した火床面が検出されている。遺物は少なく、小破片のみである。

007 (第134図、図版25)

3 G区より006に接するように位置する。

主軸3.2m、横軸3.0m、深さ17cmを測る不整円形のプランで、主軸方向はN-36°-Eである。トレンチャーによる攪乱が著しく、遺存状況は悪い。柱穴は検出されなかった。住居南側に小さいブロック状の貝層が検出されている。炉はやや大型で、火床面もしっかりしている。ここからも遺物の出土は少なかった。

009 (第135図、図版26)

住居跡群の東端、3 H区に位置する。

主軸4.6m、横軸3.6m、深さ38cmを測る隅丸長方形のプランで、主軸方向はN-16.5°-Eである。ピットは4本検出されている。覆土は焼土を多量に含み、しまりが強い。床面はロームブロックがかなり密着して硬化面を形成している。炉は検出されなかった。遺物は住居跡中央部からまとまって出土している。また、西壁際からは石斧や瑠珠耳飾が出土している。

010 (第136図、図版26)

3 H区より、009に近接するように位置する。

主軸5.9m、横軸6.25m、深さ15cmを測る不整形のプランで、主軸方向はN-10°-Wである。ピットが10本検出されたが、そのうち西側で円形にめぐる6本が柱穴になるものと思われる。覆土は場所によってかなり色調に違いが見られ、中央部では黒褐色、壁際では黄褐色である。また、炉の上の覆土では焼土の混入が著しい。床面はソフトローム中に構築されており、あまり硬化していない。遺物は数は多くないが、良好な資料が出土している。

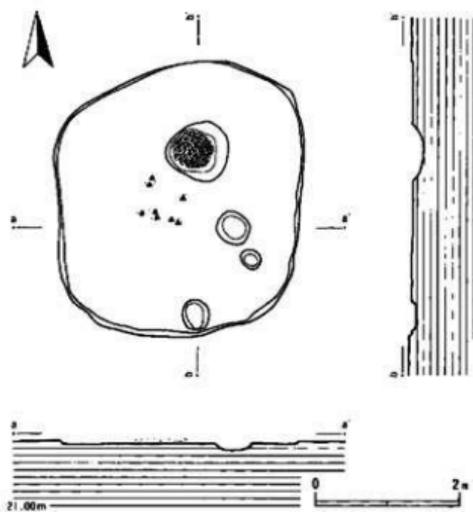
なお、住居跡北東部に浅い掘り込みが検出され、そこから焼礫と熱を受けた土器片が多数出土した(図版26)。礎群の下からは焼土層も検出されている。出土した土器は住居跡と同じ花積下層式だが、特に底部が多かった。セクションはとれなかったが、検出状況から判断して住居跡より新しいものと思われる。

012 (第137図、図版27)

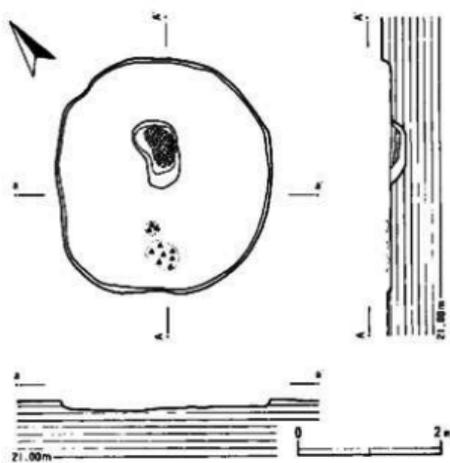
住居跡群の南側の中心、3 G区に位置する。

主軸6.4m、横軸4.4m、深さ25cmを測る長方形のプランで、主軸方向はN-41°-Wである。

006

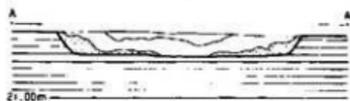
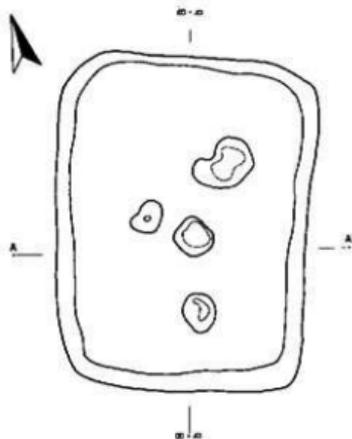


007

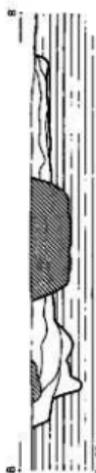
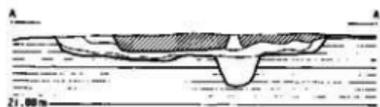
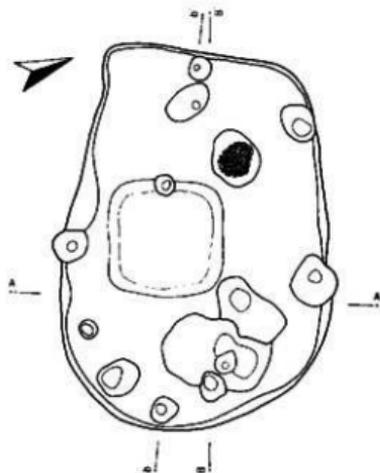


第134图 006·007住居実測図

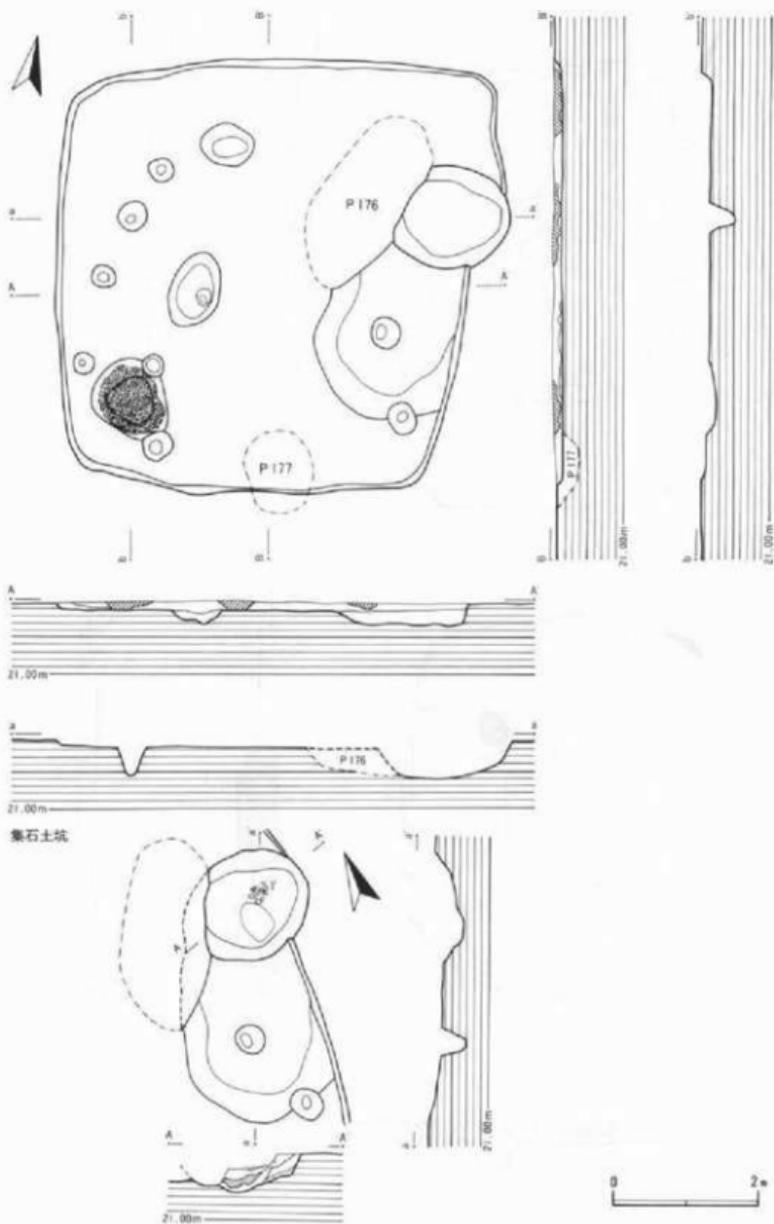
009

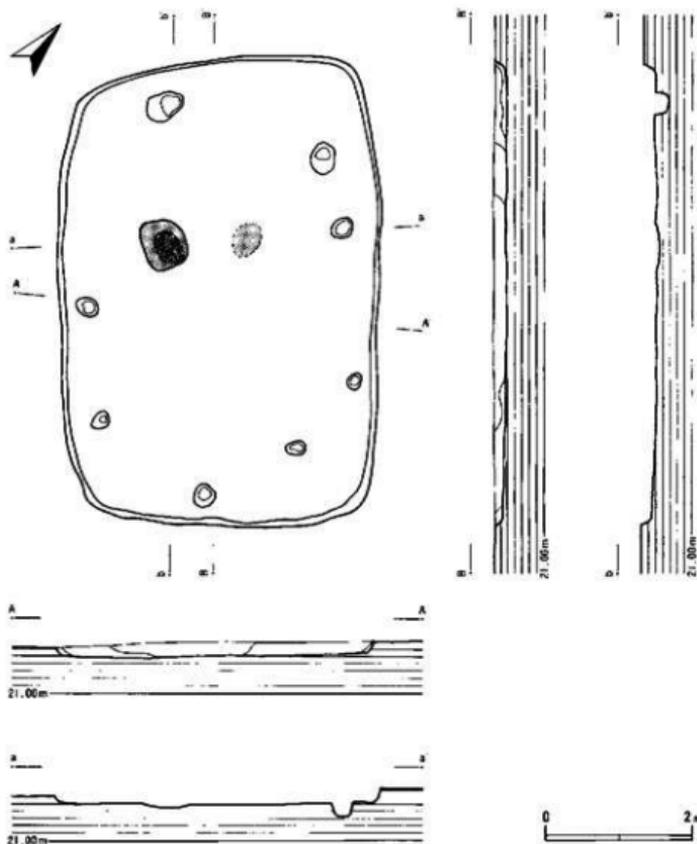


018



第135图 009·018住居实测图





第137図 012住居実測図

柱穴は8本である。覆土は全体にしまり強く、ローム粒を若干含んでいる。床面はさほど硬化していない。炉は住居跡北西部より検出されたが、隣接するように焼土集中部分が見られた。作り替えの可能性もある。遺物は住居跡の西側から集中して出土した。

017 (第138図、図版32)

調査区最南端、4G区に位置する大型住居跡である。

推定規模は主軸17.1m、横軸5.0m、深さ35cm(貼り床除去後に実測、実際はこれより浅い)、推定主軸方向はN-19°-Wである。掘り込みが浅かったためか覆土は薄く、北側では床面しか残存していなかった。柱穴状のピットが全体で36ヶ所から検出されたが、どれが柱穴であるかを確定することはできなかった。掘り方は舟底状を呈しているが、中央部に貼り床を構築して

平らにしている。熱を受けたローム面が南側で何か所か見られたが、これらが炉であるかどうかは不明。出土遺物は条痕文土器のみだが、いずれも流れ込みとみられる。このような住居跡は早期・前期ともに例を見ないが、プランの形状や炉の存在から、前期とみなした。

018 (第135図、図版28)

住居跡群北部、2G区に位置する。

主軸5.2m、横軸3.7m、深さ33cmを測る隅丸長方形のプランで(ただし東側は円形になる)、主軸方向はN-68°-Wである。中央に新しい炭窯が掘り込まれている。ピットが13本検出されたが、それらのうち壁際に存在するものは柱穴の可能性が高い。覆土は全体にしまり強い。床面はゆるやかなすり鉢状を呈しており、比較的硬化が進んでいる。炉は住居跡西側に存在し、かなりしっかりした火床部をもつ。遺物は多いが、条痕文土器の混入も目立つ。

019 (第139図、図版28)

018の南側、2G区に位置する。

主軸5.95m、横軸3m、深さ26cmを測る長方形のプランで(ただし北側は円形になる)、主軸方向はN-24.5°-Eである。柱穴は9本である。覆土は暗褐色でしまり弱い。床面はロームブロックが混入し、かなり硬化している。炉が3ヶ所から検出されているが、これらが同時存在なのか順次作り替えられたのかは不明。遺物は覆土上部から多く出土した。主軸は018とほぼ直交する。

020 (第140図、図版28)

住居跡群西側、3F区に位置する。

推定規模は主軸5.5m、横軸4.1m、深さ36cmを測る楕円形気味の円形プランで、主軸方向はN-90°-Wである。早期のP-050土坑(炉穴)の上に構築されている。柱穴は確認できるだけで8本ある。床面はあまり硬化しておらず、やや凸凹が多い。遺物は少なく、器形の分かる深鉢が1点出土したほかは、ほとんどが条痕文土器であった。

030 (第141図、図版29)

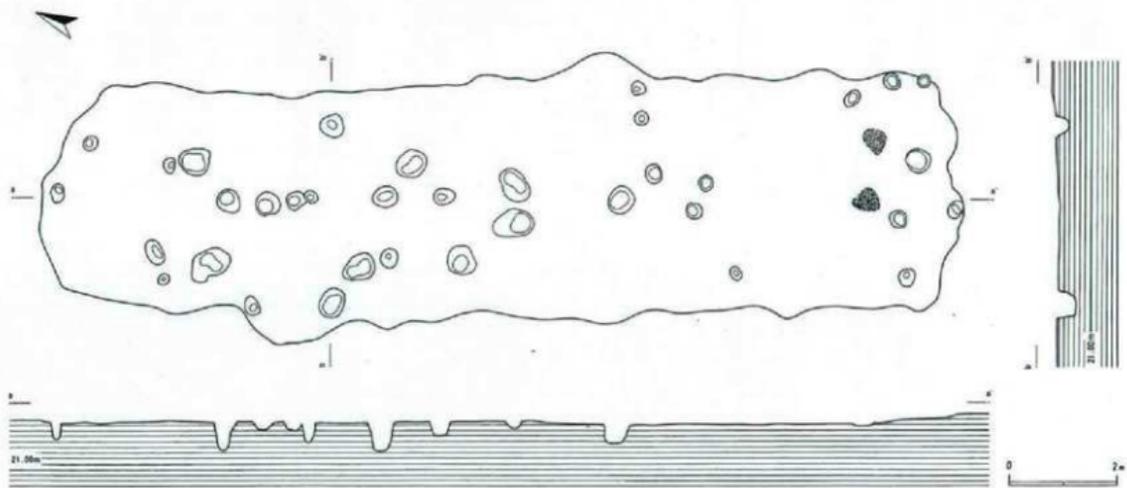
住居跡群南西部、3F区に位置する。

主軸5.4m、横軸3.2m、深さ20cmを測る長方形のプランで、主軸方向はN-24°-Wである。柱穴は6本である。床面は中央部に硬化面が認められるが、貼り床ではない。炉はすり鉢状に掘り込まれ、火床部もよく残っている。遺物は小破片が多い。

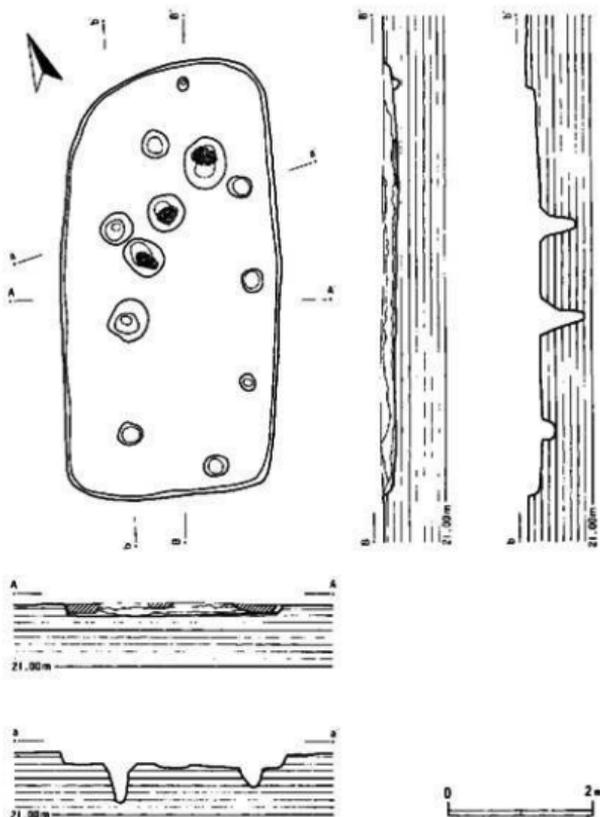
031 (第142図、図版29)

3F区で、030に接するように位置する。

主軸4.0m、横軸3.3m、深さ34cmを測る不整円形のプランで、主軸方向はN-11°-Wである。柱穴は5本である。床面はほとんど硬化していない。炉もあまり使われなかったようで、浅い掘り込みに焼土が堆積する程度である。こども遺物は小破片が多い。



第138图 017住居平面図



第139図 019住居実測図

032 (第143図、図版29)

住居跡群北部の2G区、019の西側に位置する。

主軸5.2m、横軸3.4m、深さ22cmを測る隅丸長方形プランで、主軸方向はN-38°-Eである。

柱穴は8本である。床面にはロームブロックが点在し、やや硬化している。

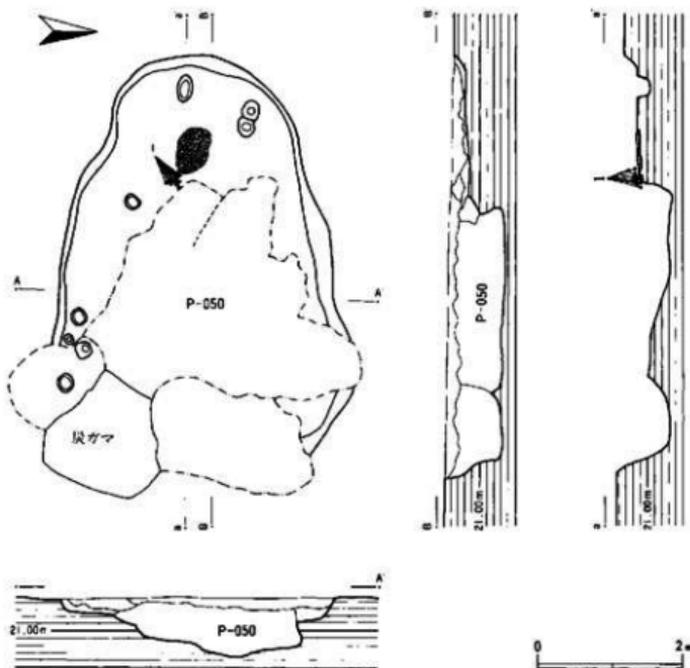
033 (第144図)

007と010の間、3G区に位置する。

柱穴と炉しか残っていないため、プラン形状や規模は不明であるが、おそらく長方形になるう。残存している柱穴は8本である。推定主軸方向はN-44°-Eである。

045 (第142図、図版29)

住居跡群北部、2G区に位置する。



第140図 020住居実測図

主軸4.4m、横軸3.9m、深さ24cmを測る不整隅丸方形のプランで、主軸方向は $N-0^{\circ}-W$ である。柱穴は8本ある。遺物は少ない。

**046 (第145図、図版30)**

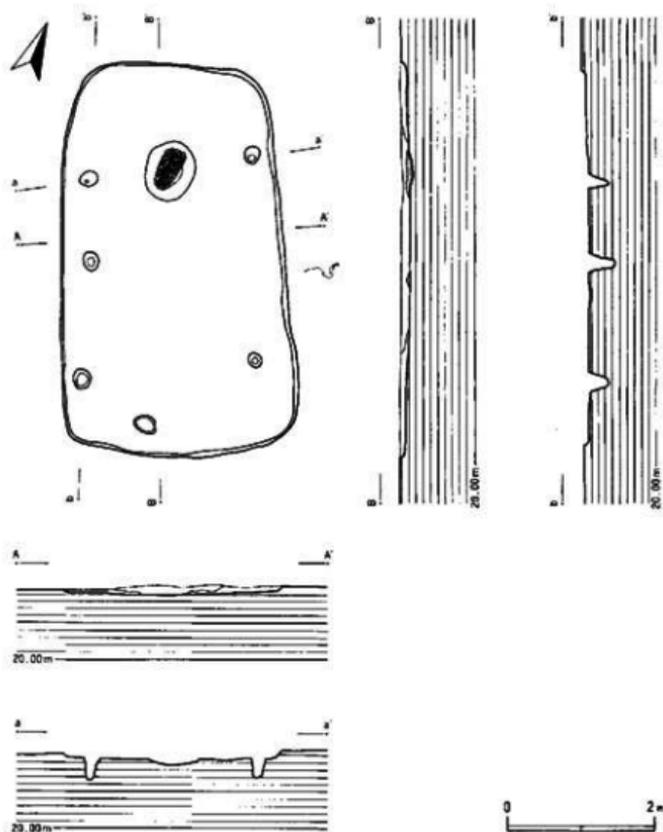
045のすぐ西側、2G区に位置する。

主軸4.8m、横軸3.4m、深さ21cmを測る長方形のプランで、主軸方向は $N-25^{\circ}-W$ である。ピットが13本検出されたが、そのうち壁に平行するように並んでいるものが柱穴と思われる。炉のすぐ南側からは、貝殻文が施された深鉢の上半部が、半分埋まった状態で出土した(図版30)。

**047 (第145図、図版30)**

住居跡群の北西端、2F区に位置する。

主軸4.8m、横軸3.0m、深さ17cmを測る長方形のプランで、主軸方向は $N-19^{\circ}-W$ である。攪乱による破壊がやや目立つ。柱穴は残存しているだけで5本ある。なお、北壁際にあるピットは、住居跡よりあとに掘り込まれたものである。



第141図 030住居実測図

048 (第146図、図版31)

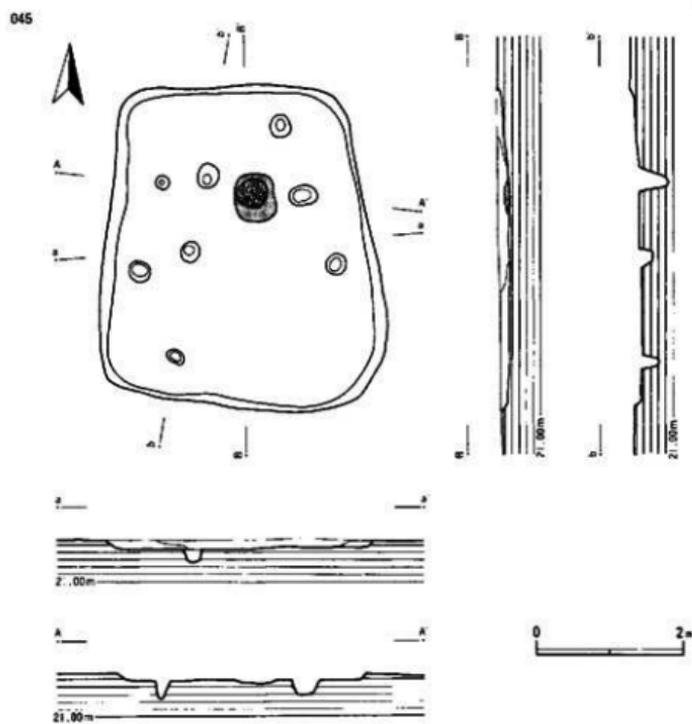
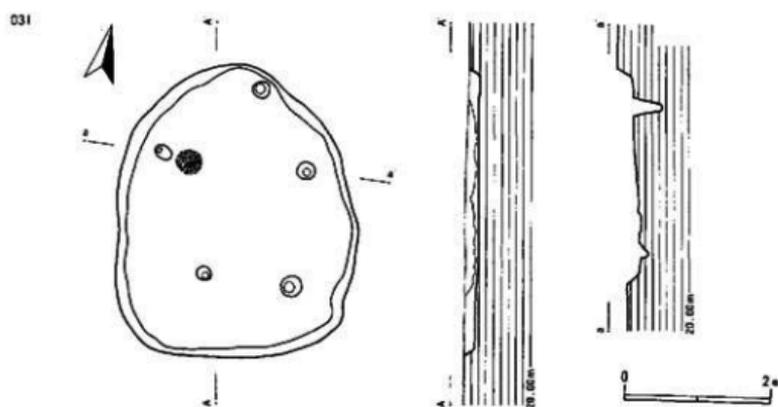
住居跡群の西端、2 F区に位置する。

主軸5.3m、横軸3.2m、深さ36cmを測る隅丸方形のプランで、主軸方向はN-40.5°-Wである。1号方形周溝基の周溝に切られている。柱穴は確認できるだけで7本ある。遺物は多い。

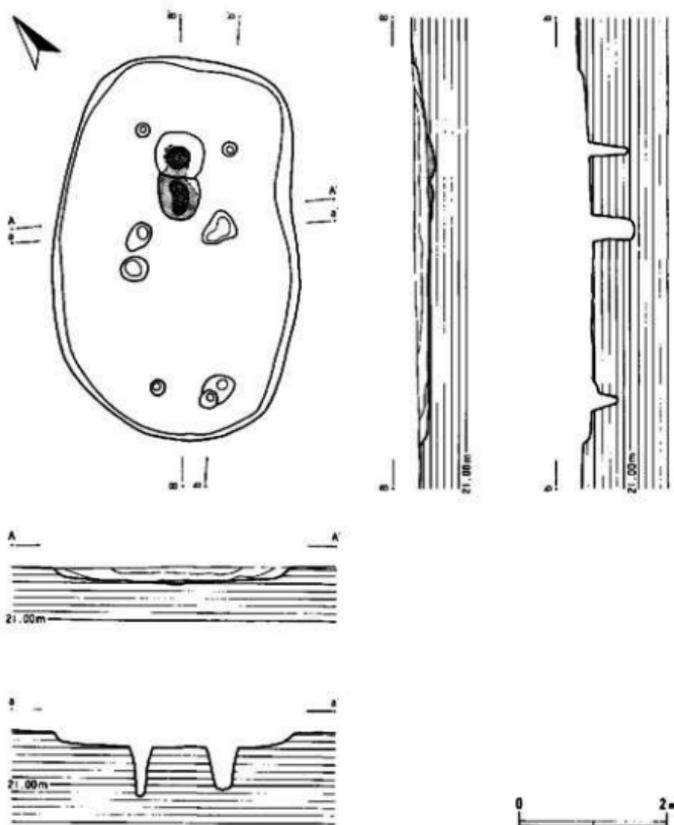
049 (第146図、図版31)

2 F区より048に近接するように位置する。

主軸3.1m、横軸2.7m、深さ23cmを測る不整円形のプランをもつものと思われ、主軸方向はN-7°-Wである。1号方形周溝基の主体部に切られている。柱穴は残存しているだけで3本検出されている。



第142图 031·045住居实测图



第143図 032住居実測図

055 (第147図、図版32)

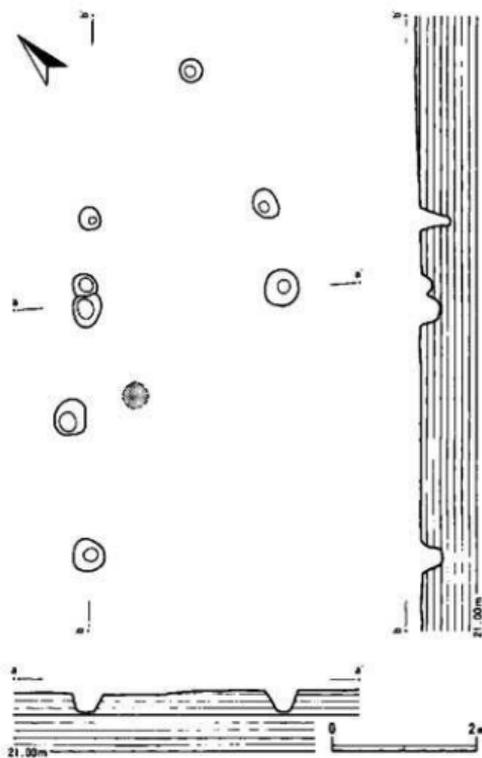
住居跡群南西端の3F区に位置する。

主軸3.2m、横軸2.7m、深さ22cmを測る不整形のプランで、主軸方向はN-38°-Wである。柱穴はない。住居跡としては小振りなプランであるが、炉の存在などから住居跡とみなした。覆土しまりが強い。床面はあまり硬化していないが、貼り床になっているものと思われる。中央に焼土ブロックが見られたが、おそらく炉になるものであろう。遺物は少ない。

056 (第147図)

住居跡群北端の1G区に位置する。

主軸4.1m、横軸3.2m、深さ18cmを測る隅丸長方形のプランで、主軸方向はN-7°-Eである。柱穴は6本ある。床面はほとんど硬化していない。遺物は少ない。



第144図 033住居実測図

057 (第147図、図版32)

031のすぐ西側の3 F-55区に位置する。

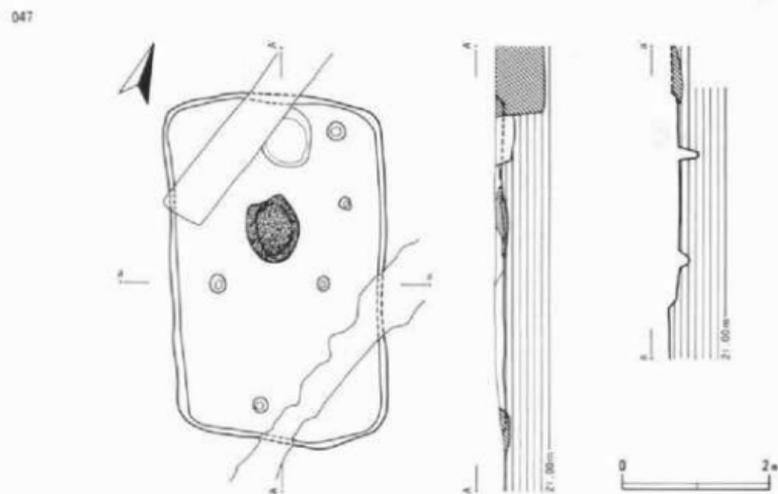
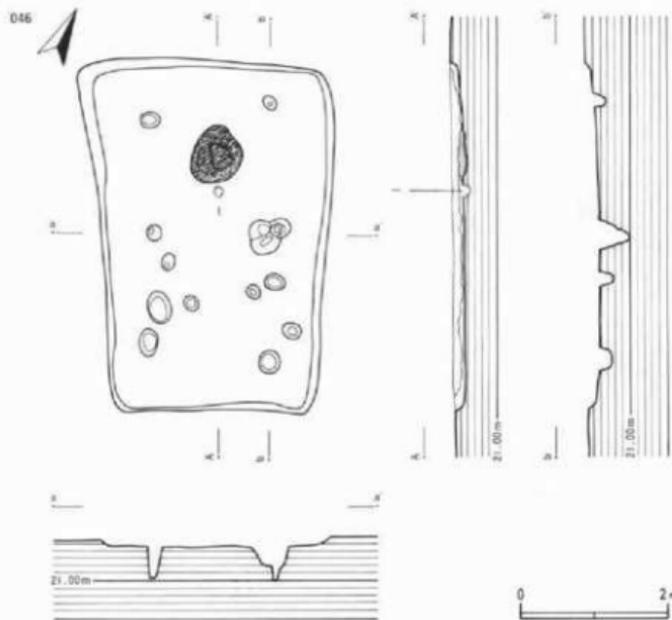
主軸2.7m、横軸3.0m、深さ29cmを測る隅丸方形のプランで、主軸方向はN-19'-Eである。柱穴と思われるピットは1本ある。遺物は少ない。

(3) 黒浜式期以降の住居跡

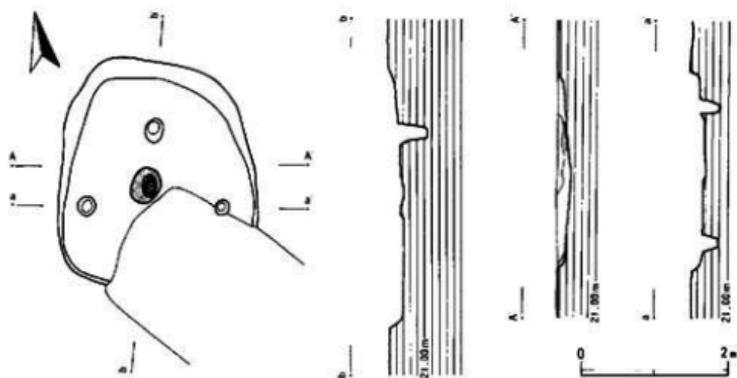
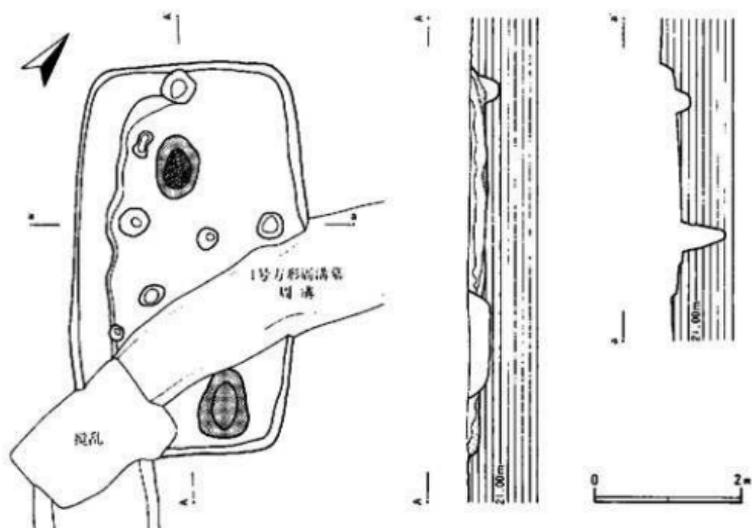
043 (第148図、図版31)

調査区西端の3 B区に位置する。

主軸は3.9m、横軸は3.3m、深さは20cmを測る不整隅丸長方形のプランで、主軸方向はN-54'-Wである。柱穴は6本検出された。床面はほぼ平坦であるがあまり硬化していない。形態の復元できる深鉢形土器が6点出土したほか、黒浜式土器が多量に出土した。

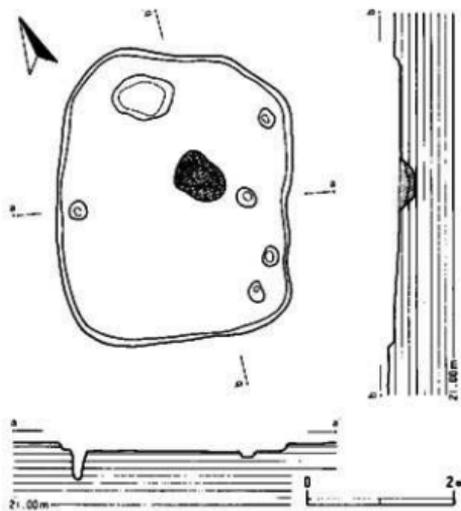


第145图 046·047住居実測図

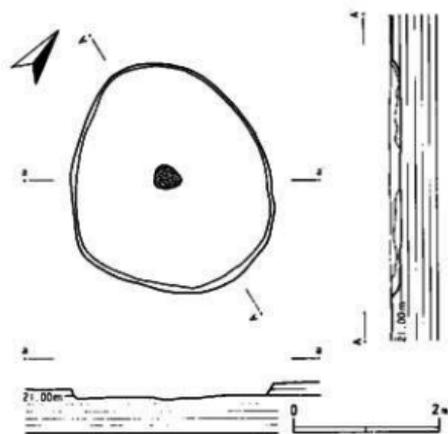


第146图 048·049住居平面图

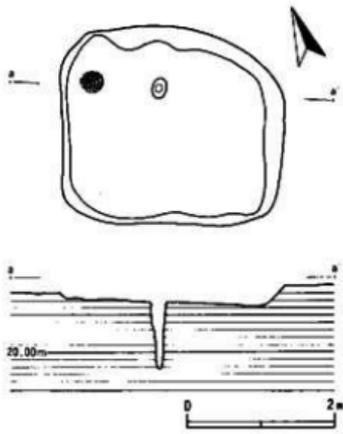
055



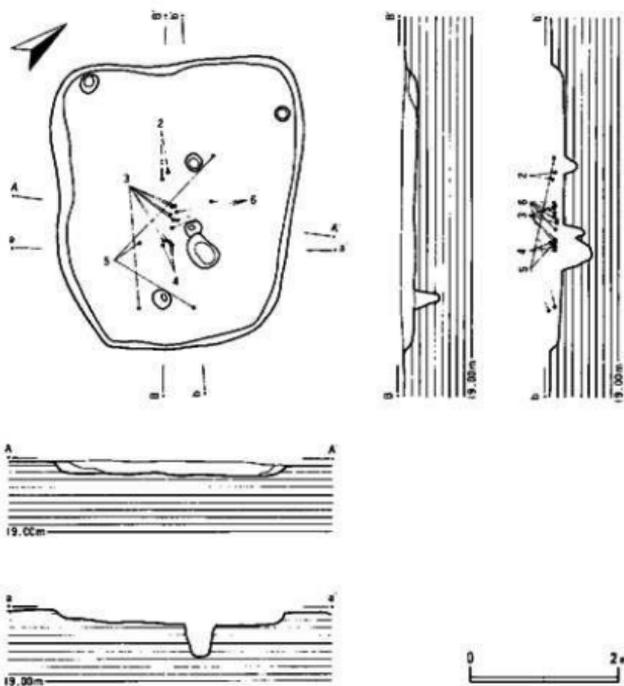
056



057



第147图 055·056·057住居实例图



第148図 043住居実測図

029 (第149図、図版33)

調査区隣の3D区に位置する。

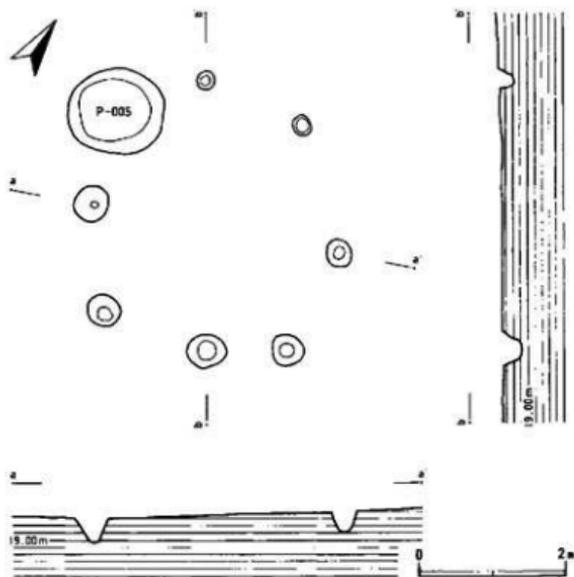
おそらく円形プランをもっていただけと思われるが、柱穴しか残存していないため、詳細は不明。しっかりした柱穴が7本残っている。西側に称名寺式土器を出土したP-005が、当住居跡のプランと重なり合うように検出されている。新旧関係は不明だが、ほとんど同じ時期につくられたものであろう。

054 (第149図、図版33)

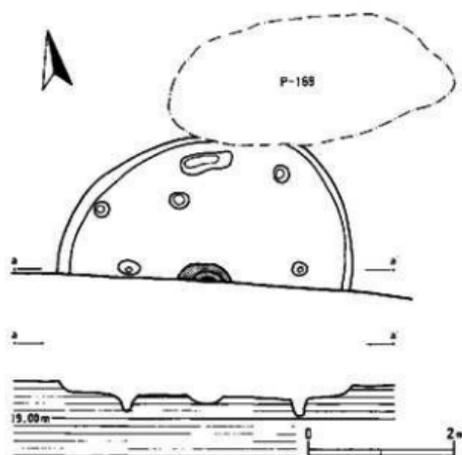
調査区南の3C区に位置する。

南半分は調査区外にあるため、全体規模は不明であるが、横軸は4.0m、深さは22cmを測る円形プランをもち、主軸方向はN-6°-Eと推定される。柱穴は5本検出された。住居中央部より炉が検出されている。出土遺物は少ないが、称名寺式期の住居跡と考えられる。

029



054



第149图 029·054住居'実測図

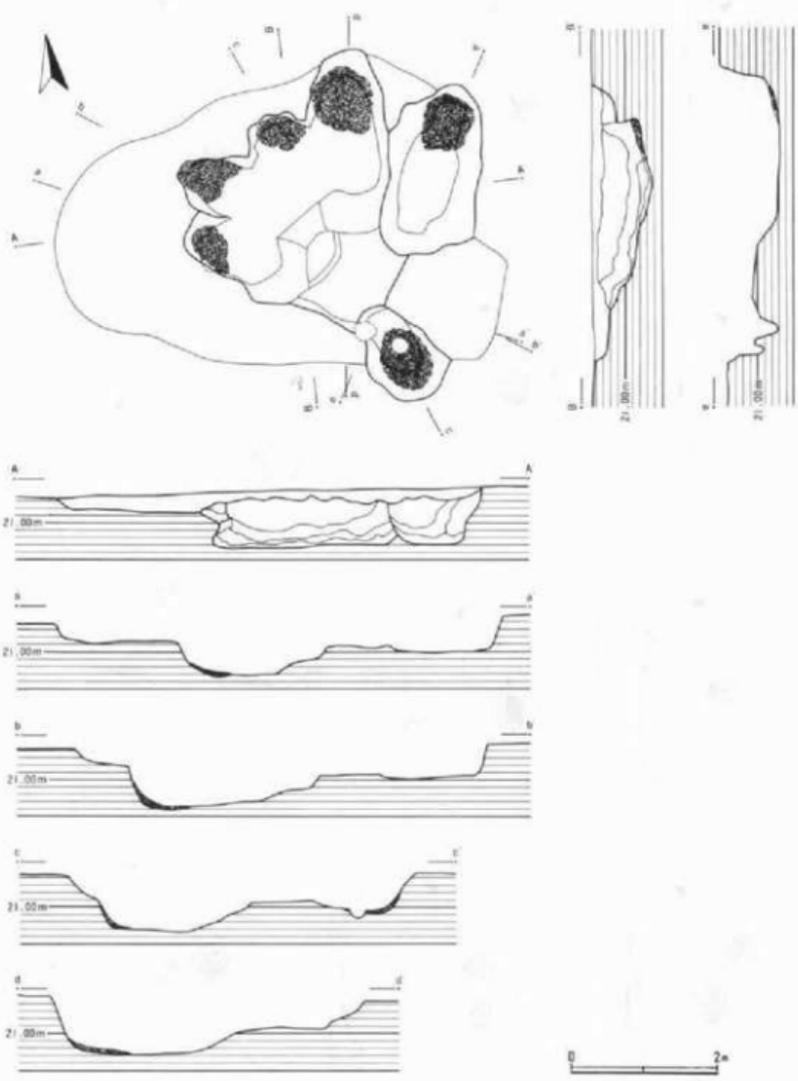
## 2、その他の遺構

その他の遺構についてはページの都合で詳細は省略し、一覧表を掲載するにとどめた。ここでは分類の方法だけ述べる。

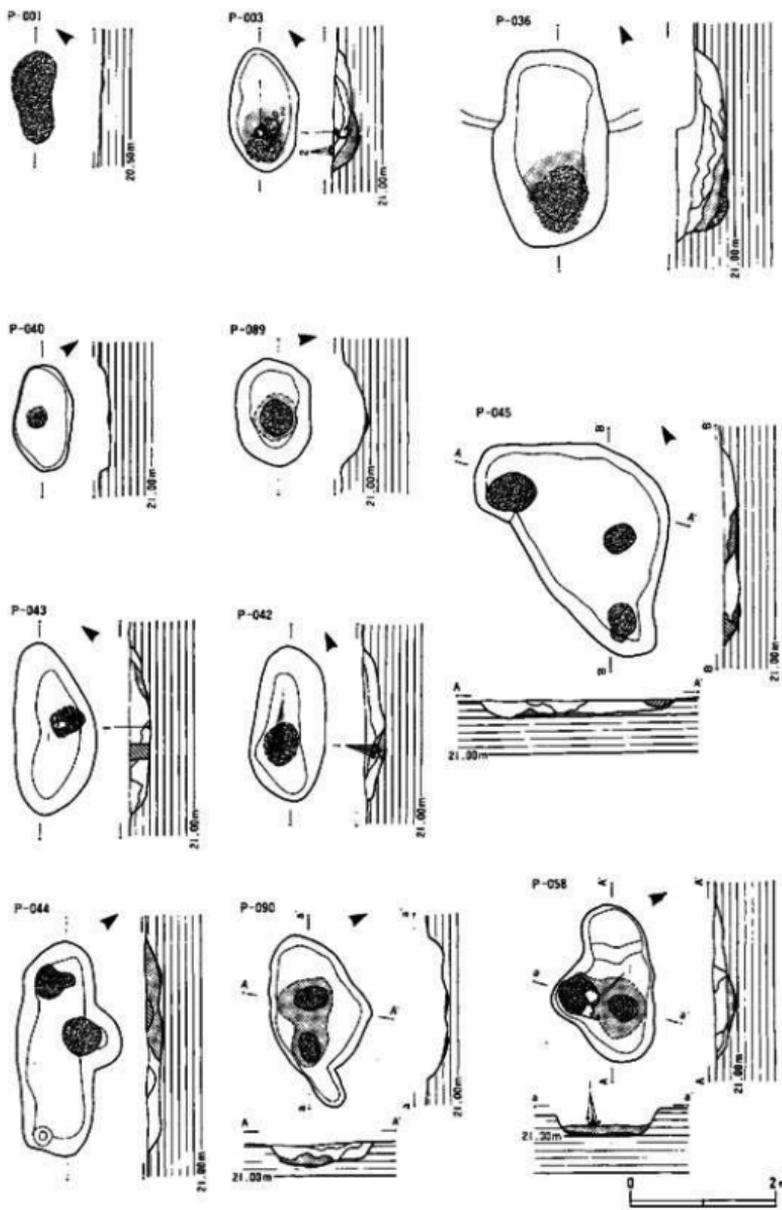
土坑については、まず性格による分類を行い、性格が分からなかったものは時期ごとに分類した。時期決定は出土遺物をもとに行ったが、中・後期の土坑については遺物が出土しなかったものについても検出位置、形態などから中・後期とみなしたのものもある。調査されたときには土坑は全部で176番まで番号がつけられたが、このような検討の結果、時期、性格とも分からなかった15基を除く161基の土坑を掲載することとした。ただし遺構番号は、混乱を避けるため変更していない。また、炉穴などで当初1基とみなし、あとから複数基になったものについて

表68 炉穴一覧

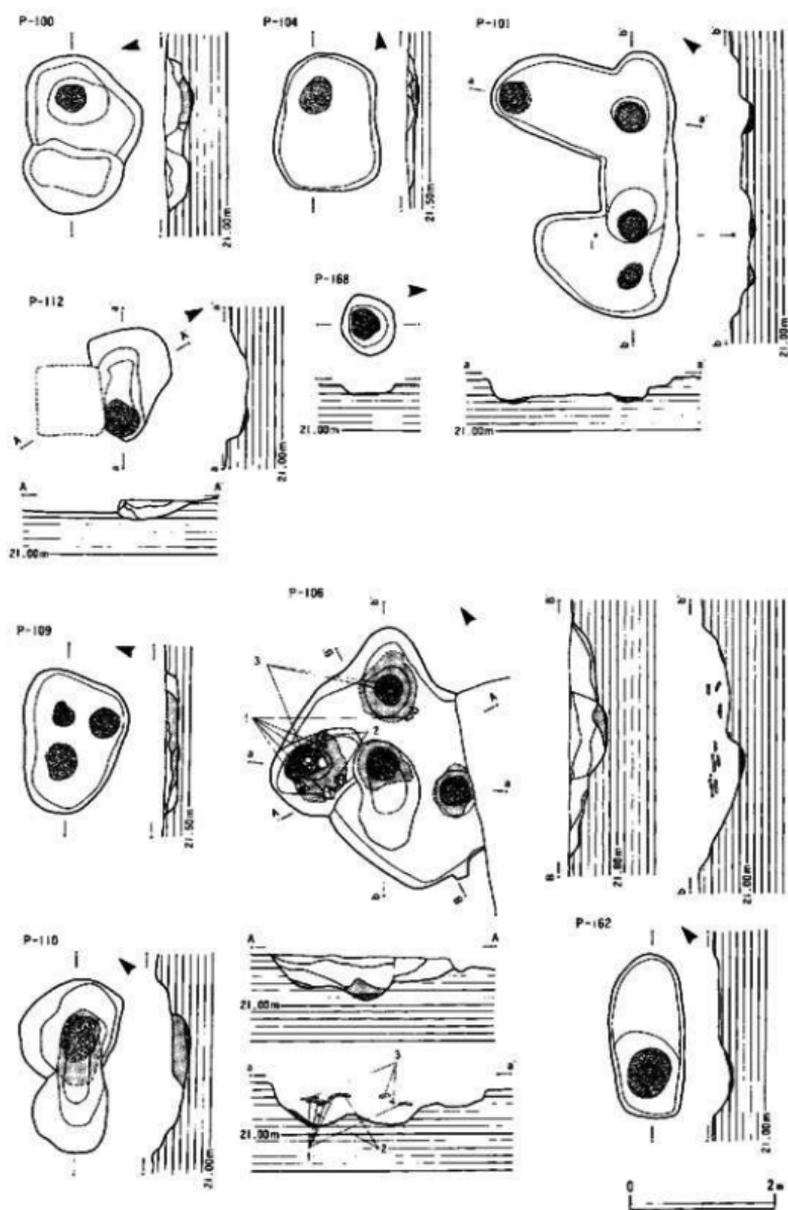
土坑番号	位置	長径	短径	深さ	出土遺物	備 考
001	4H-95	124	58	0	無し	遺存状況悪い。火床部のみ残存。
003	2H-22	172	96	30	野島・条痕	焼土層上面より野島式の良好な資料出土。
036	3G-18	270	159	75	鴨ヶ島台	
040	3G-26	144	81	16	条痕	
042	3G-16	209	100	33	条痕	
043	3G-05	230	115	27	条痕	
044	3G-05	288	142	59	条痕	
045	3G-04	353	200	32	条痕	3ヶ所の火床部は、順次作り替えられたもの。
050①	2F-96	245	177	82	条痕	4ヶ所の火床部は、同時存在であろう。
050②	2F-96	140	105	82	条痕	①より新しい。
050③	2F-96	180	93	43	条痕	①②との新旧関係は不明。
058	3F-37	214	143	22	条痕	
089	3F-16	148	104	37	条痕	
090	2F-85	150	92	28	条痕	
100	2G-76	218	160	37	無し	
101	2H-51	363	254	37	条痕	覆乱著しく、3ヶ所の火床部の新旧関係は不明。
104	2H-41	193	148	14	条痕	覆乱著しい。
106	2H-02	355	288	62	鴨ヶ島台	
107	2G-28	307	238	73	鴨ヶ島台・条痕	一度掘り込まれた炉穴をさらに深く掘り込んで火床部が形成される。
109	1G-97	192	139	21	条痕	火床部はあまり熱を受けていない。
110	2G-15	229	140	68	無し	
112	2G-75	213	136	30	条痕	南側は覆乱により破壊。
113	1G-76	429	271	70	鴨ヶ島台・条痕	火床部はあまり熱を受けていない。
136	2E-61	94	83	18	無し	
153	2F-69	315	135	129	条痕	P154より新しい。
154	2F-69	333	126	56	鴨ヶ島台・条痕	P153より古い。
160	1G-82	297	120	45	無し	
161	1G-51	256	116	42	無し	
162	1G-62	223	103	29	鴨ヶ島台	
164	1G-71	330	154	33	無し	
165	2F-49	230	108	19	条痕	
166	1F-85	220	167	36	条痕	
167	2F-74	283	243	47	条痕	
168	1F-88	83	77	12	無し	
173	2H-22	120	96	40	無し	016と重なる。
174	2H-22	184	118	26	条痕	016と重なる。火床部は熱を強く受けており、焼土層も厚い。
175	2H-22	336	130	73	条痕	016と重なる。2ヶ所の火床部は作り替えによるもの。
176	3H-02	260	126	36	無し	010と重なる。



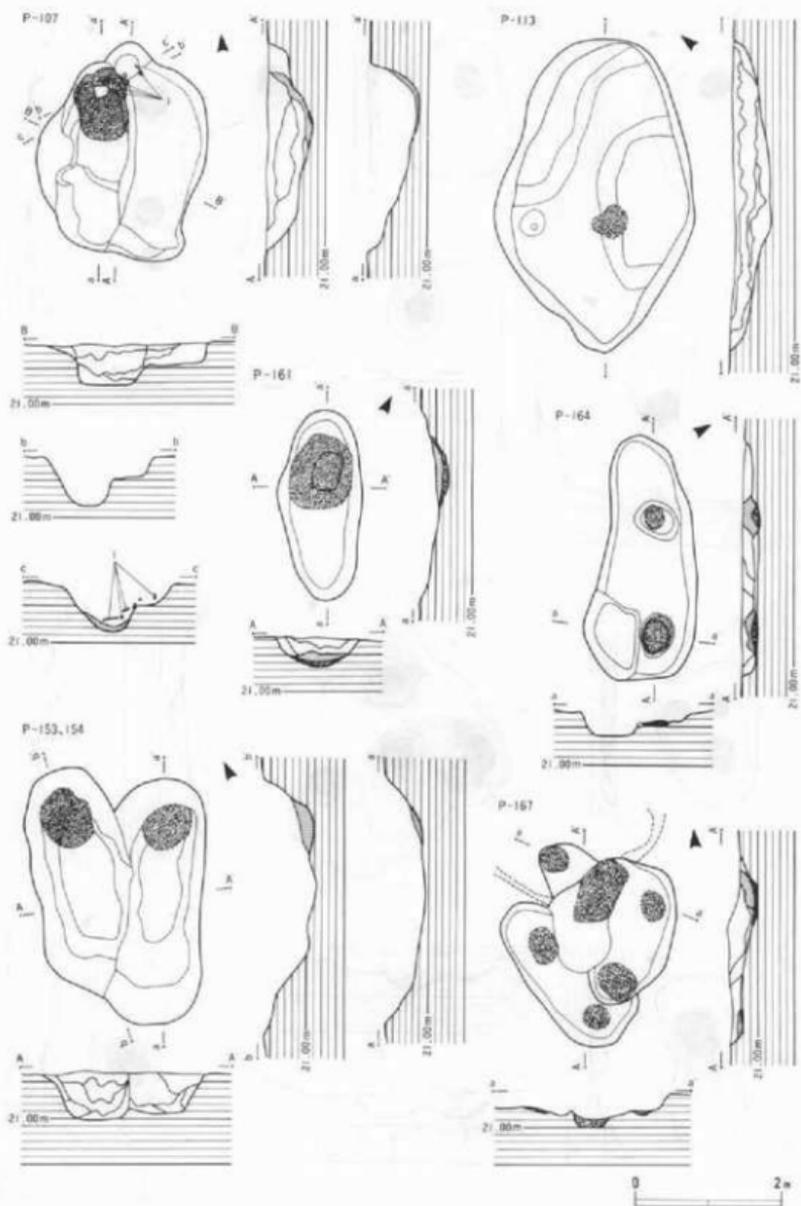
第150图 洞穴実測図(1, P-050)



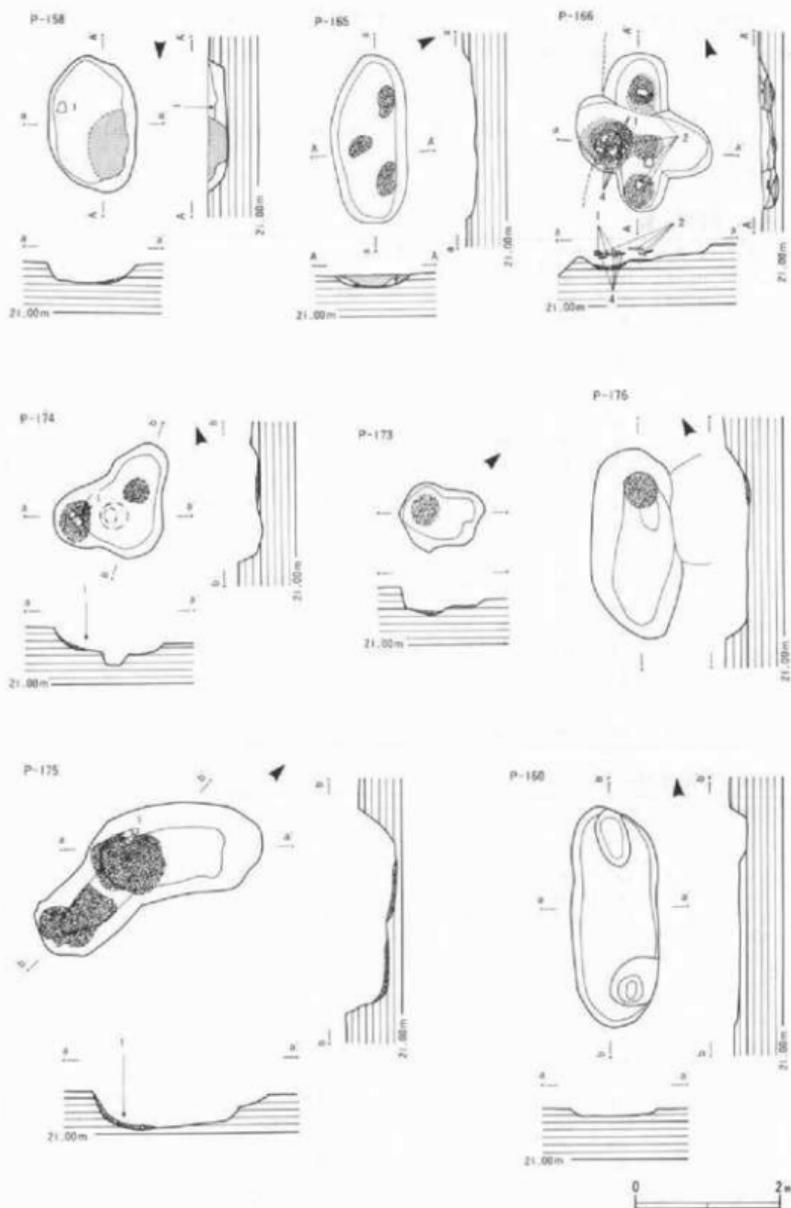
第151圖 洞穴突測圖(2)



第152図 穴実測図(3)



第153图 柳穴实例(4)



第154图 洞穴实测图(5)

は、調査時に枝番をつけて対処したのものもある。整理過程において新たに番号をつけることも検討したが、作業の煩雑さを避けるため、あえて調査時の番号を踏襲した。欠番になった土坑の番号は、以下の通り。

P-011、017、021、022、024、047、056、085、086、088、092、093、114、163、171

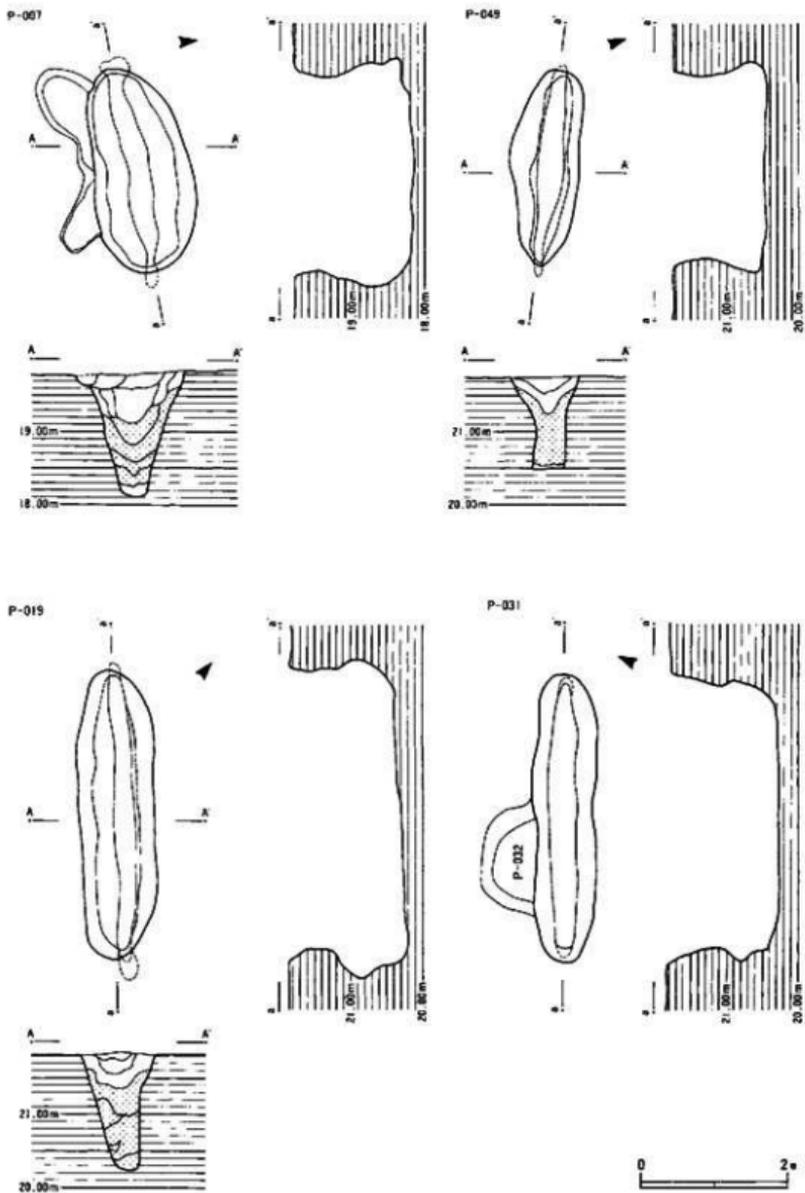
なお、一覧表中の計測値の単位は、すべてcmである。

表69 陥穴一覧

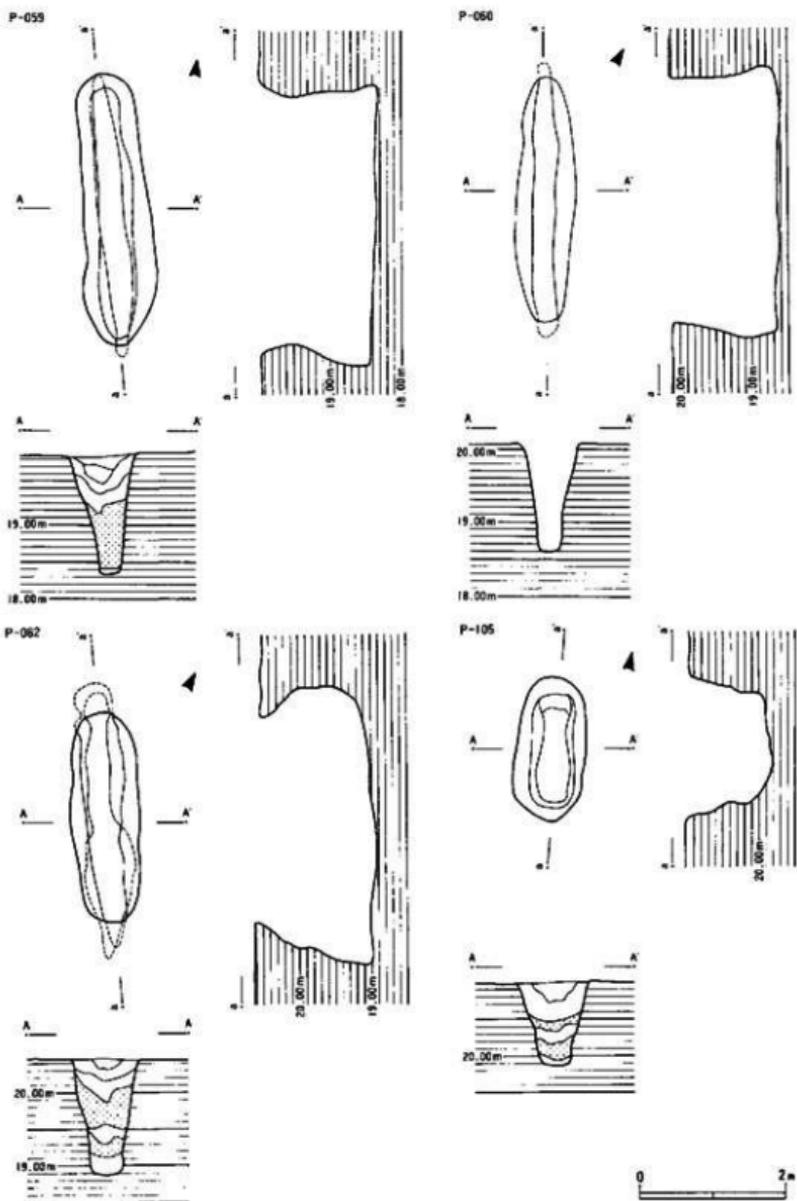
土坑番号	位置	長径	短径	深さ	出土遺物	備考	
007	3D-41	312	21	169	無し	P032 (糸痕土器出土) を切っている。	
019	4G-28	386	104	165	無し		
031	2H-21	383	91	155	無し		
049	2G-95	268	94	34	無し		
059	3E-77	370	99	166	無し		
060	3E-47	332	80	149	無し		
062	1D-99	277	93	167	無し		
095	3G-72	241	64	109	無し		
105	2E-14	188	96	119	無し		やや小さく浅い。陥穴ではない可能性あり。
119	2D-34	350	92	162	無し		やや小さく浅い。陥穴ではない可能性あり。
120	2D-45	335	99	156	無し		
127	2E-31	149	65	69	無し		
130	2D-48	358	117	177	無し		
131	2D-58	364	198	158	無し		
134	2E-40	321	174	165	無し		
141	2D-66	246	148	170	無し		
144	2F-23	364	93	214	無し		
152	3C-19	248	115	168	無し		
155	1E-81	273	112	147	無し		
169	3C-59	382	172	191	無し	床面より小ビット検出される。逆茂木の痕跡であろう。	
170	3G-73	259	52	136	無し		
172	2E-54	280	88	176	無し		

表70 早期土坑一覧

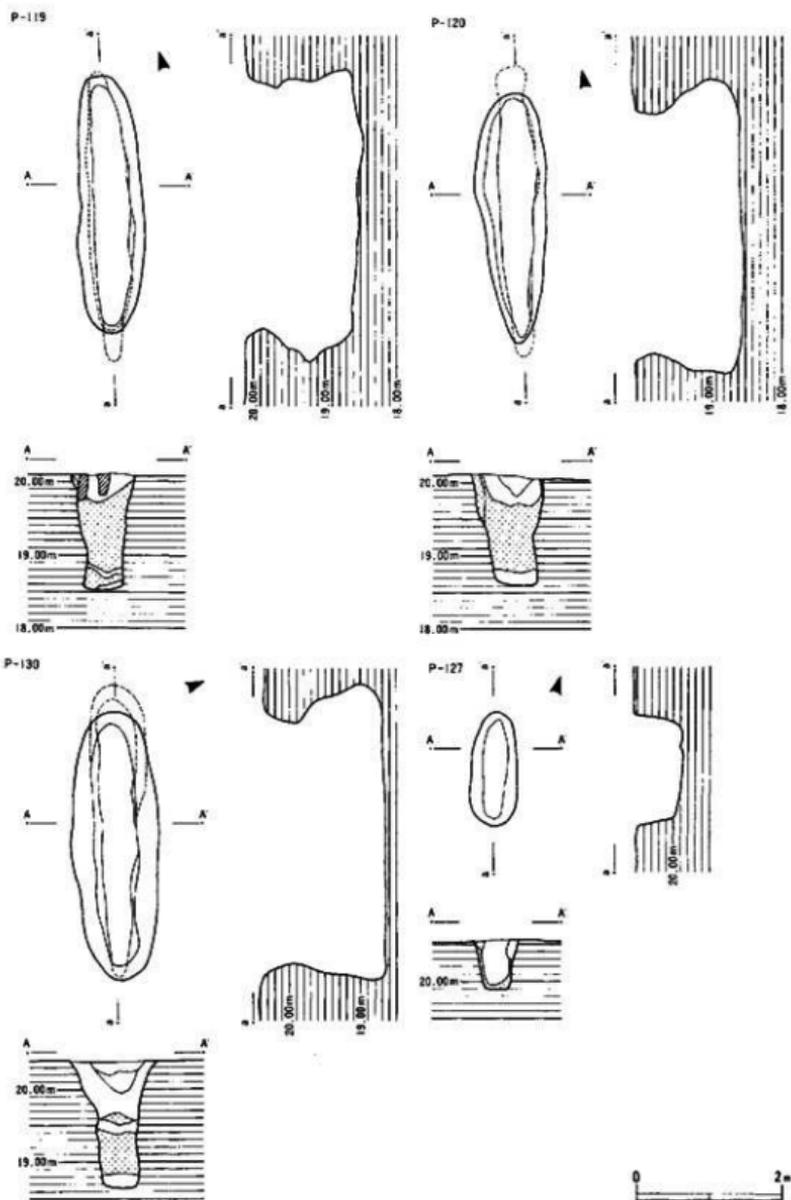
土坑番号	位置	長径	短径	深さ	出土遺物	備考	
002	3G-41	242	238	46	糸痕	約3基の土坑が重なっているが、プランは確定できず。	
004	3F-18	146	110	30	茅山下層	P031陥穴に切られる。	
025	3G-81	219	188	15	茅山下層・糸痕		
032	2H-21	157	77	30	糸痕		
041	3G-16	231	123	34	縄ヶ島台・糸痕		
087	3F-18	151	117	29	糸痕		
091	2F-96	236	136	32	糸痕		
096	2H-93	238	192	46	野島・縄ヶ島台・糸痕		床面に被熱部分があるが、極めて弱い。
097	3H-23	179	131	44	糸痕		2基の土坑が重なっているが、新旧関係は不明。
099	2G-97	400	145	70	野島・糸痕		
103	2H-75	362	173	42	縄ヶ島台		床面付近にロームブロックが多量に堆積。 P117を切っている。石製垂飾(第264回185)が出た。 2〜3基の土坑が重なっている? 攪乱が著しい。
111	2G-07	144	127	24	糸痕		
117	1G-85	251	238	64	野島・縄ヶ島台・糸痕		
118	1G-85	219	145	29	縄ヶ島台・糸痕		
121	2E-20	73	66	10	縄ヶ島台・糸痕		
142	3F-54	283	110	45	糸痕		
158	2G-14	189	121	28	縄ヶ島台・糸痕		



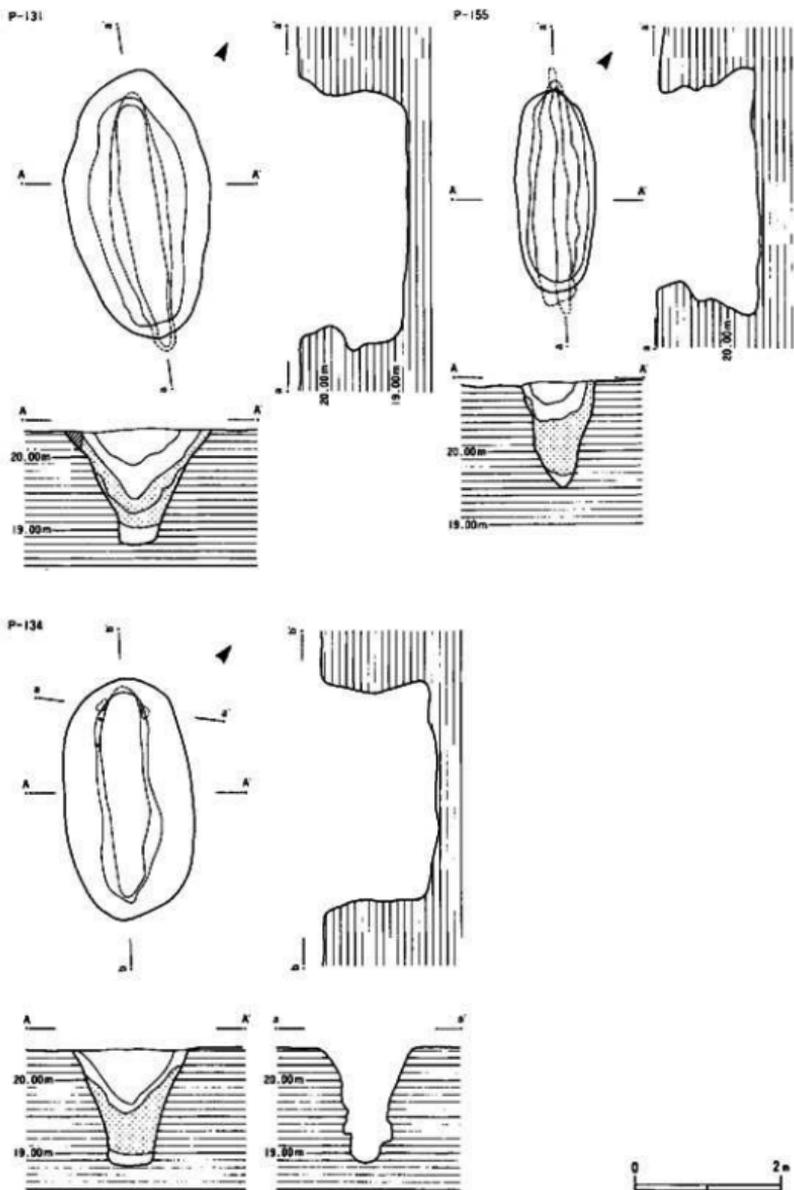
第155圖 陥穴実測圖(1)



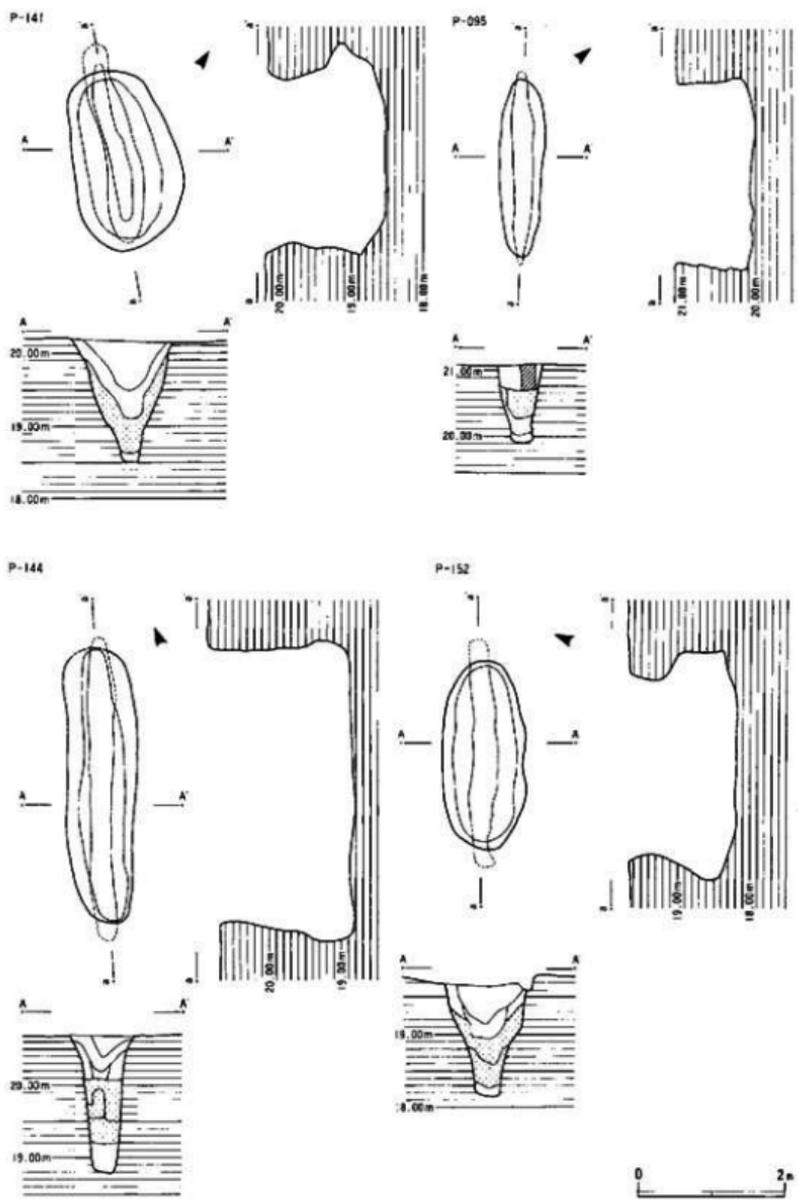
第156圖 陥穴実測図(2)



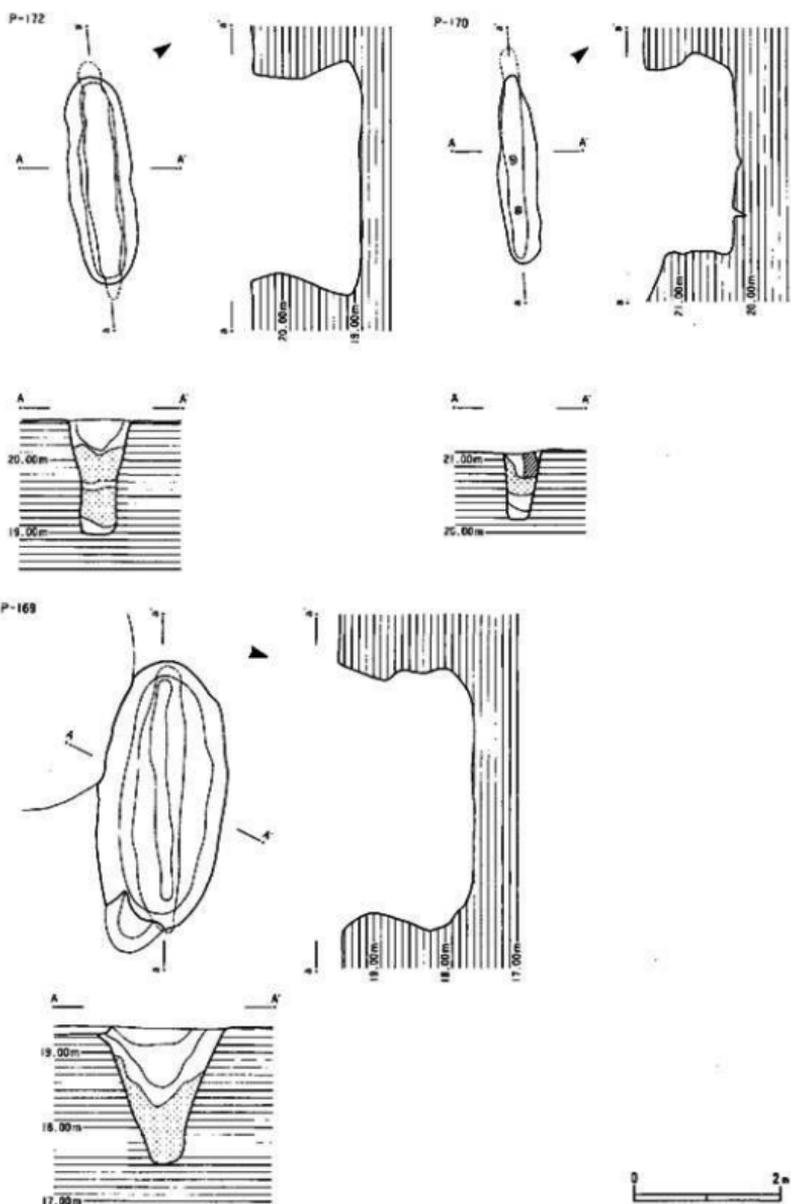
第157图 陷穴实测图(3)



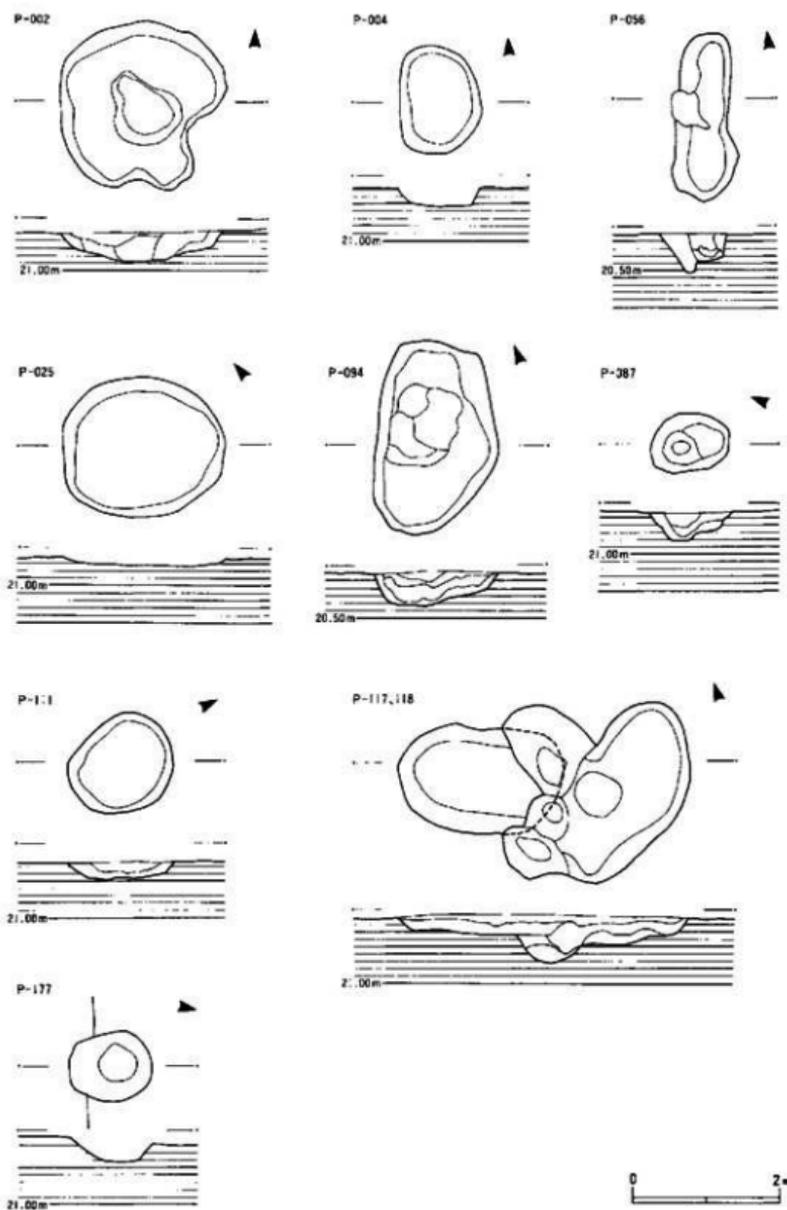
第158図 陥穴実測図(4)



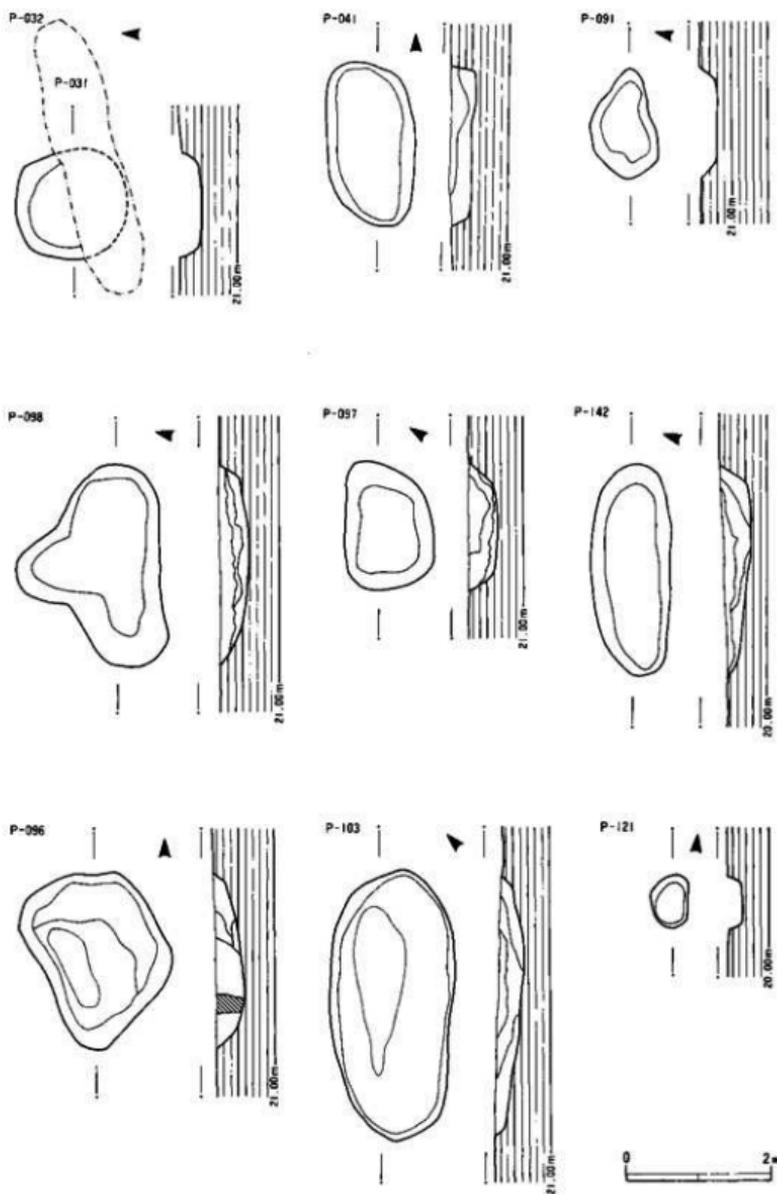
第159图 隋穴夹测坑(5)



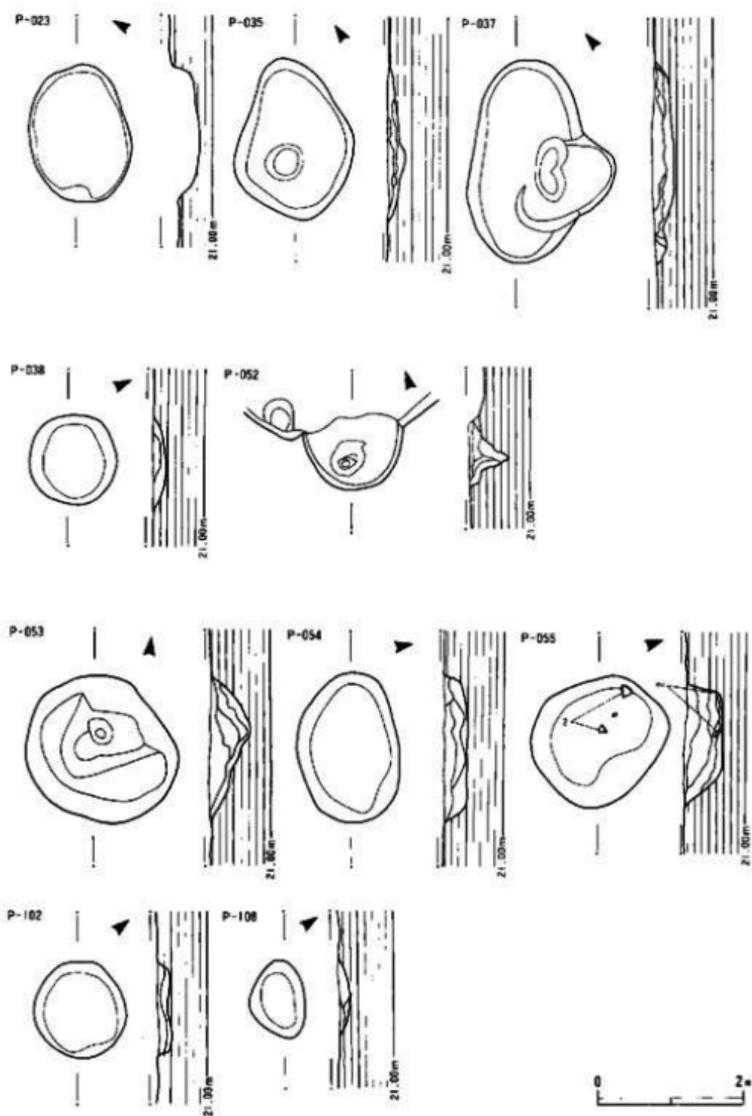
第160区 隔穴実測図(6)



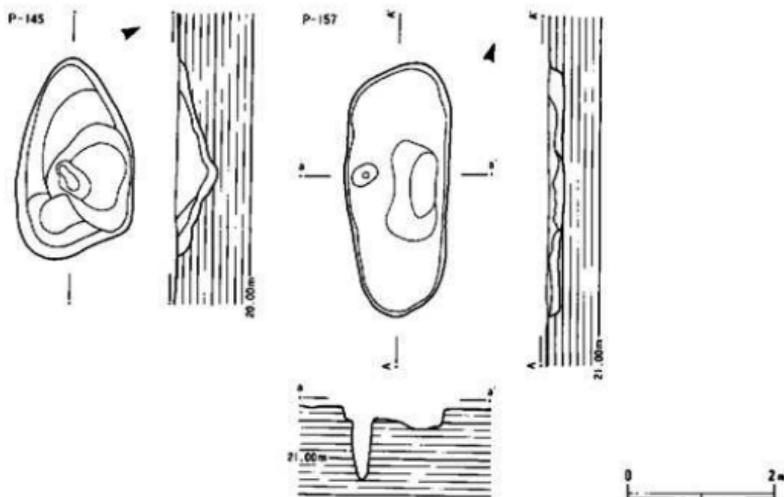
第161圖 早期土坑突測(源1)



第162图 早期土坑实测图(2)



第163圖 前期土坑夾器圖(1)



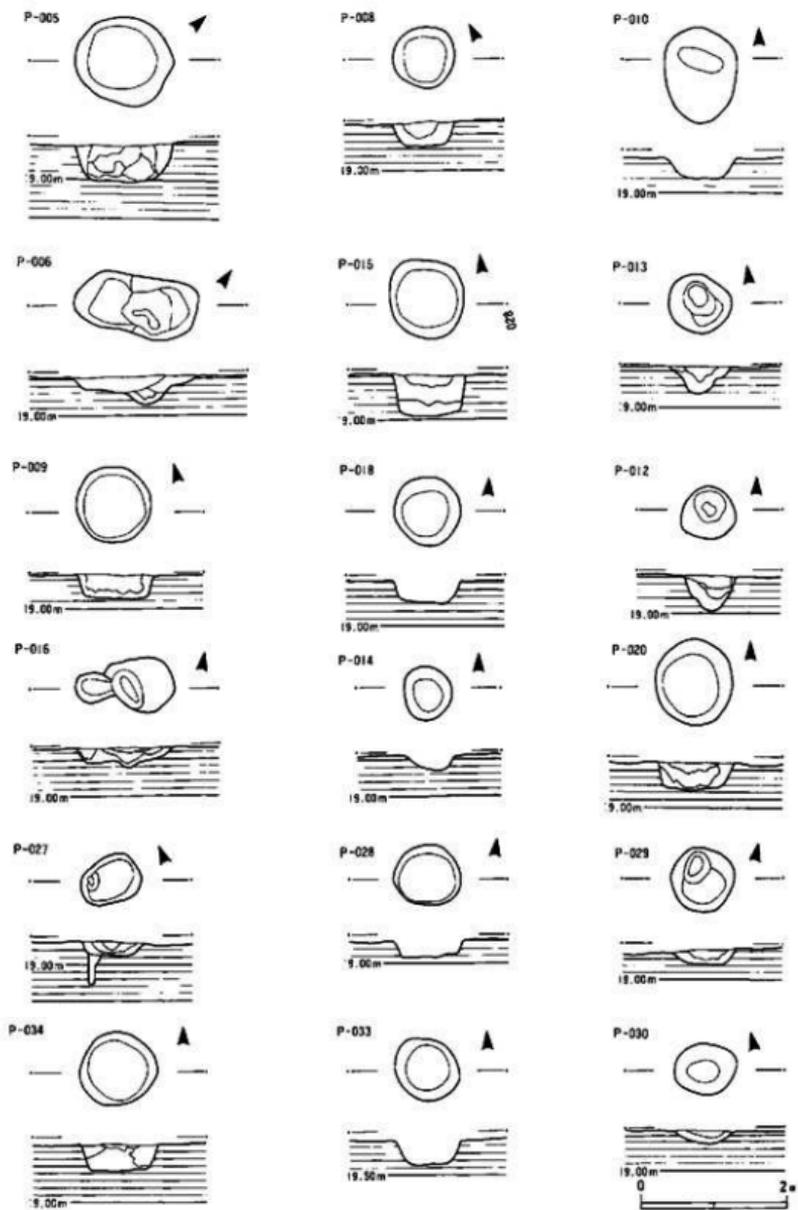
第164図 前期土坑実測図(2)

表71 前期土坑一覧

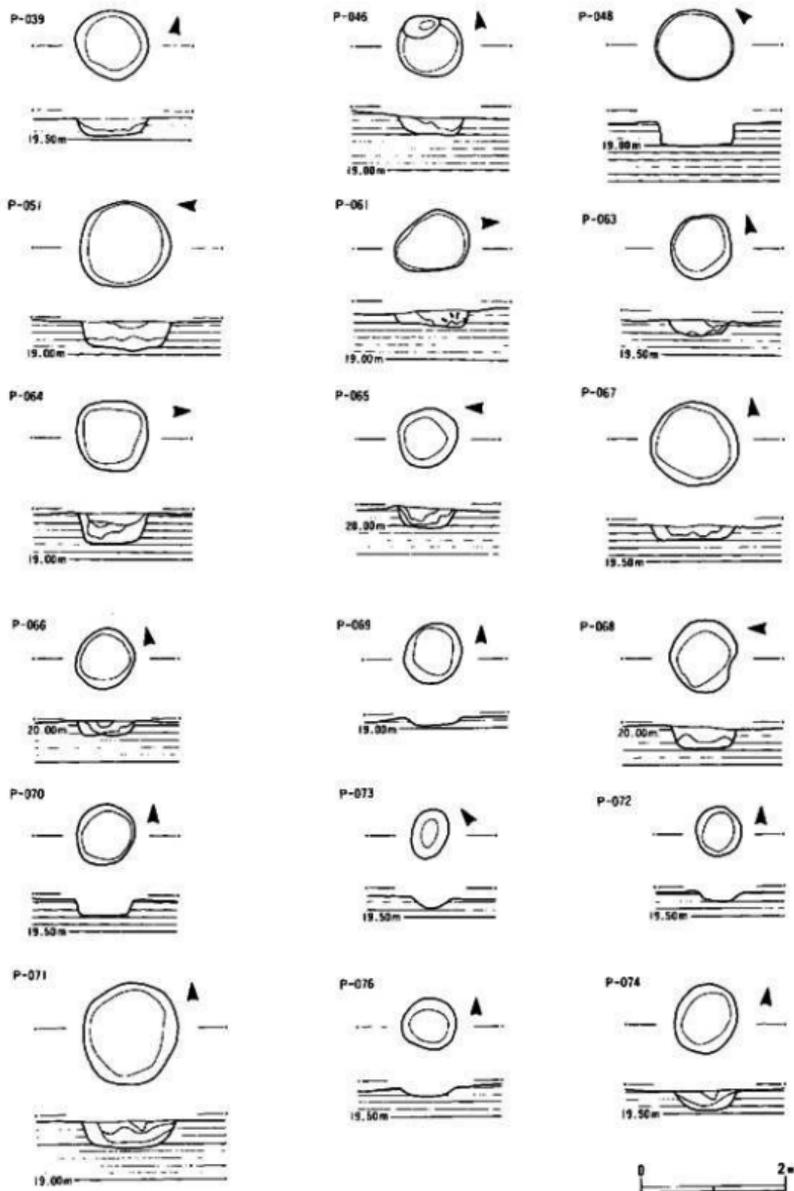
土坑番号	位置	長径	短径	深さ	出土遺物	備考
023	3G-93	185	134	40	花壇下層	南東側より小ピット検出。 床面に被熱したロームがあるが、目立たない。南 側に新しい落ち込みあり。 018住居跡に付属するかどうかは不明。 被熱した礫が出土。 被熱した礫が出土。 土器片多量に出土。 床面、壁面とも軟弱。人為的遺構の可能性は低い。
035	3H-19	224	165	31	花壇下層	
037	3G-27	280	199	47	花壇下層	
052	2G-08	138	96	57	花壇下層	
053	1G-99	209	193	55	花壇下層	
054	1G-98	200	139	38	花壇下層	
055	2G-19	189	165	52	花壇下層	
102	2H-62	128	123	19	花壇下層	
108	2G-08	106	74	20	花壇下層	
145	3F-14	276	157	69	花壇下層	
157	2G-14	345	142	99	花壇下層	

表72 中・後期土坑一覽

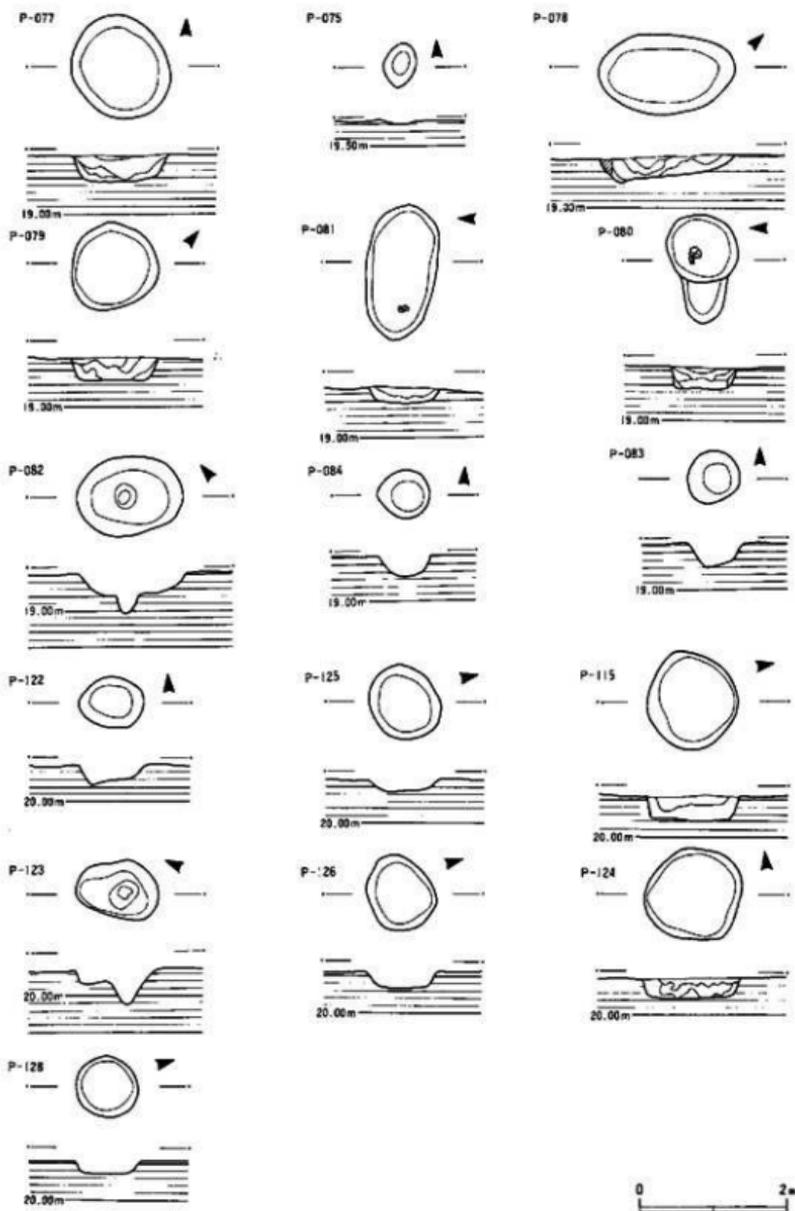
土坑番号	位置	長径	短径	深さ	出土遺物	備 考
005	3D-65	132	122	56	称名寺	2基の土坑が切り合っており、西側の方が新しい。
006	3D-41	168	84	44	称名寺	
008	3D-28	86	86	30	無し	
009	3D-50	106	102	33	称名寺	
010	3D-50	136	98	35	加曾利E・称名寺	
012	3D-50	74	73	46	加曾利E	
013	3D-40	82	76	55	称名寺	
014	3C-48	72	64	21	無し	
015	3C-39	113	106	58	称名寺	
016	3C-38	136	74	28	称名寺	
018	3D-50	94	90	32	称名寺	
020	3C-47	116	104	43	称名寺	
027	3D-62	83	62	59	加曾利E・称名寺	
028	3D-53	91	80	24	加曾利E・称名寺	
029	3D-65	86	86	42	加曾利E?	
030	3D-32	85	72	20	無し	
033	2C-99	90	83	30	縄文のみ	
034	3D-11	104	98	98	縄文のみ	
039	3D-12	100	95	25	加曾利E	
046	3C-17	90	84	45	無し	
048	3D-20	105	96	34	称名寺	
051	3D-43	123	114	42	称名寺	
061	3D-24	104	79	22	称名寺	
063	3D-06	85	82	22	縄文のみ	
064	3E-21	104	103	43	称名寺	
065	2E-01	84	77	36	無文	
066	2D-96	80	78	23	称名寺	
067	3D-06	118	109	20	無し	
068	3D-07	99	90	32	比類	
069	3D-08	85	73	12	無し	
070	3D-19	86	78	25	称名寺	
071	3D-38	137	131	38	称名寺	
072	3D-37	66	61	13	称名寺	
073	3D-37	65	50	18	無し	
074	3D-27	94	88	26	阿玉台・称名寺	
075	3D-27	59	43	6	無し	
076	3D-27	74	69	13	称名寺	
077	3D-26	147	124	38	称名寺	
078	3D-25	187	109	38	称名寺	
079	3D-35	119	115	33	称名寺	
080	3D-59	145	93	32	称名寺	
081	3D-58	182	96	21	称名寺	
082	3D-79	142	99	55	無し	
083	3D-47	77	68	33	無し	
084	3D-47	73	66	27	無し	
115	2E-20	131	123	35	縄文	
122	2D-28	88	67	26	無し	
123	2D-37	109	79	49	無し	
124	2D-29	135	125	32	無し	
125	2E-20	102	92	20	無し	
126	2E-30	101	86	22	無し	
128	2D-39	84	79	17	無し	
129	2D-49	120	115	28	縄文	
132	2D-59	124	114	65	加曾利E	
133	2D-49	80	71	35	縄文	
135	2D-59	119	98	58	縄文	
136	2E-61	94	83	18	無し	
137	2E-71	48	37	24	縄文	
138	2D-79	99	94	35	縄文	
139	2D-79	91	83	20	縄文	
140	2D-69	75	73	31	縄文	
146	3D-20	71	69	16	無文	
147	3D-30	127	114	34	称名寺	
148	3D-28	108	97	42	称名寺	
149	3C-48	116	97	40	無し	
150	3C-59	116	98	48	称名寺	
151	3D-61	114	56	47	加曾利E	
156	3C-27	109	104	50	無し	
159	2G-03	153	134	30	称名寺	



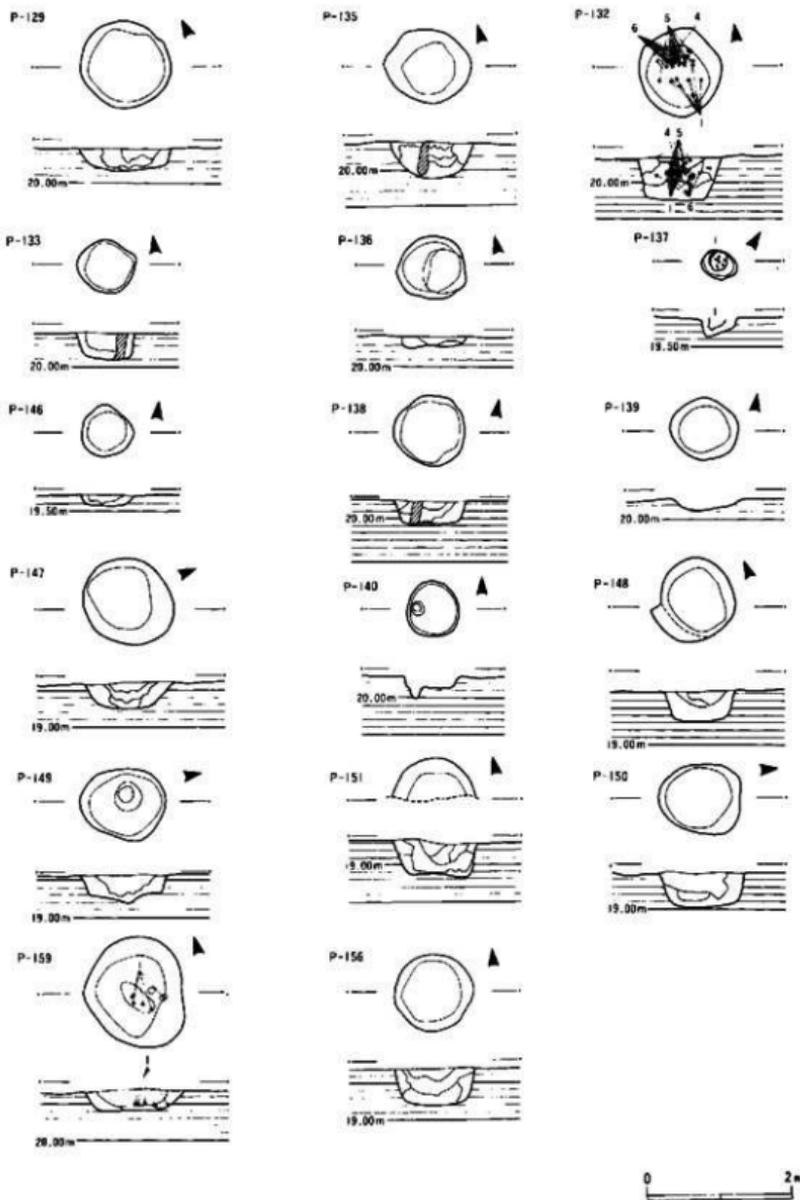
第165區 中後期 I 坑穴測區(1)



第166圖 中後期土坑突洞(續2)



第167図 中後期土坑実測図(3)



第168図 中後期土坑(測点4)

### 第3節 出土遺物

出土遺物は原則として時期順に並べることとした。同じ時期の中では住居跡、土坑、包含層の順に説明している。したがって包含層の遺物で遺構が存在しない時期のものについては、遺構と時期が前後しているものもある。また、土製品については属性表のみ掲載した。

土器の時期区分は、以下のようにした。

#### 第I群 早期

- 第1類 燃糸文系土器
- 第2類 沈線文系土器
- 第3類 野島式土器
- 第4類 鶯ヶ島台式土器
- 第5類 茅山下層・上層式土器
- 第6類 条痕のみの土器
- 第7類 その他特殊

#### 第II群 前期

- 第1類 花積下層式土器
- 第2類 木島式土器
- 第3類 関山式、黒浜式土器
- 第4類 諸磯式、浮島式土器

#### 第III群 中期

- 第1類 五領ヶ台式、阿玉台式土器
- 第2類 加曾利E式土器

#### 第IV群 後・晩期

- 第1類 称名寺式土器
- 第2類 堀之内式、加曾利B式土器
- 第3類 晩期・浮線網状文土器

#### 1、早期の土器

##### (1) 住居跡出土の土器

##### 005 (第169図)

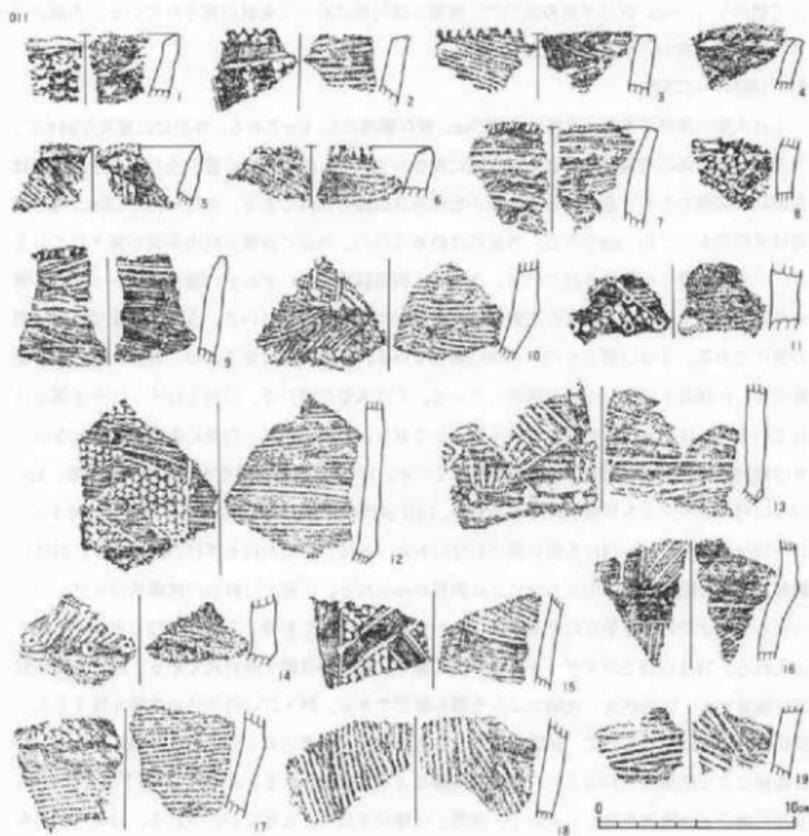
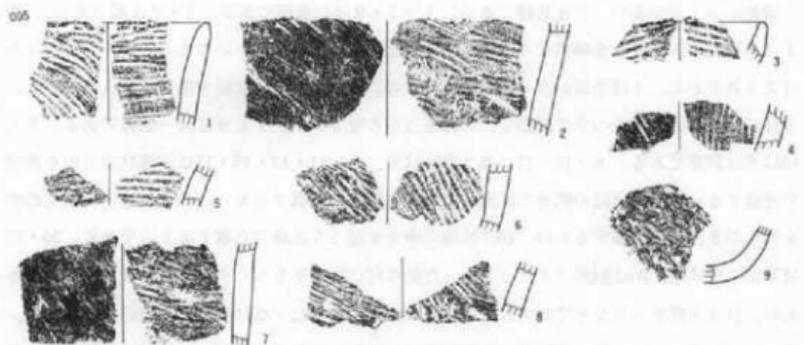
出土している土器は条痕のみである。口縁部1と3はいずれもキザミの入らないもの。2と7の外面は条痕を施さず、ヘラなどによる擦痕がみられる。この二個体は繊維がほとんど混入せず、焼成は良好である。9は丸底の底部の一部で、条痕だけでなくヘラなどで調整している。

##### 011 (第169～171図)

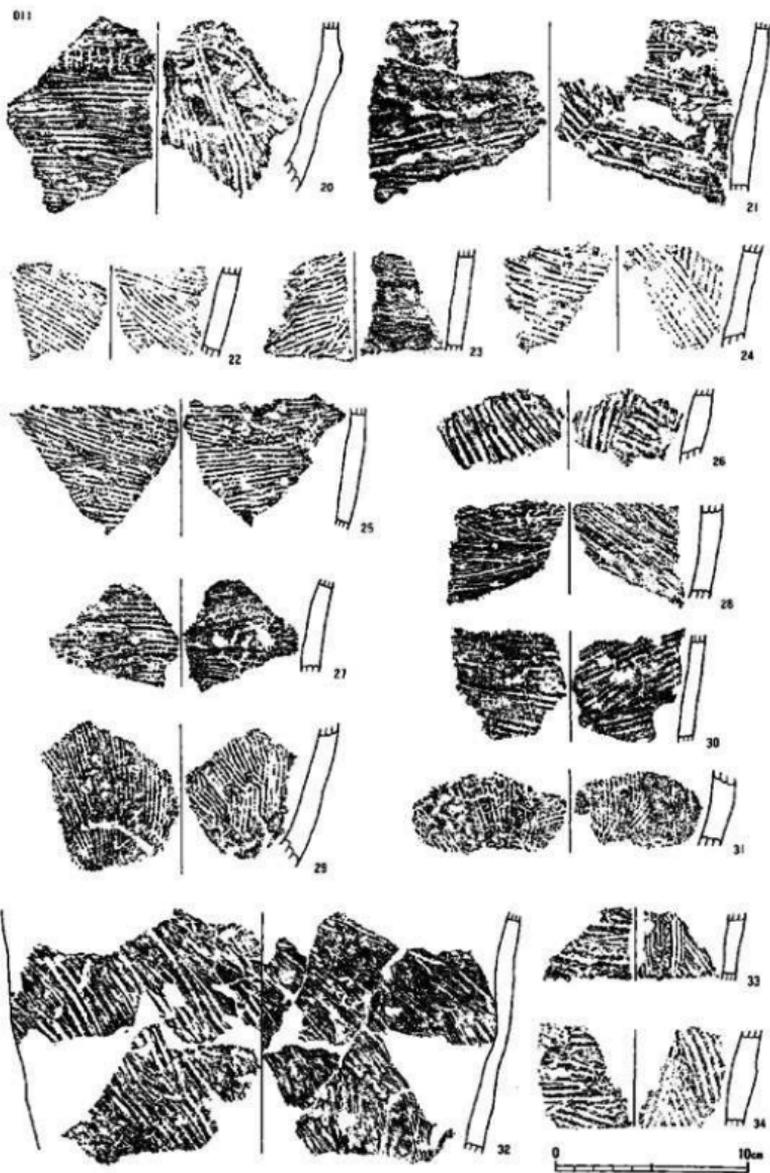
遺物の出土量が多かった住居跡である。1～7・9は口縁部である。1・2は鶴ヶ島台式で、1は充填文のみで区画を構成するもの、2は太沈線で区画を施すものである。3～7・9は条痕文土器である。4は条痕がなく擦痕のみのもの。口唇上は細い沈線を格子状に入れている。5は口唇直下の表裏をヘラで成形し、口唇をとがらせている。7と9は同一個体である。8と10以下は胴部である。8・10～17は鶴ヶ島台式で、8・11・12・15・17は区画状文の中を刺突で充填するもの、10は段の部分で区画状文の中を沈線で充填するもの、13・14は区画状文の中を押し引き沈線で充填するもの、16は区画の中をまばらな沈線で充填するものである。20・21は茅山下層式で、20は胴部にキザミの入った貼り付け隆帯をもち、その部分が段になっているもの、21は条痕をヘラなどで磨消しているもの。18・19・22～35は条痕文土器の胴部である。36・37は底部である。36は乳頭状の突起をもつと思われる丸底の底部で、外面は条痕をヘラなどで磨消している。37は平底の底部で、底面には円周に沿って条痕が施されている。内面にはスス状の炭化物が付着している。

#### 016 (第171～173図)

1は大型の深鉢である。直径は推定27cm、残存器高は32.1cmである。外面には縦及び斜めの、内面には横方向の条痕が施される。口縁に向かって大きく開いていく器形をしており、底部は乳頭状の尖底となつて思われる。2は小型の波状口縁の深鉢である。直径は推定12cm、残存器高は波頂部まで10.4cmである。外面には斜め方向の、内面には横方向の条痕が施されているが、いずれも軽くなで消されている。3と4は胴部破片で、いずれも口縁部に向かってやや開いていく器形をしている。3の内面には炭化したススが付着している。5から31までは口縁部の破片である。5は口唇上を内そぎ状に削っている。6は外面は横方向に、内面は縦方向に条痕を施し口縁直下はヘラなどで調整している。7は大型の破片で、口唇上は平らにそぎ落とされている。8は胎土にやや砂粒が多く混入しており、きめが粗い。内面に条痕が施されない。9は植物繊維の混入が顕著で、器面が荒れている。10・11は口唇を内そぎ状に削っている。12・13は口唇上のキザミを貝殻腹縁で施すもの。14は波状口縁で、口唇上は平らにそぎ落とされる。15～18は小破片。19～24は条痕が施されないもの。19は口唇上を内そぎ状に削られる。21は口縁部は無文で胴部に縦方向のヘラによる調整がみられる。口唇上に斜めの沈線状のキザミがみられる。22は口唇上を平らにそぎ落とし、ヘラによるキザミを軽く入れる。23もキザミを斜めに入れる。24は口唇上のキザミをハの字状に施す。25～29は鶴ヶ島台式である。25は表面の剥落が顕著だが、区画状文と沈線による充填が確認できる。26・27は格子状の沈線を施すもの。28は波状口縁になるもので、微隆起線による区画状文と沈線による充填により構成される。29は曲線による区画状文がみられ、やはり沈線によって充填される。30・31は茅山下層式である。30は口縁直下に隆帯を施したもので、隆帯上に棒状工具による刺突がみられる。31は口唇上をヘラなどで小波状に加工したものの。32～54は胴部破片である。32・33の内面にはスス状の炭化

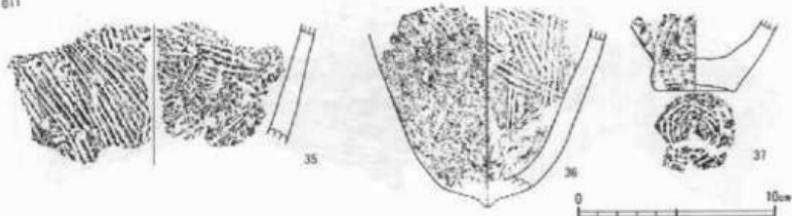


第169图 早期出土遺物1)

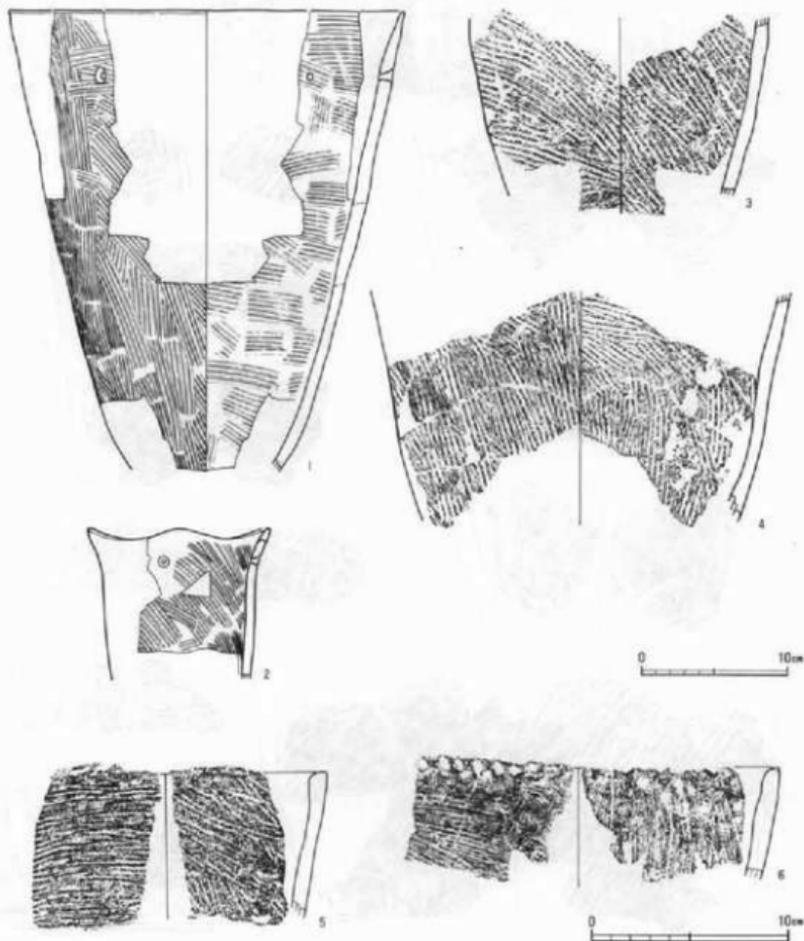


第170图 早期出土遺物(2)

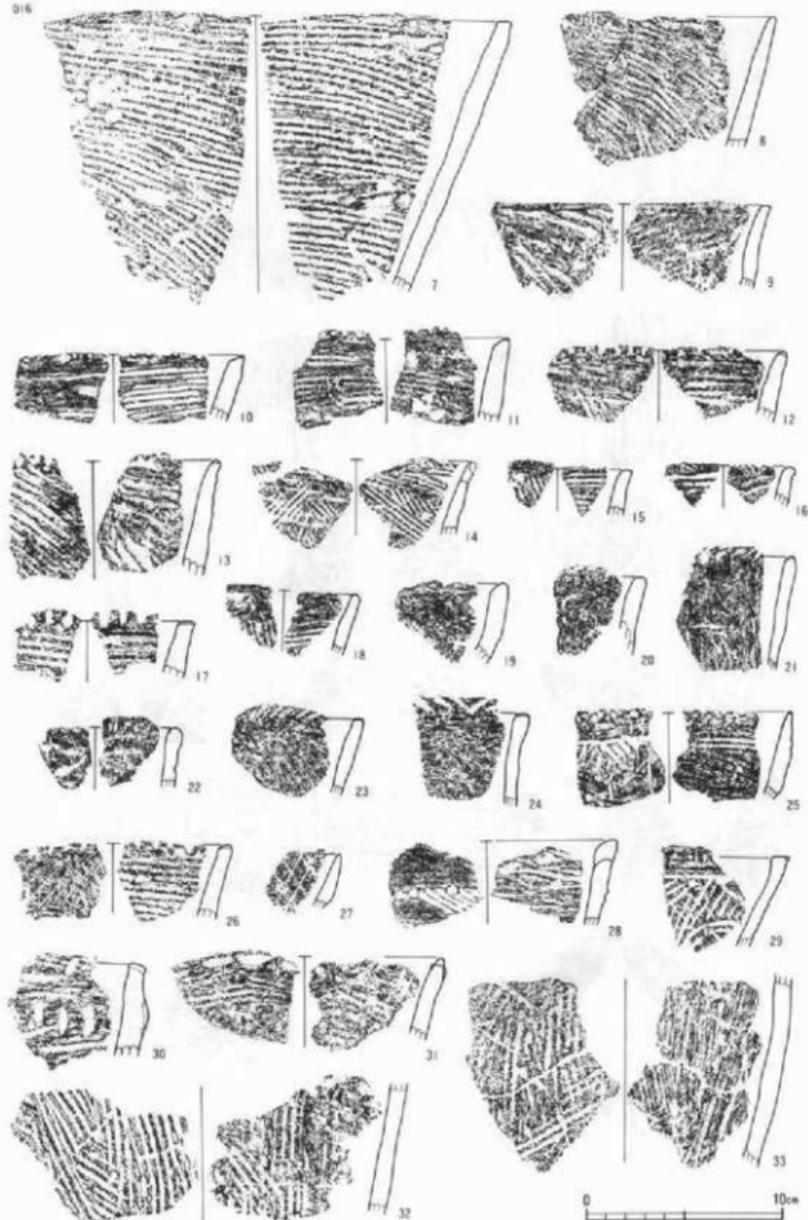
011



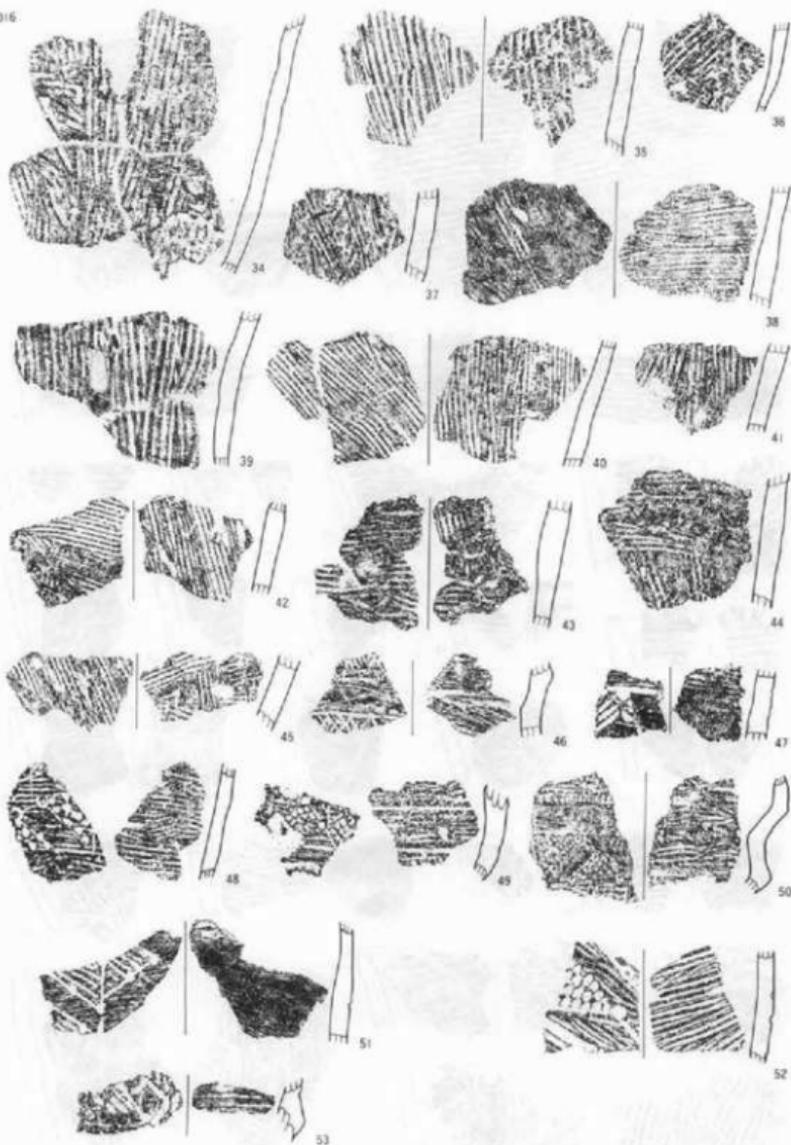
016



第171图 早期出土遺物(3)

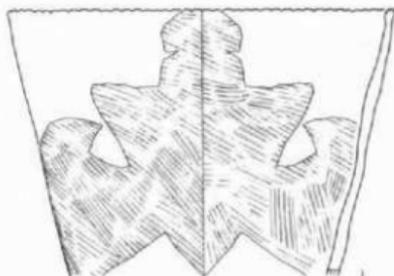


第172图 早期出土遗物(4)

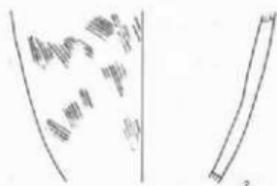


第173图 早期出土文物(5)

P-002



P-003

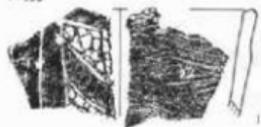


0 10cm

P-032



P-036



0 10cm

第174图 早期出土遗物(6)

物が付着している。38の外面の条痕はヘラなどによってなで消されている。46～54は鶺鴒島台式である。46は段をもつ個体で、段の上下には沈線による格子状の施文がみられる。47は沈線による区画状文と沈線による充填文の組み合わせ。48は細沈線による区画と連続刺突による充填文。49は沈線による区画と押し引き沈線による充填。50は段をもつ個体で、段の部分は無文帯となり、微隆起線による区画状文と押し引き沈線による充填で構成される。51は沈線による区画と沈線による充填。52は太沈線による区画と連続刺突による充填。53は47と同様の沈線による区画状文と沈線による充填文の組み合わせで、段をもっている。

## (2) 土坑出土の土器

### P002土坑 (第174図)

1は器形復元のできる深鉢形土器で、口縁に向かって広がっていく器形をしており、口径は推定約27cm、残存器高が19.8cmである。口唇上には棒状工具による斜め方向のキザミがみられる。胎土には繊維がやや多く含まれ、焼成は不良。内面、外面とも条痕が施される。

### P003土坑 (第174図)

1は野島式の良好な資料である。波状口縁になる深鉢で、口径は波頂部で推定約15cm、残存器高は約16cmで、実測した部分はほとんど残存している。口縁部は条痕を施した後、微隆起線文を口唇より縦に約1cm間隔で垂下させ、5cmほど下の位置に横に微隆起線文を施す。繊維の混入はやや少ない。2は深鉢の胴下半部である。ややふくらみをもちながら底部で続く部分で残存器高は約12cmである。内・外面とも条痕は施されず、外面はヘラによる調整が施される。

### P032土坑 (第174図)

1は底部付近の破片で、乳頭状の尖底となるものであろう。残存器高は約13cmである。内・外面とも条痕が施される。2は口縁部破片で小波状になるものである。口唇上は平らにそぎ落とされる。内・外面とも条痕が施される。

### P036土坑 (第174図)

1は鶺鴒島台式の口縁で、波状口縁である。細沈線による区画状文と連続押し引きによる充填文の組み合わせとなり、口唇上は平らにそぎ落とされて角にキザミが入る。2～4は条痕文の胴部である。2は内面のみに、3は外面のみに、そして4は両面に条痕が施される。5は鶺鴒島台式の胴部で、段の部分である。微隆起線文による区画状文と、連続押し引きによる充填文になる。胎土には繊維が全く混入せず、雲母片や小礫が多量に混入している。焼成は良好で固い。分かりにくいだが、内面には条痕が施されている。

### P040土坑 (第175図)

胴部の小破片が3点出土したのみである。1・2は外面のみに条痕が施されるもの。3は条痕が施されないもの。

### P041土坑 (第175図)

鶺鴒島台式を中心にした遺物が出土している。1は内面のみ条痕が施される。2・3は鶺鴒島台式の口縁部破片で、双方とも細沈線による区画状文と刺突による充填文の組み合わせである。口唇上を内そぎ状に削り、キザミを入れる。4は条痕の胴部で、内面のみ条痕を施す。5は鶺鴒島台式の胴部で、3と同じ施文パターンをとるもの。

#### P042土坑（第175図）

1は器形復元のできる条痕文のみの深鉢で、口縁部が若干外反する。口径は推定約28cm、残存器高は約22.6cmである。口唇部上は平らに加工されるが、さほど丁寧に調整されていない。胎土は繊維の混入がやや多い。胴部下半の内面にはススの付着がみられる。2は1と同一個体と思われる口縁部の破片である。

#### P043土坑（第175図）

1は条痕文の深鉢で、胴部にややふくらみをもつ。口径は推定約18cm、残存器高は約18cmである。条痕が施されるのは外面のみで、内面は上部にヘラによる調整痕がみられるのみである。2は胴部破片で、おそらく1と同一個体である。いずれも胎土は繊維の混入がやや多く、焼成は不良である。

#### P044土坑（第175図）

小破片が少数出土したのみである。1は外面のみに条痕が施されるもの、2は内・外面ともに条痕が施されるものである。

#### P045土坑（第175図）

こも小破片のみである。1は小突起をもつ口縁である。外面に軽い条痕が施され、口唇上は平らにそぎ落とされてキザミが入られる。2は条痕のみの胴部である。

#### P050土坑（第176図）

この土坑は020住居跡に切られているが、この住居跡は花積下層式期に属しているため、住居跡から出土した土器でも条痕文のものはこの土坑に属するものとして扱った。1～6は口縁部の破片である。1は小形の深鉢形土器である。口径は推定19cm、残存器高は8.9cmである。口唇上は斜めのキザミを方向を変えて施文しており、縞状の効果を生み出している。条痕は外面のみに施される。胎土には繊維が少量含まれる。2・4は鶺鴒島台式で、2は細沈線による区画状文と押し引き沈線による充填文で構成され、4は連続刺突による充填文のみ施文される。3は外面のみ条痕が施されるもの。5は一見条痕風であるが、ヘラによるミガキ状の調整である。口唇上は棒状工具による斜めのキザミが入る。6は条痕ではなくヘラ状工具によるナデ状の調整が施される。口唇上は平らにそぎ落とされる。7～20は胴部破片である。7～10・12・13・15～17は条痕のみが施文されるもので、9・15は外面のみ、その他は内・外面とも施文される。11は段をもつ胴部で、段より上は半截竹管の背中による沈線を縦に施文し、その断面を刺突して装飾する。沈線の間には小さな円形刺突を充填する。茅山下層式である。14・18～20

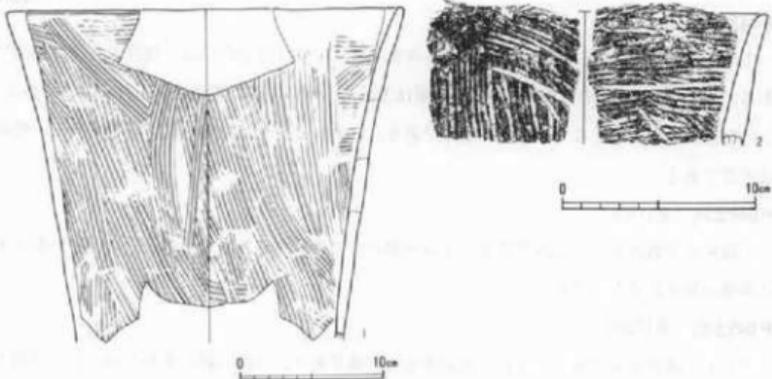
P-040



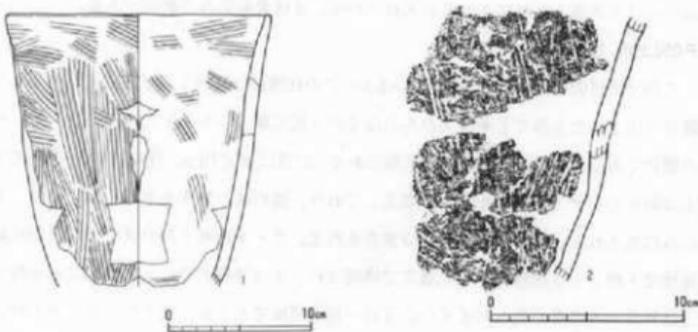
P-041



P-042



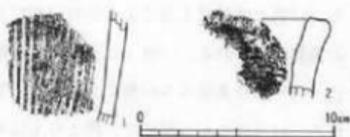
P-043



P-044

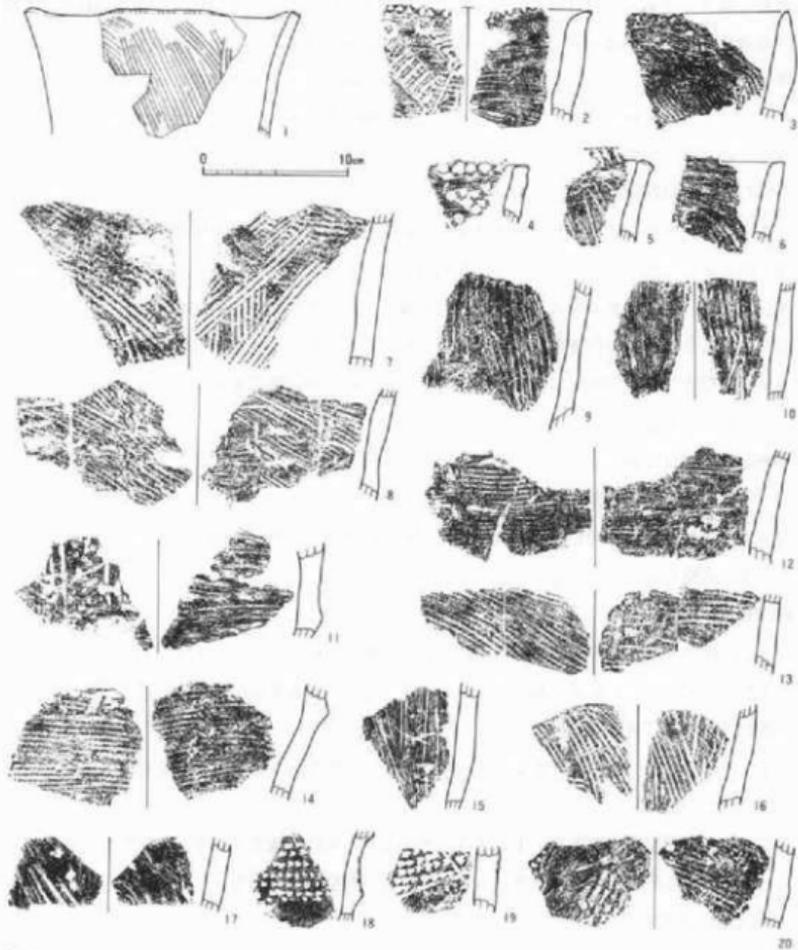


P-045



第175图 早期出土遺物(7)

P-050



P-057



第176图 早期出土遺物(8)

は鶺鴒ケ島台式である。14は段をもつ胴部で、段の上に円形刺突や連続刺突が認められるので鶺鴒ケ島台式とした。18は大きく外反する胴部破片で、外反部分の上下には段がみられ、段と段の間を連続刺突によって充填する。19は細沈線による区画状文と連続刺突による充填文で構成される。なお、18・19は内面に条痕はみられない。20は微隆起線文による区画状文と押し引き沈線による充填文で構成される。

**P057土坑（第176図）**

1・2は鶺鴒ケ島台式で、1は区画状文、充填文とも押し引き沈線を使用している。充填文は横方向に平行に施文していくもので、井桁状になるような効果を生み出している。口唇を内そぎ状に削り、角にキザミを入れる。2は細沈線による区画状文と連続刺突による充填文の組み合わせである。口唇を内そぎ状に削り、角にキザミを入れる。3は条痕のみの口縁で、外面のみ条痕が施される。口唇上にはキザミが入る。4は貼り付け隆帯をもつ胴部である。5は条痕のみの胴部である。

**P058土坑（第177図）**

1は器形復元可能な深鉢形土器で、胴部から底部付近にかけての破片である。胴部下半からすばまりながら底部に向かっていく。残存器高は約16cmで、内・外面とも条痕とヘラによるケズリ状の調整を併用している。

**P089土坑（第177図）**

1は口縁部で、小型の深鉢であろう。外面のみ条痕が施される。2・3は胴部破片である。いずれも内・外面とも条痕が施されるほか、3の内面にはススの付着がみられる。

**P090土坑（第177図）**

図示できるのは一点のみである。1は胴部破片で、外面のみ条痕が施文される。

**P091土坑（第177図）**

1～4とも胴部破片である。1・3は内・外面とも条痕が施文される。2は外面のみ条痕施文、4は外面は条痕で内面はヘラによるケズリ状の調整が施される。

**P096土坑（第177図）**

胴部破片のみ出土している。1～5のいずれも条痕のみのもので、2・3は外面のみ、他は両面に施文される。1は外面が被熱によってかなり磨耗しているため判別しにくい。

**P099土坑（第177図）**

1は条痕文の口縁部である。口唇上をやや内そぎ状に削り出している。2は微隆起線文を綾杉状に施文するもので、野島式である。3はヘラによる調整を内・外面に施しているもの。4は底部付近の胴部破片で、外面のみ条痕が施される。

**P101土坑（第178図）**

1は口縁部のみ器形復元のできる深鉢である。波状口縁であるが波頂部は欠損している。口

径は推定約28cm、残存器高は約9cmである。条痕は、外面は口唇から鉛直に下りるように施している。内面は軽い条痕が施される。口唇上は平らにそぎ落とされている。2は胴部半ばの破片である。残存器高は8cmである。内・外面とも条痕が施されるが、内面はヘラ状工具で磨削している。3はやや小振りな深鉢の胴部である。外面のみ条痕が施される。4・5は胴部破片である。いずれも内・外面とも条痕が施される。6は底部である。尖底となるものであるが、細かい調整は不明。

#### P103土坑（第178図）

1～3は口縁部である。1は内・外面とも条痕が施されるが、外面はヘラ状工具によって磨削されている。口唇より1.5cmほど下のところに約2.5cmおきに穿孔されているが、これは通常の補修孔と違って焼成前からあげられているものであり、何らかの文様的な効果をもつものであろう。2は内・外面とも条痕が施されるもの、3は外面のみ条痕が施されるものである。4～10は胴部破片である。4は条痕が施されず、ヘラ状工具によるナデで調整される。5は段をもつ胴部で、内・外面とも条痕が施されるが内面はヘラ状工具によって磨削されている。6～9は条痕が施文されている。6・9は両面に、7・8は外面のみ施される。10は轆ケ島台式の段をもつ胴部破片である。沈線による充填文のみで構成される。

#### P104土坑（第178図）

図示できるのは小破片一点のみである。1は内・外面とも条痕が施された胴部破片である。

#### P106土坑（第179図）

器形復元のできる大型破片が、3個体分出土している。1は条痕のみの大形深鉢形土器で、口径は推定36cm、残存器高は31.8cmである。口縁部から底部にかけてゆるやかにすばまっていく器形をしている。繊維が少量混入する。2は轆ケ島台式の波状口縁をもつ深鉢である。口径は推定33cm、胴部径は34cm、残存器高は22.5cmである。沈線による区画と連続押し引きによる充填によって構成される。内面には横方向の条痕が施される。胎土には繊維が少量含まれる。3は条痕のみの深鉢形土器である。口径は推定31cm、残存器高は23cmである。この土器も口縁部から底部にかけてすばまっていく器形をしているが、1より急にすばまっている。口唇上は内そぎ状に削り落とされ、角にキザミが入られる。胎土には繊維が少量含まれる。

#### P107土坑（第180図）

1は轆ケ島台式の大型深鉢である。口径は推定28cm、胴部径は推定29cm、残存器高は27cmである。沈線による区画と連続押し引きによる充填によって構成され、P106土坑出土のものと同時期のものと思われるが、この資料は胴部の途中の屈曲をはさんで、上下二段組の文様帯をもつ。繊維の混入はほとんどみられない。2は外面に条痕が施されるものの、ヘラ状工具によって磨削されている。口唇上にはキザミが入る。3・4は内・外面とも条痕が施されるものである。4は口唇上にヘラで幅広いキザミを入れている。

P-058

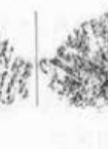


P-089



P-090

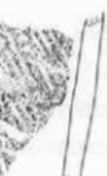
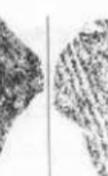
P-091



P-096

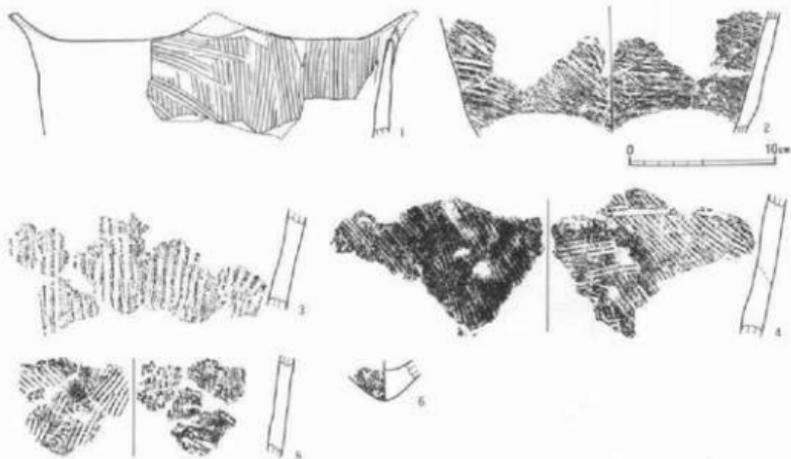


P-099

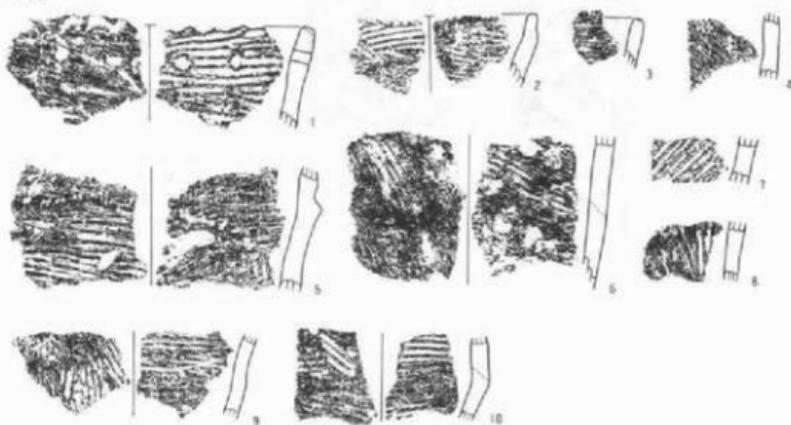


第177图 早期出土遺物(9)

P-101



P-103

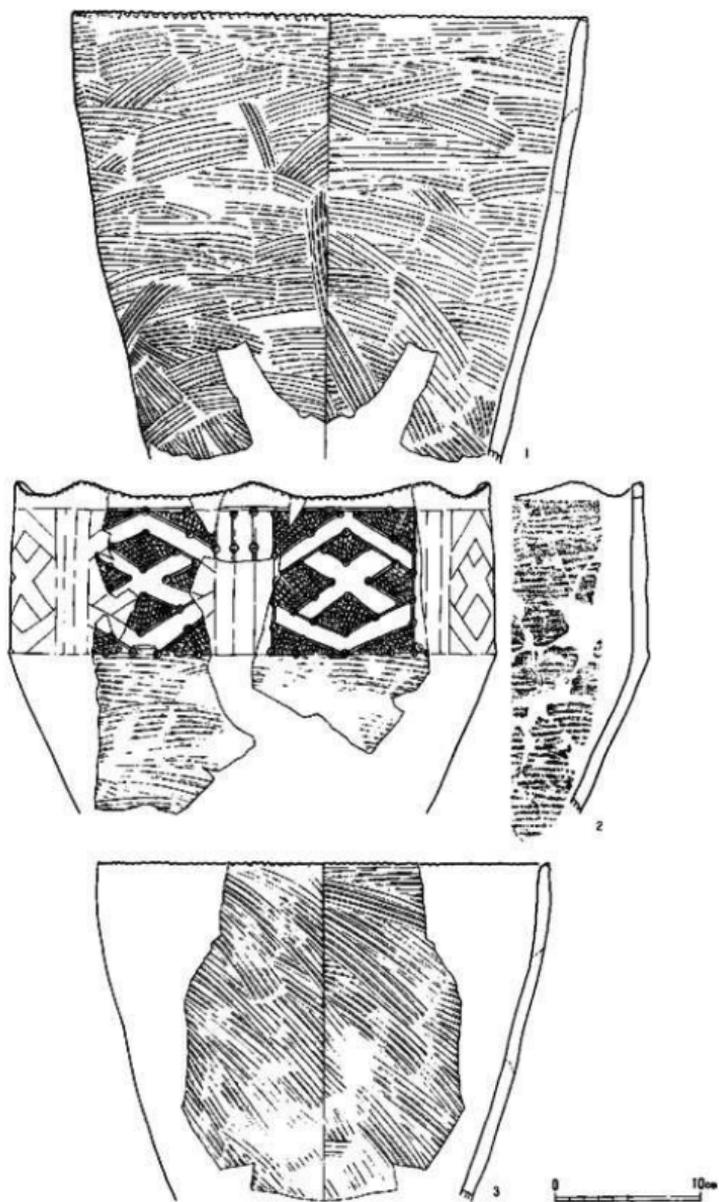


P-104



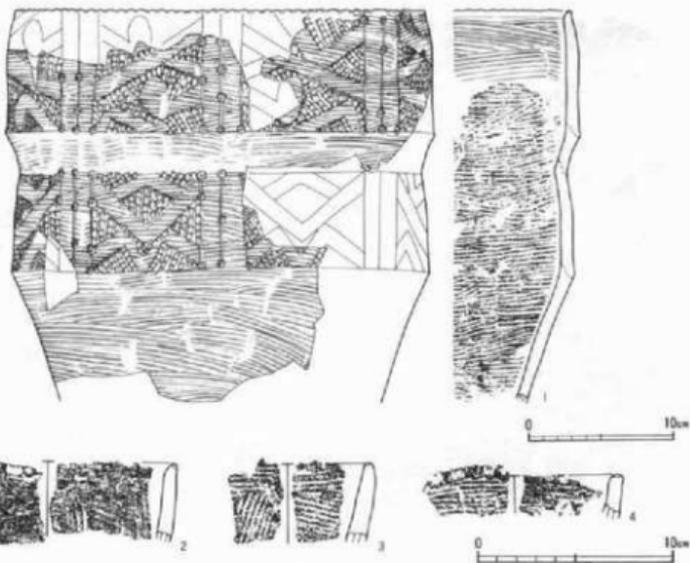
第178图 早期出土器物





第179图 早期出土文物①

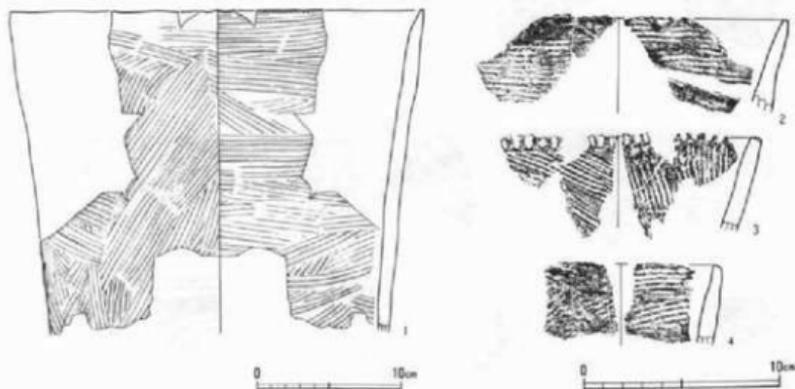
P-107



P-112

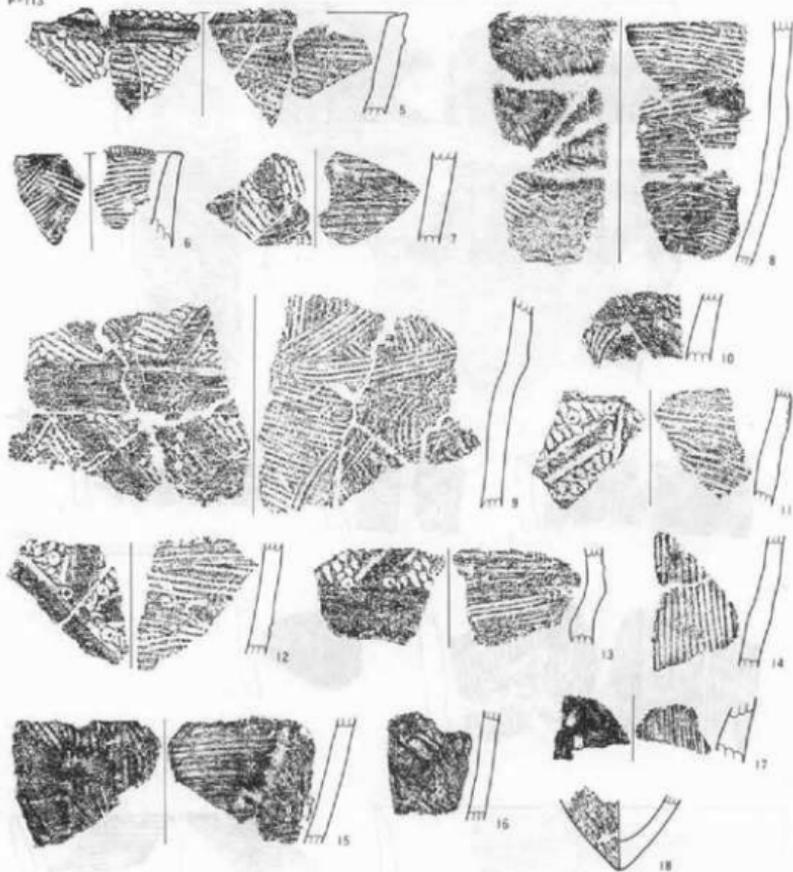


P-113

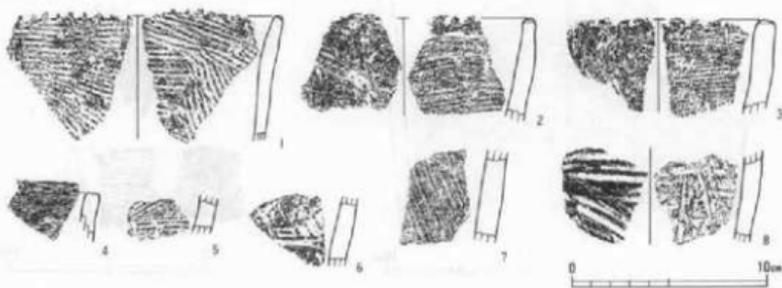


第180回 早期出土遺物12

P-113

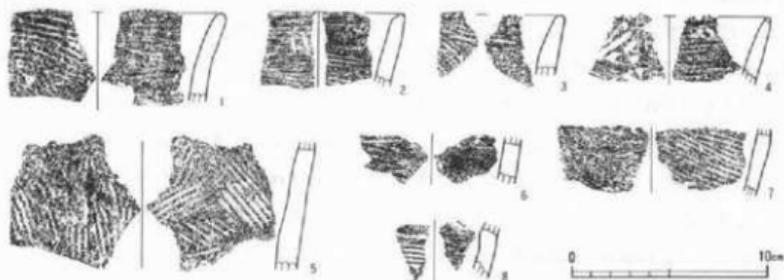


P-117

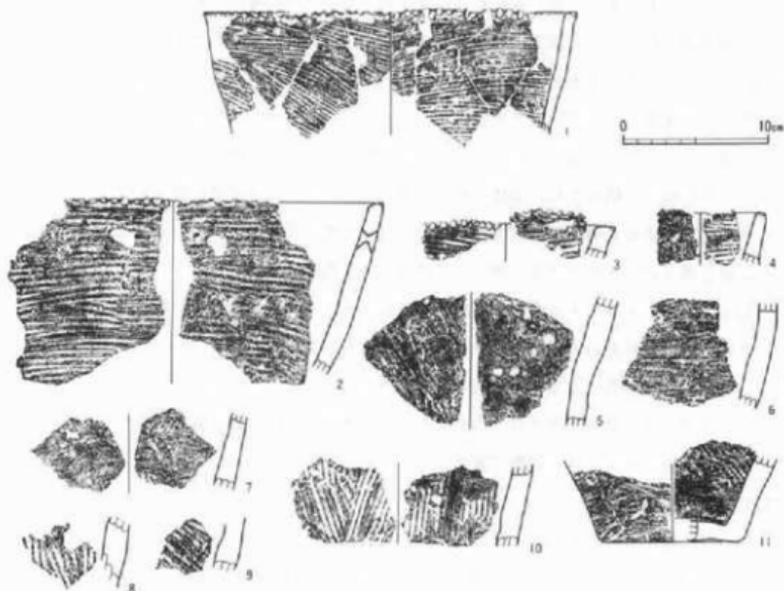


第181图 早期出土遺物⑬

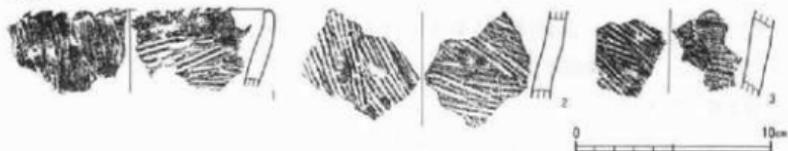
P-118



P-153



P-154



第182图 早期出土遺物14

#### P112土坑 (第180図)

1は内・外面に条痕の施された胴部破片。2は外面のみ条痕が施されたものである。

#### P113土坑 (第180～181図)

1は大型の深鉢である。口径は推定約28cm、残存器高は約22cmである。全体に直立気味で、口縁に向かって少しずつ開いていく器形をしている。内・外面とも条痕が施されるほか、口唇上にも条痕が施される。また、外面の口縁直下にはおよそ1cm幅で無文帯が存在する。2～6は口縁部の破片である。2～4・6は条痕文が内・外面に施されるものである。2は1と同じく口縁直下に幅1cmほどの無文帯が存在するもので、1と同一個体の可能性が高い。3は内面の条痕が縦方向に施されるもの。4・6は外面にヘラ状工具による調整を併用する。なお、2と4は口唇上にも貝殻の圧痕がみられる。5は鶺鴒島台式の口縁部である。区画状文は微隆起線文と細沈線を併用し、充填文に押し引き沈線を用いる。口唇上は内そぎ状に削る。7～17は胴部破片で、このうち7・9～13は鶺鴒島台式に属するものである。7は細沈線による区画状文と押し引き沈線による充填文で構成される。9は段をもつ胴部で、微隆起線文による区画状文と沈線による充填文で構成される。段の部分は無文帯になる。10は細沈線による区画状文と沈線による充填文で構成され、全体に曲線を多用する。11・12は微隆起線文による区画状文と押し引き沈線による充填文で構成され、ヘラ状工具で無文部分を描出する。13は段をもつ胴部で、微隆起線文による区画状文と押し引き沈線による充填文で構成される。8・14～17は条痕文の胴部である。8は内・外面とも条痕が施されるもので、外面にはヘラ状工具による調整も併用される。14は外面のみ縦方向の条痕が施されるものである。15は内・外面とも条痕が施される。16はヘラ状工具によるケズリ状の調整が施されるもので、条痕はみられない。17は外面にやはりケズリ状の調整が施され、内面に条痕が施されるもの。18は底部破片で尖底になるものである。外面にケズリ状の調整が施される。

#### P117土坑 (第181図)

1～4は口縁部破片である。1は内・外面に条痕が施され、口唇上にキザミが入れられるもの。2は内・外面ともヘラ状工具で調整を施す。3は外面はヘラ状工具を、内面は条痕を施す。4は内・外面ともヘラ状工具で調整を施したもので、口唇上は平らにそぎ落とされている。5～8は胴部破片である。5は外面のみ条痕が施されるもの。6～8はヘラ状工具による調整が施されるもの。8では条痕文と併用されている。

#### P118土坑 (第182図)

1～4は口縁部破片である。1は外面は条痕文を、内面にはヘラ状工具による調整を施している。2は内・外面とも条痕を施す。口唇上は内そぎ状に削り、貝殻背縁で角とりをする。3は内・外面に条痕を施すもの。4は鶺鴒島台式で、細沈線による区画状文と押し引き沈線による充填文で構成される。5～8は胴部破片である。いずれも外面に条痕を施し、内面には条痕が

ヘラ状工具による調整を施すものである。ただし6の外表面は、条痕を施した後ヘラ状工具で磨削している。また、7の外表面は磨滅が著しい。

#### P153土坑（第182図）

1は器形の一部が復元できる資料である。口径は推定約25cm、残存器高は8.3cmである。内・外面とも条痕を施し、口唇上を平らにそぎ落としてキザミを入れる。2も同様の調整・整形をもつ口縁部破片で、1と同一個体の可能性がある。3は小破片であるが、下部に微隆起線文がみられ、鶺鴒島台式と認められる。小波状になるかもしれない。4は外面にヘラ状工具による調整を、内面に条痕を施したものの。5～10は胴部破片である。5は内・外面ともヘラ状工具で調整を施すもの。内面にはススの付着がみられる。6・7も同様にヘラ状工具による器面調整を行っているもの。8・9は外面は条痕を、内面はヘラ状工具による調整を施すもの。10は内・外面とも条痕を施すものである。11は平底の底部である。底径は推定約7cm、残存器高は5.1cmである。

#### P154土坑（第182図）

出土した遺物数は少ない。1は条痕の施された口縁部で、若干内湾気味になる。外面の条痕は縦方向に施されている。2・3は胴部破片で、内・外面とも条痕が施される。

#### P158土坑（第183図）

器形復元のできる資料が2個体出土している。1は口縁部付近の資料で、口径は推定25cm、残存器高は10.9cmである。口縁に向かって広がっていく器形をしており、口縁部は若干外反する。内・外面とも条痕を施し、口唇上にはキザミを入れる。2は胴部破片で、残存器高は約13cmである。内・外面とも条痕が施される。

#### P166土坑（第183図）

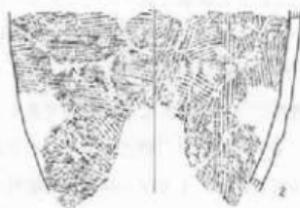
器形復元のできる深鉢形土器が4点出土している。1は平口縁の深鉢の上半分で、口径は推定28cm、残存器高は22.8cmである。胴部より口縁に向かって直線的に開く器形をしている。2～4は波状口縁の深鉢である。2は4対の波頂部をもつもので、口径は推定22cm、残存器高は16.3cmである。胴部より口縁に向かって直線的に開く器形をしている。口唇上は平らにそぎ落とされている。条痕は施されず、内・外面とも擦らないしはヘラナデ状の調整が施される。3も4対の波頂部をもつもので口径は推定23cm、残存器高は9.8cmである。4は口径は推定24cm、残存器高は23.6cmである。胴部より口縁に向かって直線的に開く器形をしているが、胴部下半には弱い屈曲がみられる。8対の波頂部をもち、補修孔がみられる。

#### P167土坑（第183図）

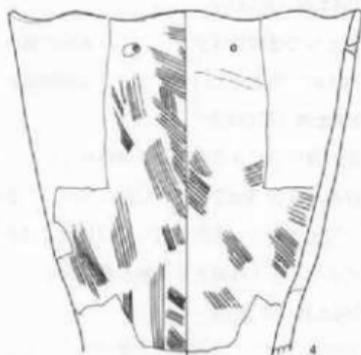
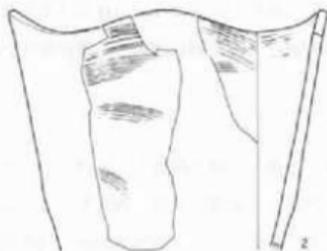
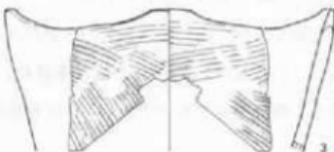
1・2は口縁部破片である。両方とも外面のみ条痕が施される。1には補修孔が穿孔される。3～6は胴部破片である。4は内・外面に、その他は外面のみに条痕が施される。

#### P174土坑（第184図）

P-158



P-166

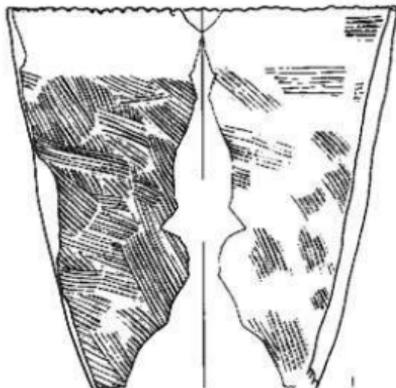


P-167

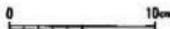
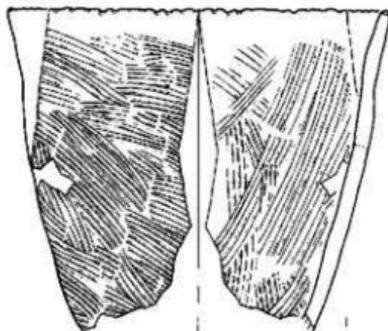


第183图 早期出土器物

P-174



P-175



第184図 早期出土遺物⑩

器形復元できる資料が1点出土している。1の口径は推定約27cm、残存器高は26.3cmである。口縁に向かって広がっていく器形をしており、ややすぼまるように底部に向かっていく。内・外面とも条痕が施されるが、外面は口唇より下5cmほどを磨消して無文化している。また、内面は磨滅が著しい。口唇上にはキザミが入る。

#### P175土坑（第184図）

器形復元できる資料が1点出土している。1の口径は推定約27cm、残存器高は24cmである。やや張りをもった胴部をもち、すぼまるように底部に向かっている。口縁部は若干外反しており、口唇上にはキザミが入る。内・外面とも条痕が施されるが、外面は口縁より下2cmほどを磨消して無文化している。

(3) 包含層出土の土器

第I群1類 燃糸文土器 (第185図1~4)

燃糸文土器は極めて少ない。図示したものがほとんど全てである。いずれも磨滅著しい。

第I群2類 沈線文土器 (第185図5~8)

沈線文土器も極めて少ない。5~7は棒状工具による刺突や波状沈線などを使用するもので田戸上層式に属するものであろう。

第II群1類 野島式土器 (第186図)

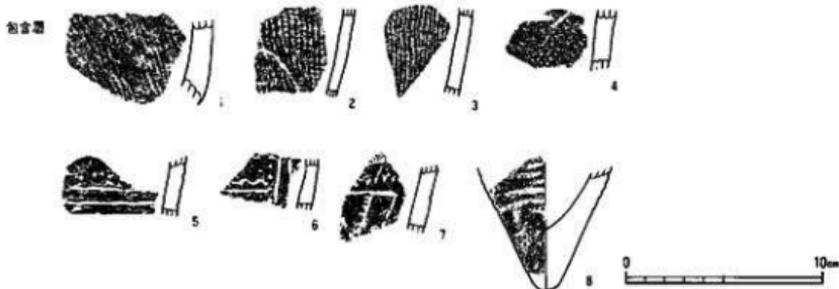
1~30は微隆起線文を主体とするもの。1・5・8・10・12・16は口縁部より微隆起線を垂下させるもので、P-003出土の深鉢と同様の文様構成をとるものであろう。それ以外のものは微隆起線による幾何学的な区画と充填によって構成される。このタイプは内面に条痕が旋されることが多い。33~36は沈線による区画と沈線による充填によって構成されるもの。口縁部がやや強く外反する。

第II群2類 鶴ヶ島台式土器 (第187~198図)

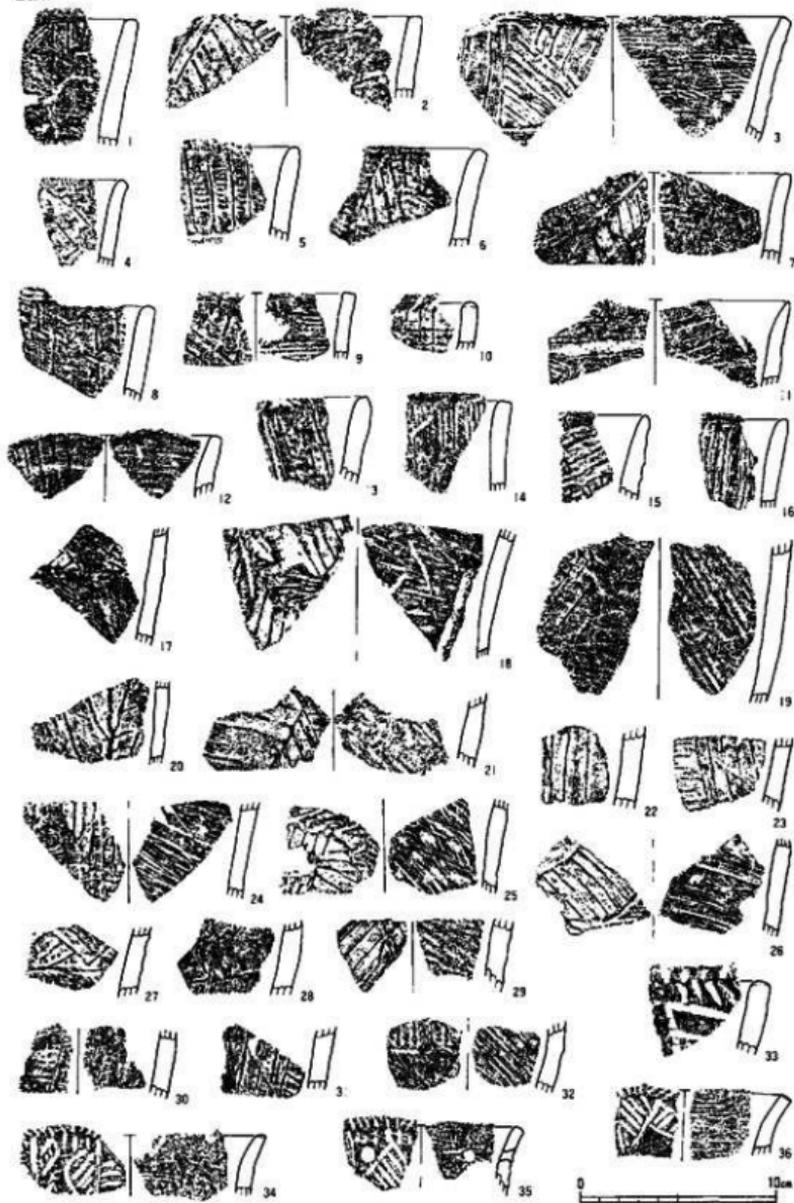
鶴ヶ島台式土器の出土量は多い。ここでは全体をおおよそ時期順に5種に分類し、それぞれについて簡単に述べていきたい。

A種 (1~11) は二帯の文様帯をもち、二段の弱い屈曲を有する。沈線による区画と沈線・押し引き・刺突を用いた充填文で構成され、区画の交点には竹管等による円形刺突が施される。野島式からの過渡的な様相をもつ。

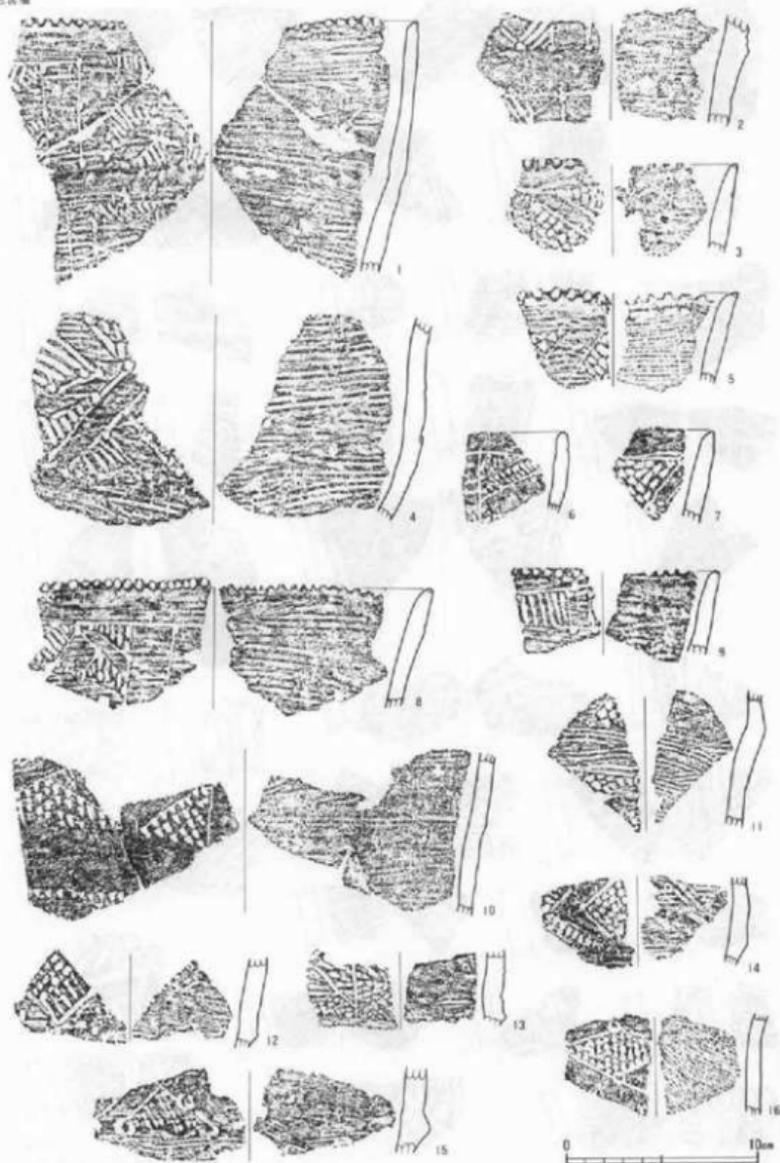
B種 (12~112) は区画状文が安定し、胴部の屈曲が強くなるもの。区画に細沈線を用いるもの (12~48)、太沈線を用いるもの (49~69)、ナゾリもしくはナゾリ効果の沈線を用いるもの (70~86)、微隆起線を用いるもの (87~104) などがある。充填文には押し引きもしくは連続刺突、刺突、沈線の各種がある。さらに口縁部無文帯が形態化するものが見られるが(105~112)、これらはやや新しい様相をもつものである。



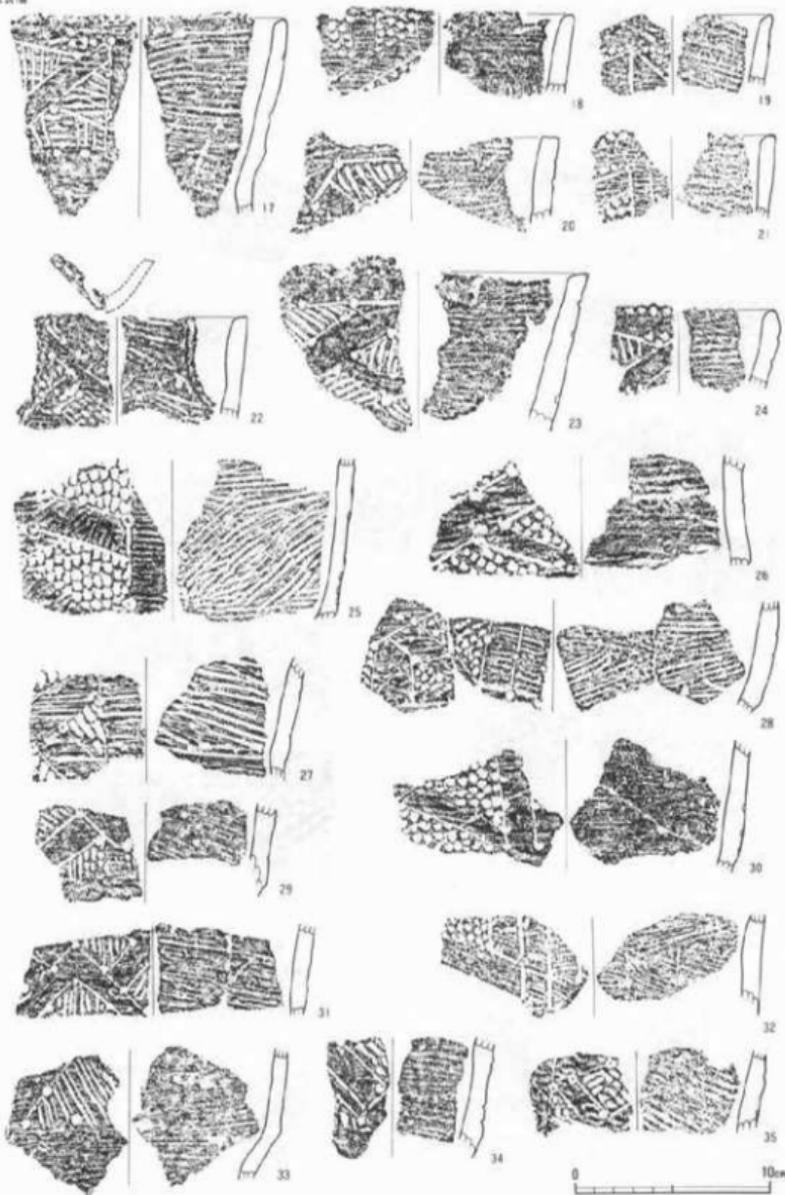
第185図 早期出土遺物①



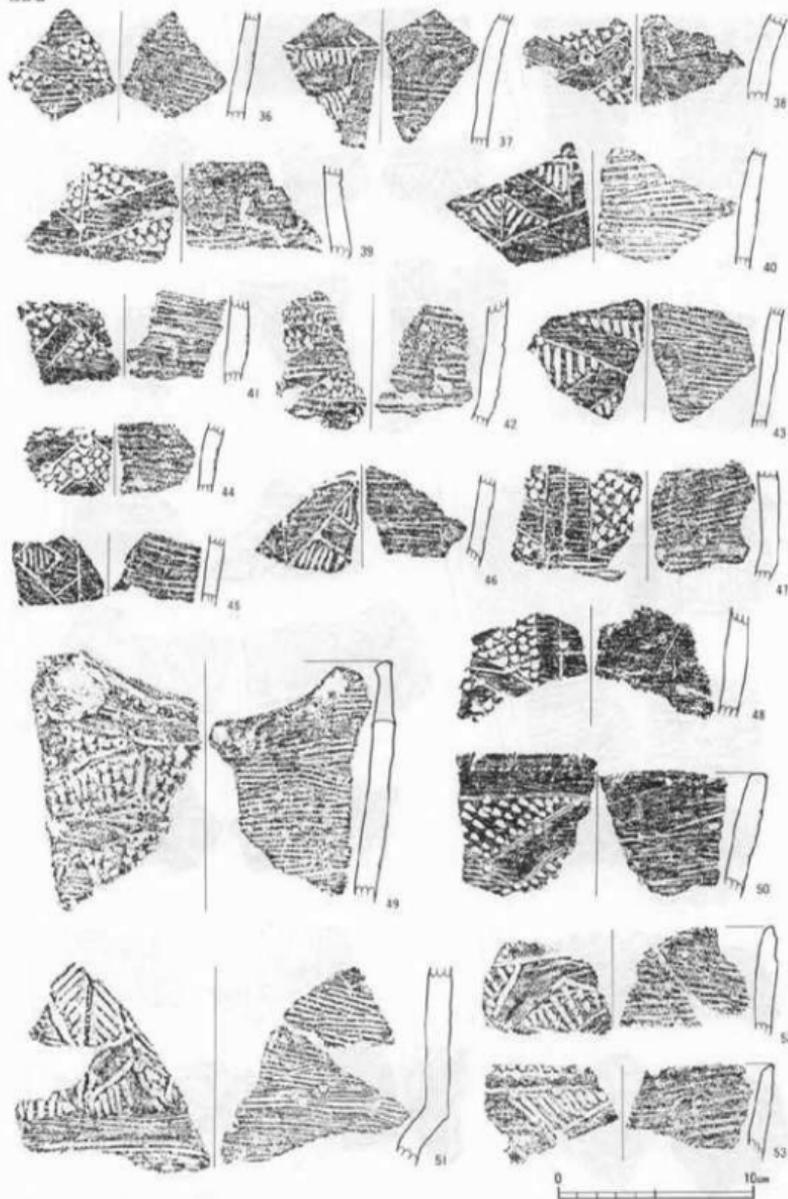
第186圖 早期出土遺物19



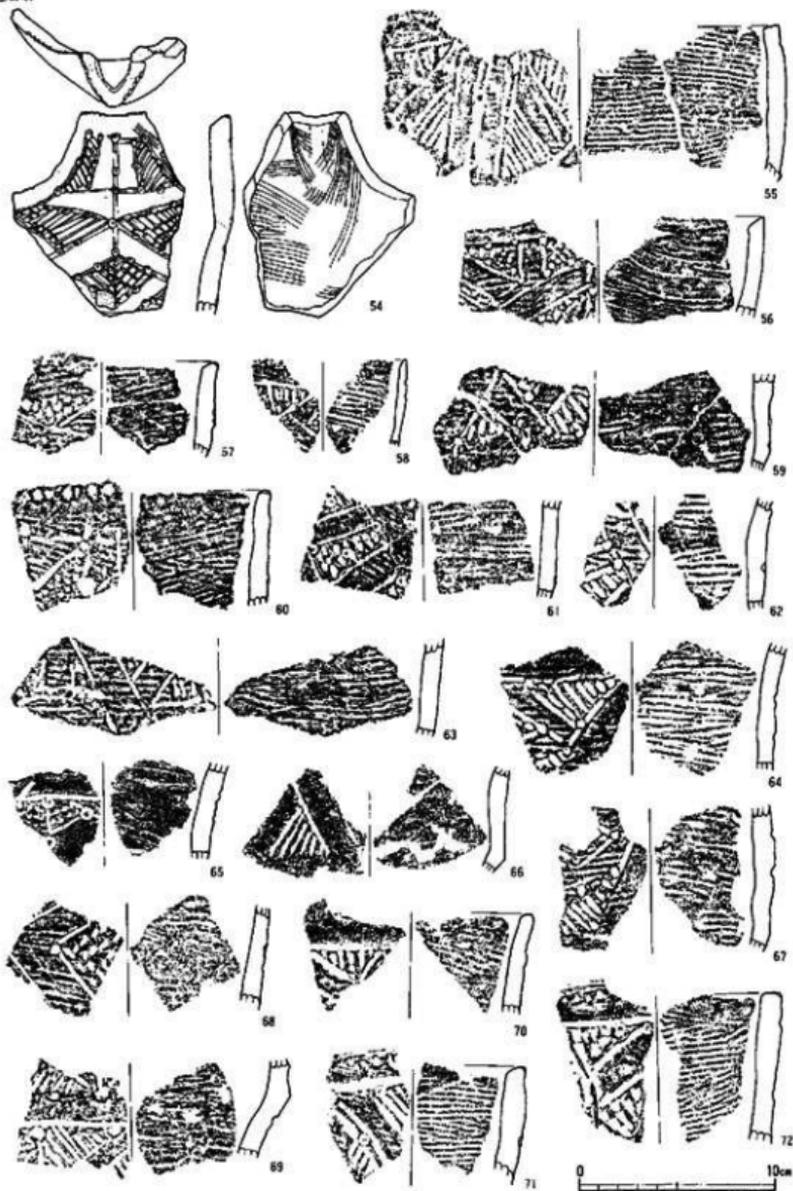
第187图 早期出土器物⑩



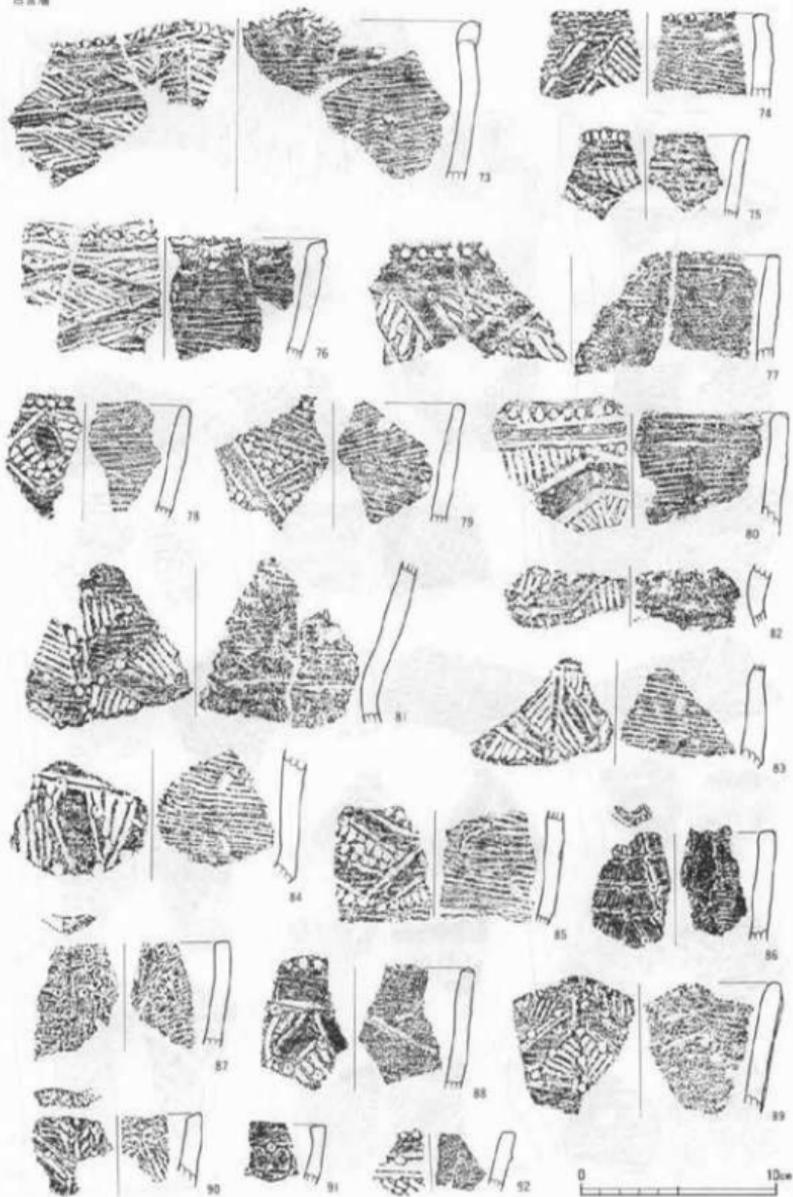
第188区 早期出土器物



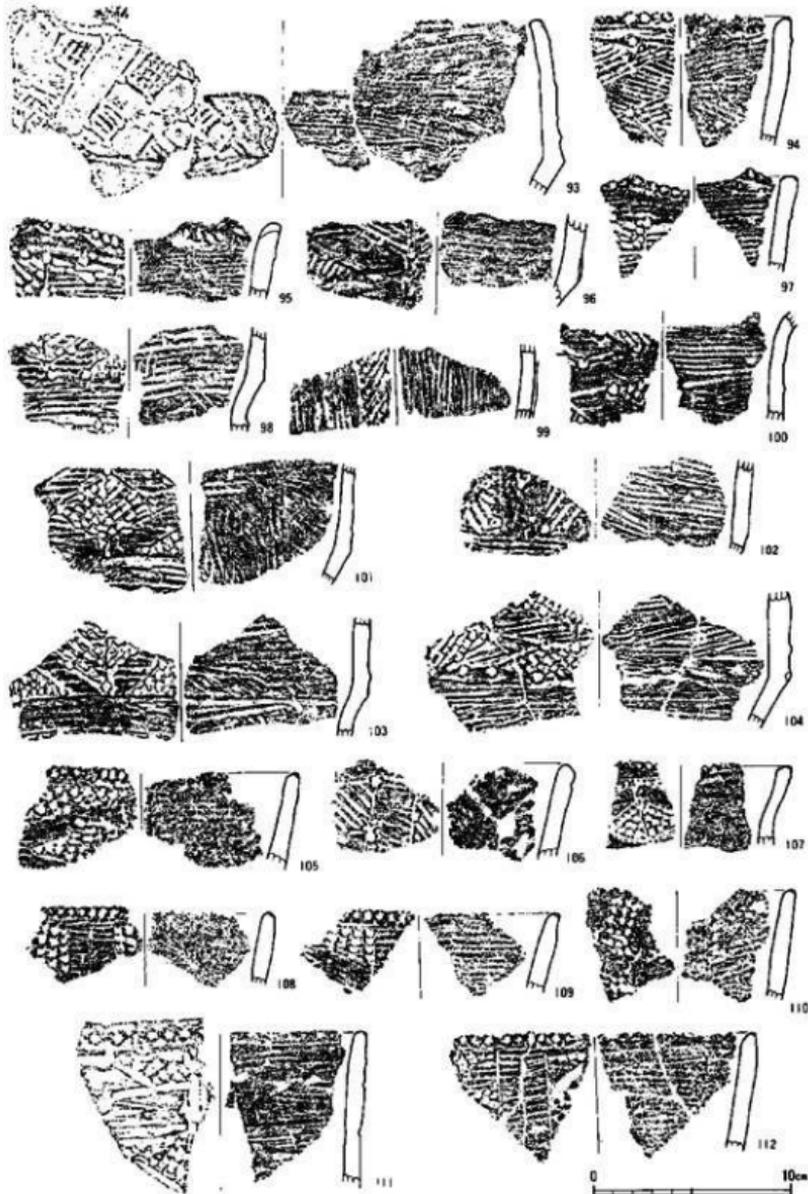
第189圖 早期出土遺物(2)



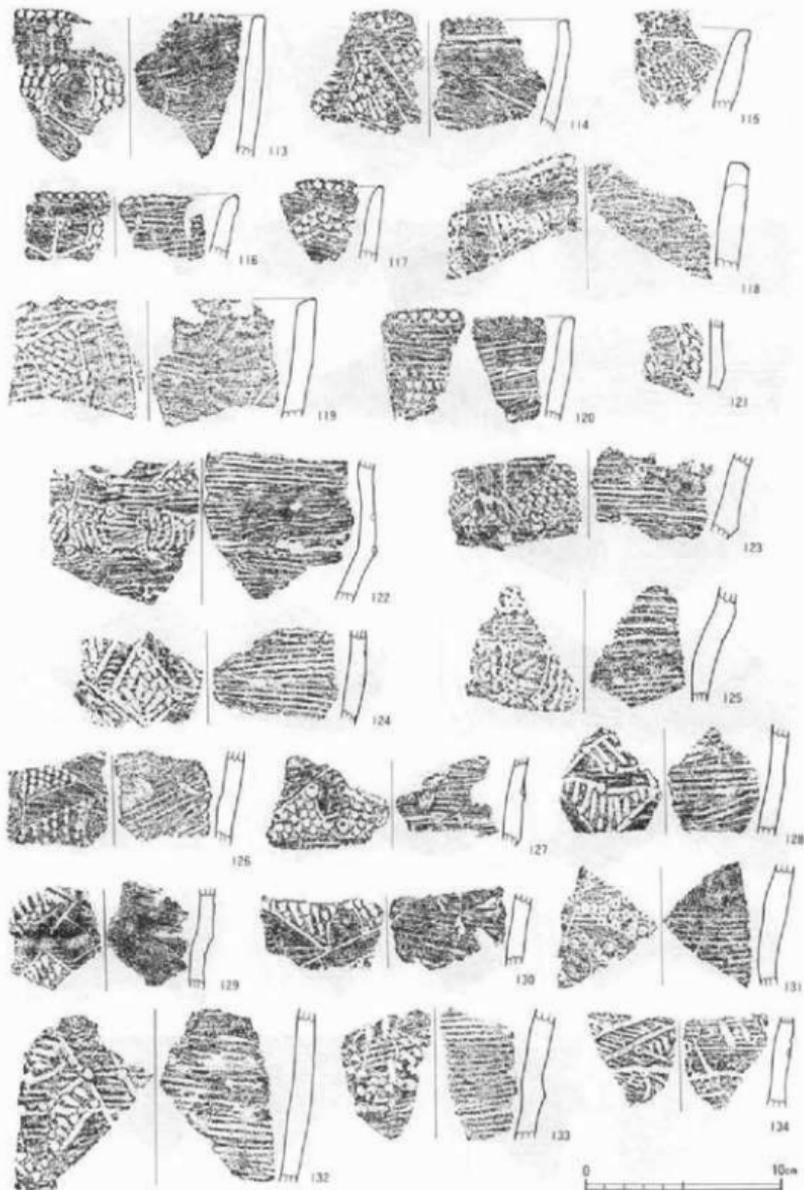
第190图 早期出土器物22



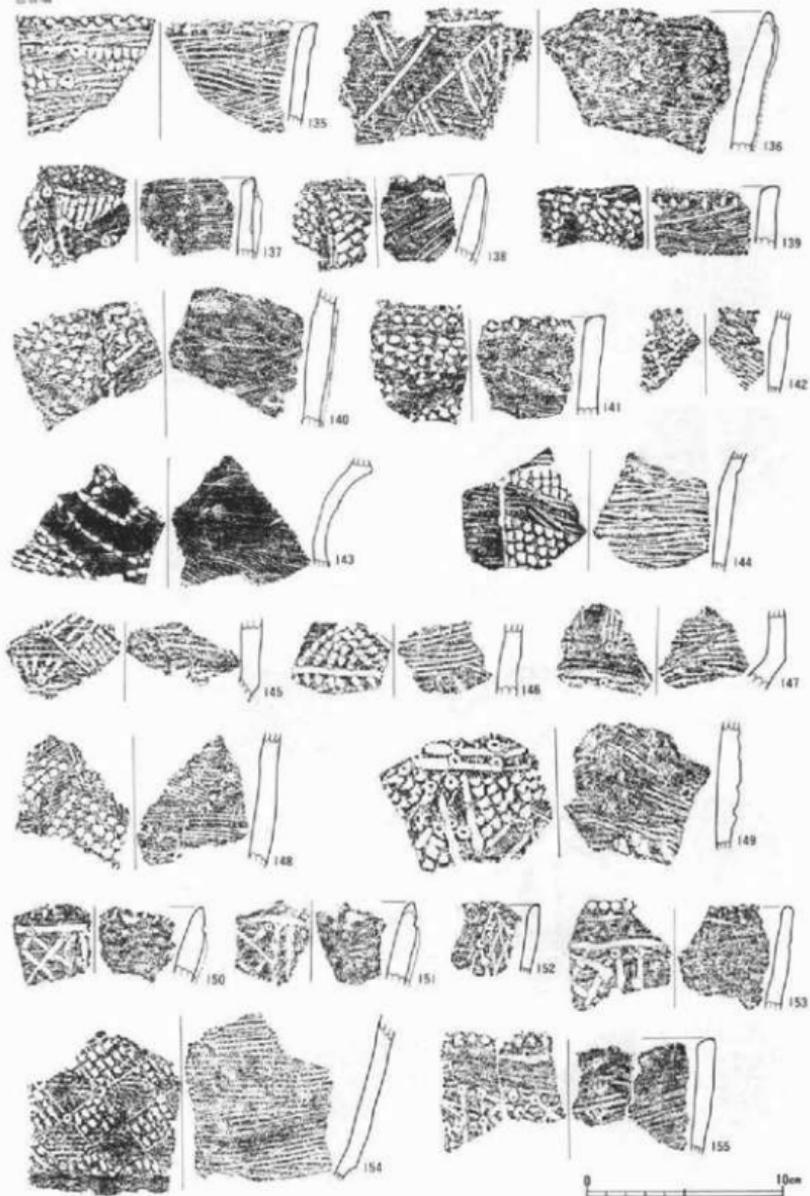
第191圖 早期出土文物圖



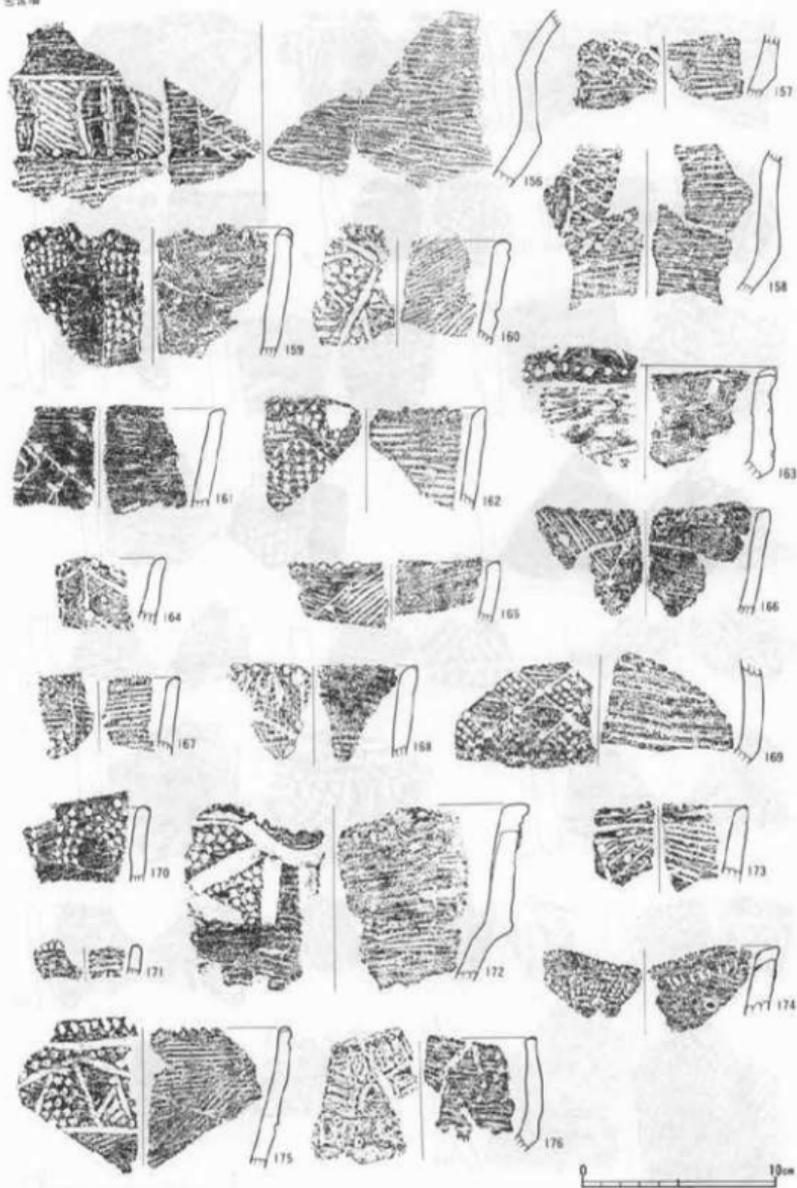
第192组 早期出土器物20



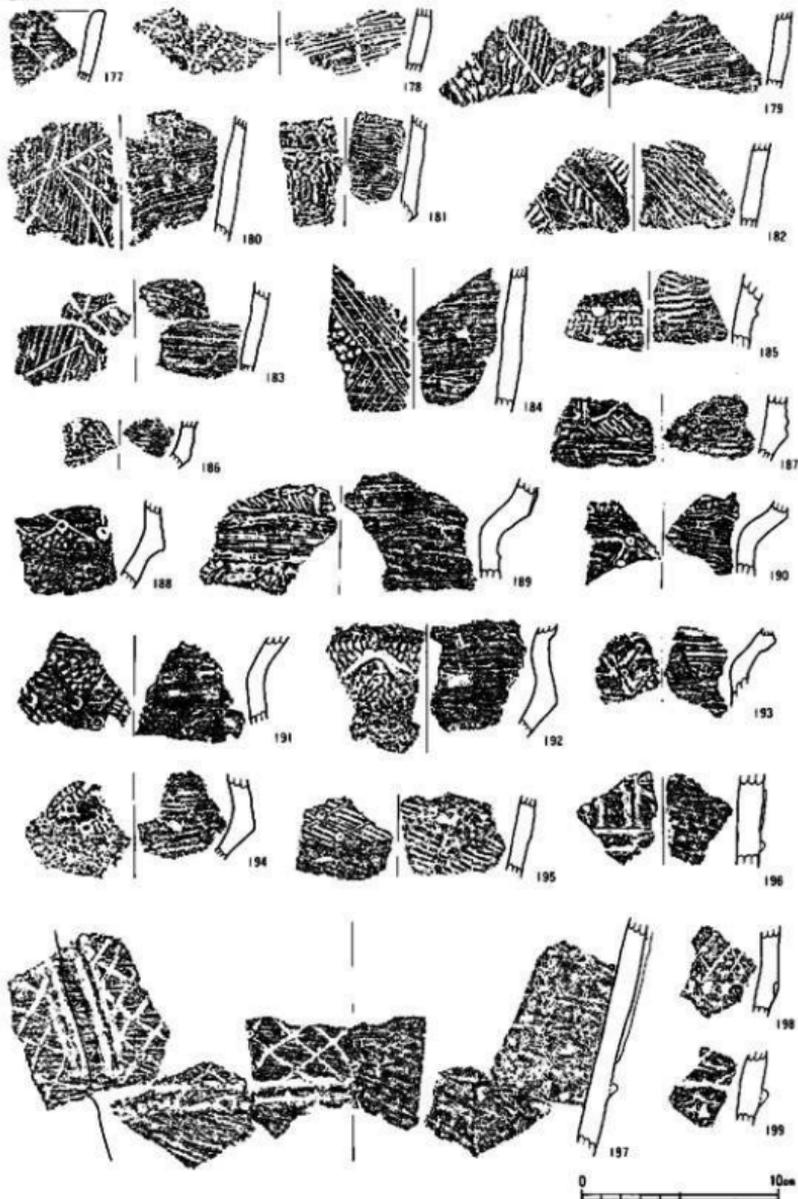
第193圖 早期出土器物29



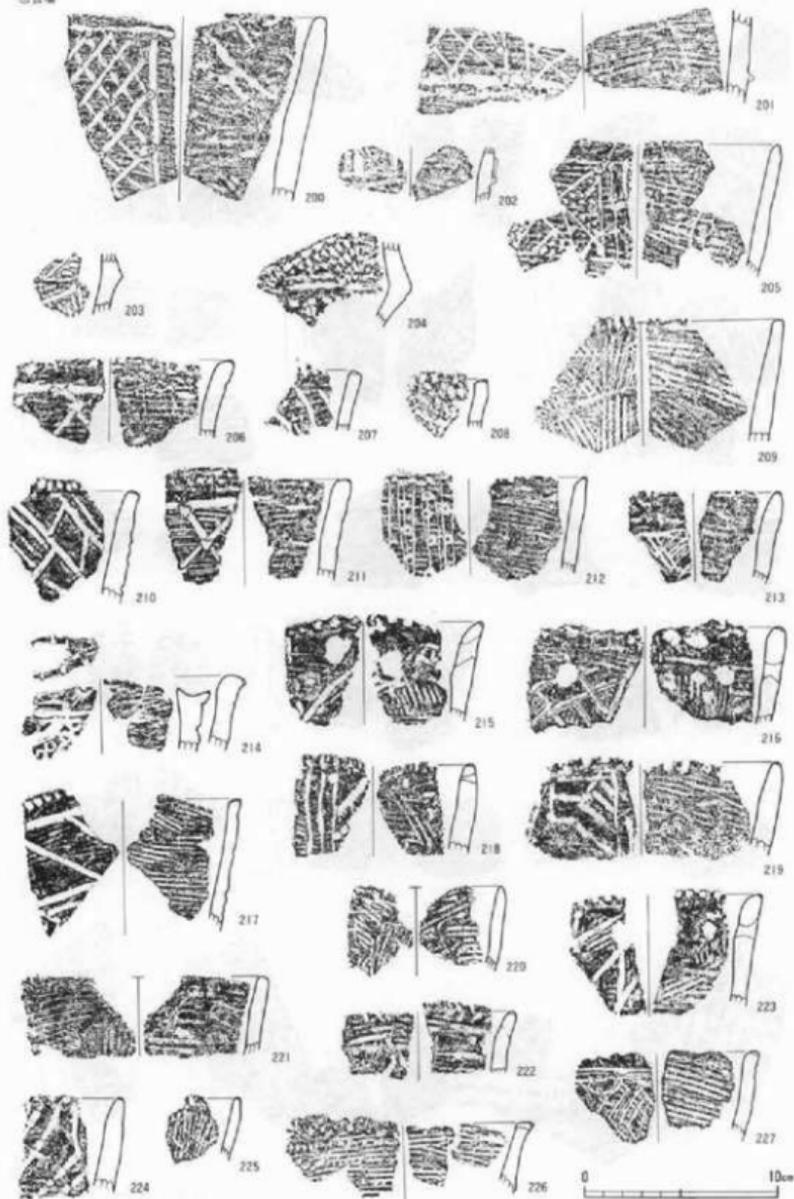
第194图 早期出土文物 ⑤



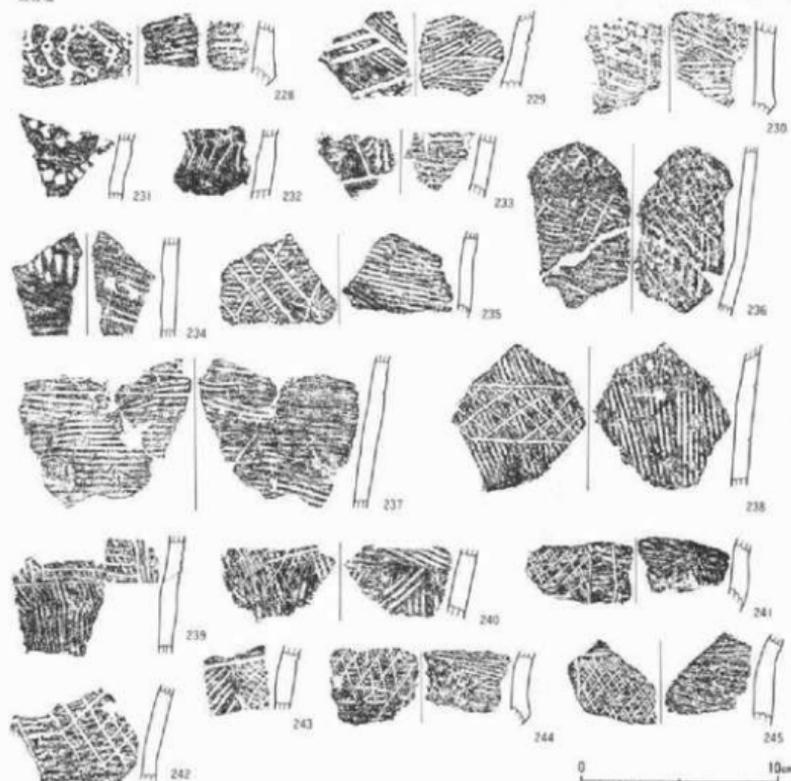
第195図 早期出土遺物 乙



第196图 早期出土文物



第197圖 早期出土遺物圖



第198図 早期出土文物

C種 (113~170) は区画状文がより多彩になり、文様の省略化が行われるもの。区画に弧線を用いるもの (113~134)、貼り付け隆起線を用いるもの (135~139)、充填文のみで構成されるもの (140~148)、文様の省略化により斜格子文を施すもの (149~158) などに分類される。さらに口縁部無文帯が消失したものと、文様帯が一带となるものもここに含める (159~170)

D種 (171~205) は区画状文の基本構成が崩れ、極めて多彩な文様をもつもの。崩れた区画状文をもつもの (171~185)、口縁部文様帯下のくびれが大きく文様帯の幅が狭くなるもの (186~194)、屈曲部分を簡略化したもの (195~202・205)、口縁部文様帯と胴部文様帯との間の無文帯が消失したもの (203・204) などがある。

E種 (206~245) は区画状文が崩壊したもの。区画と充填という縄ヶ島台式土器の施文法の基本が見られなくなり、沈線と刺突を自由に組み合わせる。

### 第II群3類 茅山下層・上層式土器 (第199図～第201図)

茅山下層・上層式に属する土器は鶴ヶ島台式に比べると量的には少なくなる。ここでは両者をまとめて部位ごとおよび類似する施文法ごとに掲載した。1～10は口縁部である。1・3は同一個体と思われるもので、縦方向の条痕が施された口縁部文様帯をもち、その下に段がある。口唇上には指頭圧痕列が存在する。2は円形区画を刺突で充填するもの、4・5・7・8・10は刺突列を主体とするもので茅山下層式である。11～67は胴部破片である。11～13は刺突列を主体とするもので茅山下層式である。14～37は胴部に段をもち、段上にキザミを入れるもの。38～46は段をもつが、キザミは入らない。1・3・21・30・31は段の口縁側と胴部側とで条痕の施文方向を変えている。47・48は隆帯を縦方向に貼り付けるもの。49～59はヘラ状工具による施文が見られるもの。いずれも半截竹管を使用したものと思われる。50では半截竹管の刺突もみられる。60～67は指頭圧痕が顕著なもの。

### 第II群4類 条痕のみの土器 (第202～207図)

条痕のみの土器は極めて多量に出土している。細かい時期区分は不可能なため、ここでは施文上の特徴からいくつかに分類した。

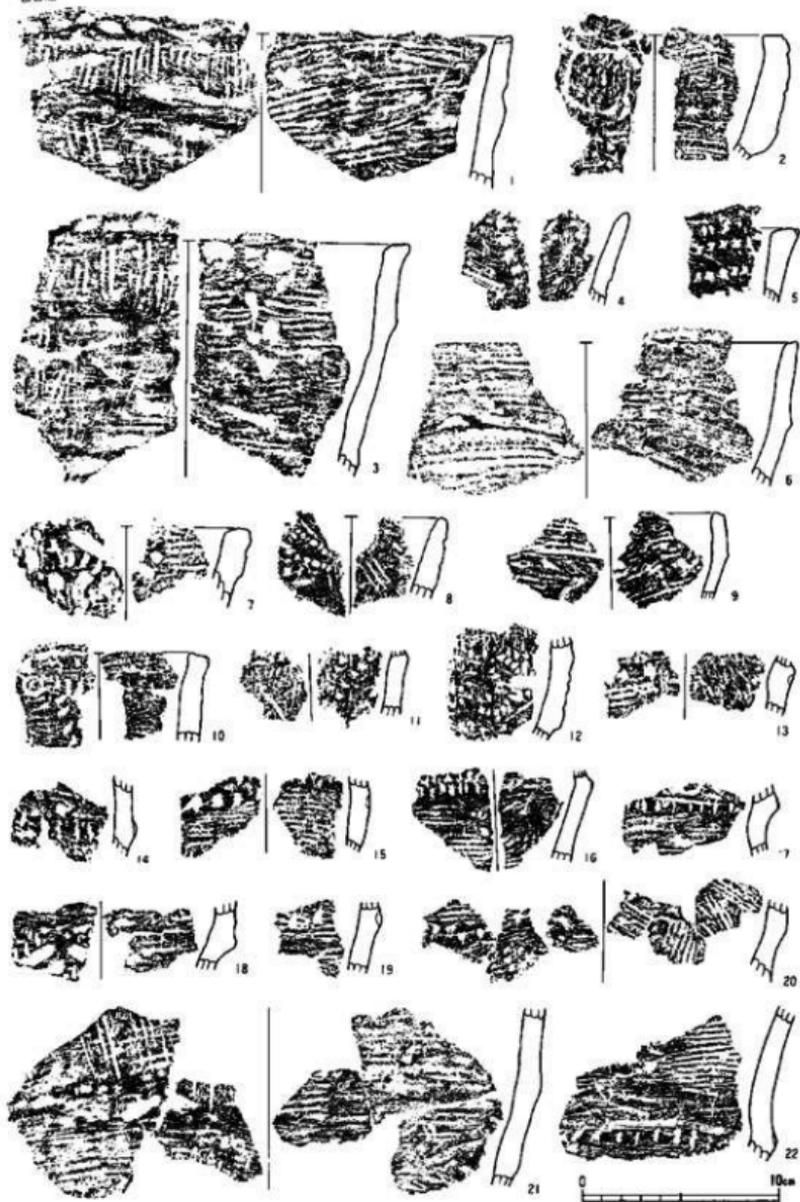
A種 (第202～203図) は口唇上にキザミをもたないものである。器形は直線的に立ち上がるものが多いが、若干外反するものもある。1～28は表裏に条痕が施されるもの。ほとんどのものは横ないしは斜め方向の条痕が目立つが、3は縦方向の条痕が顕著である。19は波状口縁になるもので、口唇直下は横方向の、それより下部は斜めの条痕が施される。20は斜めの条痕が施されるものだが、口唇直下は磨消されている。21は小形の鉢であるが、口唇直下に1.5cm幅の無文帯が形成され、そこから下部に縦方向の条痕が施される。29～44は擦痕のみのものである。

B種 (第204～206図) は口唇上にキザミが入るものである。施文法によってさらにいくつかに分類できる。45～69・96は平らにそぎ落とした口唇の角のみにキザミを入れるもので、古い様相を残しているもの。ただしその形態には微妙な違いが見られ、あるいはさらに細分される可能性を残している。60・61は口唇直下の条痕が磨消されている。70～95・97は丸い口唇上にまっすぐキザミを入れるもの。施文具は棒状工具がほとんどだが、まれにヘラ状工具や貝殻腹縁を使用することもある。82は口唇直下が内側に屈曲するもの。98～110は斜めにキザミを入れるもの。99は波状口縁で、外面は擦痕のみ、内面に条痕が施される。111・112は棒状工具を刺突するもの。113～117は口唇上に貝殻背の圧痕ないしは条痕が見られるもの。

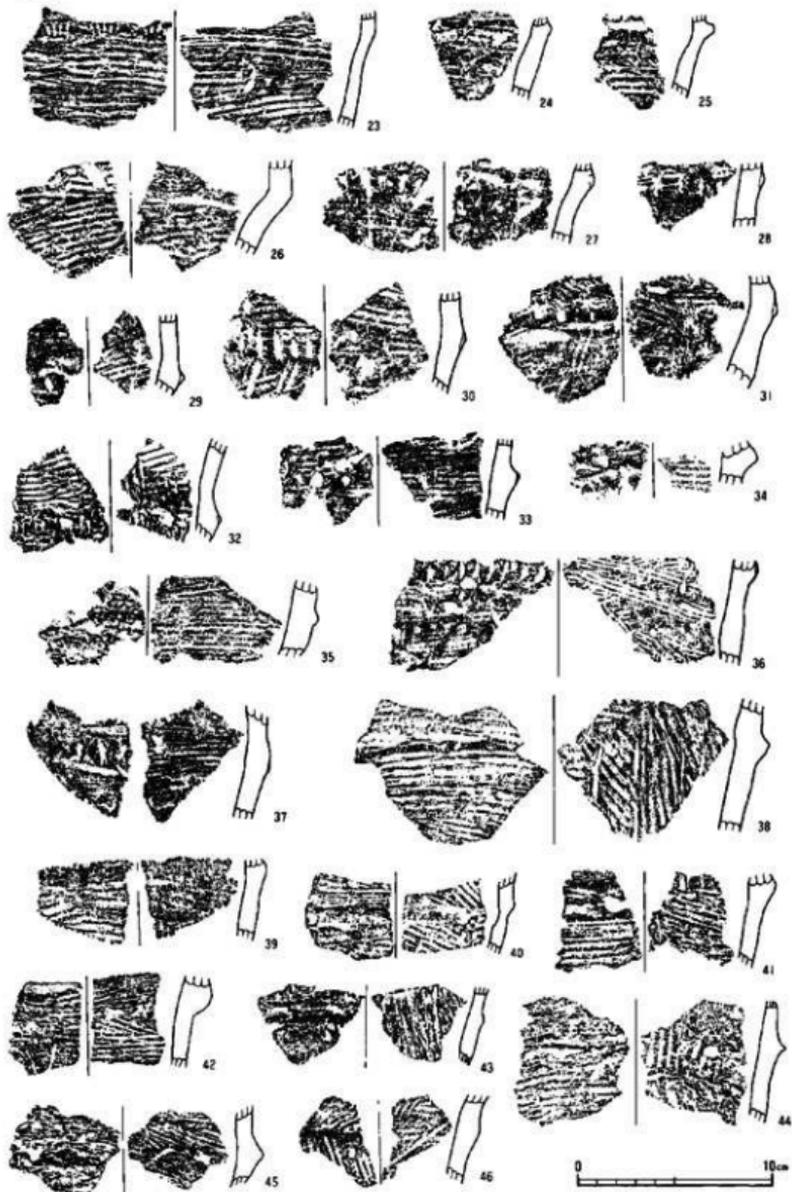
第207図は底部破片である。底部は尖底ないしは丸底が多いが、平底もいくらか存在する。

### 第II群5類 その他特殊 (第207図)

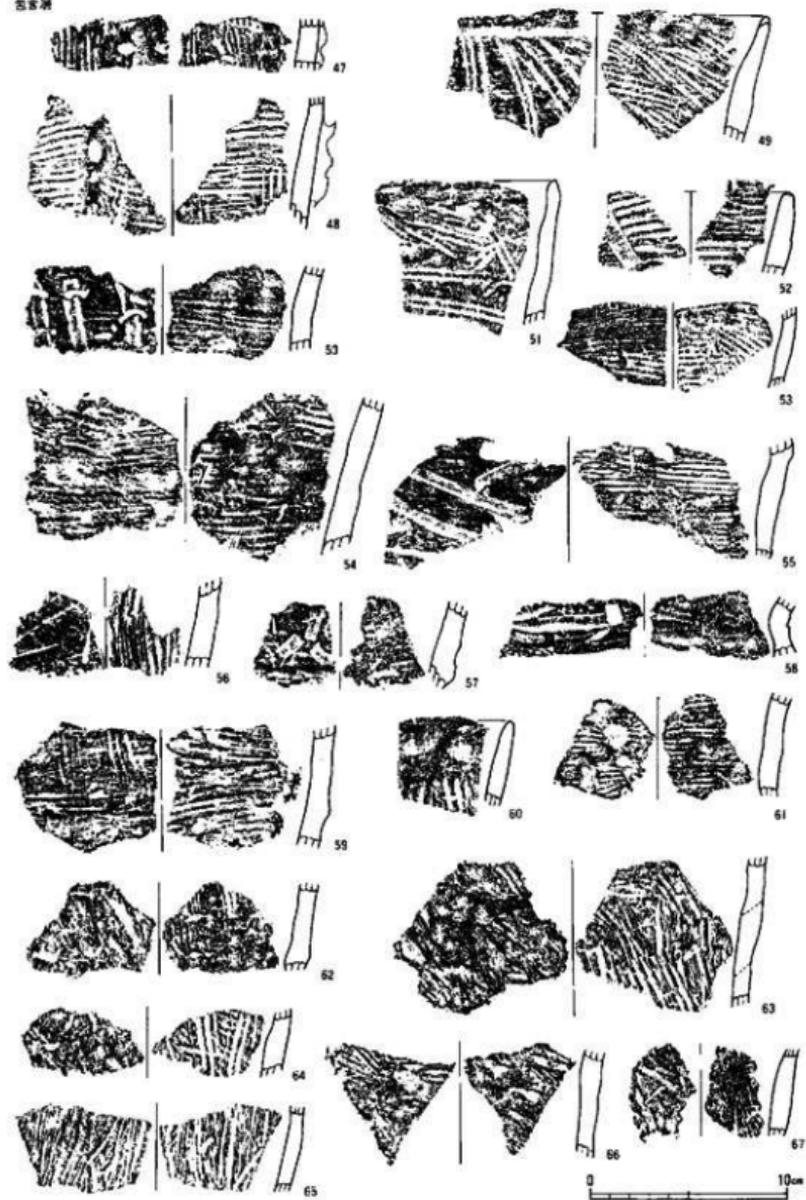
138・139は縄文条痕である。141は西関東の隆帯文系土器である。斜めに貼り付けられた隆起線を貝殻背で押しつぶしたものである。



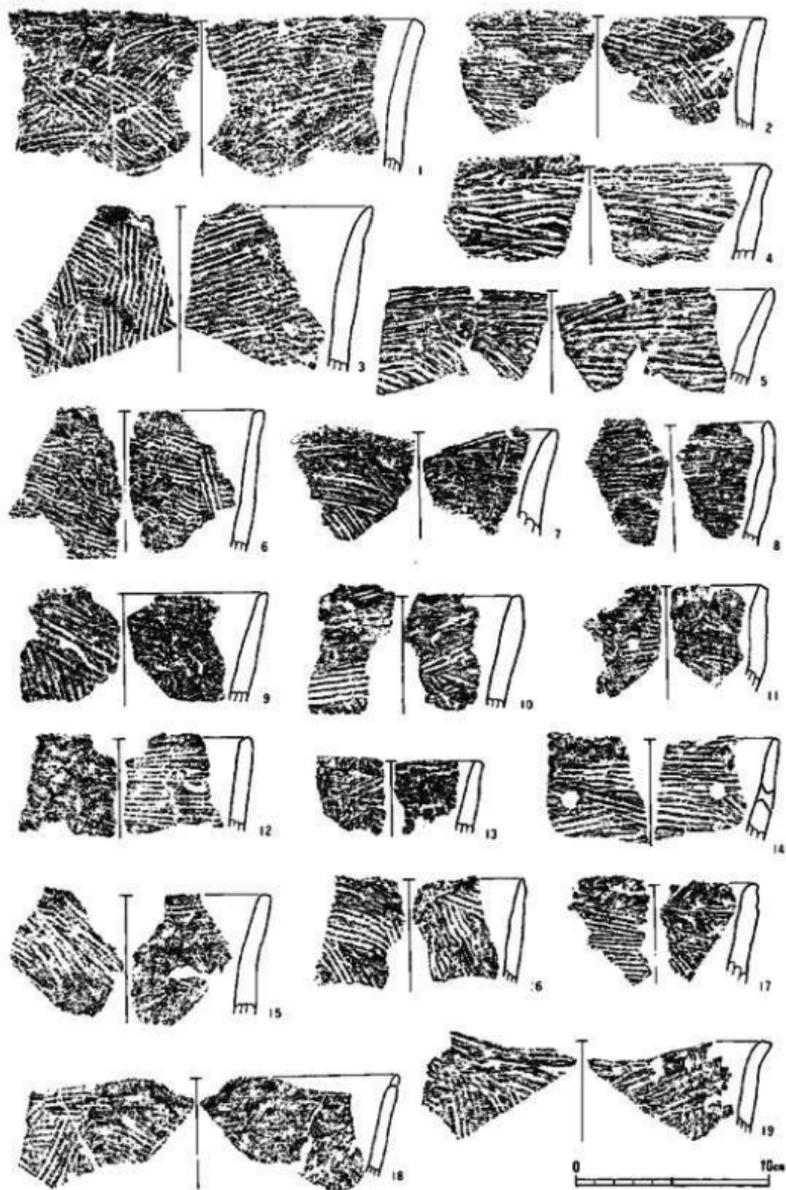
第199图 早期出土遺物30



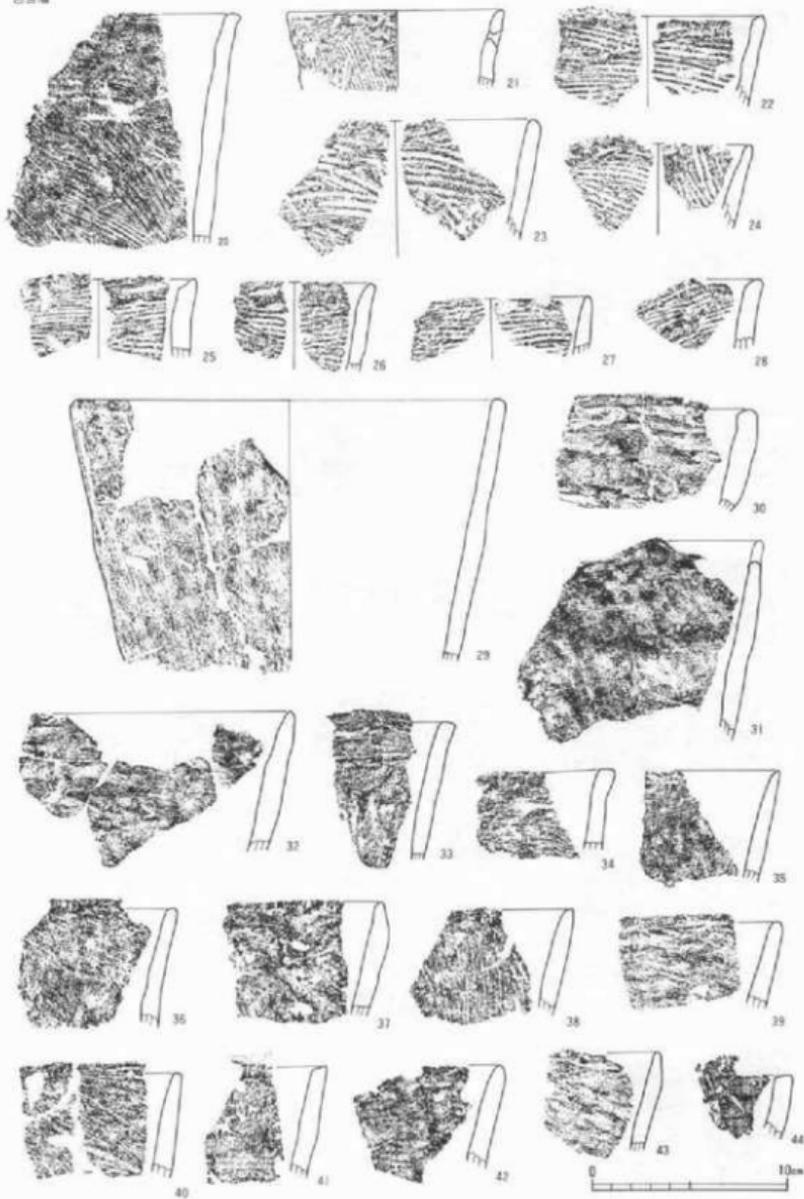
第200图 早期出土器物



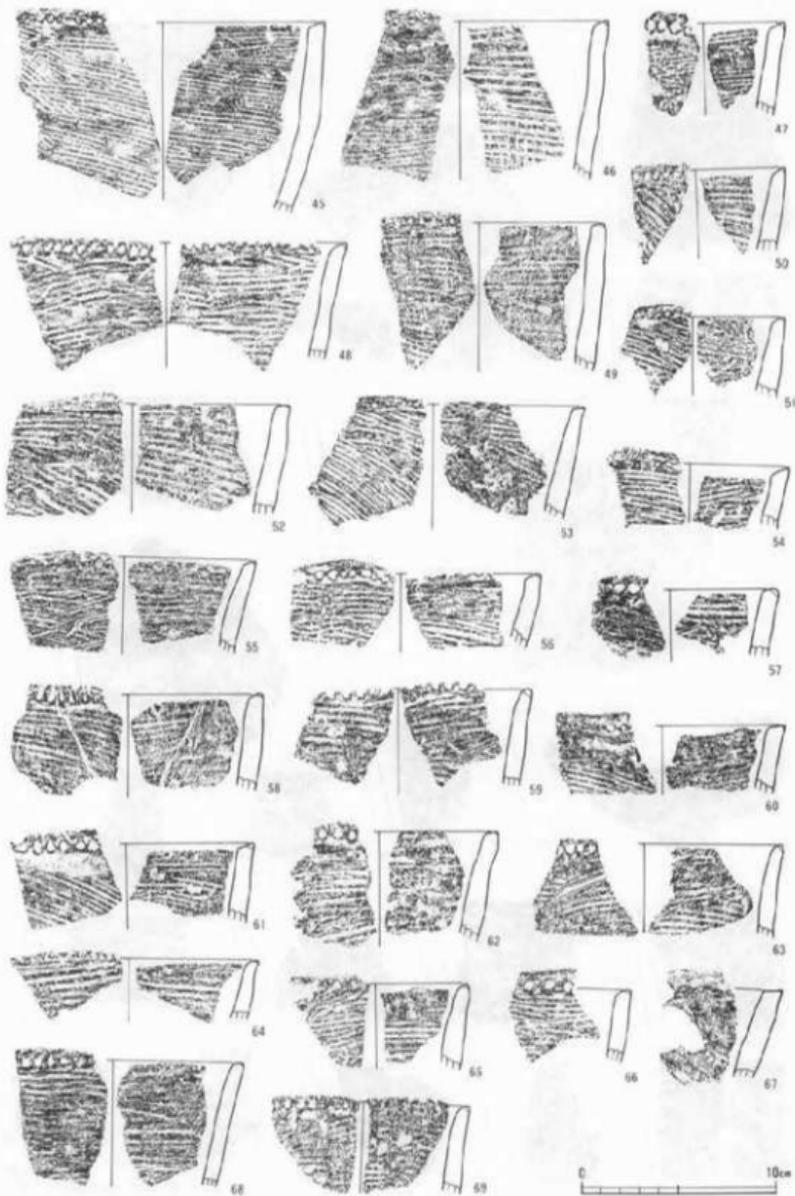
第201图 早期出土文物33



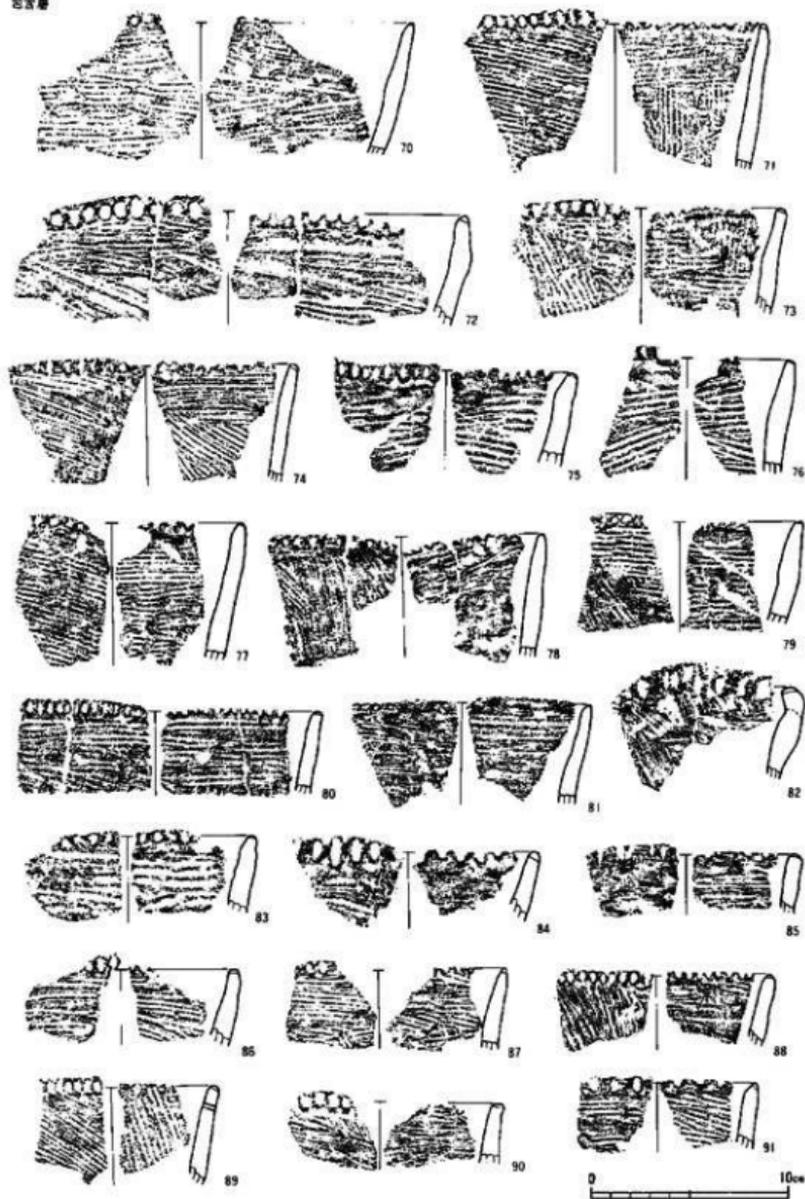
第202图 早期出土遗物34



第203圖 早期出土器物(35)

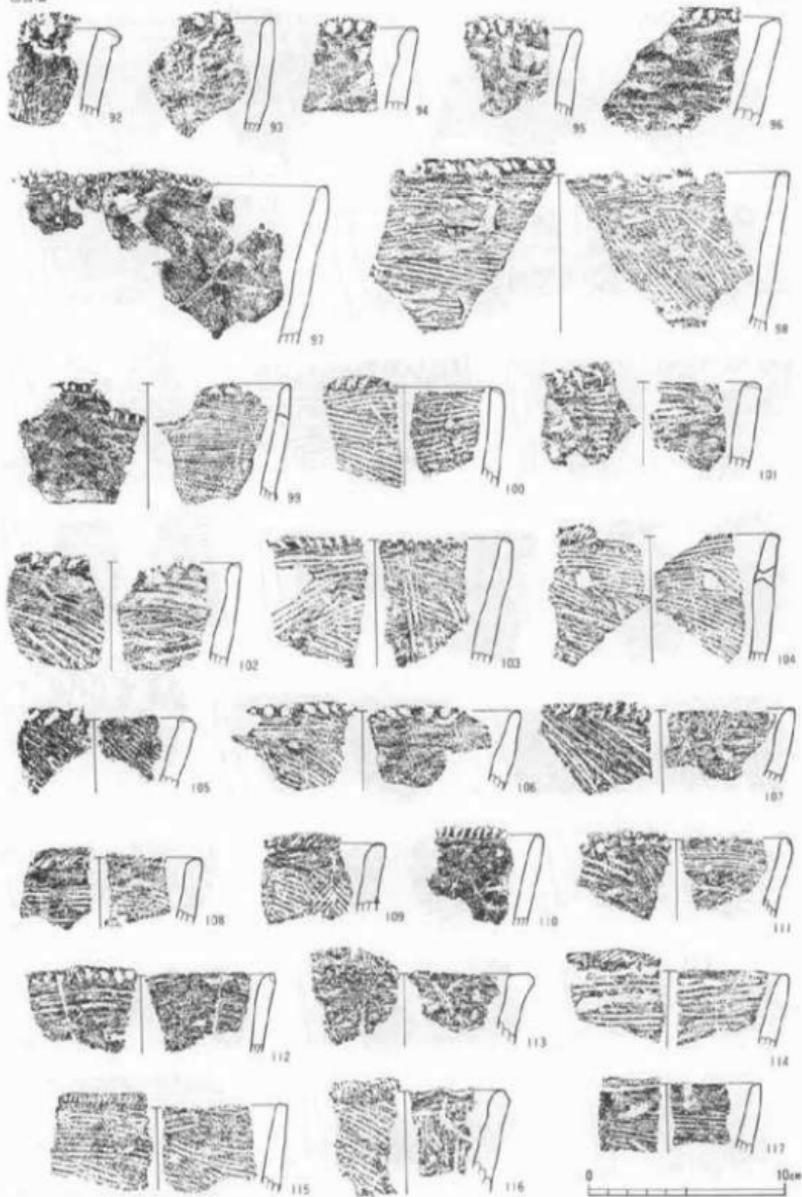


第204圖 早期出土遺物30

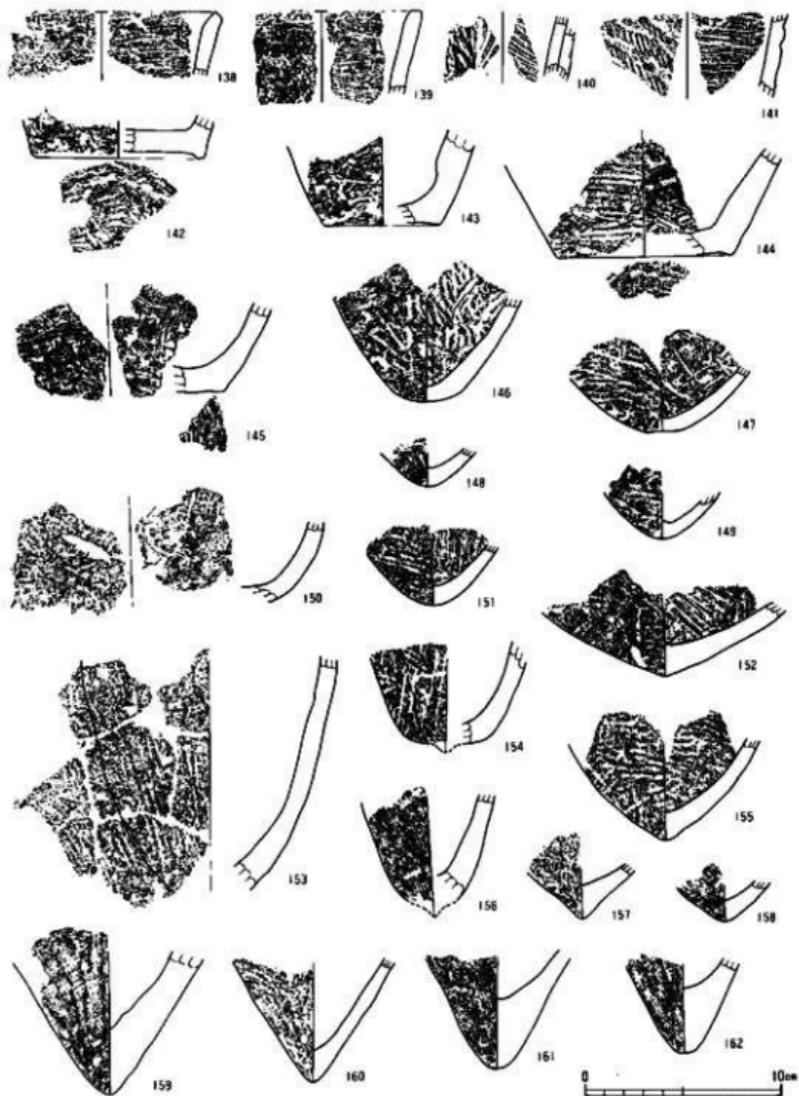


第205组 早期出土器物

器次第



第206图 早期出土器物



第207图 早期出土器物

## 2、前期

### (1) 住居跡出土の土器

遺物の具体的説明を行う前に、花積下層式土器の分類について説明する。

#### A種 燃糸圧痕文。

当遺跡の土器は、燃糸をループ状に圧痕するものがほとんどであったが、円形刺突を伴うものも若干ながら出土している。口縁部の幅狭な文様帯に直線状ないしは弧状の燃糸側面圧痕が見られるものをAa種、ループ状の燃糸側面圧痕をもつものをAb種、厥手状の燃糸側面圧痕をもつものをAc種、円形刺突を伴うものをAd種と分類した。

#### B種 縄文。

縄文を施した土器のうち、単節縄文が施されるものをBa種、無節縄文が施されるものをBb種、組紐文が施されるものをBc種、2種類以上の施文法を複合して使用するものをBd種として分類した。

#### C種 貝殻文。

花積下層式土器を特徴づける施文法として、燃糸圧痕文と並んで貝殻文があげられる。ここでは次の3つに分類した。遺構出土の土器も、この分類に従って記述している。貝殻を土器の器面全体に、密になおかつ同一方向に施文するもので、貝殻の腹縁に近い部分を圧痕するものをCa種、貝殻の施文がかなり雑になり、全体にまばらで方向もそろわなくなるものをCb種、貝殻文独自の効果をねらったと思えるもので、貝頂部による圧痕を特徴とするものをCc種とした。

#### D種 集合沈線文。

折り返し口縁をもつ土器で、口縁部文様帯に集合沈線文を使用するものを一括した。

#### E種 網状文。

燃糸の網目状絡糸体を回転施文したものの。

#### F種 条痕文。

一見すると早期の条痕文に類似するが、胎土が全く違うほか、貝殻背圧痕がみられるもの。

#### G種 隆帯文。

隆帯そのものは他の文様要素と組み合わせられていることが多いが、ここでは隆帯そのものを中心としたもの。

#### H種 無文。

条痕文形土器の無文土器と似ているが、胎土が明らかに違い、なおかつ器形で判別できるもの。

以上、遺物の説明は遺構出土のものも包含層出土のものも、すべてこの分類によって説明している。

#### 006 (第208図)

小さい破片が少量検出されているのみである。1～3は表裏に条痕が施されている小破片で、流れ込みと思われる。4は貝殻文Cc種の胴部破片、5はLの無節縄文の胴部破片である。6は底部近くの胴部破片で、RLの単節縄文が施される。7は貝殻文Cc種の底部近くの胴部破片である。

#### 007 (第208図)

こも出土遺物は少なく、器面が荒れている土器がほとんどなので文様の判別が困難であった。1は貝殻文Ca種であろう。2・3はLの無節の羽状縄文が施文されている。4は貝殻文であるが、細かい分類はできない。口唇上にも貝殻の圧痕がある。5・6はRの、7はLの無節縄文である。8は上半分に原体RLによる単節縄文が、下半分に原体LRによる単節縄文が施されており、結果として羽状縄文のような効果を上げている。(以下、このような施文法を異原体の縄文による羽状縄文と説明する)。9・10は貝殻文Cb種である。

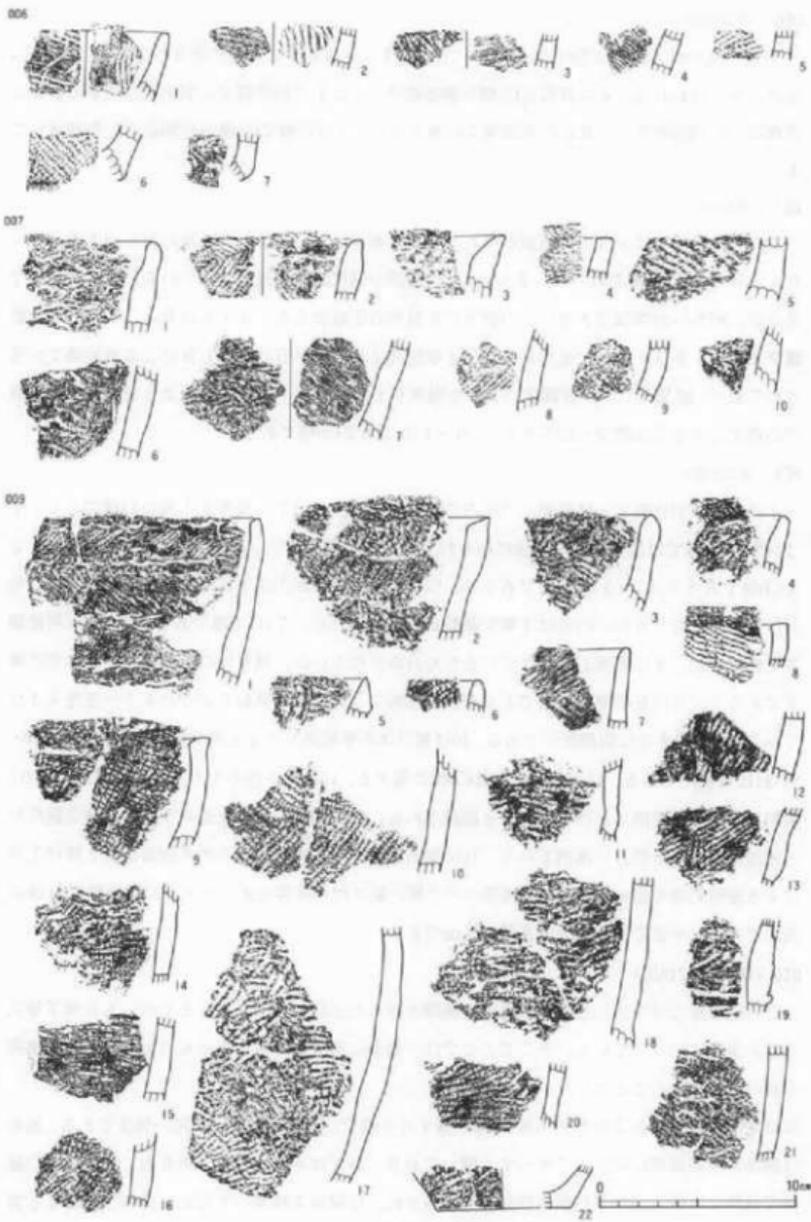
#### 009 (第208図)

1は無節の羽状縄文と結節縄文の組み合わせである。2～7は貝殻文土器の口縁である。2は貝殻文Ca種で口唇上が内ぎざに削られて貝殻が圧痕されている。口縁はやや内湾する。3はCb種であろう。4・5はCb種であるが、口唇上にも貝殻が圧痕されている。6は縦方向の貼り付け隆帯をもつもの。内面は丁寧な調整が施されている。7はCb種である。8・9は無節縄文を施すもの。8は器面が磨耗しているため分りにくいが、異原体の無節縄文のよる羽状縄文であろう。9はRの無節縄文であるが、一回施文された後、重ねるようにもう一度施文されている。10～22までは胴部破片である。10は異原体の単節縄文による羽状縄文である。11～18・20・21は貝殻文である。14はCc種、他はCb種に属する。16はやや張りをもった胴部破片であり、胴部下半部から底部にかけての部分と推測される。18・20はやや外反がみられ、深鉢の胴部から頸部にかけての部分と推測される。19は燃糸圧痕文で、ルーブ状の燃糸側面圧痕と棒状工具による連続刺突を組み合わせ、文様帯の下に細い貼り付け隆帯をめぐらす。23は貝殻文Cc種の底部である。平底であり、推定底径は7cmである。

#### 010 (第209～210図)

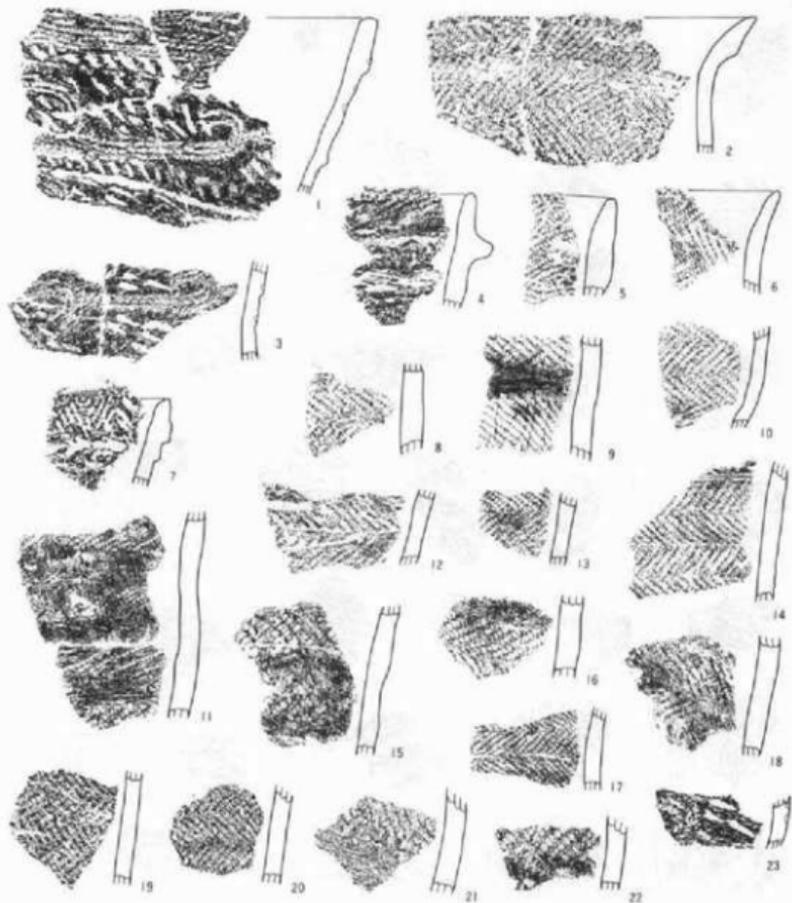
この住居跡には先述したように多量の焼物を伴った土坑が検出され、そこからも花壇下層式土器が多量に出土している。そこでここでは、両者に密接な関係があるものとして考え、遺物も続けて掲載することにした。

<住居跡本体> 1と3は燃糸圧痕Ac種に属する土器で、接合はしないが同一個体である。器形は胴部から口縁部に向かってまっすぐ開いており、外反はみられない。折り返し口縁上の口縁部文様帯には横方向の平行燃糸側面圧痕が施され、口縁部文様帯の下部には棒状工具による連続刺突が施される。胴部の文様は厥手状の燃糸側面圧痕と連続刺突との組み合わせであるが、



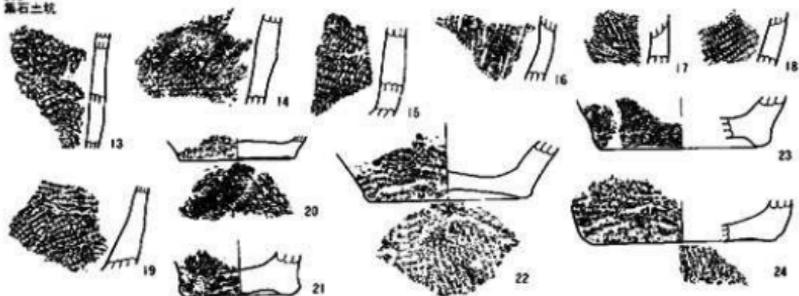
第208図 前期出土遺物(1)

010

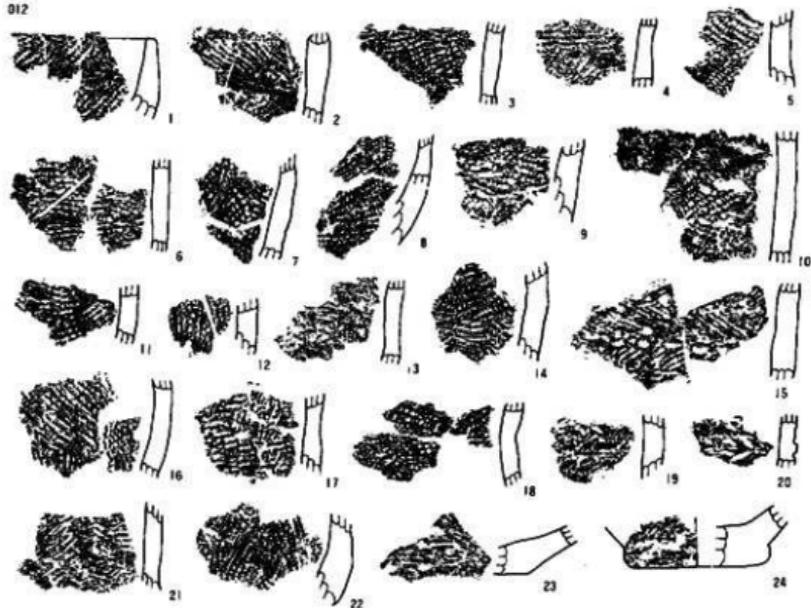
010  
黒石土坑

第209図 前期出土遺物(2)

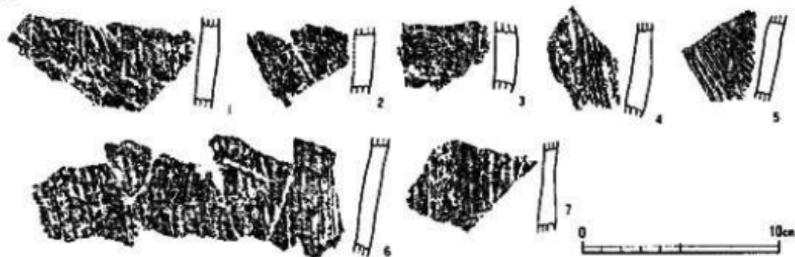
010  
黑石土坑



012



017



第210图 前期出土遗物(3)

燃糸は横方向に圧痕されており、連続刺突との組み合わせもさほど緊密ではない。この遺跡ではこのような文様は他にみられず、時期的な違いを想定させる。隆帯上には斜めのキザミがみられる。2は折り返し口縁をもつ口縁部で、同一原体を縦横直角に旋転して羽状縄文としている。4は口縁直下に隆帯をもつもので、胴部にRの無節縄文がわずかにみられる。5はかなり上下幅の大きな折り返し口縁の一部で、LRの単節縄文が施される。6は異原体の単節縄文による羽状縄文が施される。7は集合沈線が施された折り返し口縁をもつもので、縦方向の貼り付け隆帯がつき、ハの字状の刺突がみられる。また、口縁直下には貼り付け隆帯がめぐり、折り返し口縁と貼り付け隆帯のあいだに斜めの刺突が施される。8～24までは胴部破片である。8・10は異原体の単節縄文による羽状縄文である。9はRの無節縄文を施した後、帯状の磨消部分を幅1.5cmほど横方向にめぐらしている。11では羽状縄文の上部に横方向の燃糸側面圧痕がみられ、そこより上が燃糸側面圧痕と連続刺突の組み合わせになることが推定される。12～14は異原体の単節縄文による羽状縄文を施すもの。15は異原体の単節縄文を、やや間をとって施文しているもの。原体はかなり太い。16～20も異原体の単節縄文による羽状縄文を施すもの。22はRの無節縄文が施されるもの。23は1と同一の厥手状の燃糸側面圧痕の土器である。

<集石土坑> 1は単節縄文の口縁である。口縁部にはLR縄文を、胴部にはRL縄文が施される。2～4は貝殻文の口縁部である。2・3はCb種、4はCc種である。4には口唇上にも貝殻の圧痕がみられる。5～19は胴部破片である。5～8は燃糸圧痕文で、ループ状の燃糸側面圧痕と連続刺突を組み合わせるもの。ただし、6～7は住居跡本体の1・2と同じ文様構成をとるが、5はより均整がとれたループ状圧痕文である。9は磨耗が著しくて分かりにくいが無節の羽状縄文になろう。10は異原体の単節縄文による羽状縄文である。11～19は貝殻文である。11～15はCb種、16・17はCc種、18・19はCa種である。20～24は底部である。20は推定底径6cmの平底で、底面に貝殻文を施す(Cb種)。21は推定底径6cmの上げ底である。22は推定底径8cmの上げ底で、底面に貝殻文を施す(Ca種)。23は推定底径8cmの上げ底である。24は推定底径9cmの平底で、底面に貝殻文を施す(Cb種)。

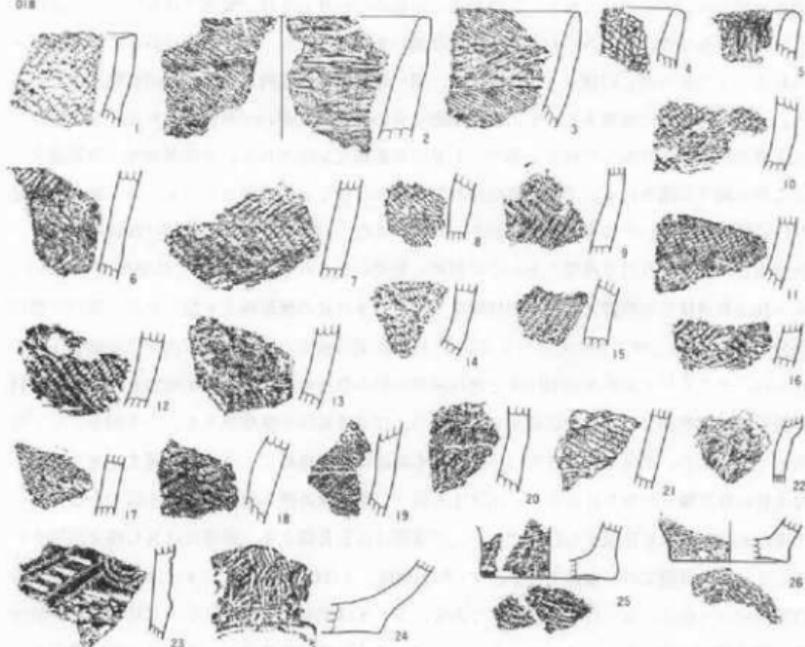
#### 012 (第210図)

1は単節縄文の口縁である。3・4・6～9・11～14・16～18・21・22は貝殻文の胴部である。ほとんどがCa種であるが、13はCc種、22はCb種に属する。2・5・10・15は異原体の縄文による羽状縄文が施される胴部破片で、2・15は無節縄文、5・10は単節縄文が使用される。19・20は燃糸圧痕文で、20は刺突列を伴う隆帯をもつものである。23・24は底部破片である。

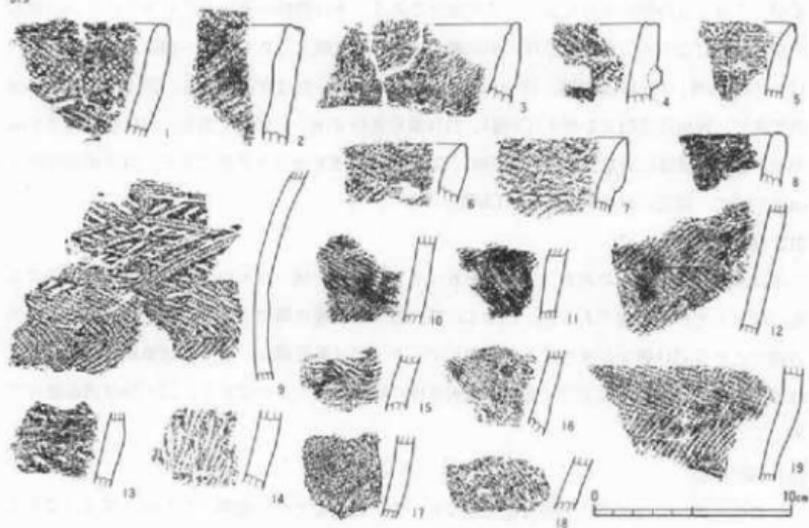
#### 017 (第210図)

この住居跡からは前期の土器は出土しなかった。形状などから前期としたが、確定はできない。1～7の土器はいずれも器面に条痕を施すもので、早期に属するものが流れ込んだと考え

018



019

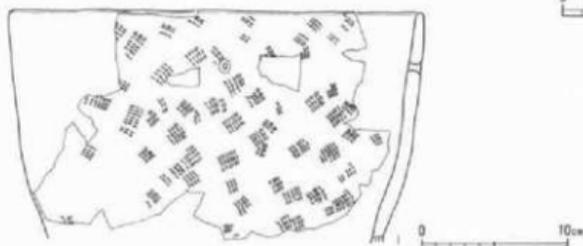


第211圖 前期出土遺物(4)

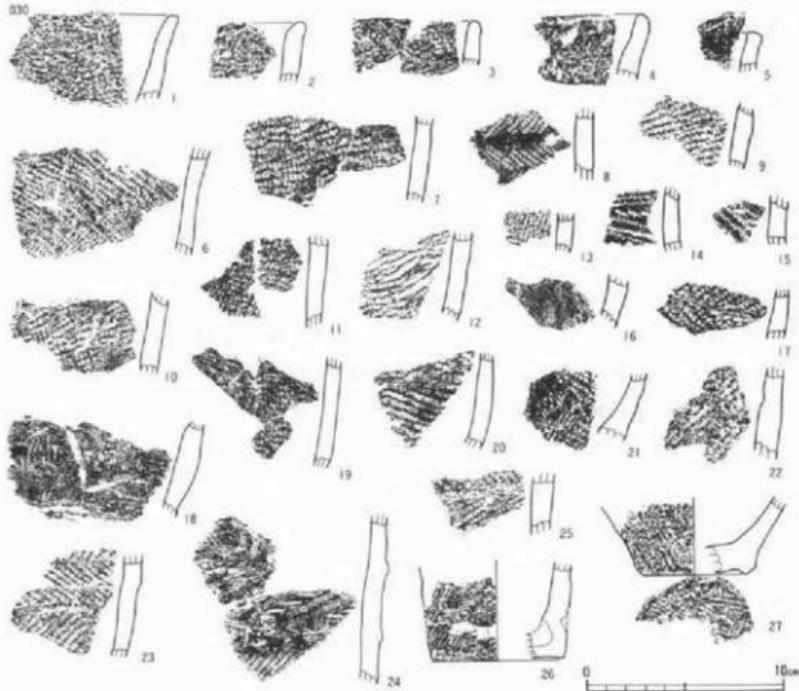
019



020



030



第212图 前期出土遺物(5)

られる。6は深鉢の胴部に当たるものであるが、底部から口縁に向かってゆるやかに広がる器形になるものである。

#### 018 (第211図)

1は異原体の単節縄文による羽状縄文を施すもので、波状口縁になるものである。口唇上を平らにそぎ落とし、やはり同一原体による文様を施す。2・3はRの無節縄文である。口唇上を平らにそぎ落とし、無節縄文を施す。内面にはヘラによるミガキ状の調整を横方向に施す。3は2よりさらに細い異原体の無節縄文を使用した羽状縄文である。拓本の見にくい部分は、表面の剥落によるもの。4は無節のR縄文を施すもの。5は貝殻文Cbである。6～23は胴部破片である。6・16・18～22は無節縄文で、6・19・20・21はR縄文、16・18はL縄文である。7～15・17は単節縄文で、7・8・10・13～15・17はLR縄文、9・11・12はRL縄文である。22と23は燃糸圧痕文である。いずれもループ状の燃糸側面圧痕を施すもので、23は連続刺突とキザミをもつ隆帯との組み合わせとなっている。24～26は底部で、いずれも貝殻文である。24の胴部はCb種で、底面は無文である。25・26は胴部、底面とも施されるもので、25はCb種、26はCc種である。

#### 019 (第211～212図)

1～8は口縁部破片である。1はLRの単節縄文を施すもので、口唇上も縄文を施す。2は貝殻文で口唇上にも施される。3はRの無節縄文であるが、表面の磨耗が著しい。4はRLの単節縄文であるが、口縁直下に隆帯をめぐらし、その上にも縄文を施す。口唇上も平らにそぎ落として縄文を施す。5は磨耗が著しくて分かりにくい、貝殻文と思われる。6も磨耗が著しいがRの無節縄文であろう。7は折り返し口縁になるもので、口縁上にRの無節縄文を施す。口縁下の段の部分には棒状工具による連続刺突を入れる。8はLの無節縄文を施すもの。9～20は胴部破片である。9は燃糸圧痕文と単節縄文で構成されたものである。燃糸圧痕文はループ状の側面圧痕と連続刺突とを組み合わせるもの、縄文は異原体の単節縄文による羽状縄文的である。燃糸圧痕文の部分と縄文の部分とのあいだに隆帯はない。10・11は9と同一個体である。10には燃糸側面圧痕と単節縄文が、11には単節縄文のみが施される。12はLRの単節縄文の土器である。13は燃糸圧痕文であるが磨耗が著しく分かりにくい。14～17は貝殻文である。17はCc種、他はCb種である。18・20はLRの、19はRLの単節縄文である。21～23は底部破片である。21は胴部にRLの、底面にLRの縄文を施す。23は胴部に貝殻文を施すものの、底面はヘラなどによる調整が加えられるだけで、文様は施されない。

#### 020 (第212図)

1は貝殻文の深鉢である。推定口径28cm、残存器高は15.5cmである。器形は口縁部が若干開き気味ながらもほぼ鉛直に立ち、胴部に下がるにしたがってだんだんすぼまっていく。文様分類はCb種で、内面は軽いナデが施される。補修孔が一ヶ所認められる。

### 030 (第212図)

1～5は口縁破片である。1・2・3は同一個体で貝殻文Cb種、4は磨耗が著しく詳細不明、5もCb種で口唇上にも圧痕される。7～25は胴部破片である。6・8・17・23・25は単節縄文を施すもので、燃りの方向は17・25がLR、他の3点がRLである。20はRの無節縄文を施す。14・15・24は燃糸側面圧痕を施すもので、いずれもループ状の圧痕と棒状工具による連続刺突との組み合わせである。24は文様構成が分かる資料で、比較的幅の狭い文様帯をキザミのない隆帯で区切るもの。下側はLRの単節縄文である。7・9～12・16・18・19・21・22は貝殻文である。そのうちCa種は8・10・11・13、Cb種は12・22・23、Cc種は17・19・20となる。この住居跡の貝殻文Cc種は、貝頂部をわずかに圧痕するのが特徴である。26・27は底部である。両方ともわずかに上げ底気味の平底で、胴部、底面とも貝殻文が施される。26はCc種で、27はCa種となる。27では底面の調整に貝殻の頂部を使用している。

### 031 (第213図)

この住居跡からは縄文を施した土器が多く出土した。1・2は異原体の単節縄文の羽状縄文である。3はLの無節縄文である。4からは胴部破片である。4は燃糸圧痕文である。5・14・19はLRの、17・18・20はRLの単節縄文である。6・8・11は異原体の無節縄文による羽状縄文、7・9・15・21は異原体の単節縄文による羽状縄文である。10・12・16は貝殻文で、いずれもCb種となる。

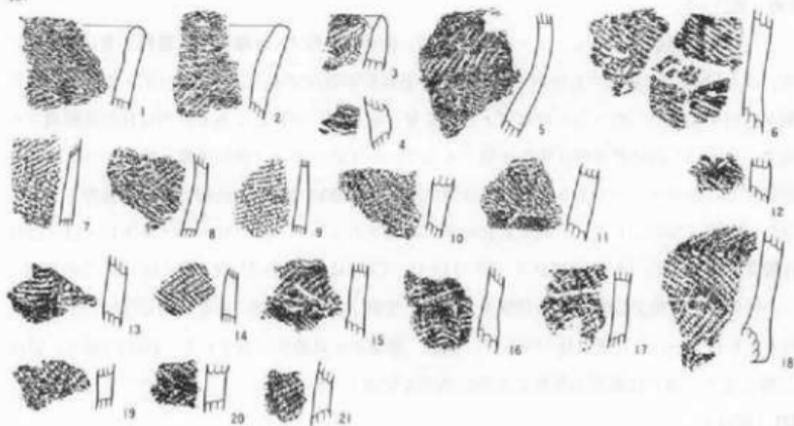
### 032 (第213図)

1～8・12は口縁部破片である。1はRの無節縄文で口唇上にも施す。2・6は単節縄文で、2はRL、6はLRである。3・5は集合沈線を施す折り返し口縁の土器で、3は口唇上を平らにそぎ落とし、棒状工具でキザミを入れる。4・7・8は貝殻文で、いずれも外反した口唇を外そぎ状に削り、貝殻を圧痕する。12は燃糸圧痕文である。上下を隆帯で区切られた幅狭な文様帯に、直線状ないしは弧状の燃糸側面圧痕がみられるものである。下側の隆帯の下には同様の文様が配されたと思われる。拓影図では分かりにくいですが、口唇部と隆帯の間には横方向の燃糸側面圧痕が施される。燃糸圧痕文Aa種と分類した。9～19は胴部破片である。9はLRの単節縄文と貝殻文の併用である。縄文は一条転がすだけで、空いた部分にまばらな貝殻文がみられる。10・11・13～16は貝殻圧痕文で、10・11・13・14・16はCb、15はCcである。17～19は縄文を施すもので、17・18はLRの単節縄文、19はRの無節縄文である。20は底部で、底面のみ残存しているものである。底面は貝殻文である。

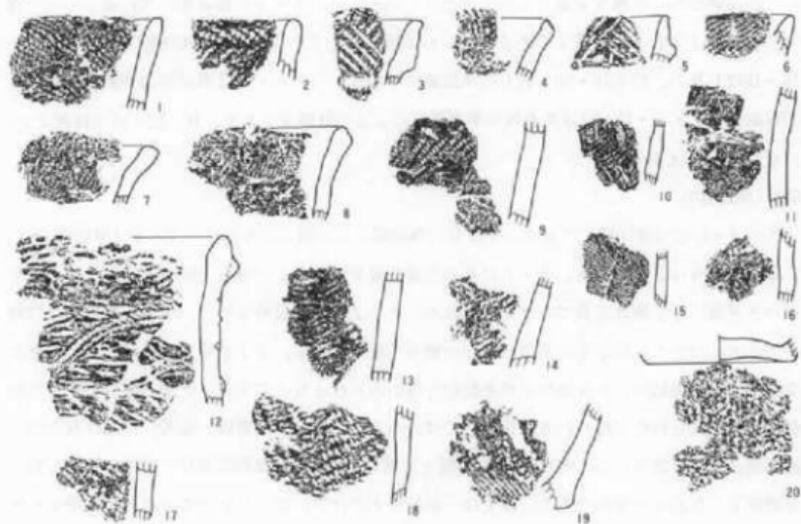
### 045 (第213図)

遺物の出土量は少なかった。1は磨耗が著しく文様の判別が難しい。円形の貼り付け隆帯がみられ、その外側は集合沈線、内側は貝殻文と思われる。2・4～6はRLの単節縄文で、4～6は同一個体である。3・8は貝殻文である。7は燃糸圧痕文であるが、磨耗が著しく文様

031



032

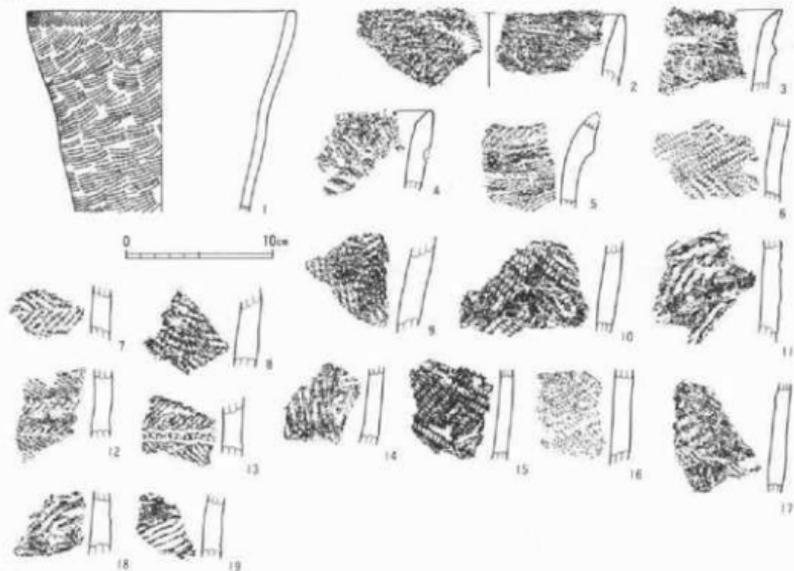


045

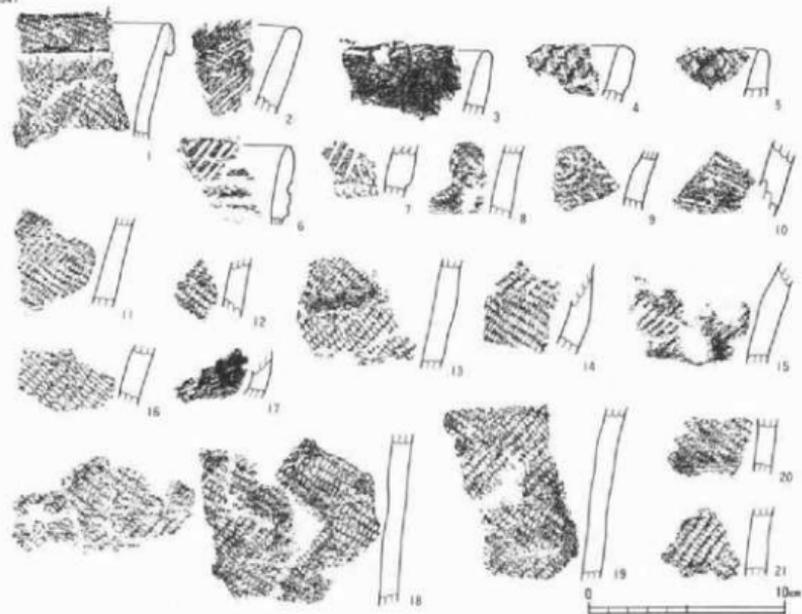


第213図 前期出土遺物(6)

046



047



第214圖 前期出土遺物(7)

の構成は不明。

#### 046 (第214図)

1は埋設されていた上器で、貝殻文が施文された深鉢である。推定口径は約18cm、残存器高は14cmである。貝殻文は口唇直下に帯状にめぐらし、その下の胴部にかけては方向が統一されるように密に施文される。縄文施文を意識したものであり、Ca種である。2は貝殻文であるが、磨耗が著しく判別は難しい。内面にも貝殻の圧痕がみられる。3は燃糸圧痕文であるが磨耗が著しい。4はかなり太いLの無節縄文である。5は折り返し口縁で、口縁部文様帯に単節縄文を、胴部に燃糸側面圧痕を施すもの。口縁部の縄文はLRで、胴部の燃糸側面圧痕はループ状になると思われるが、棒状工具による連続刺突はみられない。7・10はRLの単節縄文である。8・9・14は貝殻文である。11はLの無節縄文である。12・15・16はLRの単節縄文である。13・17・18・19はLの無節縄文と入り組み文の組み合わせである。17は2と同様の太い原体を使用する。

#### 047 (第214図)

1は上下幅の狭い折り返し口縁にRLの単節縄文を施文するもの。折り返し部分の貼り付け状況が分かる資料である。2はLの燃糸圧痕文である。3は貝殻文Cb種である。4・5はLの無節縄文で、太い原体を使用する。6・7は集合沈線である。6は口唇より2cmほど下に棒状工具による押し引き状の連続刺突が入るが、器面が荒れているため図ではよく分らない。7は口縁自体は残存していないが、集合沈線の施文状況から口縁部付近と推定できる。8～21は胴部破片である。8・18～21はRLの単節縄文で、18～21は同一個体である。9・10は燃糸圧痕文で、いずれもループ状に圧痕される。11・12～14・16はLRの単節縄文である。15はLの無節縄文である。17は貝殻文である。

#### 048 (第215図)

1は単節縄文の施された深鉢である。推定口径は約27cm、復元器高は10.5cmである。異原体の単節縄文による羽状縄文であるが、それぞれの原体の粒の大きさがかなり違っているが目立つ。また、内面にもRLの単節縄文が施される。口縁部が鉛直に立ち、胴部が下がるにしたがってだんだんすぼまっていく器形をしている。2～15は口縁部破片である。2・3は同一個体であり、LRの単節縄文を施す。原体はかなり細い。4はRL、5はLR縄文を施す。5は折り返し口縁になるもの。6・7は貝殻文である。8は折り返し口縁をもつ燃糸圧痕文であるが、口縁部は剥落している。9はLR縄文を施す。10は折り返し口縁の土器で、口縁部に集合沈線を、胴部に燃糸側面圧痕を施す。口縁部には隆帯を円形に貼り付け、内側には燃糸を円形に圧痕する。口唇上にはキザミがみられる。11はRLの単節縄文が施された折り返し口縁をもつ土器である。12～14は貝殻文である。15・32はRの無節縄文である。16は燃糸圧痕文であるが、10とは違い口縁部には横方向の燃糸側面圧痕を施す。17～37は胴部破片である。17・25・

31・34はLRの単節縄文で、34は1と同一個体である。18～24・27・28は貝殻文である。18～20・27は小さめの貝殻の頂部を細かく圧痕していくもので、Ca種になる。21～24・28は大きめの貝殻を使用するもので、21～23はかなり密に圧痕するCa種、24と28は同一個体で、まばらに圧痕するCb種である。26・29はLの無節縄文で、両者は同一個体ある。30は単節縄文と思われるが、磨耗が著しく判別は不可能。33は異原体の無節縄文による羽状縄文である。35～37は燃糸圧痕文である。いずれもループ状に圧痕するもので、37では文様帯の境に隆帯を使用される。なお、35と37は同一個体である。38は平底の底部である。側面、底面ともRL縄文が施される。

#### 049 (第216図)

この住居跡からは条痕文土器が多量に出土したが、いずれも早期のものであるため、すべて包含層の項に掲載した。1はふくらみをもった胴部破片で、異原体の単節縄文による羽状縄文が施されたものであるが、すぐ左側には逆燃りの原体の単節縄文が施されている。全体としては縄文が菱形になるように施されていると思われる。2はLRの単節縄文が施されたもので、1と同一個体の可能性がある。3・4は同一個体で、RLの単節縄文が施されている。5はRLの単節縄文が施される。6～8・10は貝殻文である。9・10は異原体の縄文による羽状縄文で、9は単節縄文、11は無節縄文が使用される。12は平底の底部である。側面にはRの無節縄文が施される。

#### 055 (第216図)

1は貝殻文でCb種である。2はLRの単節縄文である。3はRの、4はLの無節縄文である。

#### 056 (第216図)

1は貝殻文であるが、磨滅が著しい。2は単節縄文による羽状縄文である。縄文施文後に帯状に磨滅しているため、異原体の単節縄文を交互に施文しているか、羽状縄文になる原体を使用しているかどうかは不明。3はRLの単節縄文を施するもの。

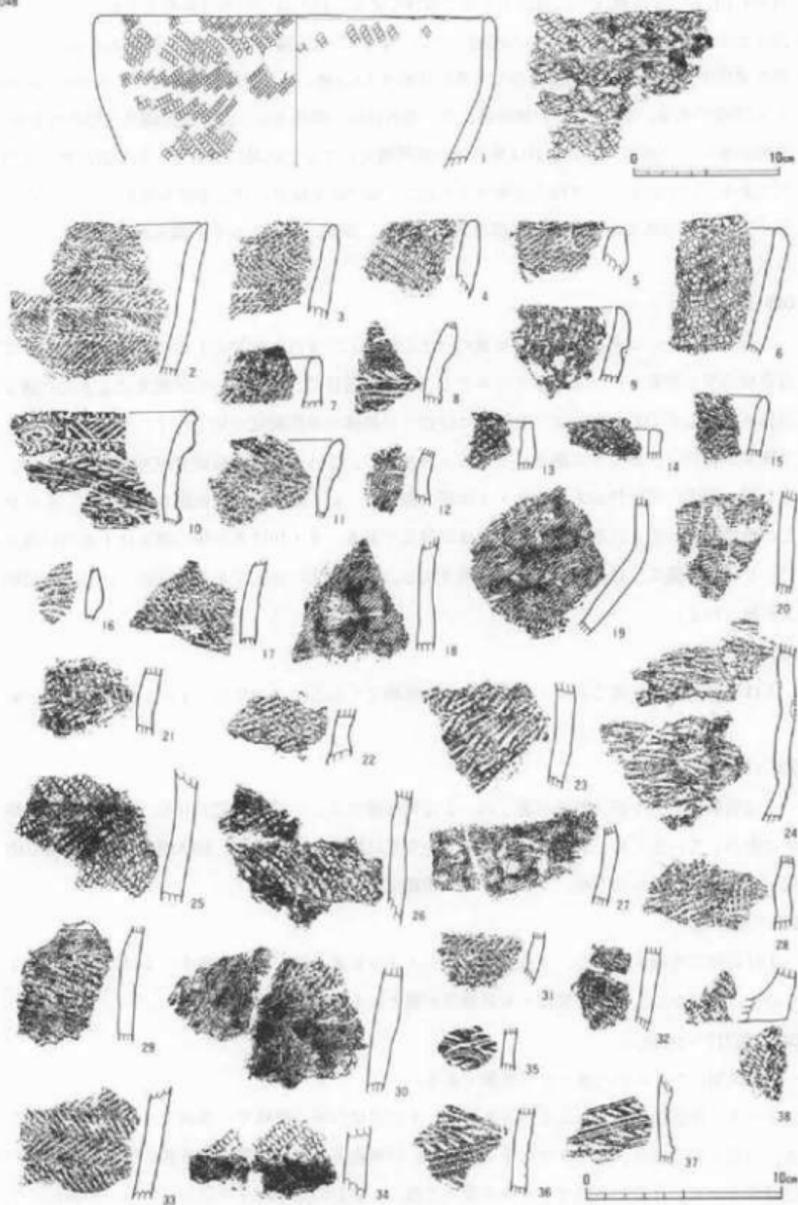
#### 057 (第216図)

1は貝殻文を施するもの。2はRLの、3・4はLRの単節縄文を施す。5は底部で、かなりの上げ底になる。側面、底面とも貝殻文が施される。

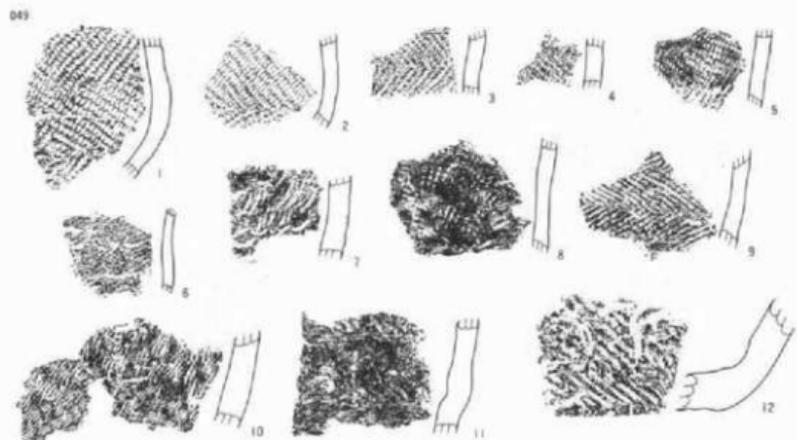
#### 043 (第217～218図)

黒浜式期につくられた唯一の住居跡である。

1～6は器形復元ができるものをあげた。1は波状口縁の深鉢で、頸部でくびれるものである。口唇を肥厚させ、外そぎ状に平らに削る。口唇直下に半截竹管による押し引き文を施し、口縁部文様帯には附加条縄文を方向を変えて施し、菱形の効果を生み出している。頸部には半截竹管によるコンパス文がみられる。波頂部口径は推定約21cmで、残存器高は12cmである。内

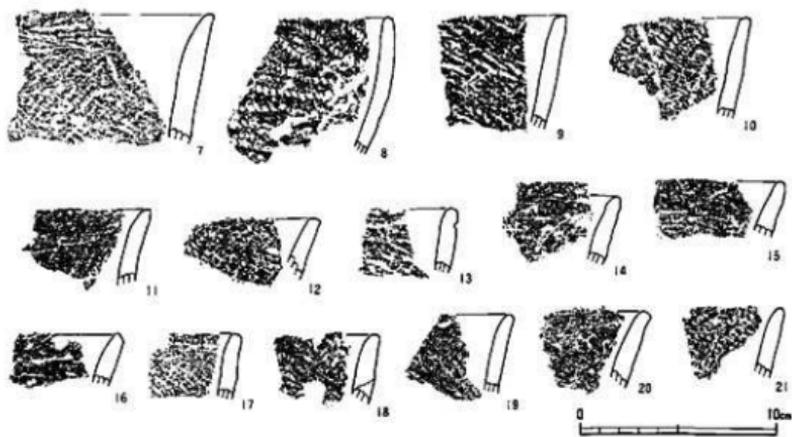
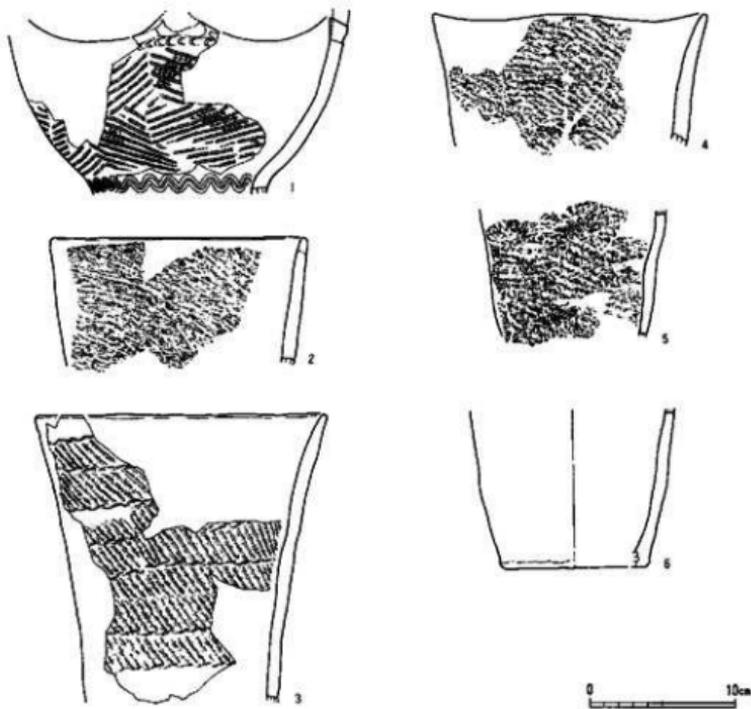


第215图 前期出土器物

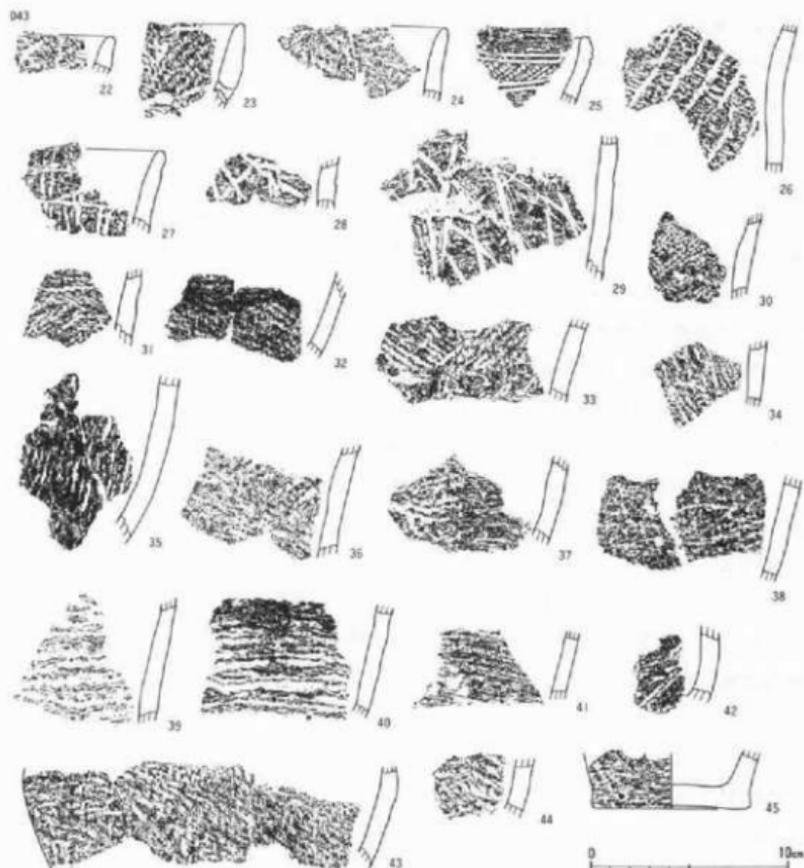


第216図 前期出土遺物⑨

面に丁寧な調整がみられ、他の土器と比べると遺存状況は良好である。2は平縁の深鉢で、口径は推定約17cm、残存器高は8.6cmである。Rの無節の附加条縄文が施され、口唇上にも縄文が施される。繊維の混入は多いが、内面は丁寧な調整が施されており、遺存状況は良好。3は平縁の深鉢で、口径は推定約20cm、復元器高は19cmである。Rの無節縄文が施される。4は若干の波状口縁を呈する深鉢で、器形はわずかに外反する。口径は推定19cm、残存器高は9.2cmで、Rの無節縄文が施される。繊維の混入が多く、焼成は不良。5は胴部が残存する深鉢で、復元



第217区 前期出土遺物(10)



第218図 前期出土物10

器高は約9cmである。大部分はRの無節縄文が施されるほか、上側には附加条縄文が施されている。6は底部付近の胴部破片である。底径は推定10cm、残存器高は10.7cmである。器面にはヘラなどによる調整痕はあるが、文様は特でない。7～27・29は口縁部破片である。7はLRの単節縄文を施すもの。8は縄文圧痕である。9はRの無節縄文で、口縁部はややすぼまって直立気味になる。10・12はLRの単節縄文。11はLの無節縄文であるが、表面に軽く転がされているため文様は分かりにくい。13は口縁直下に細い沈線が入る。表面が磨滅しているため、それ以外の文様は不明。14・15は縄文施文と思われるが、表面が磨滅しているため不明。16～20はRの無節縄文。18には補修孔があげられる。21・22はLRの単節縄文。23はLの無節縄文であるが、図の下部に見える補修孔より右側は横方向に施文し、左側は縦方向に施文している。

24はRの無節縄文。25はLR縄文施文後に半截竹管による横方向の沈線を二条入れる。口縁はやや内湾する。繊維の混入は少なく、内面がかなり丁寧に調整されているため、他の土器とはかなり異なる印象を受ける。26はLRの単節縄文を施す。27～29は同一個体である。棒状工具による沈線を縦横にめぐらす。30・31・34は撚糸側面圧痕の土器。32はRの、33はLの無節縄文である。32では上半分に横方向のナデが施されていて、無文帯となっている。33は全体的にナデが施され、一部縄文が磨消されている部分もある。35～37は無節縄文である。35は左側にRの、右側にはLの無節縄文を使用している。横方向の無文帯の下側は逆撚りの無節縄文を施している。なお、32・33・35の各資料は、内面はかなり丁寧な調整が施されている。36はRの、37はLの無節縄文を使用している。38・39はいずれも縄文と思われるが、器面が磨滅しているため詳細は不明。40・41は半截竹管による平行沈線を施すもの。いずれも横方向に数条施文するが、これも磨滅が著しく詳細不明。42・43は縄文圧痕である。44・45は同一個体で、Rの無節縄文である。やや張りをもった胴部である。46は底部で、底径は推定約8cmである。胴部にRの無節縄文が施される。底面には特に文様はない。

## (2) 土坑出土の遺物

### P037土坑 (第219図)

遺物の量は少ない。1は内・外面ともヘラ状工具による調整が施されたもの。繊維の混入はやや少なめ。2はRの無節縄文が施されるもので、繊維が多量に混入する。

### P052土坑 (第219図)

遺物の量は少ない。1・2とも貝殻文が施された胴部破片で、繊維の混入が多い。1はCa種、2はCc種である。

### P053土坑 (第219図)

1はLRの単節縄文が施された胴部破片。張りをもった胴部で、やや引き締まった頸部と外反する口縁部をもつものと思われる。2は1よりやや上部にあたると思われる個体で、若干外反している。いずれも繊維が多量に混入している。

### P055土坑 (第219～220図)

ここからはややまとまった出土がみられた。1・2は器形復元ができる個体である。1はLRの単節縄文が施された深鉢の胴部である。残存器高は約11cmである。底部から口縁部にかけて外反しながら広がっていく器形をしている。2は胴部から底部にかけての個体で、底径は推定6cm、残存器高は13cmである。胴部から口縁部にかけて外反しながら広がっていく器形をしており、底部は若干の上げ底である。外面にLの無節縄文が施されているが、磨滅が著しく全体の施文状況は不明。いずれの個体も繊維が多量に混入している。3・4は口縁部の破片である。3は口縁部に屈曲をもつもので、外面に貝殻文が施される。頸部から口縁部にかけての広がり方がかなり大きい。4はRの無節縄文が施されるもの。5～20は胴部破片である。5・9

は貝殻文で、内面はヘラ状工具による丁寧な調整が施される。6・7はRLの無節縄文、8・19はLRの単節縄文である。いずれの個体にも、内面にはヘラ状工具による丁寧な調整が施される。10はLRの単節縄文を施すものである。11・17・20は貝殻文で、内面はヘラ状工具による丁寧な調整が入る。12はRLの単節縄文を施すもの。13はRの無節縄文である。14は貼り付け隆帯をもつもので、地はLRの単節縄文である。内面はヘラ状工具による丁寧な調整が施される。15はRLの単節縄文で、内面はヘラ状工具による調整が入る。16はLの無節縄文が入る。18は捺糸瓦痕文で、貼り付け隆帯で文様帯を区切っている。21～23は底部破片である。21は底面がかなり大きく脇に張り出すもので、底面は若干の上げ底になる。底径は推定約7cm、残存器高は約4cmである。側面、底面とも貝殻が圧痕される。22は小型の底部である。底径は3cm、残存器高は2.5cmである。器面は磨耗しており、文様はよく分からない。23はかなり上げ底の底部である。底径は推定約8cm、残存器高は約3cmである。側面にLRの単節縄文が施されるほか、底面にはかなり丁寧な調整が施される。

#### P102土坑 (第220図)

出土遺物数は少ない。1は無文土器である。外面にヘラ状工具による調整がみられる。2はRLの単節縄文が施される。3はRの無節縄文が施されるが、軽く施文されているため拓本からは判別しにくい。4は内・外面とも条痕が施されるもの。胎土に繊維が多量に含まれており、早期の条痕文土器とは明らかに違う。5は底部である。底径は推定約10cm、残存器高は約3cmである。若干の上げ底となっている。側面には何らかの文様が施文されているようであるが、磨耗が著しくて判別はできない。

#### P145土坑 (第220図)

1～3は口縁部の破片である。1は折り返し口縁となるもので、全体に異原体の単節縄文による羽状縄文が施される。内面にも丁寧な調整が施されており、器面の状況は良好である。2はやはり折り返し口縁になるもので、口縁部の上下幅が比較的大きい。左半分にRLの単節縄文が、右半分にLRの単節縄文が施文される。内面はかなり丁寧な調整が施されるが、胎土に繊維がかなり多く混入しているため、かなりもろくなっている。3は口唇部は欠損しているが、折り返し口縁をもつものである。集合沈線になるとと思われる文様がみられる。4～12は胴部破片である。4はRLの単節縄文が施されるもの、5はRの無節縄文が施されるものである。6は無節縄文が施文されていると思われるが、磨減が著しく詳細は不明。7・12は貝殻文である。8は無文土器で、外面にはヘラ状工具による調整がみられる。9・10はRの無節縄文、11はRLの単節縄文である。

#### P157土坑 (第220図)

出土したのは胴部破片のみである。1・2は貝殻文である。3は磨減が著しく詳細は不明。4はLRの単節縄文、5はRの無節縄文である。

P-037



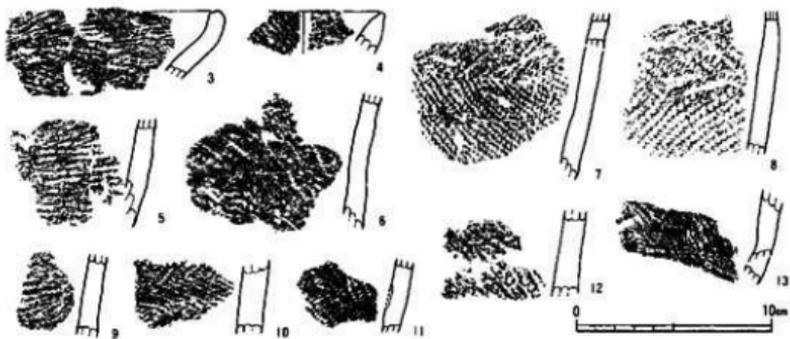
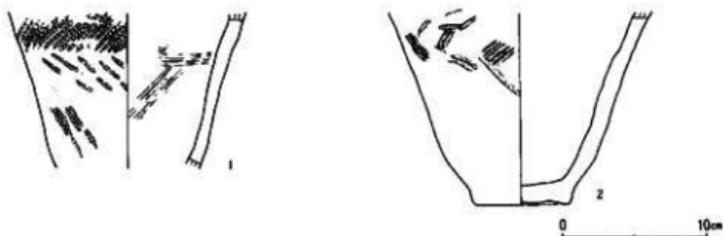
P-052



P-053

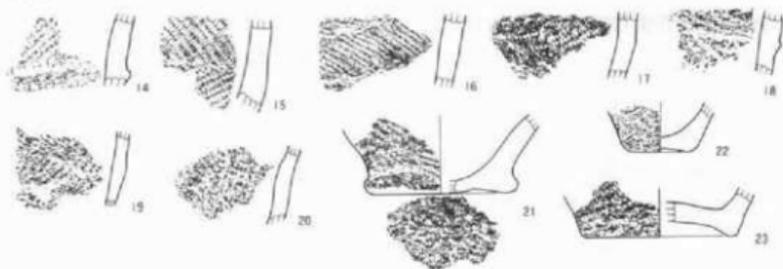


P-055



第219号 前期出土遺物(2)

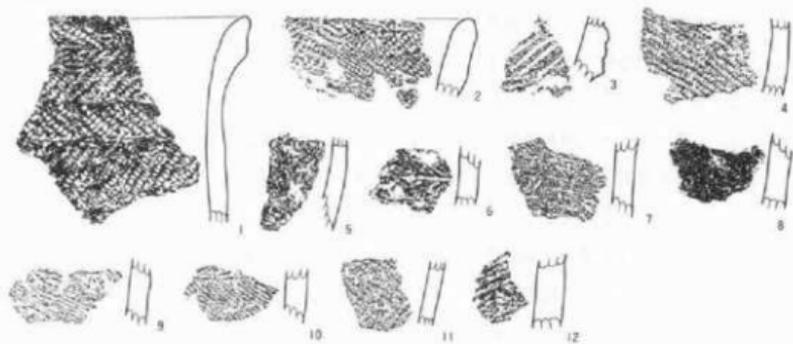
P-255



P-102



P-145



P-157



第220图 前期出土文物图

### (3) 包含層出土の土器

#### 第Ⅱ群第1類 花積下層式土器 (第221~233図)

当遺跡からは条痕文土器に次いで、前期初頭の花積下層式土器が大量に出土している。包含層出土の土器については、時間差を追って出土状況を確認するのが困難であったので、ここではこの項の最初に記載した施文上の特徴別に掲載することとした。

#### A種 燃糸側面圧痕を施すもの (第221~222図)

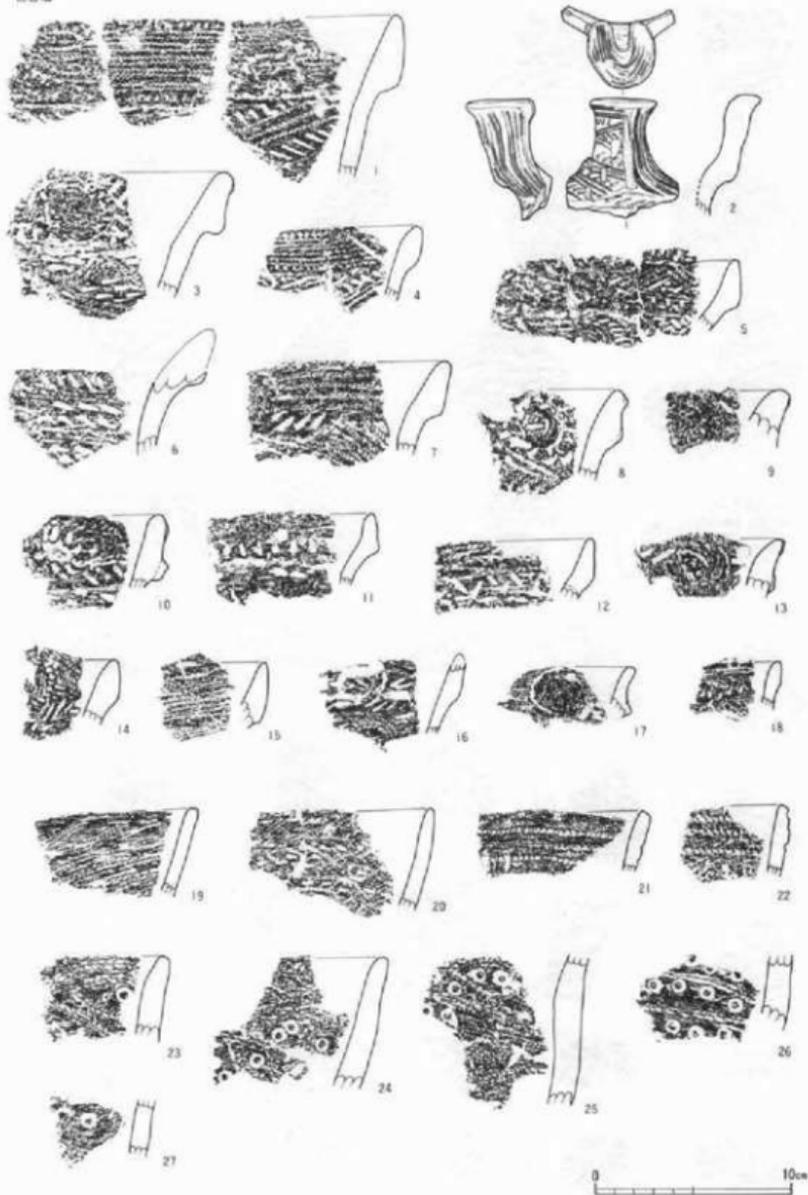
##### ①Aa種 (第221図19・21・22、第222図55)

いずれも折り返し口縁にならないものである。19は口唇直下に燃糸側面圧痕が施されるもので、燃糸側面圧痕は斜め方向に直線的に施されるだけで、ループ状にも蕨手状にもならない。21・22は平行燃糸側面圧痕がやや間をおいて横方向に施されるもので、口唇上は平らにそぎ落とされている。55は横方向の燃糸側面圧痕がなされるもので、21・22と同一個体と思われるが、全体の文様構成は不明である。

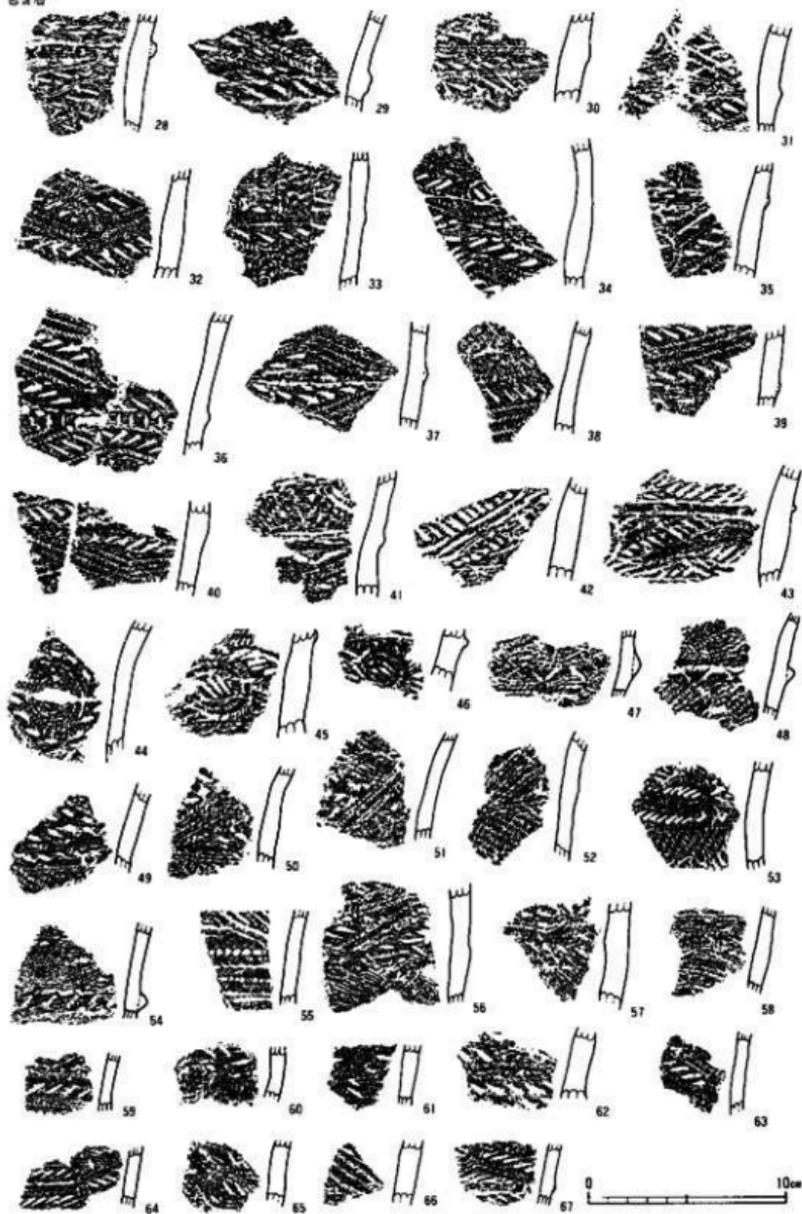
##### ②Ab種 (第221図1~18、第222図28~54・56~67)

1・4・7・15は折り返し口縁をもち、口縁部文様帯に横方向の平行燃糸側面圧痕を施す。胴部は棒状工具の刺突とループ状の燃糸側面圧痕の組み合わせとなる。2は把手である。向かって左側は連続刺突とループ状の圧痕との組み合わせ、右側は把手の先端から口縁に沿って平行に並んだ燃糸側面圧痕となる。把手の上面はU字形をしており、U字状に平行に並んだ燃糸側面圧痕が施される。3・7・8・10は折り返し口縁上にキザミをもつ円形の貼り付け隆帯を加えている。3・7・8の円形隆帯の内側には同心円状の燃糸側面圧痕が施される。5は折り返し口縁上の燃糸側面圧痕を鋸歯状に施すもので、棒状刺突も若干加わっている。6は折り返し口縁の段の部分より上が欠損しているものであるが、5と同様に折り返し口縁に棒状刺突がみられる。欠損部分は輪横みの部分であろう。11は口唇部がやや起立して、折り返し口縁が段状になっているものである。12も同様の口縁形態をもつもので、折り返し口縁下部に棒状工具によるキザミが鋸歯状にはいる。13は貼り付け円形隆帯をもつが、キザミは入らない。14も円形貼り付け隆帯がみられるが、その上に燃糸側面圧痕が施される。16も円形隆帯があり、その両側は刺突とループ状の燃糸側面圧痕で構成される。17は折り返し口縁の下部の段状部分がかかり強調されているもの。キザミがない円形貼り付け隆帯をもち、その内側には同心円状の燃糸側面圧痕が施され、外側には平行燃糸側面圧痕が施される。18には折り返し口縁下部にキザミ状の刺突がみられる。28~54・56~67は胴部破片で、そのほとんどがループ状の燃糸側面圧痕をもつものである。その中でも大まかに、文様帯の区切りの部分に隆帯をもつものと、もたないのとに分類できる。

文様帯の区切りに隆帯を用いるものは28~48が含まれる。いずれもループ状の燃糸側面圧痕と棒状工具による連続刺突とを組み合わせるものである。32~35、36~40、41~46、47・48は



第221圖 前期出土遺物16



第222圖 前期出土遺物

それぞれ同一個体である。文様構成自体は大きな違いはないが、文様帯の間にめぐらされる貼り付け隆帯には若干の違いがみられる。28～40の隆帯はやや太めで断面三角形を呈しており、直角ないしは斜めにキザミが入るものもある。41～46の隆帯はかなり細く断面は半円形である。キザミはみられない。47と48には鋸歯状のキザミが入る。隆帯が見られないものには49～53が含まれる。ループ状の燃糸側面圧痕と棒状工具による連続刺突で組み合わせられた文様帯の構成は基本的に変わりがないが、下側はすぐに単節縄文による施文がなされている。

### ③Ac種 (第221図20)

20は平口縁に燃糸側面圧痕が施されるもので、口唇直下に縄文が施され、その下に連続刺突を伴う燃糸側面圧痕が施されているものだが、文様は均整がとれておらず、ループ状になるよりは蕨手状になる可能性が強いため、ここに分類した。

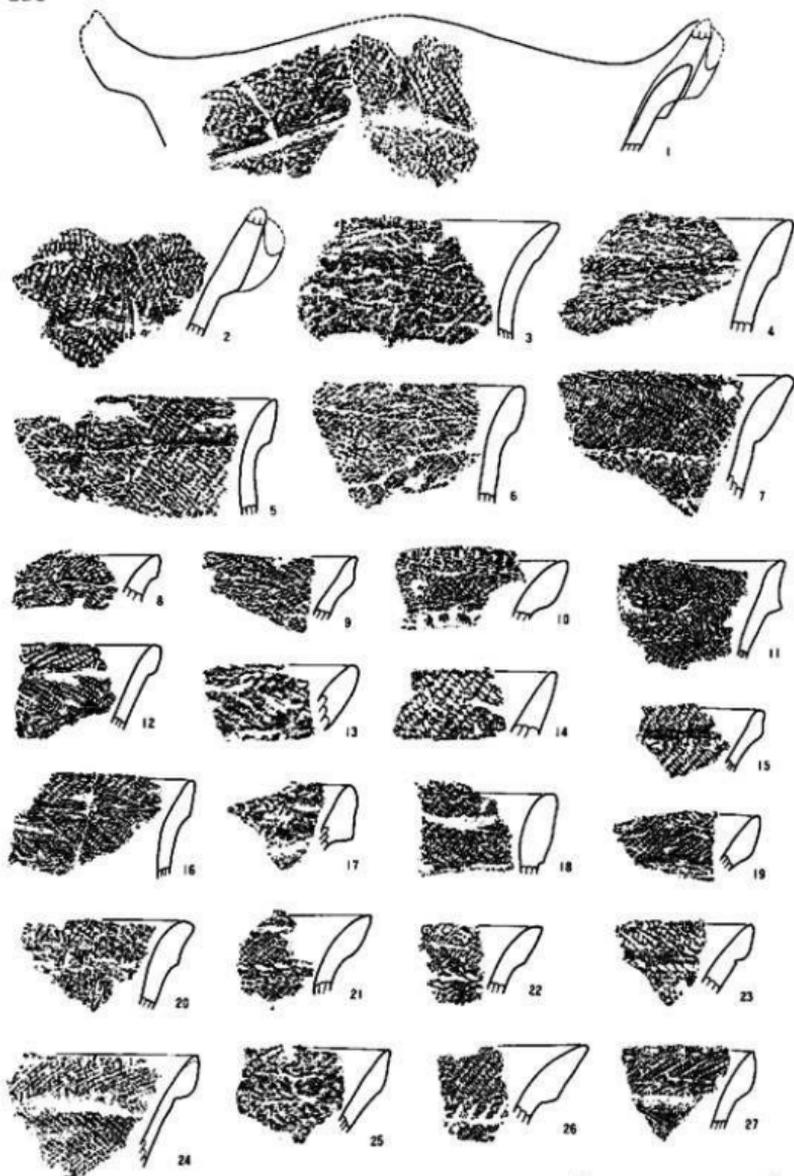
### ④Ad種 (第221図23～27)

23～27は円形刺突をもつものである。いずれも楕円状に燃糸圧痕状に沿うように刺突されている。これらはすべて同一個体である。

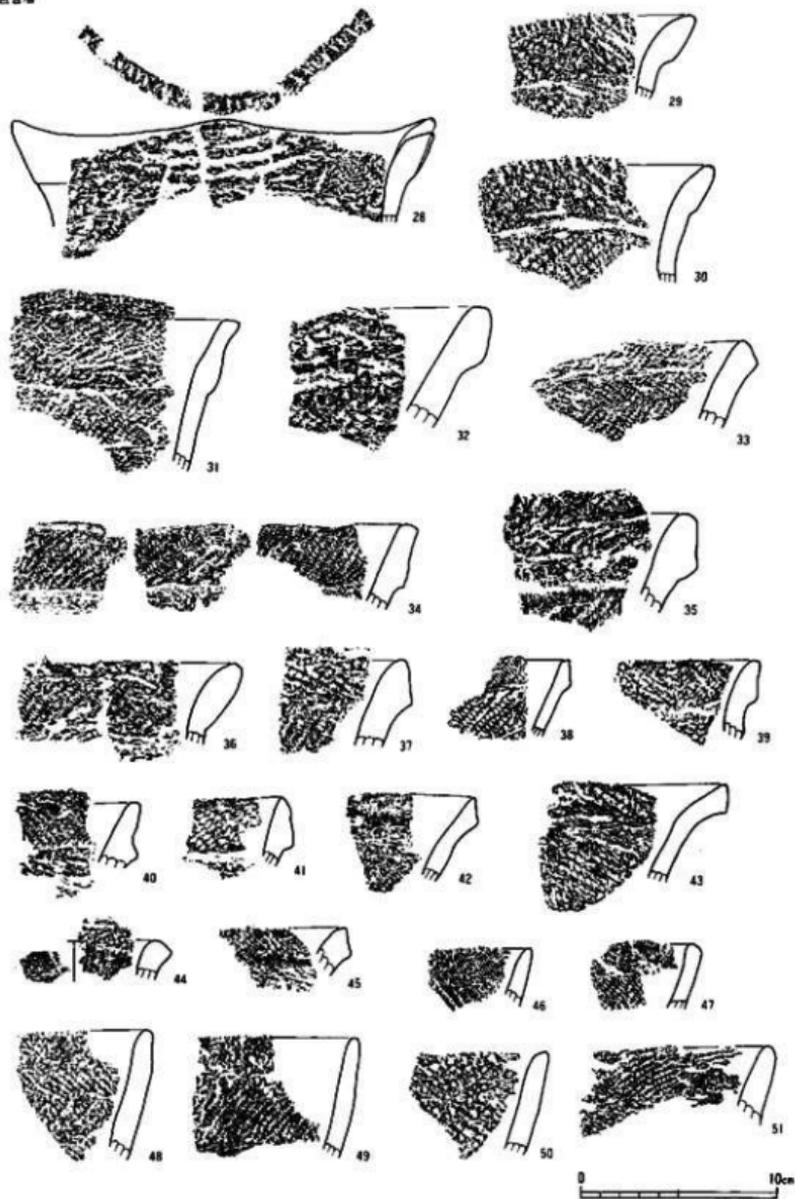
## B種 縄文を施すもの (第223～228図)

### ①Ba種 (第223～225図)

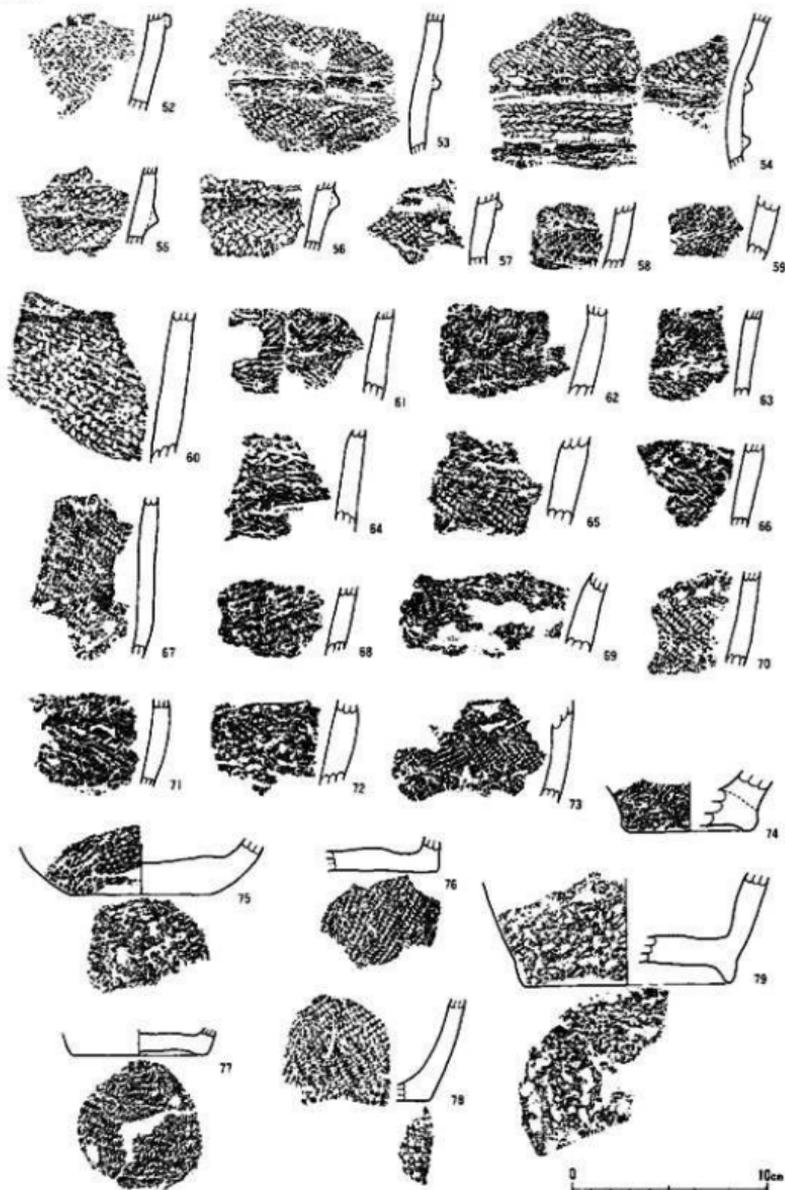
1と2は波状口縁の深鉢で同一個体である。波頂部の下に縦に隆帯を貼り付け、その右側はL R縄文を、左側にはR L縄文を施す。胴部にはR L縄文を施す。直径は波頂部で推定32cmとなる。3～27は折り返し口縁になるもので、折り返し部分の施文については単方向の縄文施文が多いが、羽状縄文も存在する。11は円形の隆帯がみられる。14は下が破損しているもの折り返し口縁になるのが確実なものである。23は段の下部分に横方向の燃糸側面圧痕が施されている。26には折り返し口縁部の下端に斜めの刺突列が入る。28・29・30は波状口縁になるもので、波頂部を中心として同心円状に連続刺突が入るものである。口唇上にはキザミが入る。31も同様の口縁形態をもつものであるが、やや肉厚で口縁部文様帯の幅が狭い。32は口縁部に絞り込みがみられ、口唇上は平らにそぎ落とされている。33・36～45は平口縁の土器の口唇部が強く外反して平らにそぎ落とされているもので、幅の狭い口縁部文様帯のような効果を生み出している。あるいは折り返し口縁の派生形ともいえるか。口縁部文様帯の上下幅は口唇とほぼ同じぐらいにせまくなっている。口縁部文様帯には縄文が施されるが、中には42のように無文化されるものもある。34の3個体は直接接合しないが同一個体である。口縁部文様帯にはL R縄文が施され、口唇上は平らにそぎ落とされる。35も口縁部文様帯にL R縄文が施されるほか、口唇上にも縄文が施される。46～51は平口縁の土器である。いずれも異原体の縄文による羽状縄文が施されたものがほとんどである。52～57は貼付隆帯をもつ胴部である。隆帯の断面は、52～55のように台形になるものと、56・57のように三角形になるもの二種類がある。隆帯の上下は原則として縄文が施されるが、54のように燃糸が圧痕されるものもある。58～73



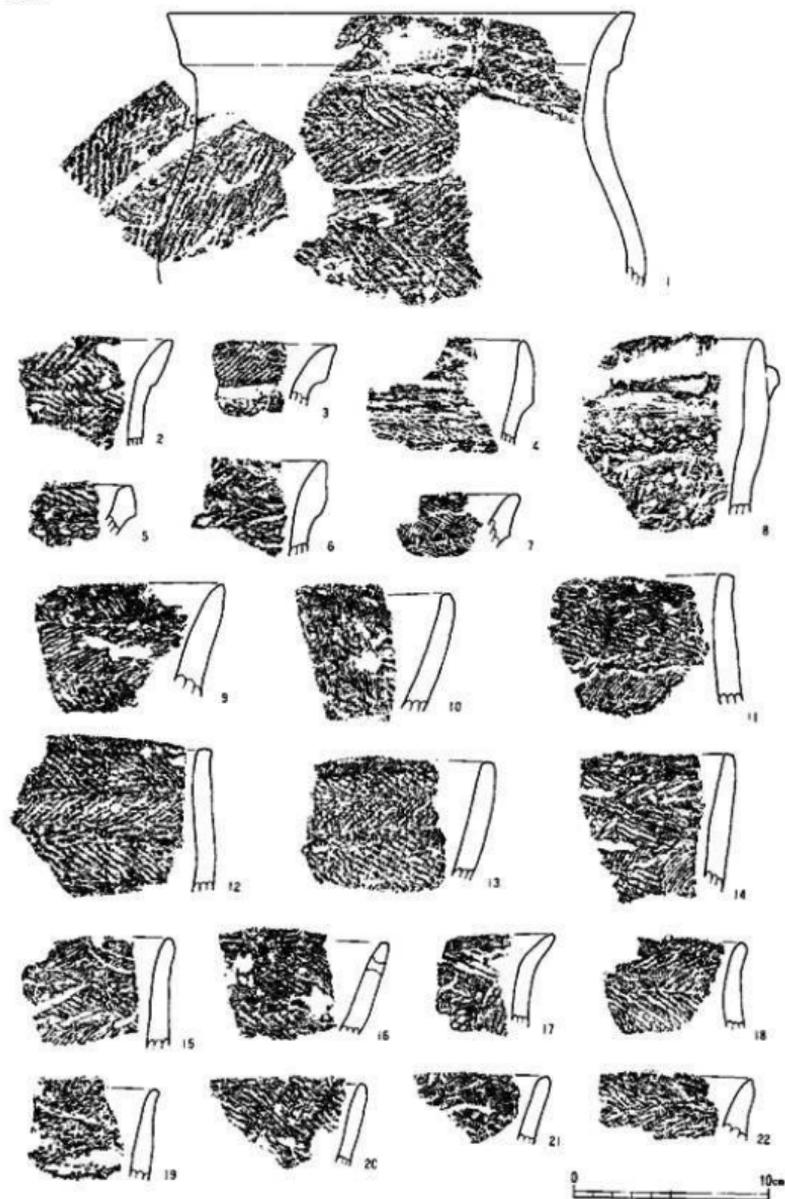
第223図 前期出土遺物06



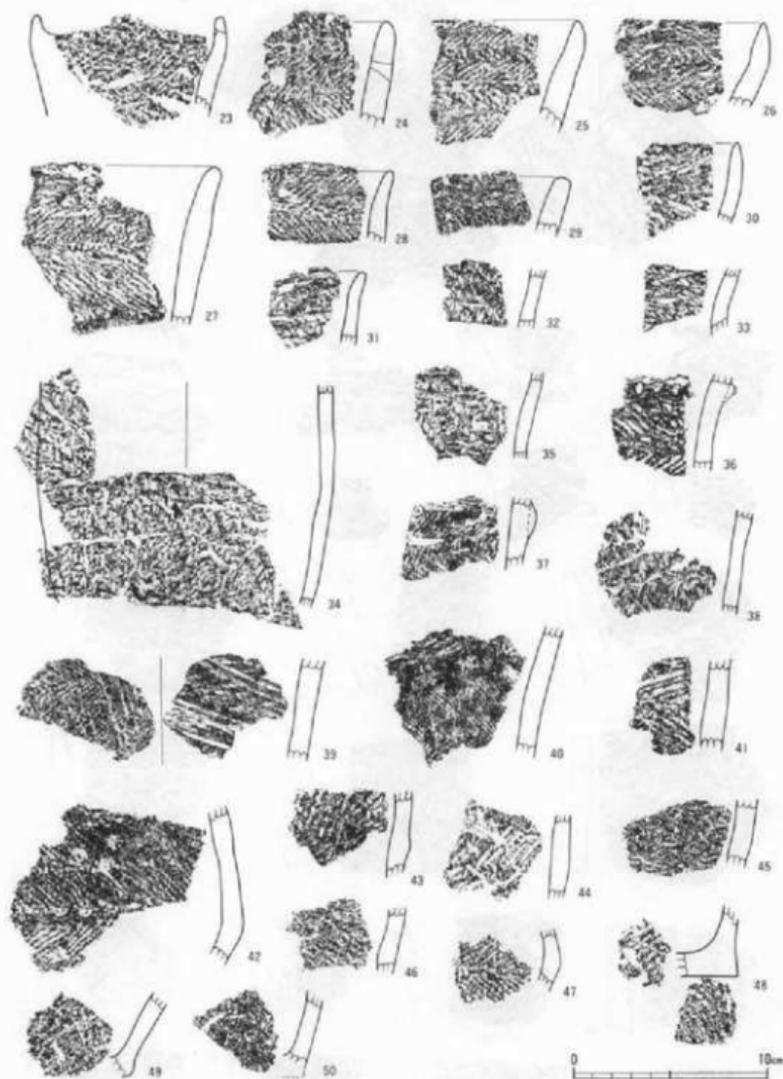
第224団 前期出土遺物17



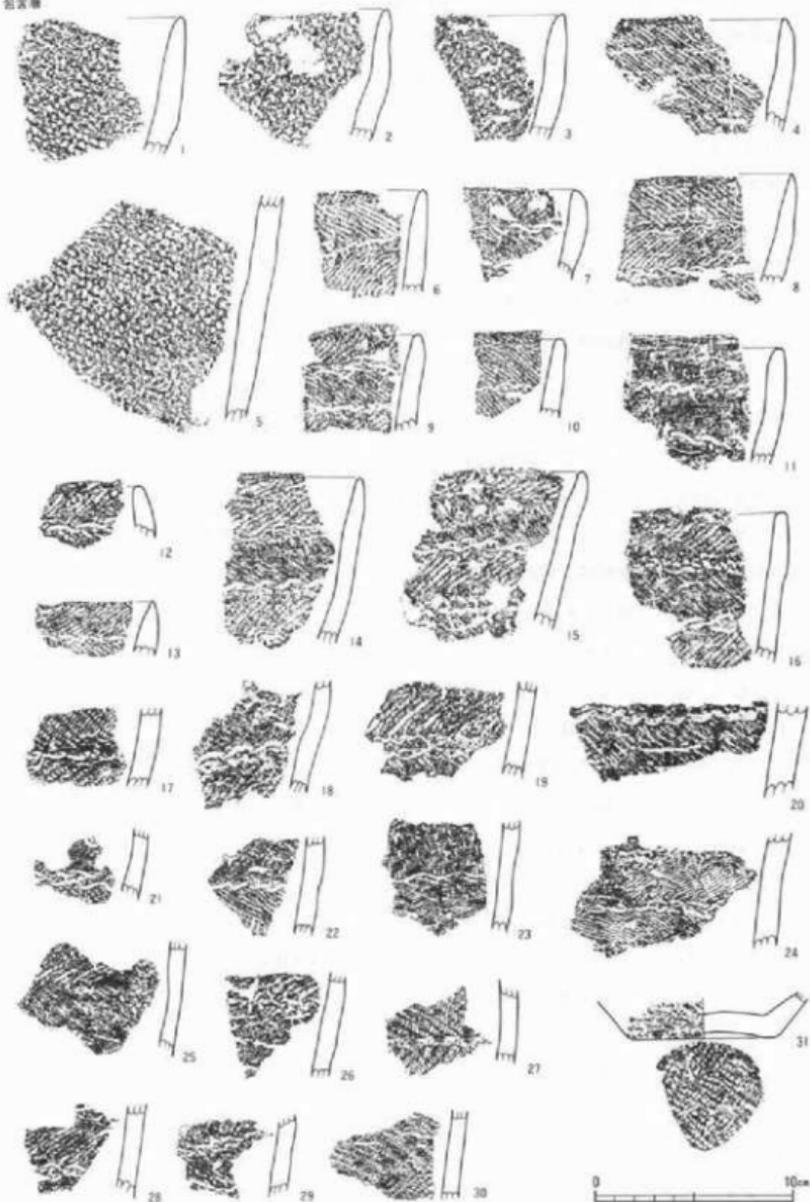
第225圖 前期出土遺物(18)



第226图 前期出土遺物(9)



第227圖 前期出土遺物30



第228图 前期出土器物(2)

は隆帯をもたない胴部である。原則として羽状縄文が施される。75～79は底部である。75・76・78は平底になるものである。76は底面にも縄文が施される。また、78は胴部には縄文が施され、底面には貝殻文が施されている。74・77・79は上げ底になるものである。77は底面に縄文が施されている。

#### ②Bb種 (第226～227図)

無節縄文が施される土器は、単節縄文のものに比べて器種が少なく、特に、折り返し口縁が少なくなるのが目立つ。また、数も少なくなる。1～8は折り返し口縁をもつものである。1は胴部に膨らみをもった深鉢である。口縁部に無節縄文が施されるほか、胴部には無節の羽状縄文が施される。口唇上は平らにそぎ落とされている。直径は推定24cmである。2・7は口縁部の無節縄文が集合沈線状に施文されるものである。両者の関係が注目されよう。5は口縁部の上下幅が小さくなっていくもの。8は口縁直下に隆帯をもつもので、隆帯の下から無節縄文が施される。9～31は平口縁になるもので、ほとんど異原体縄文による羽状縄文が施される。11・12はやや内湾するもので、口唇上は平らにそぎ落とされている。17はやや強く外反する。23は波状口縁をもつ小型の深鉢で、直径は推定9.5cmである。32～47は胴部である。34は一見単節縄文風だが、撚りが大きい無節縄文である。36はキザミのある隆帯をもつもの。39は内面に条痕が施される。42は胴部に屈曲状の膨らみをもつ。48～50は底部である。48の底部には同一原体による縄文施文が見られる。

#### ③Bc種 (第228図1～3・5)

組み紐文が施されたものは極めて少なく、掲載したのがほとんど全てである

#### ④Bd種 (第228図4・6～31)

17・27・30が単節縄文で、ほかは全て無節縄文である。結節縄文はいずれも羽状縄文の撚りの方向が変わる部分に施される。31は底部だが、底面にも縄文が施される。

#### C種 貝殻文 (第229～231図)

##### ①Ca種 (第229図)

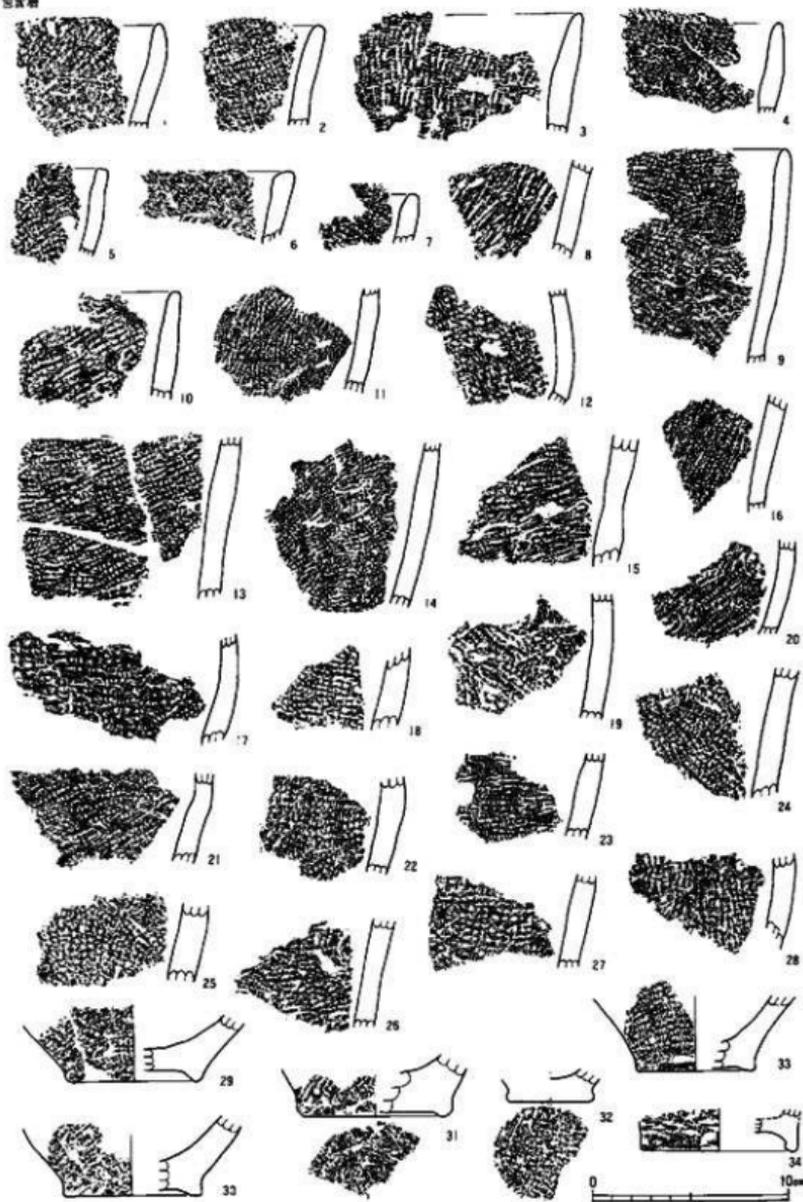
1～9・12は口縁部であるが、貝殻の圧痕はいずれも密で、斜行縄文の模倣であることが明白である。2・4・5などは口唇上にも施される。29～34は底部であるが、上げ底のものより平底のものに底面の貝殻左痕が目立つ。

##### ②Cb種 (第230図)

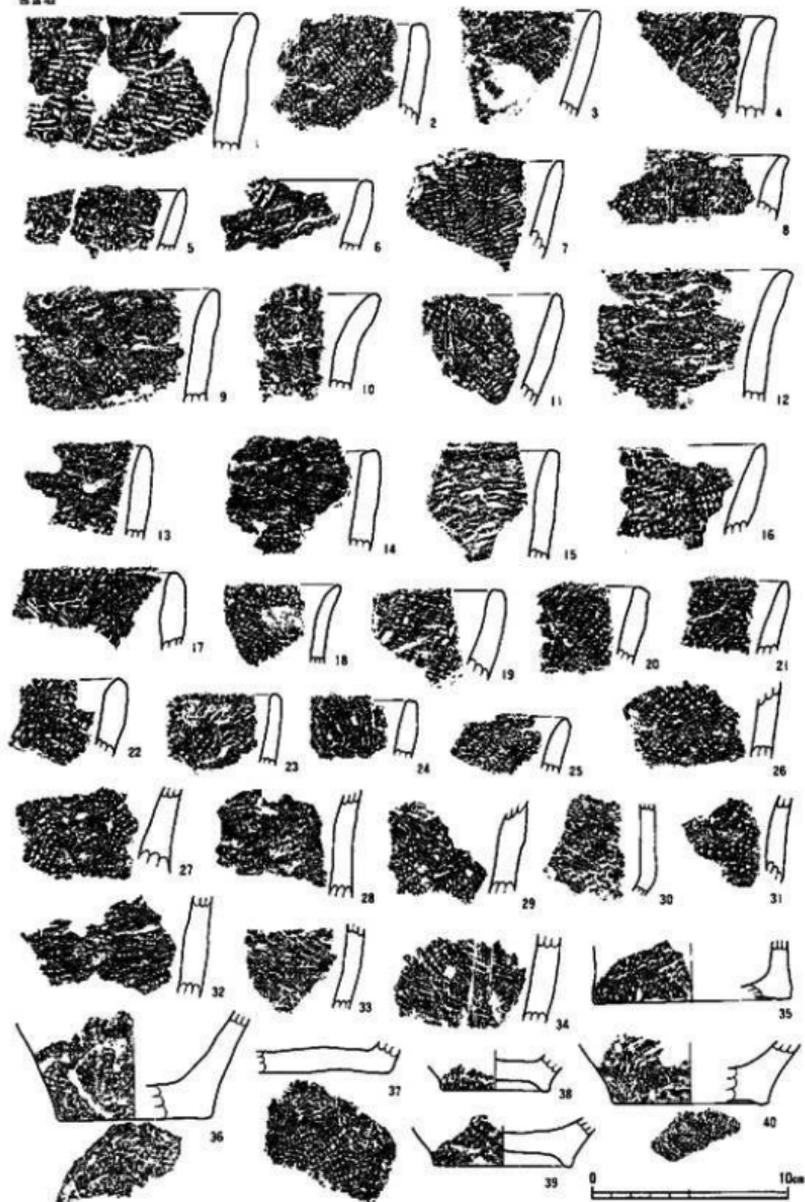
12・14などのようにまばらに圧痕されるものや、7・11などのように方向がそろわないものが多い。35～40は底部であるが、Ca種と同じく上げ底のものより平底のものに、底面の貝殻圧痕が目立つ。

##### ③Cc種 (第231図)

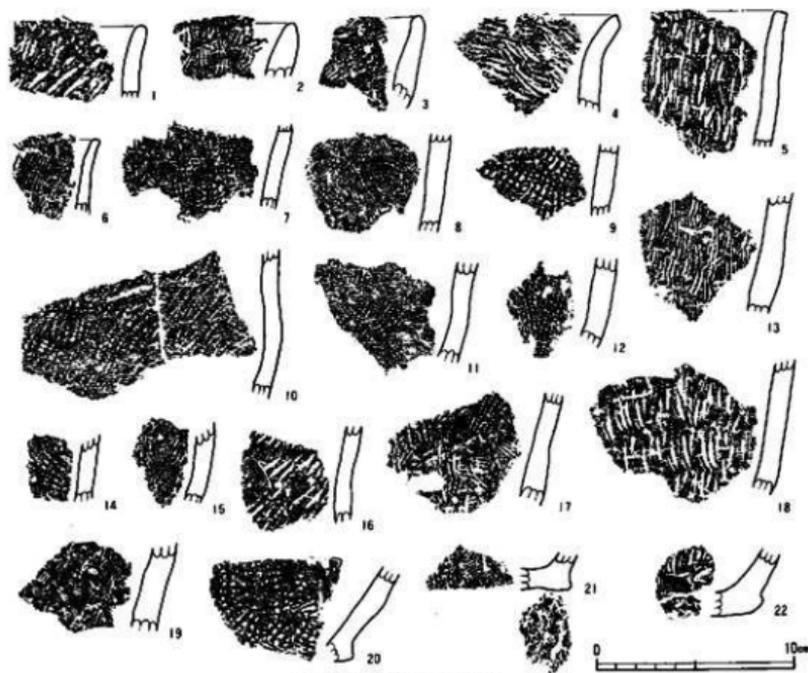
貝殻文の中では少数である。7・10のように放射状に広がるように圧痕されるもの、2・3



第229图 前期出土文物



第230圖 前期出土遺物(四)



第231図 前期出土遺物04

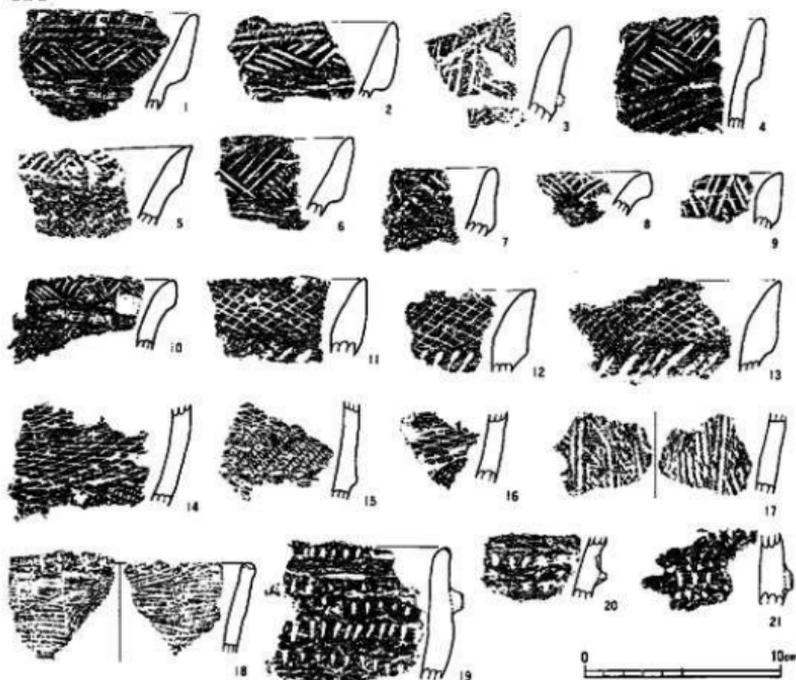
のように貝頂部を使用して鳥の足状に圧痕されるもの、1・5のように押し引きされるものなどがある。

D種 集合沈線文 (第232図1~10)

1・2は横方向の平行摺糸側面圧痕にはさまれるように集合沈線が施文される。3は波状口縁になるもので集合沈線の下には文様帯を区画すると思われる貼付隆帯が見られる。折り返し口縁に施文されない数少ない例である。4は頸部に摺糸側面圧痕が、5・10には縄文が見られる。8・10は外反した口唇上に集合沈線を施するもので、幅の狭い文様帯のような効果を生を出している。

E種 網状文 (第232図11~16)

11~13は口縁部文様帯に網状文を使用するもの。口縁部に施文されるものは全て折り返し口縁上であり、いずれも折り返し口縁部の下端に斜めの刺突列が入る。13は網状文とLR単節縄文が隣り合うように配されている。14~16は胴部破片であるが、網状文と縄文が帯状に上下に施文されている。



第232図 前期出土遺物29

F種 条痕文 (第232図17・18)

数が少ないが条痕文土器も出土している。

17・18とも表裏条痕が見られるもので、早期の土器に比べ、胎土が明らかに違う。いずれも表面に貝殻背圧痕が見られ、18には口唇上に貝殻腹縁によるキザミが入る。

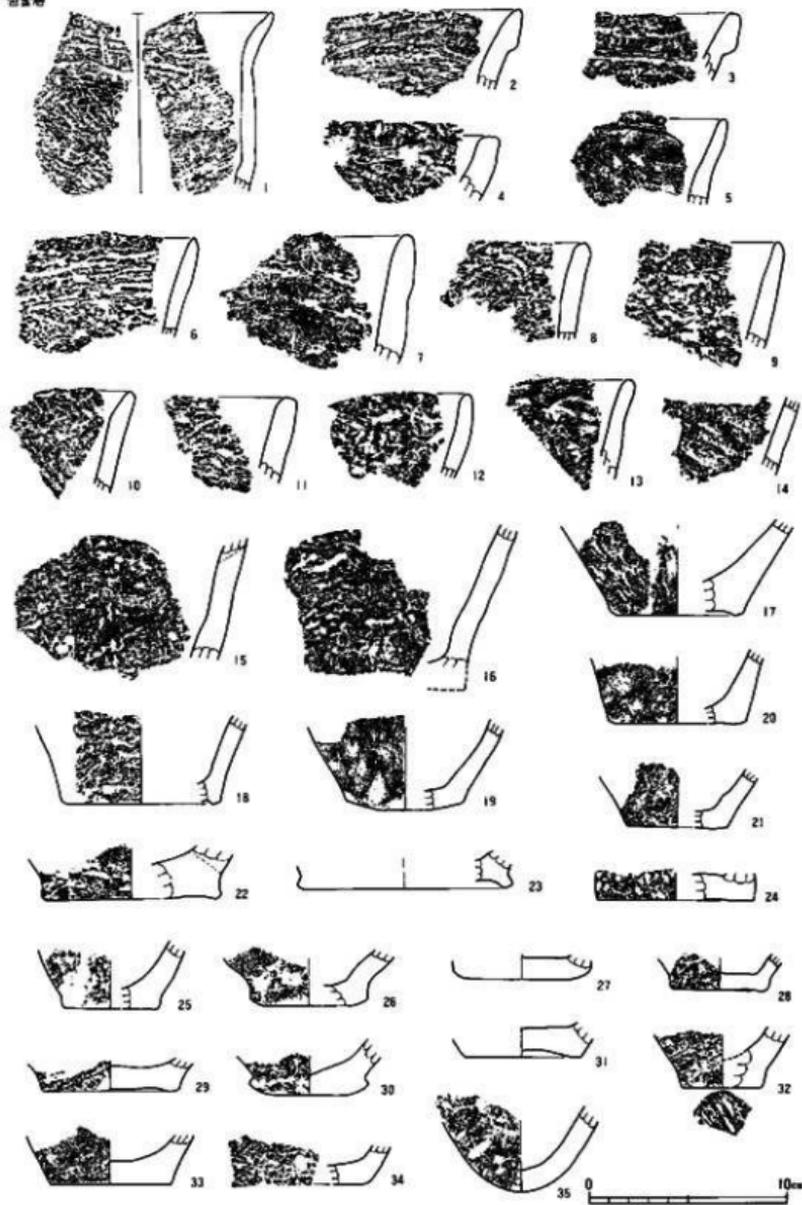
G種 隆帯文 (第232図19~21)

隆帯をもつものは少なく、そのほとんどが貼付隆帯と列点を組み合わせるものである。

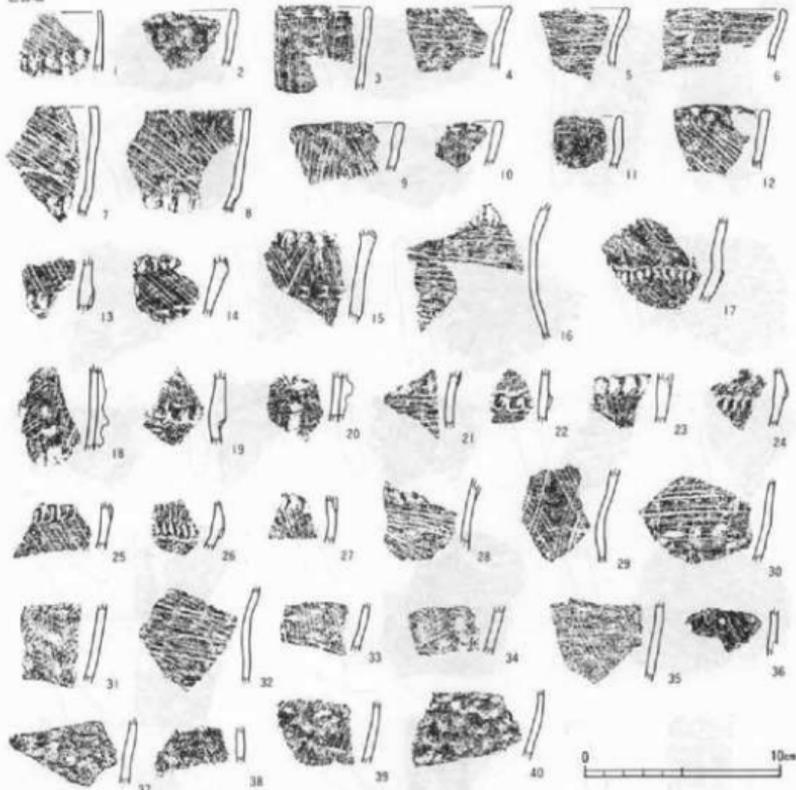
19は口縁部に隆帯を貼り付け、その上下に棒状工具による列点を配するもので、口唇上にもキザミが見られる。20・21も同様の文様構成になるものと思われる。

H種 無文 (第233図)

1は口縁部の下がやや屈曲するもので、波状口縁になるものである。外面に横方向の擦痕が見られる。2・3は外反する折り返し口縁をもつもので、これらも横方向の擦痕が顕著である。折り返し口縁になるものはこの2点のみである。底部資料は平面が多いが、35のような丸底になるものもある。



第233 战国出土文物图



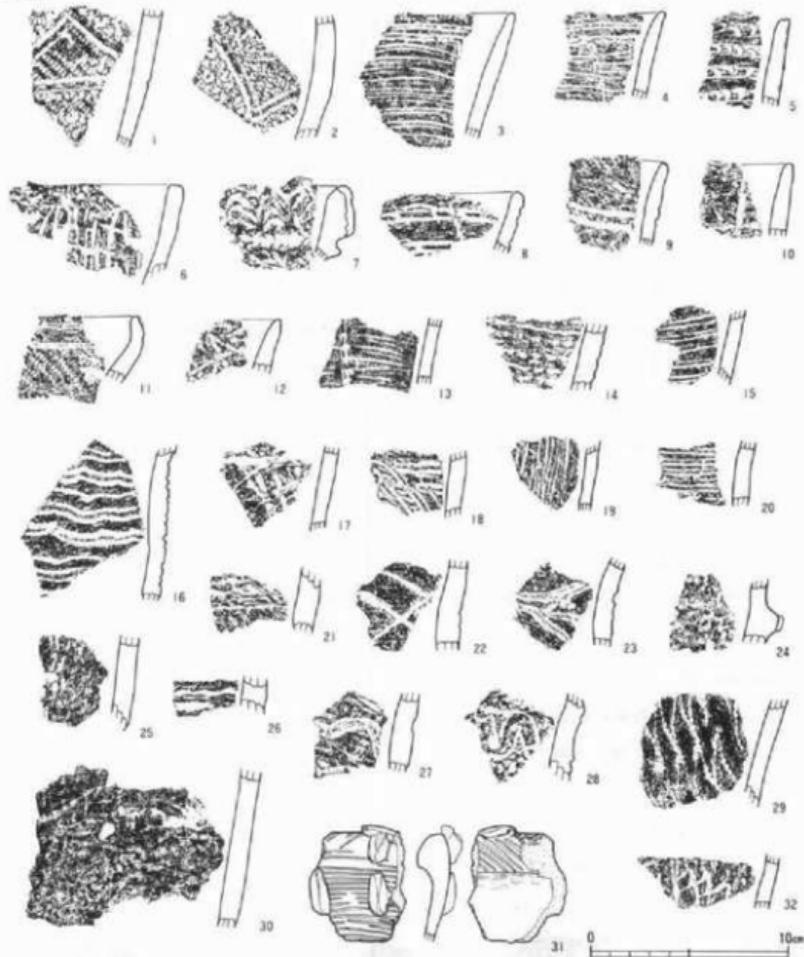
第234図 前期出土遺物27

第II群第2類 木島式土器 (第234図)

東海地方の前期初頭に位置する木島式土器が若干出土している。1～12は口縁部の破片である。いずれも極めてうすく、焼成は良好。縦ないしは斜め方向の条線と指頭圧痕文とを組み合わせる。口唇上は平らにそぎ落とされるものが多い。10・12の口唇部には、列点状のキザミが入る。13～40は胴部で、段状の屈曲を境に内湾するもの、ゆるやかに外反するものなどが見られる。屈曲部分には指頭圧痕が配される。条線は斜めないしは横方向が多い。18は縦方向の隆帯が貼り付けられる。

第II群第3類 関山式・黒浜式 (第235図1～28・30)

関山式以降の前期土器は激減する。1・2は関山式である。いずれも縄文地文に半截竹管による幾何学的な沈線が描かれる。3～28・30は黒浜式である。半截竹管による平行沈線と刺突を基本とした文様が多い。



第235図 前期出土遺物29

第II群第4類 諸磯式・浮島式 (第235図29・31・32)

これらの仲間は極めて少ない。29・32は波状貝殻文が施されるもの。浮島2式である。31は平行沈線にボタン状の貼付瘤が配されるもの。諸磯c式である。

### 3、中・後・晩期

石縄遺跡では後期初頭を中心とした土坑群が多数検出されている。これらから出土した遺物は中期になるのか後期になるのか判別できないものがあるため、一括して扱った。また、包含層から出土した中期や晩期の遺物は、数も少なかったため、やはり後期と一緒に掲載している。

#### (1) 住居跡出土の遺物

##### 054 (第236図)

ここから出土した遺物は少ない。1は波状口縁になるもので、波頂部から下に沈線の入った貼り付け隆帯を垂下させるもの。口縁を肥厚させて内湾させる。口縁部は無文化され、その下に円形刺突を入れる。2は口縁直下に沈線をいれ、その下側にLRの単節縄文を充填したもの。3はLRの磨消縄文の口縁である。4～6はRLの単節縄文を施すもの。7はLの無節縄文を縦方向に施すもの。8はLRの単節縄文を施すもので、くびれをもった胴部の一部である。9は貼り付け隆帯をもつ磨消縄文の胴部で、隆帯上には円形の刺突が加えられる。隆帯の脇には無文帯が存在する。

#### (2) 土坑出土の遺物

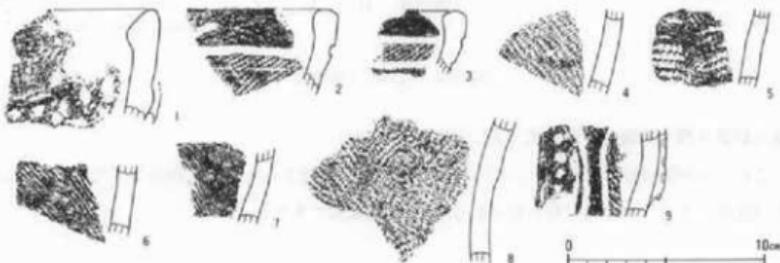
##### P005土坑 (第237図)

遺物数は少ない。1・2は磨消縄文である。3は充填縄文であるが、縄文施文後沈線をもう一度なぞり直している。

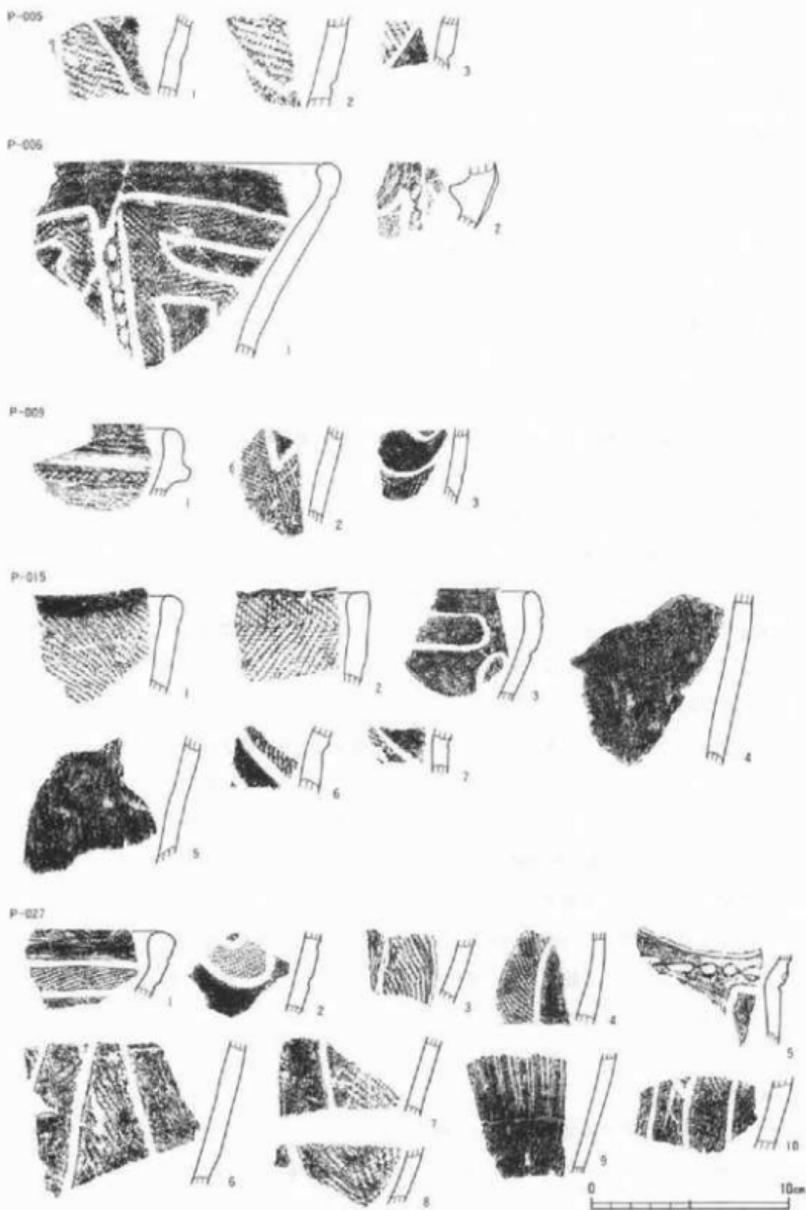
##### P006土坑 (第237図)

1は口縁部の大型破片である。口縁部に向かって大きく開く器形をしているが、口唇は肥厚して内湾する。LR縄文を施しているが、文様の部位によって施文方向を分けており、充填縄文であると考えられる。無文部分には棒状工具による連続刺突がみられる。焼成はあまりよくなく、器面も磨滅が目立つほか、外面にはススが附着している。2は突起をもつ口縁部の破片であるが、突起自体は欠損している。突起よりキザミの入った貼り付け隆帯を垂下させる。縄

054



第236図 中・後期出土遺物(1)



第237圖 中・後期出土遺物②

文はかなり細かい原体を使用しており、後から沈線を入れて磨消している。磨消部分や突起の成形にはミガキ状の調整を施している。口縁内側は隆帯を口縁に沿って貼り付けており、ここにもミガキ状の調整を施している。

#### P009土坑（第237図）

1は貼り付け隆帯をもった口縁部で、隆帯上にはLRの単節縄文が施文される。口唇より隆帯までは無文で、隆帯より下はRLの単節縄文が施される。口唇はやや内湾する。2はLRの単節縄文による充填文である。3は磨消縄文であるが、施文の方向や単位が分からないため、燃りの方向までは分からない。

#### P015土坑（第237図）

1～3は口縁部破片である。1はLRの単節縄文を施すもの。短い原体を使って縦方向に施すため、一見RLに見える。内面にはミガキ状の調整が施されている。2は口唇下の幅1.5cmほどにRLの単節縄文を横方向に施し、その下に同じRLの単節縄文を縦方向に施したもので、一見羽状縄文風である。口唇上は平らにそぎ落とされる。3はやや内湾するもので、無節LRの磨消縄文を基本とする。しかし、胎土がやや粗く焼成があまり良くないため、やや磨減が目立つ。4～7は胴部破片である。4は無文土器で、外面には縦方向にミガキ状の調整が入る。5は胴部下半と思われる破片で、上側にLRの単節縄文が施文され、下側は無文のままケズリ状の調整が入る。内面はミガキ状の丁寧な調整が入る。6・7は磨消縄文である。いずれも頸部破片と思われ、若干の外反がみられる。

#### P027土坑（第237図）

1は口縁部破片である。2本の沈線とLRの単節縄文により構成される。口唇部付近には縄文を磨消した痕跡が認められる。口唇は肥厚して内湾する。2～10は胴部破片である。2～4は磨消縄文になるものである。5はくびれをもつ胴部破片で、横方向に棒状工具による連続刺突を施し、その上下は沈線と磨消縄文の組み合わせになる。内面はミガキ状の調整が施される。6は充填文であるがLR縄文がわずかに施されるのみである。胎土には長石などの小礫が多量に混入するほか、雲母片の混入が顕著である。7・8は同一個体と思われるもので、いずれもLRの充填文である。胎土には小礫が多量に混入する。9は丁寧な調整が施された器面に帯描沈線が施されるものだが、底部付近と思われ下側には何も施されない。10は沈線を主体とするもので、上側にわずかに縄文がみられる。

#### P048土坑（第238図）

図示できるのは1点のみである。1は口縁部の破片で、少しずつ肥厚しながら内湾している。胎土に砂粒が大量に混入しているため、器面の磨減が著しく縄文の施文状況ははっきりしない。磨消はあまり丁寧ではなく、消しきれなかった縄文が観察できる。内側にはナデ状の調整が施される。

P-048



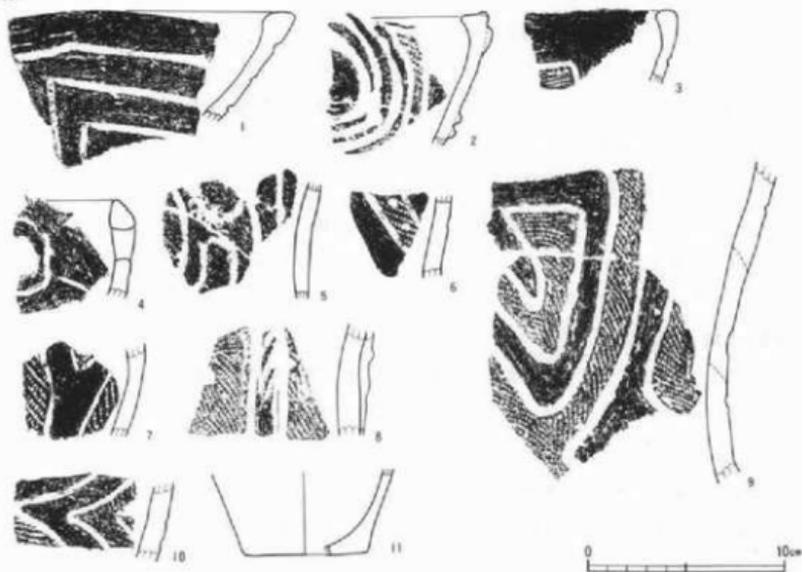
P-051



P-051



P-064



第238圖 中・後期出土遺物(3)

#### P051土坑（第238図）

1は口縁部の破片で、口唇に向かって外反していく器形をしている。RLの附加条縄文が施されるほか、補修孔が一つみられる。2は無文の口縁で、強い内湾がみられる。内・外面ともミガキ状の丁寧な調整がみられる。3は磨消縄文をもつ胴部破片で、若干の外反がみられる。4も磨消縄文の胴部で、上部にやや張りをもち、下部にくびれがみられる。全面的にLR縄文を使用するが、部位によって施文方向に違いがみられる。

#### P061土坑（第238図）

1は刺突列と磨消縄文を組み合わせるものである。棒状工具による刺突列を横方向に2列施文し、その下にRL縄文による磨消縄文を施す。2は無文に掛線沈線を施すもの。3は縄文のみが施されるものである。磨耗が著しく、縄文の施文状況についての詳細は不明。

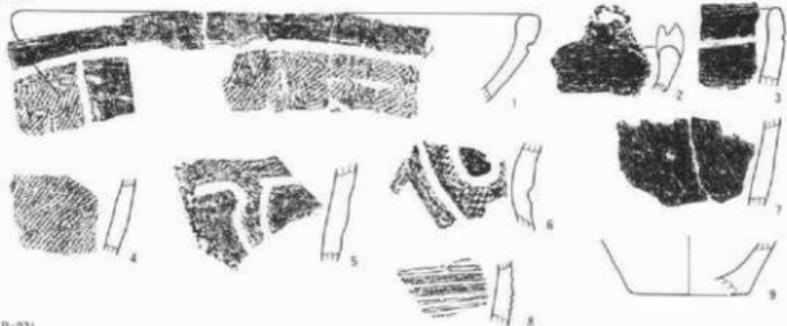
#### P064土坑（第238図）

1～4は口縁部の破片である。1は大きく外反する口縁で、口唇には肥厚がみられる。本来は磨消縄文か充填縄文と思われるが、磨滅が著しく縄文は残存していない。2は鉤状に屈曲する貼り付け隆帯をもつ口縁で、隆帯上にはやはり鉤状に太い沈線が施される。隆帯の内側は無文化され、隆帯の外側には磨消縄文がみられる。口唇は若干の内湾がみられ、口唇上はやや平らに成形される。3は磨消縄文の施された口縁部で、口縁は肥厚して内湾する。4は把手をもつ口縁である。把手は断面が三角形で外面には沈線がみられるが、全体の造形については不明。また、下部にはわずかながら縄文が施されているのがみられる。5～10は胴部破片である。5は1と同一個体で、1と同じく磨滅が著しく縄文の残存がみられない。沈線の形態からH字状の磨消縄文（充填縄文）になると思われる。6はLR縄文を充填するもので、列点文と組み合わせられる。7は磨消縄文になるもの。8は縦方向の貼り付け隆帯をもつもので、隆帯に沿って沈線が施される。隆帯上には棒状工具による斜めのキザミが入る。縄文はLRで縦方向に施文されている。9はJ字文となる磨消縄文の胴部で、口縁に向かって外反している。10も磨消縄文だが、器面の磨滅が著しい。11は底部で、底径は推定約6cm、残存器高は約4cmである。外面にはミガキ状の調整が入る。

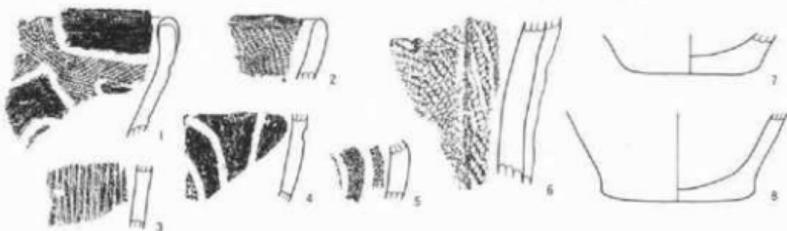
#### P066土坑（第239図）

1は口径復元のできる資料である。口径は推定26cm、残存器高は4.5cmである。口縁部から頸部にかけて急速にすぼまる器形をしており、口唇部は肥厚して内湾する。口唇下1.5cmほど下に沈線をいれ、その上は無文帯とし、その下に縄文を施す。一部は縦に2本の垂線をおろし、そのあいだは縄文を磨消して無文化する。縄文はLR縄文で、内面はミガキ状の調整が入る。加曾利EⅡ式の深鉢である。2は把手のつく口縁で、文様等は一切なく、上に円錐形の刺突が入る。3は口唇下1.5cmほどのところに沈線を入れるもので、口唇は若干内湾する。内・外面とも丁寧なミガキ状の調整が入る。4は1と同一個体と思われるもので、外面にはLR縄文が施文

P-066



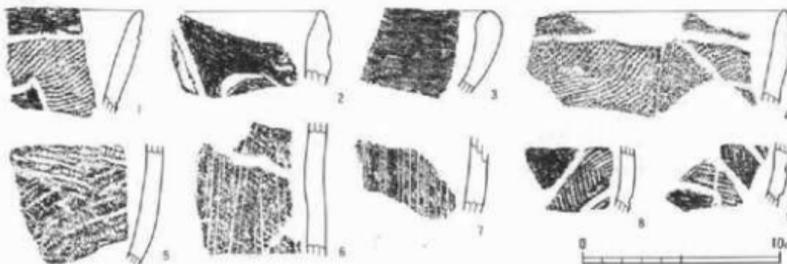
P-071



P-077



P-080



0 10cm

第239図 中・後期出土遺物(4)

内・外面とも丁寧なミガキ状の調整が入る。8は半截竹管による横方向の平行沈線が施される。構成される胴部破片である。縄文はLRである。6はやや強く外反する。7は無文の胴部で、内・外面とも丁寧なミガキ状の調整が入る。8は半截竹管による横方向の平行沈線が施される。9は底部で、底径は推定6cm、残存器高は2.5cmである。内面胴部側と外面にはミガキ状の調整が入る。

#### P071土坑（第239図）

1は波状口縁である。口唇は若干肥厚しながら内湾する。波頂部に磨消縄文帯を集中させ、その両側の口唇は上下1.5～2cm幅で無文化する。口唇上から内面は丁寧なミガキ状の調整を施す。縄文はLRである。2はRL縄文が施された口縁部である。内面は丁寧なミガキ状の調整が施される。3は櫛描沈線が施された胴部破片である。4・5は沈線と磨消縄文によって構成されたもの。6は断面三角形の隆帯を縦方向に貼り付けたもので、LR縄文が隆帯上を含めて一面に施文される。器形は若干外反している。7・8は底部である。7は底径は推定7cm、残存器高は2cmである。焼成がやや悪く、器面は磨耗している。8は底面が完全に残っているもので、底径は8cm、残存器高は4.5cmである。外面の胴部側と内面には丁寧なミガキ状の調整が施される。

#### P077土坑（第239図）

1～3は口縁部の破片である。1は飾り状の突起がついた口縁部で、断面実測図で張り出ししている部分はそのまま貼り付け部分である。突起の直下は鉤状の沈線が入る。全体にミガキ状の調整が施されており、状況は良好。2は縄文のみが施されるもので、口唇は若干内湾する。外面にRLの単節縄文を施文し、内面と口唇上にはミガキ状の丁寧な調整を施す。3は口唇下2.5cmほどを無文化し、その下に沈線と磨消縄文を配するものである。縄文はLの無節縄文である。4・5は底部である。4は底面が完全に残っているもので、底径は6.6cm、残存器高は2.8cmである。全面無文であるが、外面にはミガキ状の調整が施される。胴部との割れ面は、すべて輪積み部分である。5は4よりやや大振りな個体である。底径は推定約9cm、残存器高は4.2cmである。底面には円筒状の刺突がみられるが、文様になるものかどうかは不明。外面の胴部側と内面にはミガキ状の丁寧な調整がみられる。

#### P080土坑（第239～240図）

1～4は口縁部破片である。1は口唇下1cmほどの間を無文化し、その下にLRの磨消縄文による文様を配する。2は突起をもつ口縁で、器面にはミガキ状の丁寧な調整が施される。ただし文様は粗雑な沈線が施されるのみである。3は無文土器で、口唇部がやや肥厚しながら内湾する。内・外面には丁寧なミガキ状の調整が施される。4は沈線と磨消縄文で構成されるもので、1と類似した文様構成をとる。5～15は胴部破片である。6・7は櫛描沈線である。8・9・11～13・15は磨消縄文である。8・9・11は同一個体と思われるもので、LR縄文が施文

される。10は無文部が広いのが特徴である。12・13・15もまた同一個体と思われるものである。15は割り付けをミスしたようで、無文部同士が隣り合わせになってしまっている。中央の縄文が完全に磨消されていない部分は処理に困った結果かもしれない。10はLR縄文を縦方向に施文するもので、下側は無文になる。張りをもった胴部破片で、頸部に向かってややすぼまる。14は充填縄文である。かなり粒の細かいRL縄文を軽く入れるもので、幅が広くて深い沈線とは対照的である。内面にはミガキ状の調整が施される。16は底部である。底径は推定6cm、残存器高は約2cmである。底面はへら状工具により成形されている。

#### P081土坑（第240図）

1～3は口縁部破片である。1は縄文のみが施されたもので、くびれをもった胴部から口縁部に向かって開いていく器形をしている。口縁は若干肥厚して内湾する。器面にはRL縄文が施される。2は文様がみられない土器であるが、器面の磨滅が著しいため元々何もなかったかは不明である。3も縄文のみの土器である。外面にはLR縄文が施文され、口唇上と内面にはミガキ状の調整が施される。4は貼り付け隆帯をもつ胴部破片である。破片の中央の隆帯上には突起がみられ、隆帯より下の沈線は突起より垂下している。ただし器面の磨滅が著しいため縄文等は確認できない。5は3と同一の胴部破片である。縄目が横方向になるように施文されているが、これは器面に対して斜めに原体を転がした結果である。6～8・10は磨消縄文の胴部破片である。9は充填縄文で、かなり強いくびれがみられる。

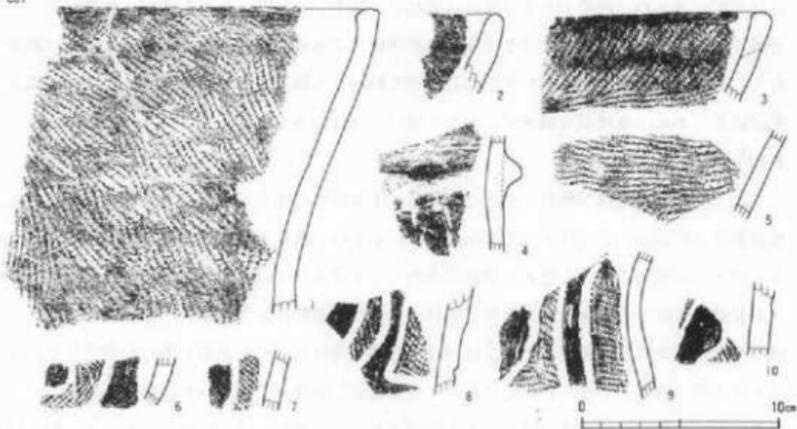
#### P132土坑（第240～241図）

この土坑からは遺物が豊富に出土している。1は器形の復元できる深鉢の胴部破片である。残存器高は約18cm、胴部径は推定31cmである。小さいと推測される底部から胴部に向かって大きく開き、胴部でふくらんだあと頸部に向かってすぼまっていく器形をしている。胴部上半にはLR縄文が縦方向に施され、下半分にはケズリ状の調整が施される。内面には横方向にナデ状の調整が施される。部位によってはかなりの熱を受けており、器面が著しく磨滅している。2・3は同一個体である。各部位において部分部分しか残っていないため直径を出すことはできないが、全体の文様構成を推定できる資料である。全体的にはいわゆるキャリバー型を呈している。小さめの底部から胴部に向かって大きく開き、一旦頸部でくびれたあと口縁部に向かって開いていく。口唇は肥厚しながら内湾する。文様は磨消縄文によって構成されており、口縁部には横方向の磨消縄文の帯を配し、頸部から胴部にかけて帯を曲線を描くようにおろす。胴部のふくらみをもった部分に渦巻き状の磨消縄文の帯を配する。3についてもおそらくこの胴部のふくらみをもった部分にあたるものと思われるが、2との関係については推測するに至らなかった。縄文は極めて粒の小さい原体を使用しており、LR・RL両方を使用しているものと考えられる。調整は全般に丁寧で、外面の磨消部分と内面にはミガキ状の調整を施している。4は口縁部の破片である。口径は推定28cm、残存器高は8.5cmである。口唇部は隆帯を内側

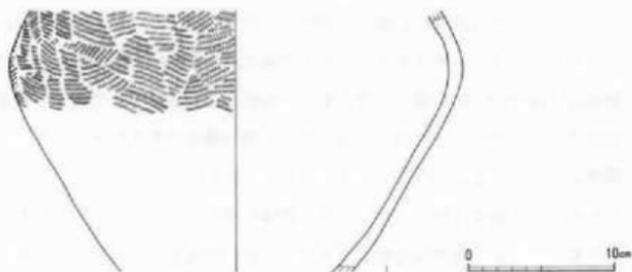
P-080



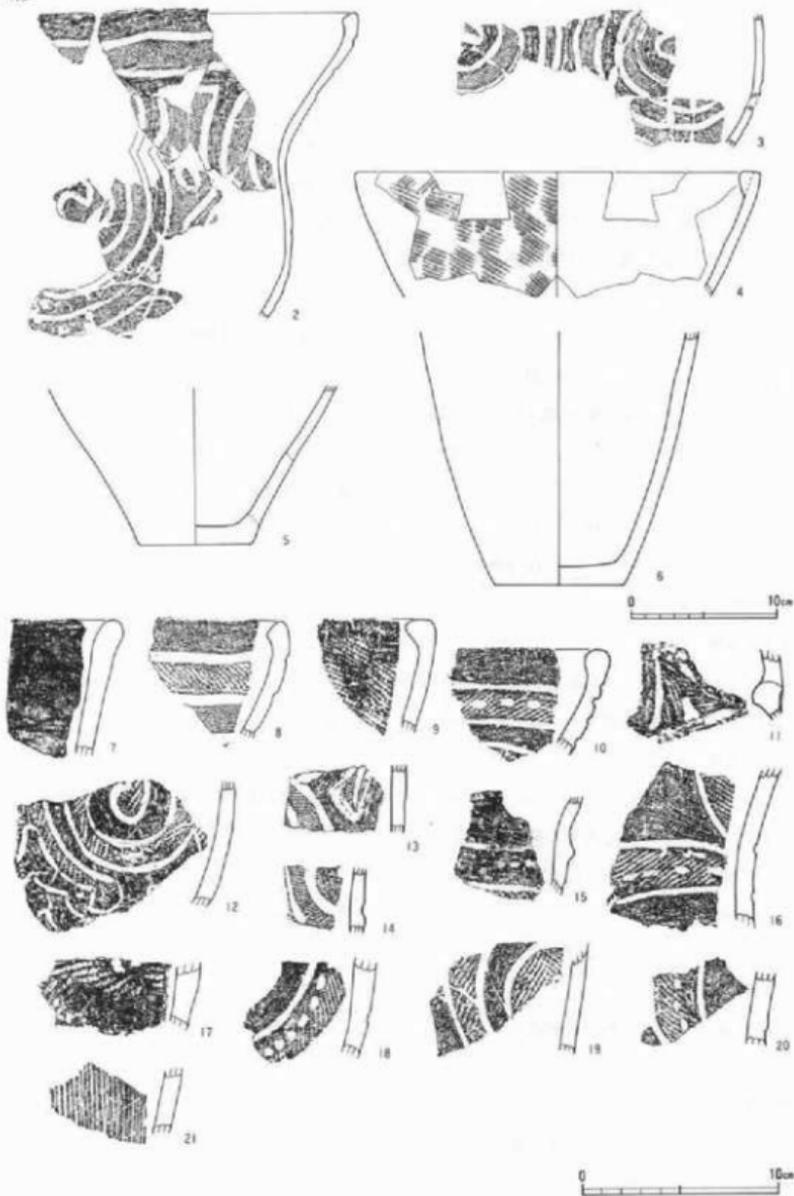
P-081



P-132



第240図 中・後期出土遺物(5)



第241図 中・後期出土遺物(6)

に貼り付けて肥厚させ、口唇上を平らにそぎ落としている。器面にはLR縄文を縦方向に施文している。5・6は胴部から底部にかけての破片である。5は底径が推定8cm、残存器高は10.7cmである。底部から胴部に向かって大きく開く器形をしている。外面には丁寧なミガキ状の調整が入る。6は底径が推定9cm、残存器高が17.3cmである。底部から緩やかにかつ直線状に胴部が開いていく器形をしている。外面にはミガキ状の調整が施されるが、被熱が著しく器面が磨滅しているため詳細は分からない。7～11は口縁部の破片である。7は無文で、口唇が肥厚して若干外反している。外面には丁寧なミガキ状の調整が施される。8は磨消縄文の口縁で、2本の沈線とLR縄文によって磨消縄文帯を構成している。内湾している口唇の上は内そぎ状に削られる。9は口唇内側を肥厚させて口唇上を平らにそぎ落とす。LR縄文を縦に施す。10は2本の沈線とLR縄文で磨消縄文帯を構成し、棒状工具による刺突列を入れるものである。11は突起をもつ口縁部で、刺突をもつ磨消縄文が施される。12～21は胴部破片である。12は曲線を主体とした沈線と磨消縄文により構成されるもので、J字文をやや変形させた形態となっている。内面には丁寧なミガキ状の調整が施される。13・14は2・3と同一個体と思われるもの。15は貼り付け隆帯をもつもので、下部には磨消縄文が施される。16・20は同一個体で、磨消縄文と刺突列により構成されるもの。17はLR縄文のみが施されるもの。18は磨消縄文と刺突列により構成されるもの。19は磨消縄文によるもので、上側は輪積み部分から割れている。21は櫛描沈線が施されるもの。

#### P133土坑 (第242図)

図示できるのは1点しかない。1は張りをもった胴部破片である。縦方向にLの無節縄文が施文される。輪積み部分からきれいに割れているのが観察される。

#### P137土坑 (第242図)

1は深鉢の下半部で、底径は6.5cm、胴部径は推定22cm、残存器高は24.1cmである。小さめの底部から胴部にかけて大きく開き、胴部でふくらんだあと頸部に向かってすぼまる器形をしている。胴部半ばより上にはLRの単節縄文が施されているが、軽くナゲ消されているところもある。そこより下から底部には丁寧なミガキ状の調整が施され、また、内面にもミガキ状の調整が施される。2は充填縄文の口縁部破片である。

#### P138土坑 (第242図)

1は縄文が施された口縁部破片である。器厚が肥大して内湾する。縄文はLRの単節である。2は無文の胴部である。内・外面ともミガキ状の調整が入る。

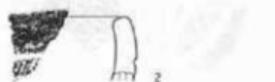
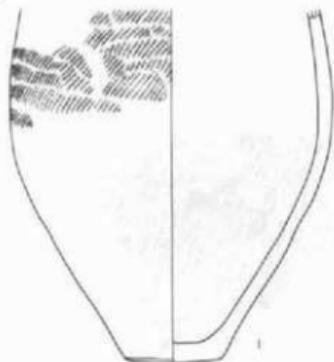
#### P147土坑 (第242図)

1～4は口縁部である。1は無文で、口唇部がやや肥厚しながら内湾する。内・外面とも丁寧なミガキ状の調整が施される。2は磨消縄文で、やはり口唇部がやや肥厚しながら内湾する。縄文はLRで、磨消された部分及び内面は丁寧なミガキ状の調整が施される。3は縄文が施さ

P-133



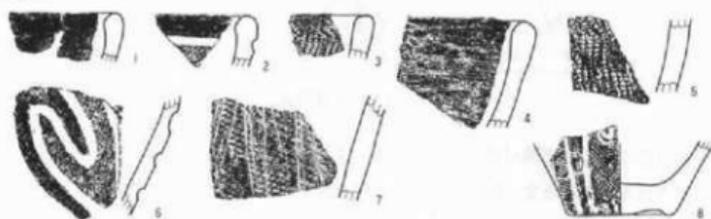
P-137



P-138



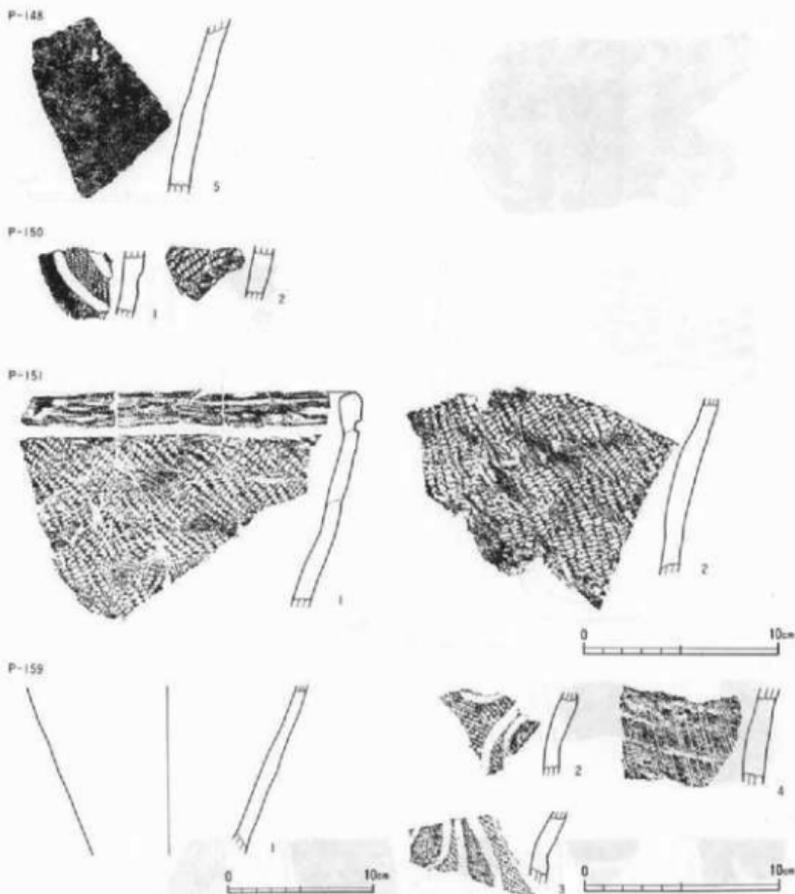
P-147



P-148



第242図 中・後期出土遺物7)



第243図 中・後期出土遺物(8)

れたもので、口唇は若干の内湾が認められる。縄文はLRで、口唇上と内面には丁寧なミガキ状の調整が施される。4は無文の胴部で、全体に熱を受けており外面にはススの付着が認められる。口唇は肥厚しており、外面にはケズリ状の調整が認められる。5～7は胴部破片である。5はRLの単節縄文が施されるもの。6は沈線と磨消縄文によって構成されるもので、縄文はLRの単節である。7は縄文と櫛描沈線が施されるもので、縄文はLRの単節である。8は底部で、底径は約5cm、残存器高は3.6cmである。2本1組の沈線を縦方向にいれ、そのあいだに無文部と縄文施文部を配するもので、加曾利E式に典型的なものである。他の資料と時期が合わず、おそらく流れ込みであろう。

#### P148土坑（第242図）

1は磨消縄文の口縁で、口唇部の肥厚がやや顕著である。縄文はLの無節である。内面にはススの付着がみられる。2は貼り付け隆帯と磨消縄文との組み合わせである。隆帯上には棒状工具による連続刺突が施される。3は沈線のみのものである。口唇の肥厚が認められるほか、波状になるものと思われる。内・外面ともミガキ状の丁寧な調整が施される。4はRL縄文のみが施されるものである。5は無文土器で、外面にケズリ状の調整が施される。

#### P150土坑（第243図）

遺物は少ない。1は磨消縄文の胴部破片で、縄文はRLである。2はLR縄文のみが施されるものである。

#### P151土坑（第243図）

1は口縁部の破片で、口唇より1.5cmほど下に沈線をいれ、そこより口唇側を無文化し、胴部側にRL縄文を施文するもの。底部に向かって緩やかにすぼまる器形をしている。2は胴部破片で、RLの単節縄文が施される。胎土の状況など1とよく似ており、同一個体の可能性もある。

#### P159土坑（第243図）

1は胴部下半の個体である。底部に向かって急速にすぼまっていく器形をしている。外面はミガキ状の調整が縦方向に入り、内面には同じく斜めに入る。2・3は磨消縄文をもつ胴部破片である。いずれも外反しているのが観察され、胴部のくびれ部分と推定できる。ただし、3には極めて丁寧な磨消がみられるのに対し、2は割り付けを誤ったのか、中途半端な磨消になっている。4は無文に帯描沈線を施したものの。

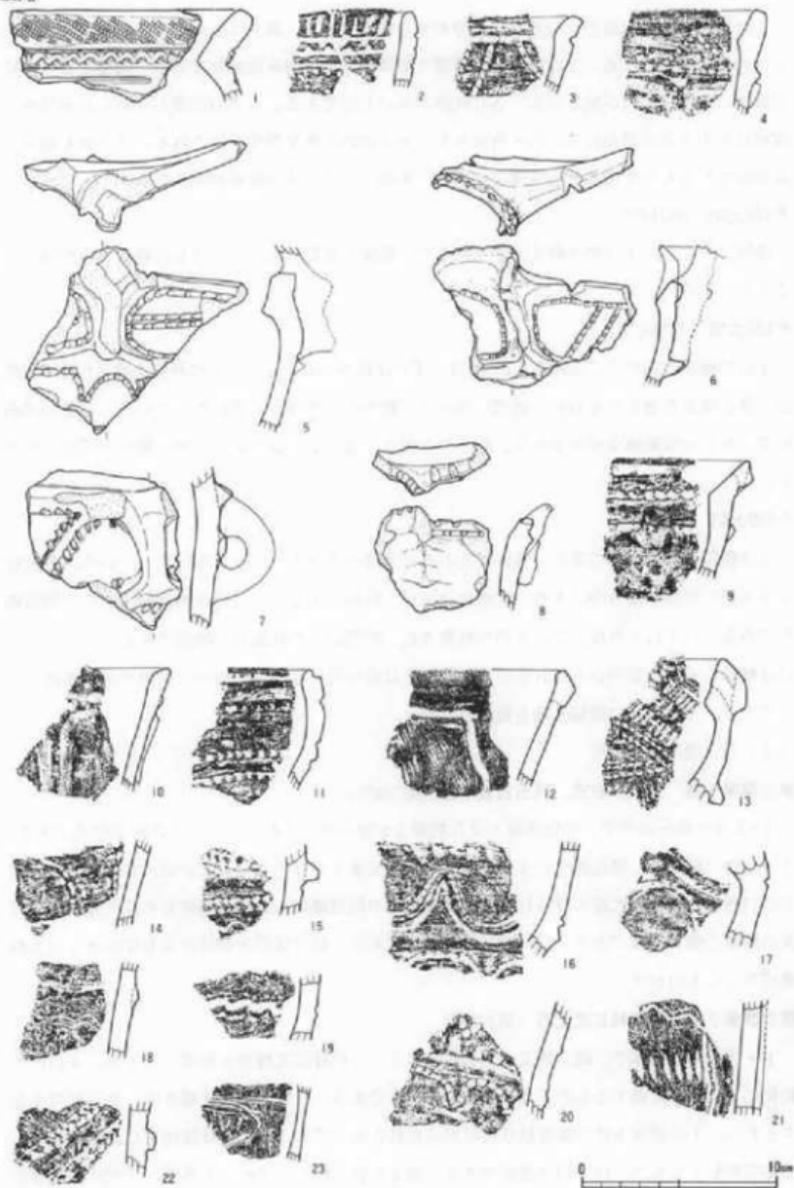
#### （3）包含層出土の遺物

#### 第Ⅲ群第1類 五領ヶ台式、阿玉台式土器（第244図）

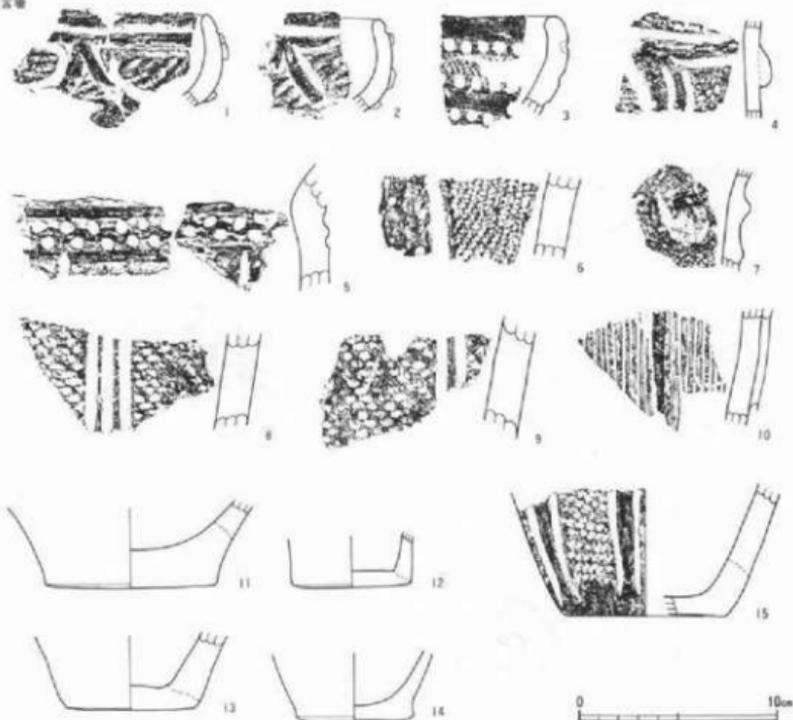
1・2は五領ヶ台式で、平行沈線と交互刺突文が組み合わされる。3以下は阿玉台式である。3～13は口縁部で、隆起線文による杵状文と角押文あるいは爪形文などが組み合わされる。4では口唇部にも結節沈線が見られる。13は三角形の貼付隆帯の両側に連続爪形文を施す。勝坂式の影響の強い土器である。14～23は胴部破片である。貼付隆帯と結節沈線を中心とした文様構成をとるものが多い。

#### 第Ⅲ群第2類 加曾利E式土器（第245図）

1・2は同一個体で、縄文地文と貼付隆帯によって口縁部文様帯を形成するもの。3は円形刺突列で文様を区画するもの。4～10は胴部破片である。5は頸部に沈線を伴う交互刺突を配するもの。7は過巻き状の隆帯貼り付けがみられるものである。10は沈線地文に鉛直方向の貼付隆帯を配するもの。11～15は底部である。無文の11～14のいずれにも外面にナデ状の調整がみられる。



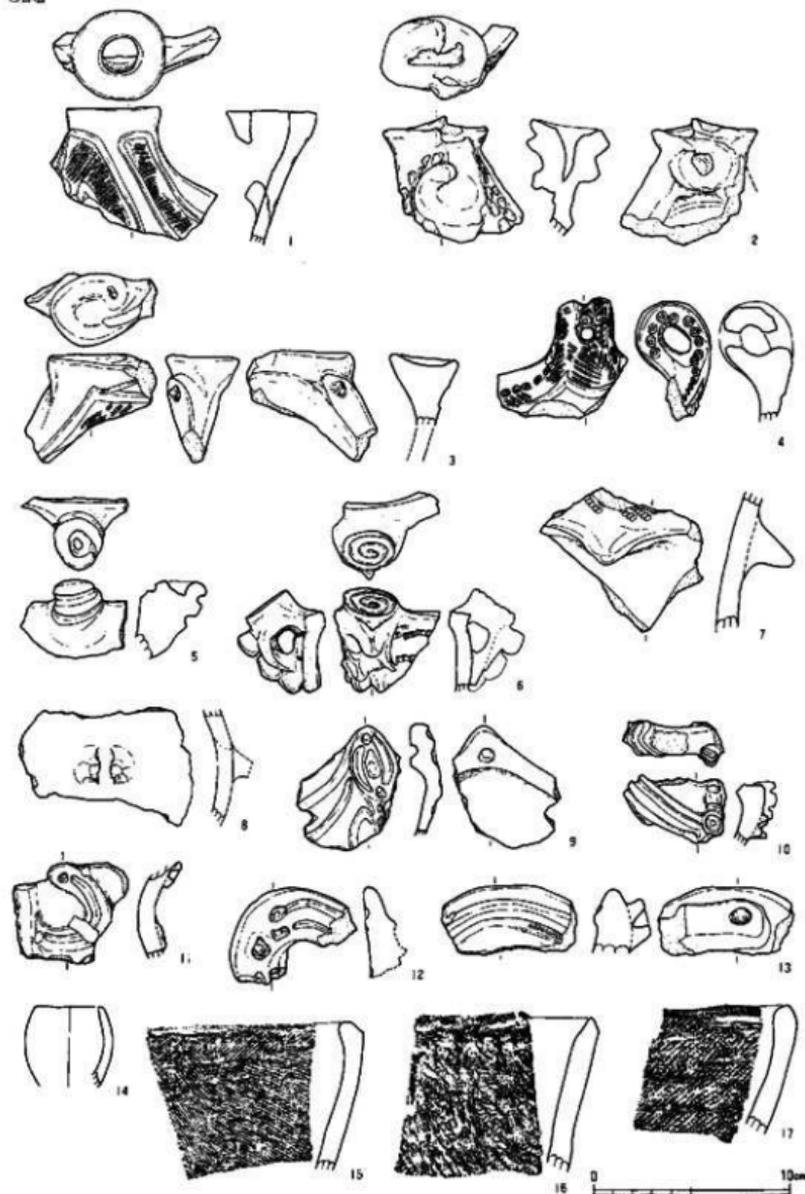
第244图 中·後期出土遺物(9)



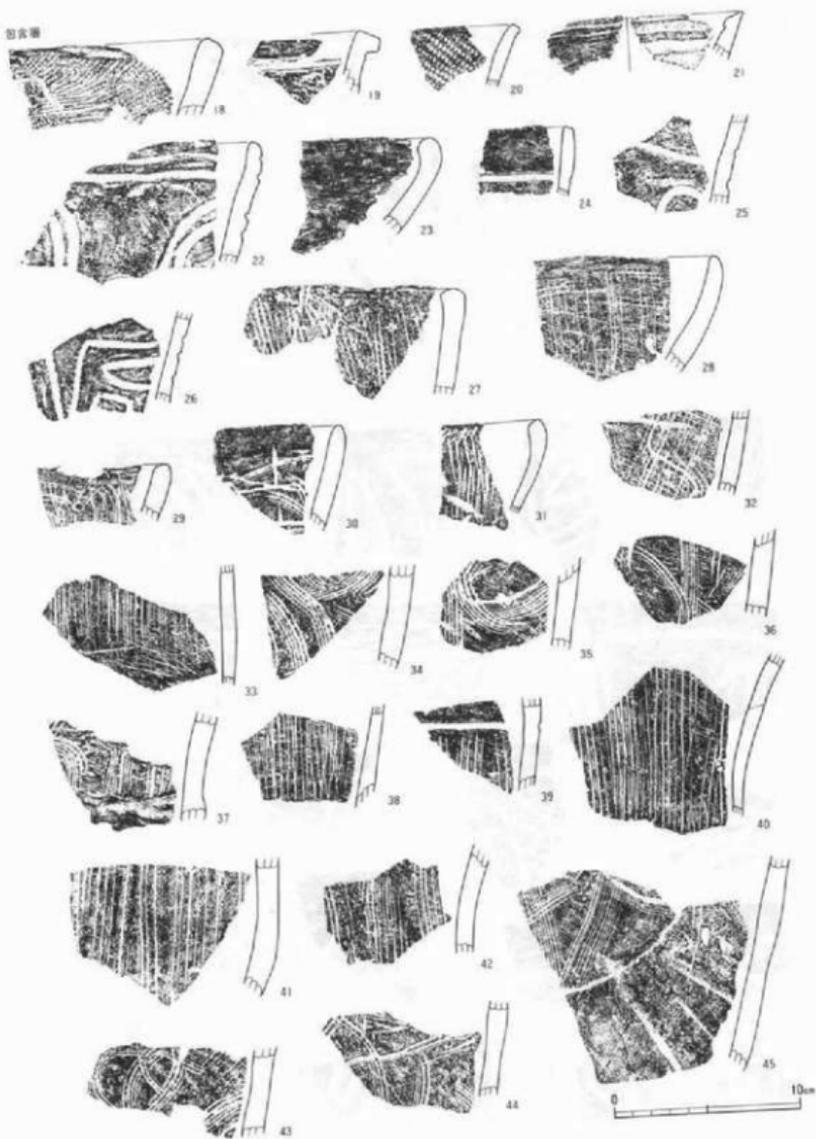
第245図 中・後期出土遺物⑩

第IV群第1類 称名寺式土器 (第246~249図)

第246~247図の資料については中期又は後期のどちらに属するのか不明なものも多いが、便宜的に後期に分類した。1~8は把手、飾り口縁などを一括した。1・3・4は磨消縄文により構成されるもので、4では円形刺突と併用される。2は刺突列により構成されるもの。5・6は立体的な過巻き状の意匠がみられるもの。7はつまみ状の貼り付け把手が見られるもの。8はリング状の貼り付け把手が見られるもので、胎土には砂粒が多量に混入する。9~13は東北地方の網取式に見られる鈎状文をもつ口縁である。13は大形の鈎状文の一部になるものと思われる。14はミニチュア土器である。口径は推定3.6cm、残存器高は4cmである。15~26は縄文または沈線のみのものである。口縁は内湾するものが多く、15は屈曲状に内湾する。19は口唇直下に折り返し口縁状の隆帯をもつ。21は内面の口唇直下に沈線が施される。27~45は櫛描沈線が施されるものである。37・39では沈線あるいは隆帯と併用される。46~77は磨消縄文が施されるものである。46は胴部にやや強いくびれをもつ深鉢で、口径は推定31cm、残存器高は24.1



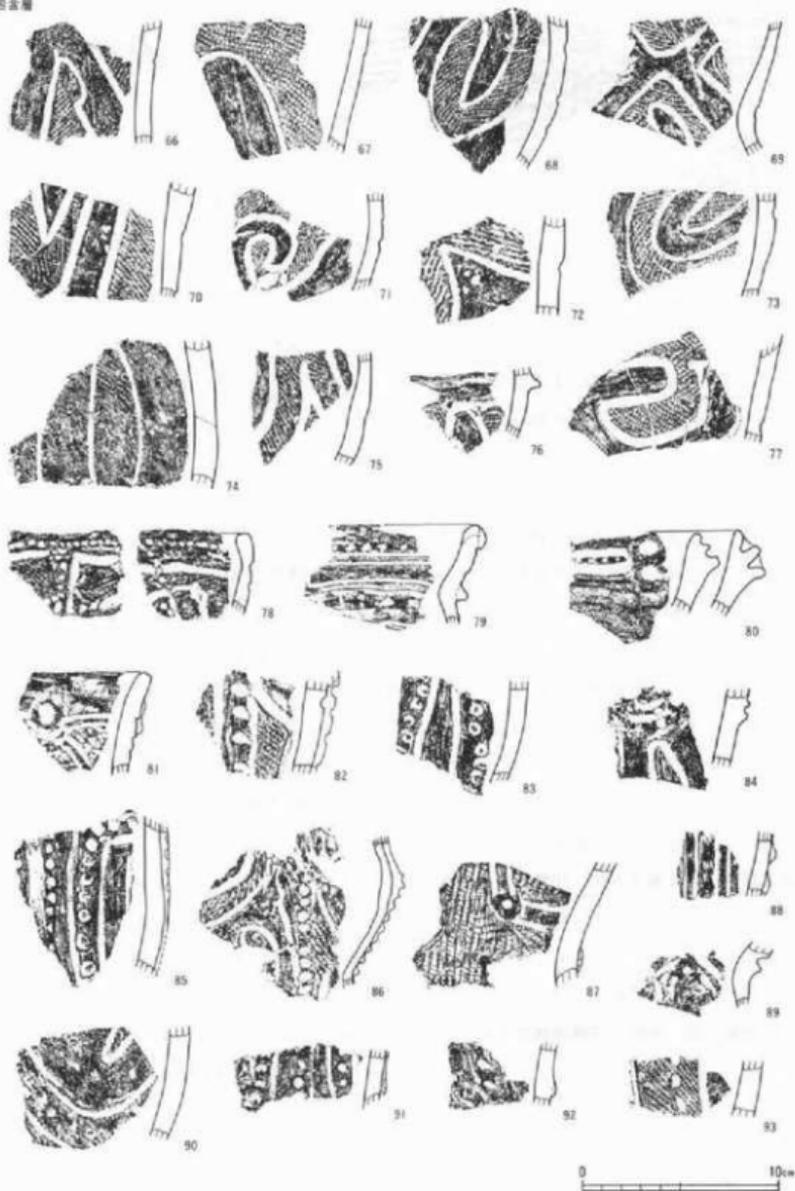
第246圖 中・後期出土遺物(1)



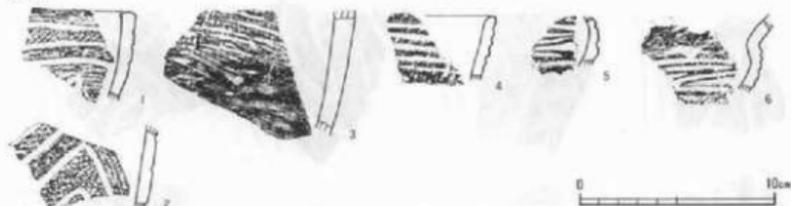
第247图 中·後期出土遺物①



第248图 中·後期出土遺物③



第249圖 中・後期出土遺物(6)



第250図 後・晩期出土遺物

cmである。かなり緻密な磨消縄文が施される。口縁部では横長のカギ形文が4対、口唇部から垂下されるように配され、胴部くびれ部では縦長のカギ形文がやはり4対、帯状の磨消縄文に囲まれるように配される。J字文は口縁部のカギ形文の下に小さく施される。器形や文様構成から考えて、称名寺Ⅰ式でも新しい部類に属するものであろう。47～61は口縁部破片である。口唇部を肥厚させて内湾させるものが多い。54は波状口縁の波頂部で、口唇が肥厚するように内湾し、内そぎ状に削り落とされる。56は波状口縁の波底部で、内湾が特に顕著である。62～77は胴部破片である。いずれも46と同様のJ字文やカギ形文を基本とした文様構成をとるものである。69にはかなり強いくびれがみられる。78～93は貼付隆帯、刺突列、列点を組み合わせるものである。貼り付け隆帯のほとんどに円形刺突が施される。78は刺突列と磨消縄文との組み合わせである。79は貼り付け隆帯と沈線との組み合わせで、口縁部文様帯の下にはやはり貼り付け隆帯を伴う屈曲がみられる。80は口唇を肥厚させその上に沈線を施し、8の字状の円形刺突を配したもの。この円形刺突と堀之内2式以降に見られる8の字文とのつながりについては、今後検討する必要がある。81・87は円形の貼り付け瘤が見られるもの。85・86・88・91・92は紐線状の隆帯を縦に貼り付ける。90・93は磨消縄文帯の中に列点状の刺突列が組み合わせられたもので、称名寺Ⅰ式に顕著にみられるもの。

**第Ⅳ群第2類 堀之内式、加曾利B式土器 (第250図1～3)**

堀之内式期以降の遺物は極端に少なくなる。1・2は沈線によって幾何学的に区画された磨消縄文が見られるもので、堀之内2式である。3は縄文施文後に糸線が施されたもので、加曾利B式の粗製土器である。

**第Ⅳ群第3類 晩期・浮線網状文土器 (第250図4～6)**

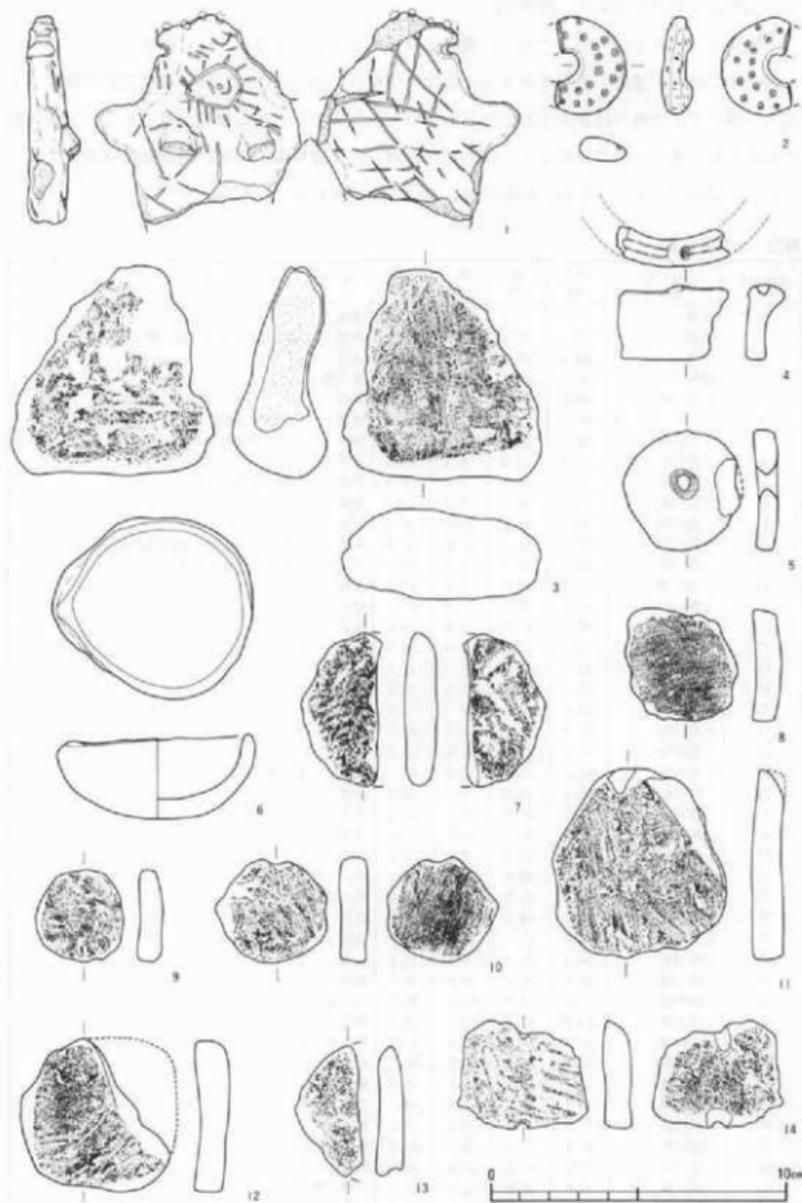
晩期の土器がごくわずかではあるが出土している。4～6の3点はいずれも浮線による変形工字文が施されるものである。

#### 4、土製品 (第251~253図、図版83)

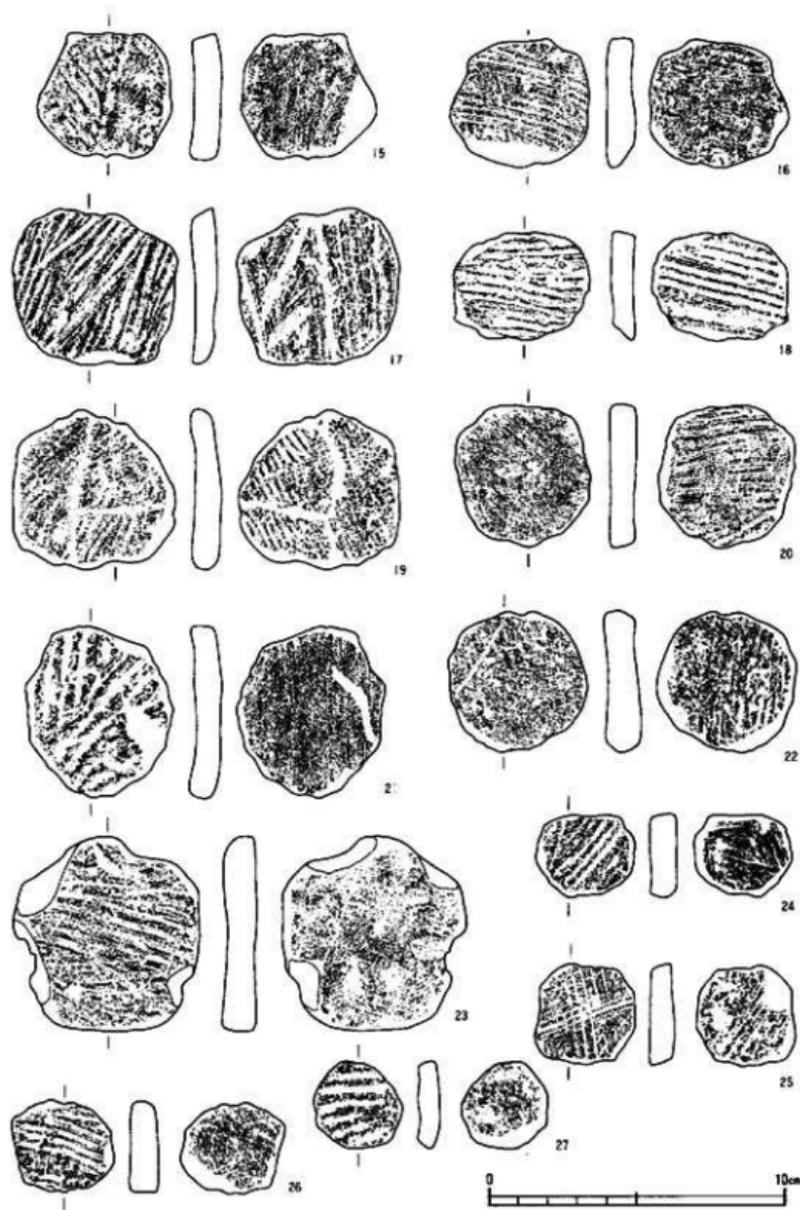
土製品は全てグリッド出土であり、遺構より出土したものはない。図に掲載したものがほとんど全てであり、遺跡の規模を考えるとかなり少ないといえる。1、3は条痕文期に属する土偶で、特に1には幾分抽象化されているとはいえ、かなりリアルな意匠が見られる。土製円盤は条痕文系に属するものがほとんどであるのに対し、土器片鏟その他の特殊遺物は後期に属するものが圧倒的に多く、生活の様相の違いがうかがい知れる。

表73 土製品一覧

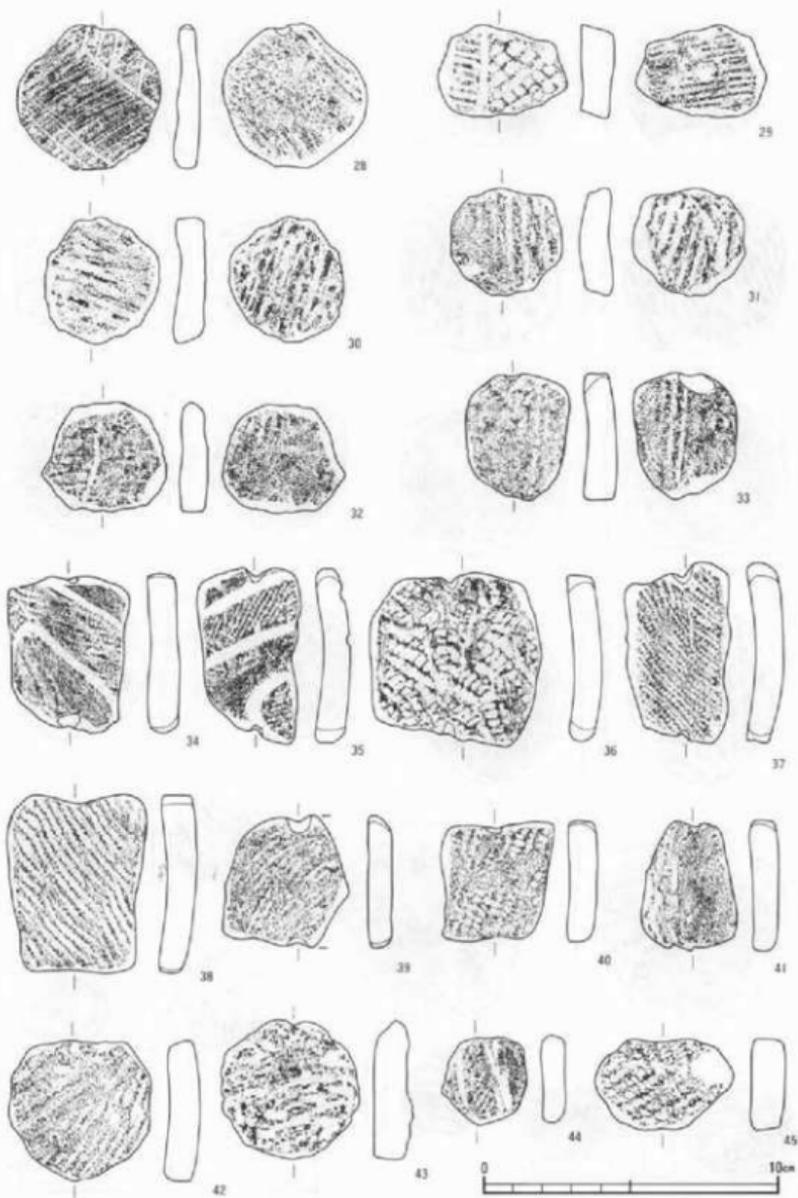
遺物番号	種別	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	時期	備 考
1	土偶	71.2	70.7	16.6	54.0	条痕	計測値は外径、幅、厚さを示す。
2	耳飾り	33.3	15.4	7.7	6.2	晩期?	
3	土偶	69.4	67.7	29.9	98.6	条痕	
4	腕輪	38.6	25.0	10.4	8.2	称名寺	計測値は長径、短径、高さを示す。 幅は残存幅を示す。
5	有孔円板	39.2	40.0	6.3	11.3	条痕	
6	ミニチュア土器	69.5	61.9	28.5	50.0	後期?	
7	土製円板	52.4	26.5	11.3	7.1	条痕	指環汗痕あり。
8	土製円板	38.4	40.5	9.4	16.6	条痕?	
9	土製円板	31.0	29.9	7.4	8.3	条痕	
10	土製円板	34.9	38.1	9.4	12.7	条痕	長さは残存長、幅は残存幅を示す。 幅は残存幅を示す。
11	土器片鏟	63.5	59.5	10.6	40.3	条痕	
12	土製円板	49.9	54.2	10.8	24.3	条痕	
13	土製円板	43.3	21.4	9.2	13.7	条痕	野島
14	土器片鏟	39.2	43.4	9.8	16.5	条痕	
15	土製円板	43.1	45.9	10.4	22.5	野島	
16	土製円板	45.0	47.9	8.9	20.6	条痕	条痕
17	土製円板	53.2	57.0	7.9	28.2	条痕	
18	土製円板	37.3	47.2	8.7	17.4	条痕	
19	土製円板	53.3	55.9	9.2	30.9	条痕	条痕
20	土製円板	48.0	44.9	8.7	22.4	条痕	
21	土製円板	58.0	49.6	10.2	30.5	条痕	
22	土製円板	47.6	47.2	11.9	29.5	条痕	土偶?
23	土製円板	65.4	64.1	11.3	50.1	条痕	
24	土製円板	28.0	33.3	8.9	10.0	条痕	
25	土製円板	34.1	34.9	8.5	11.3	条痕	茅山下層
26	土製円板	31.0	34.7	10.2	12.3	条痕	
27	土製円板	29.7	30.1	7.7	7.4	条痕	
28	土製円板	50.9	49.8	7.7	19.4	茅山下層	鶴ヶ島台
29	土製円板	31.4	44.9	11.1	16.0	条痕	
30	土製円板	43.1	49.3	10.6	18.4	条痕	
31	土製円板	36.7	38.0	13.1	17.8	条痕	条痕
32	土製円板	36.4	41.4	9.1	15.1	条痕	
33	土器片鏟	42.6	36.2	10.5	18.5	野島	
34	土器片鏟	54.1	41.9	10.8	31.7	称名寺	称名寺
35	土器片鏟	61.9	35.8	9.7	25.1	称名寺	
36	土器片鏟	57.8	60.8	13.4	52.3	称名寺	
37	土器片鏟	61.7	35.9	10.7	29.7	称名寺	称名寺
38	土器片鏟	61.1	47.8	10.1	43.7	称名寺	
39	土器片鏟	45.1	42.0	7.9	18.5	称名寺	
40	土器片鏟	39.0	38.3	9.5	19.4	称名寺	阿玉台
41	土器片鏟	44.0	33.9	8.6	15.0	阿玉台	
42	土器片鏟	47.4	48.9	10.9	28.6	称名寺	
43	土器片鏟	47.8	48.8	12.9	23.1	花横下層	花横下層
44	土器片鏟	30.3	30.3	7.9	8.1	称名寺	
45	土器片鏟	32.1	47.4	10.5	14.9	花横下層	



第251图 土製品(1)



第252图 土製品(2)



第253図 土製品(3)

## 5、縄文時代石器

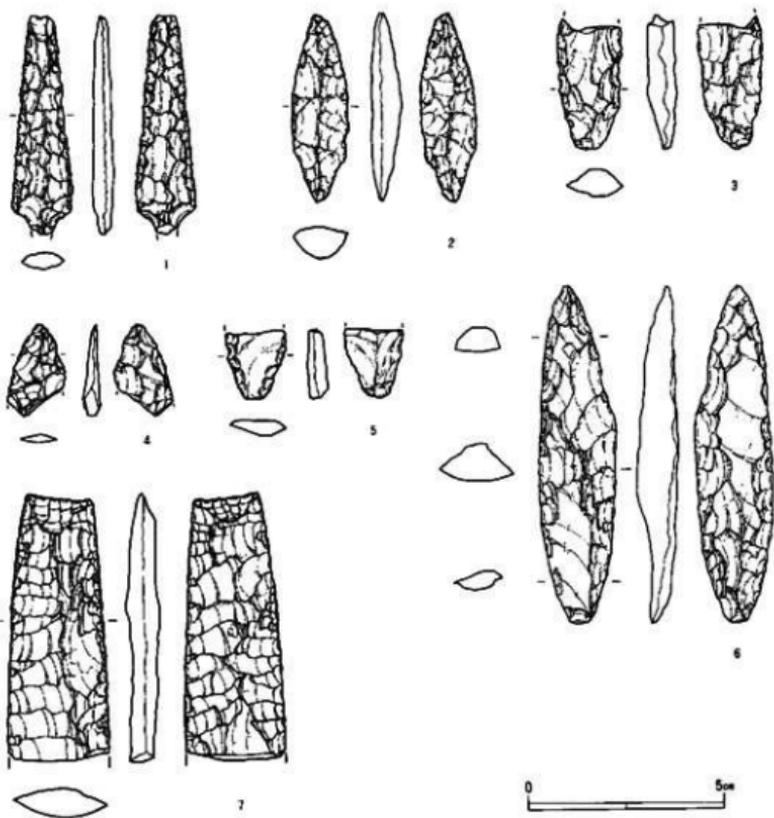
包含層および各遺構から多量の石器が出土しているが、器種ごとに一括して説明していく。

### 尖頭器 (第254図1～7、図版84)

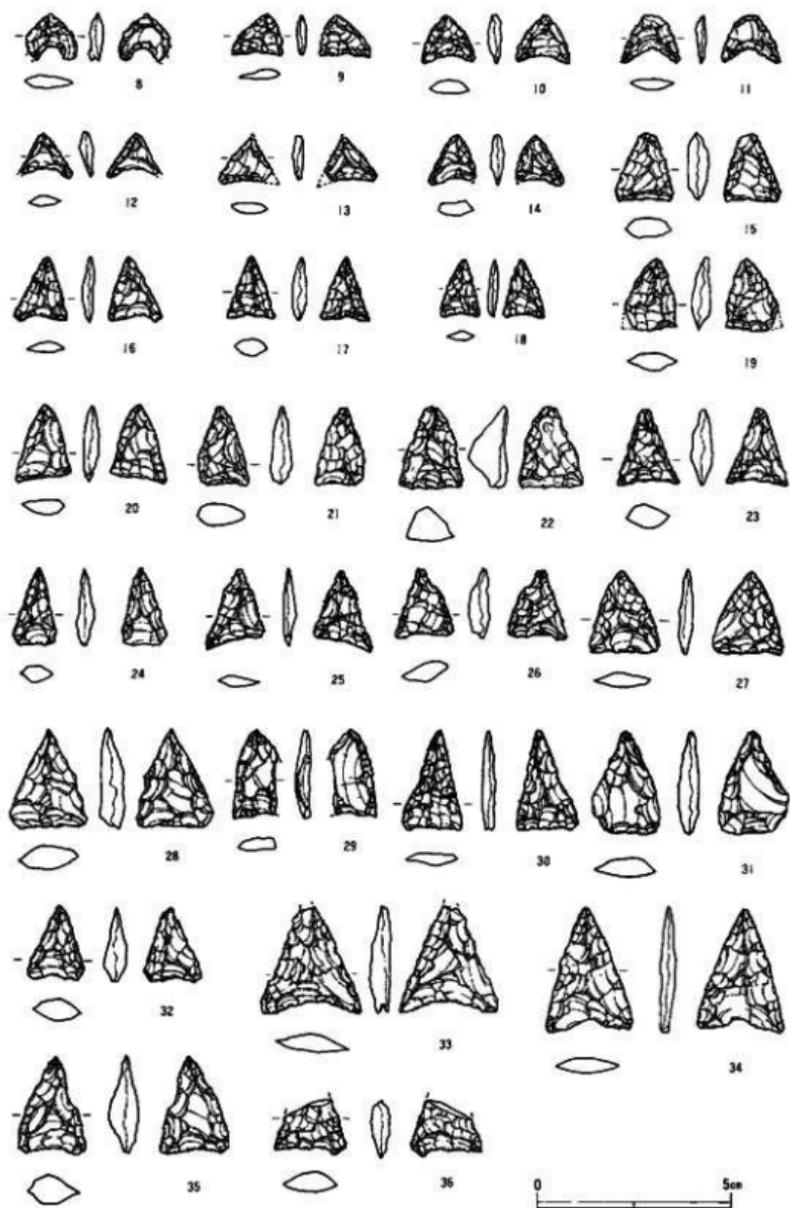
1は有舌尖頭器で基部が欠損する。先端部は剝離が入りによい仕上がりととなる。2～5は小形の尖頭器で、4は先端部が、3・5は基部が遺存する。6は細身の大形な尖頭器である。これらはともに安山岩製である。7は珪質頁岩を素材に押捺剝離により薄く仕上がっており、先端部は表裏からの剝離で平坦に加工される。基部は欠損している。

### 石鏃および石鏃未製品 (第255図8～第262図168、図版84～88)

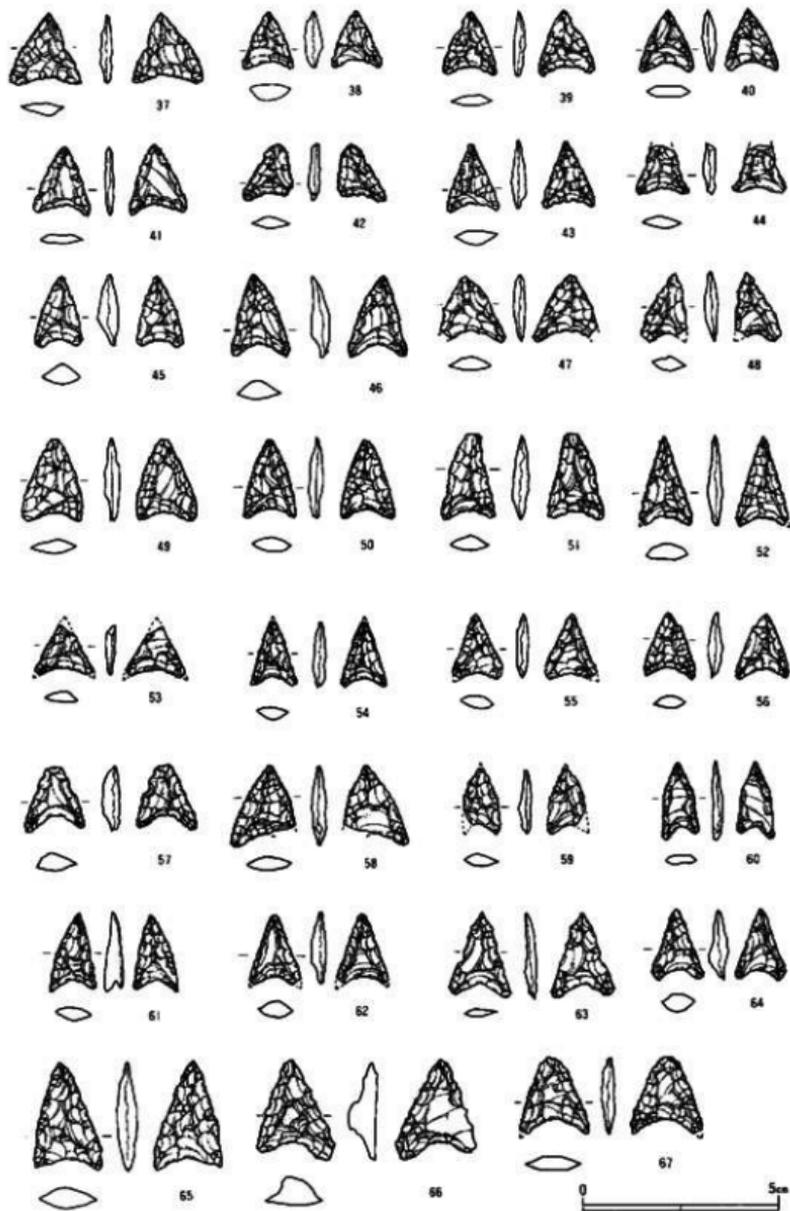
8～94は定形化した石鏃である。8～14は小形で丈の短いもので楡形もしくは正三角形に近いものである。15～36は挟りの少ないもの、37～56も比較的挟りの少ないもの、58以降は挟り



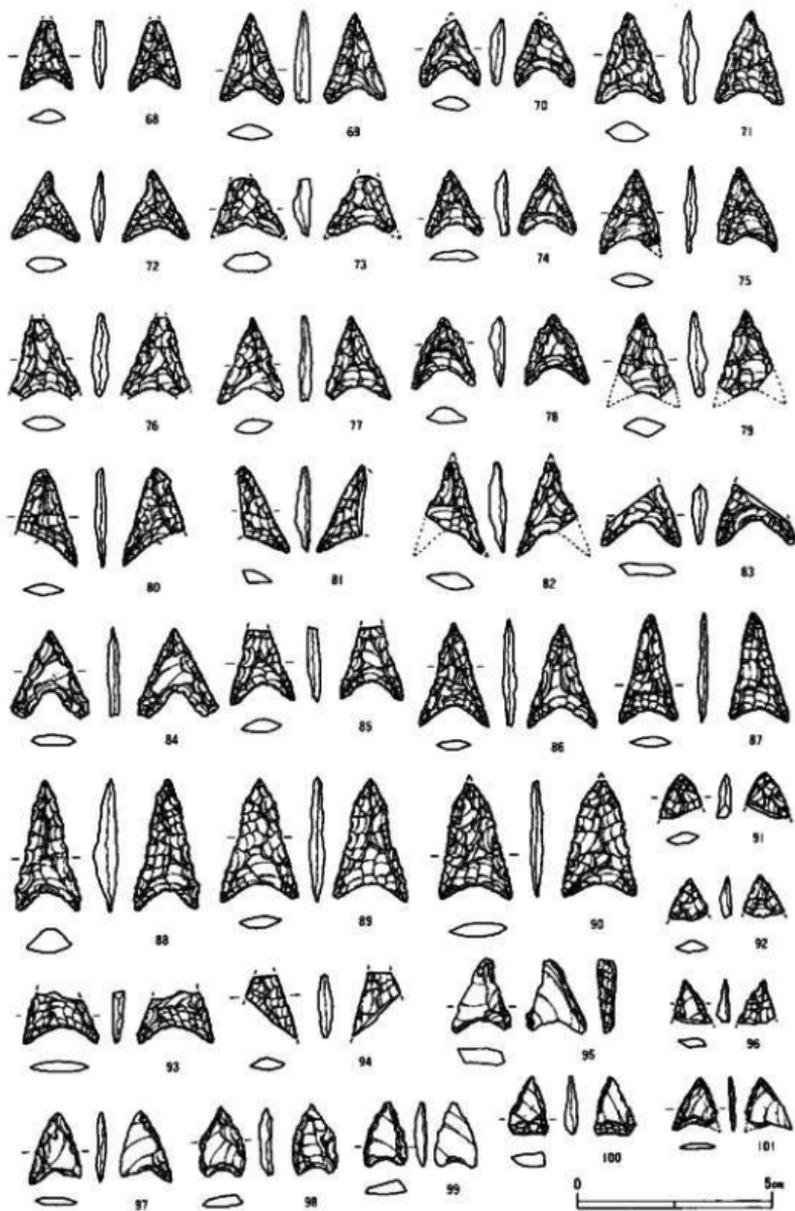
第254図 縄文石器実測図(1)



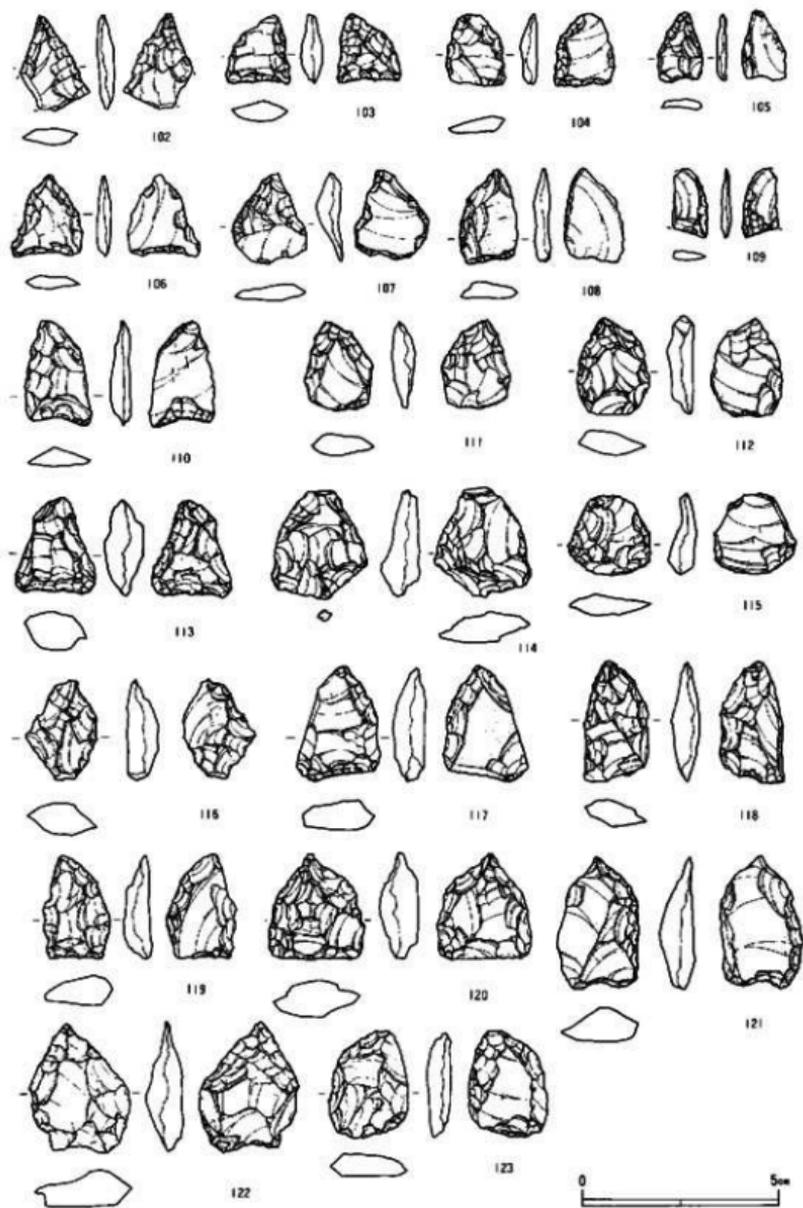
第255图 绳文石器尖测图(2)



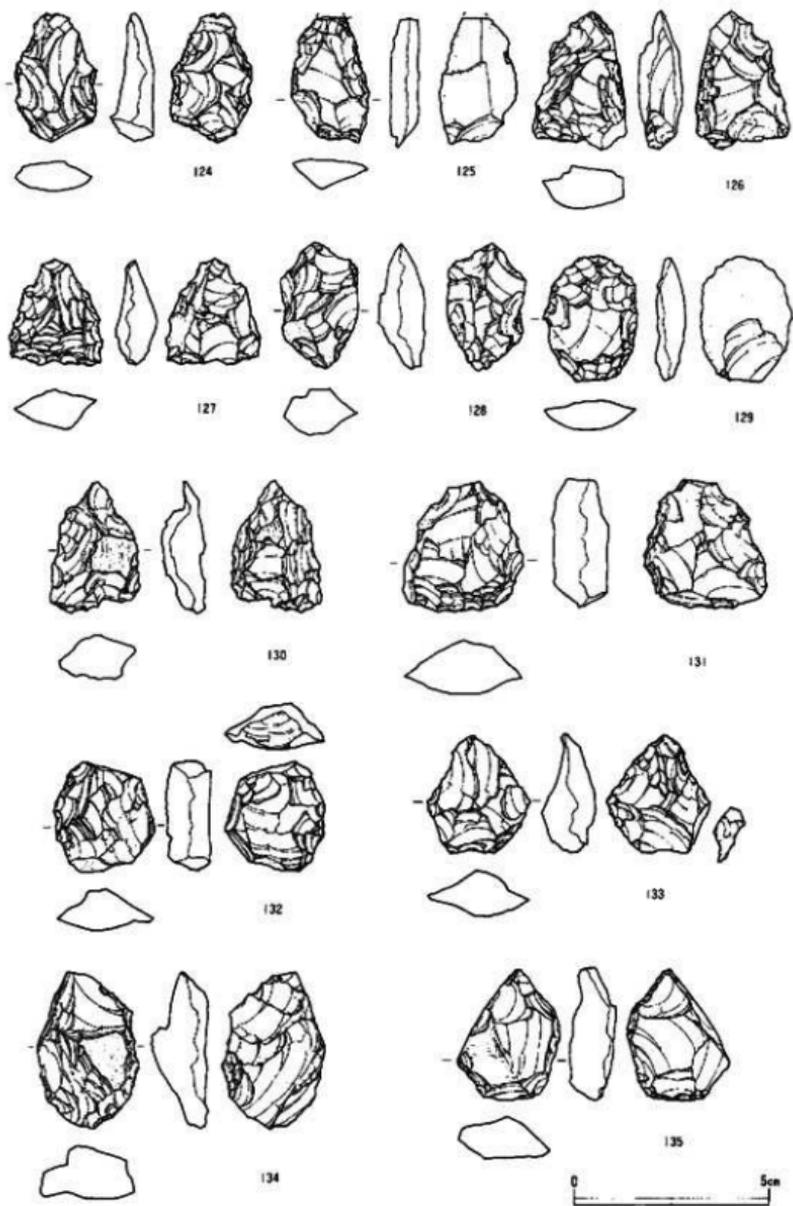
第256图 绳文石器夹图(3)



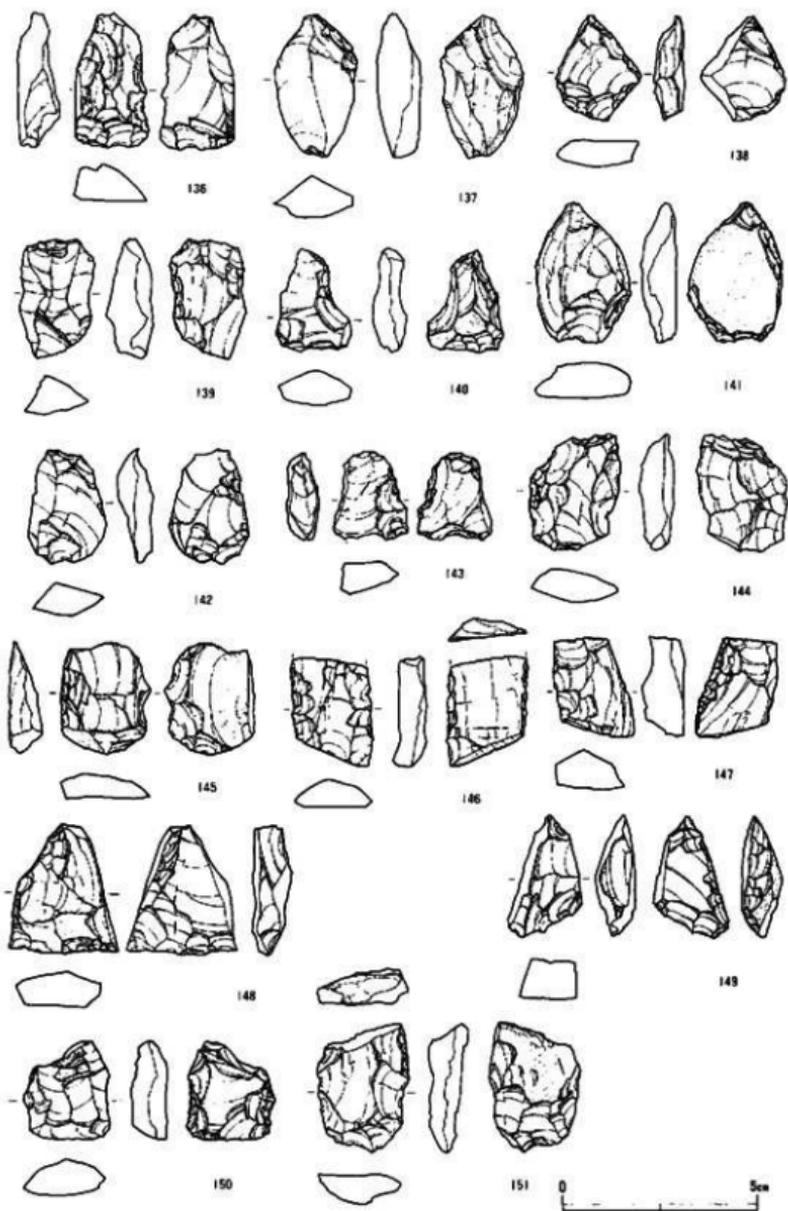
第257图 绳文石器实例图(4)



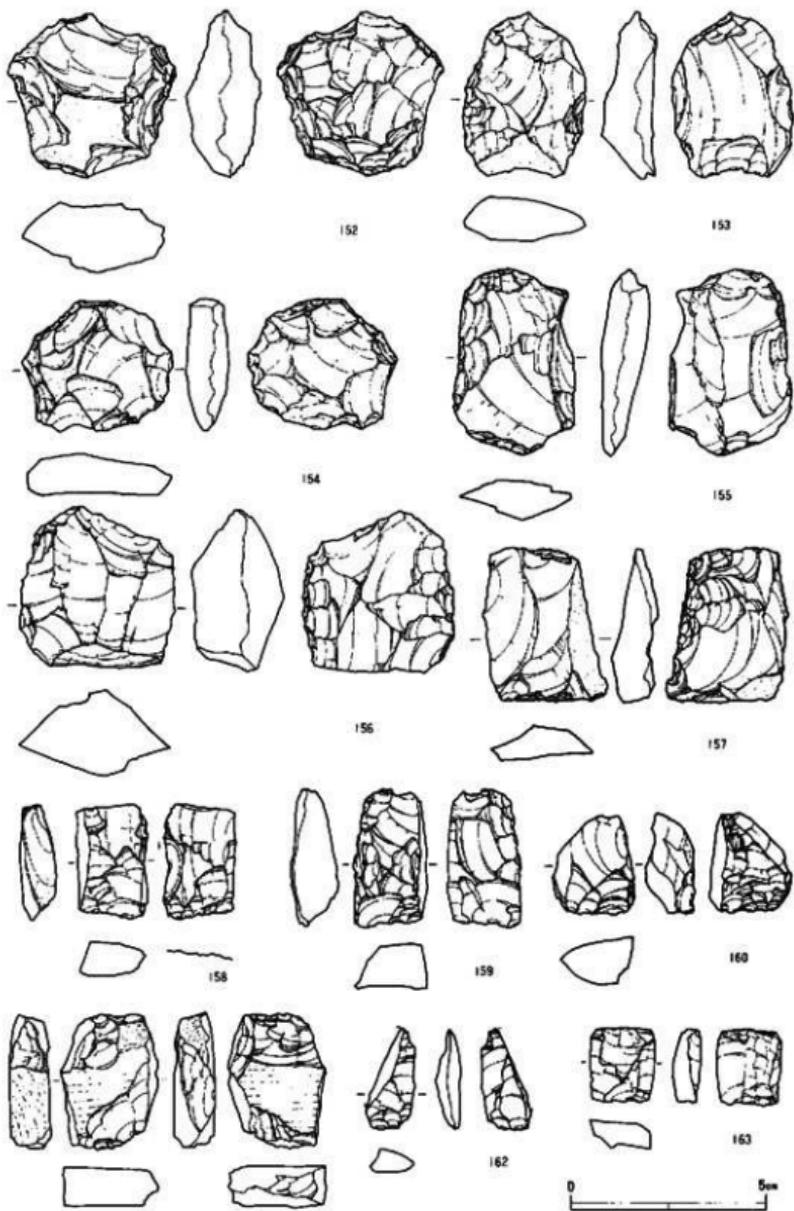
第258图 绳文石器实例图5



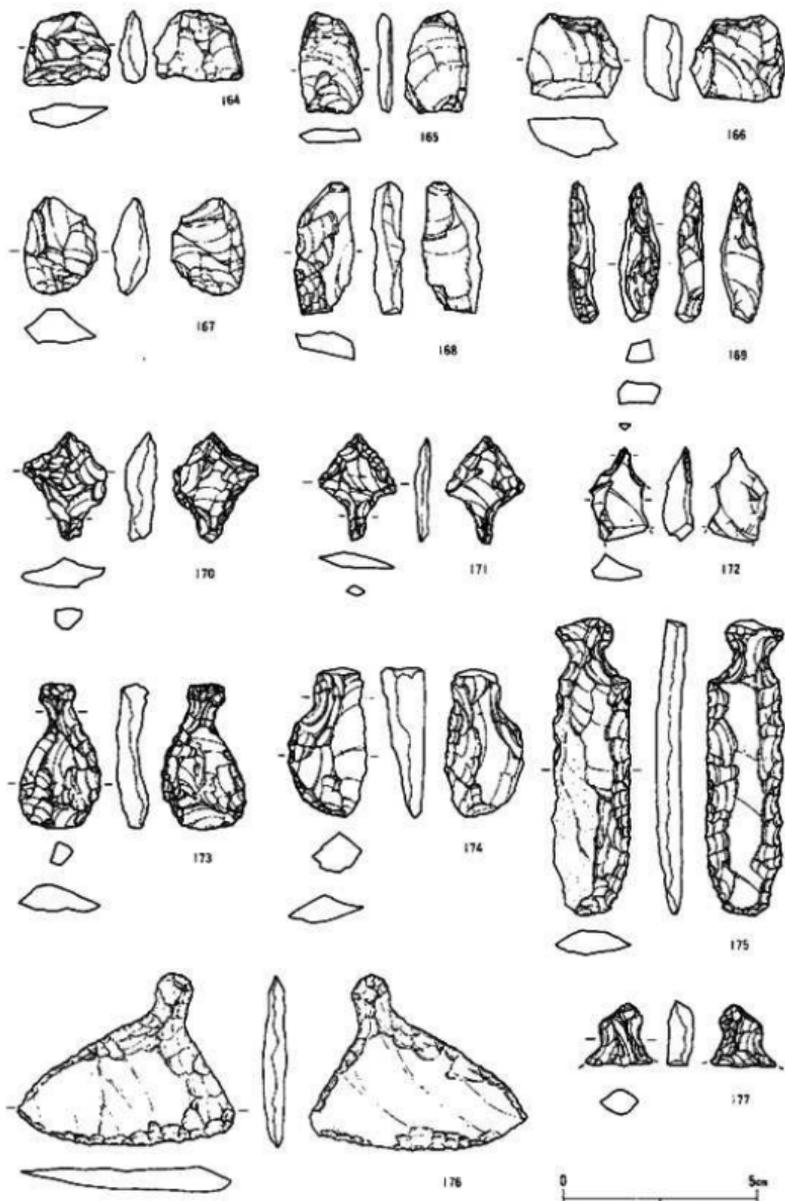
第259图 绳文石器实例图(6)



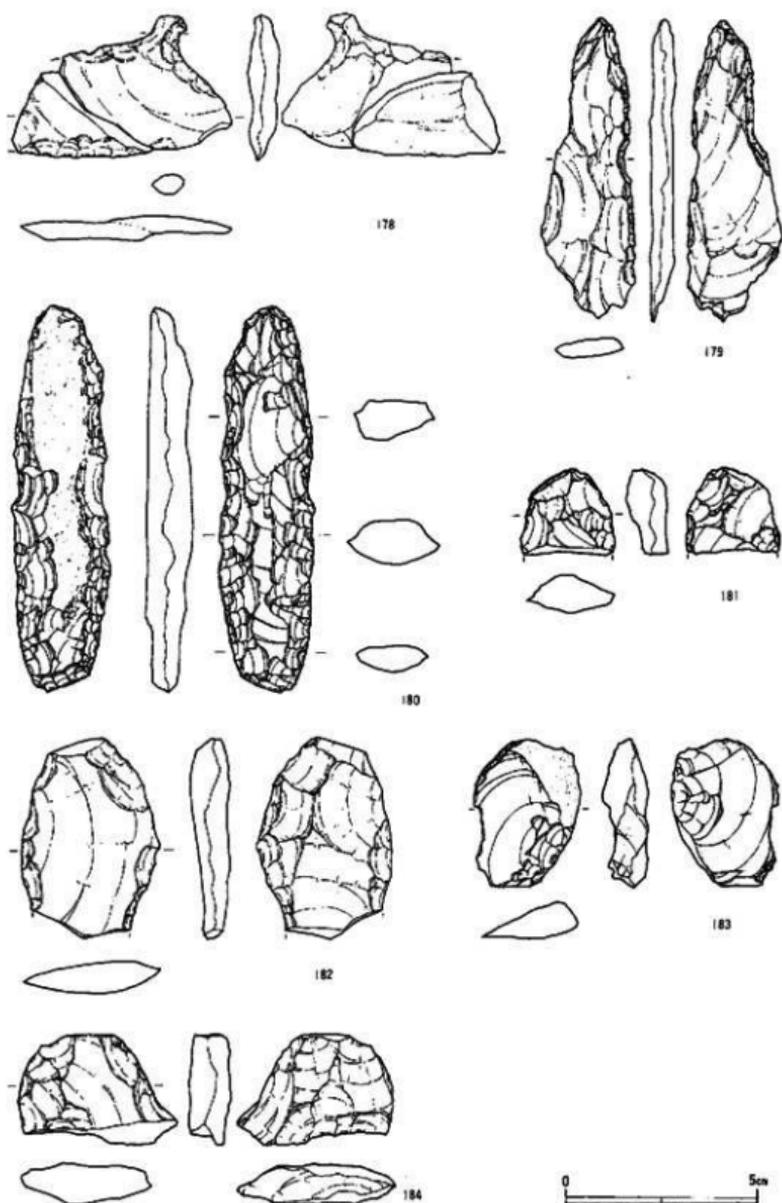
第260图 绳文石器实例(图7)



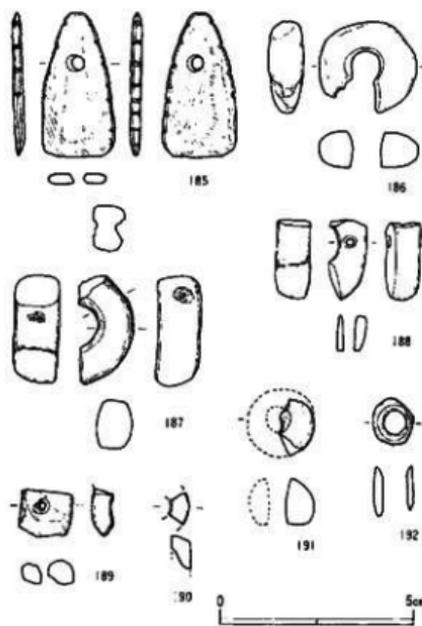
第261圖 縄文石器実測(續8)



第262圖 繩文石器実測圖(9)



第263图 绳文石器实例图(10)



第264図 縄文石器実測図(1)

の明確なものである。

95～168は石鏃の未製品である。95～110は剝離が全面におよんでいないが、定形化した石鏃にかなり近い形状を示すもので比較的薄い剝片を使用している。111～151は分厚い剝片の周縁部を加工したもので大きさは定形化した石鏃とほぼ同じである。152～157は比較的大形な剝片を利用したもので厚みもかなりある。158～168は両極加工による楔状の剝片で、石鏃の未製品と判断した。

#### 石鏃 (第262図169～172、図版88)

169は細身のもの、170・171は周縁部に剝離を施し両翼をもつもの、172は先端部のみを加工したものである。

#### 石匙 (第262図173～第263図184、図版88)

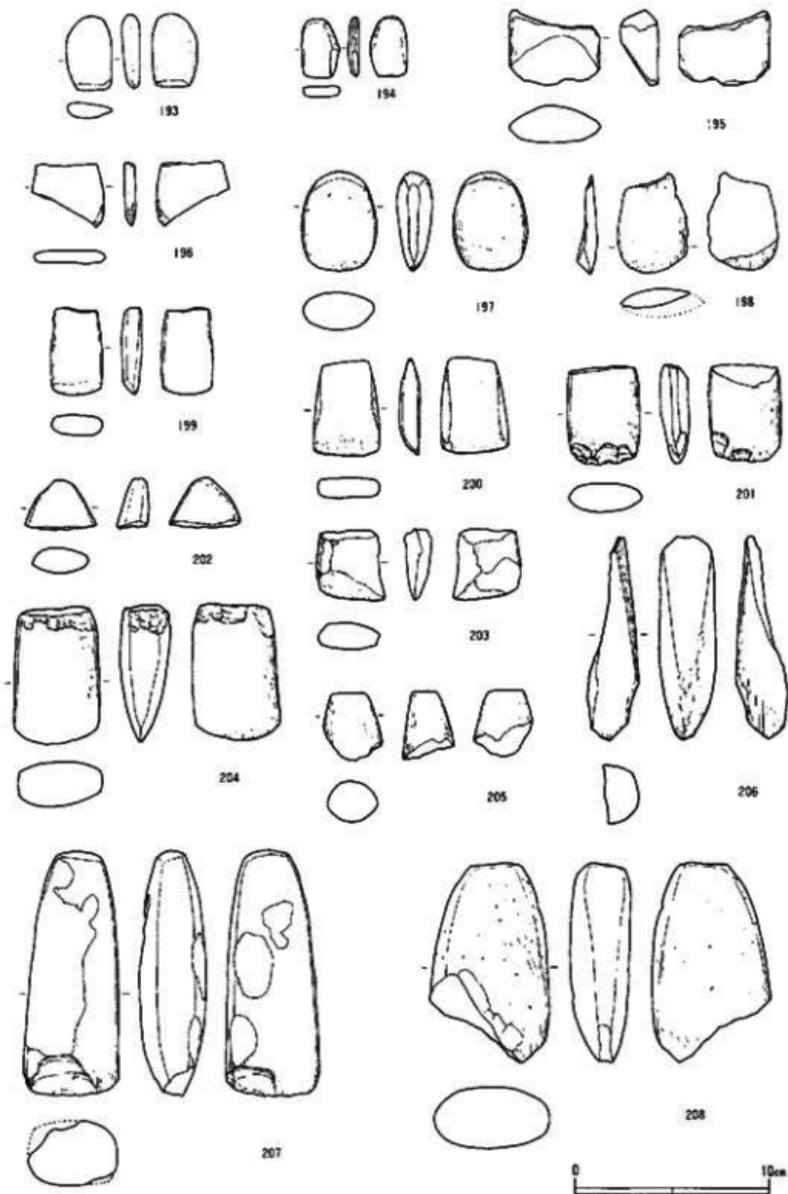
173・174は握み部をもつ縦長の小形、175は自然面や主要剝離面を残し周縁部に細かい剝離を施した縦長の大型品である。177は握み部の破片。176・178は三角形に近い横長の石匙で頂部に握み部をもつ。179は細長い横長剝片の右側縁と左側縁の先端部側に簡単な剝離を施した粗雑なものである。180は片面に自然面を残すほかは丁寧な剝離を行う縦長のもの、先端部は斜めに刃部を作出している。181・182・184は横長の石匙と同様の安山岩を使用したもので周縁部に簡単な剝離を施しているだけである。183は先端部に細かい剝離を施した簡単なものである。

#### 垂飾品・玉類 (第264図185～192、図版92)

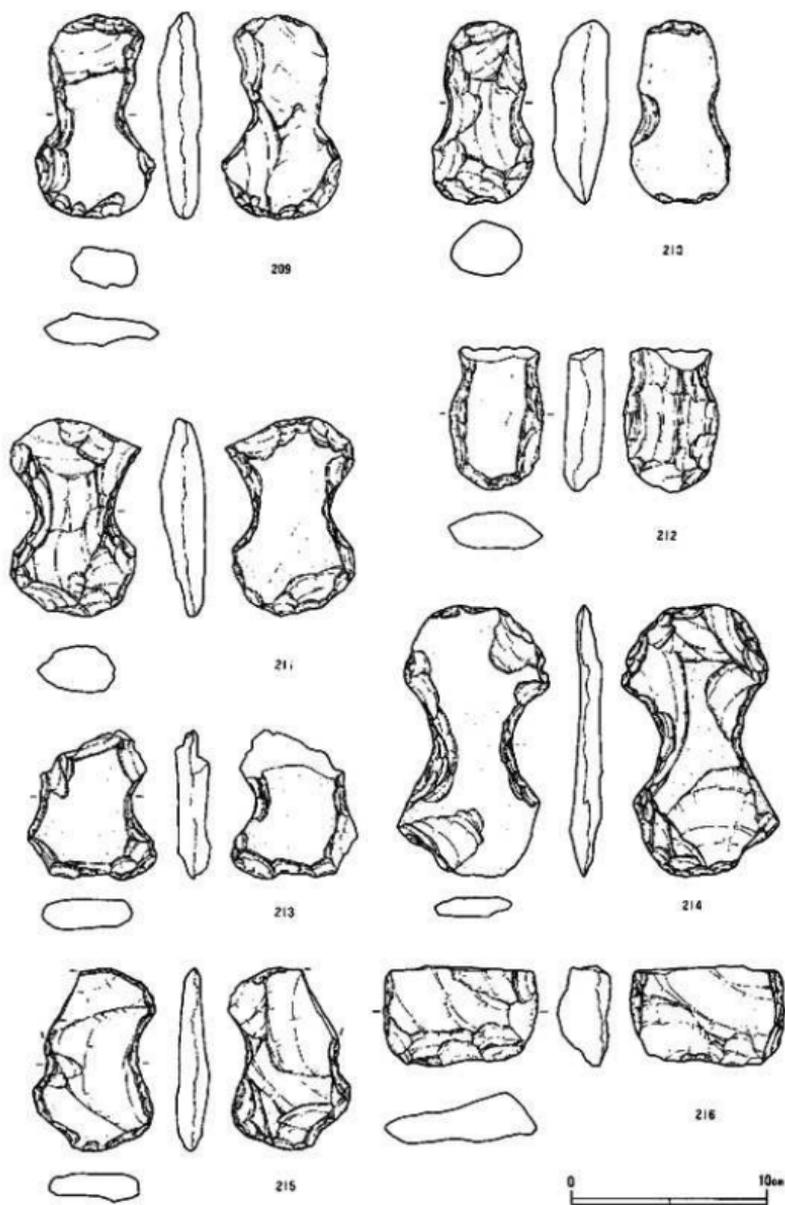
185は撥状の小形品で、上部中央を穿孔している。側縁にはほぼ等間隔に刻み目を施している。186は球状耳飾りであるが、片側は欠損後に再加工を施しているため非対称である。断面形は半円である。187～189は球状耳飾りの破損品で、187は穿孔途中のもの、188・189は穿孔を施したもので、ともに垂飾品として再加工を施したものである。190・191は玉の破片、192は筒状の玉である。

#### 磨製石斧 (第265図193～208、図版89)

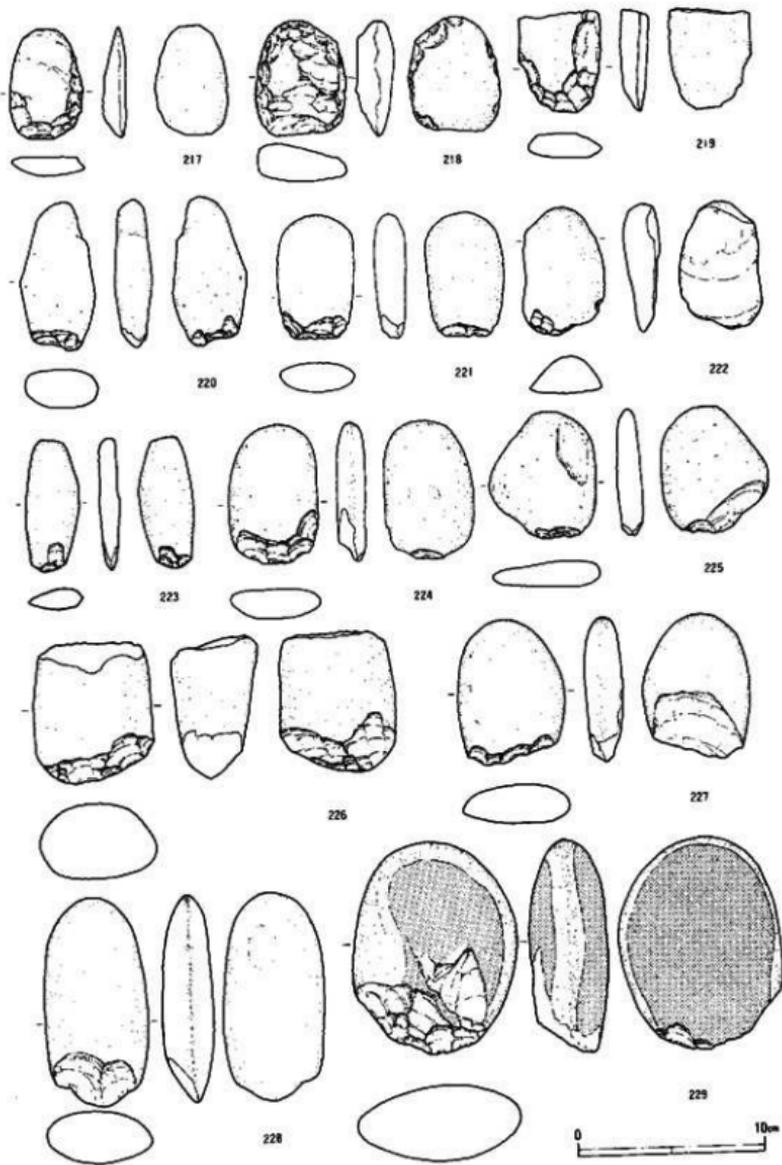
193・196は扁平な川原石の先端を両面から研ぎだすようにして刃部をつくっている小形品である。197は両面・側面とも磨かれているが自然石の形状を留めている。194・199・200は小形



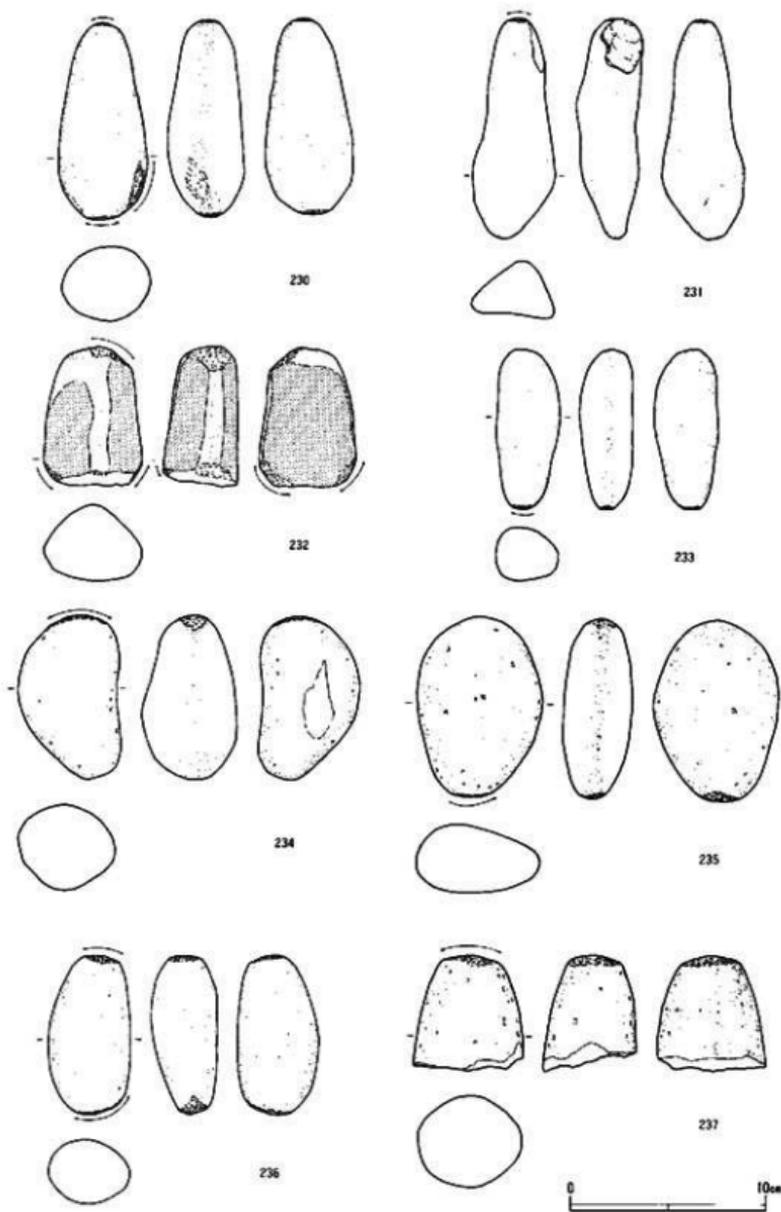
第265图 绳文石器实例图(12)



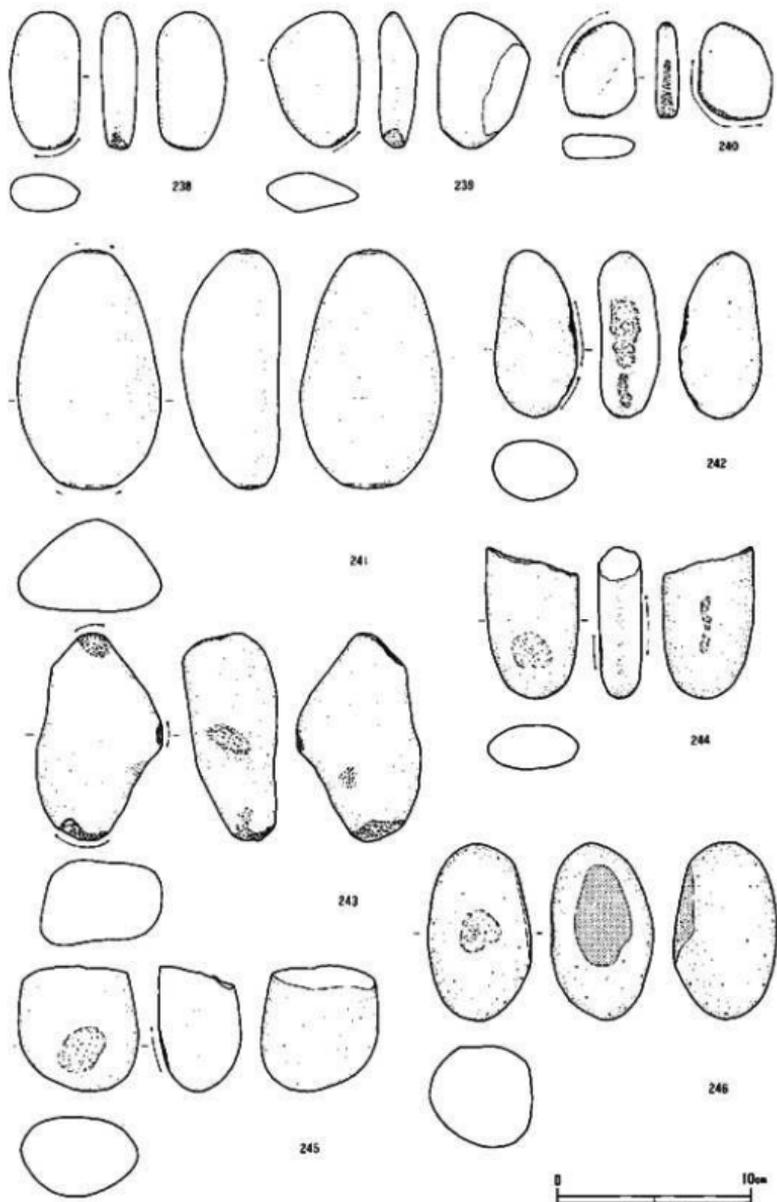
第266图 绳文石器实测图⑬



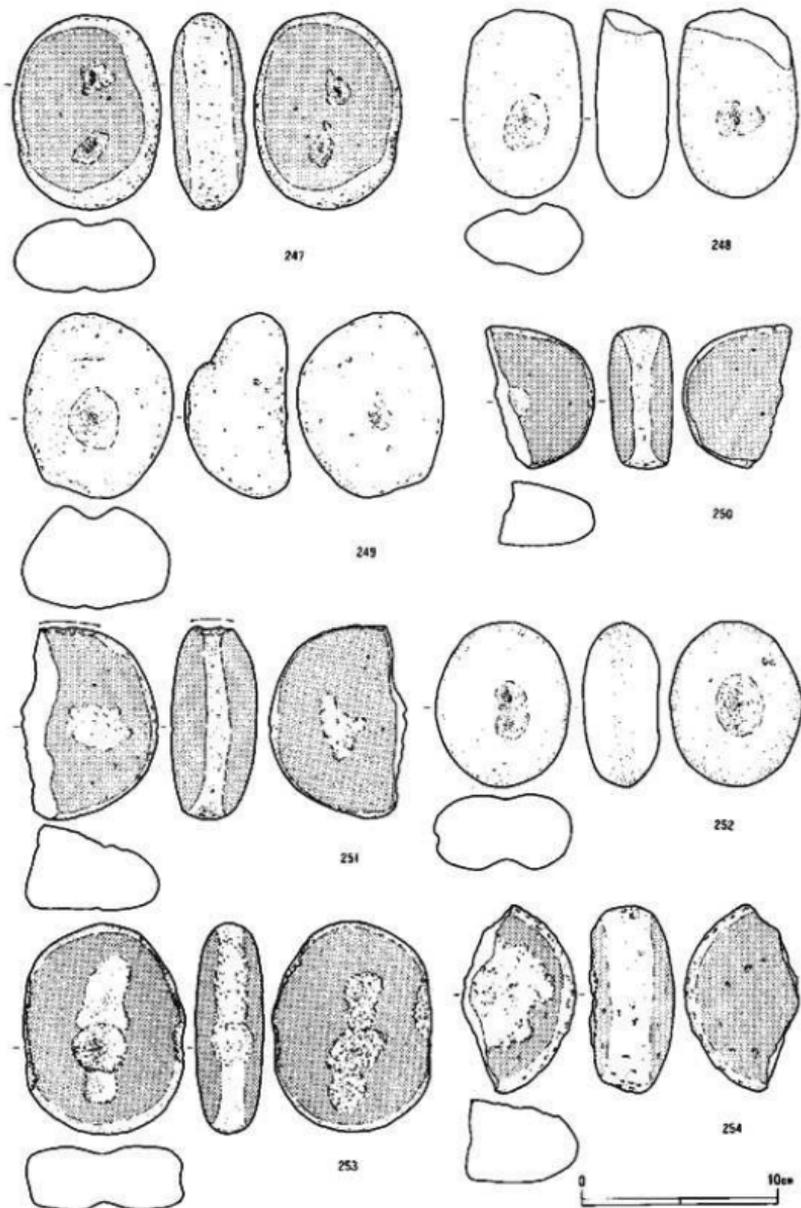
第267图 縄文石器実測図④



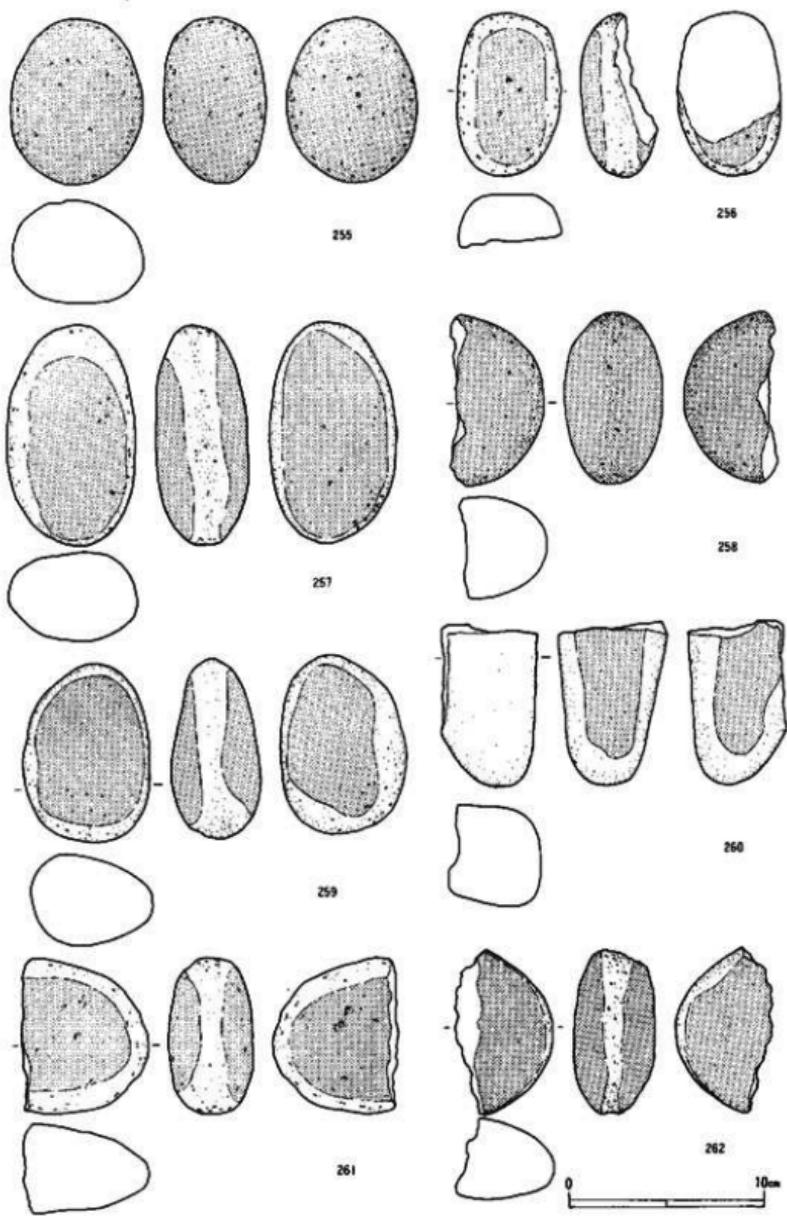
第268图 绳文石器类测图⑨



第269图 縄文石器実測図6



第270回 縄文石器実用図説



第271图 縄文石器実測図08

の片刃状を示す。その他は両刃の石斧で201は刃部に刃こぼれ痕が認められる。206～208は大形品である。

#### 打製石斧（第266図209～216、図版89）

すべて中央部に挟りをもつ分銅形である。自然面や大剝離痕を多く残し、側縁部と刃部に細かい剝離を加え形を整えている。209の挟り部分には装着時の摩滅痕が認められる。

#### 刃器（第267図217～229、図版90）

自然面を多く残し、刃部のみを作出しているものである。素材は安山岩製の川原石が多い。217～219は比較的丁寧な剝離で刃部から側縁部に剝離を施しているが、220～229は刃部のみの加工に留まる。229は磨石を再加工している。

#### 敲き石（第268図230～第269図246、図版90・91）

細長い川原石の片側あるいは両側の先端部に敲打痕の認められるものが多い。232は破損した磨石を転用し断面三角形のそれぞれの角に敲打痕を認める。240はほぼ全周する。241は先端部が磨いたように光沢をおびている。242は側縁部に、244～246は平坦部分に敲打痕を認める。246は敲打痕をもつ反対の面が磨られている。

#### 凹石（第270図247～254、図版91）

片面もしくは両面に窪みをもつもので、両面を磨っているものも目立つ。251・253は側縁に敲打痕を認める。

#### 磨石（第271図255～262、図版92）

両面あるいは全面を磨ったものが多い。255・258は全面を磨っている。

### 第4節 まとめ 一花積下層式期の集落について

石搨遺跡の縄文時代遺構、遺物は多くの問題を投げかけている。最も特筆すべきなのは、千葉県で見つかった数少ない花積下層式期の集落遺跡であるということで、出土した遺物を含めて重要な資料となるものと思われる。ここではページ数の都合により、出土した土器に関する考察は別の機会にゆずり、集落に関していくつか考察するにとどめたい。

#### （1）各住居の形態について

今回検出された花積下層式期の住居跡は全部で21軒あり、その他に土坑が11基検出されている。台地全面を調査したわけではないが、遺構の配置などから調査区外に遺構が存在する可能性は低く、調査区内で完結する集落であることは間違いないと思われる。遺物の出土状況はあまり良好でないため、遺物から時期を決定するのはかなりの困難が伴ったが、おおよそ燃糸圧痕文土器の分類によって大きく3時期に分けられると思われる。燃糸圧痕文Aa種を出土したのは032の1軒のみである。燃糸圧痕文Ac種を出土したのも010の1軒のみである。その他の19軒は、基本的に燃糸圧痕文Ab種になるものと思われる。こうして数だけを見ると、Aa種の時期に

始まった石揚遺跡の花積下層式の集落は、Ab種の時期に至って爆発的に増え、その後Ac種の時期に至って急激に衰退していくかのような印象を与える。事実、「新田野段階」や「二ツ木式」に属すると思われる資料は全く存在せず、この時期には石揚遺跡では人間の活動痕跡が確認できなくなる。したがって、集落遺跡としての継続期間はそれほど長くない、花積下層式期中葉から後半にかけてのやや短い期間と考えることができる。ただし、燃糸庄痕文Ab種の時期に19軒の住居が存在したという事実から、独立した19戸の世帯が同時存在したと短絡的に解釈することはできない。遺構配置図を見ると、二つの住居が極めて近接して構築されている例が多いことに気づく。例えば030と031、048と049などは、各々独立した世帯の住居のあり方としては、異常に近接しており、もしこれらが同時に存在していたならば、上屋はくっついてしまう。当然時期差があると考えるべきではあるが、さらにこれを同じ世帯による建て替え、作り替えと単純に解釈できるかという点、そうは言い切れない。その理由として、住居の形態の違いをあげることができよう。花積下層式期の21軒の住居は全てが同じ形態をしているわけではなく、大きく5種類に分類できる。1類は正方形に近い不整形をもつもので、010住居が当てはまる。2類は隅丸長方形形のプランをもち、細い柱穴が壁際をめぐるもので、009・012・019・030・045・046・047・048・055が当てはまる。3類は楕円形ないしはそれに近い不整形のプランをもち、やはり細い柱穴が壁際をめぐるもので、018・020・031・032・033・049が当てはまる。4類は円形はやや小さいプランをもち、柱穴が全くないか極めて少ないもので、006・007・055・056が当てはまる。5類は巨大な長方形プランをもつので、017が当てはまる。一般に1～3類に比べ、4類は遺物量が極めて少ない。先に挙げた異常に近接している住居同士の場合、例えば030と048は上記の住居の形態分類でいう2類に分類されるものであり、片や031と049は3類に分類されるというふうに、形態の比較からも同じ機能をもった家屋の建て替え、作り替えと単純に考えることはできない。住居の形態の違いには、単なる時期差以外の理由が考えられて然るべきである。特に4類は通常の居住空間としては狭すぎるうえ、柱穴がほとんどないなど構造上からも、ほかの住居に比べ明らかに性格を異にする住居といえる。同様に5類についても、前期初頭としては他に例を見ない巨大なプランを見る限り、通常の居住空間とは思われない。出土遺物からは確たることはいえないが、機能差を認めるのが最も適切であろう。それとは別に、同じ形態になると分類しておきながら、006と007や045と046などのようにかなり近接している例もみられる。これらも上屋がくっつくことはないにしても、同時存在とするには不自然なほど近すぎる。こうした住居同士は建て替え、作り替えとみなすのが適当であろう。そうして考えていくと、同時に存在した住居はかなり少ない数に落ち着くものとみられ、独立した世帯はさらに少ない数に落ち着くものとみられる。

## (2) 住居群の配置について

遺構配置図を見ると花積下層式期の21軒の住居はやや変則的ながら環状に配されており、仮

に方形周溝墓の構築などによって失われた住居があったにせよ、全体の配置状況に対する推測を大きく変えるものではないと思われる。これらの住居群を概観した場合、次のような事実が観察できる。

①環状に配された住居が等間隔に並ぶわけではなく、4～6軒でかたまる傾向が見られる。具体的には006・007・010・033で一群、018・019・032・045・046・056で一群、020・045・046・047で一群、012・030・031・055・057で一群となるようである。②例えば019と032あるいは003と031などのように、近接した住居同士が主軸方向をそろえているような事例が認められる。また、そろえ方についても、030と031のように両者に緊密な関係を推測させるようなものもあれば、019と032のようにそれほど緊密でないような状況を示しているものもある。③住居群全体を見た場合、東側のものは主軸方向を北東方向へとり、西側のものは北西方向へとるという傾向が認められ、特に第5類とした017は、住居群全体を見渡すかのように南にはずれた場所に位置する。

①と②で観察された事実を合わせて、住居がいくつかの群をなしていたと考えることは可能である。同じ群に含まれた住居同士で同じような形態をもち、主軸方向がそろっているものについては建て替え、作り替えといった関係を想定できるし、形態の違っている住居が含まれている場合、違う機能を持った建物同士の併存とみなすことが可能である。機能の異なる複数の堅穴がひとまとまりになって一つの世帯を形成している可能性も充分考えられる。また、③、④で観察された事実をもって、ある程度全体を貫く規制ないしは配置管理があったと考えることも可能である。ただし、上記にあげた事象はあくまでも傾向であって、現段階ではそれ以上のものではない。集落を構成するにあたりどのような規制ないしは配置原理が働いていたか、それが例えば主軸方向の類似や形態あるいは配置状況といった個々の事象にどの程度まで反映されているか、今後の検討課題である。

以上、簡単に考察してみたが、ほかにも各住居が具体的にどのような機能が持たれていたのか、縄文前期初頭の住居について住居の形態と機能を結びつける考え方が適切かどうか、この時期の集落において住居の機能と集落内での配置とを結びつけることができるか、解決すべき問題は多い。また、根本的な問題であるが、花積下層式時の編年研究を推し進めることによって、各住居の時期と集落の変遷についてさらに詳しく分析できるようにする必要がある。

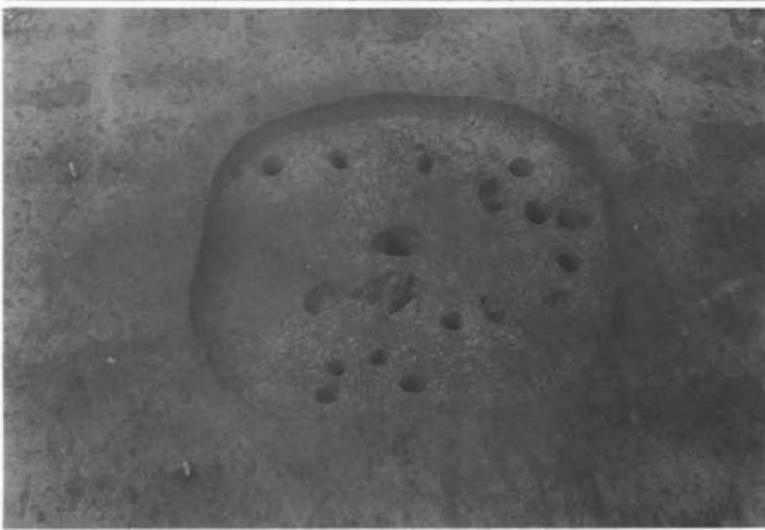
# 写 真 图 版



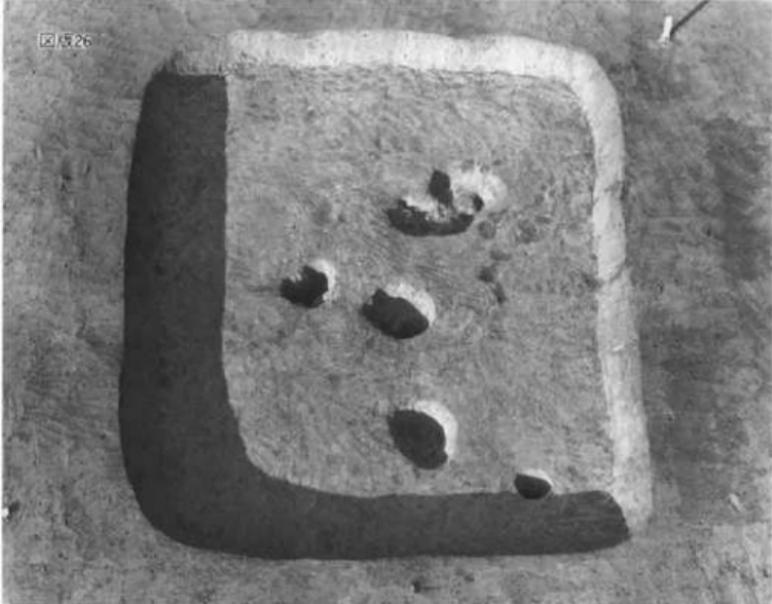
005



006 - 007



011



009



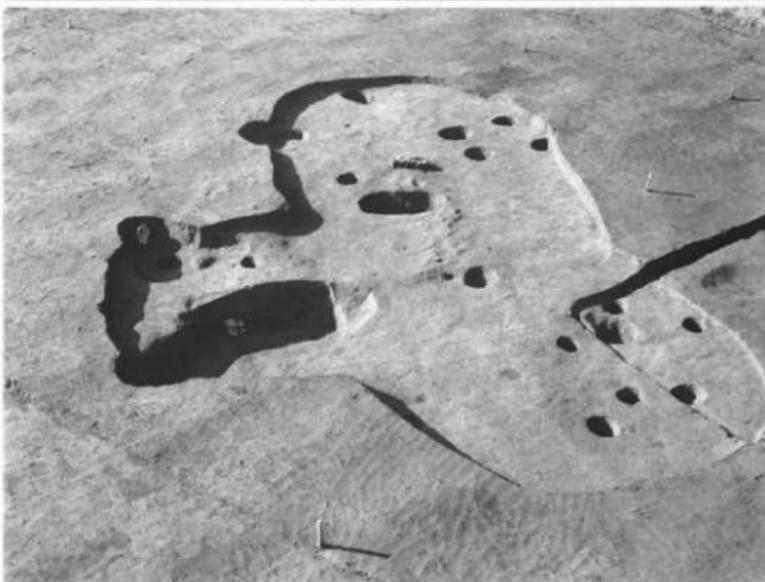
010



010集石



012



016



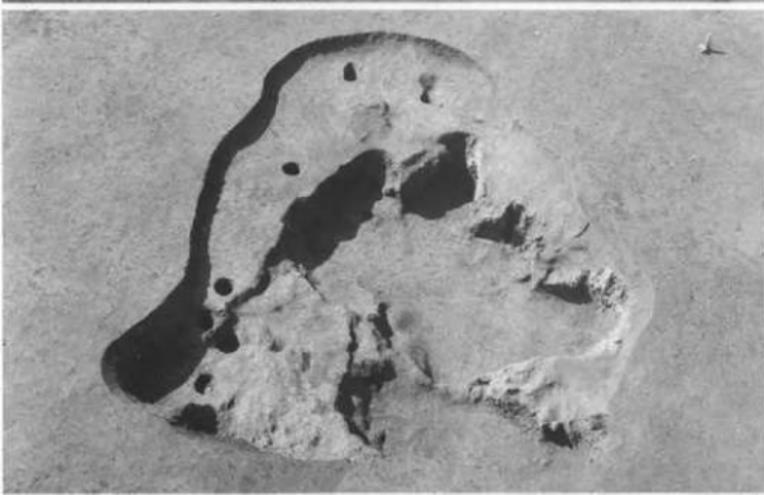
016遺物出土狀況



018



019



020  
P-050

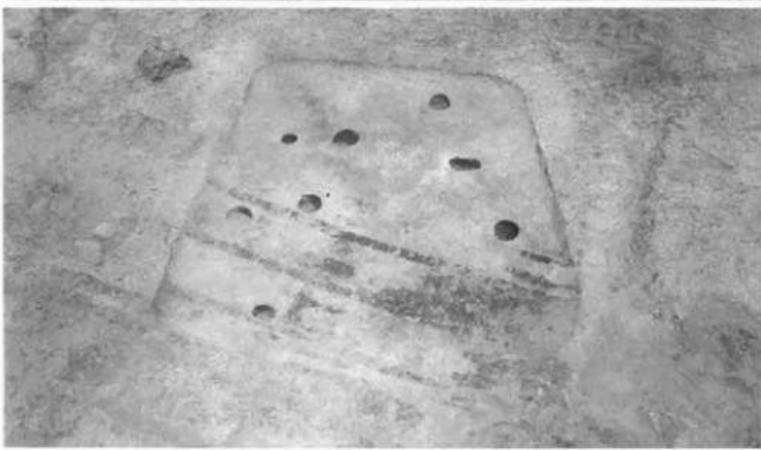
030 · 031



032



045

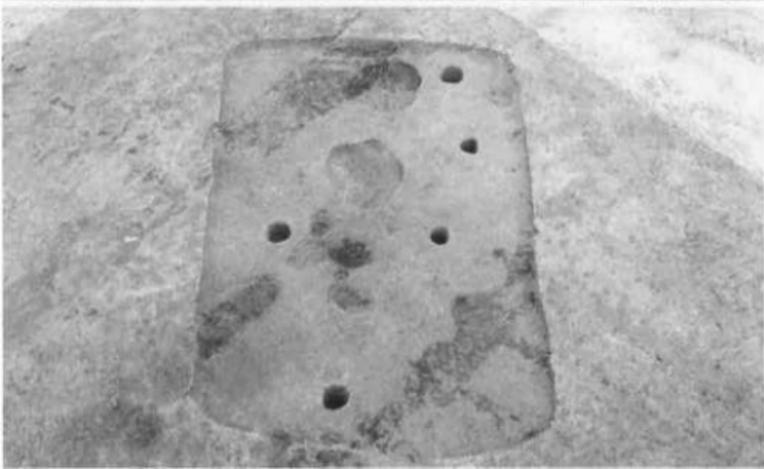




046



046 炉と埋設土器

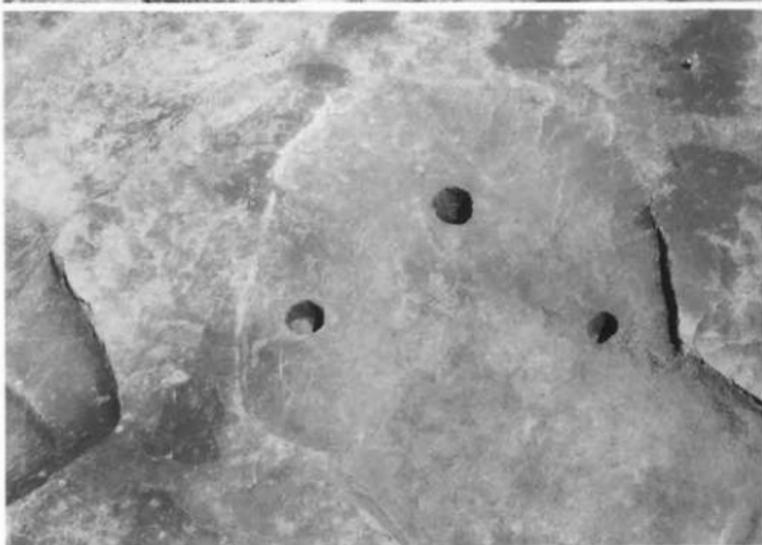


047

048

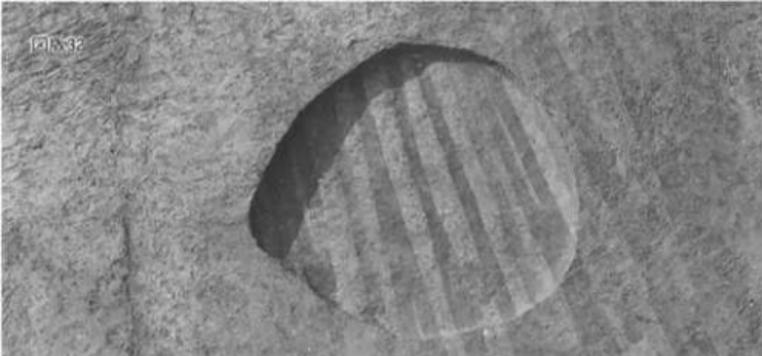


049

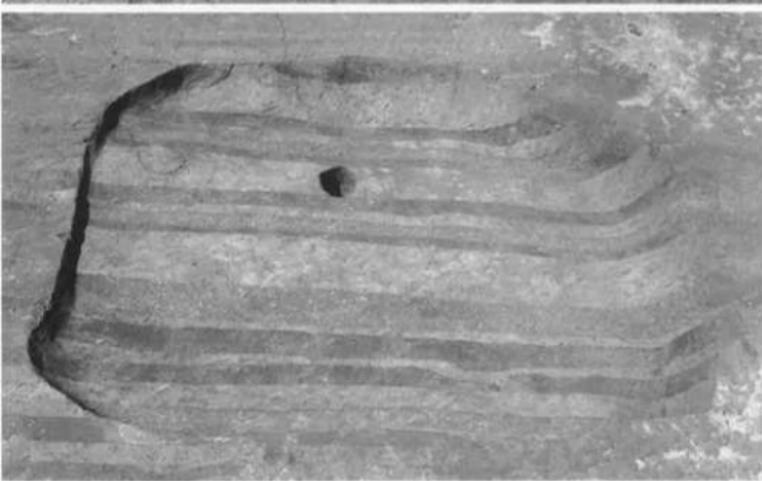


043





056



057



017



029



054



左P-043



右P-045



左 P-036  
右 P-081



P-058



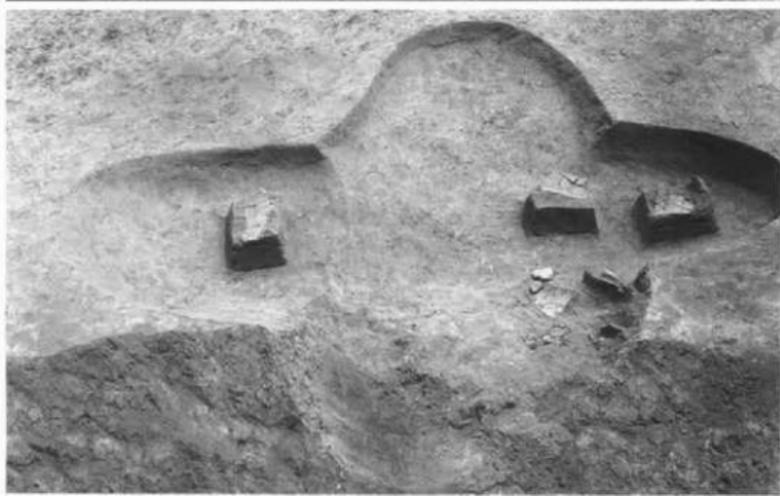
P-106



P-107



P-107遺物出土状況



P-166



P-003



P-003遺物出土状況



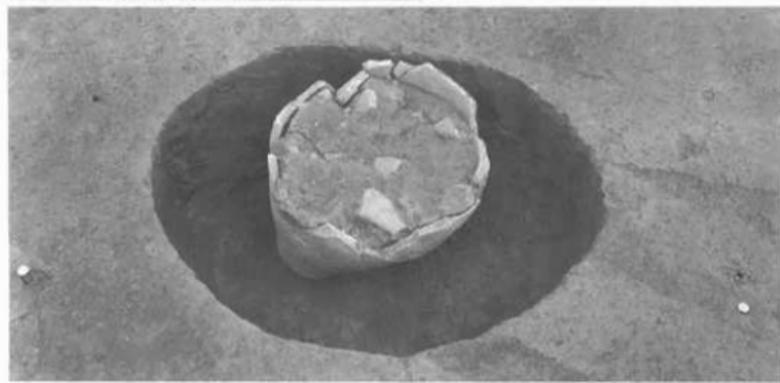
P-117・118



P-055



P-132



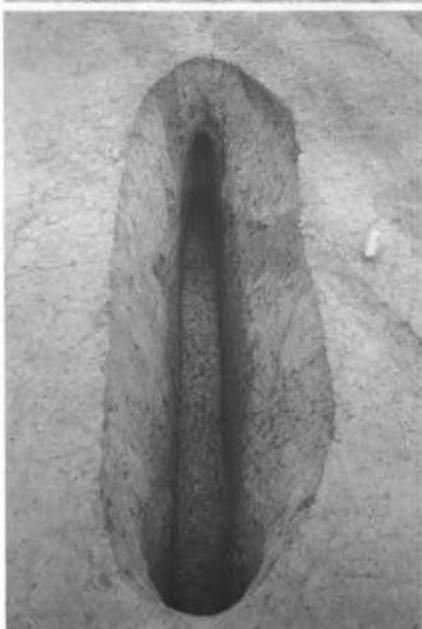
P-137



左P-152  
右P-127

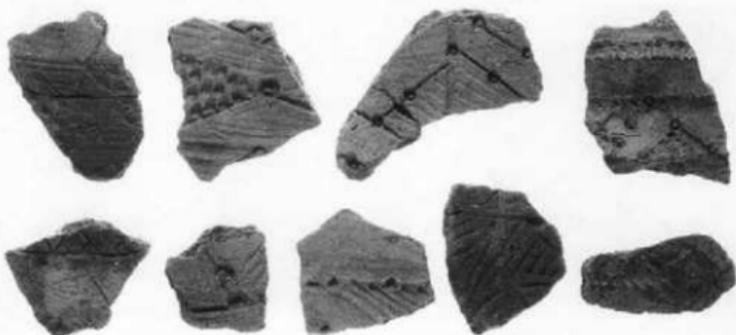


左P-131  
右P-031

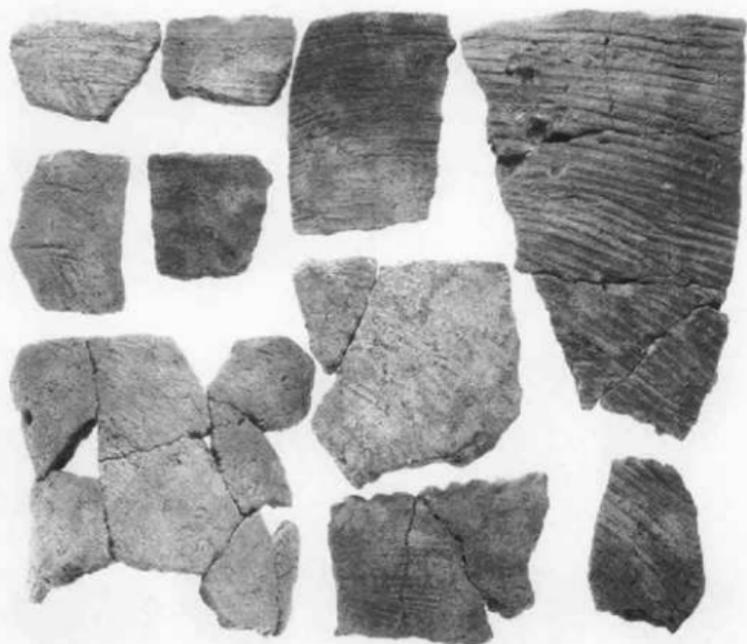


左P-019  
右P-144

005



011

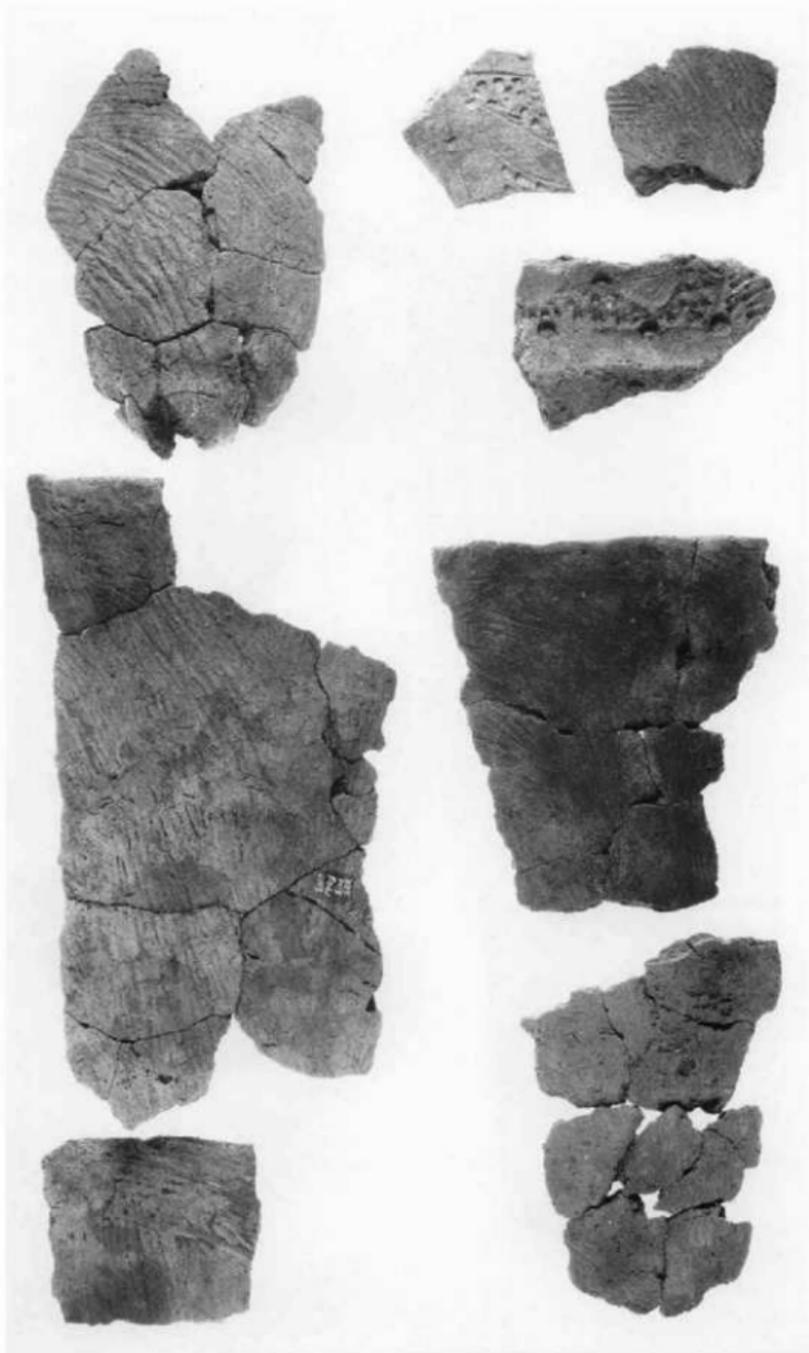




P002

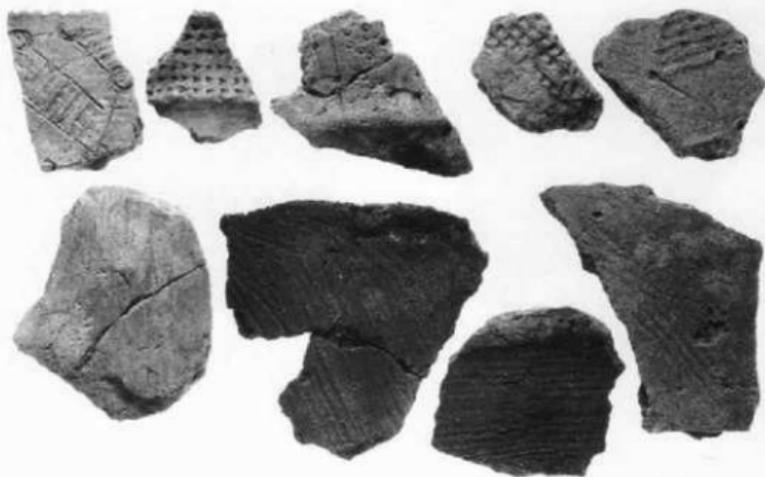


P003



左P032  
右P036

左P042  
右P046



P050



P057



左P058  
右P103



P106



P107



P158



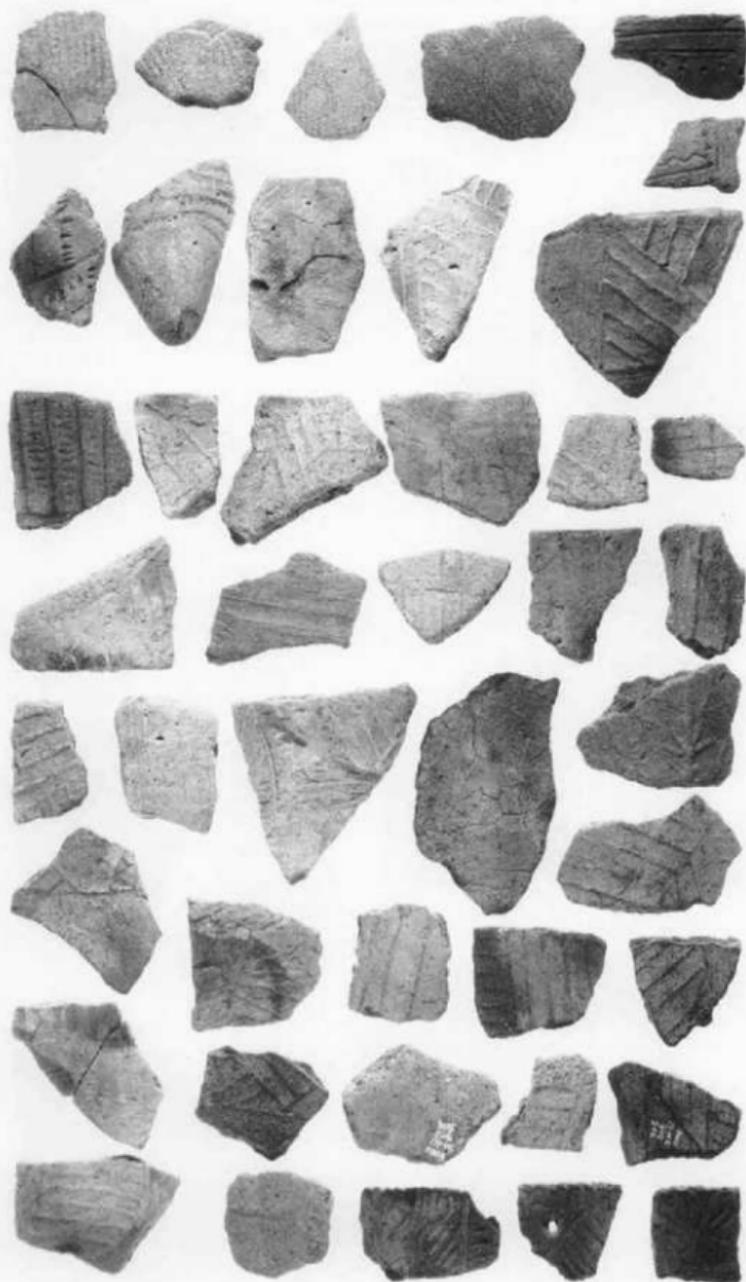
P113



P118

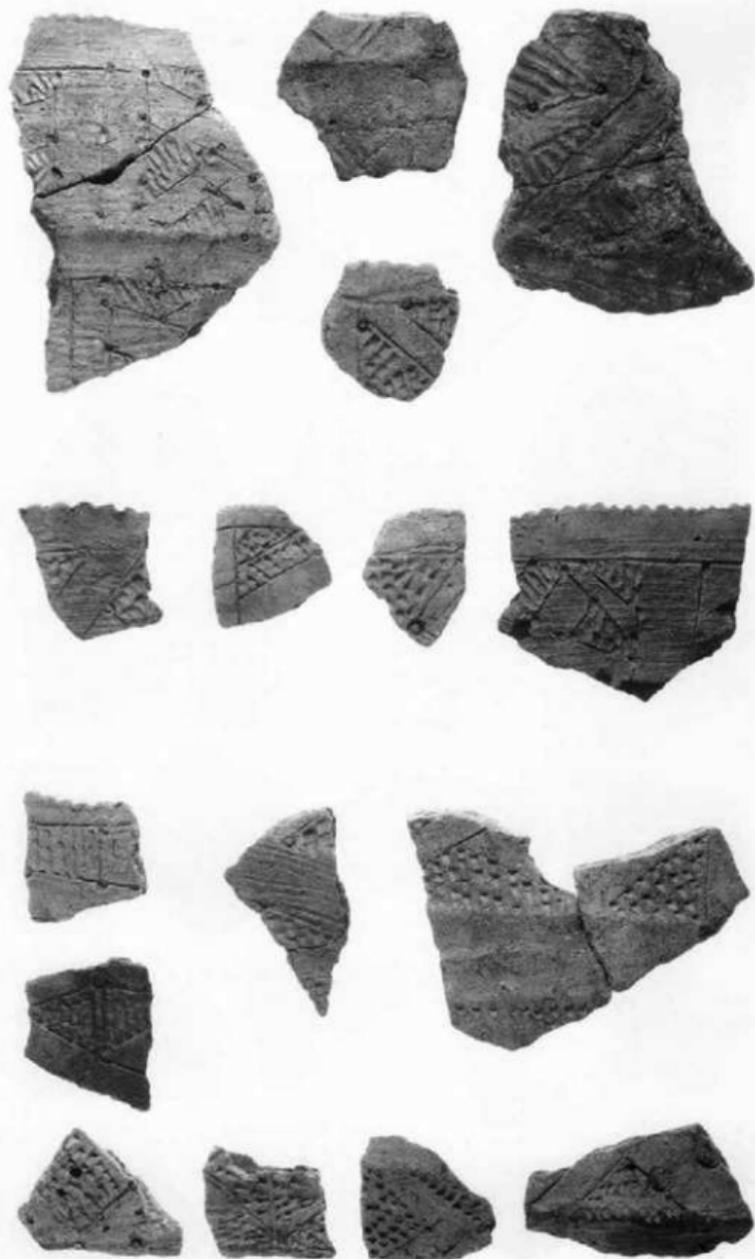


P153



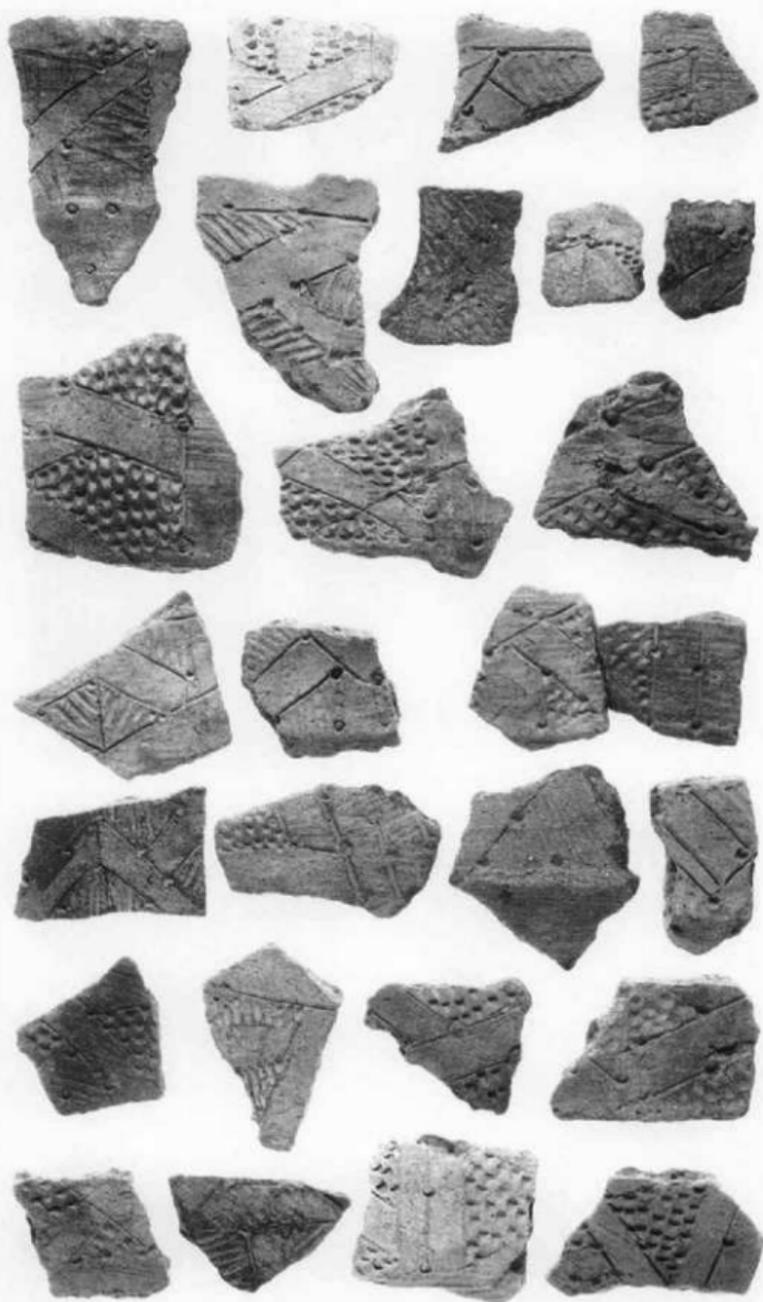
縄文時代遺物(8)

包含層

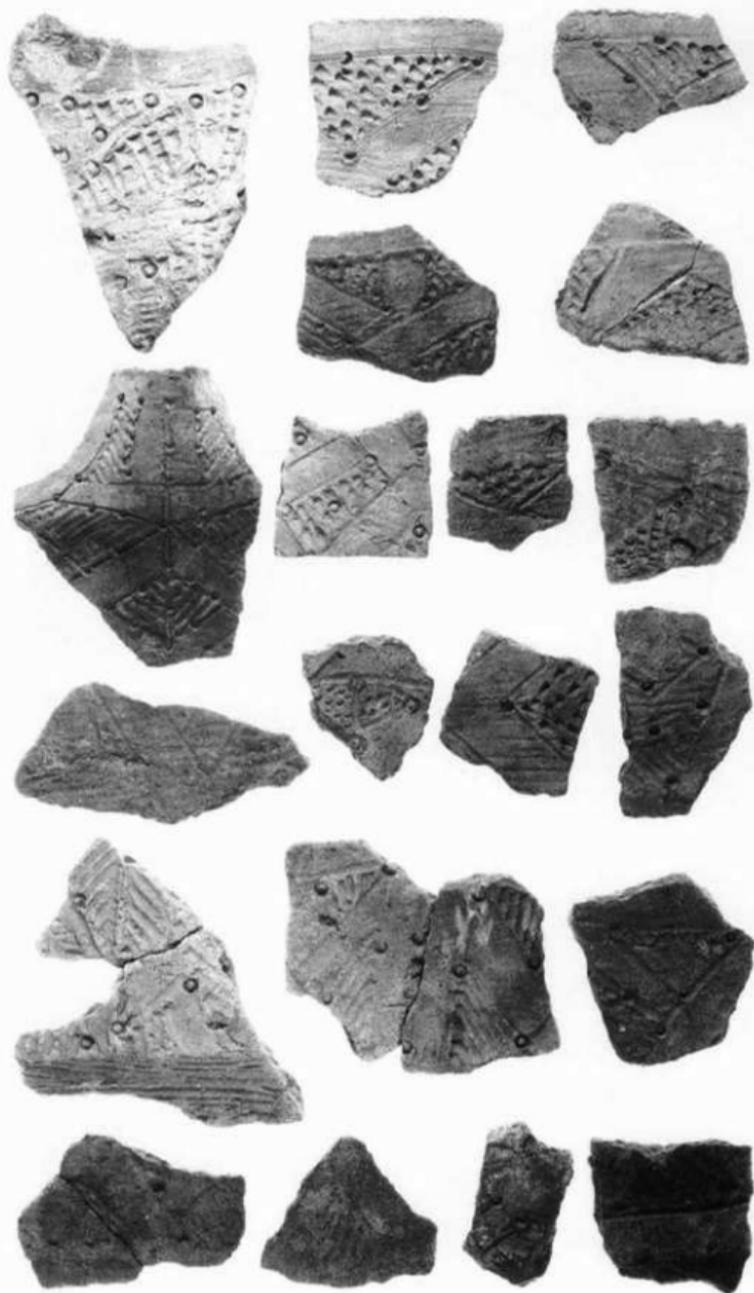


包含層

縄文時代遺物(9)



包含層



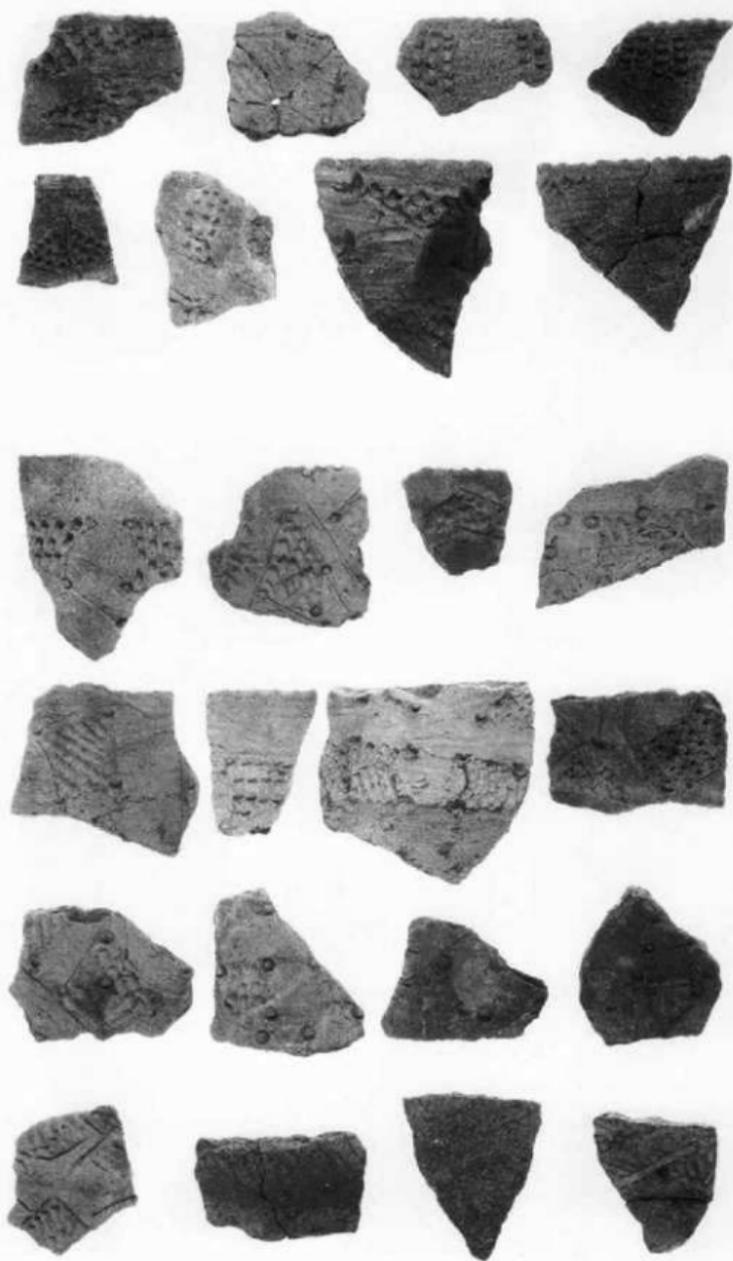
包含層

縄文時代遺物011



縄文時代遺物02

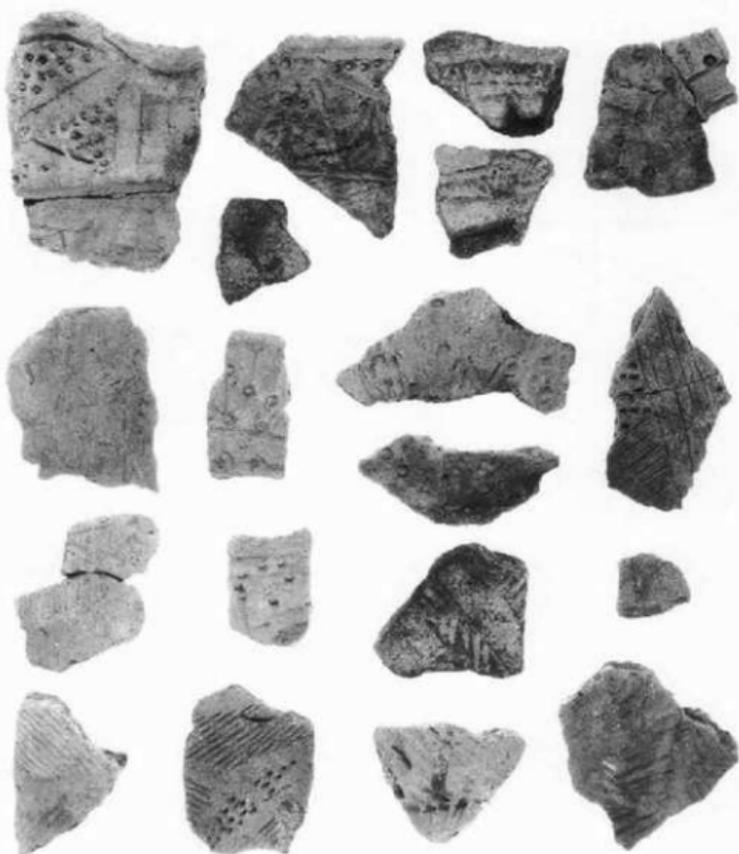
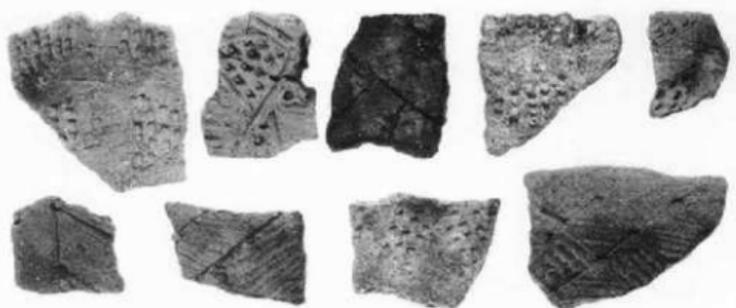
包含層



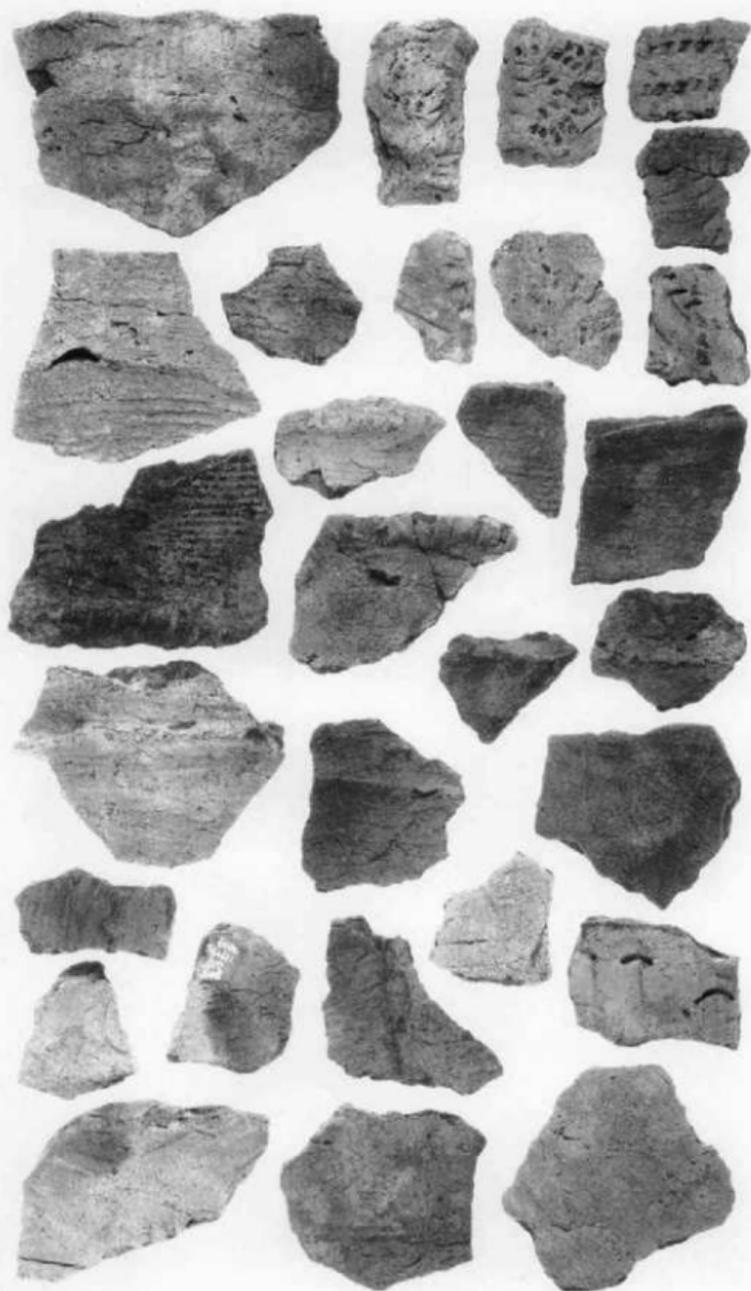
包含層



包含層



包含解



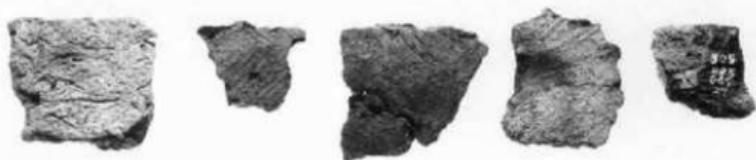
縄文時代遺物10

包含層

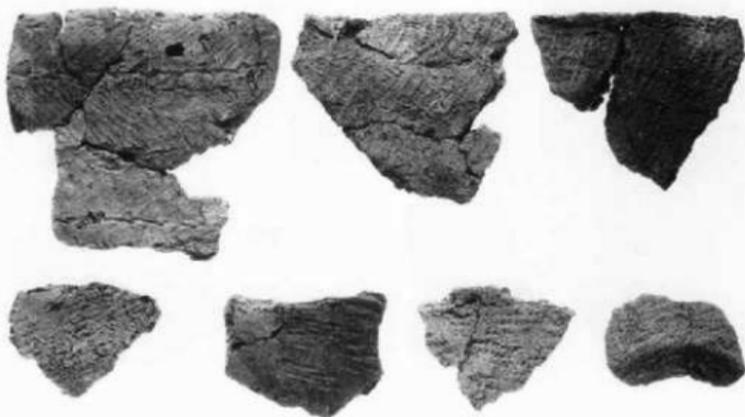
006



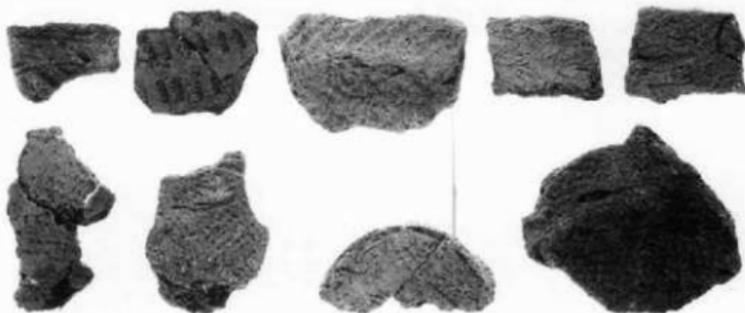
007



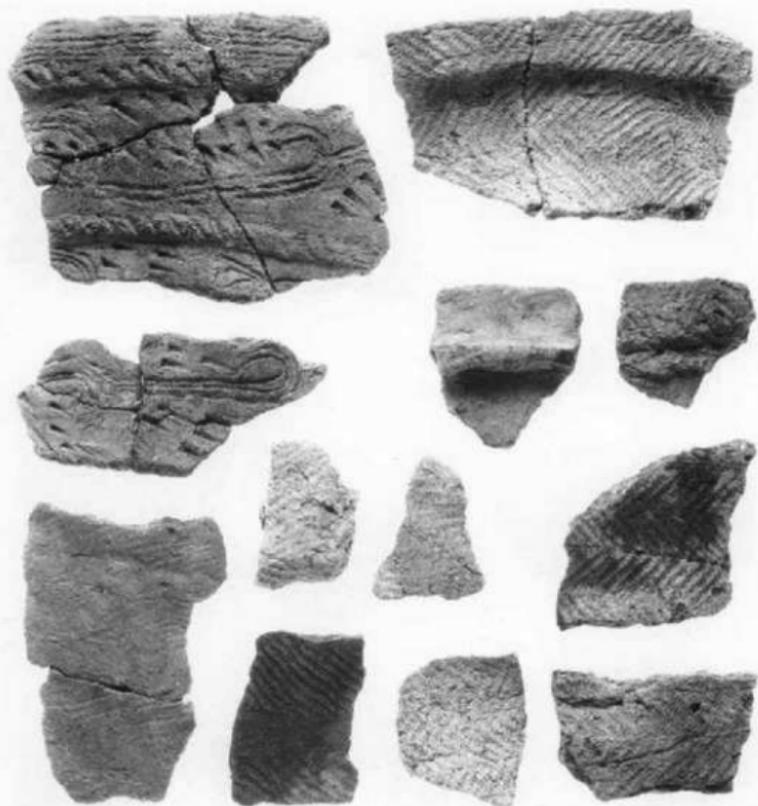
009



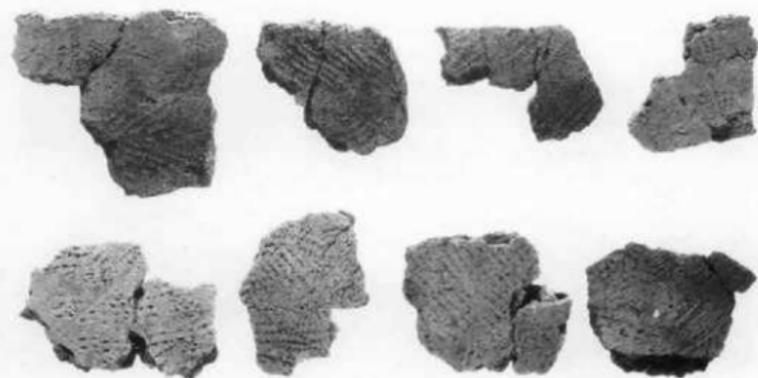
010  
集石土坑



縄文時代遺物07

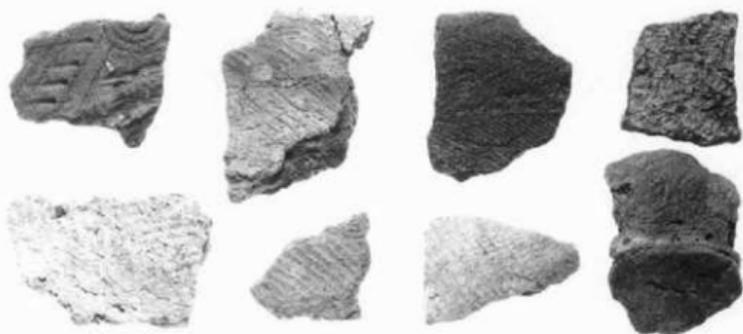


010

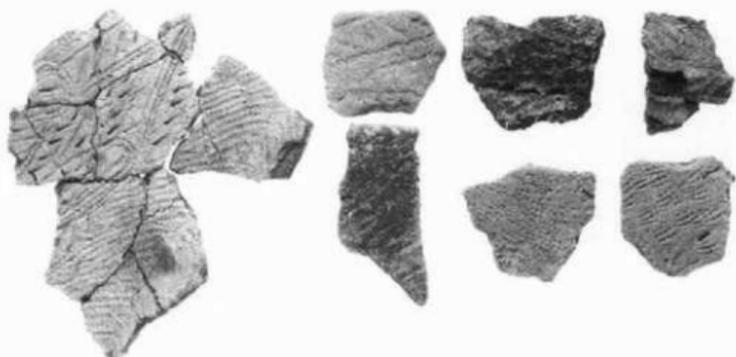


012

018



019



020

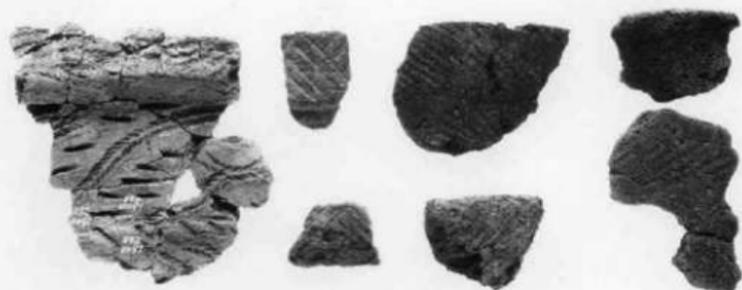




030



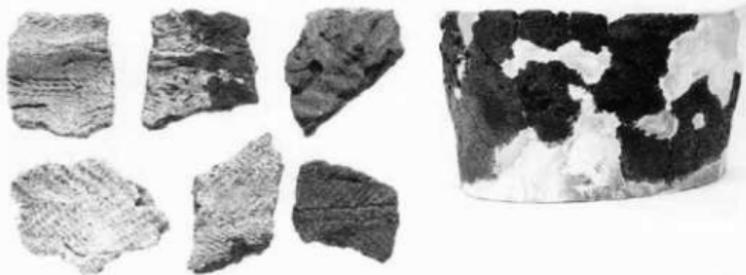
031



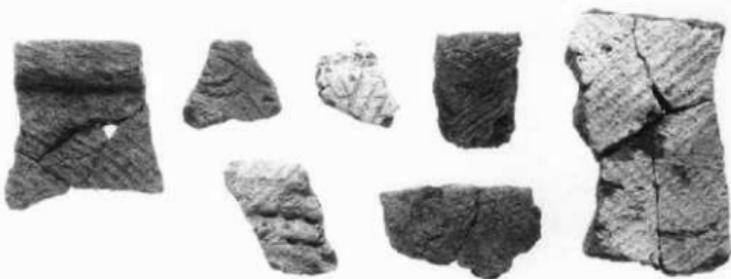
032



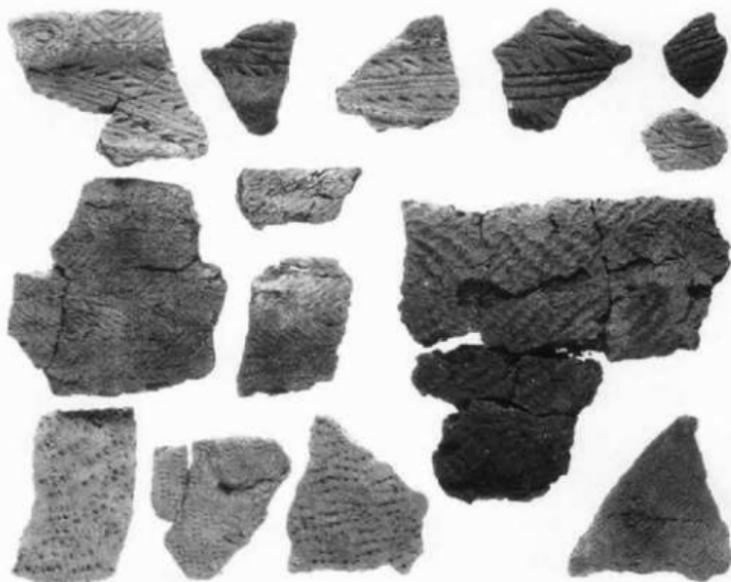
045



046



047



048



049



055



056



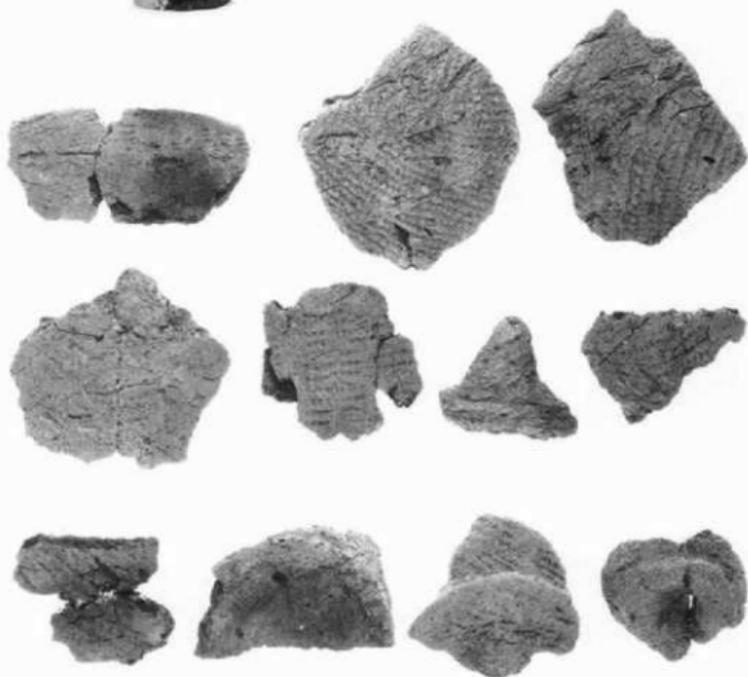
057



P147

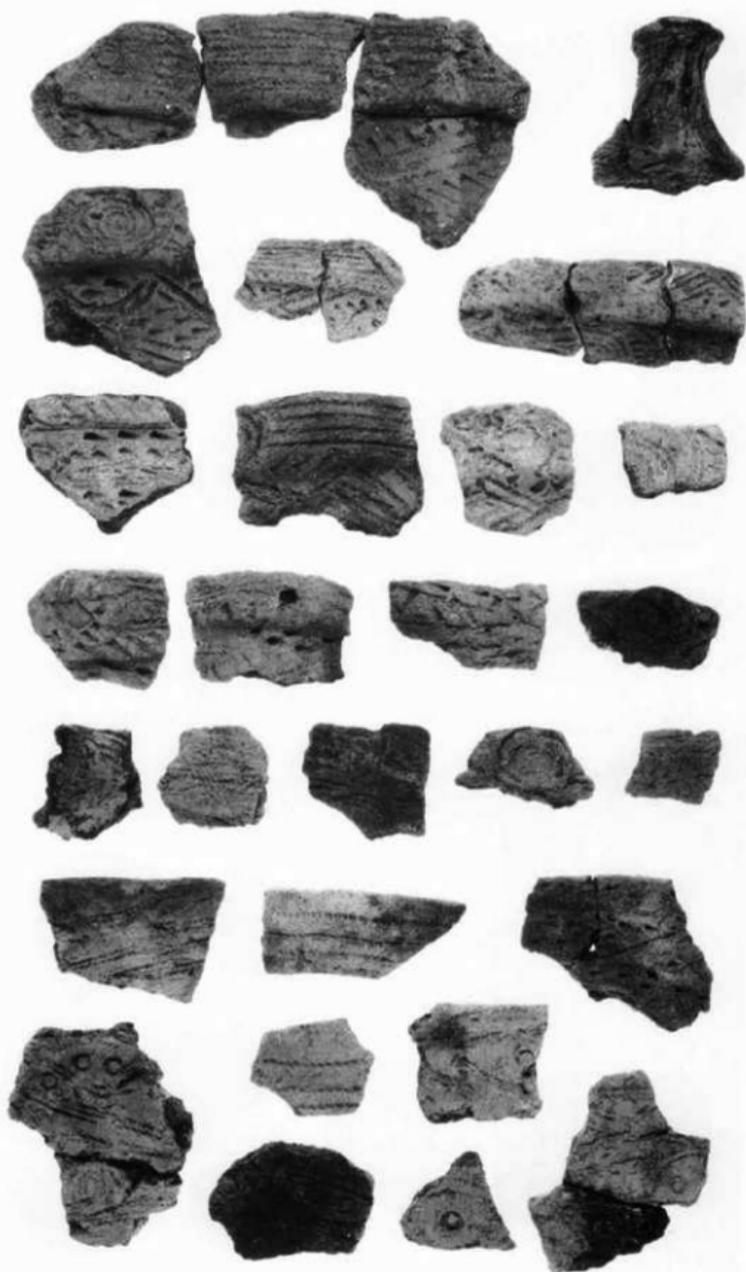


P053



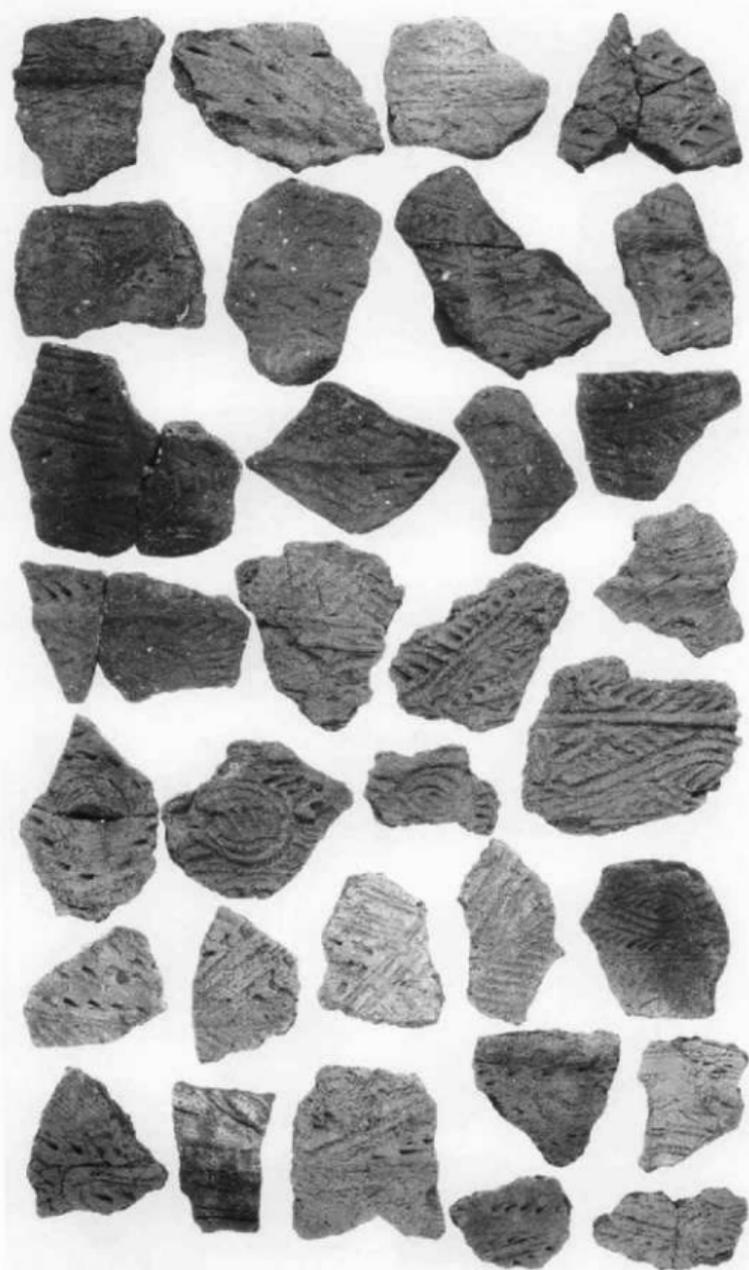
P055



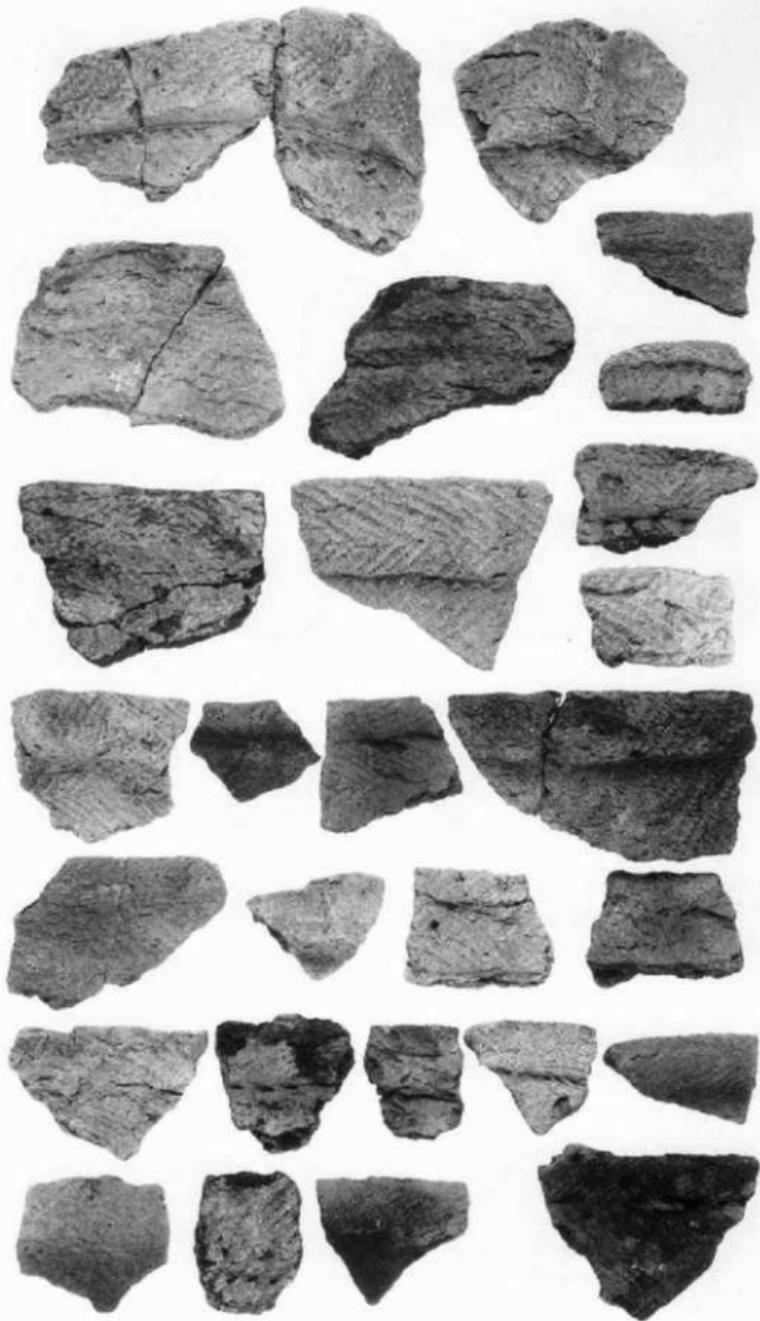


包含層

縄文時代遺物20

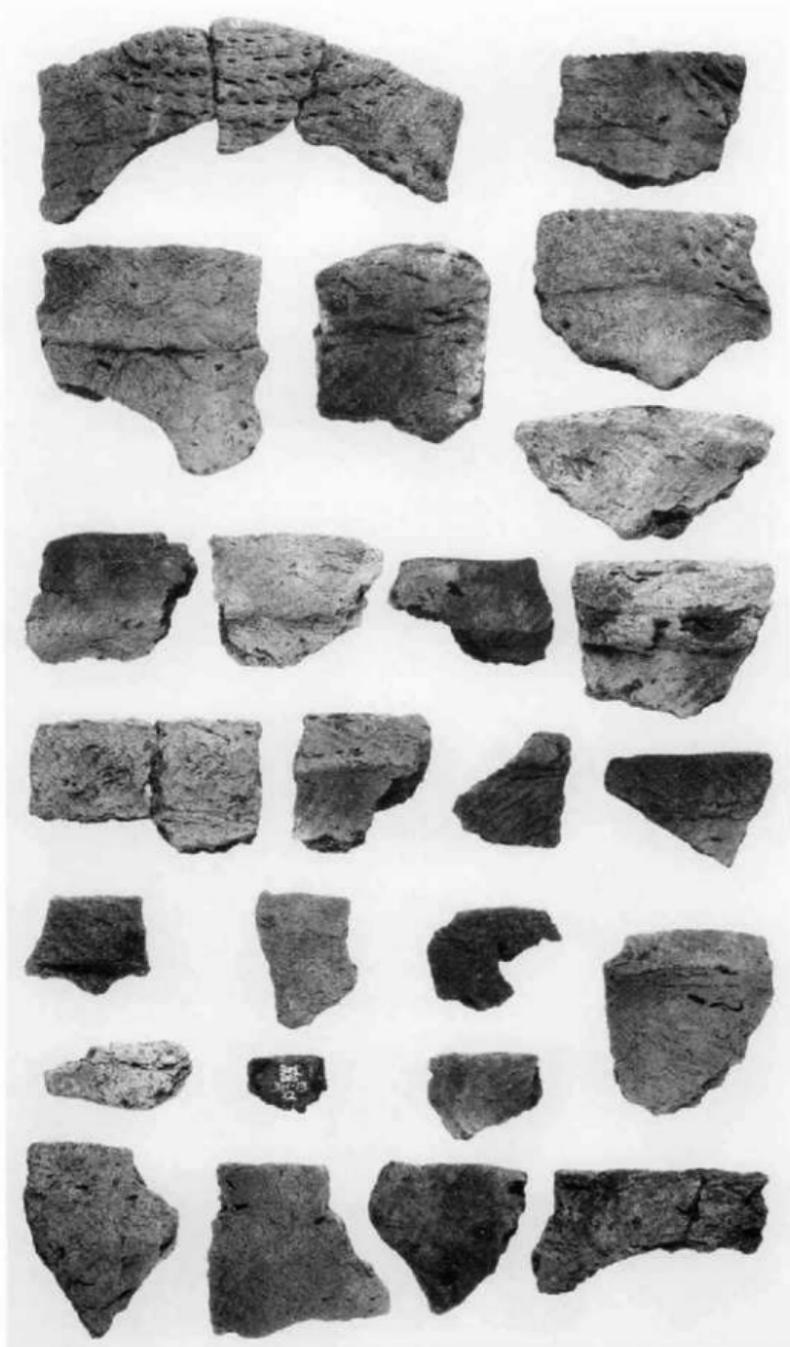


包含層

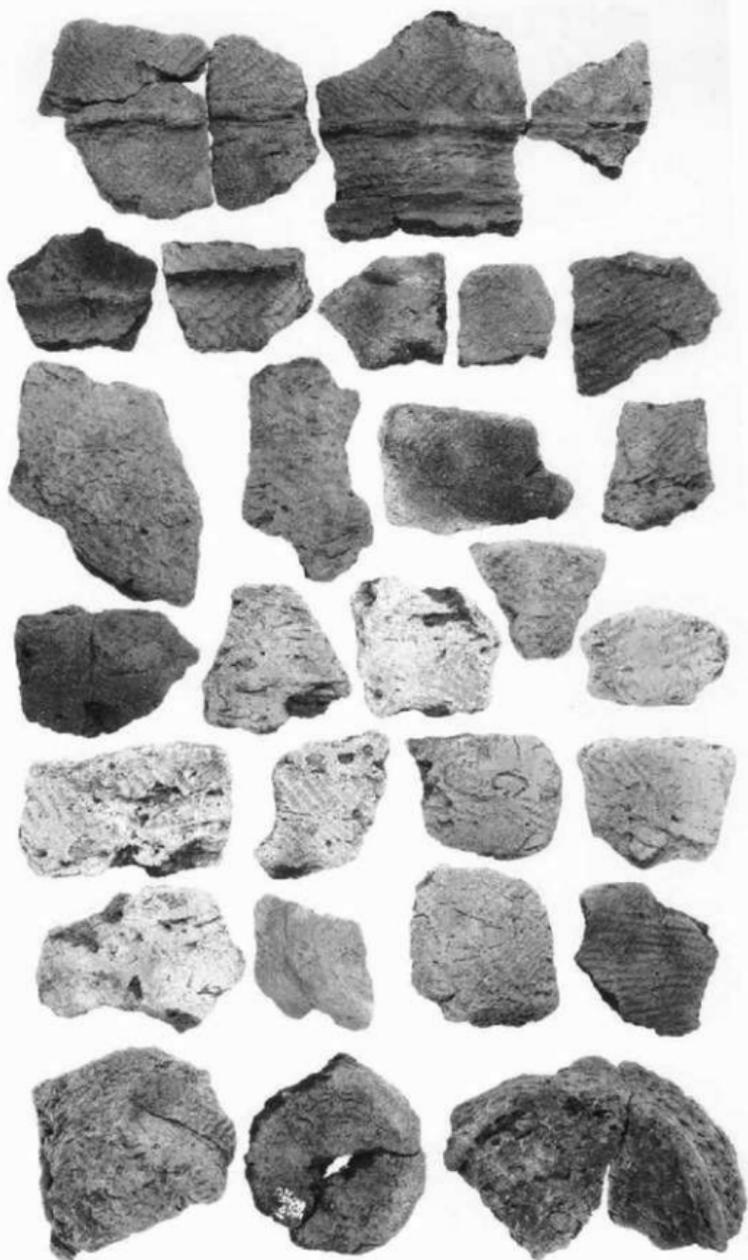


包含層

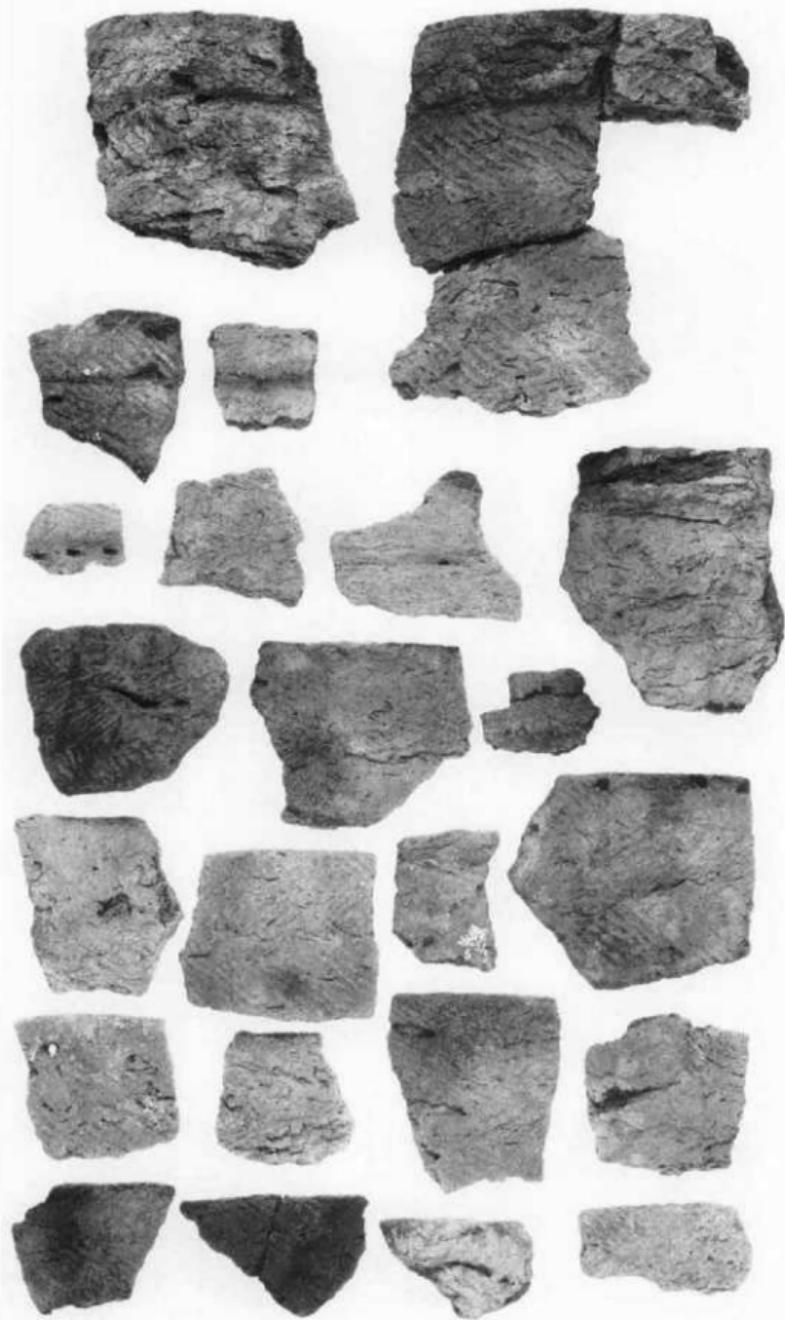
縄文時代遺物(2)



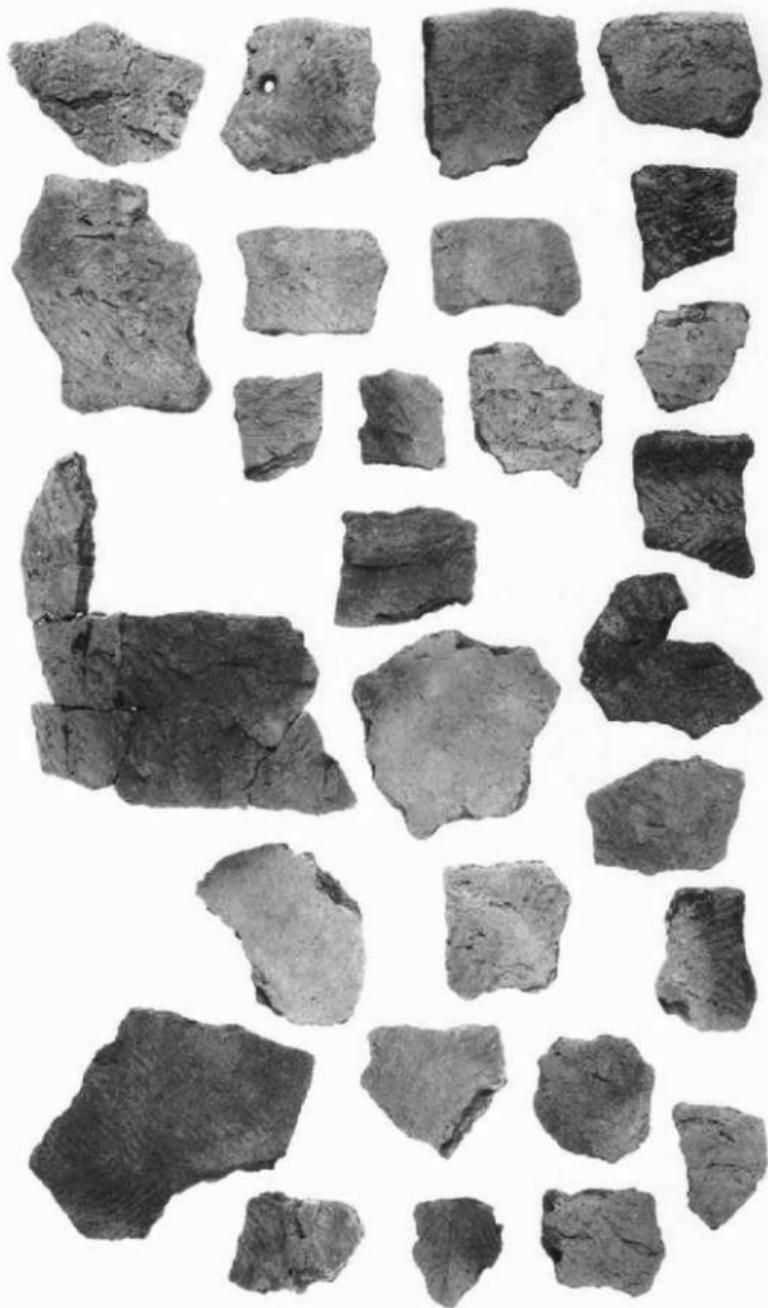
包含層



包含解

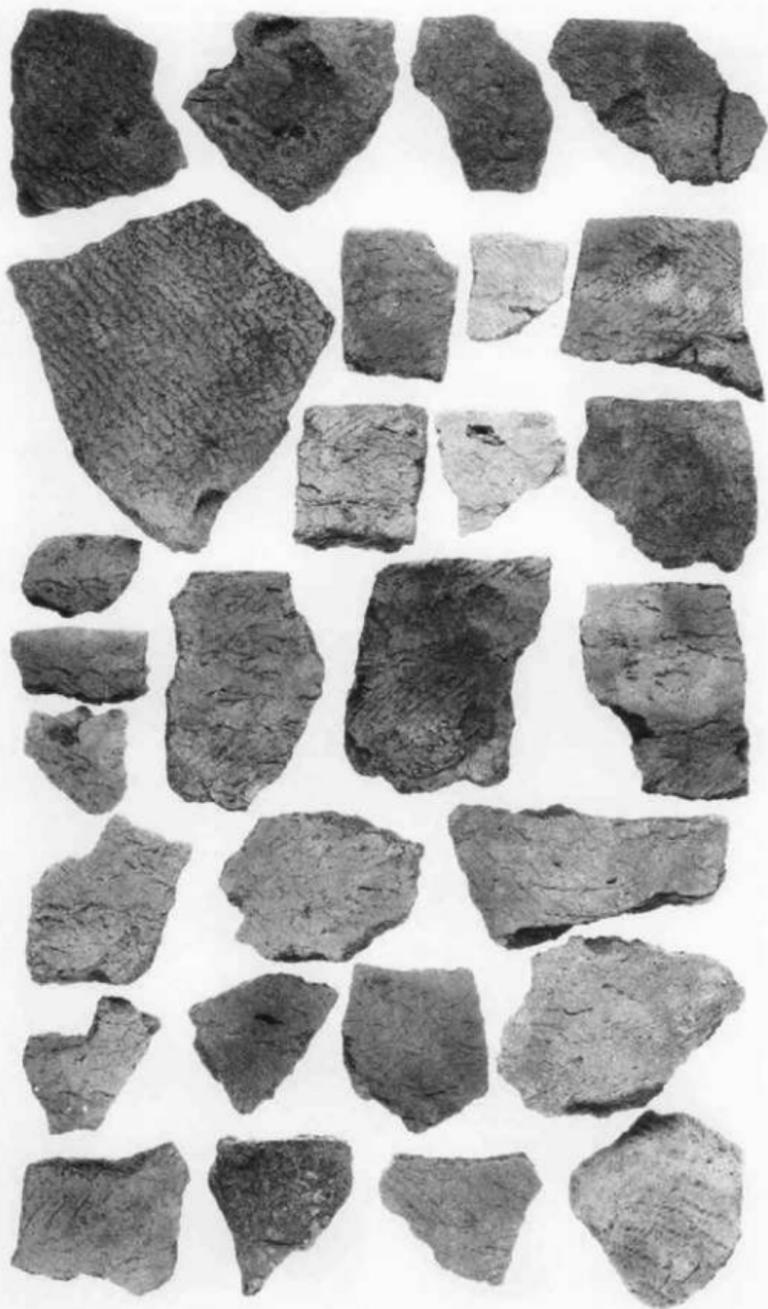


繩文時代遺物30



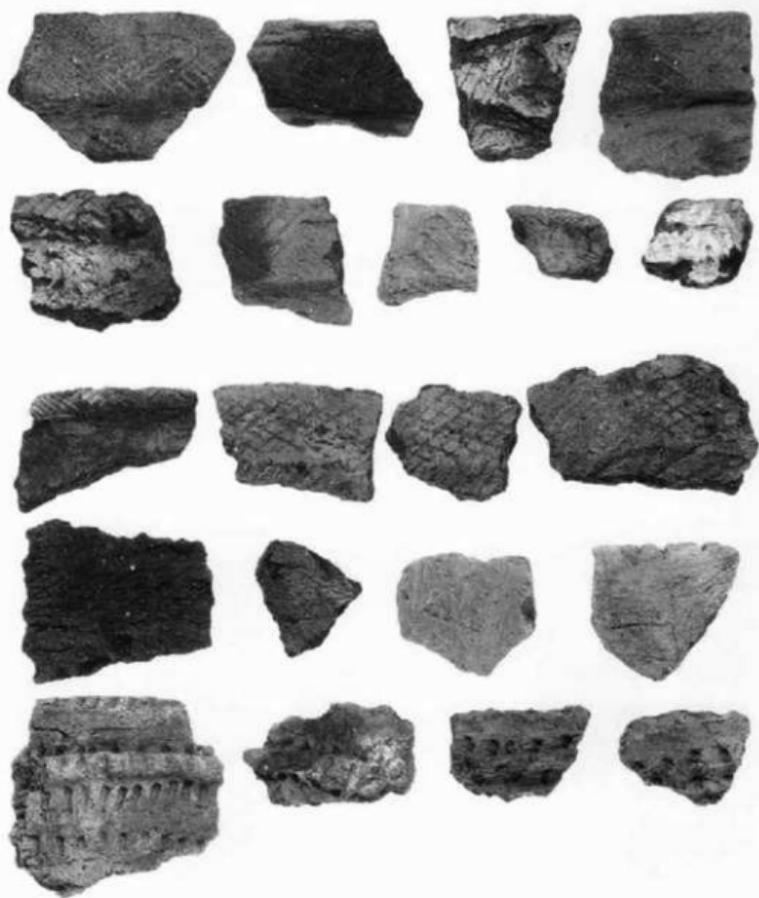
包含層

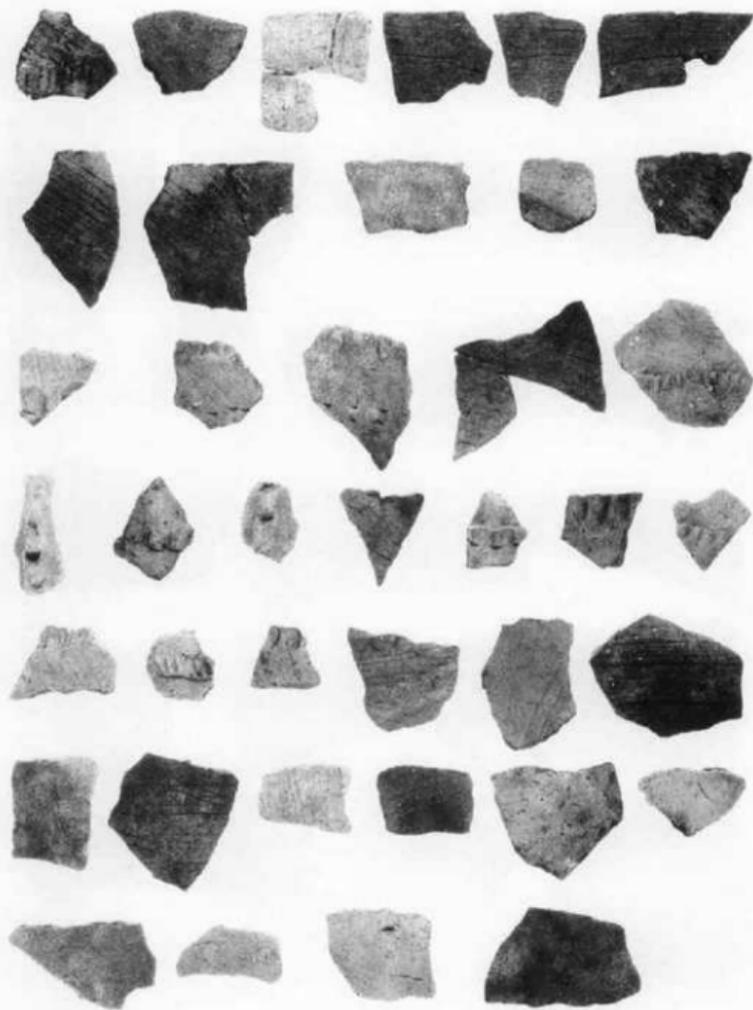
縄文時代遺物印

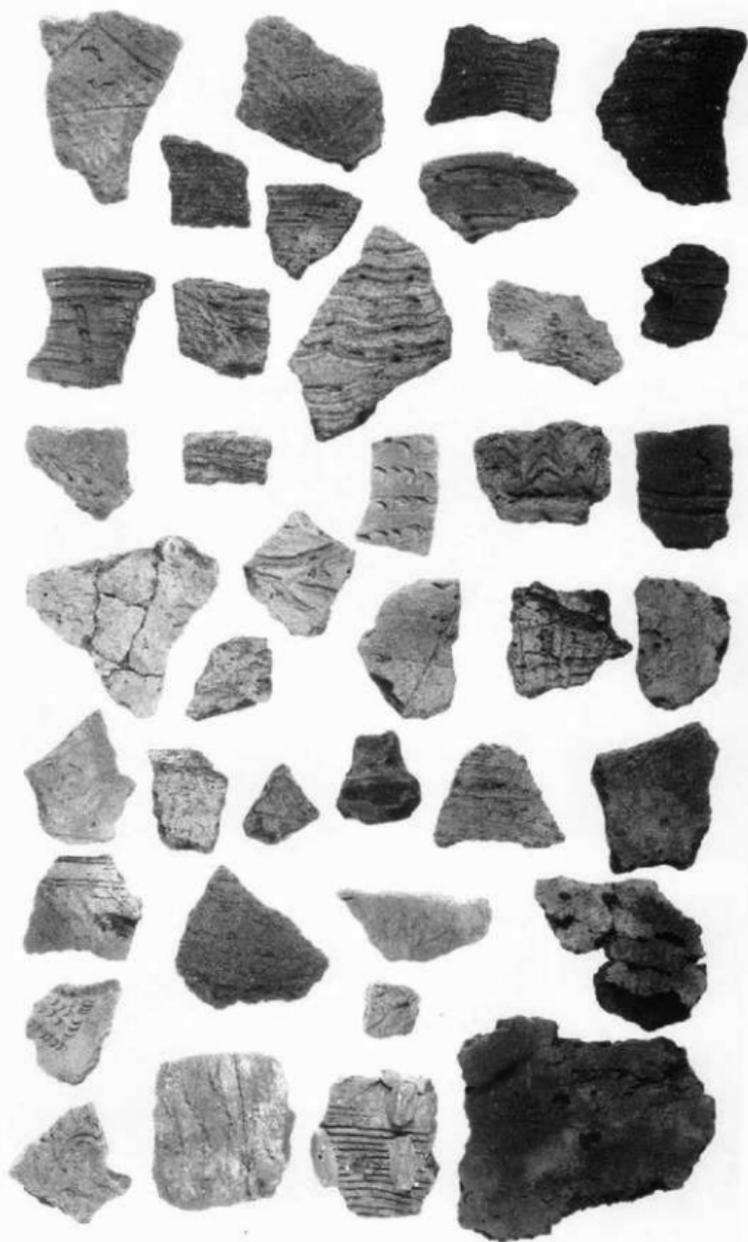


縄文時代遺物(3)

包含層

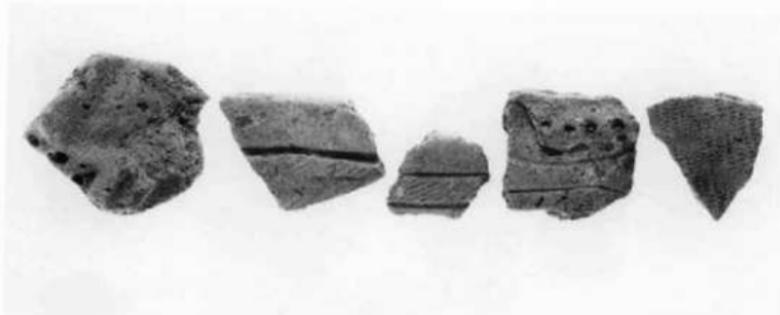






包含層

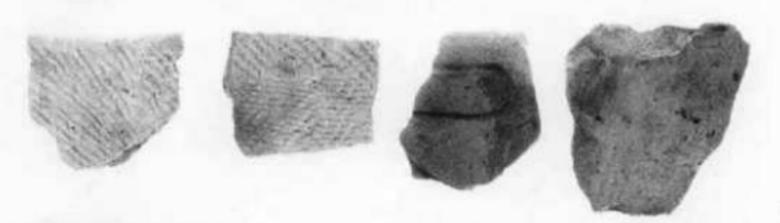
縄文時代遺物⑨



054



P006



P015



P027

P048



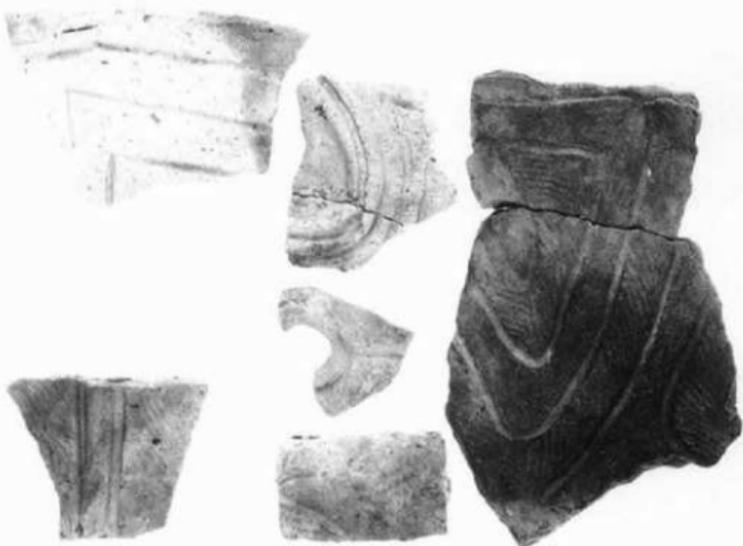
P051



P061

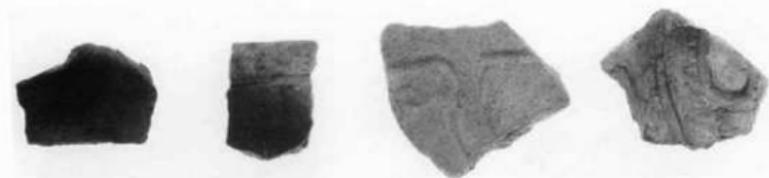


P064

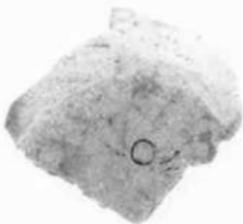
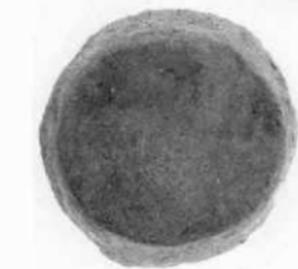
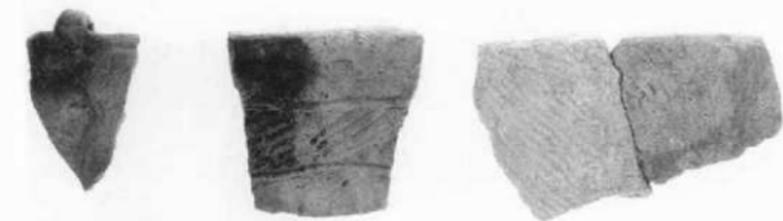




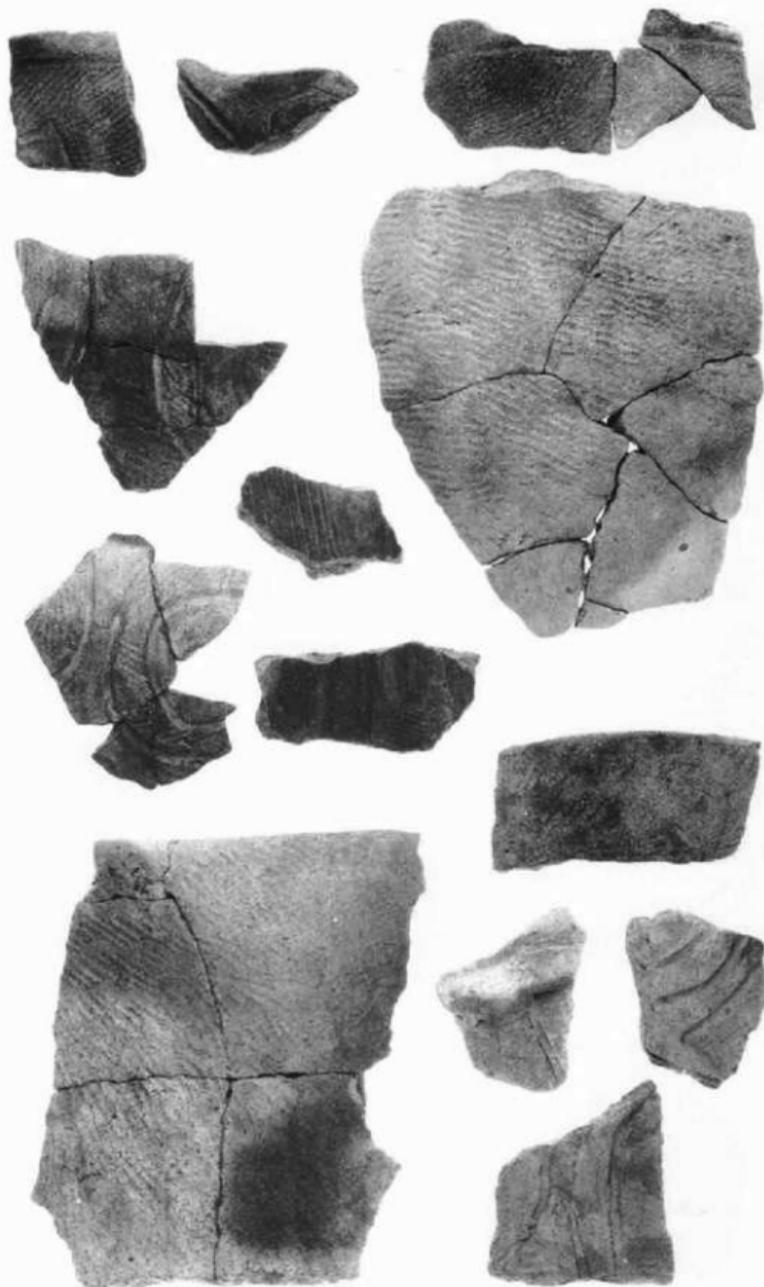
P066



P071



P077

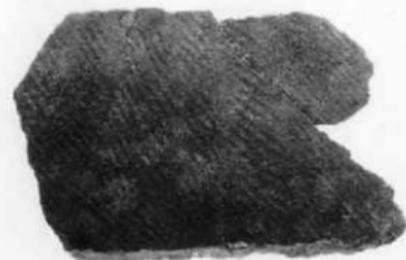


P080

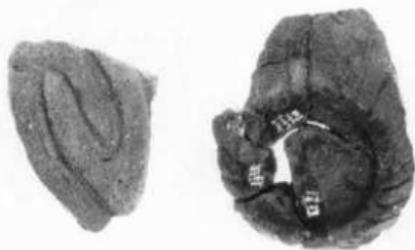
P081



P 132



P 133



P147



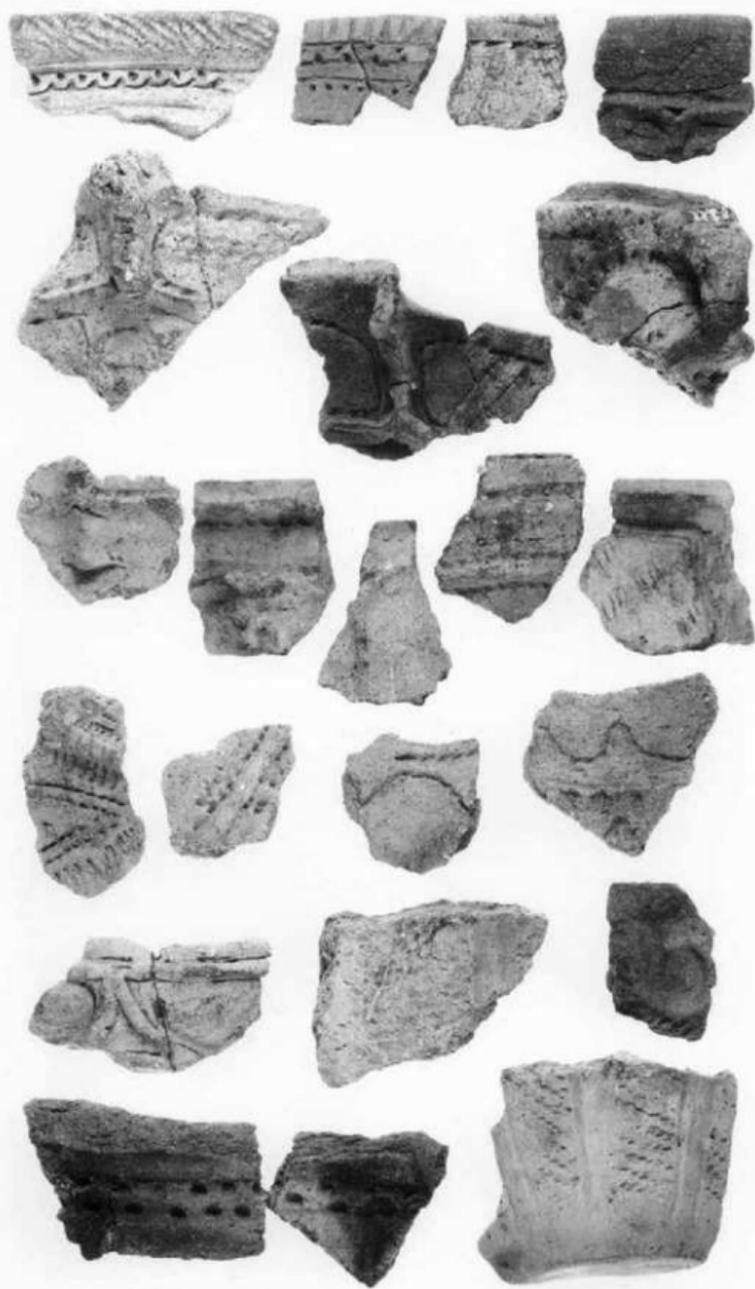
P148



P151



P159



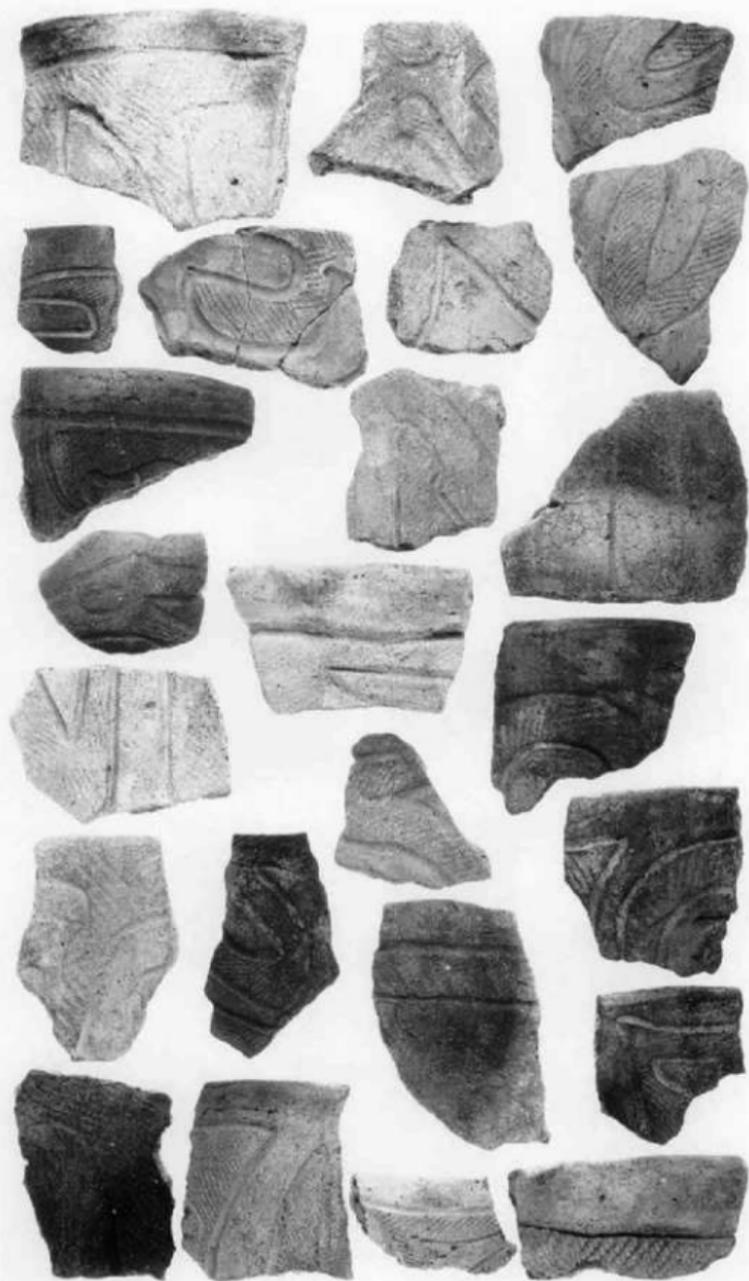
縄文時代遺物(10)

包含層

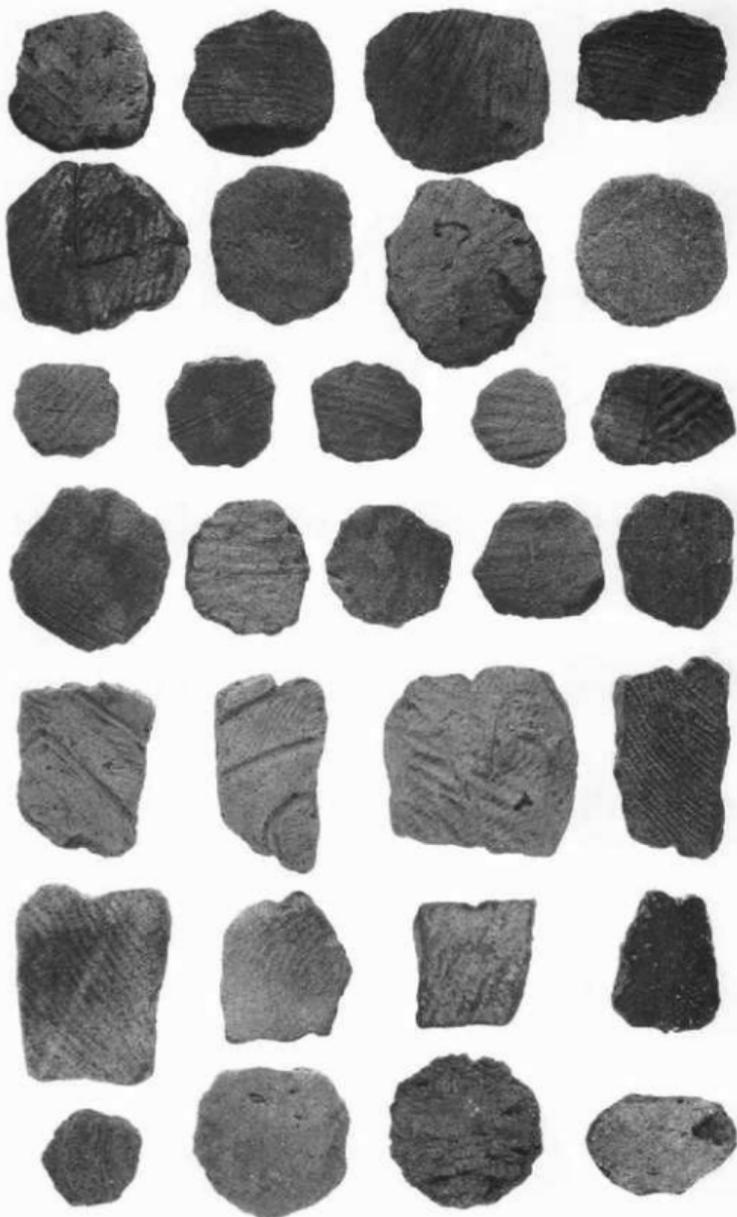


包含層

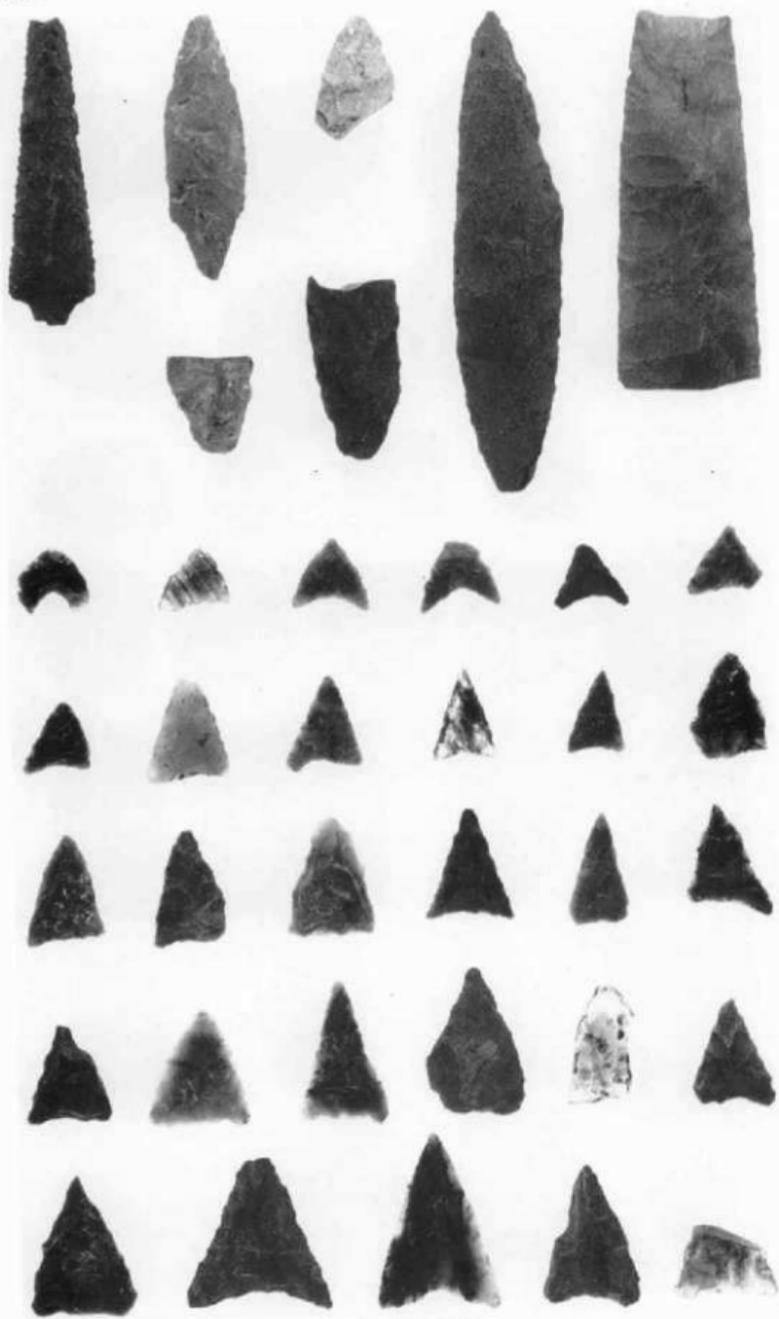
縄文時代遺物群



包含層

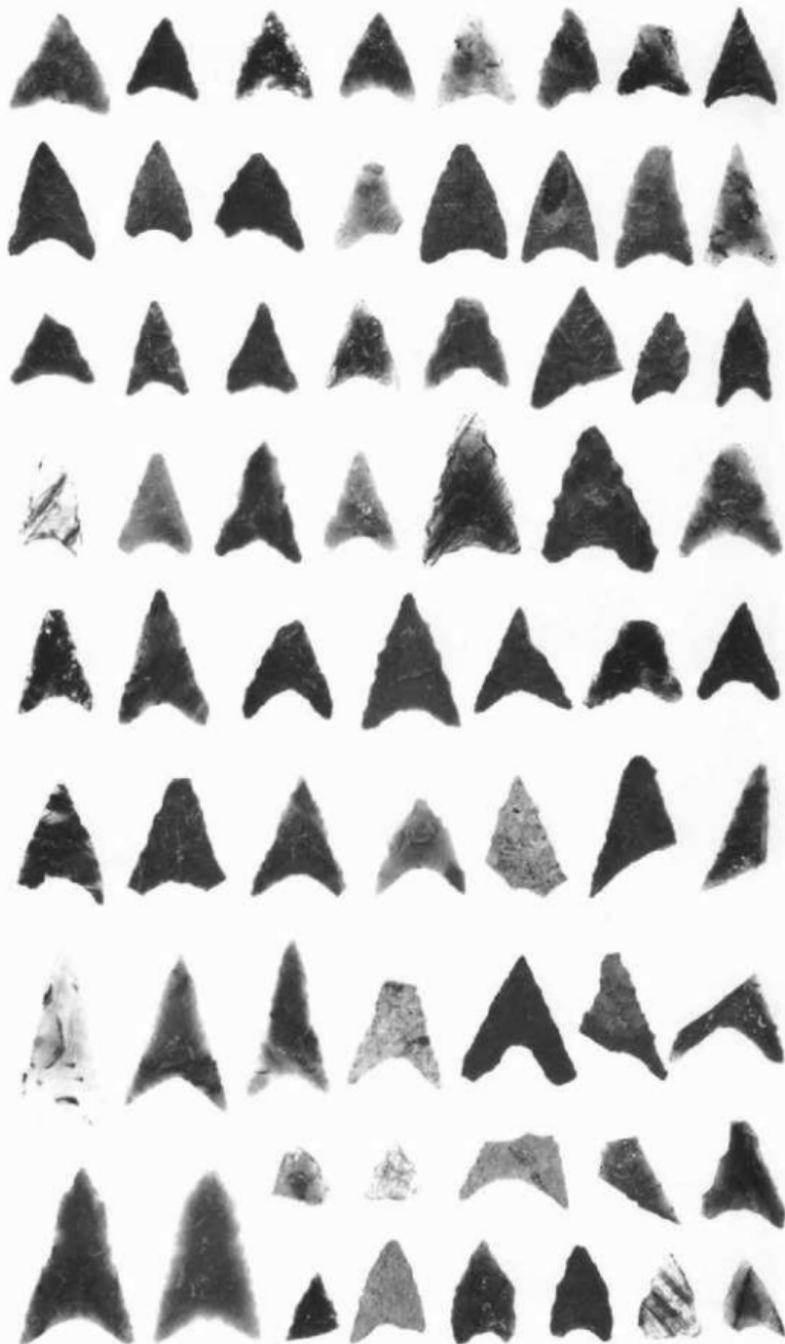


土製円盤  
土器片雑



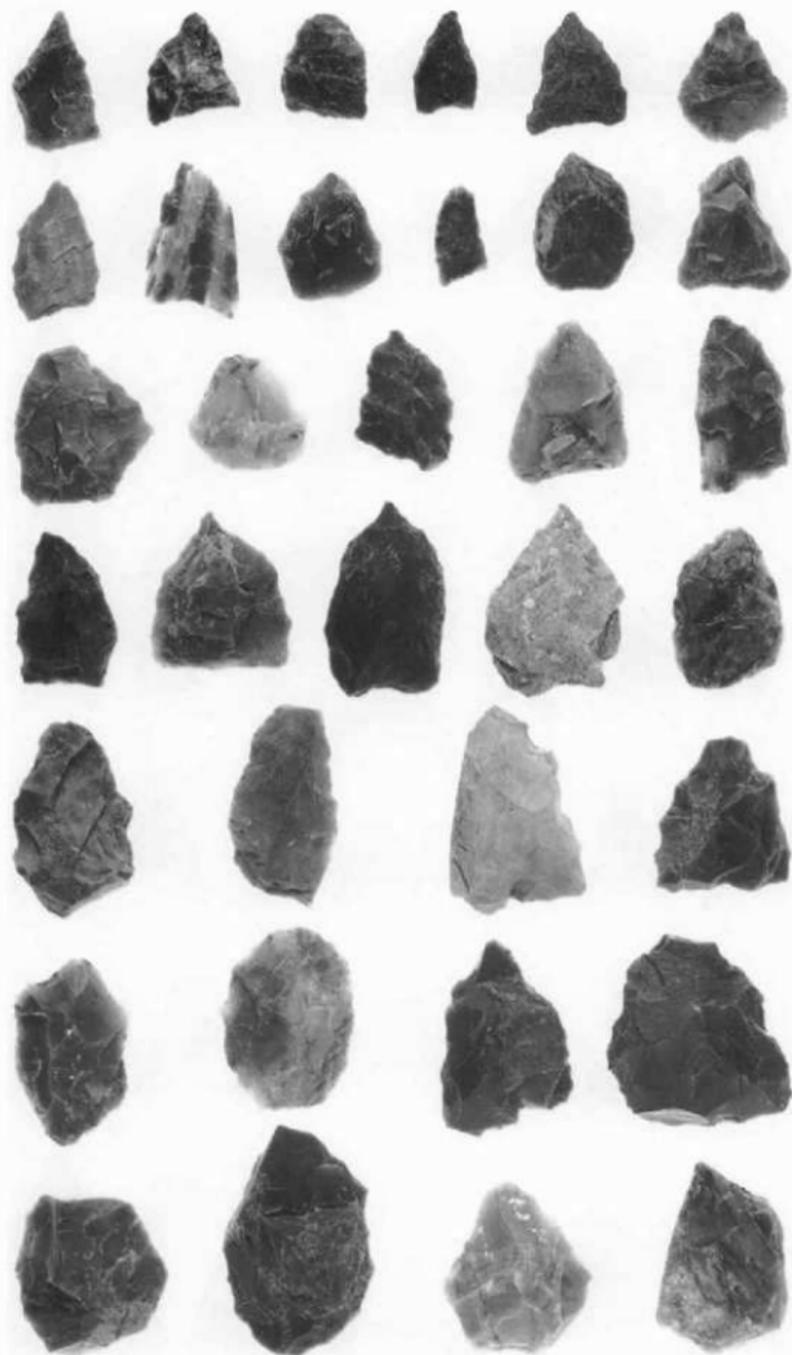
縄文時代遺物⑨

石器

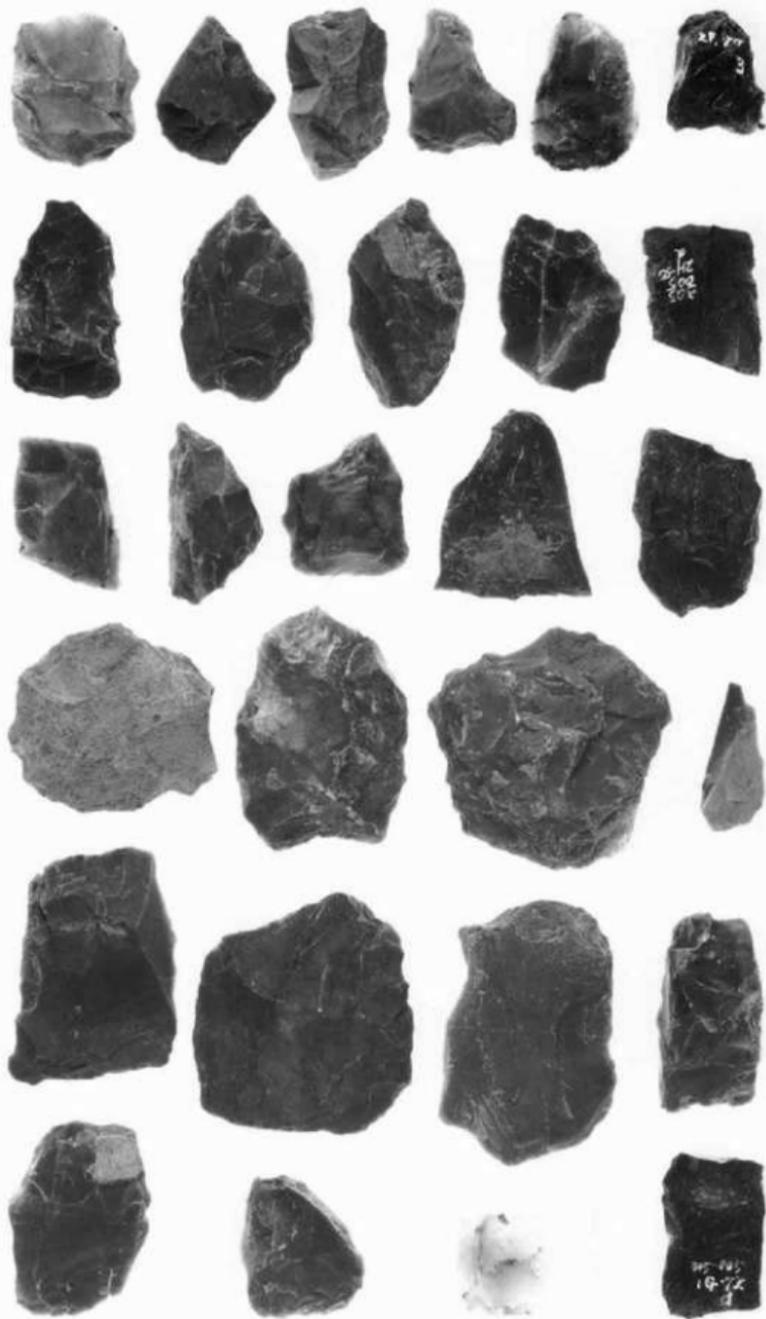


石器

繩文時代遺物(1)

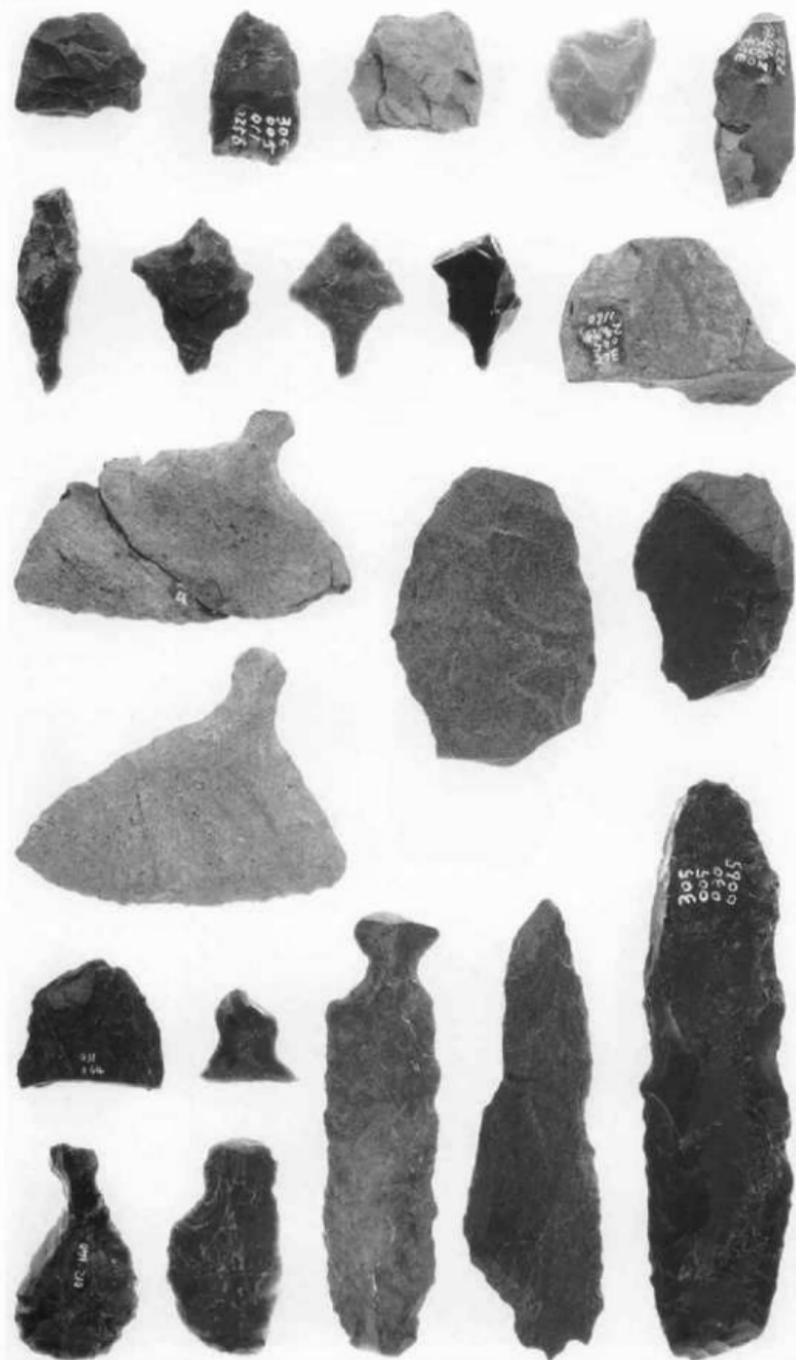


縄文時代遺物⑩

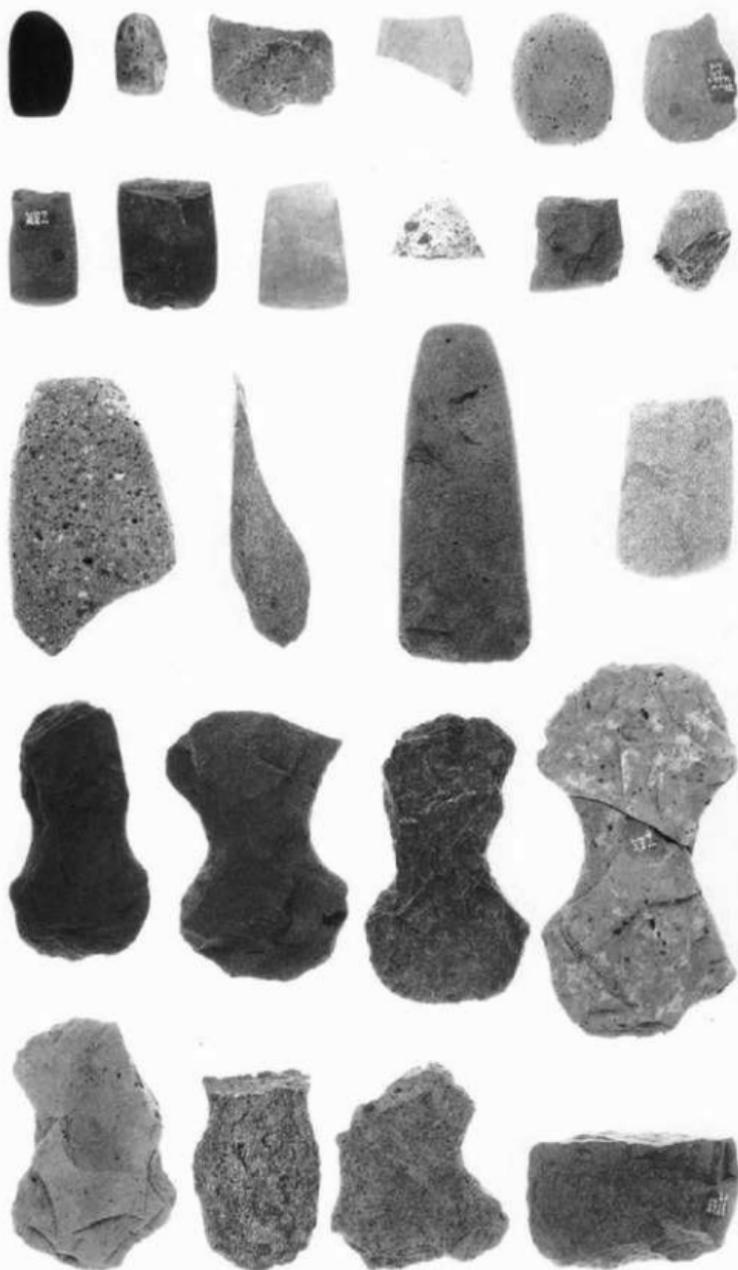


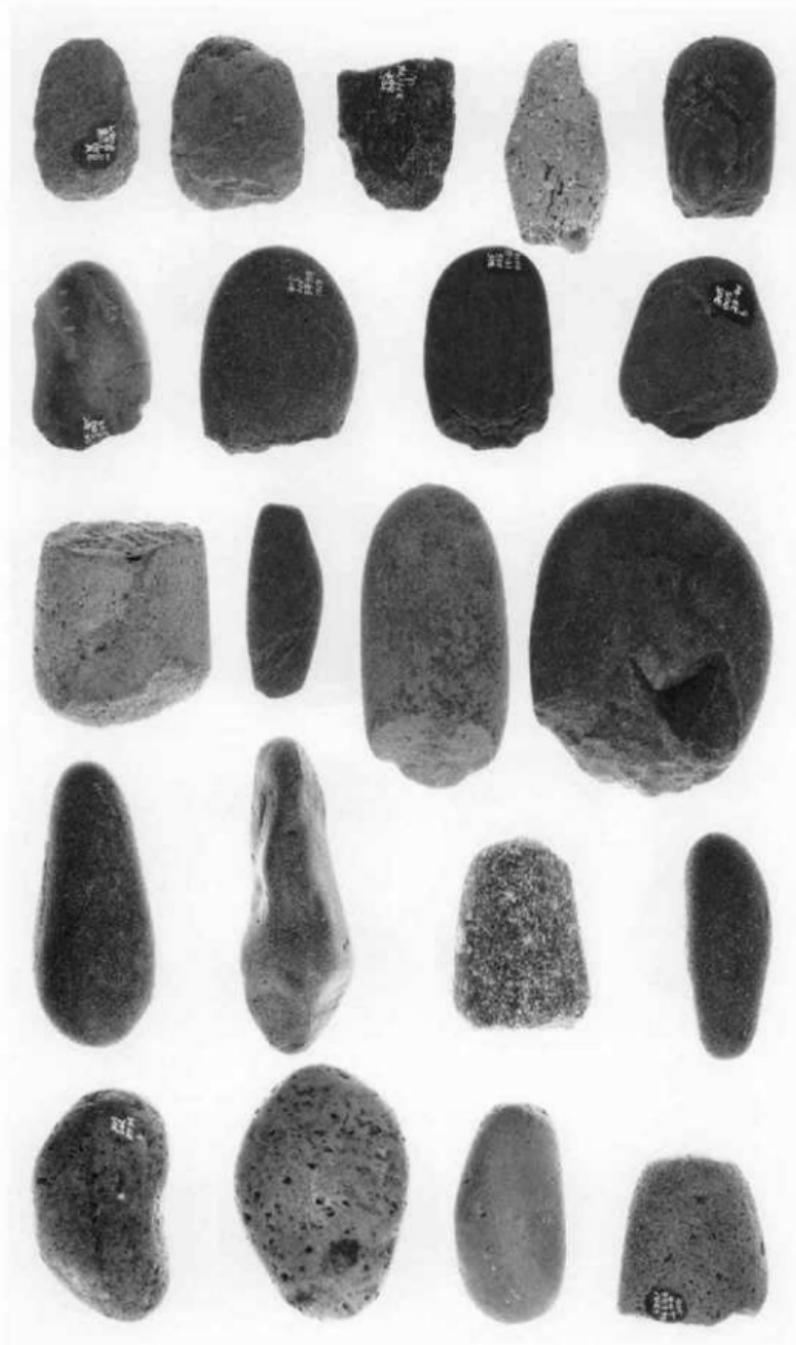
石器

縄文時代遺物



縄文時代遺物50





縄文時代遺物52





縄文時代遺物60

千葉県文化財センター調査報告第255集

## 石 揚 遺 跡

—手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

### 第 2 分 冊

---

平成 6 年 3 月 25 日 印刷

平成 6 年 3 月 31 日 発行

発 行 千 葉 県 教 育 委 員 会  
千葉県千葉市中央区中央4丁目13番地28号

編 集 財 団 法 人 千 葉 県 文 化 財 セ ン タ ー  
千葉県四街道市鹿渡 809 - 2

印 刷 株 式 会 社 弘 文 社  
千葉県市川市市川南 2 - 7 - 2

---

# 石 揚 遺 跡

—手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

## 第 3 分 冊

1 9 9 4

千葉県教育委員会  
財団法人 千葉県文化財センター

# いし あげ 遺 跡

—手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

## 第3分冊（弥生時代終末～古墳時代編）

1994

千葉県教育委員会  
財団法人 千葉県文化財センター

## 第3分冊 目次

第3章 弥生時代末～古墳時代初頭	381
第1節 概観	381
第2節 遺構	381
第3節 遺物	398
第4節 まとめ	413
第4章 古墳時代	419
第1節 概観	419
第2節 遺構	419
第3節 遺物	451
第4節 まとめ	502

## 挿図・表目次

第272図 方形周溝墓配置図	第286図 方形周溝墓出土土器分類
第273図 1号方形周溝墓実測図(上) 1号方形周溝墓主体部実測図(下)	第287図 1号方形周溝墓出土遺物
第274図 2号方形周溝墓実測図(1)	第288図 2号方形周溝墓出土遺物(1)
第275図 2号方形周溝墓実測図(2)	第289図 2号方形周溝墓出土遺物(2)
第276図 2号方形周溝墓主体部実測図	第290図 3号方形周溝墓出土遺物(1)
第277図 3号方形周溝墓実測図(1)	第291図 3号方形周溝墓出土遺物(2)
第278図 3号方形周溝墓実測図(2)	第292図 4号方形周溝墓出土遺物
第279図 3号方形周溝墓主体部実測図	第293図 5号方形周溝墓(左上)、2・3号 連結部(右上)、2号方形周溝墓混 入(下)出土遺物
第280図 2・3号方形周溝墓連結部実測図	第294図 各方形周溝墓出土鉄剣・ガラス玉・ 管玉実測図
第281図 4号方形周溝墓実測図(1)	第295図 各方形周溝墓出土ガラス玉計測値分 布図
第282図 4号方形周溝墓実測図(2)	第296図 古墳時代遺構配置図
第283図 4号方形周溝墓主体部実測図	第297図 001住居実測図
第284図 5号方形周溝墓実測図(上) 5号方形周溝墓主体部実測図(下)	
第285図 方形区画溝実測図	

- 第298图 002住居実測図  
 第299图 003住居実測図  
 第300图 004住居実測図  
 第301图 004住居白玉出土分布図  
 第302图 008・013住居実測図  
 第303图 014住居実測図  
 第304图 015住居実測図  
 第305图 022竪穴実測図  
 第306图 021住居実測図  
 第307图 023住居実測図  
 第308图 024住居実測図  
 第309图 025住居実測図  
 第310图 026住居実測図  
 第311图 027住居実測図  
 第312图 028住居実測図  
 第313图 034住居実測図  
 第314图 035住居実測図  
 第315图 036住居実測図  
 第316图 037住居実測図  
 第317图 038竪穴実測図  
 第318图 039住居実測図  
 第319图 040住居実測図  
 第320图 041・051住居実測図  
 第321图 042住居実測図  
 第322图 044住居実測図  
 第323图 050住居実測図  
 第324图 053住居実測図  
 第325图 052円墳実測図  
 第326图 6号墳実測図
- 第327图 001・002住居出土遺物実測図  
 第328图 002・003住居出土遺物実測図  
 第329图 004住居出土遺物実測図  
 第330图 004・008住居出土遺物実測図  
 第331图 008・013住居出土遺物実測図  
 第332图 004住居出土石製模造品・白玉実測図  
 第333图 004住居出土白玉計測値分布図  
 第334图 014住居出土遺物実測図(1)  
 第335图 014住居出土遺物実測図(2)  
 第336图 015住居出土遺物実測図(1)  
 第337图 015住居出土遺物実測図(2)  
 第338图 021住居出土遺物実測図  
 第339图 023・024住居出土遺物実測図  
 第340图 026住居出土遺物実測図  
 第341图 027住居出土遺物実測図  
 第342图 028・034住居出土遺物実測図  
 第343图 035・036住居出土遺物実測図  
 第344图 036・037住居出土遺物実測図  
 第345图 037・038住居出土遺物実測図  
 第346图 039・040・044住居出土遺物実測図  
 第347图 041住居出土遺物実測図  
 第348图 051・052住居出土遺物実測図  
 第349图 042住居出土遺物実測図  
 第350图 042・050住居出土遺物実測図  
 第351图 053住居出土実測図  
 第352图 住居等出土石製模造品・白玉実測図  
 第353图 6号墳出土遺物実測図

表74 方形周溝墓出土土器觀察表

表75 古墳時代住居出土土器觀察表

## 圖版目次

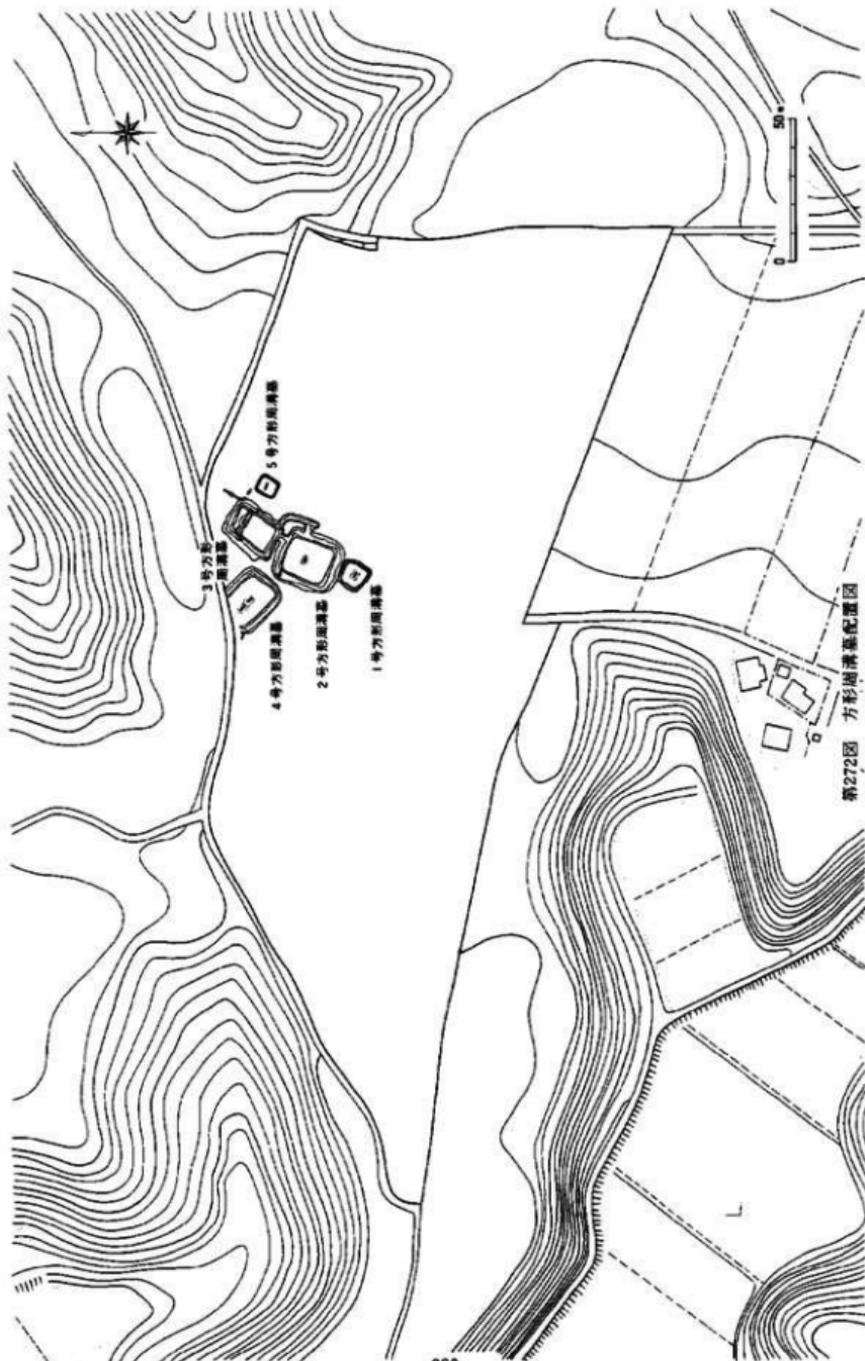
- 圖版93 方形周溝墓全景 (1)  
圖版94 方形周溝墓全景 (2)  
圖版95 1号方形周溝墓  
圖版96 1、2号方形周溝墓  
圖版97 2号方形周溝墓  
圖版98 2号方形周溝墓  
圖版99 3号方形周溝墓  
圖版100 3号方形周溝墓  
圖版101 3号方形周溝墓  
圖版102 3号方形周溝墓  
圖版103 4号方形周溝墓  
圖版104 4号方形周溝墓  
圖版105 5号、2·3号連結部  
圖版106 方形周溝墓出土遺物 (1)  
圖版107 方形周溝墓出土遺物 (2)  
圖版108 方形周溝墓出土遺物 (3)  
圖版109 方形周溝墓出土遺物 (4)  
圖版110 古墳時代遺構 (1)  
圖版111 古墳時代遺構 (2)  
圖版112 古墳時代遺構 (3)  
圖版113 古墳時代遺構 (4)  
圖版114 古墳時代遺構 (5)  
圖版115 古墳時代遺構 (6)  
圖版116 古墳時代遺構 (7)  
圖版117 古墳時代遺構 (8)  
圖版118 古墳時代遺構 (9)  
圖版119 古墳時代遺構 (10)  
圖版120 古墳時代遺構 (11)  
圖版121 古墳時代遺構 (12)  
圖版122 古墳時代遺構 (13)  
圖版123 古墳時代遺構 (14)  
圖版124 古墳時代遺物 (1)  
圖版125 古墳時代遺物 (2)  
圖版126 古墳時代遺物 (3)  
圖版127 古墳時代遺物 (4)  
圖版128 古墳時代遺物 (5)  
圖版129 古墳時代遺物 (6)  
圖版130 古墳時代遺物 (7)  
圖版131 古墳時代遺物 (8)  
圖版132 古墳時代遺物 (9)  
圖版133 古墳時代遺物 (10)  
圖版134 古墳時代遺物 (11)  
圖版135 古墳時代遺物 (12)  
圖版136 古墳時代遺物 (13)

文中写真1 004号住居玉類出土狀況

文中写真2 039号住居壁材痕檢出狀況

## 第 3 章

### 弥生時代末～古墳時代初頭



## 第3章 弥生時代末～古墳時代初頭

### 第1節 概観

この期の遺構は、調査区中央北寄りの1F、2F、1Gで方形周溝墓群を検出している。深い周溝をもつ大形の方形周溝墓と比較的浅い周溝の小形の方形周溝墓の2形態があり、大形方形周溝墓は長方形を呈し、小形方形周溝墓はほぼ正方形を示す。周溝を共有するものはないが、互いに近接し、2・3号方形周溝墓は別の溝で連結されている。主体部は各周溝墓とも1ないし2基もっており、主軸方向をほぼ東西にとっている。副葬品は鉄剣、ガラス玉、管玉で周溝墓ごとに多少の差異が認められる。周溝内からは、壺を中心に検出しているが、ほとんどが基底面より浮いており、底部を意図的に壊したり小片に破砕したものが多く、なかには遺構間接合や胴部と底部が離れた地点より発見されたものもある。土器の時期差はさしてうかがえないことから、短期間に構築されたものと考えてよいようである。

### 第2節 遺構

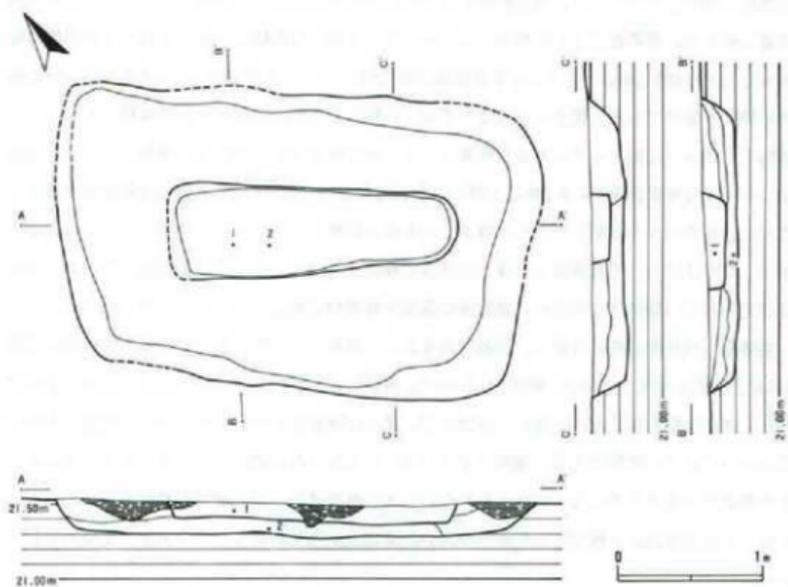
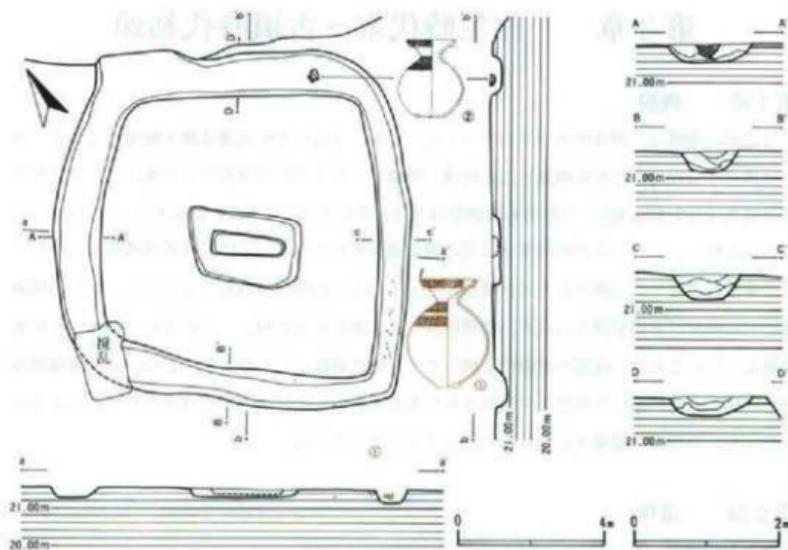
#### 1号方形周溝墓（第273区・図版95・96）

**周溝** 東西（主軸方向）－主体部の主軸と同一方向を示す。以下同じ－9.8m（周溝内端の台状部長7.6m－以下同じ）、南北9.6m（7.5m）の正方形を呈し、北西コーナーで2号方形周溝墓と接する。周溝各辺ともやや外にふくらんでいるが、周溝幅は一定しており1m前後の幅員をもち深さは0.3mほどである。周溝底面は変化の少ない平坦面が続くが、南西コーナーは後世の攪乱を受けている。覆土の状況は若干ローム粒子を含む暗褐色土の自然堆積である。

**遺物出土状況** 北東コーナーおよび南東コーナーから壺が出土している。南東コーナーから出土した壺1は周溝底面から0.2mほど浮いた状況で検出しており、一部の破片は確認面で露呈していた。接合状況から壊したのちに遺棄したものと判断できる。また、北東コーナー付近より出土した壺2についても底面より浮いた状況で検出している。耕作で半分欠損しているもののほぼ完形に近い個体ではあるが、焼成後に底部を意図的に壊しているものと思われる。

**主体部** 台状部中央に位置し、主軸方向を北西－南東（N-57°-W）にとる。主体部は長軸2.0m、短軸が西側で0.65m、東側で0.50mで、西側短辺が比較的方形のコーナーをつくるのに対し、東側は幅も狭く円みが強い。底面までの深さは確認面より0.15mと浅く、底面は平坦に仕上がっているが軟質である。遺物（ガラス玉）の垂直分布が底面より下方にあることから、主体部底面は若干下方になるのかもしれない。木棺痕跡はないが、壁面が垂直に立ち上ることから主体部施設は木棺である可能性が高い。遺物は主体部西寄りでガラス玉が2点出土している。

主体部掘方は、長軸3.3m、短軸2.0mの隅丸長方形を呈し、深さ0.45mを測る。底面はゆる



第273图 1号方形圆溝墓(上)·主体部(下)实测图

やかな凹凸をもっている。

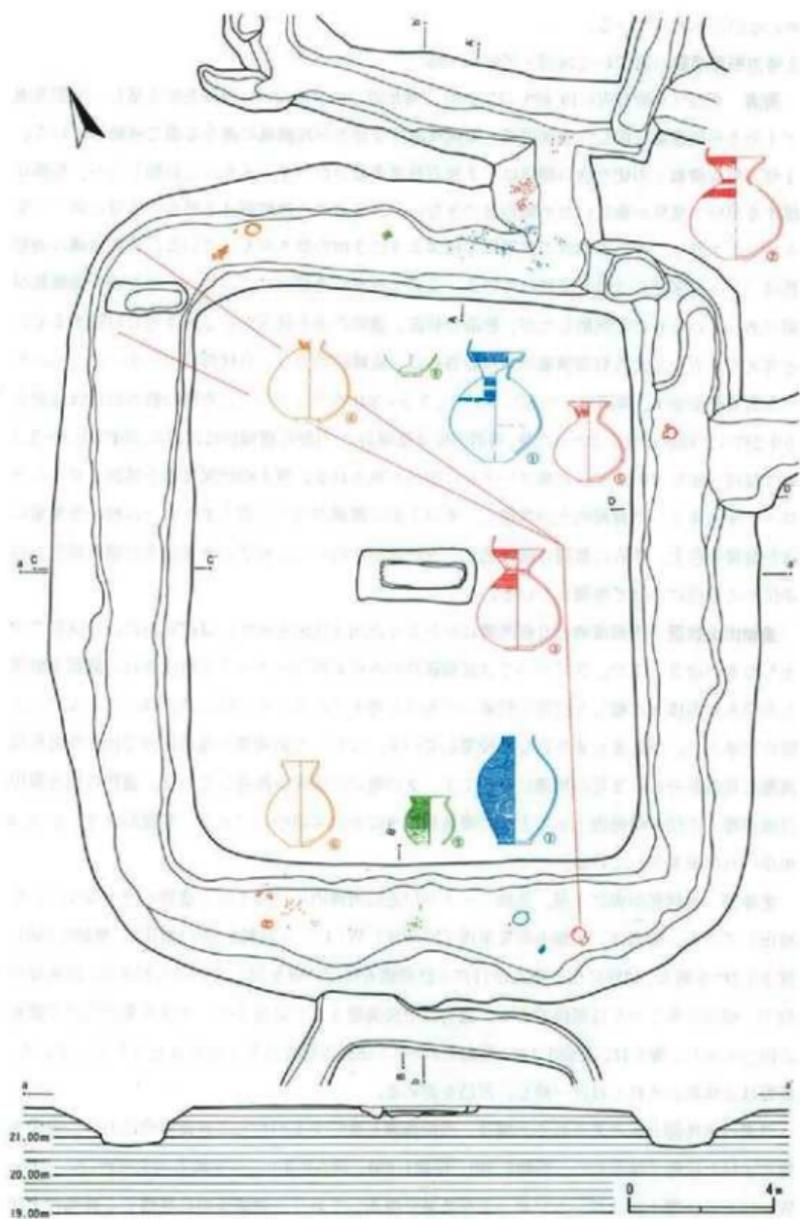
## 2号方形周溝墓（第274～276図・図版96～98）

周溝 東西（主軸方向）19.6m（12.2m）、南北22.3m（15.2m）の長方形を呈し、南側周溝で1号方形周溝墓と接し、北側周溝と東側周溝で3号方形周溝墓に連なる溝で連結している。1号方形周溝墓との切り合い関係は、2号方形周溝墓が切っているものと判断したが、周溝が接する部分で攪乱が激しいため断定はできない。北側周溝の連結部は2号から3号に向けてゆるやかに上昇し、互いの周溝の基底面を結ぶように3mの長さをもっている。東側周溝の連結部は「コ」の字状に3号と連結している。この2か所の連結部については、当初別の周溝墓が切りあっているものと判断したが、断面の状況、遺物の出土状況から2・3号に付随するものと考えられる。2号方形周溝墓の周溝の各辺は、直線的にのび、台状部はコーナーのしっかりした長方形を示す。周溝幅は一定しており、3.5～8mを保っている。周溝の断面形状は底面より0.2mほど箱状に立ち上がった後、周溝内壁は急傾斜に、外側は緩傾斜に広がる。深さは0.9～1.1mでほぼ一定しているが、北東コーナーに凹凸が見られる。覆土の状況は最下底面にロームブロックを主体とした黄褐色土が堆積し、その上部に周溝内外から流入するローム粒子を多量に含む暗黄褐色土、さらに数層の暗褐色土と台状部からのローム粒子を多量に含む暗黄褐色土が中位から上位にかけて堆積している。

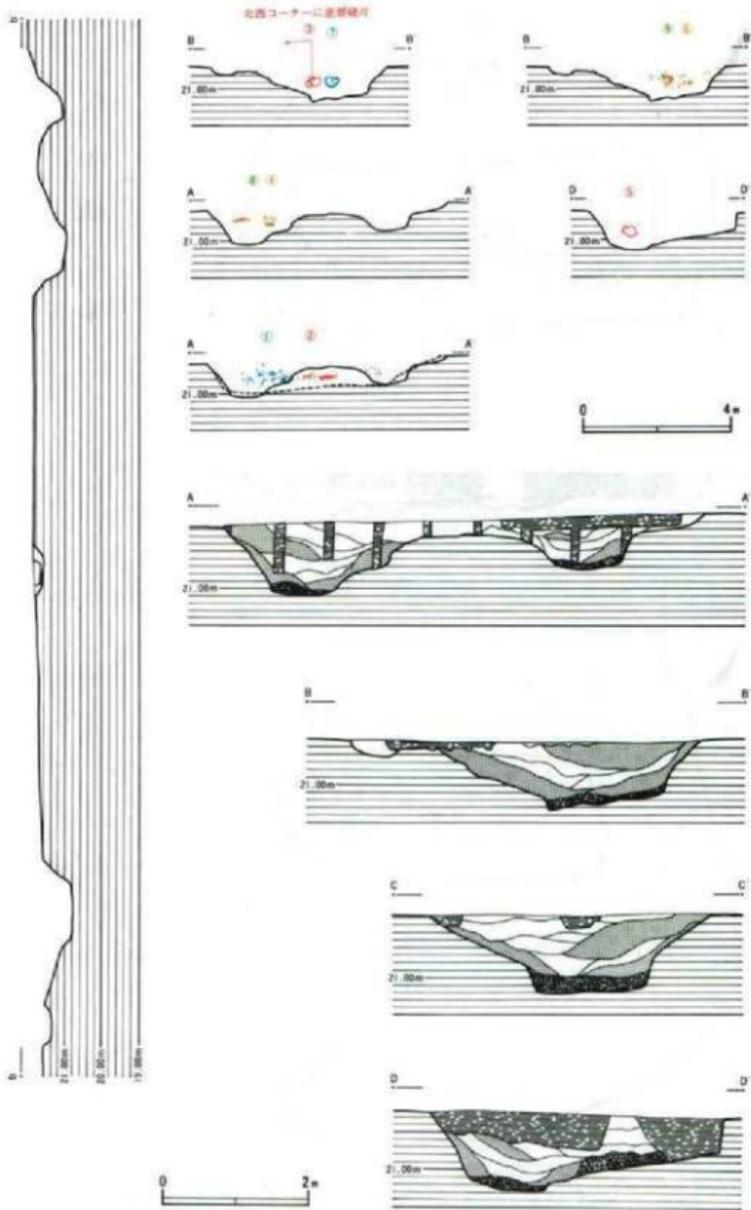
遺物出土状況 南側周溝と北側周溝にかたよった出土状況を示す。ほぼ完形に近い状態で出土したものは3、7で、3については底部破片のみが北西コーナーより検出され、底部を破壊したのちに本体とは離れた位置に投棄したものと考えられる。その他の個体は、ほとんどが小破片に壊され、ひとまとまりにして投棄している。なお、北側周溝の連結部分では3号方形周溝墓の周溝部分から2号の周溝にかけて1、2の壺の小破片が散在していた。遺物の出土層位は周溝覆土中位の暗褐色土から上部の暗黄褐色土にかけて集中しており、基底面より0.2～0.4m浮いた状況を示している。

主体部 台状部中央に1基、北西コーナー付近の周溝内に土壇1基（遺物の出土はない）を検出している。前者は、主軸方向を東西（N-69°-W）にとり長軸2.5m（推定）、短軸0.65m、深さ0.2mを測る。耕作による攪乱が目立ち計測値も推定の域を脱しない部分がある。底面は平坦で、壁の立ち上がりは垂直である。遺物は中央南壁よりの底面より、先端を東に向けて鉄剣の出土をみた。掘方は、長軸3.1m、短軸1.8mの不正長方形で立ち上がりはだらりとしている。底面は主体部のそれとほぼ一致し、凹凸を認める。

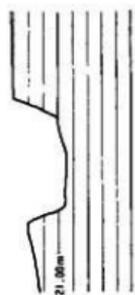
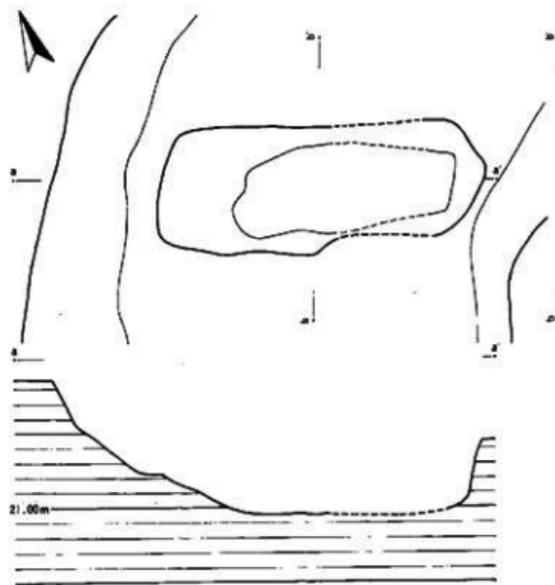
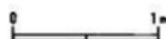
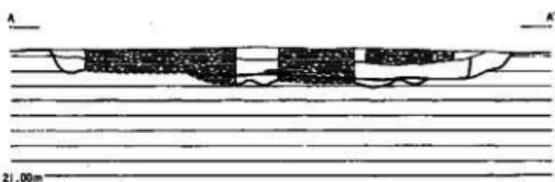
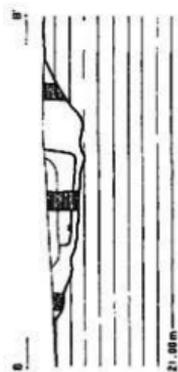
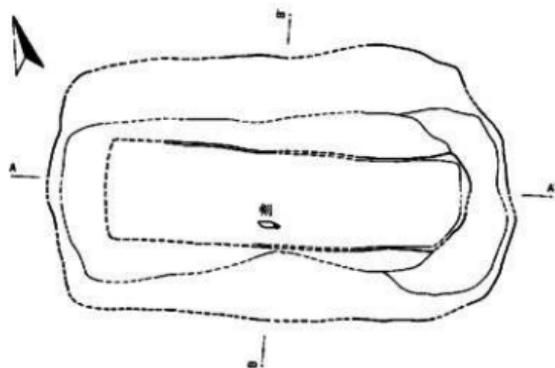
周溝内主体部とも考えられる土壇は、西側周溝と直行するかたちで底面中央にあり、周溝を掘り上げた段階で検出した。長軸2.2m、短軸1.8m、深さ0.3mで、主軸方向を東西（N-72°-W）にとる。覆土にはロームブロックを多量に混入しており、周溝底面に堆積する黄褐色土層とほとんど変化なかった。土壇内からは遺物の出土がなかった。



第274图 2号方形周溝墓实例图



第275図 2号方形周溝墓実測図



第276图 2号方形周溝墓主体部

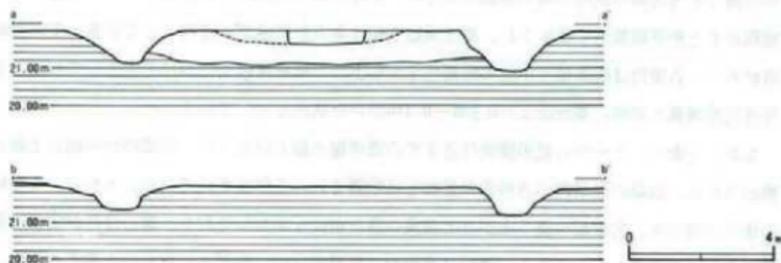
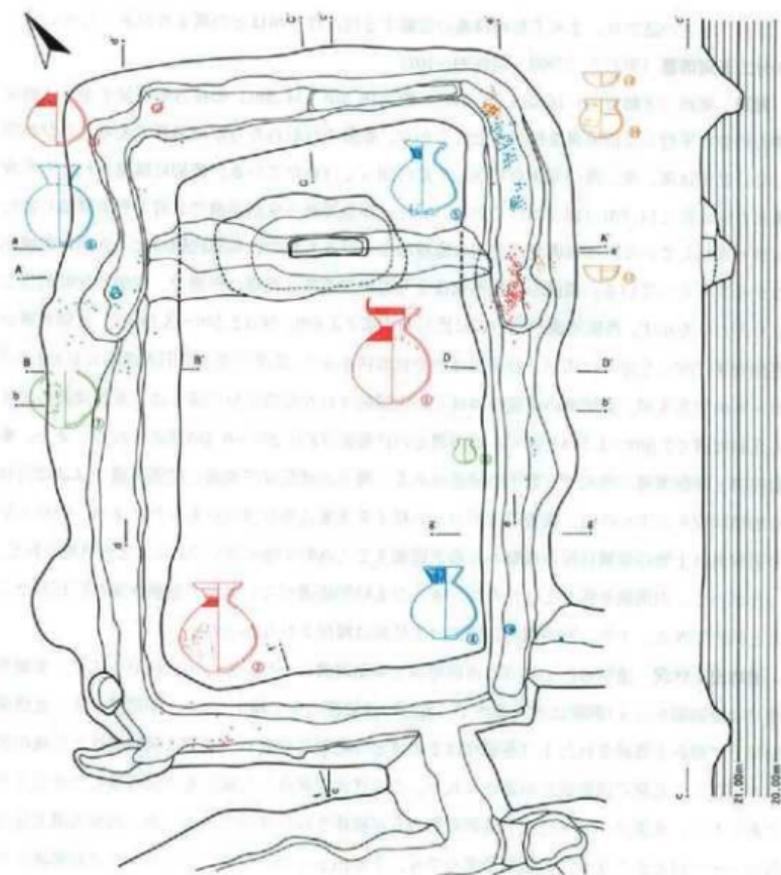
なお、地主の話では、2号方形周溝墓の位置する付近は1mほどの高まりがあったという。

### 3号方形周溝墓 (第277～279図・図版99～102)

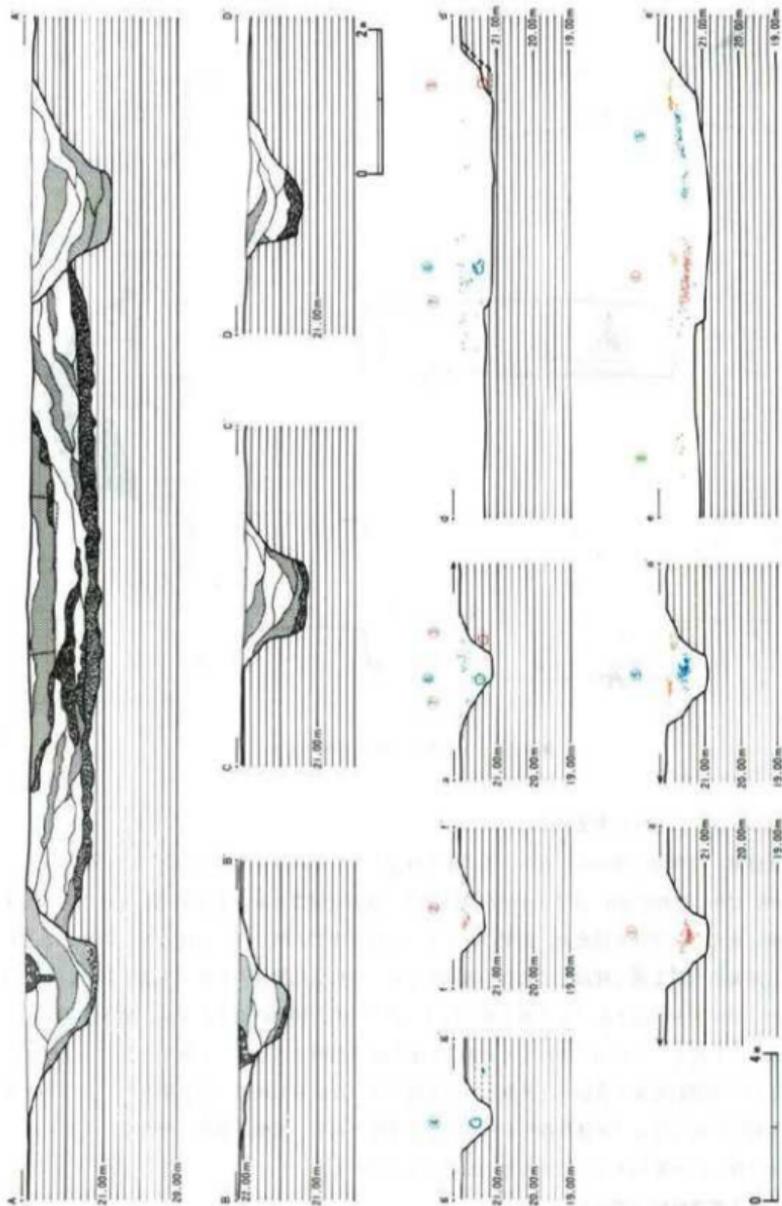
周溝 東西(主軸方向)16.5m(8.4m)、南北19.5m(14.5m)の長方形を呈すが、北側周溝の内側に平行して旧周溝を検出したことから、拡張の行われた方形周溝墓であることが判明した。拡張は南、東、西の周溝を生かして北に向けて行われている。最初に構築された方形周溝墓の南北長は14.7m(10.4m)である。また、南側周溝と東側周溝で2号方形周溝墓に連なる溝と連結している。本周溝墓の各辺は直線的にのびるものの、周溝内側に比べ外側は曲線的なラインをとっている。周溝の断面形状は2号方形周溝墓と同様の形態で、内側が比較的急な立ち上がりを示す。西側周溝が他の辺に比し若干広く3.6m、他は2.5m～3.0mで、北側周溝が西側周溝に向って徐々に広がり台状部はやや台形状を示す。周溝の深さは旧周溝がおおむね0.7m～8mであるが、旧周溝の南側1mほどから開始された拡張部分の深さは、東西周溝の北半と北側周溝で0.9m～1.1mと深く、旧周溝との比高差は約0.2m～0.3m認められる。また、東側周溝と南側周溝の交点でも若干の段差がある。覆土の状況は旧周溝と拡張周溝ではほぼ同様の堆積状況を示すものの、後者の方がローム粒子を多量に含む傾向があった。また、中央北側の旧周溝は土層の堆積状況の観察から最下底面まで人為的な埋め戻しであることが看取される。したがって、旧周溝を掘り上げたのち、さしたる時間経過がない状態で拡張作業が行われたことと判断できる。また、旧周溝の内側には主体部は検出されなかった。

遺物出土状況 遺物の出土地点は西側周溝と東側周溝にかたよった出土状況を示す。東側周溝では連結部から4(胴部は本周溝内で、底部は連結部の中で検出した)、中間部で8、拡張開始部分で細かく破砕された1(各破片は2mほどの範囲に分散し、南側に胴部破片と口縁部破片が混在し、北側に底部破片が認められた。この状況は破砕した破片を一括投棄したかのようであった。)、北東コーナー付近で底部穿孔の5が破砕された状況で出土した。西側周溝では北西コーナー付近から3が、拡張開始部分で6、7が出土した。なお、7については胴部破片の半分が4号方形周溝墓の南東コーナーより検出され接合している。また、2号方形周溝墓の北側周溝と本周溝墓の南側周溝の連結部分では、2号方形周溝墓出土としてあつかった壺1の口縁部が本方形周溝墓内で検出され、整理開始当初は本方形周溝墓の遺物として取扱っていた経緯がある。各遺物は周溝覆土中位の暗褐色土から上部の暗黄褐色土にかけて出土しており、2号方形周溝墓と同様に基底面より0.2m～0.4m浮いた状況を示している。

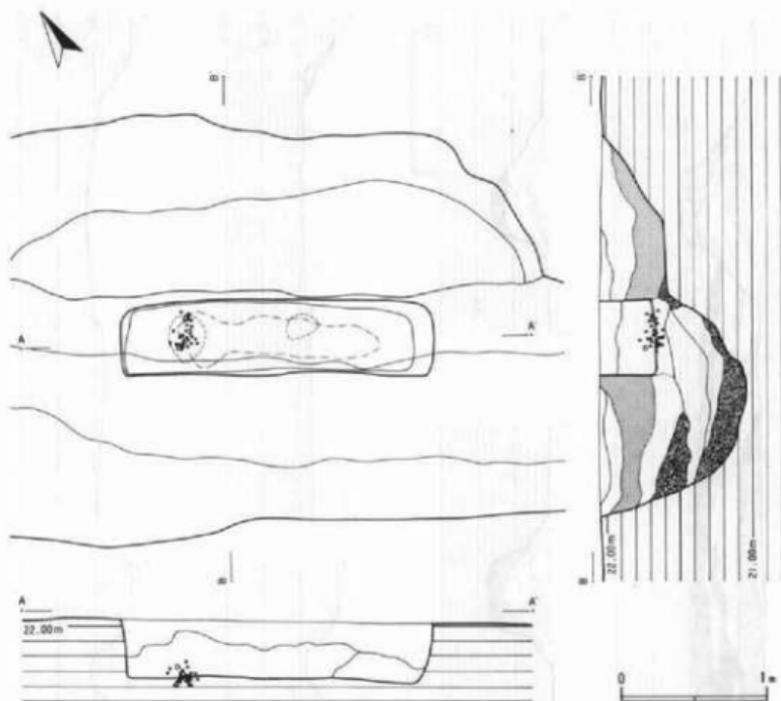
なお、北東コーナーから拡張開始付近までの周溝覆土最上位面より、古墳時代中期の土器が検出された。該期の住居群が方形周溝墓群とは間隔をおいて形成されていることから、5世紀の後半の頃でも、台状部の盛り上がり周溝の窪みがはっきりしており、墓の存在が明確に認識できたものと思われ、これらの遺物は意識的に周溝の窪地に投棄されたものと考えられる。ただし、それが直接方形周溝墓の墓前祭祀としての意味をもっているかどうかは、構築からの



第277图 3号方形周满墓实例图



第278图 3号方形层墓



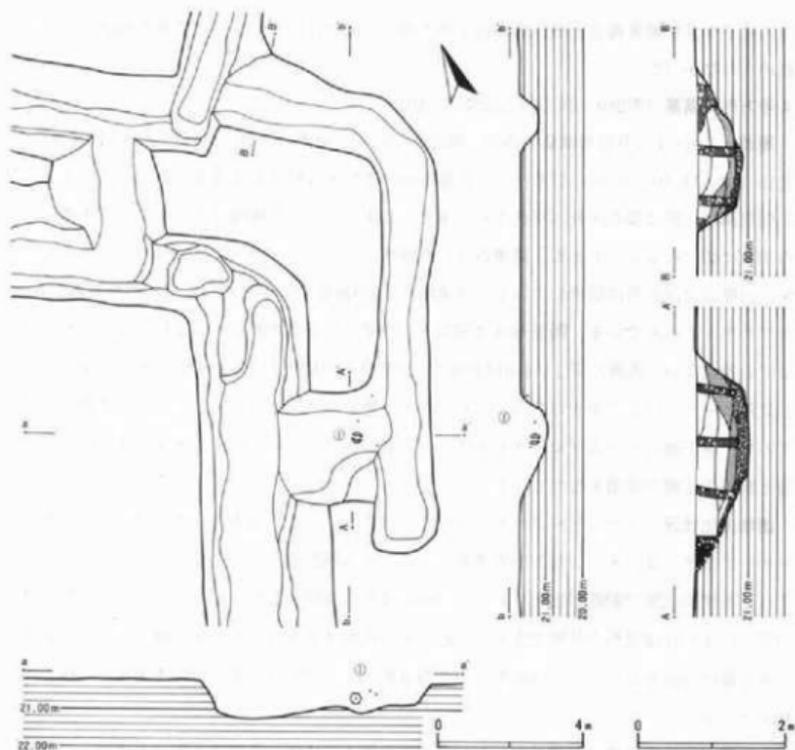
第279図 3号方形周溝墓主体部実測図

年月が大きいいことから考えにくい。

**主体部** 旧周溝を埋め戻した中央部に1基検出した。主軸方向を東西(N-55'-W)にとり、長軸2.15m、短軸0.5m、深さ0.4~0.5mを測る。底面は壁際を除き若干硬化しており、中央と東側に赤化した部分を認めた。側壁の立ち上がりは垂直で、壁の崩れはほとんどなかった。覆土は暗褐色土が2層に埋没しており、東側で認めた赤化した部分よりガラス玉を集中して検出した。ガラス玉の出土レベルは硬化面の10cm上方から下方10cmにまでおよぶ。主体部は旧周溝を埋め戻したところにつくられるため掘方の範囲は不明瞭であるが、主体部セクションB-B'および旧周溝断面A-A'から、外側から順次埋め戻しながら旧周溝の中央部を残し、北側の部分を新たに掘り込んで主体部掘方としたものと予想される。木棺を安置した後もロームブロックを主体とした黄褐色土、暗黄褐色土を埋め戻している。

**2号・3号連結部** (第284図・図版105)

2号方形周溝墓の東周溝と3号方形周溝墓の東周溝を結ぶように「コ」の字状に掘られたも



第280図 2・3号方形周溝墓連結部実測図

ので、当初は耕作による擾乱が激しく、不鮮明であったため確認面での識別がきわめて難しかった。断面観察からは2号・3号との明確な切り合いは認められなかった。

連結部の形状は、先にも触れたように「コ」の字状をなすが、ほぼ2号方形周溝墓の東周溝と平行する約12mの溝から2号には2mで、3号とはほぼ6mで接し、それぞれの周溝と直行している。したがって、3号に向う部分では3号方形周溝墓が2号に比べやや西に振れていることから、北側コーナーのなす角度は直角より広がっている。また、南側のコーナーでは1mほどの突出部が認められる。

溝の幅はほぼ2mを測るが、2号方形周溝墓との連結部分では3mに広がっている。深さは0.5m～0.7mと平均しているが、2号方形周溝墓に伸びる部分では、底面に向かって徐々に傾斜し、スムーズに移行しているのに対し、3号方形周溝墓にのびる部分では0.2mほどの比高差が認められる。

覆土は方形周溝墓同様、最下底面にロームブロックを多量に含む黄褐色土層、その上位にロ

ーム粒子を含む暗黄褐色土層、暗褐色土層と続く。遺物は、南コーナーで壺を検出した以外は認められなかった。

#### 4号方形周溝墓（第280～282図・図版103～104）

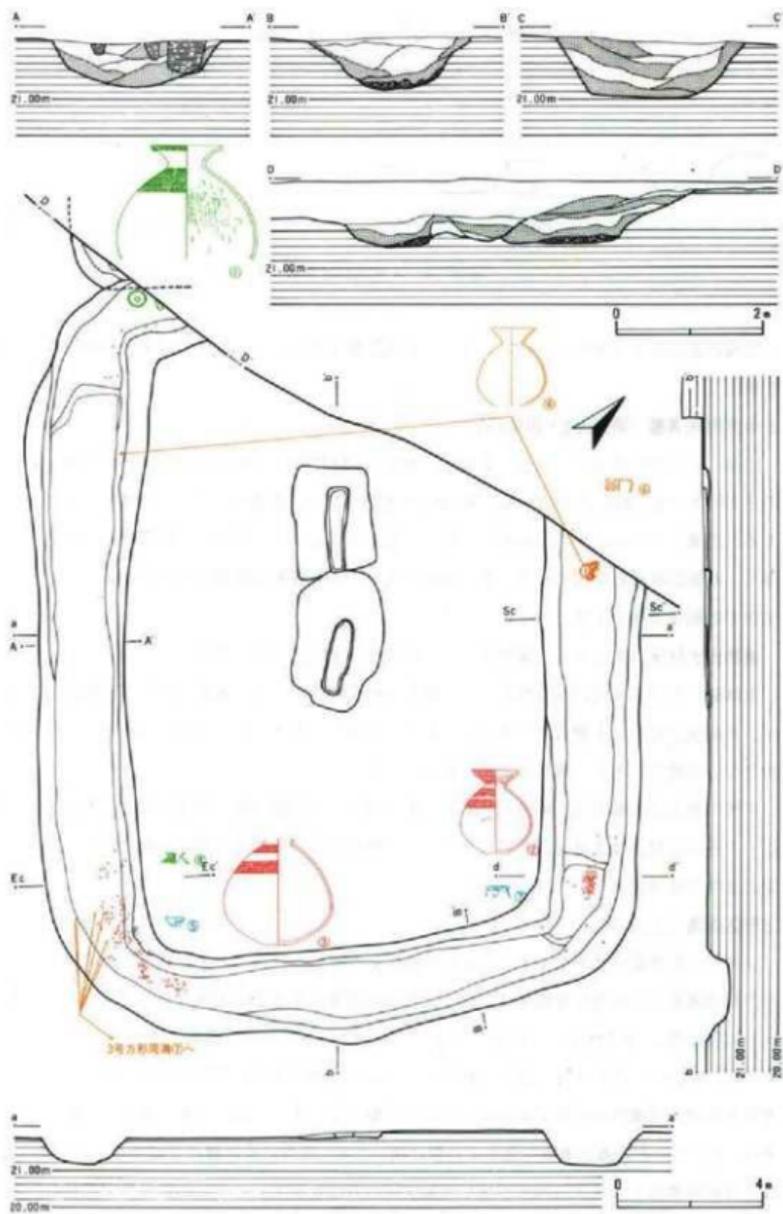
周溝 2号・3号方形周溝墓の西側に隣接している。東西（主軸方向）19.2m（16.6m）、南北16.2m（11.4m）の長方形を呈し、長軸方向は2号・3号方形周溝墓と直行する。西および北側周溝の一部は調査区外に所在する。また、北東コーナーで規模は不明だがもう1基の方形周溝墓に切られるようである。周溝各辺は直線的にのび、コーナーの外壁はやや円みをおびるが、内壁はほぼ直角に屈折している。周溝幅は2.5m前後で一定しているが、西側周溝が北寄りややふくらんでいる。断面形状は箱型で、内壁が若干急であるが、2号・3号方形周溝墓ほどの差はない。周溝の深さは0.8m前後で、底面は平坦に仕上げられているが、南東コーナーと北西コーナー付近で多少の凹凸が認められる。覆土の状況は2号・3号方形周溝墓と共通しており、最下層にロームブロックを主体とする層、さらにローム粒子を多量に含む暗黄褐色土層と暗褐色土層が互層をなしている。

遺物出土状況 ほとんどがコーナー付近より出土している。北東コーナーで2、7、南東コーナーでは3、5、8と3号方形周溝墓7と接合する胴部破片が出土している。北西コーナーでは1が倒立状態で胴部が出土したが、口縁部はその南側に散在していた。また、北側周溝の中程には4がほぼ完形の状態出土したが、その底部は南西コーナーより検出された。各遺物の出土層位は底面より浮いた暗褐色土から暗黄褐色土中であり、他の方形周溝墓と同様の出土状況を示す。

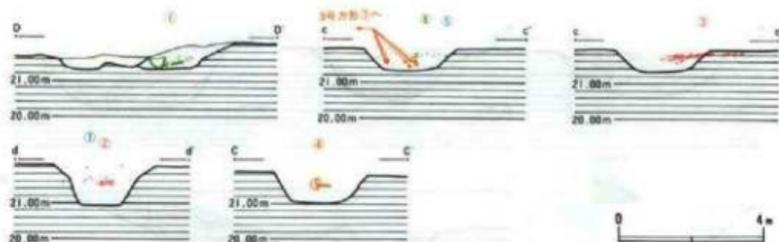
主体部 台状部中央に2基検出した。北西側を第1主体部、南東側を第2主体部とした。

第1主体部は主軸方向が周溝の長軸方向より若干西に振れるものの（N-47°-W）ほぼ同一軸線上にある。長軸2.3m、短軸は南側で0.4m、北側で0.55mを測りやや北側でふくらむ傾向にある。深さは確認面から0.1mときわめて浅く、側壁の立ち上がりはゆるい。また、基底面は中央部分で硬化している。掘り方は長軸3.0m、短軸2.1mの長方形で底面は主体部のそれとほぼ一致する。北側で若干掘り窪んだ部分が認められるが、ほぼ平坦に仕上がっている。主体部は南壁と接しており、第2主体部と接する部分では掘方覆土を切っている。遺物は主体部中央の基底面よりガラス玉が6点出土した。

第2主体部は台状部中央にあり、第1主体部より若干北に振れている（N-36°-W）。主体部は角がとれ不整形であるが、長軸2.05m、短軸0.65m、深さ0.1mを測る。確認面で鉄剣を検出しており、第1同様きわめて浅い掘り込みであった。側壁の立ち上がりはゆるく、壁際以外の基底面はやや硬化していた。掘方は、周溝の軸とほぼ一致するものの、コーナーが円みをおび南側が突出した状況を示す。掘方底面は、主体部のそれと同じ深さで、やや凹凸が認められる。遺物は、中央底面よりガラス玉を2点、西壁に接して鉄剣とガラス玉が基底面から0.1m浮



第281图 4号方形周墓



第282図 4号方形周溝墓

いた確認面の高さで出土している。また、主体部覆土をふるいにかけた結果、2個のガラス玉を検出した。

#### 5号方形周溝墓（第283図・図版105）

**周溝** 3号方形周溝墓の東側に隣接し、東西（主軸方向）7.0m（5.3m）、南北7.0m（5.4m）の正方形を呈し、幅0.7m～1.0m、深さ0.2m前後を測る。方位は3号方形周溝墓とほぼ同じである。周溝コーナーはやや円みがあり各辺も若干外にふくらんでいる。周溝壁の立ち上がりは緩く、断面形状はU字状を示す。掘り込みが浅いため、底面は軟質で凹凸がみられる。覆土は単層で暗褐色土層を主体としている。

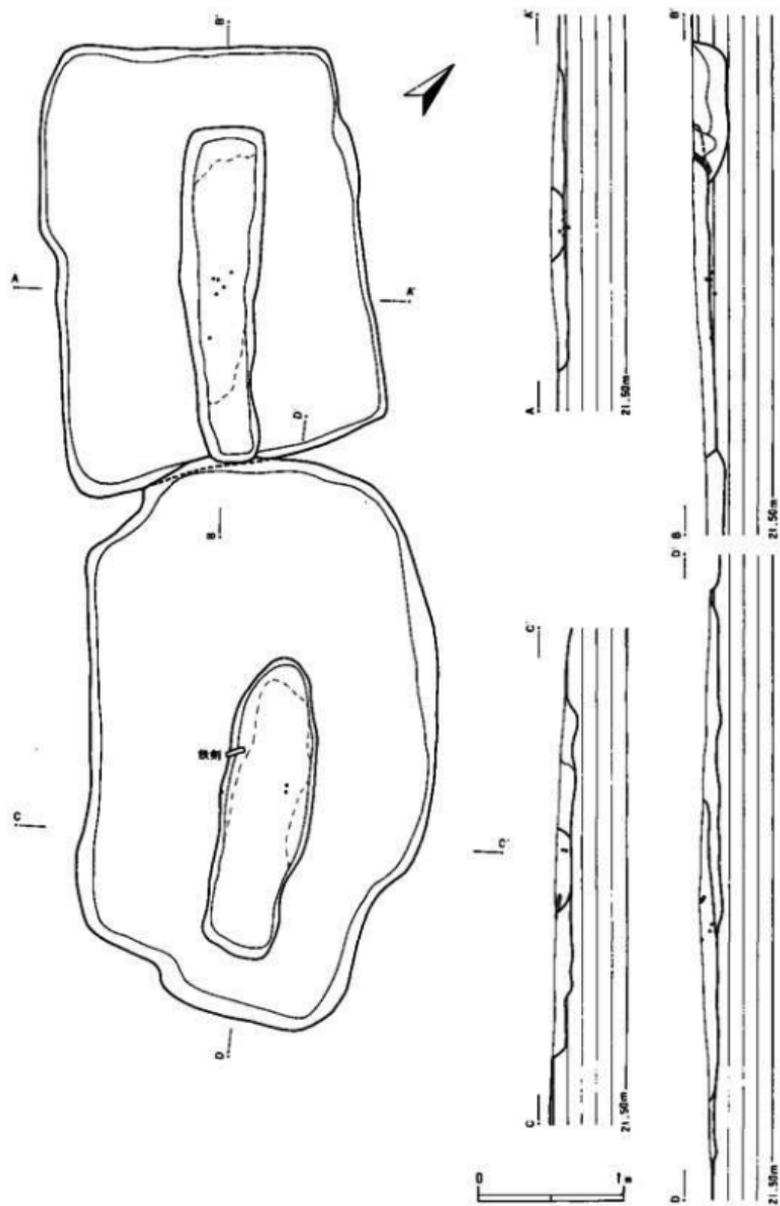
**遺物出土状況** まとまった遺物はなく、細片を少量出土したに留まる。

**主体部** 台状部中央に1基検出した。掘方の断面観察からは主体部の痕跡は不明瞭であったが、長軸南辺寄りに1層分離できることから、北寄りに設けられた可能性がある。なお、棺を持たない可能性もある。遺物は認められなかった。

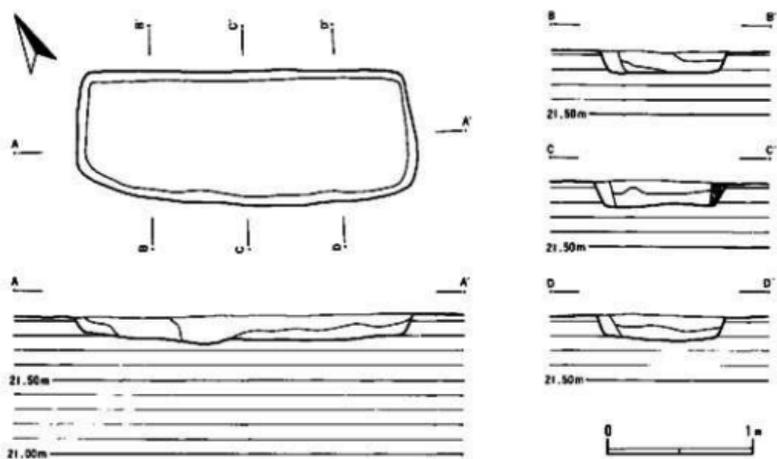
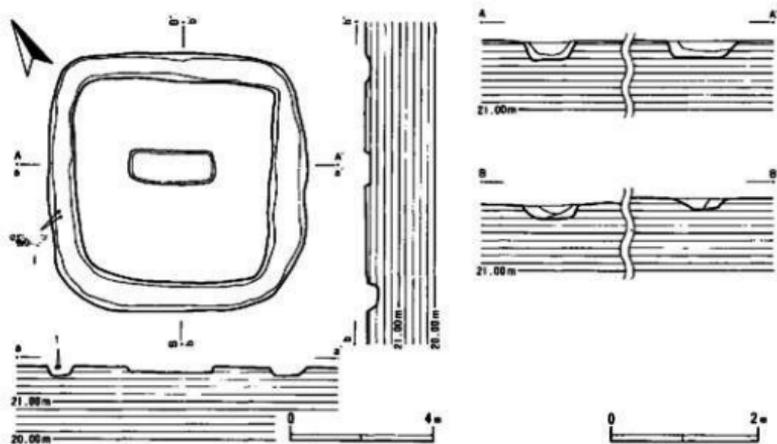
主体部掘方は主軸方向を東西（N-59°-W）にとり、長軸2.3m、短軸0.9m、深さ0.2mを測る。ロームの混入はさほど認められなかった。覆土内からは縄文土器片が散見されたが、この期の遺物は皆無であった。

#### 方形区画溝（第285図）

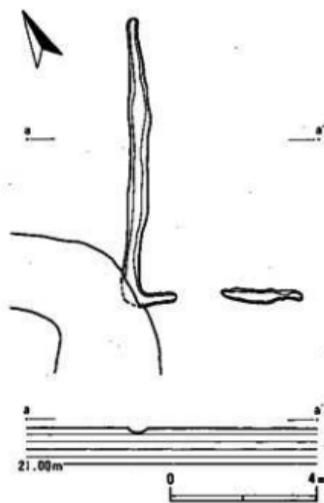
3号方形周溝墓の北東コーナーに接して検出した鍵の手状の溝で、3号方形周溝墓および5号方形周溝墓と同じ方位を指すことから、方形周溝墓に関連した区画の溝と考えられる。溝の掘り込みは浅く、0.1mほどしかない。南北にほぼ8m、3号方形周溝墓の北東コーナーで直角に折れ、東に向かって5mほど認められるが、きわめて浅く途切れ途切れとなっている。方形周溝墓や方墳の周溝の可能性もあるが、きわめて幅が狭く浅いため、それと考えるにくいところが多い。むしろ、その溝が遺物を含まず非常に浅いこと、直角に折れ鍵の手状になっていること、3号方形周溝墓とコーナー同志が接し、軸が同一方位を示すことなどから方形周溝墓の計画線のようなものと考えたほうが妥当性が高いように思われる。



第283图 4号方形石冢基主体部实测图



第284图 5号方形周溝墓(上)·主体部(下)实测图



第285图 方形区面清夹测图

### 第3節 遺物

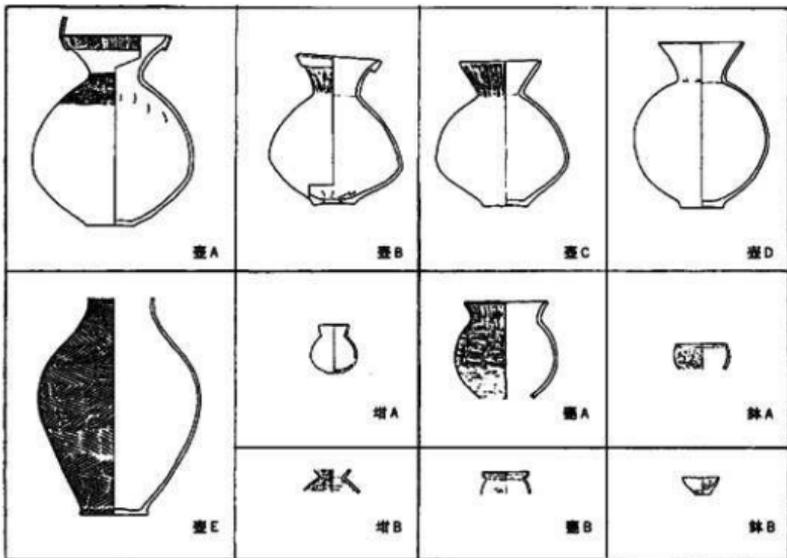
#### 概観

各方形周溝墓からは、土器をはじめ玉類、鉄剣が出土している。土器は周溝から、玉類、鉄剣は主体部から検出された。

1号方形周溝墓は壺2点・ガラス玉2点、2号方形周溝墓は壺8点・甕1点・鉄剣1点、3号方形周溝墓は壺7点(うち1点は4号方形周溝墓と接合関係にある)・埴1点・ガラス玉32点・管玉2点、4号方形周溝墓は壺5点(うち1点は3号方形周溝墓と接合関係にある)・埴1点・壺1点・鉢2点・鉄剣1点・ガラス玉11点、2号・3号連結部から壺1点、出土地点は不明であるが、主体部覆土中からガラス玉1点がそれぞれ出土している。

土器の説明は遺構ごとに行なうが、形態ごとに以下のとおり分類した(第286図)。

- 壺A 球形の胴部形態をとり、口縁部は二重口縁となる。胴部上半(胴部)および口縁部は縄文や網目状捺糸文で加飾する。施文部以外は丁寧に磨かれ赤彩を施している。
- 壺B 下ぶくれの胴部形態をとり、口縁部は折り返し口縁となる。胴部は丁寧に磨かれ赤彩されるが、口縁部にはさほど手を加えず頸部に刷毛目痕を残す。
- 壺C やや下膨れの偏球形の胴部形態をとり、口縁部は単純に開く平口縁である。胴部は丁寧に磨かれ赤彩されるが、頸部には刷毛目痕を残す。

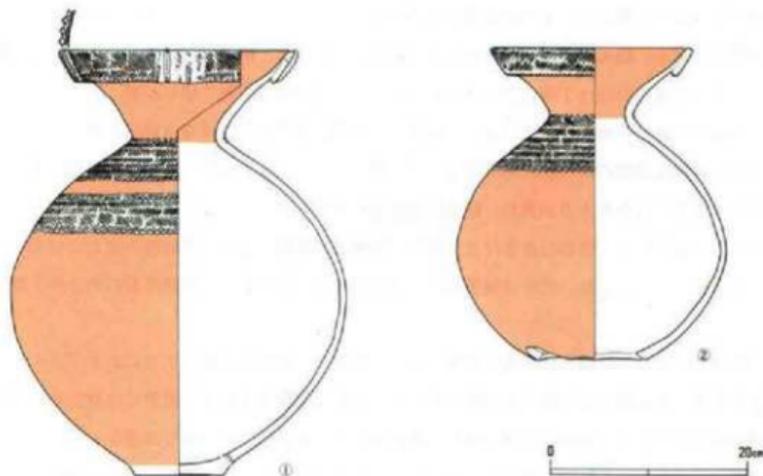


第286図 方形周溝墓出土土器分類

- 壺D 球からやや偏球形の胴部形態をとり、全面丁寧に磨かれ赤彩される。
- 壺E 長球形でやや肩の張る大形品。器面全体に羽状の附加条縄文を施文し、頸部に微隆帯を施す。
- 埴A 偏球形の胴部に、若干内弯する短い口縁部の小形品。器面は丁寧に磨かれている。
- 埴B Aより大振で器面に刷毛目痕を残す。
- 甕A 球形の胴部形態をとり、口縁部は外弯する。器面に刷毛目痕が残る大形品。
- 甕B 有段口縁の小形品。
- 鉢A 口縁部が内弯し円みの強い形態をとる。
- 鉢B 口縁部が外傾する小形品。

### 1号方形周溝墓（第287・294図・図版106）

壺Aが2点出土している。ともに、最大径を中位においた球形の胴部に口縁部は大きく開口する二重口縁をなす。1は大形品で、口縁部には羽状縄文を施し、断面三角形の棒状浮文を5本で一単位として4か所配している。棒状浮文は羽状縄文を施したのちに付されており、一部剥落した部分には地文の縄文がうかがえる。棒状浮文の頂部には連続した刻み目が施されている。口唇部には縄文を施す。また、口縁部下端にはヘラ状工具による連続した刻み目が棒状浮文を施さない部分に認められる。くの字状に屈曲した頸部には、円形竹管による連続刺突がめぐり、肩部には無文帯を介し、S字状結節文で区画された中を羽状縄文で充填した文様帯が上



第287図 1号方形周溝墓出土遺物実測図

下2段に施されている。頸部・胴部および口縁部内面は丁寧に磨かれ赤彩が施される。赤彩は刷毛状の工具で器面に塗られている。また、口縁帯の中ほどと頸部直下には径1cmほどの円形朱文が8個ずつ施されている。スタンプ状の工具を用いたものだろう。

2は中製品の部類で1より一回り小形となる。底部は意識的に壊されたようで、ほぼ輪積み帯にそって内部から穿孔している。文様は口縁帯・口唇部に斜縄文を施し、頸部に円形竹管の連続刺突が1と同様にみられ、肩部には羽状縄文を施し下端をS字状結節文で無文部と区画している。肩部の文様帯には無文部は設けていない。頸部・胴部および口縁部内面は丁寧にみがかれ赤彩が施されている。また、頸部直下には1と同じように円形朱文が8個認められる。

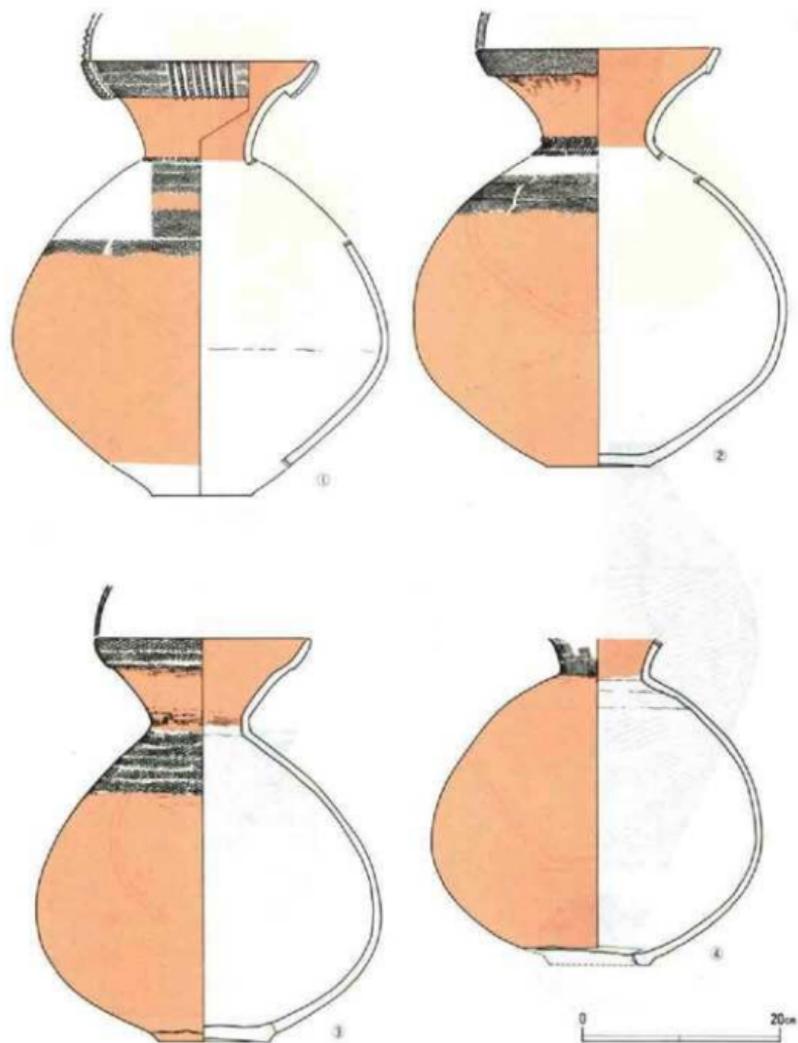
主体部からはガラス玉が2点出土している。大きさは4号方形周溝墓に近い。

## 2号方形周溝墓（第288・289・294図・図版106・107・109）

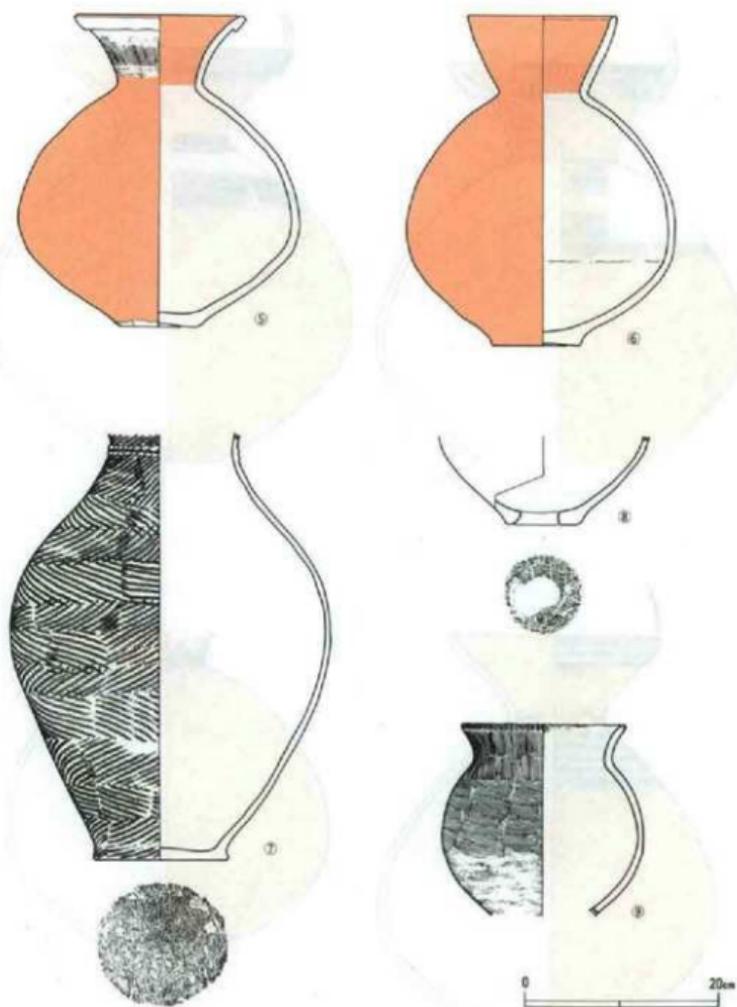
査A～E、壺Aが出土している。

査Aは3点あるが、胴部最大径をやや下方におくため下ふくれの形態をとる。1は、口縁部と胴部以外は細片であるため器形に不安を残すが、破片から文様構成を復元した。口縁帯には網目状燃糸文が施され、8本ほどを一単位として断面三角形の棒状浮文が付される。棒状浮文の頂部には連続して刻み目を施している。頸部には1号方形周溝墓の査と同様の円形竹管文を連続してめぐらし、肩部に無文帯を設けた網目状燃糸文を施している。文様施文部以外は丁寧に磨かれ赤彩が施される。口縁部内面も赤彩される。2は口縁帯と平坦なつくりの口唇部に網目状燃糸文を施し、頸部にボタン状貼付文を付している。肩部の文様帯は上位の2帯の斜縄文（複々節の縄文原体に複節の縄文を付加している）に続いて網目状燃糸文を施している。網目状燃糸文は燃りが解けないように末端を細い燃糸で結んでいるようで、原体幅で横方向に燃糸痕が認められる。頸部および胴部は磨かれ赤彩されているが、刷毛目調整痕がところどころ残っている。口縁部内面は丁寧に磨かれ赤彩される。3は口縁部の張り出しが弱くゆるやかなカーブを描く口縁部形態をとっている。口縁帯、口唇部および肩部文様帯は網目状燃糸文を施している。肩部文様帯の網目状燃糸文はよく目が揃ったものが5帯連続して施されるが、施文圧が下方に集中するため上方が薄れ、刷毛目調整痕が器面に残っている。また、頸部のミガキも粗いため口縁帯付近と頸部屈曲部付近に刷毛目調整痕が観察できる。口縁部内面および文様部以外は赤彩される。なお、底部は輪積帯からきれいに抜かれており、破損断面の角は多少摩滅している。

査Bは2点ある。口縁部は外弯して折り返し口縁状で、胴部最大径は下方におき下ふくれの形態をなす。5は幅の狭い無文の口縁帯をもち、端部は面取りされる。頸部には意識的に刷毛目痕が残されている。胴部は丁寧に磨かれ赤彩される。8は胴下半のみしか遺存しないため、本分類が妥当かどうか疑問な点も残るが、器形、胎土の状況などから本類とした。器面は丁寧に磨かれているが赤彩はなされていないようである。底部は焼成後内部から強く突かれ楕円形



第288图 2号方形周溝墓出土遺物実測図(1)



第289图 2号方形周溝墓出土遺物実測図(2)

に穿孔されている。また、木葉痕が残る。

壺Cが1点出土している。やや下ぶくれの偏球形の胴部形態をとり、口縁部は平縁をとるものと思われる。頸部には意識的に刷毛目痕を残す点で壺Bと共通する。4は輪積帯から底部を欠損しているが、穿孔した可能性が高い。胴部および口縁部内面は丁寧に磨かれ赤彩される。胴部内面の上部には輪積み痕が若干残り、破損状況も輪積み痕からのものが多い。

壺Dは器面を丁寧に磨かれ全面赤彩された壺で、6はやや下膨れの胴部形態をとり、口縁部は多少内弯気味に開口している。口唇部内面は内削ぎ状で弱い稜線を留めている。

壺Eはいわゆる北関東系で全面に附加条縄文を施した長胴の壺である。7は胴部最大径を上位におきやや肩に張りをもたせ、頸部は比較的しまってみえる。口縁部はおそらく大きく開く形態をとると考えられる。底部は外方に突出している。器面は粗い附加条縄文を羽状に施し、さらに、頸部には上部を指頭で押しつぶしたきわめて細い微隆帯を2条めぐらしている。底部には布目痕が残っている。なお、胎土にはスコリアや白色粒子を多く含み、他の土器の質感とは大きく異なっている。

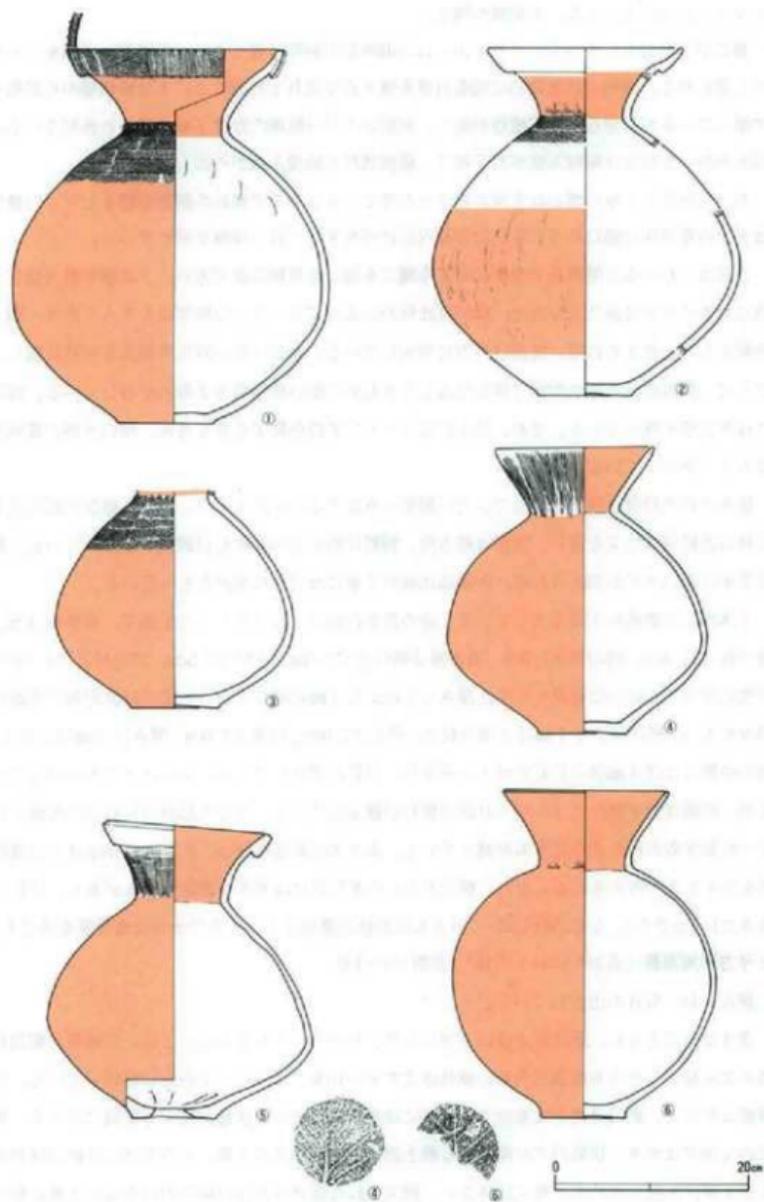
壺Aは刷毛目痕を残す粗製品で、丸い胴部に外反する口縁部をもつ。9は口唇部に刷毛目条工具の連続刻み目文を施し、頸部は縦方向、胴部は斜め方向の刷毛目調整がなされている。胴部下半は弱いナデが加えられる。内面は比較的丁寧にまでられ光沢をもっている。

主体部から鉄剣が1点出土している。身の長さの短いずんぐりとした形態で、全長14.4cm、身の長さ11.4cm、柄の長さ3.0cm、身の幅は柄付近で2.7cm、中間で2.5cm、切先付近で1.7cmと切先に向かってしだいに細身となり、厚みも4mmから3mmに減じている。切先は非対称で先端が円みをもつ。柄は身より7mmほど幅を狭め、柄元で2.0cm、柄頭で1.6cm、厚みは3mm弱である。柄の中間には径4mm弱の目釘穴が1か所あり、目釘が遺存している。柄にはあて木が残っているが、柄頭は若干耕作により削られ鉄の部分が露呈している。あて木部分は目釘穴の柄頭より一枚剥ぎ取られたように厚みが減っている。あて木の断面形状は、2.7cm×1.8cmほどの楕円形を示すものと考えられる。なお、柄元からしぎ付近には大きな錆ぶくろみがある。目釘の長さは1.7cmである。なお、錆がふいているものの鉄の遺存はよいようで十分な重量感を感じる。

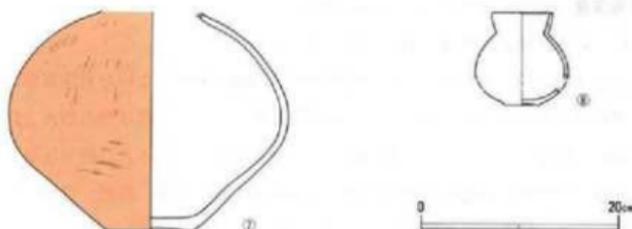
3号方形周溝墓（第290・291・294図、図版107～109）

壺A～D、埴Aが出土している。

壺Aは3点あるが、胴部最大径は下方にあり、やや下ぶくれとなる。1は、口縁部に網目状燃糸文を施したのち断面三角形の棒状浮文を8～10本一単位にして四方に貼付している。口唇部は平坦で、網目状燃糸文を施す。頸部には赤彩したボタン状貼付文が等間隔にめぐる。胴部の文様帯はボタン状貼付文が施される最上部に附加条縄文が1帯、その下位には網目状燃糸文が4帯ほど施文される。無文部はない。施文された部分以外は口縁部内面を含め丁寧に磨かれ赤彩される。胴部内面はなでられ、小口痕が認められる。2は頸部から胴部、胴部最大径付



第290图 3号方形周溝墓出土物实测图(1)



第291図 3号方形周溝墓出土遺物実測図(2)

近が接合し、形のわかる状態になったもので、口縁帯などは推定復元による。口縁帯および底部付近は周溝内の破片からは検出できなかった。肩部文様帯は網目状燃糸文のみが施されるようである。頸部、胴部には縦方向のミガミが施されるが、刷毛目調整痕が若干残る。赤彩部分は他の壺Aと同様で口縁部、胴部、口縁部内面に認められる。3は比較的小形品で、口縁部を欠いている。頸部にはボタン状貼付文がめぐり肩部文様帯は弱い押しつけの網目状燃糸文のみで構成される。口縁部は頸部から上を意図的に打ち欠いたものと思われ、周溝内から同一個体と識別できる口縁部破片は検出できなかった。

壺Bは1点出土している。5の胴部形態は最大径を下半に置き、強く屈曲する算盤玉状で、折り返し口縁の口縁帯は比較的広く、口唇部は面取りがなされる。頸部には意図的に刷毛目痕を残し、胴部と口縁部内面および口唇部は丁寧に磨かれて赤彩される。底部は焼成後内面より穿孔され、破損断面は外方に開口しており、へりの一部に刃つぶし状の打撃を加えた部分も認められる。

壺Cは2点出土しているが、7は4号方形周溝墓から胴部上半の半周分が出土している。

4は頸部に刷毛目痕を残し、胴部はやや下方に最大径をおく偏球形で、下半は若干くびれている。口縁部形態は平縁で頸部から鋭く屈折して直線的に外傾している。外面および口縁部内面は丁寧に磨かれ赤彩される。底部には木葉痕が残る。7は口縁部を欠いているが、胴部形態は4と同様である。

壺Dは球形胴の完形品である。6外面および口縁部内面を丁寧にみがき赤彩している。底部には木葉痕が残る。

8は埴Aである。下ぶくれの胴部に内弯する口縁部をもつ瓢状の形態を示す比較的小形品で、口唇部内面は内削ぎ状で、弱い稜線を描く。底部は若干上げ底である。器面は丁寧に磨かれる。主体部からはガラス玉32点、管玉2点が出土している。

ガラス玉はうすいブルーで直径は3mm～4mm、厚さは1.5mm～3mmの間に取まる。管玉は赤褐色の鉄石英製、細身に淡緑色の緑色凝灰岩製である。

#### 4号方形周溝墓（第292・294図、図版108・109）

壺A・C、埴B、甕B、鉢A・Bが出土している。

壺Aは3点出土している。1は胴部の最大径が57.5cm（全周しないため推定値）を越える大形品で、球形胴に外反する折り返し状の口縁部形態をとる。口縁帯は他の壺Aと比べ幅が狭くなっているが、端部は若干内弯し二重口縁のおもむきをもっている。口唇部は平坦なつくりである。口縁帯、口唇部、肩部には網目状捲糸文が充填され、頸部、胴部、口縁部内面は丁寧に磨かれ赤彩される。胴部内面は篋状工具でなでられるが、一部に指頭によるナデが観察される。2は口縁帯、口唇部に斜縄文を、肩部文様帯にも同様の斜縄文を施し、上下端を平行細沈線で区画している。中央部には無文帯を設けている。肩部文様帯は頸部より若干下がった位置から開始されており、文様は異なるが2号方形周溝墓の3と類似した施文モチーフをとる。器面のミガキは比較的粗雑で、頸部には刷毛目痕が明瞭に残っている。頸部、胴部、口縁部内面には赤彩が施される。3は大形品で、口縁部を欠いている。胴部は下膨れのふっくらとした形態をとる。頸部にはボタン状貼付文をめぐらし、肩部文様帯は無文帯をもつ網目状捲糸文を施している。頸部、胴部、文様帯無文部、口縁部内面は丁寧に磨かれ赤彩される。胴部の破片は比較的大破片が接合し合っているが、口縁部破片が検出できなかったことから、口縁部は意識的に壊され、他の地点に投棄されたものと考えられる。

壺Cは1点出土している。4は下よくれの胴部に外傾する口縁部形態をとる。外面は全体にミガキがおよんでいるが、赤彩は胴部および口縁部内面だけで口縁部外面には施されていないことから、この類とした。底部は輪積み帯の部分から穿孔され、体部とは別地点の面する対の周溝から出土した。

埴Bは1点出土している。頸部がしまり、胴部の張りは強い。口縁部は外傾する。器面には刷毛目痕を留めている。胴部内面は輪積み痕が明瞭に残る。

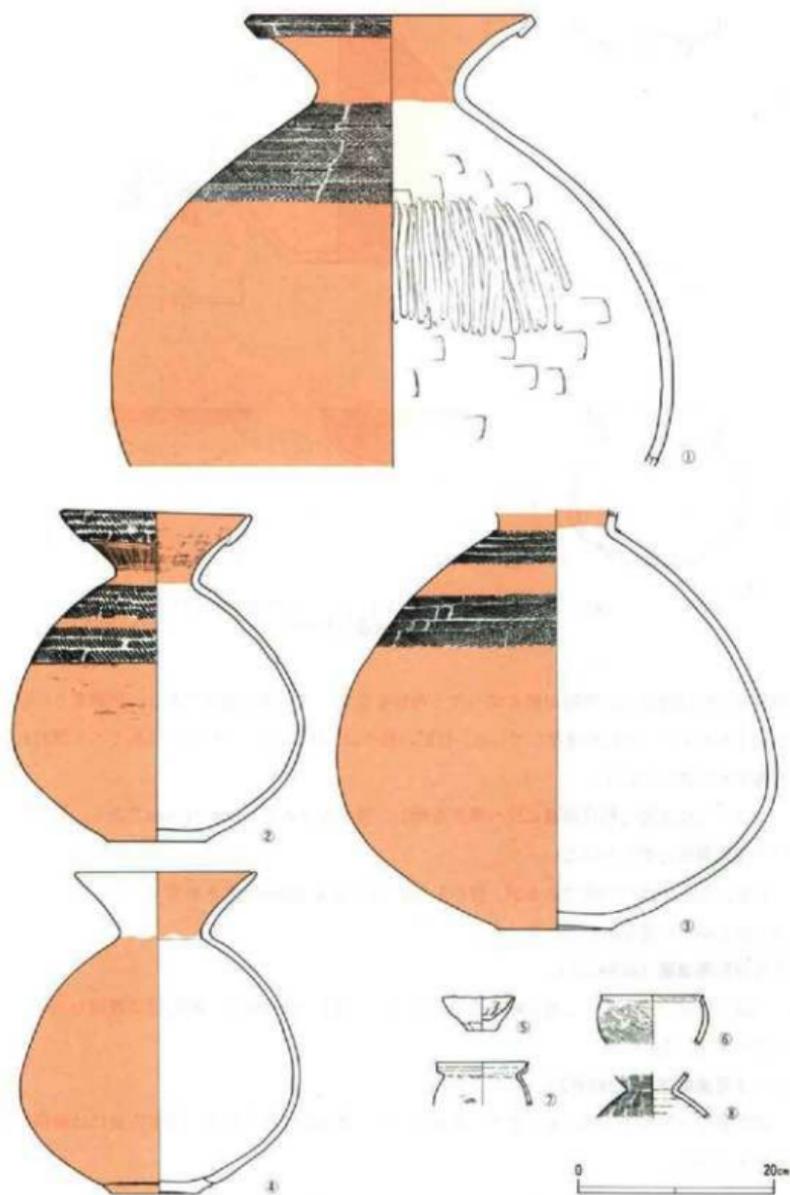
甕Bは1点出土している。7は受口状の口縁をとる小形の甕で、口縁部はヨコナデ、胴部は刷毛目調整ののちにナデが加えられる。胴部の張りは小さい。

鉢Aは小形品である。5はさかづき状の形態で外面にはナデ、底部周縁はケズリを施す。内面はヘラナデである。

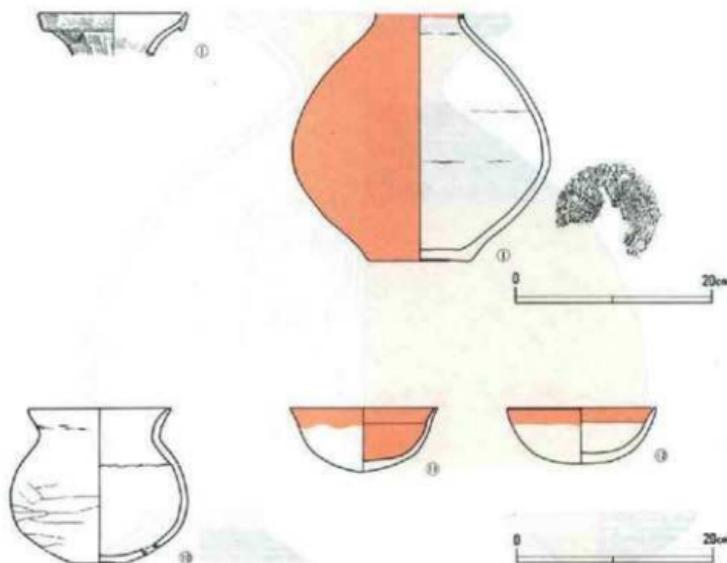
鉢Bは碗状を呈す。6は円みのある体部に小さく口縁部が外反する。体部は刷毛目調整され、口縁部にはヨコナデを加えている。

主体部から鉄剣1点とガラス玉11点が出土している。

鉄剣は身の途中で欠損しているが細身で、長さ10.2cm、身の遺存長6.7cm、柄の長さ3.5cm、身の幅は柄付近で2.2cm、欠損部で2.0cmと切先に向けてしだいに細身となり、厚みも3mm強から多少薄くなる。断面形は扁平な菱形をなすものと思うが腐食により稜線は認められない。柄は身より7mmほど幅を狭め、柄元で1.5cm、柄頭で1.0cmを測り、しのぎが明瞭に観察できる。



第292图 4号方形周溝墓出土物実測図



第293図 5号方形周溝墓(左上)、2・3号連結部出土遺物  
2号方形周溝墓混入遺物実測図

柄頭は平坦ではなく、先端が鈍く尖った三角形を呈す。厚みは3mm弱である。柄頭寄りに目釘穴が1か所あり、目釘が遺存している。目釘の長さは1.0cmである。柄元にはあて木と思われる木質部が付着している。

ガラス玉は3号方形周溝墓に比べ厚さを増し、径も大きめで3.5mm～4.5mmである。色調は3号方形周溝墓と変わりはない。

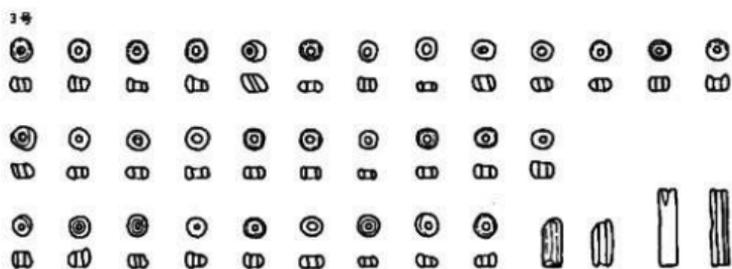
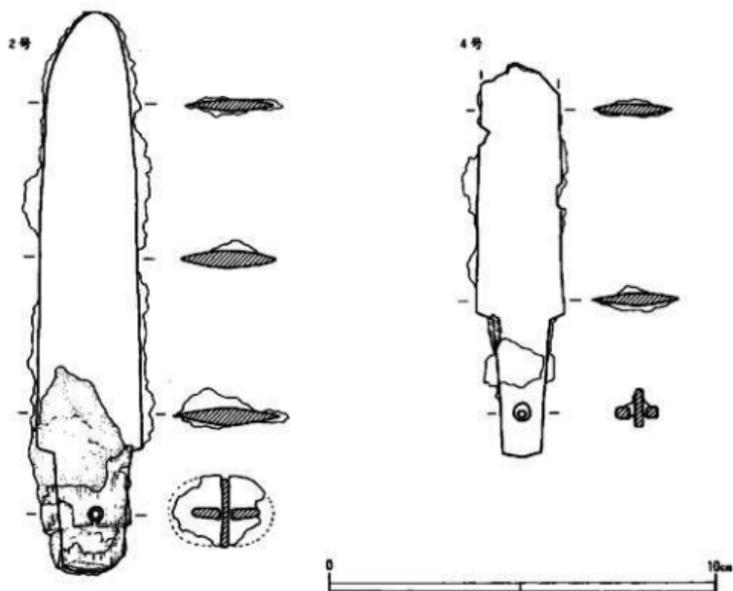
なお、出土地点は不明であるが、径が5.3mm、厚さが4.2mmと大きめでコバルト色のガラス玉が排土中より発見されている。

#### 5号方形周溝墓（第293図1）

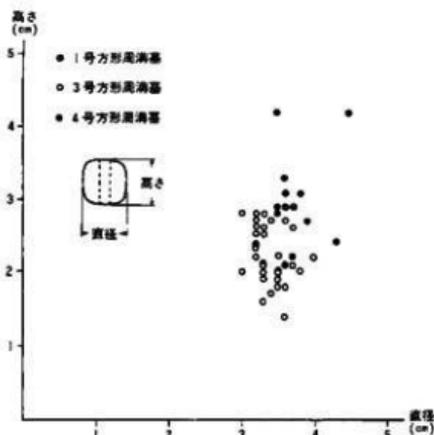
口縁部の破片である。二重口縁を呈し、器面には刷毛目痕を残す。刷毛目は裏刷毛状の工具を使用している。

#### 2・3号連結部（第293図2）

胴部最大径を若干下位にもつ壺で、器面は丁寧に磨かれ赤彩される。胴部内面には輪積み痕が認められる。



第294図 方形窟溝墓出土、鉄剣・ガラス玉・管玉実測図



第295図 方形周溝墓出土ガラス玉計測値分布図

表74 方形周溝墓出土土器観察表

1号方形周溝墓 土器観察表

検出番号	種類・器種	法 量 (cm)			遺存性	成形・調整・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
1	壺	20.7	-	(31.4)	1/2	□縁帯・肩部施文のち頸部・胴部ヨコ方向のミダキ・赤彩 □縁部内面ミダキ・赤彩 胴部内面ナデ 文様: □縁帯・□唇部に斜縄文、□縁帯下施刻み目、頸部に円形竹管文・円形朱文、肩部に羽状縄文・S字状結節文	砂粒少量	良	赤褐色	底部穿孔か
2	壺	24.0	-	(41.5)	1/2	□縁帯・肩部施文のち頸部・胴部ヨコ方向のミダキ・赤彩 □縁部内面ミダキ・赤彩 胴部内面ナデ 文様: □縁帯斜状浮文・羽状縄文・円形朱文、□唇部斜縄文、□縁帯下施刻み目、胴部円形竹管文・円形朱文、肩部羽状縄文・S字状結節文	砂粒少量	良	赤褐色	

2号方形周溝墓 土器観察表

検出番号	種類・器種	法 量 (cm)			遺存性	成形・調整・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
1	壺	24.0	-	(41.0)	1/3	□縁帯・肩部施文のち頸部・胴部ヨコ方向のミダキ・赤彩 □縁部内面ミダキ・赤彩 胴部内面ナデ 文様: □縁帯斜状浮文・網目状結節文、□唇部網目状結節文、肩部円形竹管文、肩文網目状結節文	砂粒多	良	暗赤褐色	同一破片の検証から器形・文様復元
2	壺	25.0	10.4	(42.0)	2/3	□縁帯・肩部施文のち頸部・胴部ヨコ方向のミダキ・赤彩 □縁部内面ミダキ・赤彩 胴部内面ナデ 文様: □縁帯・□唇部網目状結節文・頸部ボタン状貼付文、肩部斜縄文・網目状結節文	砂粒少量	良	赤褐色	

3	壺	22.1	11.2	40.3	1/1	口縁部・肩部施文のうち頸部・胴部ヨコ方向のミガキ・赤彩 口縁部内面ミガキ・赤彩 胴部内面ナデ 文様：口縁部・口唇部・肩部網目状捺赤文	砂粒少量	良	黄褐色	底部穿孔の痕跡あり
4	壺	-	(10.2)	(32.5)	3/4	胴部・口縁部内面ミガキ・赤彩 胴部外面刷毛目、胴部内面ナデ	砂粒多	良	暗赤褐色	底部穿孔
5	壺	17.7	8.0	32.5	2/3	口縁部ヨコナデ、口唇部・胴部・頸部内面ミガキ・赤彩 胴部刷毛目、胴部内面ナデ	砂粒多	良	暗赤褐色	
6	壺	15.3	9.2	33.9	1/1	外面・口縁部内面ミガキ・赤彩 胴部内面ナデ	砂粒少量	良	赤褐色	
7	壺	-	13.7	(43.0)	3/4	胴部内面ナデ 底部布目痕 文様：全面附加条羽状横文、頸部縦帯	砂粒・スコリア多	良		口縁部欠損
8	壺	-	7.5	(9.0)	1/2	外面ミガキ 内面ナデ 底部木葉痕	砂粒少量	良	暗赤褐色	底部穿孔
9	壺	17.0	-	(19.2)	1/3	口唇部刻み目、外面刷毛目のうち胴下半部ナデ、内面ナデ	砂粒多	やや不良	暗褐色	

3号方形周溝墓 土器観察表

押出番号	種類・形	法 量(cm)			遺存度	成形・調整・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
1	壺	22.4	9.7	38.3	3/4	口縁部・肩部施文のうち頸部・胴部ヨコ方向のミガキ・赤彩、口縁内面ミガキ・赤彩 胴部内面ナデ 文様：口唇部網目状捺赤文、口縁部棒状浮文・網目状捺赤文、頸部ボタン状貼付文、肩部附加条羽状横文・網目状捺赤文	砂粒少量	良	暗赤褐色	
2	壺	-	-	(29.0)	1/3	肩部施文のうち頸部・胴部ミガキ・赤彩、口縁内面ミガキ・赤彩 胴部内面ナデ 文様：肩部網目状捺赤文	砂粒少量	良	暗赤褐色	
3	壺	-	9.0	(22.0)	3/4	肩部施文のうち胴部ミガキ・赤彩、口縁内面ミガキ・赤彩 胴部内面ナデ 文様：胴部ボタン状貼付文、肩部網目状捺赤文	砂粒少量	良	黄褐色	口縁部欠損
4	壺	16.5	9.0	29.0	2/3	胴部・口縁内面ミガキ・赤彩、胴部刷毛目痕残る・胴部内面ナデ	砂粒少量	良	暗黄褐色	
5	壺	12.4	6.5	30.0	3/4	口縁部ヨコナデ、胴部・口縁内面ミガキ・赤彩、胴部刷毛目痕残る、胴部内面ナデ 木葉痕	砂粒少量	良	暗黄褐色	底部穿孔
6	壺	17.2	8.7	33.0	3/4	外面・口縁部内面ミガキ・赤彩、胴部内面ナデ 木葉痕	砂粒少量	良	黄褐色	
7	壺	-	8.8	(22.5)	2/3	外面ミガキ(刷毛目痕残る)、内面ナデ	砂粒少量	良	黄褐色	4号方形周溝墓と接合
8	埴	6.0	3.6	(9.6)	1/2	外面・口縁内面ミガキ・胴部内面ナデ		良	淡黄褐色	

4号方形周溝墓 土器観察表

検出 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺存度	成形・調整・文様の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
		口径	底径	高さ						
1	甕	30.0	-	(46.0)	1/2	口唇部・口縁部・肩部施文のうち頸部・胴部・口縁内面ミガキ・赤彩、胴部内面ナデ (指環ナデが一部行なわれる) 文様：口唇部・口縁部・肩部斜目状 斜線文	砂粒少量 スコリア	良	暗赤褐色	
2	甕	19.5	10.0	33.5	3/4	口唇部・口縁部・胴上半部施文のうち頸部・胴部ミガキ・赤彩、胴部刷毛目成残る、口縁内面ミガキ・赤彩、胴部内面ナデ 文様：口唇部・口縁部斜線文、胴上半部北緯区面斜線文	砂粒少量	良	黄褐色	
3	甕	-	11.5	(42.0)	2/3	胴部施文のうち胴部・頸部・口縁内面ミガキ・赤彩、胴部刷毛目成残る、口縁内面ミガキ・赤彩、胴部刷毛目状部未文	砂粒少量	良	暗赤褐色	
4	甕	18.5	8.5	32.6	3/4	外面・口縁内面ミガキ・赤彩	砂粒少量	良	暗赤褐色	底部穿孔の痕跡あり
5	鉢	7.4	2.8	3.5	1/1	外面ナデ、底部周縁ケズリ、内面ナデ	砂粒少量	良	暗褐色	
6	鉢	19.4	-	5.1	1/2	外面刷毛目、内面ナデ、口縁部ココナデ	砂粒少量	良	暗赤褐色	
7	甕	9.5	-	(4.3)	1/2	胴部刷毛目のちナデ、胴部内面ナデ、二段口縁(ココナデ)	砂粒少量	やや良	暗赤褐色	
8	埴	-	-	(4.5)	1/3	外面刷毛目、口縁内面ミガキ、胴部内面ナデ (輪痕残る)	砂粒少量	良	暗赤褐色	

5号方形周溝墓 土器観察表

検出 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺存度	成形・調整・文様の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
		口径	底径	高さ						
1	甕	15.0	-	(4.3)	1/3	口縁部・胴部刷毛目、口縁内面刷毛目のちミガキ	砂粒少量	良	暗褐色	

2号・3号連結部 土器観察表

検出 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺存度	成形・調整・文様の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
		口径	底径	高さ						
1	甕	-	10.0	(25.5)	2/3	外面・口縁内面ミガキ・赤彩、胴部内面ナデ (輪痕残る) 木葉痕	砂粒少量	やや良	暗赤褐色	

3号方形周溝墓混入 土器観察表

検出 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺存度	成形・調整・文様の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
		口径	底径	高さ						
1	甕	14.4	4.4	15.8	1/1	胴部ヘラケズリのちナデ、口縁部ココナデ、胴部内面ナデ	砂粒・スコリア含	やや不良	暗褐色	
2	坏	15.2	-	6.5	1/1	外面ナデ、口縁部赤彩、内面ナデ・赤彩	砂粒少量	良	暗赤褐色	
3	坏	15.2	-	5.7	2/3	内外面ナデ、口縁部内外面ナデ	砂粒少量	良	暗赤褐色	

#### 第4節 まとめ

石搦遺跡で検出した方形周溝墓は長方形大形プランのもの3基と、方形で小形のもの2基、さらに、方形区画溝が1か所である。

大形方形周溝墓は、すべて長方形の周溝形態をもち、掘込みは箱状の深い形態を示している。主体部は2号、3号が長辺方向と直行するのに対し、4号が平行の位置関係を示している。これは、4号が前者の周溝墓からほぼ90°長軸が振れているためで、主体部の主軸方向はあらかじめ決められていたようである。これは、小形の方形周溝墓についても共通している。

大形方形周溝墓のうち2号と3号は連続する形で短辺の溝を接し、対面する溝は短い溝で、東側の長辺の溝は「コ」の字状の溝で連結している。この連結溝は、当初もう1基の周溝墓を予想させたが、底面をほぼ2号、3号と同一レベルに保ちながら方位も共通しているにもかかわらず、平面形状が方形にならないこと、断面観察から同時に埋没していることから、明らかに2号、3号を連結するために造られたものであることが判明した。このような付属的な形態はめずらしい例で、後述する方形周溝墓の拡張とは明らかに異なるものである。

3号方形周溝墓は、前節で説明したとおり拡張している周溝墓として注目されるものである。拡張した方形周溝墓は類例も少ないが、ほとんどの場合、拡張に伴って埋葬施設（主体部）も増設している。しかし、本例は埋葬施設は1か所しか発見されていない。しかも、従来掘込まれた溝は、自然埋没が始まる以前、つまり掘上りがつてからすぐに埋め戻され、その中間部を埋葬場所に選んでいる。拡張以前の主体部の存在は皆無とはいえないが、調査時にその痕跡は認められなかった点で、規模拡大に伴う拡張と考えてよいであろう。

周溝内から検出した遺物はすべて土器である。器種は壺を主体とし、若干の小形品と甕が混じる。出土状況は、底面から若干浮いたものがほとんどで、出土状況や破損状況で下表のようにいくつかに分類することができる。

状 況	1 号	2 号	3 号	4 号
大型品や形のわかる破片を中心に比較的小範囲にまとまるもの	① ②	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	③ ④ ⑥ ⑧	① ⑤ ⑥ ⑦ ⑧
意識的に細かく破碎したものが小範囲に分布するもの		① ②	① ② ⑤	② ③
2地点に分けて投入したもの		③	⑦	④

破損状態でみた場合、原型をとどめる大形破片や形のわかるもの、意識的に細かく破碎したものの、完全に近いものに分けることができ、また、破片の散布状況も比較的小範囲にまとまるものと、明らかに2地点に分けているものの二者が認められる。遺物の破損状況で注目されるのは、文様をもつ壺Aが意識的に破碎されているケースが多いことで、一定の場所にまとまっ

て投棄されている傾向がうかがえる（2号方形周溝墓は3号との連結部、3号方形周溝墓は拡張部の北東コーナー、4号方形周溝墓は北東と南東のコーナーである）。これらのことは、壺の形態によって区別する特別な意識が働いているのかもしれない。また、明らかに2地点に分けて投棄しているものについては、2号方形周溝墓の壺3や、4号方形周溝墓の壺4のように、穿孔した底部が対角線方向や少し離れた周溝コーナー付近にあるものや、胴部を二分し3号と4号に分けて投棄した3号方形周溝墓の壺7がある。

周溝内から出土した遺物の出土層位は底面付近に堆積しているローム混入土の上面、つまり覆土中位であり、明らかに破砕行為を行なっているものや、2地点におよぶ遠隔地との接合関係をもつものなど、方形周溝墓に安置した遺物が転落したものは考えにくく、埋葬後、方形周溝墓の盛土がある程度安定する期間を経たのちに営まれた墓前祭祀に伴って溝に投棄した状況を示すものにとらえられる。その際、2号・3号と4号との空白部は墓道としての役割を果たしたものと考えられるし、遺構間の接合資料から、大形方形周溝墓の墓前祭祀は同時に営まれている可能性もある。

前述したとおり、周溝内からの出土品は壺を中心とした土器である。そのほとんどは南関東系で、加飾、赤彩されたものも多い。出土状況や接合状況から判断して、2～4号方形周溝墓の遺物はほぼ同一時期のものと判断できる。4号が未完掘部分があるためか一部を欠いているが、基本的には壺A～Dがセットをなしているようである。それぞれの特徴は、壺Aは文様を施したもので、口縁帯や肩部文様帯には網目状摺糸系文を用いるものがほとんどであるが、4号の壺2が縄文を、また、2号の壺2と3号の壺1の肩部文様帯最上部のみに縄文を施文する。肩部文様帯の区画に無文帯を設けるものもある。無文部は口縁内面を含め丁寧に磨き赤彩している。頸部には意識的に刷毛目痕を残し、胴部と口縁部内面を赤彩するもののうち、折り返し口縁をなすものと平口縁をなすものがあり、前者は壺B、後者は壺Cである。壺Dは全面を丁寧に磨き赤彩したものである。これらの壺は頸部が「く」の字状に明瞭に屈曲していることや、瓢状の小形埴を3号方形周溝墓で、有段口縁の形態をとる小形埴が4号方形周溝墓に認められることから、古墳時代の初頭の時期と考えてよいようである。

また、2号方形周溝墓から出土した壺Eについては、器面に附加糸縄文を充填し、頸部に押捺隆起文を加飾することから、北関東系、ことに十王台式の要素が強い土器といえる。十王台式は頸部文様帯から口縁部文様帯にかけて櫛描きの垂下文や波状文を多用し、その区画に押捺隆起文を用いている。これは明瞭な隆起帯を形成しているが、時代が下るにつれ、しだいに低くつぶれる傾向を示すようである。那珂川地域にその分布の中心をもつが、その地域では櫛目文を省略するものはほとんどなく、やや西に下った土浦市の原田西遺跡などに類例を見ることができる。この茨城県西南部地域は、頸部に無文帯をもうけ羽状縄文や斜縄文を器面に施す上稲吉式の分布域として知られているが、十王台式土器の移入も認められており、千葉県内にお

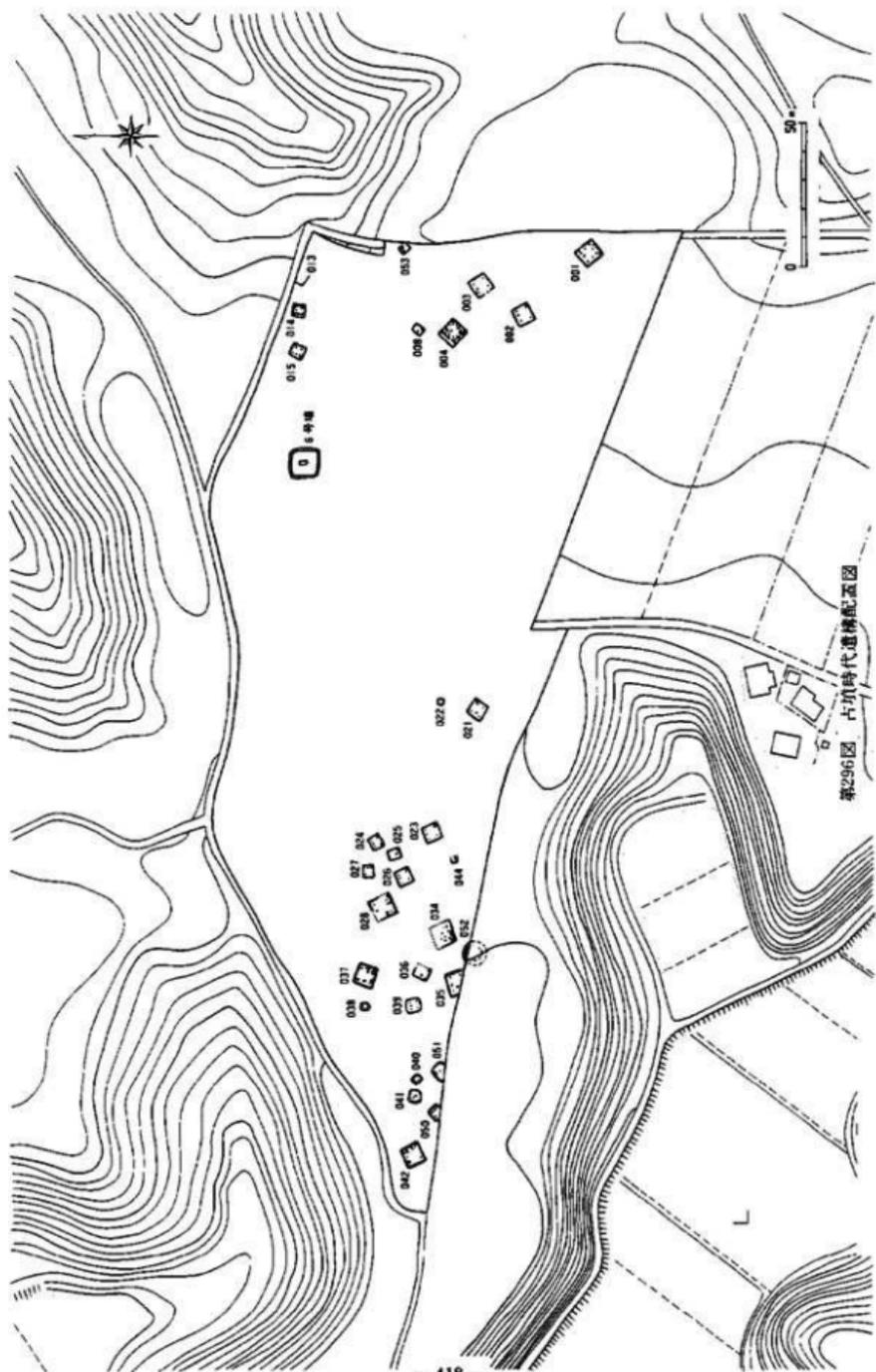
ける、佐倉市大崎台遺跡や小見川町阿玉台北遺跡など東総地域や印旛沼周辺地域では茨城県北部地域に見られる十王台式土器が、直接南下したものと考えられる。しかし本遺跡をはじめとする千葉県北西部地域は茨城県南西部との交流が強く、2号方形周溝墓出土壺Eは当該地域から搬入した土器としてとらえることができよう。

1号方形溝墓は、切り合い関係から2号方形周溝墓より若干さかのぼることが指摘できるが、文様構成でS字状結節文を文様区画に用いていること、円形朱文をもつことから合致する。

したがって、1号方形周溝墓は弥生時代末ないし古墳時代初頭、2号から4号方形周溝墓は古墳時代初頭に置くことができよう。いずれにしても本地域の初期古墳である北ノ作1号墳が造営される以前の3世紀中ごろから後半にかけて方形周溝墓群が形成されたと考えられる。

## 第 4 章

# 古 墳 時 代



第296圖 占頂時代遺跡配置圖

## 第4章 古墳時代

### 第1節 概観

古墳時代の遺構は、調査区の西隅で前期の集落が、東側と西側でそれぞれ中期の集落が、さらに、西側で円墳と思われる周溝、東側で後期の方墳を1基検出した。

前期の住居は5軒検出したが時期的には2段階あるようで、古段階の3軒は方形周溝墓群とさほど時間差をおかない時期に属す。041号住居では銅鏝が4点出土している。中期の住居は東側は9軒、西側は12軒で二つの群をなし、2～3時期にわたって集落が形成されている。東側で検出した住居群は、沼南町教育委員会が行った調査区の東に隣接する公園内の確認調査の結果、住居を検出していないことから、当調査で検出した住居数をさほど上回らないと考えられる。また、西側の住居群については、その分布状況から南に広がる台地平端部まで展開していくものと考えてよいであろう。東側北寄りで検出した後期古墳は、片山古墳群の西端に位置するもので、東にのびる台地上にはいくつもの古墳が群集している。

### 第2節 遺構

住居、小竪穴、古墳があるが、便宜上、遺構番号順に記述していく。

#### 001 (第297図、図版110)

東群4I区に位置する。

主軸7.4m、横軸7.3m、深さ0.45mを測る方形プランで、主軸方向はN-43°-Wである。床面は中央に堅緻な部分認められるが、耕作による擾乱が激しい。柱穴は主柱穴とその中間に小柱穴を認める。炉は北側の主柱穴間に設けている。入口直下には埋め戻されたピットを3基検出した。P8は床面で確認できたが、他の2基は貼床下部に検出している。貯蔵穴は入口側左コーナーにある。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁の勾配はゆるい。壁溝は全周する。壁面から主柱穴に向かって数条の間仕切り状溝を検出している。

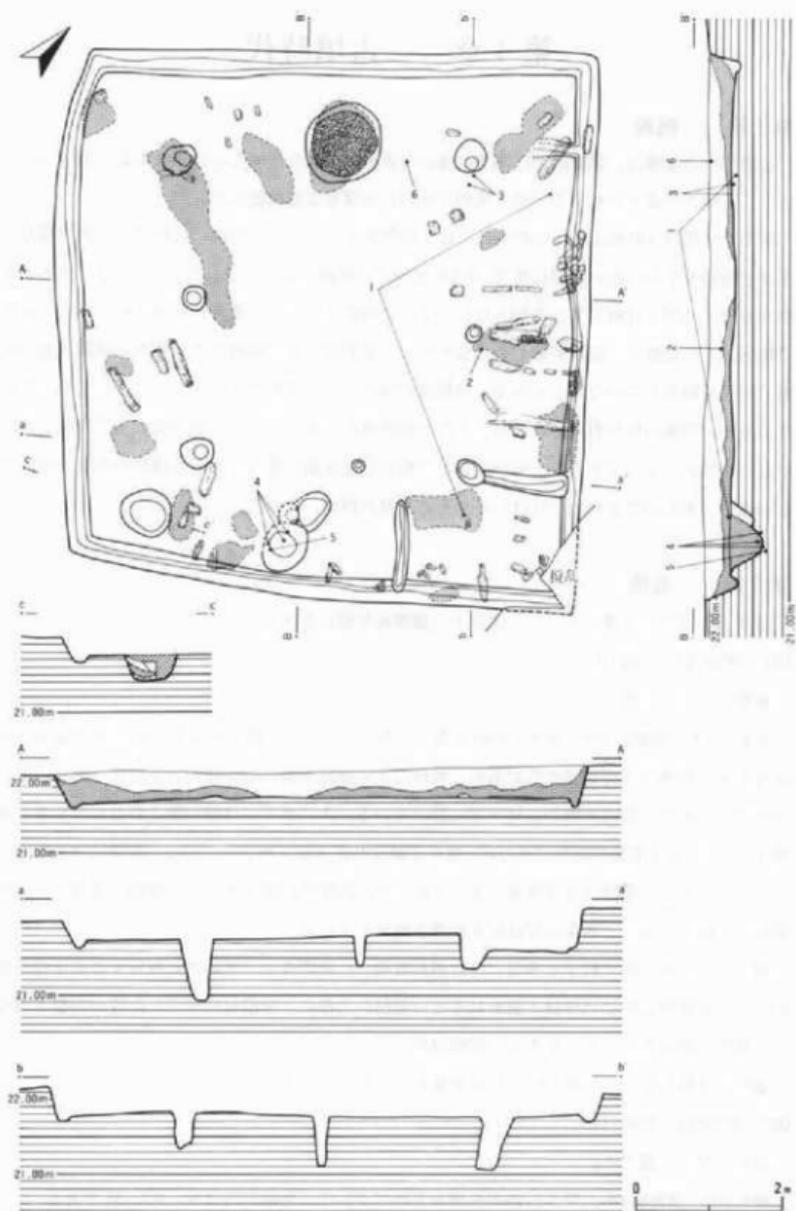
覆土には下部に焼土粒子を多量に含む層が堆積し、床面直上で放射状に散布する炭化材を検出した。炭化材の中には柱材と思われる太い部材の上部に、屋根材に使用した葺が10数本重なった状態で検出されたものもある(図版110)。

遺物は比較的少なく、壺、埴、杯を少量出土しただけである。

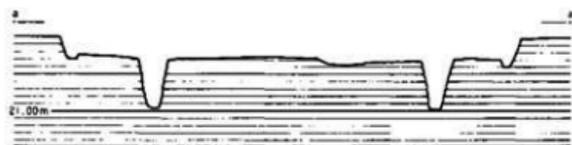
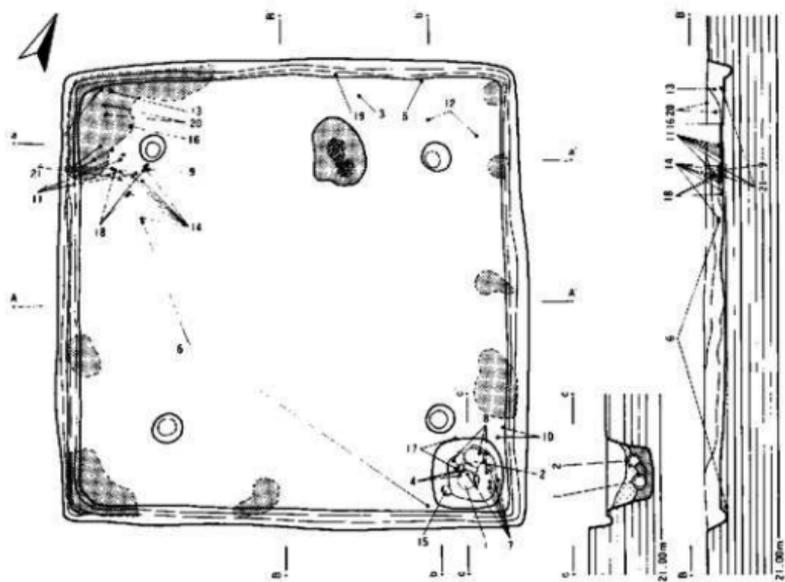
#### 002 (第298図、図版111)

東群4H区位置する。

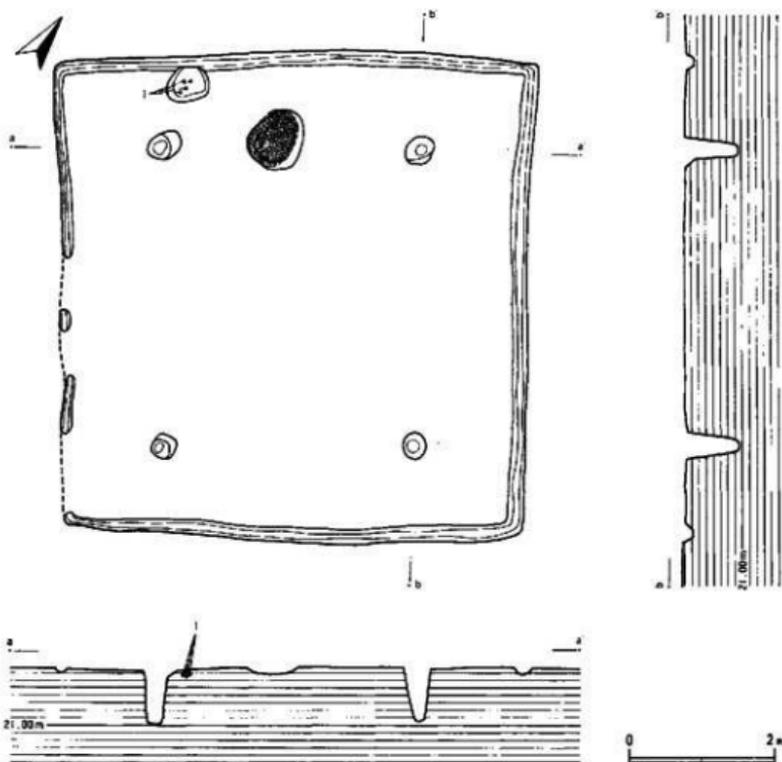
主軸6.4m、横軸6.4m、深さ0.35mを測る方形プランで、主軸方向はN-27°-Wである。床面は平坦、堅緻で、4本の主柱穴と北側柱穴間に炉を設けている。貯蔵穴は入口右側にあり、



第297图 001住居实测图



第298图 002住居复测图



第299図 003住居実測図

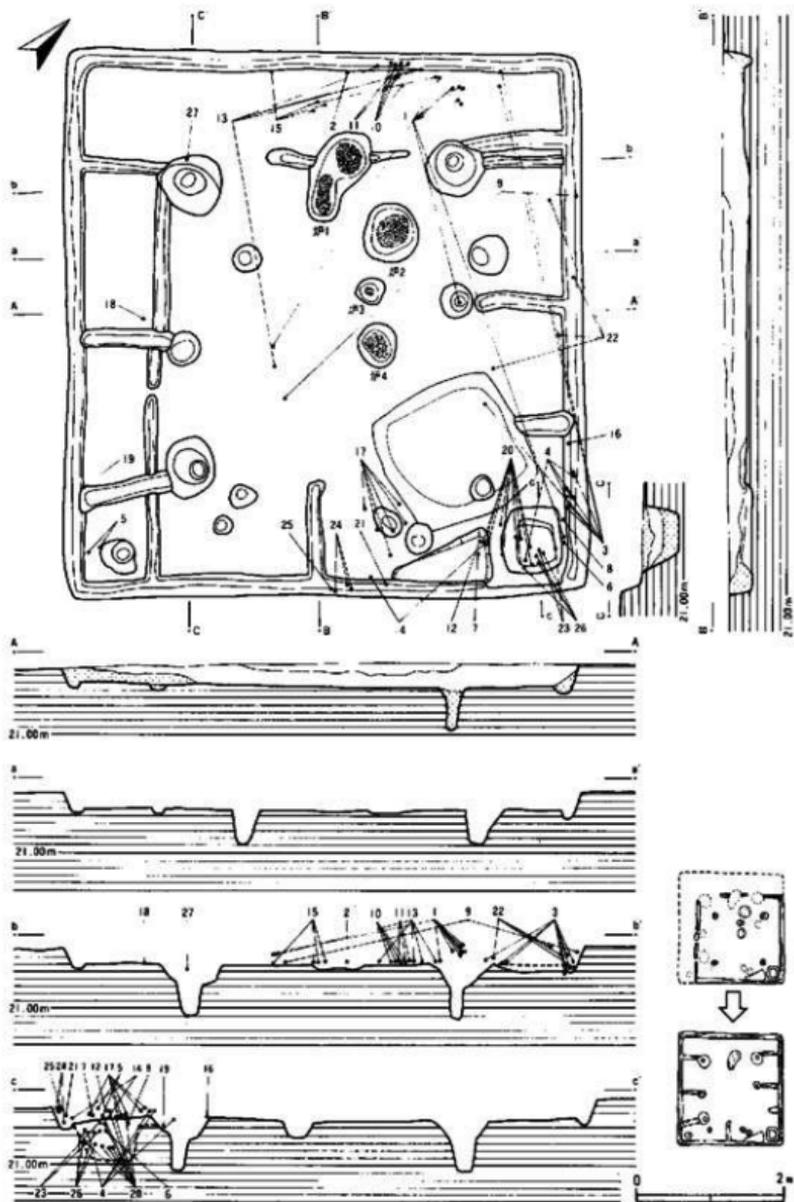
内部から多量の土器を検出した。壁の立ち上がりは良好で、壁溝は全周する。

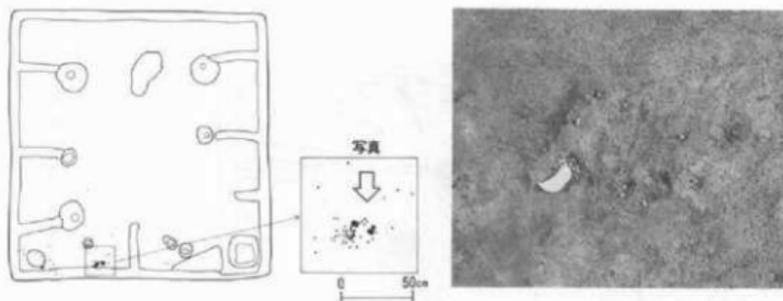
覆土には壁面付近に多量の焼土混入土を認めるが、上部は自然埋没したものと考えられる。炭化材はさほど認められなかったが、貯蔵穴およびその周辺部、住居コーナーの床面に多量の土器を検出している。火災の勢いが強く、家財道具の搬出が困難であった可能性が高く、居住当時の位置を保っているものと考えられる。貯蔵穴の底面には焼土が堆積し、土器は若干浮いた状態であった。また、途中で流れ込むように傾斜したものも存在する。

003 (第299図、図版111)

東群3 I に区に位置する。

主軸6.7m、横軸6.4mを測る方形プランで、主軸方向はN-36°-Wである。確認面は床面直下であったため壁溝、柱穴、炉、ピットのみしか検出できなかった。4本の主柱穴と北側柱穴間に炉を設けている。さらに、北壁に接して浅いピットを検出し、遺物はこのピット内から壁





第301図 004住居うす玉出土分布図

を1点出土したにとどまる。

**004** (第300・301図、図版111・112、文中写真1)

東群3H区に位置する。

北・西壁側を拡張している住居で、拡張前は主軸6.1m、横軸6.1m、拡張後は主軸7.4m、横軸7.0mで深さ0.35mを測る方形プランで、主軸方向はN-27°-Wである。床面の高さは変わらない。それぞれ東壁、南壁、貯蔵穴を共有する。なお、貯蔵穴の脇に後世の攪乱がある。

拡張前の住居は4本の主柱穴と南東コーナーに貯蔵穴をもち、貯蔵穴の東脇には5cmほどの高さのマウンドがある。壁溝はめぐるが、間仕切り状溝は設けていない。炉は3か所確認できたが、炉3・炉4はともに小規模で主に北側柱穴間にある炉2を使用したものと考えられる。ともに拡張後の住居の床面となり硬化している。

拡張後の住居は4本の主柱穴とその間に小柱穴があり、それぞれの柱穴に向かって間仕切り状溝を設け、さらに入口にも1条検出した。なお、入口付近には数個のビットを検出している。炉は北側柱穴間に炉床を2か所もっている。壁の立ち上がりは良好である。なお、主柱穴は柱を抜いた痕跡がうかがえる。

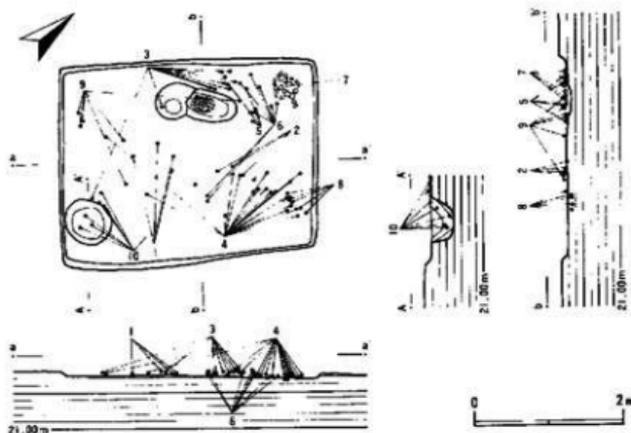
覆土は壁側にローム粒子を多く含む黄褐色土層を認めるが、上部は自然堆積と考えられる。遺物は貯蔵穴と炉の周辺に集中しているが、入口左側の床面より白玉類を多量に検出した。検出状況は30cmほどの範囲に特に集中した部分があり、勾玉型石製模造品を中心に白玉を連ねたようにみえた。また、南西コーナー付近まで飛散した白玉が認められた。土器はほぼ床面に接しているが、1は覆土中位に浮き破片もかなり分散している。

**008** (第301図、図版112)

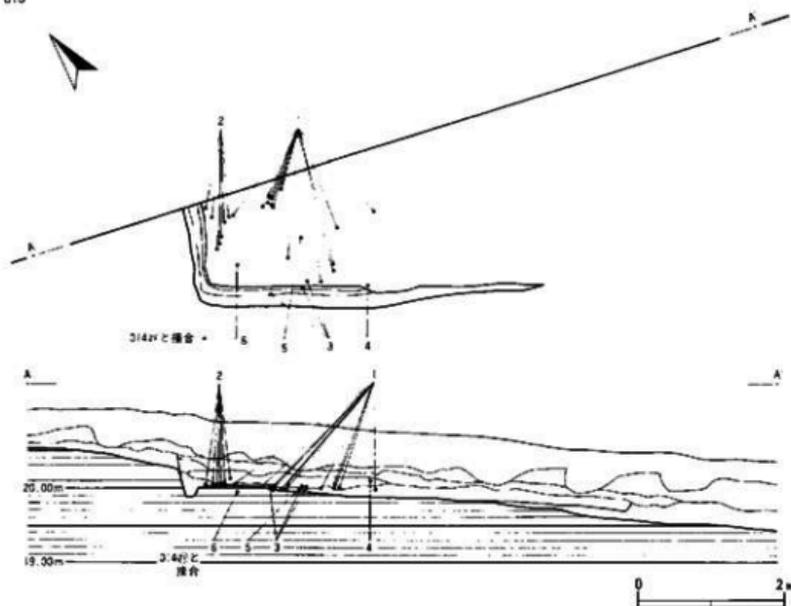
東群3Hに位置する。

主軸2.8m、横軸3.5m、深さ0.15mを測る長方形プランで主軸方向はN-52°-Wである。壁溝はなく、北西壁寄りに炉を、南コーナーに貯蔵穴を設ける。P1は炉よりも古いビットである。

008



013



第302図 008・013住居実測図

床面はしまりに欠けるが平坦に仕上がっている。貯蔵穴は椀状の掘方で10cmほどの深さである。

覆土は単一で、遺物は比較的多く、分散して床面直上より出土した。

013 (第302図、図版113)

東群2H区に位置し、調査区外にのびる。

やや東傾斜面にかかり、途中で床面が流れている。規模は確認できる範囲で、長軸4.8m、短軸2.8mで、壁面の最も深い部分で0.5mを測る。壁溝がめぐる。調査区境界の断面観察では貼床はあまり明確に識別できなかった。

遺物は床面から検出している。なお、杯の破片が014の19と接合した。

014 (第303図、図版113)

東群2H区に位置する。

北・東壁側を拡張している住居で、拡張前は主軸4.1m、横軸4.1m、拡張後は主軸4.4m、横軸4.5mで深さ0.45mを測る方形プランで、拡張後の主軸方向はN-83°-Wで西に炉を設けるのに対し、拡張前は北に設けている。拡張後も床面の高さは変わらない。それぞれ西壁、南壁を共有しているようにみえるが、柱穴の位置が外方に移動していることから、少なからず全体が広がっているものと考えられる。拡張前は4本の柱穴に向かって間仕切り状溝が三方から設けられ、北東コーナーに貯蔵穴をつくっている。貯蔵穴の脇にはP11を検出した。炉は北側柱穴間より外側に確認した。拡張後は間仕切り状溝は認められず、外方に移動した貯蔵穴の内側に長さ2m、幅0.4mのマウンドを設けている。このマウンドは拡張前住居の柱穴の上であり、新たに設けられた施設と考えられる。なお、古い貯蔵穴を埋めて新たに掘りなおされた拡張後の貯蔵穴の南側壁下部には壁溝状の掘り込みがあり、壁の崩落を防ぐための側板状のものをあてがった可能性がある。貯蔵穴の脇にはP6がある。また、北西コーナーと東壁直下の床面に白色粘土が散布していた。

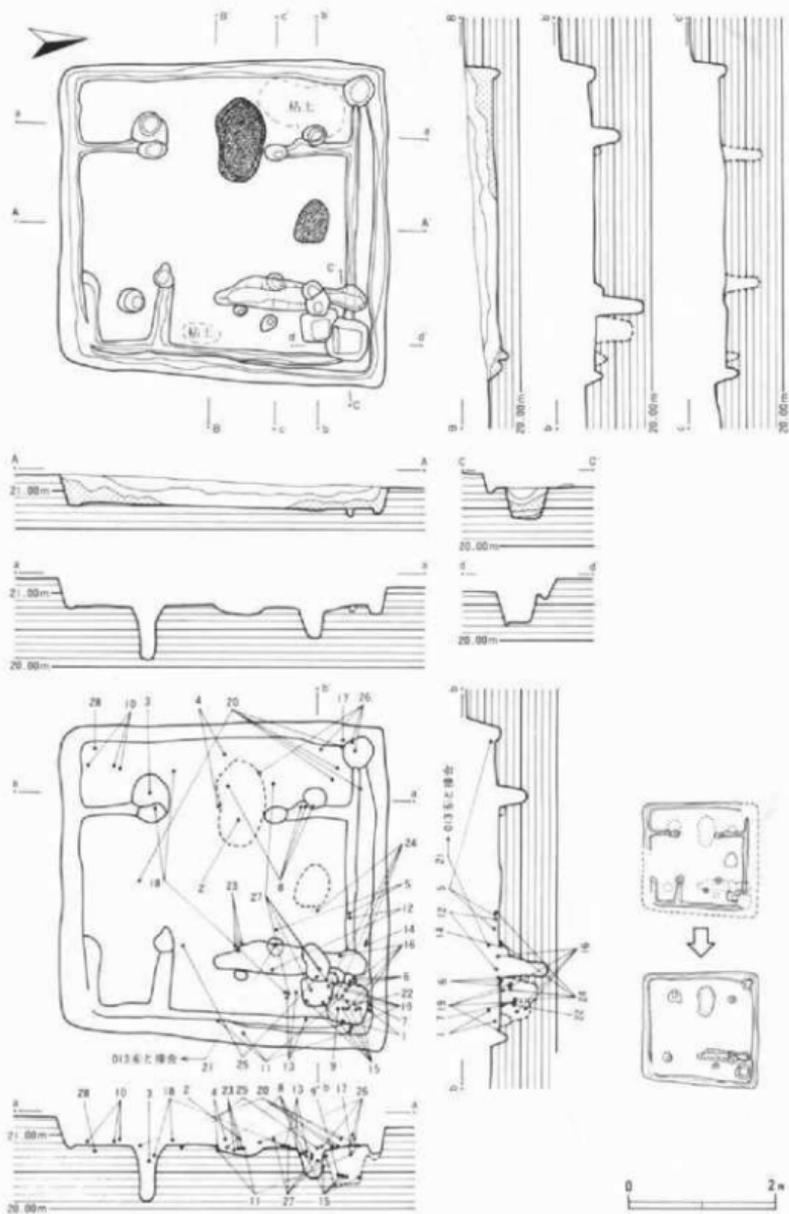
遺物は貯蔵穴周辺に多く、内部からもいくつか出土した。また、拡張後住居の柱穴P1は柱を抜き取ったのちに、底部を壊した窠(3)を反転し埋設している。

015 (第304図、図版113・114)

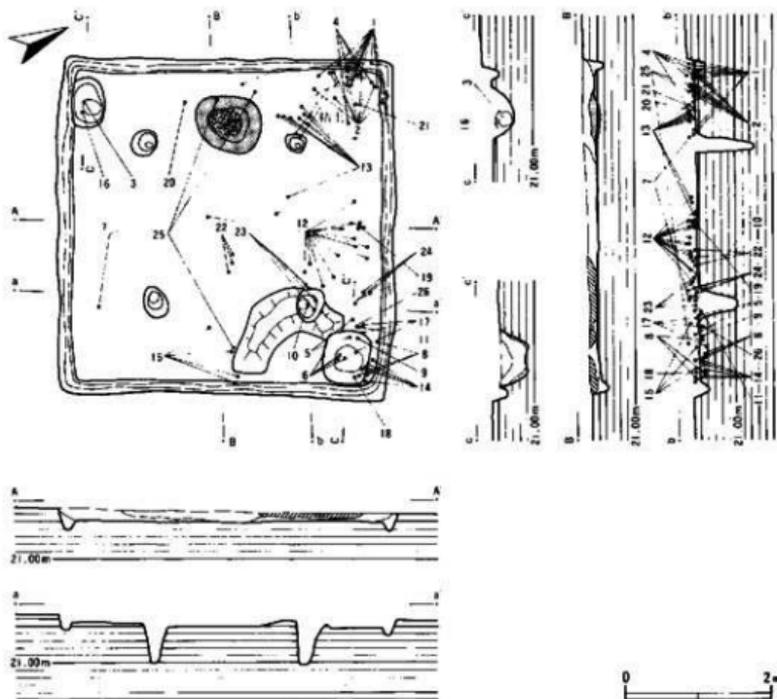
東群2Hに位置する。

主軸4.6m、横軸4.6m、深さ0.20mを測る方形プランで主軸方向はN-66°-Wである。床面は平坦で、炉の周辺に堅緻な部分を認めた。柱穴は4本あり、北東コーナーに貯蔵穴とそれを半月形に取り巻くマウンド、南西コーナーにピットを検出した。炉は西側柱穴間にあり比較的大きい。壁溝は全周し、壁の立ち上がりは良好である。隅丸方形の貯蔵穴をU字形に取り巻くマウンドは、P3をとおるため、貯蔵穴と間隔が開き空間をつくっている。マウンドと床面との比高差は5cmを測る。

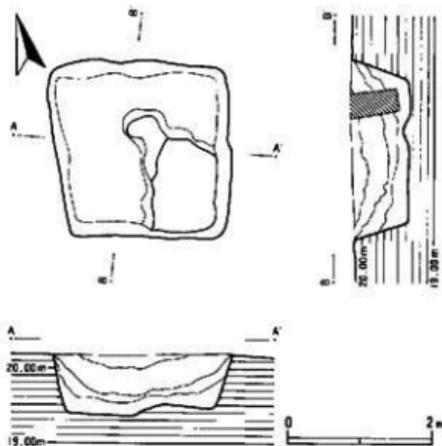
遺物は北壁寄りに集中し床面直上のものとやや浮いているものが認められる。南西コーナーのP5からは壜(3)と杯(16)の完形が出土した。このピットは床面精査の段階では貼床のため確認できず、壁溝を掘り上げているときに検出したものである。



第303图 014住居尖測圖



第304図 015住居実測図

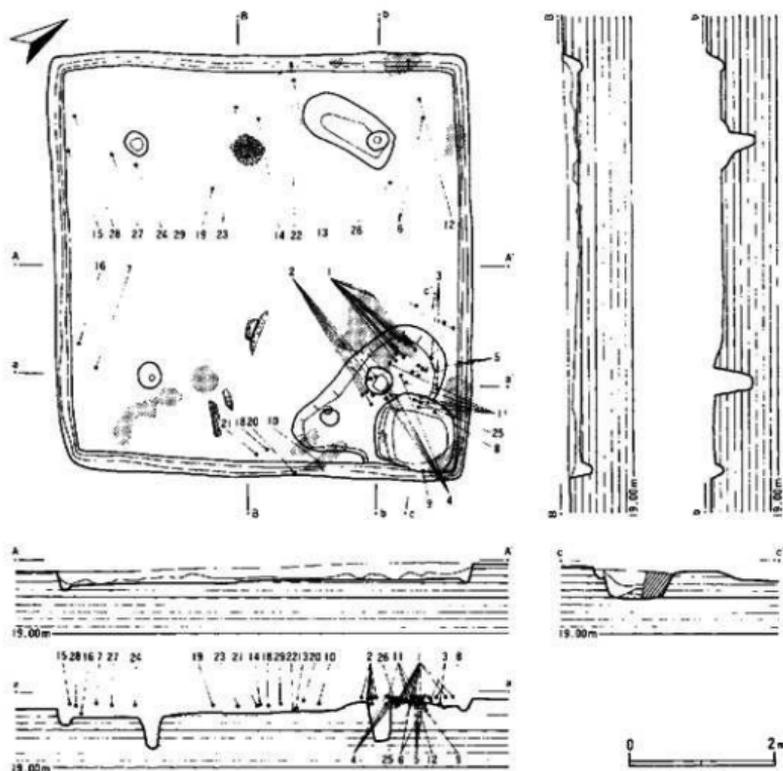


第305図 022竪穴実測図

021 (第306図、図版115)

西群3E区に位置する。

主軸5.8m、横軸5.8m、深さ0.3mを測る方形プランで、主軸方向はN-57°-Wである。床面は全体に軟弱で硬化面はさほどみられなかった。4本の柱穴の北側柱穴間に炉を設けている。入口右側の北東コーナーに隅丸方形の貯蔵穴をもつ。貯蔵穴の周辺は床面との比高差15cmほどのマウンドがつくられ、柱穴P3とP5が掘り込まれている。なお、P2のまわりが多少窪んでいるが、住居に関連し



第306図 021住居実測区

たものではない。

覆土下部には焼土混入土が散布し、床面に炭化材を認めたことから焼失住居と考えられる。また、土器は貯蔵穴周辺のマウンド上に多く残されていたのに対し、貯蔵穴内にはなかった。なお、覆土中位からは土玉を十数個検出した。これらは後から窪んだ住居内に投棄されたものと考えられる。

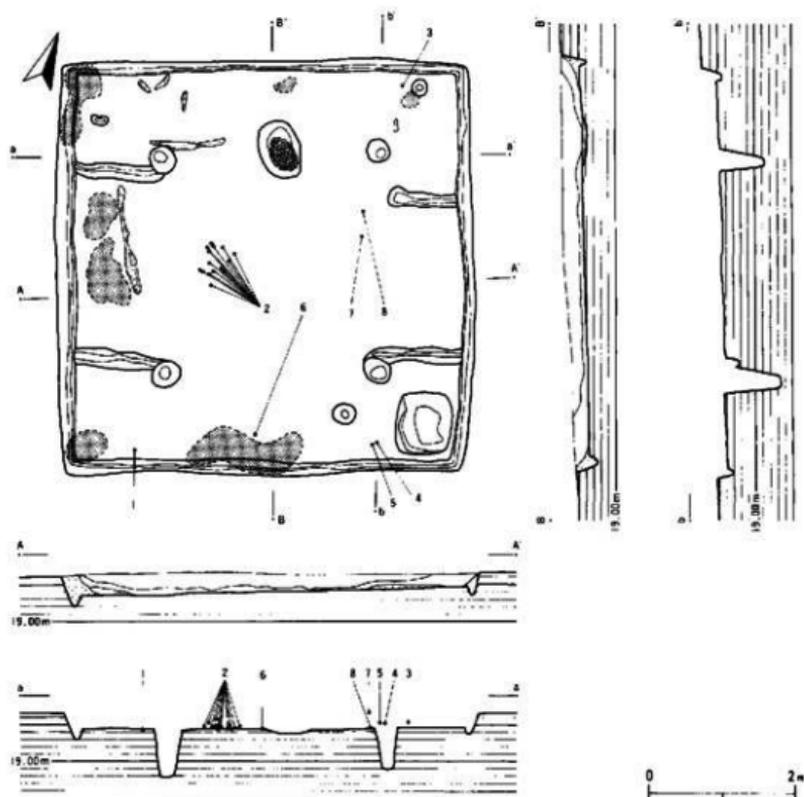
#### 022 (第305図)

西群3E区に位置する。

一辺2.4mの方形の整穴で、深さは0.9mを測る。覆土は自然堆積で遺物は検出しなかった。底面は凹凸があり、南東側が一段高くなっている。

#### 023 (第307図、図版115)

西群3D区に位置する。



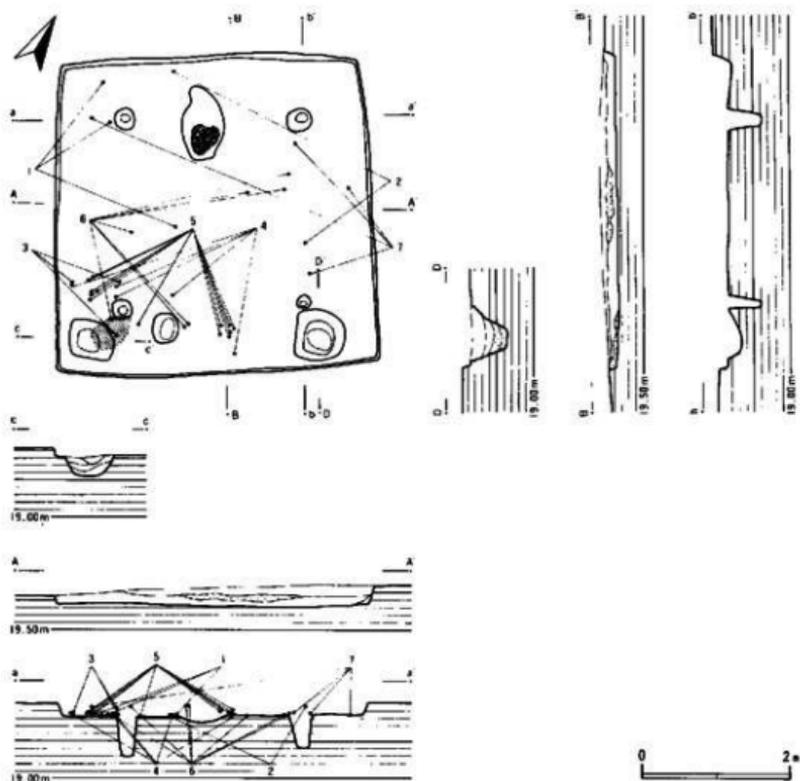
第3071図 023住居実測図

主軸5.7m、横軸5.7m、深さ0.3mを測る方形プランで、主軸方向はN-23°-Wである。床面は平坦で硬化し、4本の柱穴の北側柱穴間に炉を、南東コーナーに貯蔵穴を設けている。貯蔵穴の脇にP6がある。間仕切り状溝は4条検出したが、1条を除いては柱穴に向っている。覆土はローム粒子を多く含む黄褐色土層が壁際に堆積し、その上部に焼土混入土を検出している。遺物は比較的少なく、ほぼ床面直上に認めた。

024 (第308図、図版115)

西群2D区に位置する。

主軸4.3m、横軸4.3m、深さ0.2mを測る方形プランで、主軸方向はN-32°-Wである。床面は平坦で硬化し、四本の柱穴の北側柱穴間に炉を、南東と南西の二つのコーナーに貯蔵穴を設けている。貯蔵穴は南東側の方が大きく深い。壁の立ち上がりは良好であるが、壁溝はない。



第308図 024住居実測図

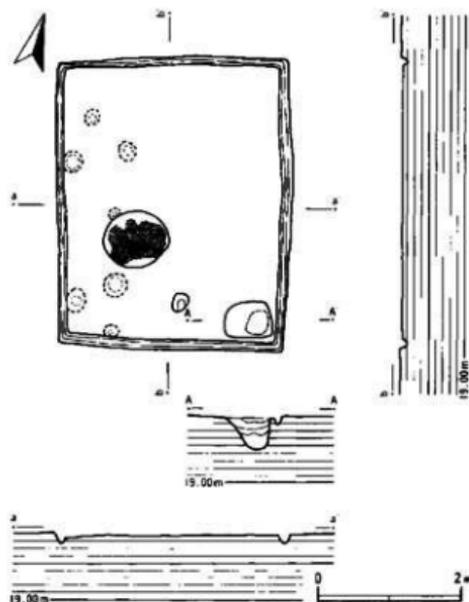
南西側の貯蔵穴の脇にはP6がある。

覆土中位にはロームブロックを含む暗褐色土層があり、また、焼土も南西コーナー付近に認められた。遺物は広範囲に接合し、投棄されたものと考えられる。

#### 025 (第309図、図版116)

西群2D区に位置する。

主軸4.0m、横軸3.2mを測る長方形プランで、床面が検出面である。主軸方向はN-17°-Wである。床面に硬化した部分は少なく、貼床のローム粒子を若干認める程度である。炉は住居中央南西寄りであり、南壁側の中央には入口ピットと思われるP1とその右側南東コーナーには貯蔵穴を設けている。貼床の下部には図中破線のピットを確認した。当住居からは遺物は検出していない。



第309図 025住居実測図

026 (第310図、図版116)

西群2D区に位置する。

主軸5.3m、横軸5.4m、深さ0.25mを測る方形プランで、主軸方向はN-27°-Wである。床面は平坦であるが硬化面は広がらず、四本の柱穴の北側柱穴間に炉を、南東コーナーに貯蔵穴を設けている。壁の立ち上がりは良好で、壁溝が全周する。貯蔵穴は隅丸方形に近く、0.45mほどの深さがある。

住居覆土は、壁側で多量の焼土を検出し、最下層には焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。貯蔵穴覆土は最下層に炭化材を多量に混入する土層、中位に焼土層、上位に焼土を若干含む層がとなっている。遺物の出土状況は1個体が細かく割れ分散してお

り、レンズ状の垂直分布を示している。住居焼却に伴って土器を投棄した可能性が高い。

027 (第311図、図版117)

西群2D区に位置する。

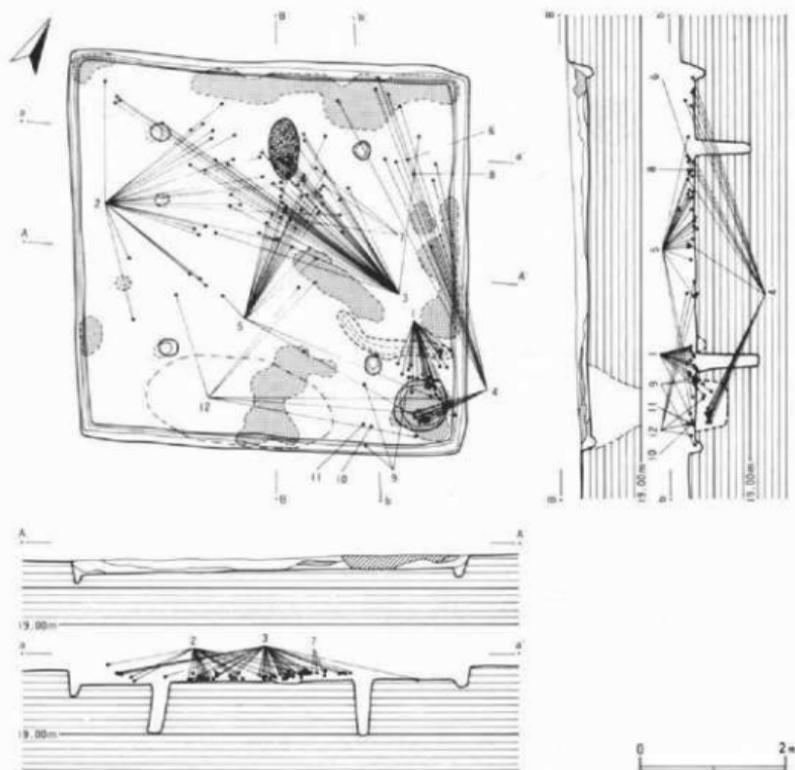
主軸4.2m、横軸4.2m、深さ0.3mを測る方形プランで、主軸方向はN-5°-Wである。床面は平坦で、炉の周辺および住居中央は硬くしまり南西の柱穴を除く他の柱穴は床面で確認できた。P3・P5については、貼床を剥がした段階で検出している。北側の柱穴間にある小ピットも同様である。炉は東側柱穴間にあり他の住居の位置とは異なっている。貯蔵穴は南西コーナーにあり、ほぼ方形を呈す。壁の立ち上がりは良好で、壁溝が全周する。

覆土は最下層にローム粒子を多量に含む黄褐色土層が堆積し、遺物は床面直上から若干浮いた位置より出土し、東側に偏った出土状況を示す。中央から出土した塔5は覆土上部からで、かなり埋没した段階で投棄されたものである。

028 (第312図、図版117)

西群3C区に位置する。

主軸8.0m、横軸7.9m、深さ0.25mを測る方形プランで、主軸方向はN-24°-Wである。北東コーナーと東側には広範囲に攪乱を認める。床面は平坦で、北側柱穴間に炉を設け、西側柱



第310図 026住居実測図

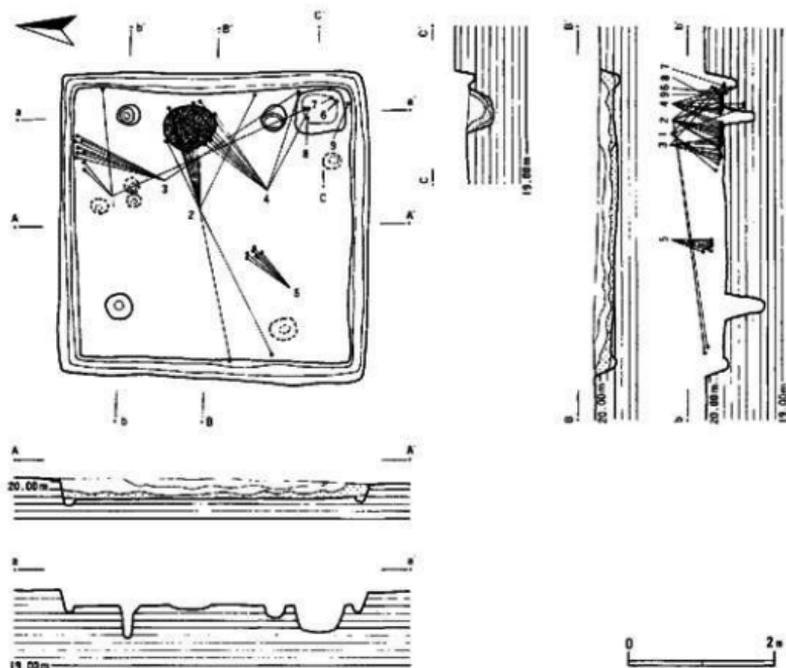
穴間にも小規模な火床部を認めた。壁溝は全周せず、西辺の北側には認められない。また、壁面よりも若干内側に掘り込まれており、壁面との間にわずかな平端部をもっている。南壁および西壁の中央から内側に向って2mほどの長さの間仕切り状溝を検出した。南壁からのびる壁溝は柱穴間の内側まで達し、その先端には30cmを越える深さのP8がある。貯蔵穴は南東コーナーにあり、方形を呈している。

覆土下部には焼土粒子を含む層が堆積し、南壁際に焼土を認めた。遺物は貯蔵穴内を除き、床面から若干浮いた状態で検出している。

#### 034 (第313図、図版117)

西群3Cに位置する。

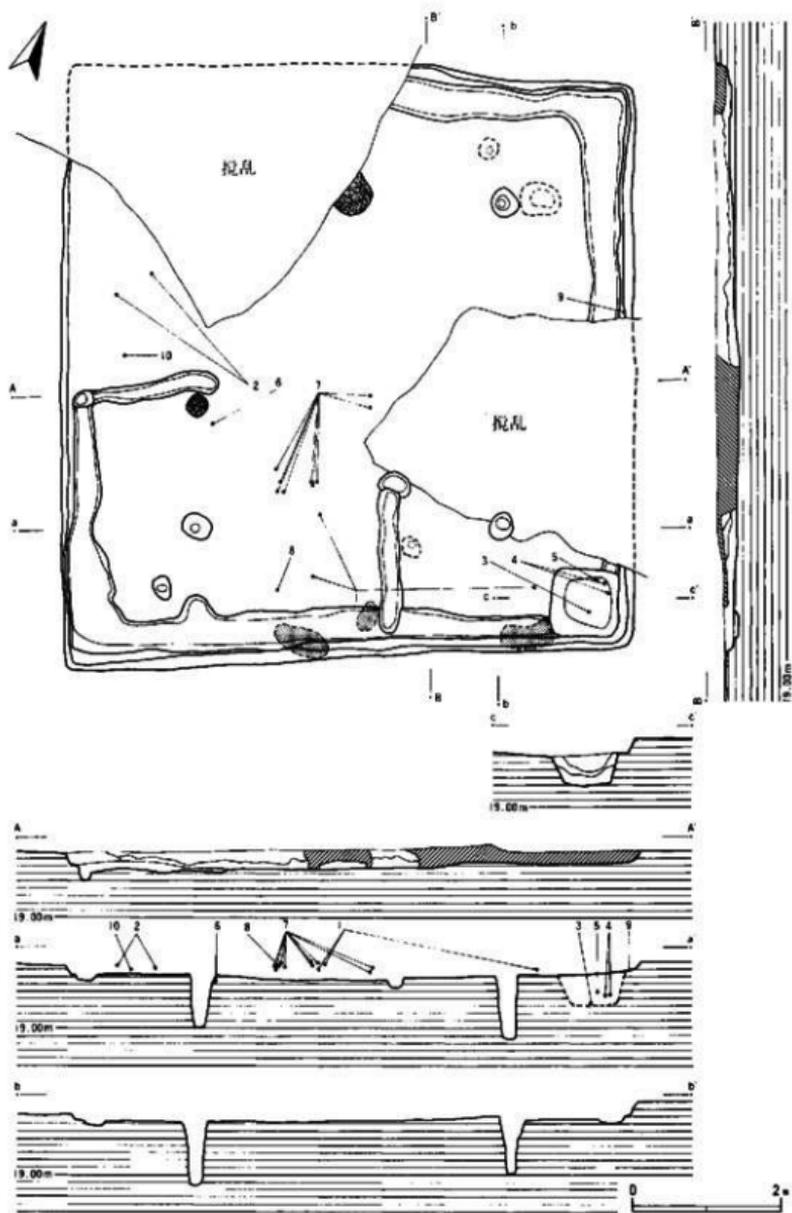
住居の北半は後世の擾乱により消滅している。主軸の遺存長5.8m、横軸7.4m、深さ0.40mを測る。おそらく方形プランを呈するものと考えられる。主軸方向はN-21°-Wである。主柱



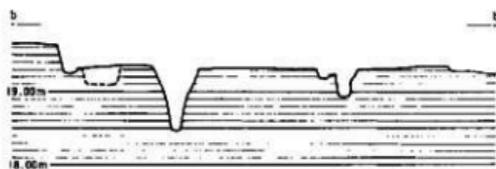
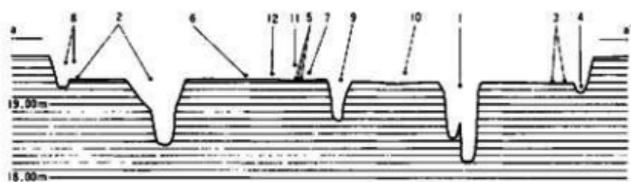
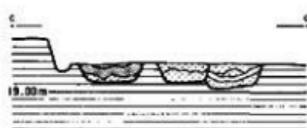
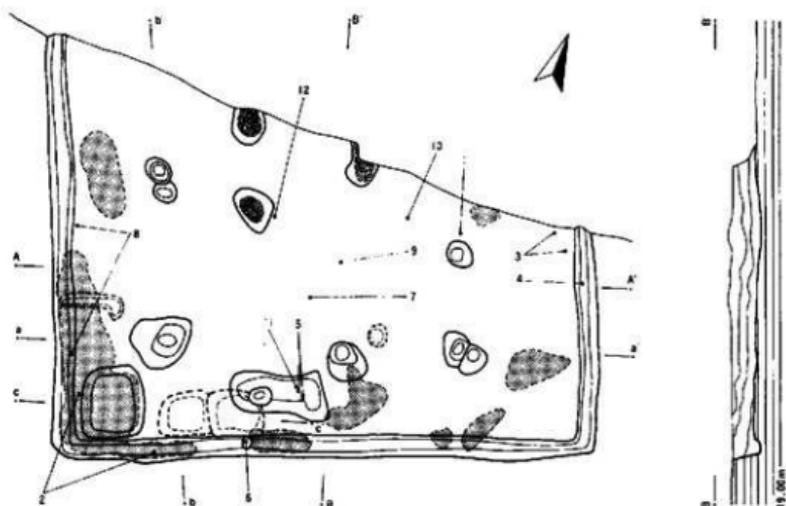
第311図 027住居実測図

穴はP1およびP2と考えられるが、P1はわずかにずれた2本の柱穴で深さもかなりある。P2については開口部が大きく開くことから、柱を抜き取ったものと考えられる。主柱穴間には支柱と考えられる掘方の浅いピットが存在するが、それぞれ主柱穴間の中間にはないよう対面していない。床面は硬くしまり平坦で、北寄りに炉と考えられる火床部を3か所認めた。ともにそれほど被熱を受けていない。南壁直下の中央付近には不整長方形のピットがあり、住居中央に向けて底面が傾斜し、中央側の側壁は垂直な、壁側の側壁はゆるやかな立ち上がりを示している。底面には深さ0.65mのピットを検出した。貯蔵穴は南西コーナーにあり隅丸長方形を呈する。なお、貯蔵穴の右脇でロームや白色粘土で埋め戻された方形のピットを検出した。これらは床面上では検出できなかったもので、不整長方形のピットを掘り下げていく途中で検出したものである。

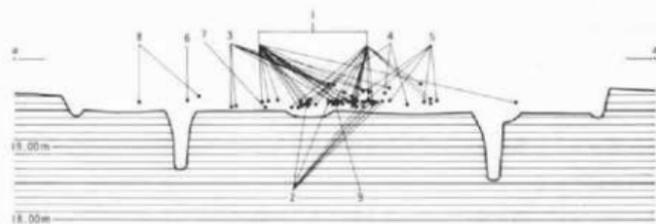
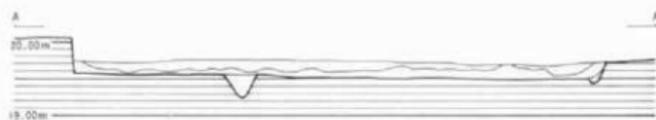
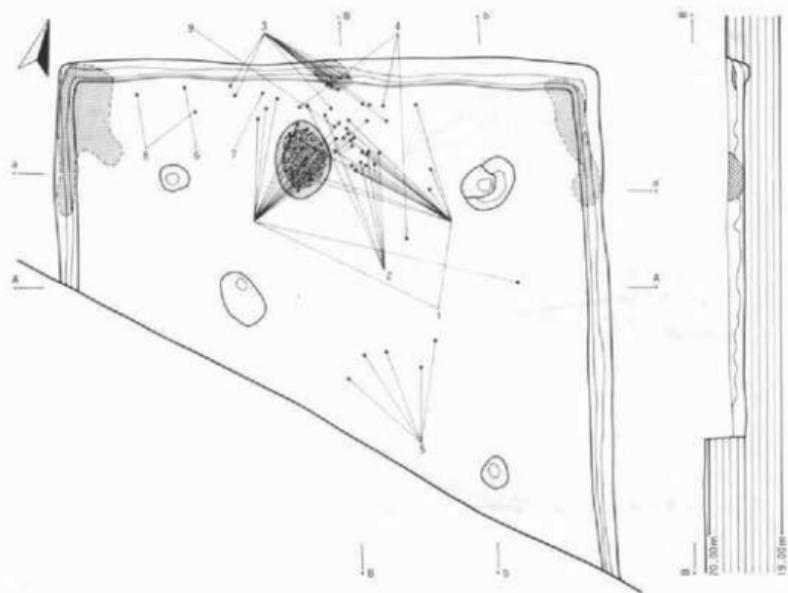
住居覆土は壁際に床面に向かって斜めに傾斜する多量の焼土層を検出し、焼失住居を思わせた。貯蔵穴の覆土中にも炭化材や焼土が充満していたが、最下部についてはロームブロックを多量に含む黄褐色土が堆積し多少埋め戻しが行われた可能性を認めた。遺物はほぼ床面直上より検出したものの、南壁面より出土した須恵器蓋6は、焼土層の中位より伏せた状態で床面に向



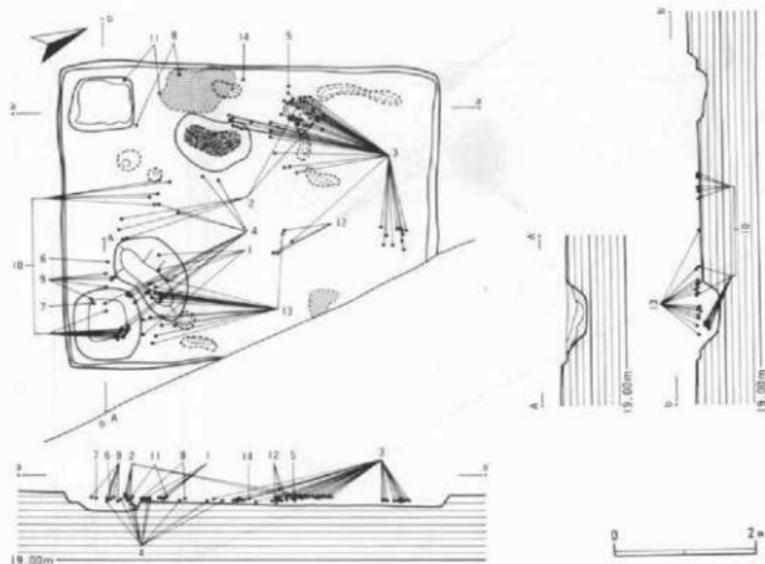
第312团 028住居实例图



第313号 034住居实测图



第314图 035住居平面圖



第316図 036住居実測図

て傾斜し、内部には焼土が充満していた。

035 (第314図、図版118)

西群3C区に位置する。

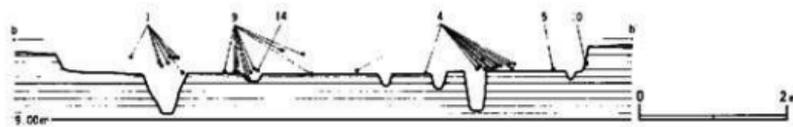
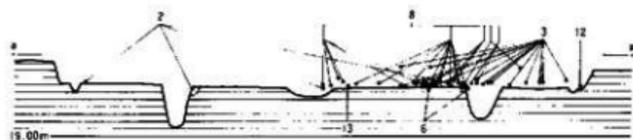
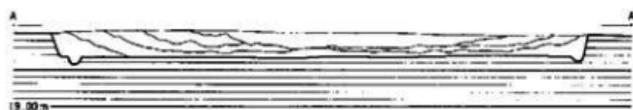
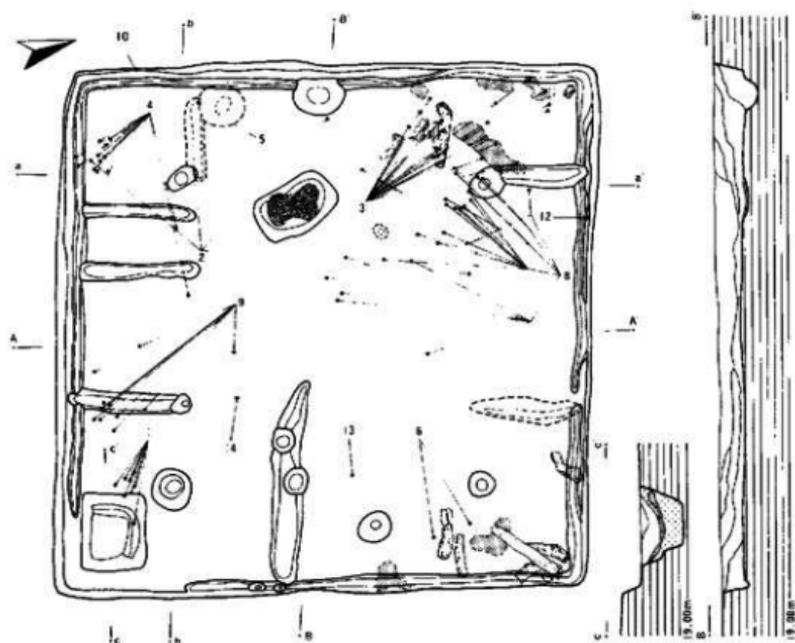
住居の南半は調査区域外となる。主軸の長さは調査範囲内で7.1mまで計測できるが、さらに0.3m~0.4m伸びるものと考えられる。横軸は7.5m、深さ0.30mを測る。おそらく方形プランを呈するものと考えてよい。主軸方向はN-15'-Wである。床面は硬く平坦で、北側柱穴間に炉を設けている。住居中央やや西寄りに小ピットを検出したが住居に直接関係する可能性は少ない。壁面の傾斜は良好である。

覆土は壁際に焼土層を認め、最下層には若干焼土粒を含む暗黄褐色土が堆積している。遺物は住居北側に多く、床面から浮いた覆土中位より検出している。各遺物の接合範囲は比較的広範囲である。

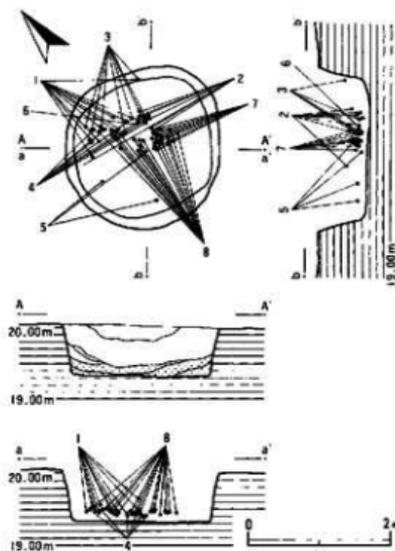
036 (第315図、図版118)

西群3C区に位置する。

住居の北東コーナーは調査区外となる。貯蔵穴の位置から、長軸方向が主軸となろう。長軸5.3m、短軸4.1m、深さ0.25mを測る長方形プランで、主軸方向はN-22'-Sである。床面は平坦で中央に堅緻な部分がある。貯蔵穴は2基あり、南西コーナーに浅い長方形プランのもの、



第316号 037号生居实例图



第317図 038竪穴実測図

南東コーナーに隅丸方形のやや深いものである。後者の貯蔵穴には床面との比高差5cmほどのマウンドが認められる。炉は中央から南西に寄ったところにあり、炉床はしっかりしている。なお、貼床を除去した掘方面でピット状、溝状の掘り込みを検出したが、本住居の柱穴痕ではないようである。

覆土の下部には焼土を混入する層が堆積している。遺物はほぼ床面上で検出した。なお、10は貯蔵穴内と住居中央に破片が分れて分布している。

### 037 (第316図、図版118)

西群2C区に位置する。

主軸7.3m、横軸7.3m、深さ0.40mを測る方形プランで、主軸方向はN-71°-Wである。床面は平坦堅緻で、入口左側の南東

コーナーに貯蔵穴がある。西側柱穴間にはやや南寄りに炉を設けている。主柱穴を4本検出したほかに、入口部と想定できる東側でP5を検出した。壁溝は貯蔵穴のある南東コーナーには認められず、南壁から間仕切り状溝が3条、東壁から1条、北壁から1条認められ、貼床の下部からも数条の溝を検出した。貯蔵穴は北と西の中心に段を設けている。

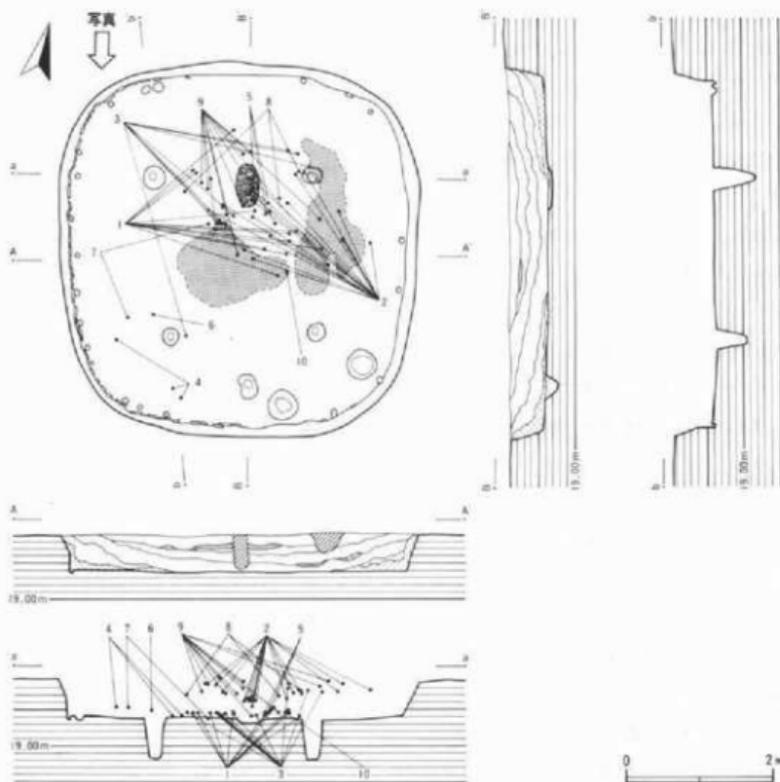
覆土には下部に焼土および炭化材を検出したが、貯蔵穴の底面には厚いローム混入土が埋没し、その上部に焼土層を認めたことから、鹿屋に火をはなったものと考えてよいであろう。焼土層は壁際で多く認められ、中央部は比較的薄い。遺物の出土位置も、壁際で高く、中央では床面に近い。破片の分布からも投棄されたものと理解して良いであろう。

### 038 (第317図、図版122)

西群2B区に位置する。

直径2.3mの円形プランを呈し、深さ0.8mを測る小竪穴である。底面は平坦堅緻で壁面はほぼ垂直であった。また、壁面の下部には掘り下げるときに用いた鋤状の工具による幅15cmほどのアタリ痕がうかがえた。

覆土下部にはロームブロックを多量に含むしまりの弱い黄褐色土層や黒褐色土層があり、中間より上位の層は暗褐色土であったが、しまりがよく自然堆積と判断した。遺物はそれらの境界にサンドイッチされるように包含していた。おそらく、黄褐色土層で一部を埋め戻したのちに、遺物を一括投棄したものと考えられる。遺物は埴、高杯、碗など祭祀的な色彩の強い土器



第318号 039住居実測図



が多く、高杯の脚部と杯部が接合する例はない。遺物の多くは被熱している。

039 (第318図、図版119、文中写真2)

西群3B区に位置する。

主軸5.2m、横軸4.9m、深さ0.6mを測る円みの強い隅丸方形プランで、主軸方向はN-13'-Wである。4本柱の柱穴間は2mほどで、柱と壁の間には広い空間がとられている。床面は平坦でよくしまり、住居中央はことに堅緻である。南側には入口用のピットが設けられる。壁溝はないが、壁面は下部に垂直な面をもち上部がやや開いている。壁直下を精査した結果、図中写真にみられるとおり、長さ15cm前後、幅数cm、深さ数cmの窪みが北西コーナーから西壁、南壁の途中にかけて連なり、さらにその内側では径10cm、深さ数cmの小ピットを50cmほどの間隔をおいて検出した。東壁ではまばらに小ピットを認めた。これらは、壁面をおおう板状の壁材とその支柱であると考えてよいであろう。

覆土は数層に分離できたが、中層と下層に焼土を含む層が分布し、最下層にはロームブロックを多く含む層が認められた。遺物は上下2枚に分離され、上部は中層の焼土層が分布するレベルから下方に、下部は下層の焼土層が分布するレベルから床面上方に認める。床面直上の遺物はほとんどなく、垂直分布も土層と同じように壁面側で上昇していることや、覆土にはローム粒子が多めに含まれていることから、少なくとも焼土の分布から2回以上の埋め戻しと、それに伴う遺物投棄がなされたものと考えられる。上部で検出した遺物は2・8・9、下部は1・3・4・5・6・7・10である。

040 (第319図、図版119)

西群3B区に位置する。

長軸3.2m、横軸4.9m、深さ0.15mを測る不整形方形プランで、主軸方向はN-40'-Wである。床面は軟質で、ところどころにロームブロックが貼床状に認められる。壁面はゆるく傾斜している。ピットは3個検出したが、いずれも浅い。

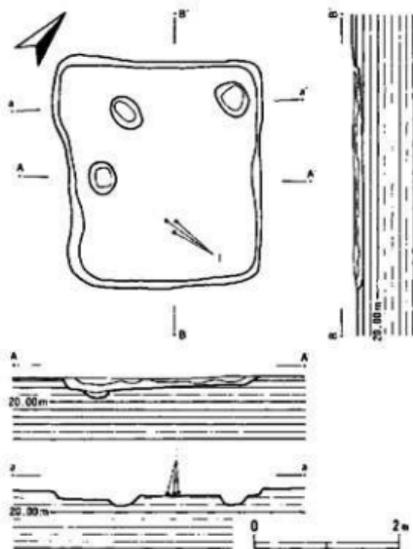
遺物は床面直上より甕を1点検出したのみである。

041 (第320図、図版120)

西群3B区に位置する。

長軸4.6m、横軸4.5m、深さ0.30mを測る隅丸方形プランで、主軸方向はN-7'-Wもしくはその直角方向である。柱穴は住居中央に1か所のみで、その西側に隣接して炉を設けている。床面は全般に硬質であるが炉の周囲はことに堅緻である。壁の立ち上がりは良好で垂直に近い。

覆土は壁際と最下層に若干炭化物粒子を混入する暗褐色土層があり、炭化物粒子は床面にも認められた。特に壁際下部に多い。遺物は炭化物粒子を多く混入する最下層からの出土が多く、住居南東コーナー付近の床面直上からは銅鏝を4点出土した。なお、本住居出土の破片のうち、051住居と接合する破片が多く、高杯6・8は同一個体と考えられるが、それぞれ破片同志の接



第319図 040住居実測図

合をみる。また、縄文を施した北関東系の壺の破片も多く検出し、051との接合が認められた。

042 (第321図、図版121)

西群3A区に位置する。

主軸6.9m、横軸7.0m、深さ0.40mを測る方形プランで、主軸方向はN-29°Wである。南西コーナーの一部は調査区外となる。床面は平坦堅緻で、北側柱穴間に炉を設けている。入口右側には貯蔵穴があるが、貯蔵穴と入口部との間には床面より10cmほど高いマウンドが設けられている。壁溝は南壁を除き認められる。また、壁溝から住居中央に向かって東側で2条、北側で1条の間仕切り溝が認められた。間仕切り溝は柱穴間に設けられている。貯蔵穴は長方形で深さ40cmを

測る。柱穴P3はマウンドを穿って建てられている。

覆土は壁際および覆土下層に焼土を多く含み、床面より若干浮いた状態で遺物の出土をみた。また、貯蔵穴内にも焼土層が下部に堆積し、壺の完形品が横転していた。遺物はマウンドおよび貯蔵穴周辺に多いが、同一個体の破片が住居中央に散在する例も見受けられる。

044 (第322図、図版121)

西群3D区に位置する。

掘り込みが浅いため、炉と考えられる焼土と直角に折れるコーナー部分のみを検出した。規模は不明である。床面は軟質で、炉と考えられる焼土はあまり熱を受けていない。西壁直下に小ピットを検出した。遺物は小ピット上位と北西コーナーからの出土である。

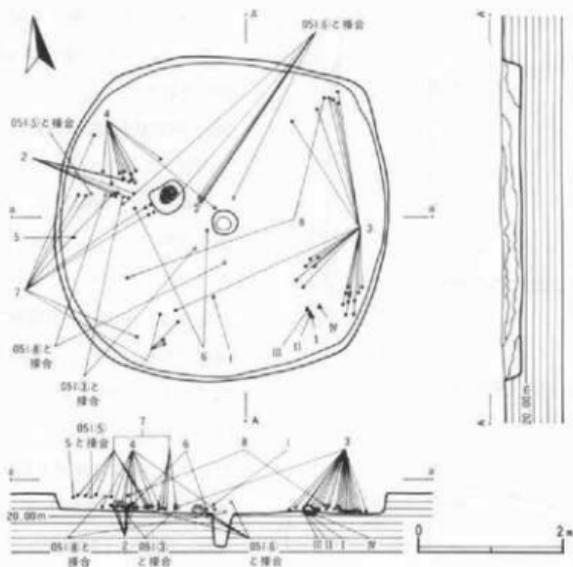
050 (第323図、図版122)

西群3A区に位置する。

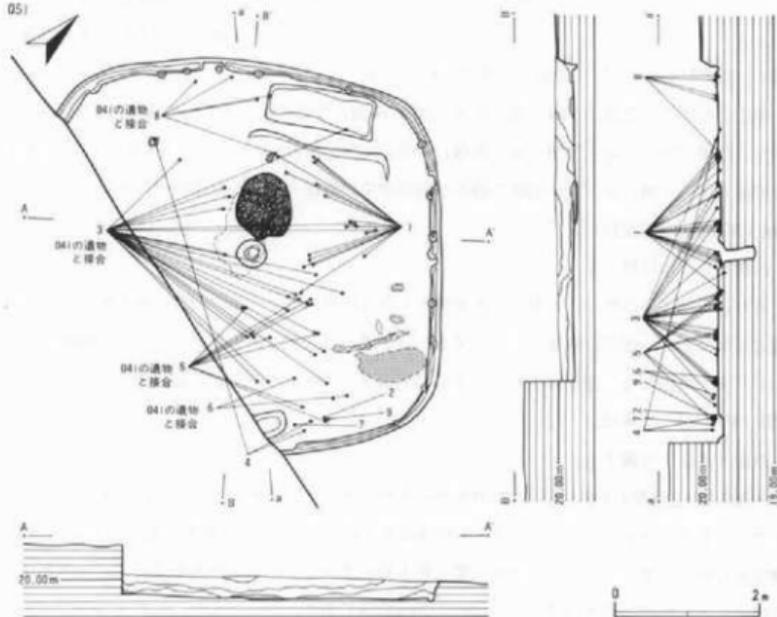
主軸4.2m、横軸4.1m、深さ0.20mを測る方形プランで、主軸方向はN-48°Eである。コーナーは若干円みをもっている。住居南側は調査区外となる。床面は軟質で若干凹凸がみられ、硬化面は検出できなかった。北側柱穴間に炉を設けているが、あまり熱を受けず、火床部は不明瞭である。柱穴の深さは浅く、いずれも20cm前後である。

遺物は床面で壺の口縁部破片、鉢、土玉を数点出土しただけである。

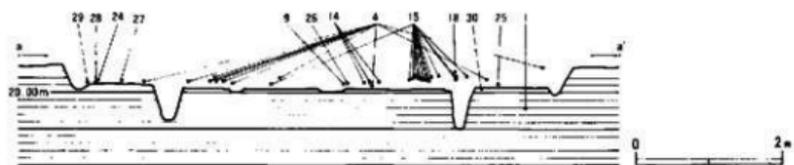
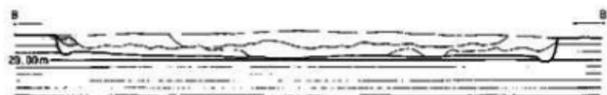
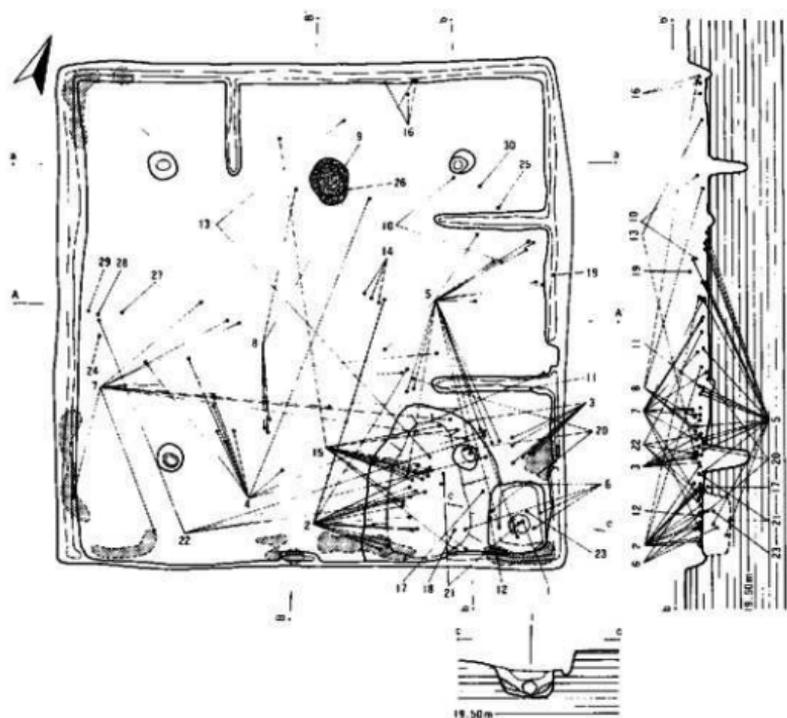
041



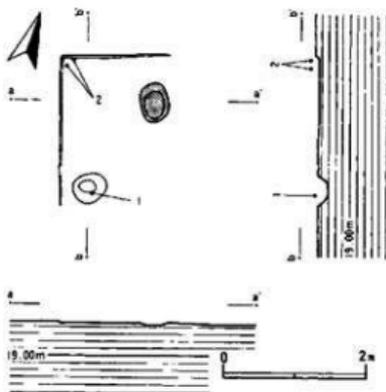
051



第320図 041・051住居実測図



第321号 042住居尖測図

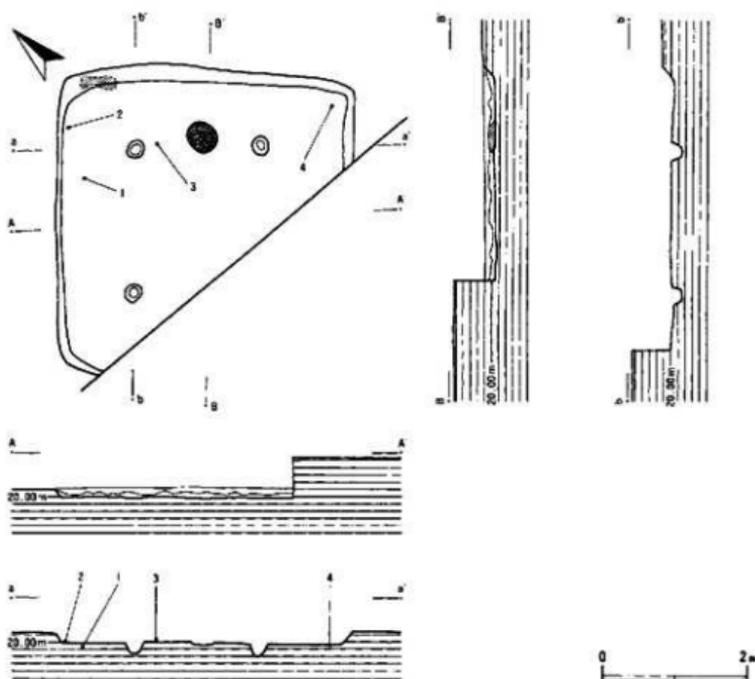


第322図 044住居実測図

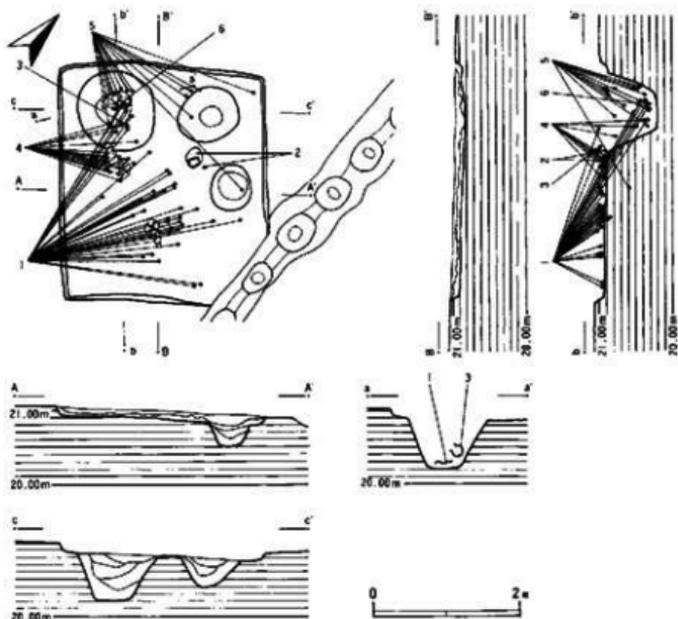
051 (324図、図版120)

西群3B区に位置する。

主軸5.3m、横軸5.1m、深さ0.30mを測る隅丸方形プランで、主軸方向はN-52°-Wである。住居南側は調査区外である。住居形態は041住居に類似し、中央に柱穴を1個確認するもので、柱が熱を受けるのではないかと思えるほどすぐ北寄りに炉を設けているが、焼土は硬化しており、炉の廃絶後に床面として使用していたものと考えられる。さらに、炉と北西壁の間に2cm~3cmの段を介して、長さ1.5m、幅0.5mの長方形の窪みを検出した。深さ4cm~5cmを



第323図 050住居実測図



第324図 053住居実測図

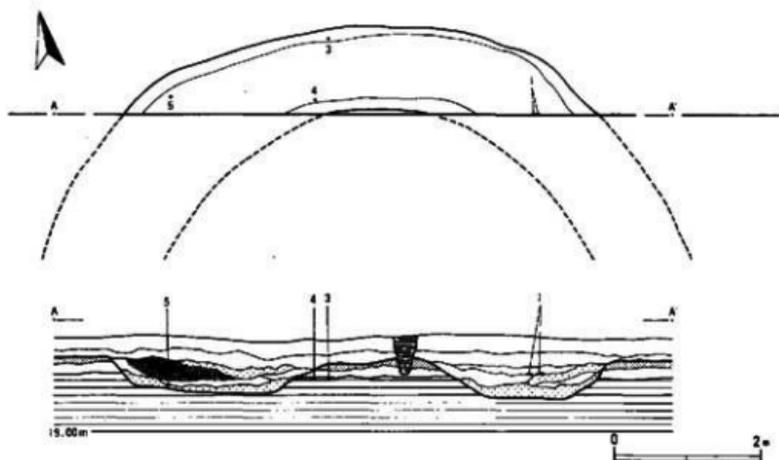
測る。底面は平坦に仕上げられている。南東壁中央の直下には入口ピットと考えられる楕円形の落ち込みを検出している。壁溝は幅10cmに満たないほどのものが途切れながらもほぼ全周するようであるが、壁溝からやや外方に径10cmほどの浅い小ピットがいくつか検出できた。この施設については039住居にみられる壁板と支柱の関係に類似している。壁下部の立ち上がりが垂直であることも共通する点である。

覆土下位には焼土粒子や炭化材を多量に含む層が認められ、床面には大形の炭化材を検出した。遺物の出土はいずれも床面直上であるが、完形品はなく、実測した破片の多くは細片の接合が主であった。なお、赤彩された壺(2)の出土状況は特異で、胴部の大形破片が内面を上にして上下に重なった状態で検出された。なお、041住居との接合が多くみられることも特徴のひとつである。

#### 053 (第324図、図版122)

西群3B区に位置する。

主軸3.3m、横軸2.8m、深さ0.25mを測る長方形プランで、主軸方向はN-44°-Wである。南東コーナーは道路脇の垣根により攪乱を受けている。本住居には炉がなく、大形のピットを3基検出した。床面は平坦であるがしまりには欠けている。壁の立ち上がりは良好である。大



第325図 052円墳実測図

形ピットは北西コーナー（P1）、北東コーナー（P2）および中央東寄り（P3）にあり、P1は径1m、深さ0.6mの円形で撻鉢状、P2は0.8m×0.7mの楕円形で撻鉢状、深さ0.4m、P3は径0.3m、深さ0.3mの円形のピットである。

住居の覆土は2層に分れるが、各ピットの上部も住居覆土が入っている。遺物の出土地点は床面上が多く、大形ピット内においてはピット覆土下部に集中し、多少流れ込みの破片が覆土中位にみられる。P1では完形品が底面より若干浮いた最下層中より検出された。

#### 052（第325図、図版123）

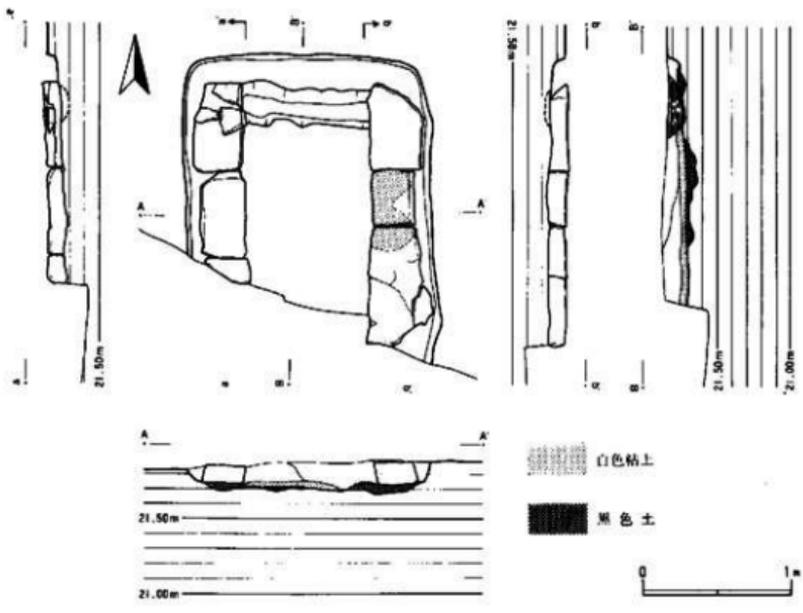
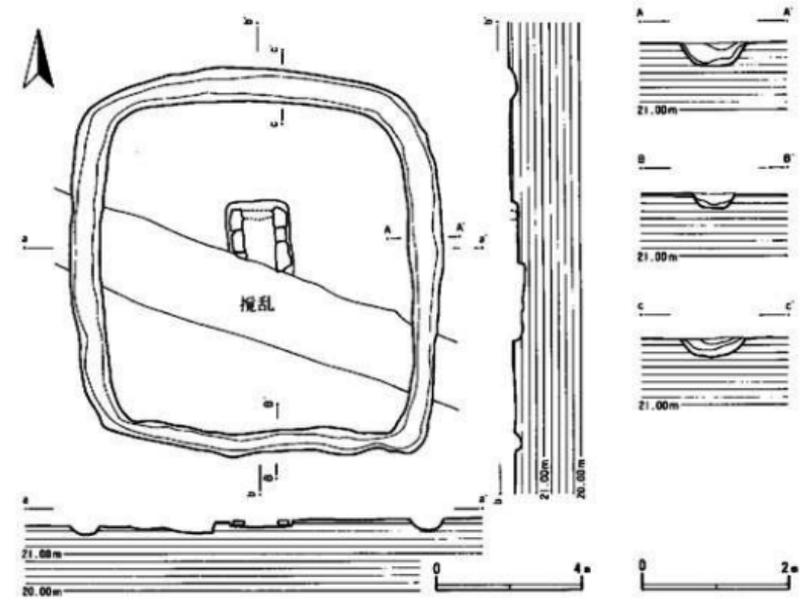
西群3C区に位置する。

大半が調査区外となるため、全容を把握することはできなかったが、幅約1.2mの溝で、おそらく10m前後の円墳の周溝と考えられる。周溝の深さは0.5m～0.6mである。覆土は最下層にローム混入土、暗褐色土層を介してその上位にローム粒子やロームブロックを多く混入する黄褐色土層、暗褐色土層、表土と続く。遺物は散漫に包含し完形品は検出しなかった。

#### 6号墳（第326図、図版123）

2G区に位置する。

周溝 南北（主軸方向）10.4m（9.0m）、東西10.2m（9.0m）の正方形を呈し、幅1m前後、深さ0.3mを測る。主軸方向は北を指す。南半は耕作により上部が削平され、さらに中央を横断する浅い溝で攪乱を受けている。周溝各辺は若干外にふくらみをもっており、コーナーは多少円みを感じる。周溝掘り込みは浅く、断面形はU字状をなす。周溝内で高台付きの長頸壺を出土したが、混入品と考えられる。



第326图 6号坑实测图

**主体部** 竪穴式石棺であるが、上部は削平され、さらに本古墳を横断する浅い溝が南半を破壊しているため、北半の基底部のみが遺存する。遺存する石室内の規模は長軸が1.4mまで残り、幅は0.85mを測る。石室の構築材は軟質砂岩で、幅30cmほどの長方形に整形されたものを重ねており、側壁内面は若干内側に傾斜をとっている。東側の側壁上面には白色粘土が認められることから、最下段の石材の高さは20cmに満たないものであった可能性が強い。短辺の石材は後世に抜き取られ、基底部に若干の窪みを残している。覆土は崩落土でロームブロックを多く含んでいる。遺物は検出しなかった。掘り方は石室よりも若干大きめの長方形で深さは20cmほどである。基底部の最下部は黒色土で整地され、石室底面には白色粘土を貼っている。

### 第3節 遺物

#### 001 (第327・352図)

碗1点、小形埴1点、杯3点、土製品1点、石製模造品1点、白玉1点が出土している。

1は平底の碗底部破片で、外面はヘラケズリ、内面は丁寧に磨かれ赤彩を施す。2は、小形埴で口縁部は短く外反し、胴部に張りのある形態で、外面と口縁部内面には赤彩を施す。3から5は杯で、口縁部が内弯するもの(3・4)と短く外反するもの(5)がある。3は平底である。6は円柱形の土製品で、中央に円孔が通る。外面はナデにより光沢を認める。その他に楕円形の石製模造品と白玉がある。石製模造品は左辺を欠損するが、遺存する右辺には小孔を認める。

#### 002 (第327・328図、図版124)

甕5点、碗2点、杯14点が出土している。杯の出土が多い住居である。

甕は胴部最大径をやや上位にもつもの(1)と球形胴を呈するもの(2~5)があり、ともに大形品である。前者は口縁部が外傾し、刷毛目痕を残すが、胴部は縦方向のヘラケズリを粗く行なっている。ところどころに輪積み痕を認める。後者は口縁部が外弯するようで、胴部には上半に横方向の、下半に縦方向のヘラケズリを残すか、その後かるいナデを加えるものがある。

6、9は碗で、半圓球形の体部形態をとり、口縁部は短く外反する。6の体部はヘラケズリを施し、9は無調整で輪積み痕を意図的に残し、口縁部は強くヨコナデする。ともに底部は平底である。

7、8は平底の杯で、口縁部形態は9と類似する。7は上げ底である。体部はヘラケズリする。10~12は口縁部の外反する杯で、10、11は体部上半と内面に赤彩を認める。13~21は口縁部が内弯する平底の杯で、ことに13は顕著である。外面をヘラケズリするものがほとんどで、内面は丁寧に磨いている。20は口縁外面と体部内面に赤彩を認める。

#### 003 (第325図)

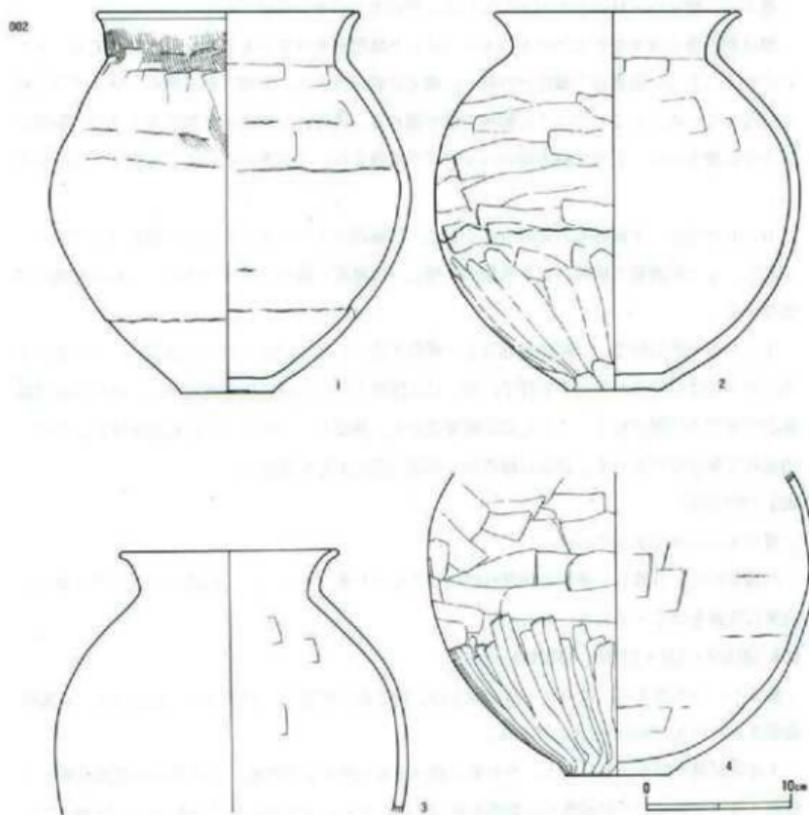
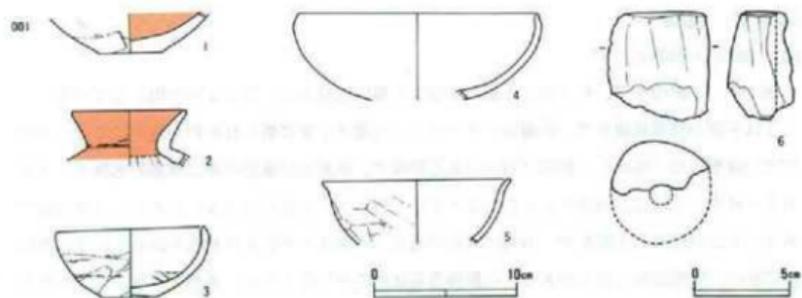
甕が1点のみ出土している。

口縁部が短く外弯し、球形の胴部形態をとるものと考えられる。口縁部のヨコナデが強く、内面に稜線をつくっている。

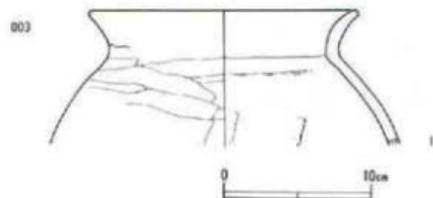
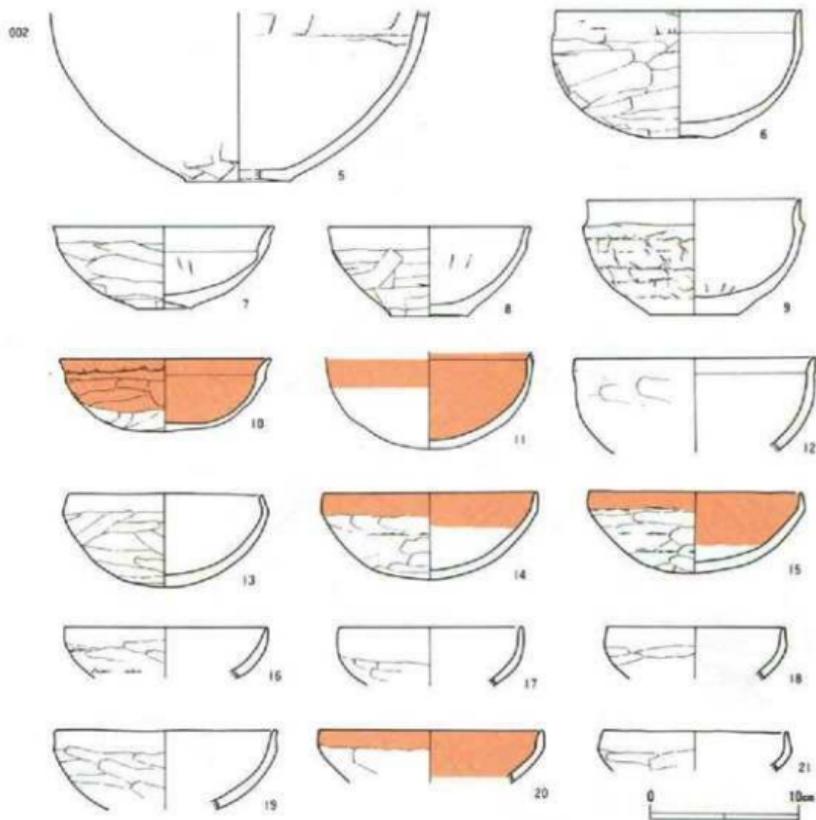
#### 004 (第329・330・322図、図版125・126)

甕3点、小形埴1点、はそう1点、甕1点、碗2点、杯15点、高杯3点、砥石1点、石製模造品2点、白玉138点が出土している。

1は胴部最大径を上位におき、やや肩に張りをもたせた胴部形態、2は球形の胴部形態、3は最大径を中位におくが偏球形の胴部形態である。ともに口縁部は短く外反ないし外弯している。胴部の調整はヘラケズリで、3の胴部中位には刃物を押し引きしたような研磨痕が数条観

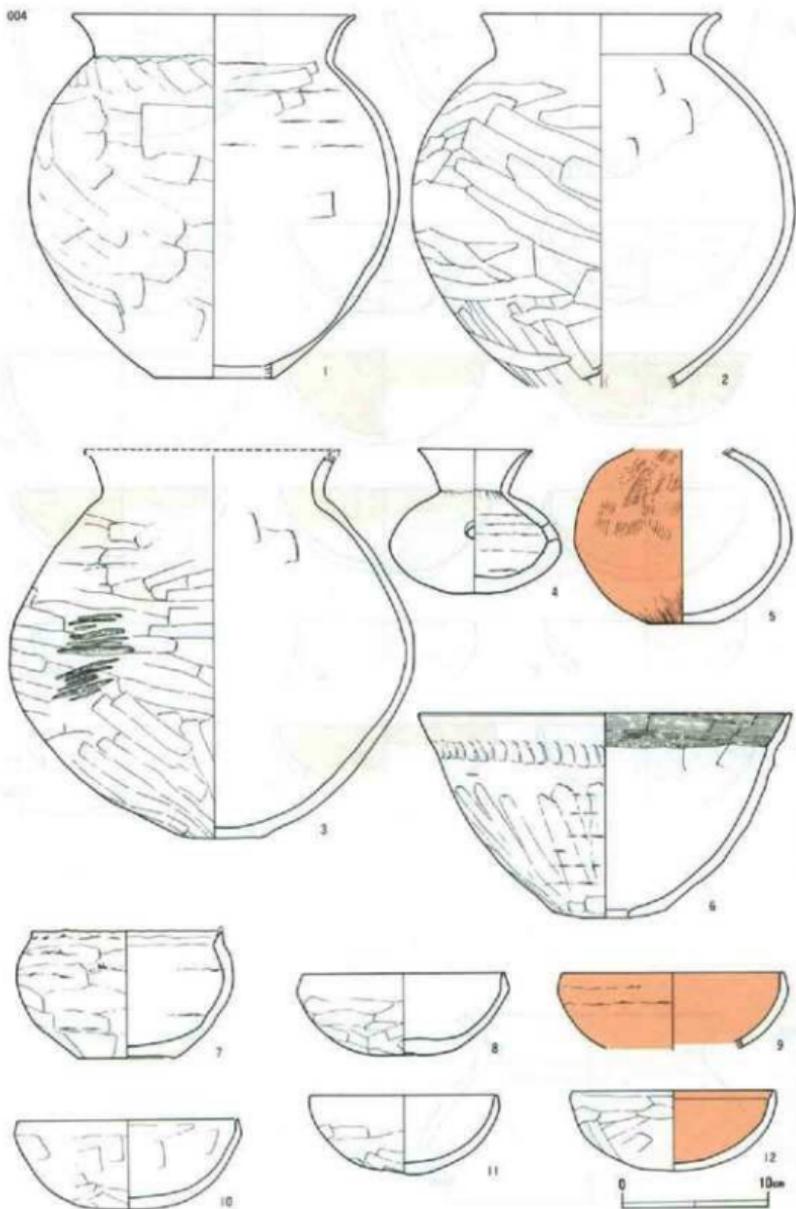


第327图 001·002住居出土遺物実測図

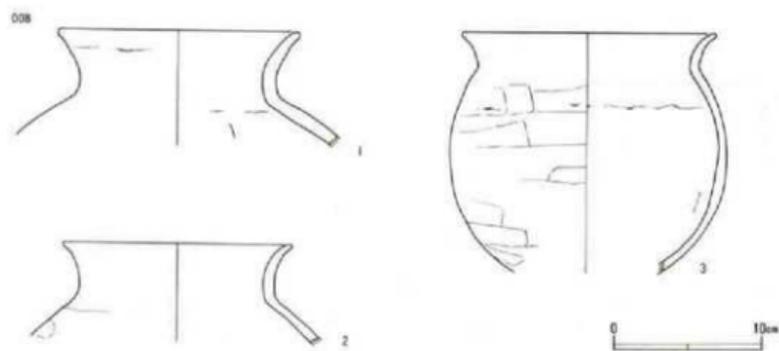
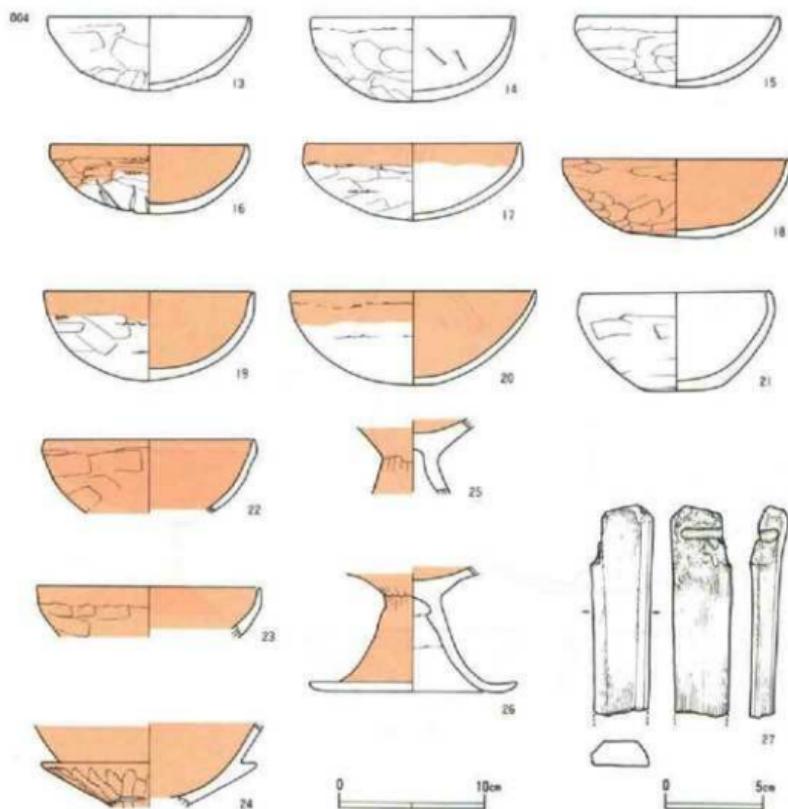


第328图 002·003住居出土遺物実測図

004

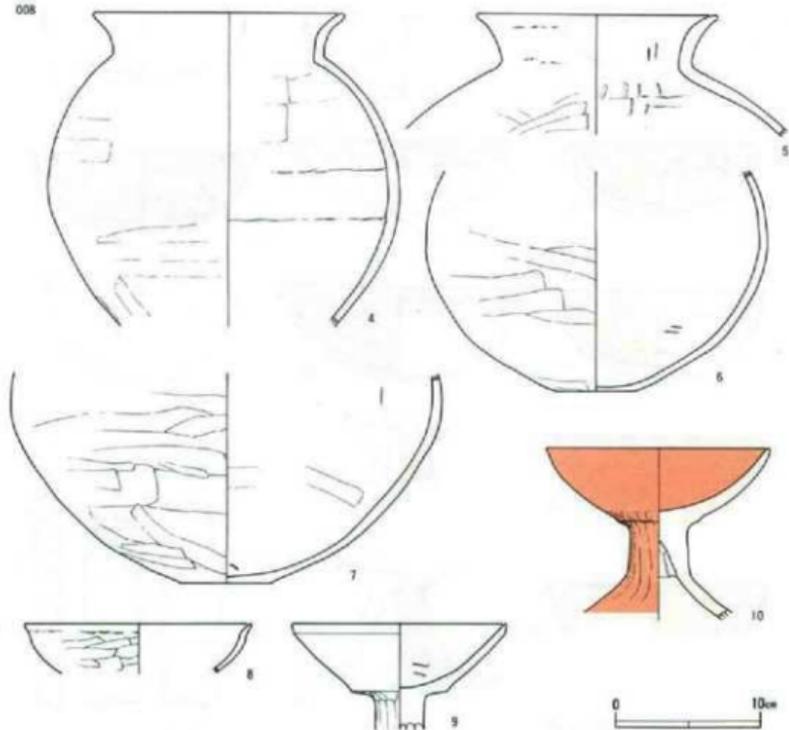


第329图 004住居出土遺物実測図

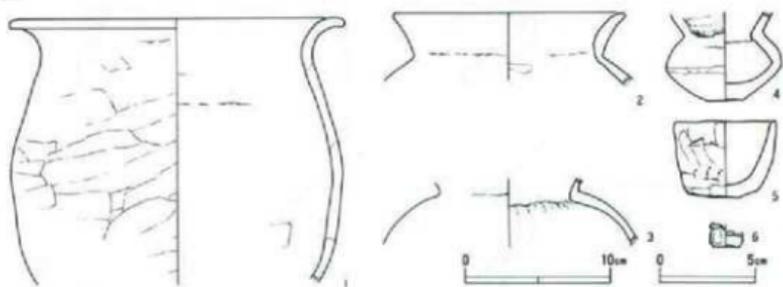


第330图 004・008住居出土遺物実測図

008



013



第331图 008·013住居出土遺物実測図

察できる。

4 ははそうで、器形は小形埴と同様に偏球形の胴部と外反する口縁部をもち、胴中位に円孔を穿っている。外面と口縁部内面は丁寧に磨き、胴部内面には輪積み痕を残している。なお、二次焼成により器面は赤化しもうい。

5 は埴で球形の胴部形態をとる。口縁部は欠損している。底部は小さな平底で、器面は磨かれるが雑で、刷毛目痕が残っている。外面は赤彩を施している。

6 は甗である。大形の鉢状を呈し、口縁部下端は指頭による連続した押捺痕がめぐっている。体部は縦方向にヘラケズリするが、輪積み痕が若干残っている。口縁部内面には刷毛目痕が明瞭に残る。穿孔は焼成以前に行われている。

7、21は碗で、7は口縁部が短く外反しており、21は内弯気味に立ち上がっている。21の底部は凸状で不安定である。

8～20、22、23は杯で、体部外面はヘラケズリが粗雑に行われている。内外面を赤彩するものが多く、赤彩箇所は全面、内面のみ、口縁部外面と内面、口縁部の内外面とバラエティに富んでいる。

24～26は高杯で、24は杯部のみ遺存する高杯破片で、杯体部中央に眞状の段をもっている。内面は口縁端部に向ってU字状に外傾していく。体部下半はヘラケズリを加えている。全面を赤彩した丁寧な作りの高杯である。26は脚部で杯部は欠損している。丈は短く脚端部は外弯する。外面と杯の内面は赤彩する。

27は磁石である。断面形は台形に近く、5面程度の使用面を認める。かなり薄くなるまで使用している。端部には円孔があり、紐を通したものと考えられる。

床面上より石製模造品2点と白玉を多数検出している。石製模造品は勾玉型で、端部が尖る三日月状のものと円みをもつものがある。白玉は直径が4.2mm～4.4mmに集中し、厚みはばらつきが多い(第333図)。

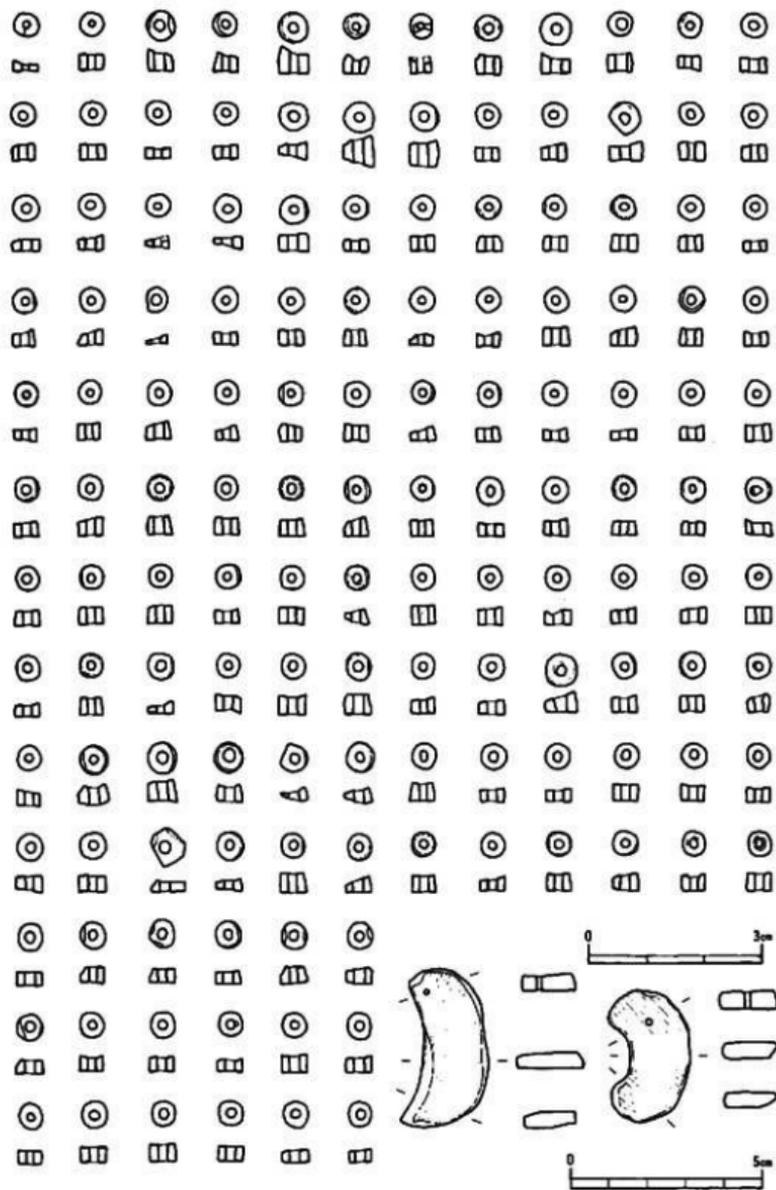
#### 008 (第330・331・352図、図版126・127)

甗7点、高杯2点、杯1点、白玉1点が出土している。土器の多くは二次焼成を受けている。

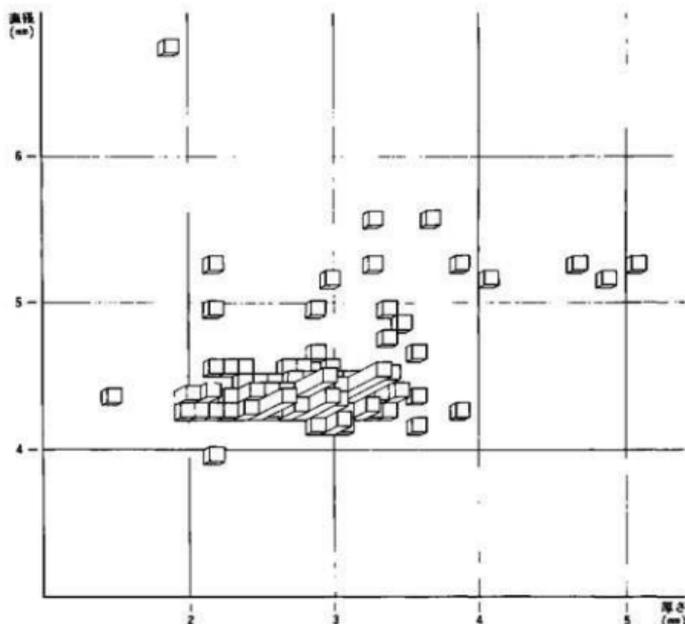
1～7は甗である。口縁部はヨコナデが顕著で、直立してから外方に外弯するやや長めの口縁部形態をとり、胴部は球形に近いものがみられる。3は比較的小形である。胴部はヘラケズリし、ナデ調整するものが多くケズリの痕跡が不明瞭である。

8は杯で、口縁部が短く外反し、内面に稜線を描いている。外面は細かいケズリ痕を観察できる。

9、10は高杯である。9は口縁部が外傾し、杯の下部に小さい平坦面をつくり稜線を描いている。接続部分の脚部は円柱状で縦方向にナデを施している。10は口縁部の内弯する杯部をもち、下部には弱い稜線が認められるが前者ほどはっきりしていない。脚部の裾は円柱形の接続



第332图 004住居出土、石製模造品・臼上実測図



第333図 004号出土土す玉計測値分布図

部から強く開くようである。外面および杯内面は赤彩される。

013 (第331・352図、図版127)

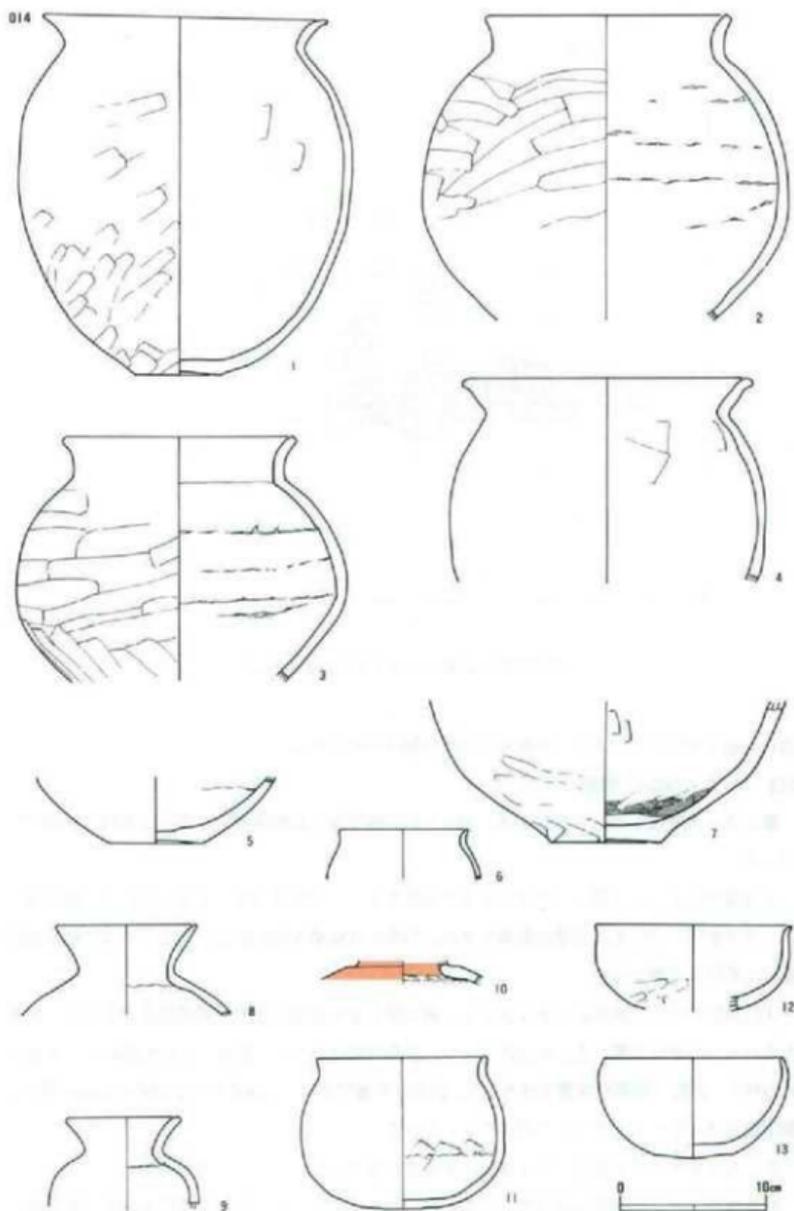
壺2点、大形埴1点、小形埴1点、手ずくね土器2点、石製模造品1点、白玉10点が出土している。

1は頸のしまらない壺で、全体に寸胴な形態を示し、口縁部は強く外弯している。外面はヘラケズリを行っているが調整は粗雑である。内面には輪積み痕が認められる。2は口縁部が肥厚して外反する壺である。

3は大形の埴で、頸部のしまりはよく、肩に張りをもたせた球形の胴部形態を示すものと考えられる。外面は丁寧に磨かれ光沢をもつ。肩部内面にはしほり目状のしわを認める。4は小形の埴で、長頸で胴部が算盤玉状を示す。底部は平底である。口縁部外面には刷毛目痕が残り、胴部最大径にはケズリを加えて円みをだしている。

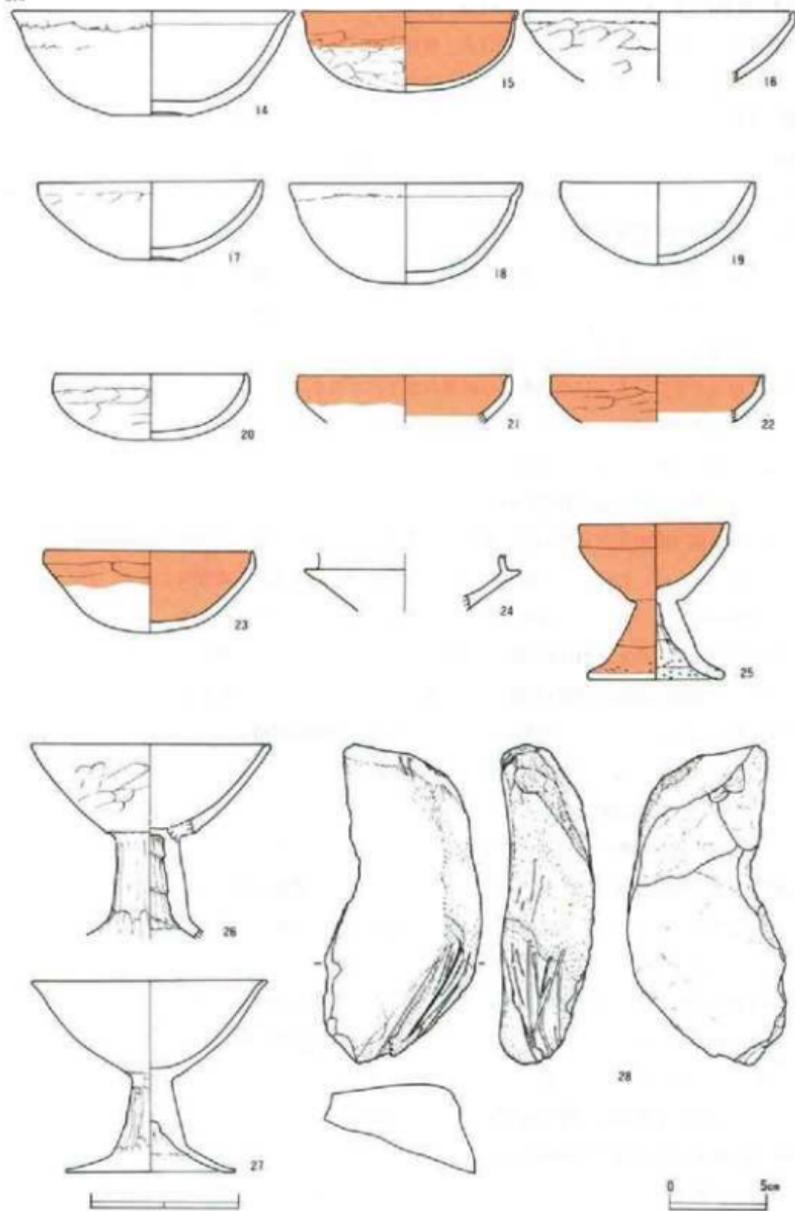
5、6は手ずくね土器で、5は鉢状、6はきわめて小さいミニチュアである。

石製模造品は三日月状の勾玉型で、頂部に小孔を穿っている。白玉の径は4mm強で大きさにばらつきはない。



第334图 014住居出土遺物実測図(1)

014



第335图 014住居出土遺物実測図(2)

014 (第334・335・352図、図版127・128)

壺6点、小形埴3点、椀3点、杯11点、高杯4点、磁石1点、白玉2点が出土した。

1～5、7は壺である。1は最大径を上位におくやや長球形の胴部形態をとるもので、口縁部は外反している。器面はヘラケズリの後に弱いナデを加えている。4も同様の形態を示すと考えられる。2、3は最大径を中位もしくは下方におき、偏球形の胴部形態を示す。口縁部は外反している。また、胴部内面には輪積み痕を明瞭に留めている。5、7は胴下半部で、7の底部付近には刷毛目痕が残っている。

8～10は埴である。ともに偏球形の胴部形態をとるもので、頸部がしまり口縁部は短く外反している。8はやや大形品、9は小形品である。10は外面と口縁部内面に赤彩を施している。

6、11は頸がしまりわずかに口縁が外反し、円みのある下ぶくれの体部形態をとる椀で、器面は丁寧になでている。11の内面には輪積み痕とヘラの小口痕が認められる。13は口縁部が若干内弯する深身の椀で、底部は平底である。

12、14～23は杯である。12は直立する口縁端部が小さく外反するもので、体部下半にはヘラケズリ痕が残る。14、15、18は口縁部が外反するもので、口縁内面に稜線を描く。14は大形で外面には輪積み痕をとどめている。底部は平底である。18の口縁部は若干内弯気味に立ち上がっている。16、17、19～23は口縁部が直立するもので、23はやや内弯傾向にある。15、21～23には赤彩を施しているが、口縁部外面と体部内面に行うものばかりである。

24～27は高杯である。24は杯部中位に翼状の段をもつもので口縁部は直立している。25は小形品で、杯底面の接合部付近にはわずかな稜線をつくっており、比較的深めの杯部口縁は弱い稜線をもって直立している。脚部はハの字状に開き、内面に輪積み痕を残している。また、脚裾部には内外面ともに、竹串の先端部を突き刺したように小さな刺突が十数個認められる。外面および杯内面には赤彩を施している。26は外傾する杯底面に弱い稜線をもち、円筒部から外に大きく開く脚部形態をとるもので、外面にはケズリ風のナデを施している。脚円筒部内面には輪積み痕が明瞭に残っている。27は口縁部の外反する杯部に、下の広い円筒部から大きく開口する裾をもつもので、杯底面の接合部付近に稜線はつくらぬ。円筒部の内面上半は粘土が詰まっている。

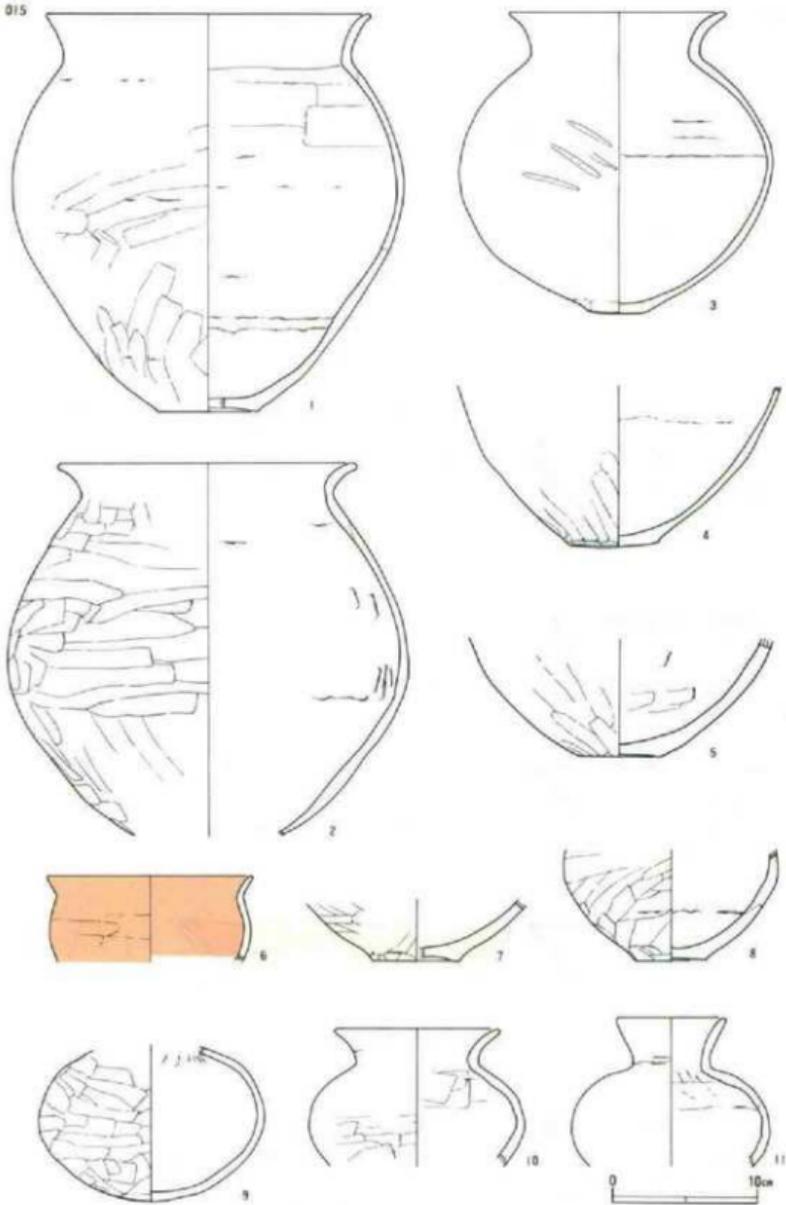
28は安山岩製の自然礫を利用した磁石である。正面は使用頻度が高く、平滑な面をつくっているが、裏面は新たな剝離が加えられるため、使用痕跡は端部に確認できるだけである。側面には若干の擦痕が残っているが、ほとんどが自然面で、一部に線条痕が数条観察できる。

白玉は2点出土するが、他の住居出土品より径が大きく、ともに6mm強を測る。

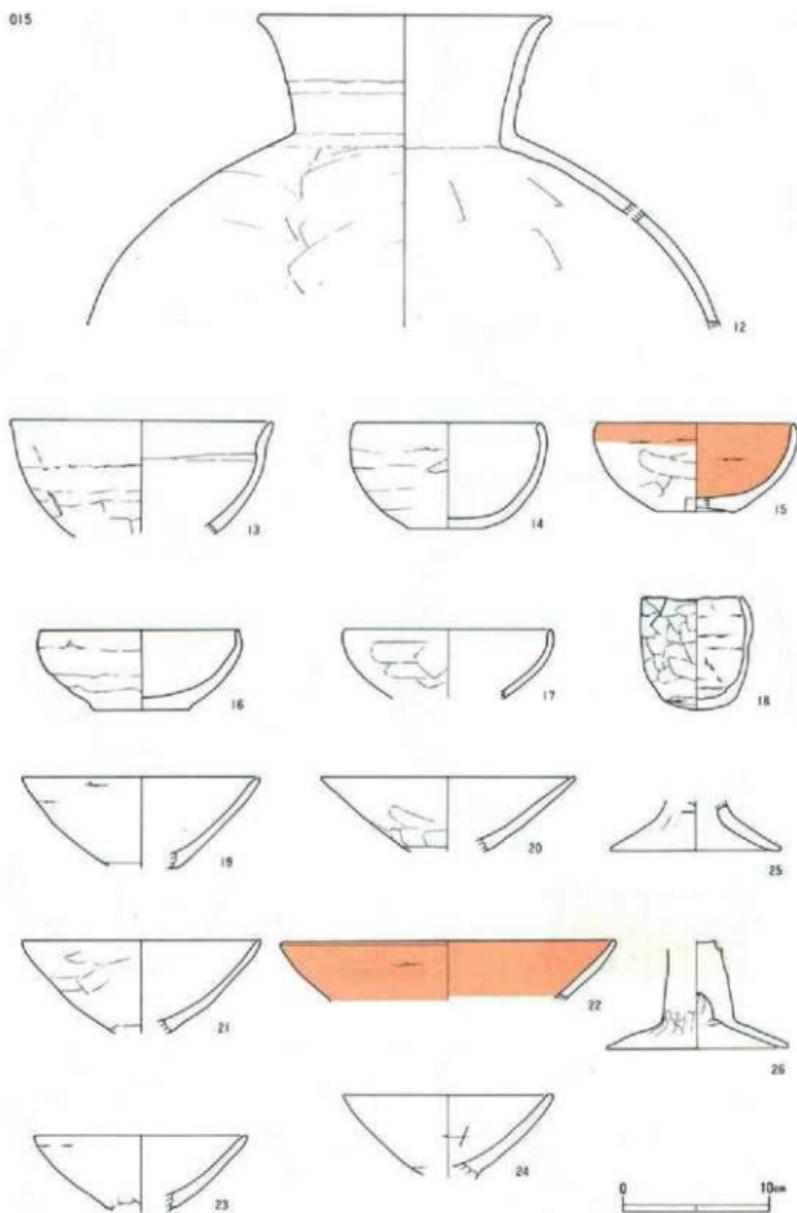
015 (第336・337・352図、図版128・129)

壺8点、埴4点、椀1点、杯4点、高杯8点、手づくね1点、石製模造品1点が出土している。

015



第336图 015住居出土遺物実測図(1)



第337图 015住居出土遺物実測図(2)

1～5、7、8は甕である。1は最大径を上位におくやや肩の張った胴部形態で、口縁部は外反する大形の甕である。2も大形で、胴部最大径は中位におき、口縁部は外弯気味である。ともに器面の調整は上半を横方向に、下半は縦にヘラケズリしている。12はきわめて大形の甕で、破片数が不足しているため全容はわからないが、口縁部が長く外傾し、頸部がよくしまり、胴部上半は張りが強い。胴下半は接合する破片が少ないが、直線的に底部に収束しているようで、胴部の最大径は上位におくものと考えられる。なお、口縁部中位には指頭による沈線をしている。3～5は中形で、3は球形胴に外弯気味の口縁部をもつ。底部は小さく、やや凸状をなす。器面はヘラケズリの後にナデを加えている。胴部内面には輪積み痕を残している。また、胴部最大径付近には研磨痕を数条認める。4、5は胴下半が遺存する。器面は縦方向のヘラケズリを加えている。7、8は小形品で、器面はヘラケズリが明瞭に残る。球形の胴部形態を示すようである。

6は、内外面とも赤彩したもので、短頸の増もしくは椀と考えられる。9～11は頸のしまる増で、胴部は丸底偏球形を呈す。9はヘラケズリ痕が明瞭に残っている。10は頸部のしまりがあまく、広口となる。11は丁寧に磨かれているが、頸に小口痕が観察できる。内面には輪積み痕が数条認められる。

14は若干内弯する口縁部形態をとる椀で、器面には輪積み痕が残っている。底部は平底である。

13はやや肥厚して外反する口縁部形態の杯で、口縁内面には弱い稜線をつくっている。下半部はヘラケズリを施しているが口縁部付近には輪積み痕が認められる。15、16はやや内弯気味に立ち上がる口縁部形態の杯で、底部は平底である。16は外面に輪積み痕を残している。15の内面と口縁部外面を赤彩する。

19～24は高杯である。杯部は底面に明瞭な稜線をつくらず、若干内弯しながら開口し、口縁部にいたる。20、21のようにヘラケズリ痕を認めるものもある。22は内外面とも丁寧に磨き赤彩している。口縁径が大きく他のものとは趣を異にする。25、26は脚部で、中の詰まった円筒部から袖部は強く外傾しながら開口する。

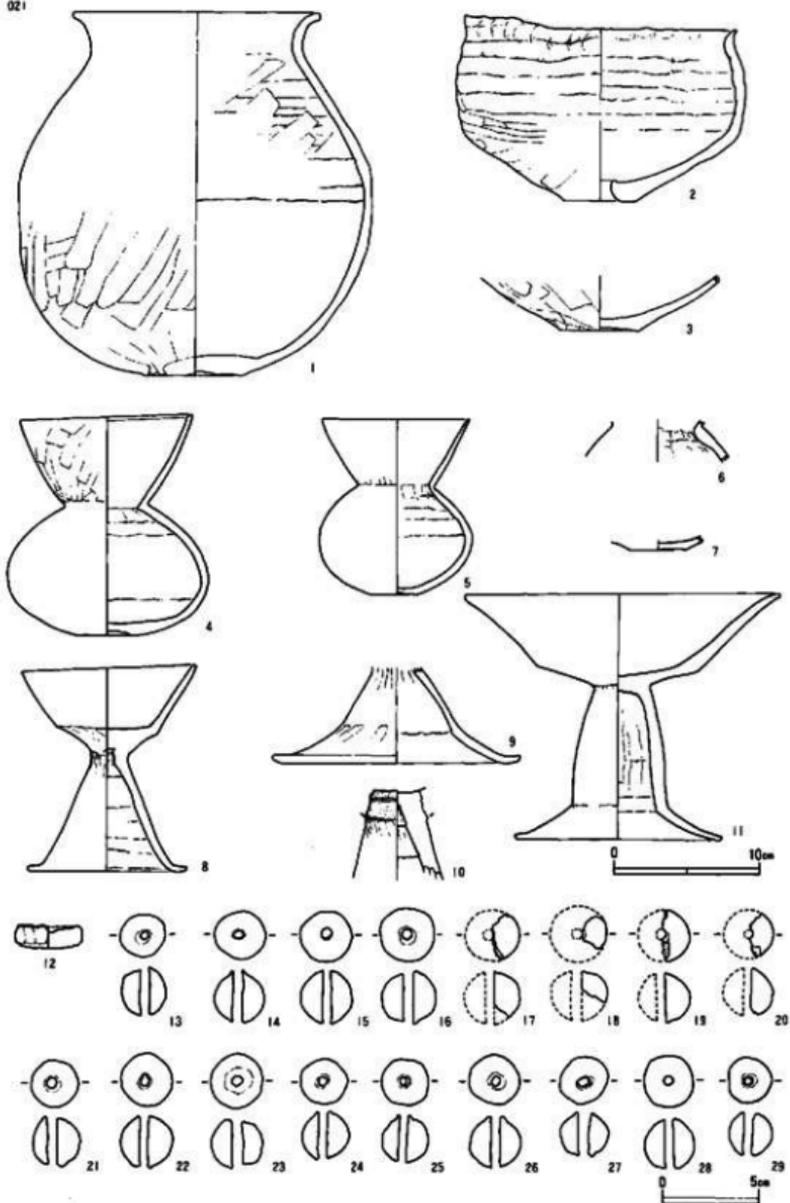
石製模造品は三日月状の勾玉型である。

021 (第338図、図版126・130)

甕2点、増4点、高杯4点、甕1点、手づくね1点、土玉17点出土している。

1は最大径を胴下半におく甕で、下ぶくれの形態を示す。口縁部は外弯する。底部は小さく若干上げ底である。胴部外面はヘラケズリの後、上半にナデを加えている。内面は上半に輪積み痕が明瞭に残る。3は底部周囲の破片で下ぶくれの形態をとるようである。

4～7は長頸の小形増で、胴部は最大径を下部におく偏球形、口縁部は若干内弯気味に外傾している。胴部内面には輪積み痕をとどめ、底部は小さい上げ底である。4の口唇部は若干内



第338图 021住居出土遺物実測図

削ぎ状をなしている。

8～11は高杯である。8は小形品で、杯下半に明瞭な稜線をつくり口縁部は外傾している。脚部はハの字状に開き、端部で短く外反する。11は大形品で、杯下半に明瞭な稜線をつくり、口縁部は外反している。脚部は中ふくらみの長い円筒部をもち、裾は強く外反している。9は脚部のみ遺存するが、短く広がる円筒部から外反する裾部をもつ。10は接合部で破損した脚破片である。

12は手づくねである。土玉は径が3cm前後で焼上がりのしっかりしたものが多い。

#### 023 (第339図、図版130)

埴2点、椀1点、杯2点、土玉2点、磁石1点が出土している。

1、2は口縁部がさほど長くない埴で、偏球形の胴部形態を示し、頸部のしまりは強い。1は外面にヘラケズリ痕を残す。

3は口縁部が短く外反する椀で、底部は厚い丸底となる。外面には輪積み痕を残す。

4、5は口縁部の直立する丸底の杯で、底部は比較的肥厚している。外面にはヘラケズリ痕を残す。

土玉は2点出土するが、径は3cmほどである。

8は磁石で、断面形は扁平な長方形を示す。上部には小孔が穿たれ、同箇所と中央部で欠損している。四面ともよく使用され、平坦面をつくっている。

#### 024 (第339図、図版130)

甕5点、埴1点、杯1点が出土している。

1の甕は、口縁部が比較的長く外反し、頸部付近では若干肥厚している。胴部は肩に張りをもたない無で肩で、最大径は中位もしくは下位におくものと考えられる。器面はヘラケズリの後にナデを加える。胴部内面はヘラ状工具によるナデを加えているが、肩部には輪積み痕が数条残っている。2は外反する口縁部の破片である。3、4は球形の胴部形態をとるもの、5は下ぶくれの胴部形態である。

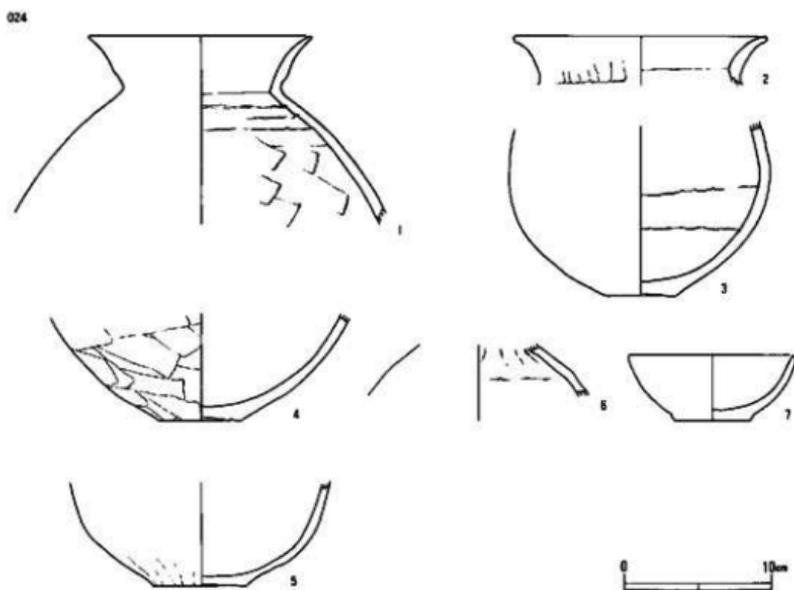
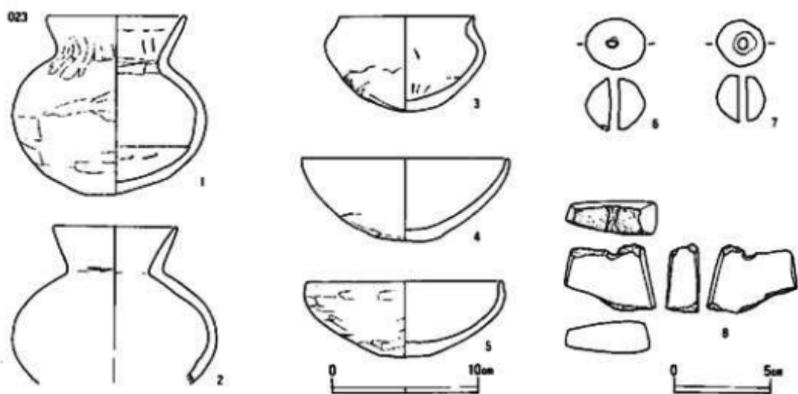
6は比較的大形な埴の胴上半部である。

7は平底の杯で、口縁は直立する。

#### 026 (第340図、図版131)

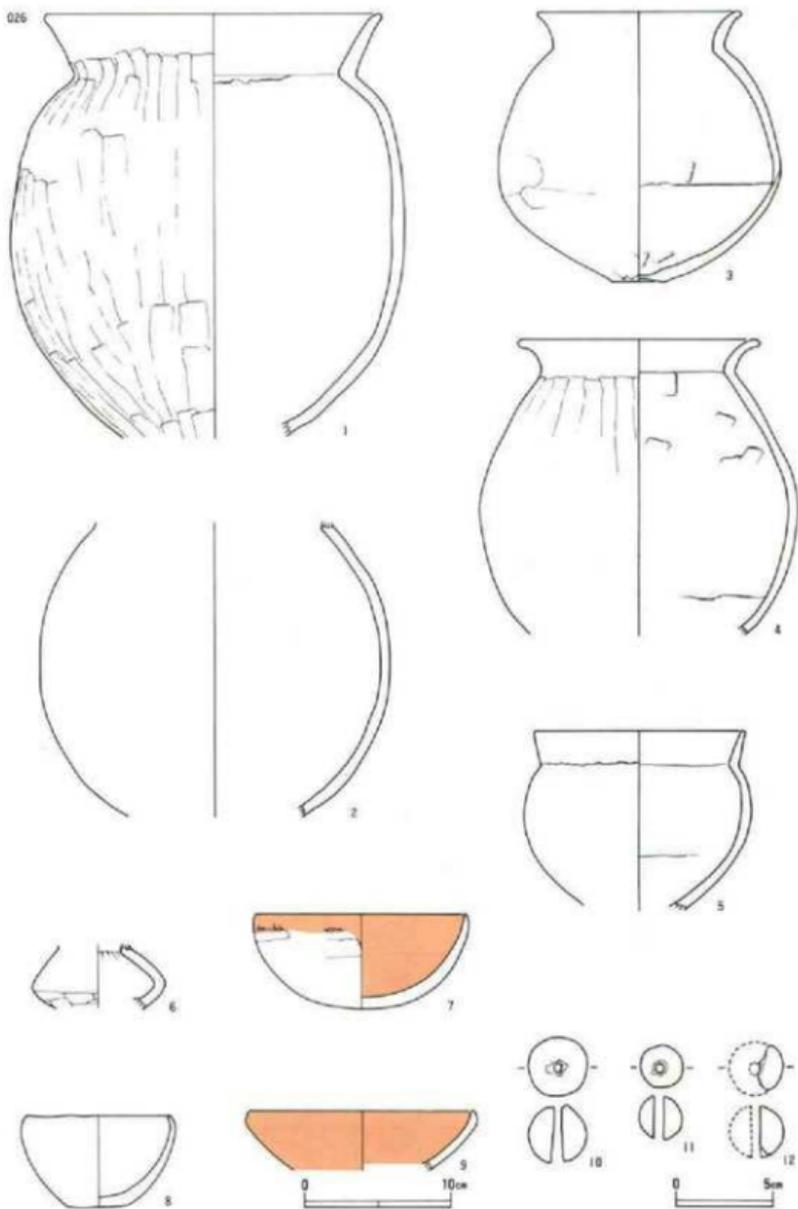
甕5点、埴1点、椀1点、杯2点、土玉3点が出土している。

1～5は甕である。1は比較的大形で、底部を欠いている。口縁部は外傾し、胴部は肩に若干張りをもつものの、中央のふくらみがない枕状を呈し、下部から急速に底部にいたっている。器面は、頸部から胴部全体に縦方向のヘラケズリを施し、胴上半に軽いナデを加えている。2はやや長めの球形の胴部形態をとるもので、口縁部および底部を欠く。4も同様の胴部形態をとり、口縁部は外弯気味である。器面は縦方向のヘラケズリを施している。3は小振りな甕で

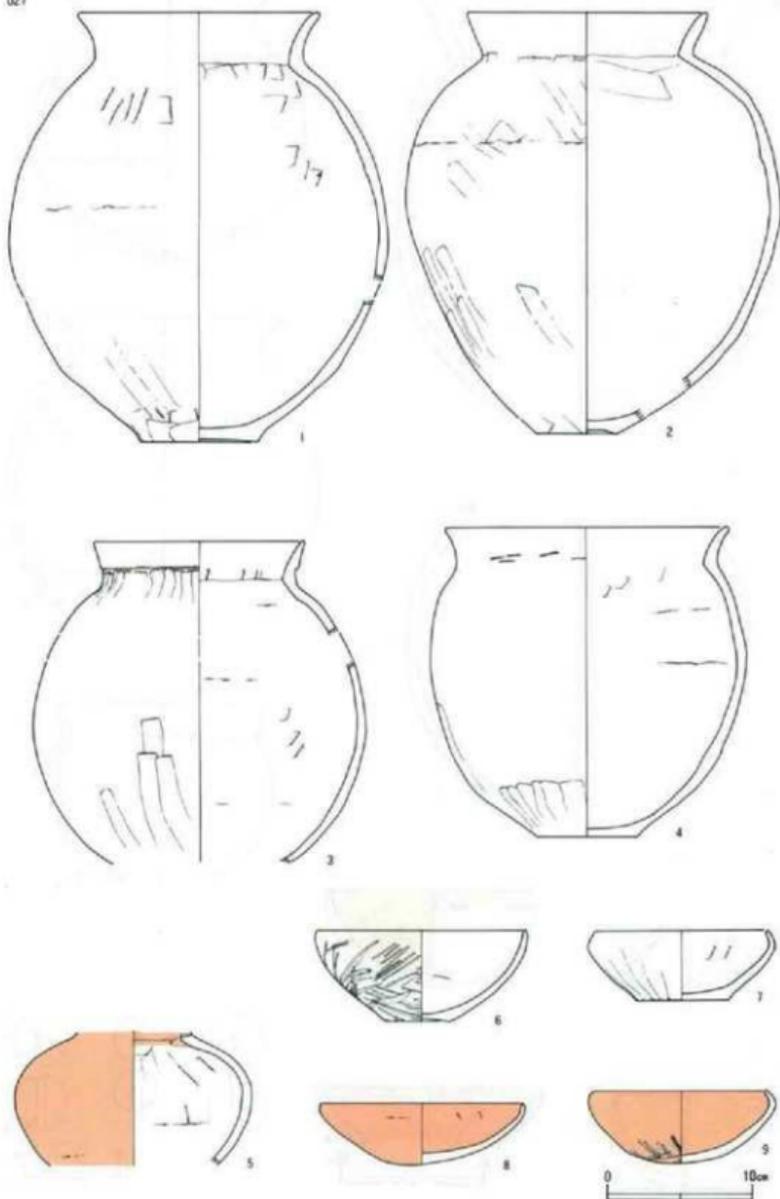


第339图 023・024住居出土遺物実測図

026



第340图 026住居出土遺物実測図



第341图 027住居出土遺物実測図

胴部最大径をやや下方におく下ぶくれな胴部形態に外反する口縁部がつく。底部は小さく上げ底風で、内面が窪むためきわめて薄い肉厚となる。器面はヘラケズリの後にナデを加えている。内面の胴部最大径には接合痕が明瞭に残っている。5は小形の甕で最大径は肩部にある。口縁部は外傾し、頸部には輪積み痕が残る。

6は小形甕で口縁部および底部は欠いている。胴部は算盤玉状で最大径を中位におく。胴部下半にはヘラケズリを加えている。

8は深身の椀で、口縁部は若干内弯する。底部は平底である。器面は内外面とも丁寧に磨かれ光沢をもつ。

7、9は杯で、7はやや深身の丸底で、口縁部は直立する。器面は磨かれ、口縁部外面および内面を赤彩している。9は全面に赤彩がおよぶ。

土玉は径が3cmほどのものと2cm強のものがある。

#### 027 (第341図、図版131・132)

甕4点、甗1点、杯4点が出土している。

1～4は甕で、1は長球形の胴部形態をとり、口縁部は外反している。器面はヘラケズリの後にナデを加える。2は長球形の胴部形態をとるが、最大径は上部にあり肩に張りをもたせている。口縁部は外傾する。胴部はやや斜めにヘラケズリするが肩に輪積み痕をとどめている。また、頸部には小口痕を認める。3は球形の胴部に外傾する折り返し状の口縁部がつく。折り返し口縁部下部から胴部にかけて縦方向のヘラケズリを加えている。4は広口の甕で、最大径は胴上部にある。口縁部は外反する。胴部下方には底部に向かって縦方向のヘラケズリが明瞭に観察できる。

5は比較的大形な甗の胴部で、偏球形の胴部の最大径は上位にありやや肩の張った形態を示している。器面は丁寧に磨かれ赤彩を施している。内面には輪積み痕を残す。

6、7は平底、8、9は丸底の杯で、6は口縁が直立するやや深身なもので、底部は小さく上げ底風である。器面には無数の研磨痕とススの付着を認める。7は前者より浅く、底部は比較的大きい。器面には縦方向のケズリ痕を観察できる。口縁部は内弯している。8、9は内弯する口縁部をもつ浅身の杯である。全面に赤彩を認める。9の底部には摩擦痕が数条ある。

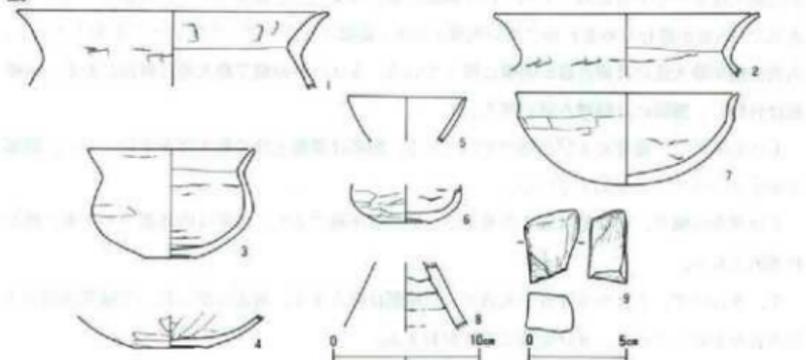
#### 028 (第342・352図、図版132)

甕3点、甗3点、高杯1点、杯1点、磁石1点、石製模造品1点が出土している。

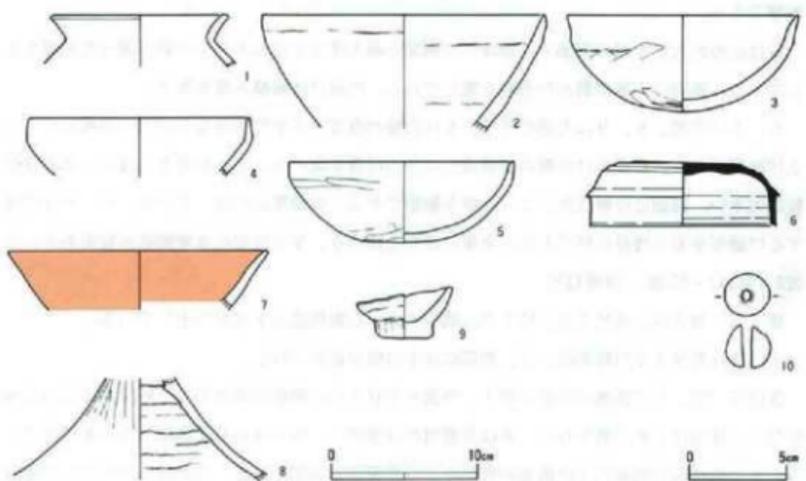
1、2は外反する口縁部破片で、頸部には小口痕が認められる。

3は広口で、上げ底風の平底の甗で、外面を赤彩する。胴部は偏球形で、外傾する短い口縁部がつく。外面は丁寧に磨かれる。6は長頸甗の口縁部で、内外面とも丁寧にミガキを加えている。6は偏球形の胴部に上げ底風の底部をもつ長頸甗の胴部である。外面はヘラケズリの後軽いミガキを加えている。

028



034



第342图 028・034住居出土遺物実測図

8は高杯脚部破片で、ハの字状に開き、内面には輪積み痕を残している。

7の杯は直立する口縁部に強いヨコナデを加えるため、やや外弯する丸底の杯である。外面はヘラケズリの後にミガキを加えている。

9は磁石である。長方体の中位から破損している。破損した中央部は使用頻度が高く磨り減りくびれている。

10は円盤型の石製模造品である。中央に小孔が1か所穿たれている。

1、7、8は出土状況から混入品である可能性が高い。3～5は貯蔵穴内、6は床面から出土している。

#### 034 (第342図、図版132)

甕1点、鉢1点、高杯2点、杯3点、須恵器蓋1点、手づくね1点、土玉1点、石製模造品1点、白玉1点が出土している。

1は小形の甕の外傾する口縁部付近の破片である。

2はハの字状に外傾する大形の鉢であろう。内外面はナデを施しているが、数条の輪積み痕をとどめている。

3～5は杯である。口縁部が直立するもの(4、5)と強いヨコナデにより外反するもの(3)とがある。3の底部付近には摩擦痕がある。

7、8は高杯の杯部と脚部で、7は外反する口縁部形態をとっている。8はハの字状に開口する脚で、内面には輪積み痕が数条残っている。

6は須恵器蓋である。口径12.4cm、高さ4.7cmを測り、体部中位に先端の鋭利な受部をもち、口縁部は垂直に立ち上がっている。口唇部の調整はシャープで内削ぎ状をなす。天井部はほぼ平坦で、外面は回転ヘラケズリ調整を加えている。表面には自然釉を観察する。断面の色調はやや青灰色の強いセピアである。

9は鉢状の手づくねで、輪積み痕を器面に残している。

10は土玉、11は白玉、12は石製模造品で双孔の円盤型である。

#### 035 (第343図、図版132)

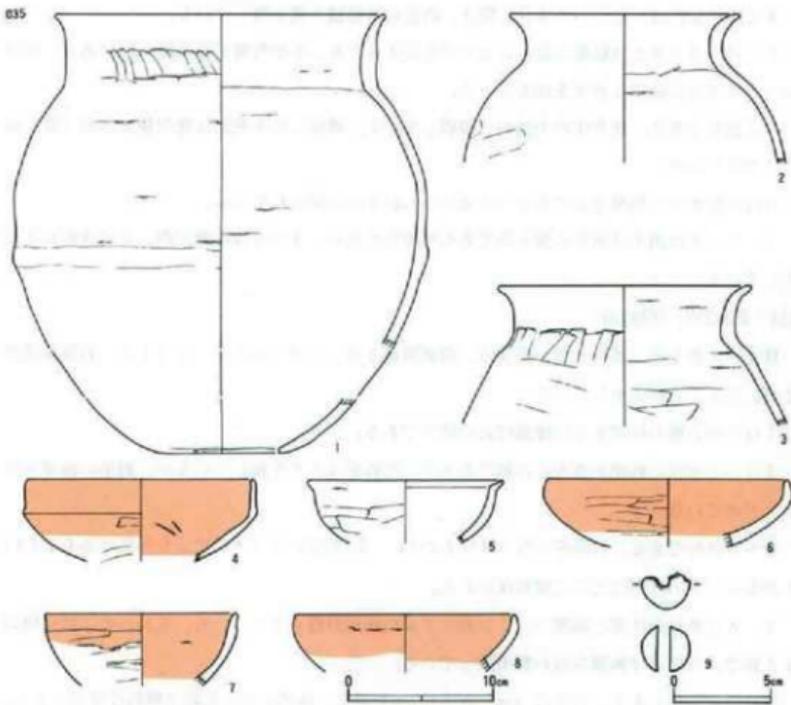
甕2点、杯5点、甗1点、土玉1点が出土している。

2、3は甕の胴上半が遺存するもので、口縁部は直立して外弯する形態をとる。胴部形態は2は肩に張りをもたせ、3は撫で肩に近い。外面の調整はヘラケズリを行っている。

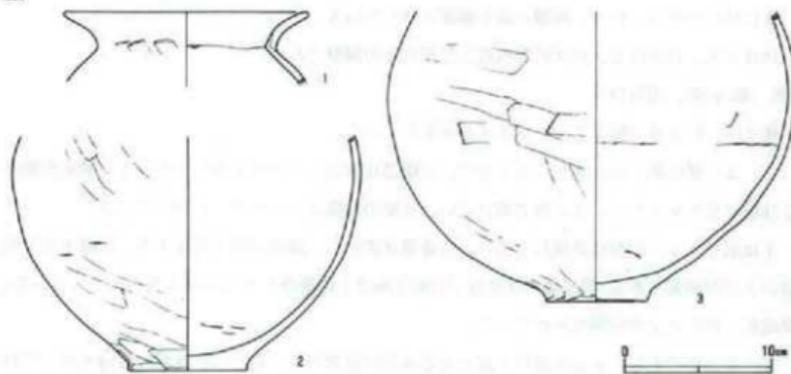
1は甗である。胴部は長球形で広口の口縁部は直立し、端部が若干外反する。口縁下部は指頭のナデが顕著である。胴部最大径の直下に幅2cmほどの肥厚したたが状の帯がめぐっている。焼成前、底部は全体が開放されている。

4～8は杯である。4は模倣杯を思わせるほど口縁部が長く直立し、体部に稜線を描いて移行する。ただし、口縁部のヨコナデは顕著ではない。内面および口縁部外面には赤彩を施して

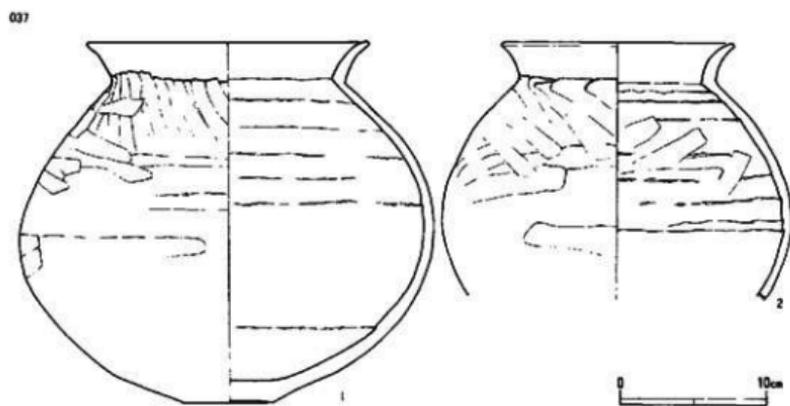
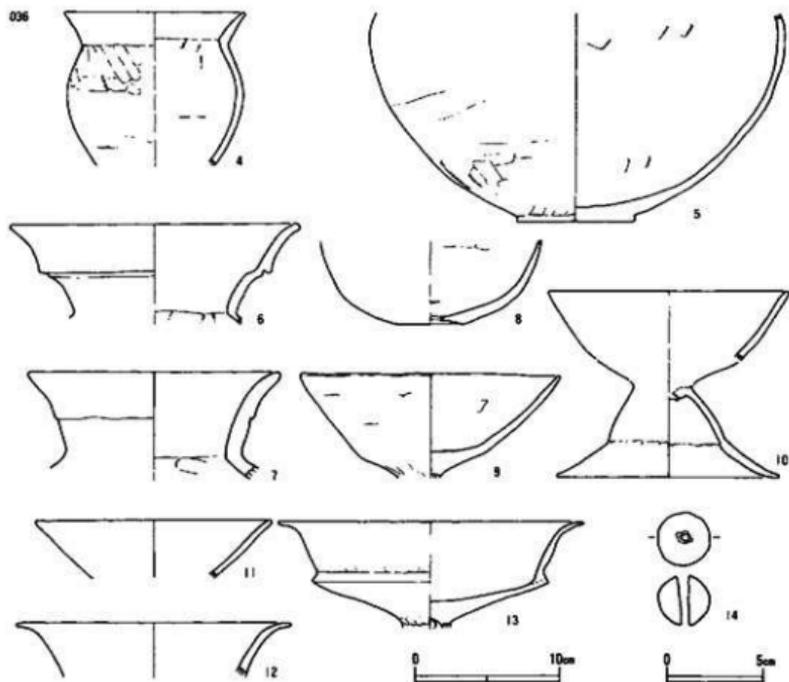
035



036

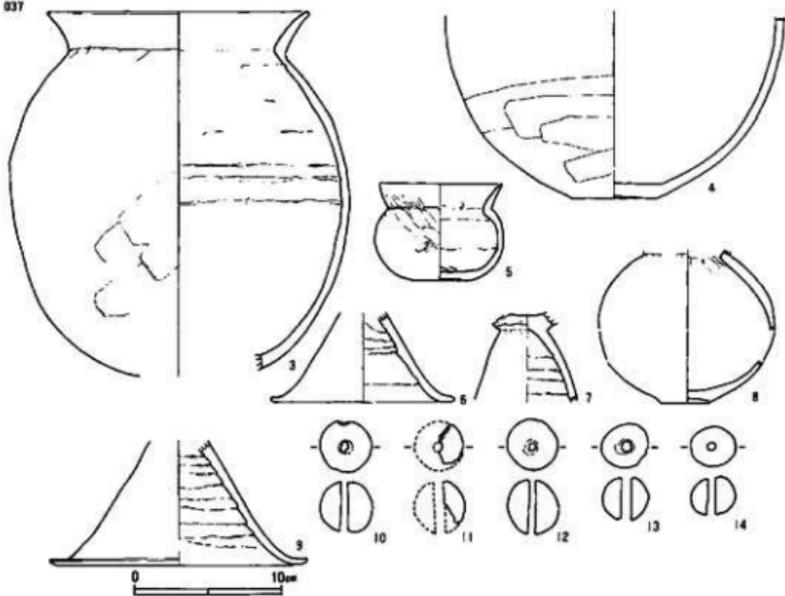


第343图 035 - 036住居出土遺物実測図

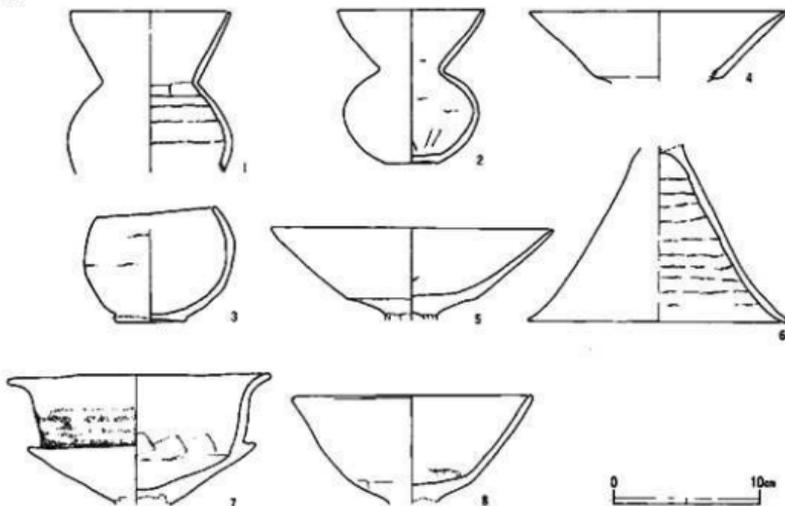


第344图 036·037住居出土遺物実測図

037



038



第345图 037·038住居出土遺物実測図

いる。5は口縁部が短く外反し、内面に稜線をつくっている。6～8は直立する口縁部をもつもので、4と同様に内面および口縁部外面に赤彩を施す。

土玉は半分欠損したものが1点出土している。

036 (第343・344図、図版133)

壺6点、甕2点、高杯5点、土玉1点が出土している。

1～5、8は壺で、完形品はない。1は口縁部が外反する形態である。2は球形の胴部形態、3は最大径をやや下方におくもので大形品、4は小形品で、口縁部は外反し胴部は長球形を呈している。5は4と同じような形態を示すものと考えられる。底部がやや突出している。8も最大径を胴部下方におくよう、小形な部類に入る。底部は上げ底風である。

6、7は壺の口縁部で、6は有段口縁、7は折り返し状の口縁である。ともに器面を丁寧に磨いているが、7は器面の剝落が著しい。

9から13は高杯であるが、杯底面に弱い稜線をつくるものと、翼状に突出するものがある。前者は9～11で、口縁はほぼ外傾する。11は杯部と脚部は接合しないが、胎土、調整、色調から同一個体と判断でき、図上復元した。脚部は下に広い円筒部をもち、さらに開口して裾にいたる。裾部は若干外反する。12、13は突出部をもつ高杯で、杯底面は比較的浅い窪みの円盤状につくられ、淵から1cmほど内側に細い沈線をめぐるして口縁部の接合を強化している。口縁部は外傾し、端部で強く外弯している。突出部までは縦方向のミガキを丁寧に施している。脚部は他の遺構出土例からハの字状に開口するものと考えられる。

037 (第344・345図、図版133)

壺4点、埴2点、高杯3点、土玉5点が出土している。

1～4は壺で、1、2は偏球形の胴部形態をとり、口縁部は外反している。外面は上半を縦から斜め方向に、中で横方向にヘラケズリを施している。胴部内面には輪積み痕が明瞭に残り、ナデ調整はあまりなされていない。3は長球形の胴部形態で、口縁部は外反する。内面には前者同様輪積み痕が明瞭に残っている。4も同様の胴部形態を示している。

5は短頸で広口の埴で、胴部は浅く寸づまりな形態をとり、底部は上げ底である。口縁部は短く外傾する。8は球形の胴部形態をとる埴で、頸部のしまりは強く底部は上げ底である。器面調整はヘラケズリの後にナデを加えている。

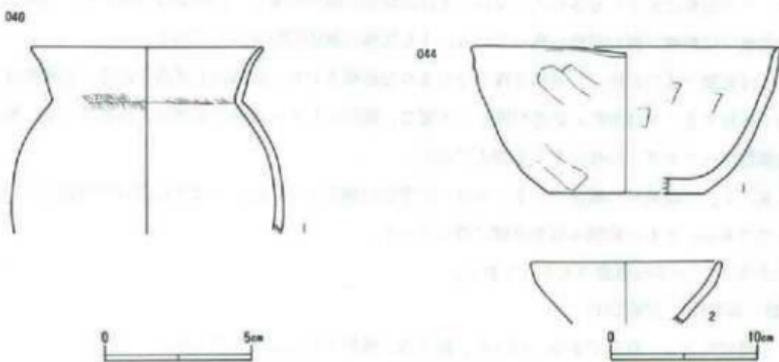
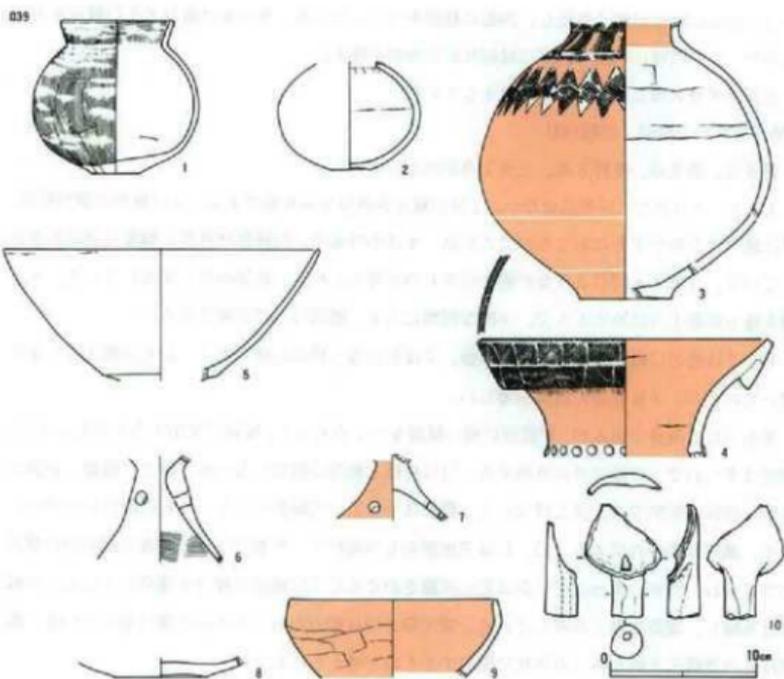
6、7、9は高杯の脚部で、6、9はハの字状に開口するもの、7は下に広い円筒部をもつものである。ともに輪積み痕を明瞭に残している。

土玉は2.5～3cm程度の大きさである。

038 (第345図、図版134)

小壺穴内から一括品である。埴2点、椀1点、高杯5点が出土している。

1、2は長頸埴で、球形から偏球形の胴部に大きく開口する口縁部形態をとる。1は頸のし



第346图 039·040·044住居出土遺物実測図

まりが比較的弱く、胴部はあまり肩の張らない下ぶくれの形態をとり、器面は口縁部内面および外面を丁寧に磨いている。胴部内面には輪積み痕が明瞭に残っている。2は肩に張りをもたせた偏球形の胴部形態で、頸部は強くしまり口縁部は内弯気味に大きく開口する。底部は平底で、若干上げ底風である。器面は丁寧に磨かれる。

3は碗で、半球形の胴部をもち、口縁部は内弯する。底部は平底でやや突出している。外面にはわずかに輪積み痕が認められる。

4～8は高杯であるが、2形態あり、杯部底面に稜線をもつものと翼状の突出部をもつものがある。4、5、8は前者で、4、5は比較的浅身であるのに対し、8は深く稜線もさほど明瞭ではない。脚は円筒部をもつ可能性が高い。7は翼状の突出部をもつもので、口縁部は直立し、端部で強く外弯する。口縁部外面には刷毛目調整の後軽いナデを加えている。底面はヘラケズリの後にナデを行う。6はおそらく後者の形態に接合する脚と思われる。ハの字状に開口する形態で、外面は縦方向のミガキ、内面は輪積み痕を明瞭に残す。比較的大形品である。

#### 039 (第346図、図版134・135)

壺2点、甗2点、高杯2点、器台1点、甕1点、杯1点、土製品1点が出土している。

3、4は装飾壺である。3は口縁部を欠くが、折り返し状の有段口縁になるものと考えられる。胴部最大径は中位におく球形を呈す。頸部には縦に長い長方形の沈線区画、胴上半には鋸歯文を描き、縄文を充填する。その間は縄文を磨り消し、無文部をつくっている。また、長方形沈線区画においても、一区画おきに幅の狭い無文部を設けている。外面の無文部、胴部および口縁部内面は丁寧に磨きを加え赤彩している。4は口縁部のみの遺存品で、折り返し状の有段口縁である。口縁帯は幅広く、羽状縄文を施し、口唇部にも縄文が施される。頸部にはボタン状貼付文をめぐらす。頸部および口縁部内面は丁寧に磨き、赤彩を施す。前者に比べかなりの大型品である。

1は小形甗で、胴下半が押しつぶされたような偏球形を呈し、口縁部は短く外反する。器面は縦方向の刷毛目調整が全面におよび、口縁部や胴上半部に軽いナデを加えている。底部周縁部はヘラケズリを行なっている。2は混入品で、偏球形の胴部形態をもつ甗である。頸部は強くしまるが、口縁部は欠いている。底部は小さく、上げ底である。器面は丁寧に磨いている。

5は大型高杯の杯部である。若干内弯気味に開く深身の杯で、底面には稜線をつくっている。器面は内外面とも丁寧に磨かれる。7は小形高杯の脚部で、ハの字状に開く中位には円孔が穿たれる。器面は丁寧に磨き、赤彩を施す。

6は器台脚部で、杯部と脚部の穿孔部は接合の段階で開けられている。脚上位には円孔が3箇所穿たれている。

8は甕の底部破片である。

9は杯で、口縁部は若干内傾している。器面はヘラケズリされ、軽いナデを加え、内外面を

も赤彩を施している。明らかな混入品である。

10は杓状の土製品の破片で、径2cmほどの柄には小孔が貫通しており、杓状の身の底面に向かって。身の部分は底面を除きわめて薄く仕上げられ、淵はすべて欠けているため形状は不明である。器面はヘラケズリを加えた後に磨かれ、光沢がある。

#### 040 (第346図)

壺が1点出土している。円みのある胴部に外反する口縁部がつく。外面は刷毛目調整の後に軽くナデを施している。焼成は良好で、堅緻である。

#### 041 (第347図、図版135)

壺2点、甕2点、台付壺1点、高杯3点、銅鍍4点が出土している。

3、4は壺である。3は有段口縁の裝飾壺であるが、頸部から肩部および胴下半部は欠損している。胴部形態はやや下ぶくれのようである。口縁部および肩部文様帯下端には網目状捺糸文を認めるが、無文部の有無など詳細は不明である。胴部および口縁部内面は赤彩する。4は壺胴下半部で、最大径は下半部においているようである。器面には若干刷毛目調整痕が残るが、全体的に丁寧なミガキを加えている。赤彩は認められない。

1、2は甕である。口縁部は外反し、頸部はくの字状におれる。器面に刷毛目調整痕を残している。

5は台付壺の接合部で、体部は胴下半に最大径をおき下ぶくれの形態を示すようである。

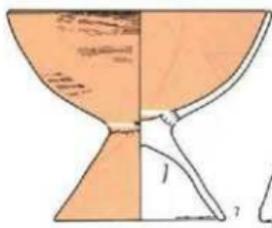
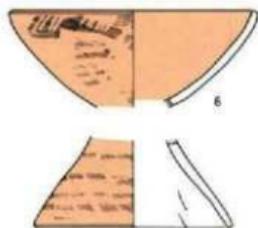
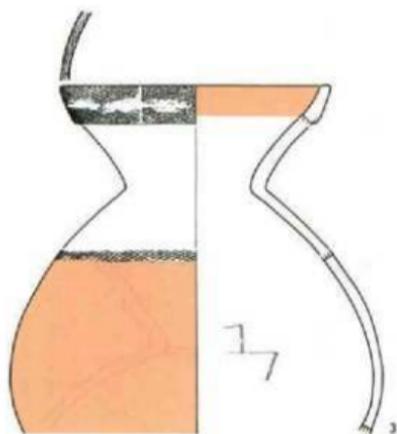
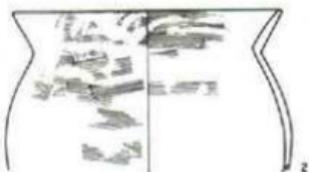
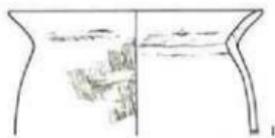
6～8は高杯である。6、7の杯部は内弯しながら開く深身の形態で、ハの字状に開く脚がつく。6の脚部は051で出土したものである。器面には比較的簡易なミガキを加える程度で、刷毛目調整痕が残る。外面および杯内面には赤彩を施している。7は比較的浅身の杯部をもつ高杯である。器面には刷毛目調整痕が残っている。

9から12は銅鍍である。中央の縦に筋のある長三角形の腸袂式で、身の断面形は菱形を呈している。9、10、12は有茎、11は無茎である。9は縁辺の欠損がひどく、ことに先端部と基端部を大きく欠いている。遺存長は23mm、身の長さ17mm、茎の長さ6mmを測る。それぞれの厚さは身が4mmの断面菱形、茎が2mm強の断面長方形である。10は先端部と基端部を若干欠く程度ではほぼ完形品である。遺存長30mm、身の長さ21mm、茎の長さ9mmを測る。それぞれの厚さは身が4mmの断面菱形、茎が3mmの楕円形に近い長方形である。12は11と癒着しているが、完形品で、全長30mm、身の長さ19mm、茎の長さ11mmを測る。それぞれの厚さは身が4mmの断面菱形、茎は身に近い部分で2mm、端部で1.5mmの断面長方形である。11は中央に穿孔のある無茎の完形品で、全長26mmを測る。断面形はレンズ状を呈す。これらのタイプの銅鍍は弥生時代後半から古墳出現期にみられるものである。

#### 042 (第348・349図、図版128・135・136)

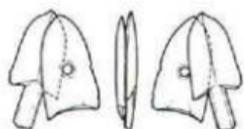
壺1点、甕5点、埴4点、台付壺2点、甗1点、高杯8点、椀1点、土玉7点、摩擦痕のあ

041

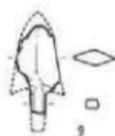


(051-8)

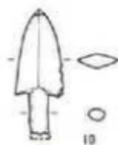
0 10cm



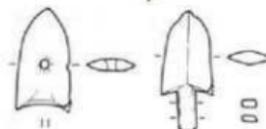
11+12



9

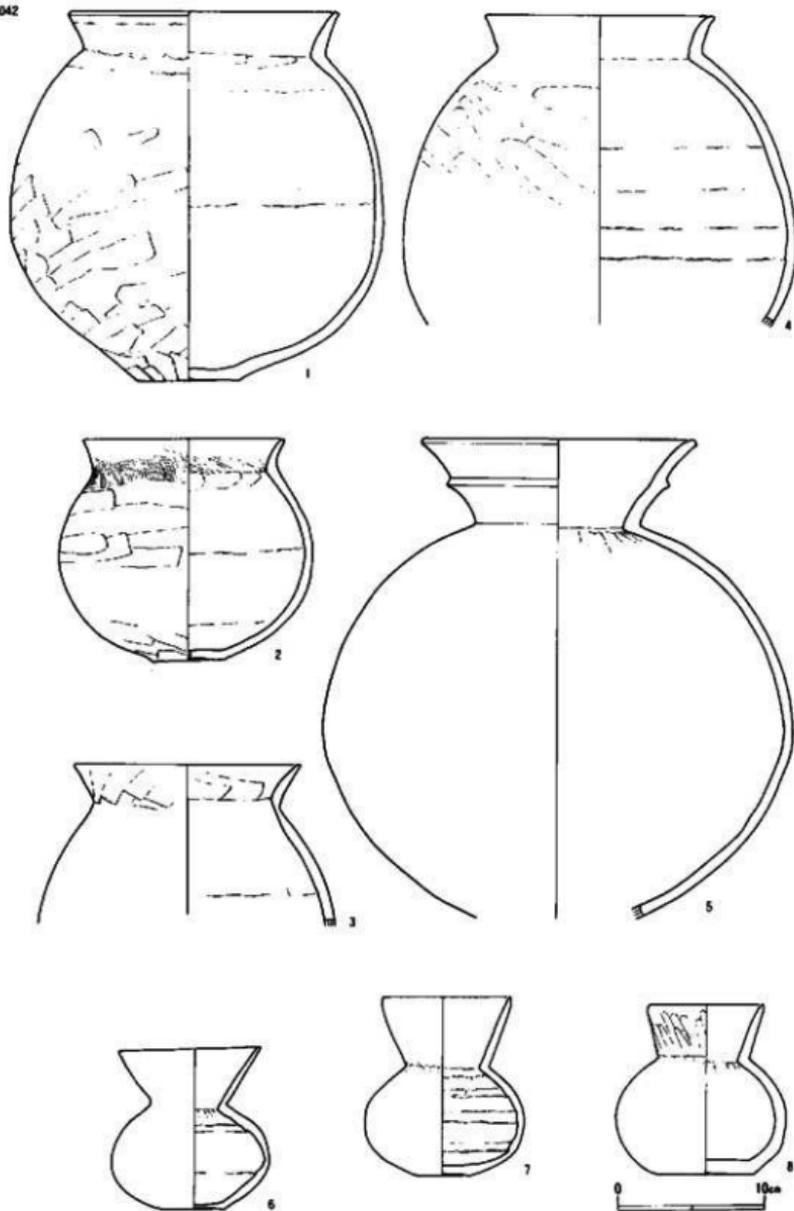


10



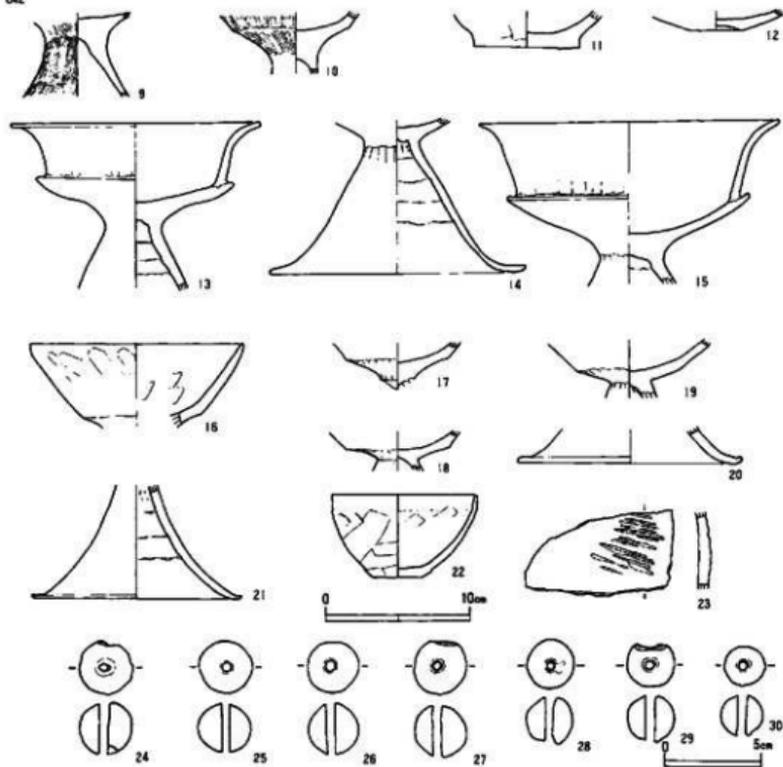
0 5cm

第347图 041住居出土遺物実測図

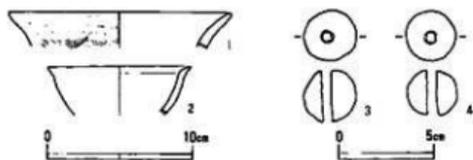


第348图 042住居出土遺物実測図

042



050



第349图 042·050住居出土遺物実測図

る壺破片1点が出土している。

5は有段口縁の壺で、胴部は球形を呈す。口縁部の開きは強く、有段部はわずかに突出する程度で、頸部はくの字状に屈曲する。外面および口縁部内面は丁寧に磨かれる。

1～4、11は壺である。1、2は胴下半部に最大径をおき、やや下ぶくれの形態を示す大形の壺で、口縁部は短く外反し、頸部内面に稜線をつくっている。外面はヘラケズリを行う。胴部内面には輪積み痕を数条認める。3も同様の形態を示す中形のものであろう。

2は小形の甔である。形態は壺に近いが、底部には焼成前の小穿孔が認められる。球形胴に外反する口縁部が付き、頸部付近には刷毛目調整痕が残っている。胴部調整はヘラケズリで、内面には輪積み痕が認められ、壺の製作技法、形態に酷似する。底部の穿孔は直径が5mm程度である。

6～8、12は埴である。長頸のタイプであるが、8は頸がさほど長くない。6は頸のよくしまった平底の長頸埴で、偏球形の胴部に大きく外反する口縁部をもつ。頸部はくの字状に屈曲し、内面に稜線を明瞭につくっている。器面は丁寧に磨かれ、光沢をもつ。胴部内面には輪積み痕を肩部および胴下半部に認める。7は口縁部の外反の度合いが前者に比べて弱く、平底で、胴部形態はやや下ぶくれである。器面は丁寧に磨かれ、光沢をもつ。胴部内面には全体に輪積み痕が残っている。8は器内の厚い長頸埴で、口縁はさほど長くのびず、底部が大きいため、どっしりとした感じを与える。口縁部内面と胴部外面は丁寧に撫でているが、口縁部外面は雑で、ヘラケズリが観察できる。12は埴の底部で、上げ底となっている。

13～21は高杯である。杯底面が翼状に突出するものと、弱い稜線をつくるものがある。13、15は杯底面に翼状の突出部をもち、口縁部は直立し、端部は強く外弯している。口縁と杯底面の接合は、突出部の内側1cmほどに細沈線をめぐらし、その上部に口縁部をのせるようにしている。脚部はハの字状に開口し、裾部で外弯している。脚内面には輪積み痕を残している。16～19は杯底面に弱い稜線をつくるもので、口縁部は外反する。16は比較的深身である。

22は椀で、体部は内弯しながら開口し、口縁部は直立する。外面はヘラケズリを行い、ことに底部周縁は顕著で、底部の形を整えている。

23は壺の胴部破片であるが、いく条もの摩擦痕が観察される。割れ口がそれらより新しいことから、壺の形をなしているときについた可能性が高い。

土玉はどれも3cm前後の大きさである。

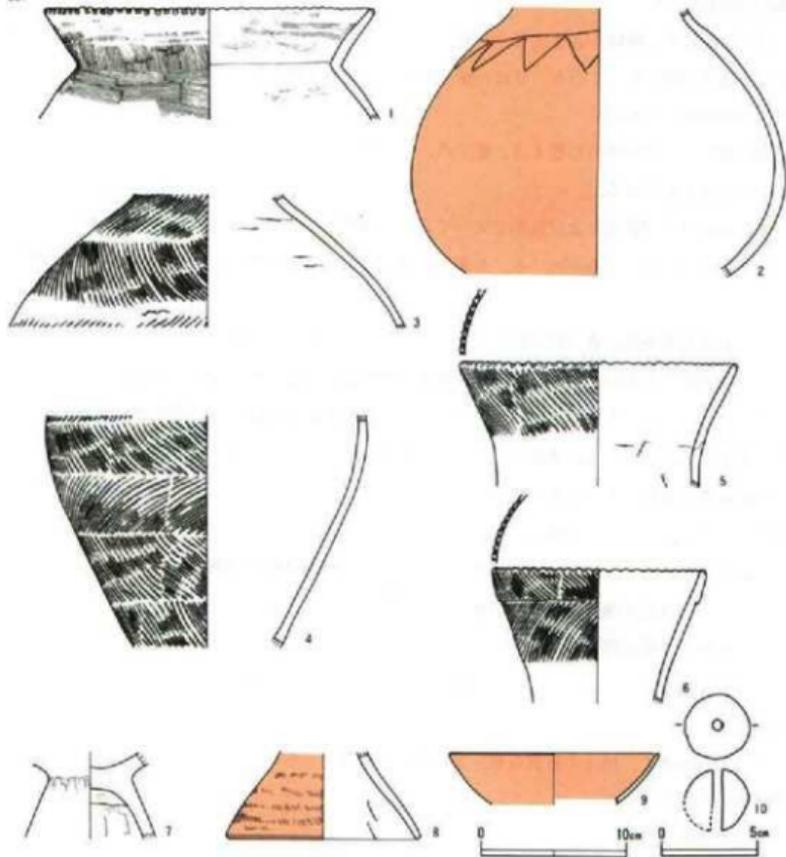
#### 044 (第346図)

鉢と杯が1点ずつ出土している。

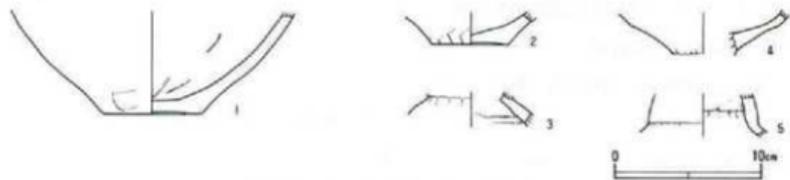
1は大形の鉢で、内弯しながら開口する。口縁部は片口状を呈している。器面はヘラケズリを行う。

2は杯の破片である。口縁部は直立気味に立ち上がっている。

051



052



第350图 051·052住居出土遺物実測図

050 (第349図)

壺口縁部破片と腕破片、土玉2点が出土している。1は外反する壺口縁部で、軽くヨコナゲされ、刷毛目痕が残っている。2は口縁部が短く外反する腕の破片である。

051 (第347図、図版135)

裝飾壺1点、北関東系の壺4点、壺1点、台付壺1点、高杯脚部1点、小形丸底埴1点、土玉1点が出土している。

2は裝飾壺で口縁部および底部を欠いている。肩部には細沈線による平行線と山形を組み合わせた三角形の沈線区画がめぐる。外面は丁寧に磨かれ赤彩を施している。内面はナデ調整を行う。

3～6は北関東系の壺で肩に張りをもたせた長胴の形態で、口縁部は細長く外反している。3、4は胴部であるが、器面には附加条縄文の原体幅を一定に保ちながら施文した羽状縄文を一面に施している。5はやや広口の口縁部で、口唇部および口縁上方に附加条縄文を施し、頸部は無文帯を設けている。6は頸部のしまった細口の折り返し口縁で、口唇部および口縁上方に附加条縄文を施しているが、折り返し部分とその下方で羽状をなしている。頸部は前者同様無文帯を設けている。二次焼成を受けているため全体にもろく、ザラツとした感触がある。

1は壺の肩部から口縁部にかけて遺存するもので、器面は刷毛目調整される。口唇部には同工具による刻み目を施している。口縁部はくの字状に外反する。

7は台付壺の接合部破片である。

8は高杯の脚部で、041号住居出土の杯部6と同一個体である。外面には刷毛目調整痕が残り、赤彩を施している。

9は器肉が薄く、胎土の良質な破片で、器面は内外面ともに赤彩しており、小形丸底埴の口縁部破片と考えられる。

052 (第348図)

壺2点、埴1点、高杯2点が出土している。いずれも破片である。

1、2は壺の胴下半および底部である。外面はヘラケズリを施している。

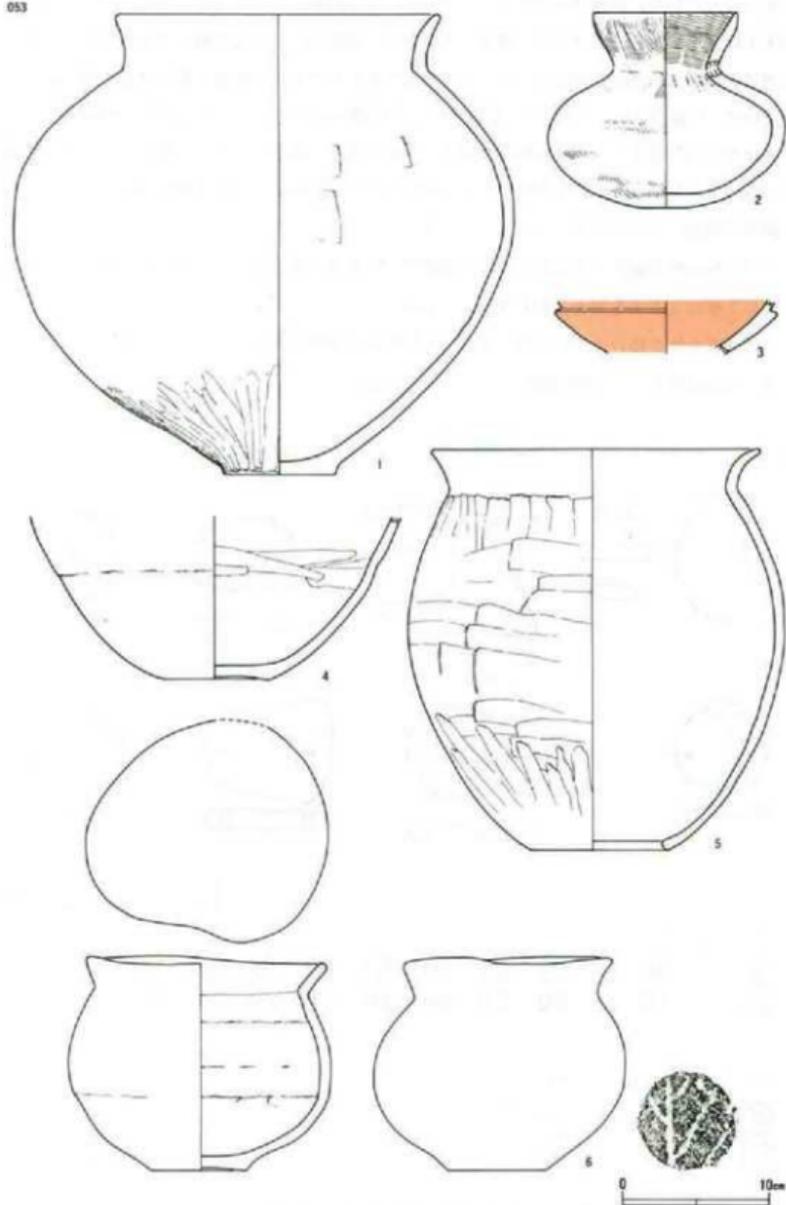
3は埴の肩部破片で、内面には輪積み痕が残っている。

4、5は高杯で、杯底面に弱い沈線をつくっている。脚部は円筒部をもち、裾部は外方に向けて外反する。円筒部の内面は輪積み痕が残っている。

053 (第349図、図版136)

壺3点、埴1点、高杯1点、甗1点が出土している。

1、4、6は壺である。1は大形品で、上位に最大径をおく肩の張った胴部形態をとり、口縁部は短く外反している。外面はヘラケズリの後にナデを加え、胴下半部に再度縦方向のケズリを行っている。4は胴下半部のみが遺存しているが、輪積み帯の接合の際に内側に弱いくび



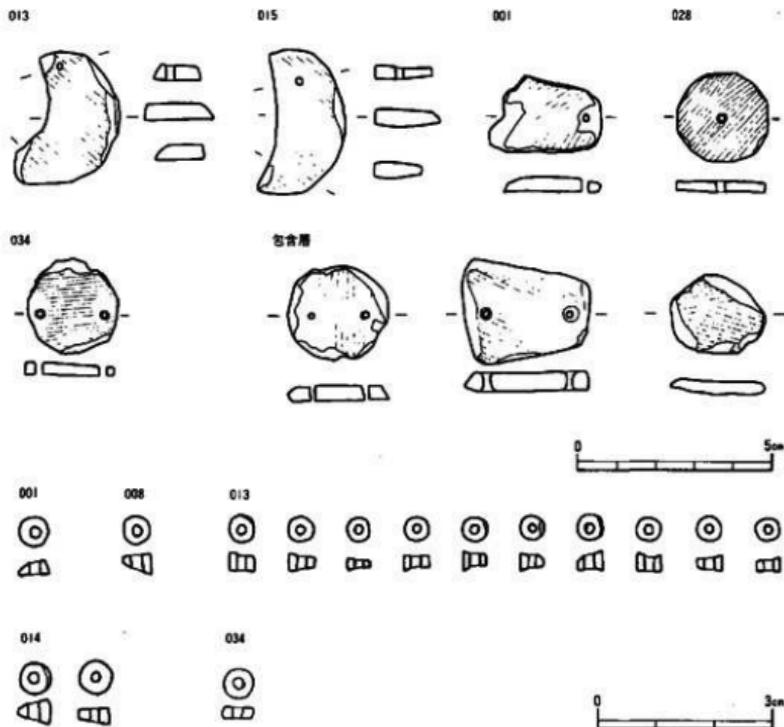
第351图 053住居出土遺物実測図

れをつくっており、内面はヘラケズリしている。やや長胴の形態をとると考えられる。底部は若干上げ底風である。6は小形の甕で、口縁部から胴部にかけて焼成時の歪みが生じている。色調は灰褐色で、高温で焼成されたため堅緻な仕上がりである。胴部は下方に最大径をおく下ぶくれで、口縁部は短く外反する。胴部内面には輪積み痕が残っている。底部は木葉痕がある。

2は大形の長頸増で、胴部は極端な扁平、丸底である。頸部のしまりは強いが、内面に稜線はつくっていない。口縁部は外傾するが、端部で若干内弯気味となる。器面は磨かれているが、口縁部や胴部には刷毛目調整痕が残っている。

3は高杯の杯部破片であるが、中位に簡略化した翼状の突出部をもっている。器面は内外面ともに丁寧にミガキを加え、赤彩を施している。

5は底部全体を抜いた大形の甕である。長胴で最大径をやや上方におく。口縁部は外弯している。外面は縦あるいは横方向にヘラケズリされる。



第352図 住居等出土石製模造品・白玉実測図



第354図 6号墳出土遺物実測図

6号墳 (第353図、図版136)

高台付の須臾器長頸甕である。外面には自然釉が垂れ、内面は気泡のふくれが割れ口に認められる。周溝内からの出土であるが、混入品の可能性が高い。

表75 古墳時代住居出土土器観察表  
土器観察表

遺構番号001

検出 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ						
1	3	埴	—	4.2	(2.8)	3/6	外面 ヘラケズリ 内面 ミガキ(内黒、赤彩)	砂粒多	良	暗赤褐色	
2	6	埴	(7.8)	(5.8)	(3.8)	3/6	外面 ナデ(赤彩) 内面 ナデ(口縁部赤彩)	砂粒多	良	赤褐色	
3	1	杯	10.0	3.6	4.8	5/6	外面 ヘラケズリ、輪襷状残る 内面 ナデ	砂粒多	良	赤褐色	完形、二次焼成
4	2	#	(16.8)	—	(6.1)	2/6	外面 ナデ 内面 ナデ	緻密	良	暗褐色	表面剥落 二次焼成
5	5	#	(13.0)	—	(4.5)	2/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	砂粒少	良	淡褐色	

土器観察表

遺構番号002

検出 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ						
1	21	甕	18.1	胴最大 25.1 6.3	26.0	5/6	外面 ハケメのちヘラケズリ(胴 下半輪襷状) 内面 ナデ	砂粒多	良	暗褐色	内面剥落 口縁部1/3欠
2	20	#	16.5	胴最大 25.1 6.4	25.9	6/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	#	口縁部わずかに欠 くが完形
3	15	#	15.2	胴部径 24.6	(17.7)	(胴上半) 6/6	外面 ヘラケズリのちナデ口縁ヨ コナデ 内面 ナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗赤褐色	
4	14	#	—	胴最大 26.9 7.2	20.6	(胴下半) 6/6	外面 ヘラケズリ(胴下半縦方向 ケズリ) 内面 ナデ(底部ケズリ)	赤色スコリア 砂粒多	良	暗褐色	破損後二次焼成 胴部下半のみ遺存
5	16	#	—	7.0	(11.6)	(胴下半) 3/6	外面 ヘラケズリのちナデ 内面 ナデ	砂粒少	良	#	輪襷帯で破損 下半部のみ遺存
6	8	埴	16.4	4.7	8.8	5/5	口縁 ヨコナデ 外面 ヘラケズリ、内面ナデ	砂粒少	良	暗赤褐色	二次焼成
7	3	杯	14.8	3.6	5.6	5/6	口縁 ヨコナデ、底部あけ底 外面 ヘラケズリ、内面 ナデ	砂粒少	良	暗褐色	破損後二次焼成
8	5	#	(13.6)	5.2	6.1	4/6	口縁部ヨコナデ 外面 ヘラケズリ、内面 ナデ	砂粒少	良	#	破損後二次焼成

9	6	陶	(14.4)	6.0	7.8	4/6	口縁部ヨコナデ 外面 (ナデ輪痕残る)、内面 ナデ	砂粒少	良	淡褐色	
10	1	杯	(14.2)	-	4.9	2/6	口縁部ヨコナデ、上半 (赤彩) 外面 ヘラズリ (輪痕残る)、 内面 (赤彩)	砂粒多	良	淡褐色	
11	2	#	口縁 全欠	丸底	6.5	2/6	外面 ナデ (口縁部赤彩) 内面 ミガキ (赤彩)	砂粒少	良	暗褐色	
12	4	#	16.2	-	(6.3)	2/6	外面 ヘラズリのちナデ (赤彩) 内面 ナデ (赤彩)	砂粒少	良	褐色	
13	17	#	13.3	丸底	6.2	6/6	外面 ヘラズリ 内面 ナデ	砂粒少	良	暗褐色	完形
14	7	#	14.6	#	5.9	6/6	外面 ヘラズリのちナデ、口縁 部赤彩 内面 ナデ (赤彩)	砂粒少	良	#	ほぼ完形、二次 焼成
15	18	#	14.6	#	5.5	6/6	外面 ヘラズリのちナデ (口縁 部赤彩) 内面 ナデ (上半赤彩)	砂粒少	良	#	完形
16	10	#	14.8	(3.5)	2/6	外面 ヘラズリのちナデ (輪痕 残る) 内面 ナデ	砂粒少	良	暗褐色		
17	13	#	12.6	(4.0)	2/6	外面 ヘラズリのちナデ 内面 ナデ	砂粒少	良	淡褐色		
18	11	#	12.0	-	(3.6)	4/6	外面 ヘラズリ 内面 ナデ	砂粒少	良	#	
19	9	#	(15.6)	-	(5.3)	2/6	外面 ヘラズリ 内面 ナデ	砂粒少	良	暗褐色	
20	12	#	15.4	-	(3.3)	2/6	外面 ヘラズリ (口縁、赤彩) ナデ、(赤彩)	砂粒少	良	#	
21		#	12.4	-	(2.7)	2/6	外面 ヘラズリ 内面 ナデ	砂粒少	良	淡褐色	

土器観察表

遺構番号003

検出 番号	実測 番号	種類・ 形状	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考	
			口 径	底 径	高 さ						
1	1	壺	(18.0)	-	(9.2)	(胴上半) 3/6	外面 ヘラズリ 内面 ナデ	砂粒多	良	暗褐色	

土器観察表

遺構番号004

検出 番号	実測 番号	種類・ 形状	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考	
			口 径	底 径	高 さ						
1	1	壺	19.2	8.2	25	(底部欠損) 6/6	外部外面 ヘラズリ 内部内面 ナデ	砂粒多	良	暗褐色	
2	2	#	16.3	-	(25.7)	(底部欠損) 6/6	外面 ヘラズリ 内面 ナデ	砂粒多	良	#	
3	3	#	-	6.0	25.7	(口縁部欠) 5/6	外面 ヘラズリ 内面 ナデ	砂粒多	良	淡褐色	底面あり 二次焼成
4	5	皿*	7.8	3.8	9.8	6/6	外面 ミガキ 内面 ナデ (輪痕残る)	砂粒少	良	暗褐色	構成前穿孔
5	6	埴	-	胴部 最大 14.8	11.8	口縁部欠 6/6	外面 ハケメ 内面 ナデ	赤色スコリア 砂粒小	良	褐色	内面割溝いちじ るしい、二次焼 成
6	4	皿*	24.8~ 25.4	-	13.9	6/6	外面 ヘラズリ、口縁下端指 ナデ 口縁内面 ハケメ、内部内面ナデ (輪痕残る)	砂粒多	良	赤褐色	完形品、焼成前 穿孔
7	7	碗	13.0	6.7	8.5	6/6	外面 ヘラズリ (輪痕残る) 内面 ナデ	砂粒多	良	暗赤褐色	口縁部欠損 後、研削調整し て使用

8	14	杯	14.0	- 5.5	5/6	口縁 外面 ヨコナデ 内面 ヘラケズリ、内面 ナデ	砂粒多	良	暗褐色	あけ底風
9	25	#	(15.2)	- ( 5.7)	1/6	外面 ミガキ (輪痕痕あり) 内面 ナデ (全面赤彩)	砂粒少	良	赤褐色	
10	20	#	(15.1)	- 6.1	3/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤色スコリア (多) 砂粒少	良	淡褐色	
11	15	#	13.0	- 5.4	4/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	淡暗褐色	
12	9	#	14.0	- 5.4	5/6	外面 ヘラケズリ 内面 ミガキ (赤彩)	砂粒少	良	赤褐色	二次焼成 ほぼ完形
13	18	#	(13.8)	- 5.3	4/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	淡褐色	
14	16	#	14.0	- 5.9	5/6	外面 ヘラケズリ (輪痕痕あり) 内面 ナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	淡暗褐色	
15	13	#	12.9~ 13.6	- 4.9	6/6	外面 ヘラケズリ (輪痕痕) 内面 ナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	暗褐色	
16	12	#	13.2	- 4.3	5/6	外面 ヘラケズリ (口縁赤彩) 内面 ナデ (赤彩)	赤色スコリア 砂粒少	良	淡褐色	研磨痕あり
17	19	#	(14.3)	- 5.3	4/6	外面 ヘラケズリ (口縁赤彩) 内面 ナデ (赤彩)	スコリア 砂粒少	良	#	
18	11	#	15.3	- 5.4	6/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ (全面赤彩)	砂粒少	良	暗赤褐色	平底
19	8	#	14.3	- 6.1	6/6	外面 ヘラケズリ (口縁部赤彩) 内面 ナデ (赤彩)	砂粒多	良	暗褐色	ほぼ完形
20	17	#	16.8	- 6.4	5/6	外面 ヘラケズリのちナデ (輪痕 痕あり) 内面 ナデ (赤彩)	砂粒少	良	淡褐色	
21	10	#	12.8	- 6.6	6/6	外面 ヘラケズリのちナデ 内面 ナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	赤褐色	ほぼ完形
22	21	#	(14.3)	- ( 5.6)	2/6	外面 ヘラケズリのちミガキ 内面 ミガキ	砂粒少	良	赤褐色	
23	26	#	(15.2)	- ( 3.4)	2/6	外面 ヘラケズリ (口縁赤彩) 内面 ナデ (赤彩)	砂粒少	良	赤褐色	
24	23	高杯	- 14.1 ( 5.9)		2/6	外面 ツキ体部下平ヘラケズリ 内面 ナデ (全面赤彩)	砂粒少	良	暗赤褐色	磨痕あり
25	24	#	- - ( 5.0)		(脚部) 破片 6/6	外面 ミガキ赤彩 (杯内面ミガキ 赤彩) 内面 (脚部内面ナデ)	砂粒少	良	橙褐色	
26	22	#	- - ( 8.5)		(脚部) 5/6	外面 ミガキ (赤彩) 内面 ナデ (杯内面赤彩)	砂粒多	良	淡赤褐色	

## 土器観表

遺構番号 008

脚部 番号	実測 番号	種類・ 種	法 量 (cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼 成 色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ					
1	3	壺	16.0	- ( 7.8)	4/6	外面 ナデ 内面 ナデ	砂粒少	良	赤褐色	
2	4	#	(15.4)	- ( 6.7)	2/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	砂粒少	良	#	二次焼成
3	2	#	17.0	- (10.5)	(底部欠損) 4/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ (輪痕痕あり)	砂粒少	良	暗赤褐色	二次焼成
4	1	#	16.9	- (21.7)	(底部欠損) 4/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ (輪痕痕あり)	砂粒少	良	#	二次焼成
5	5	#	16.4	- ( 8.4)	4/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ (輪痕痕あり)	赤色スコリア 砂粒少	良	暗褐色	二次焼成
6	7	#	- 5.2 (15.2)		4/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	砂粒少	良	暗赤褐色	二次焼成
7	6	#	- 6.2 (14.2)		5/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	砂粒少	良	#	二次焼成
8	10	杯	(15.4)	- ( 3.3)	4/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	砂粒多	良	暗褐色	
9	9	高杯	(14.8)	- ( 7.2)	3/6	外面 ミガキ 内面 ミガキ	砂粒少	良	淡褐色	二次焼成
10	8	#	15.2	- (11.6)	(底部欠損) 5/6	外面 ミガキ (杯内面 ミガキ) 内面 (脚部内面 ミガキ) 赤彩	砂粒少	良	赤褐色	二次焼成

土器観表

遺構番号 013

埋蔵 層号	支那 番号	種類・ 器種	法 量 (cm)			遺 存 度	成形・調整手法的特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考	
			口 径	底 径	高 さ						
1	1	甕	(23.0)	-	(17.9)	2/6	外面 内面 ヘラケズリ ナデ (輪痕あり)	砂粒多	良	暗褐色	
2	2	#	(15.6)	-	(4.6)	5/6	外面 内面 ヘラケズリ ナデ	砂粒少	良	#	
3	5	埴	-	-	(4.7)	2/6	外面 内面 ナデ ナデ	砂粒多	良	淡褐色	
4	4	#	-	2.4	(6.1)	口縁部 6/6	外面 内面 ハケメのちミガキ ナデ	砂粒多	良	淡褐色	二次焼成
5	3	手捏ね	(6.8)	4.9	5.1	4/6	外面 内面 ナデ ナデ	砂粒多	良	暗褐色	
6	6	#	-	1.3	(1.2)	5/6	外面 内面 ナデ ナデ	砂粒少	良	#	

土器観表

遺構番号 014

埋蔵 層号	支那 番号	種類・ 器種	法 量 (cm)			遺 存 度	成形・調整手法的特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考	
			口 径	底 径	高 さ						
1	1	甕	19.8	5.7	24	1/6	外面 内面 ヘラケズリのちナデ(軽い) ナデ	砂粒少	良	暗褐色	完形
2	3	#	16.8	-	(21.0)	〔胴下半〕 6/6	外面 内面 ヘラケズリ ナデ (輪痕あり)	砂粒多	良	#	
3	2	#	15.2	-	16.5	〔胴下半〕 6/6	外面 内面 ヘラケズリ ナデ (輪痕あり)	砂粒多	良	#	
4	4	#	19.8	-	13.7	3/6	外面 内面 ヘラケズリのちナデ ナデ	砂粒多	やや 不良	黒褐色	
5	6	#	-	6.2	(4.5)	〔胴下半〕 6/6	外面 内面 ヘラケズリのちナデ(軽い) ナデ (輪痕あり)	赤色スコリア 砂粒少	良	暗褐色	胴下半一部、底部 全部遺存
6	27	埴	8.9	-	(3.4)	4/6	外面 内面 ミガキ ナデ	砂粒少	良	暗褐色	胴部から下欠損
7	5	甕	-	7.4	(9.5)	〔胴下半〕 6/6	外面 内面 ヘラケズリのちナデ ハケメのちナデ	赤色スコリア (多) 砂粒少	良	赤褐色	胴～底部洗、輪 痕等欠損
8	24	埴	(9.4)	-	(6.0)	2/6	外面 内面 ミガキ ナデ	砂粒少	良	淡褐色	
9	25	#	(7.3)	-	(6.0)	2/6	外面 内面 ナデ ナデ	砂粒少	良	暗褐色	
10	26	#	-	-	(1.6)	3/6	外面 内面 ミガキ (赤影) ナデ (口縁部赤影)	砂粒少	良	赤褐色	
11	7	埴	11.8	2.6	10.1	5/6	外面 内面 ナデ ナデ (輪痕あり)	砂粒少	良	淡褐色	
12	11	杯	(13.4)	-	(5.7)	3/6	外面 内面 ヘラケズリのちミガキ ミガキ	赤色スコリア 砂粒小	良	淡褐色	
13	15	甕	12.2	5.4	8.6	3/6	外面 内面 ナデ ナデ	砂粒少	良	暗褐色	
14	9	杯	(19.2)	5.0	7.2	3/6	外面 内面 ナデ (輪痕あり) ナデ	砂粒少	良	#	底部あげ底痕
15	10	#	14.7	-	5.6	5/6	外面 内面 ヘラケズリ (口縁赤影) ナデ (赤影)	砂粒少	良	#	
16	17	#	(18.7)	-	(4.8)	2/6	外面 内面 ヘラケズリ (輪痕あり) ナデ (口縁内面横ナデ痕)	赤色スコリア 砂粒多	良	淡褐色	
17	14	#	15.2	4.2	5.3	4/6	外面 内面 ヘラケズリのちナデ ナデ	砂粒少	良	暗褐色	底部あげ底痕
18	8	#	15.4	-	6.8	5/6	外面 内面 ヘラケズリ (輪痕) ナデ ナデ	砂粒少	やや 不良	黒褐色	
19	13	#	(13.2)	-	(5.6)	4/6	外面 内面 ヘラケズリのちナデ ナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	淡褐色	

20	16	#	(13.0)	-	4.5	3/6	外面 内面	ヘラケズリ ナダ	赤色スコリア 砂粒少	良	淡褐色	
21	19	#	(14.6)	-	(3.4)	2/6	外面 内面	ナダ ナダ} 赤形	砂粒少	良	赤褐色	
22	18	#	(14.4)	-	(3.2)	1/6	口縁 外面	ヨコナダ ヘラケズリ、内面ナダ(赤形)	砂粒少	良	淡褐色	
23	12	#	14.0	-	5.6	5/6	外面 内面	ヘラケズリ(口縁部赤形) ナダ(赤形)	砂粒少	良	暗褐色	
24	20	高杯	総入径 15.6	(3.8)		3/6	外面 内面	ナダ ナダ	砂粒少	良	暗褐色	
25	21	#	10.1	9.0	10.6	6/6	外面 内面	(杯ミガキ、赤形)(脚ナダ)	砂粒少	良	淡褐色	完形(脚部内外に 小剛突孔多い)
26	23	#	16.0	11.4	(13.7)	(脚部欠) 5/6	外面 内面	ヘラケズリ黒ナダ (杯部ナダ、脚内面ナダ)	砂粒少	良	暗褐色	
27	22	#	15.2	-	13.0	5/6	外面 内面	ケズリ黒ミガキ (杯部ナダ、脚ナダ)	砂粒少	良	暗褐色	口縁1/4杯部 欠損、脚部完形

## 土器観察表

遺構番号015

母体 番号	実測 番号	種類・ 器種	法			遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成 色調	備考		
			口径	口径	高さ							
1	2	甕	(22.4)	(6.8)	27.3	4/6	内面 外面	ナダ ヘラケズリのちナダ	砂粒多	良	赤褐色	
2	3	#	(20.6)	-	(25.3)	(底部欠) 3/6	内面 外面	ナダ ヘラケズリ	砂粒多	良	暗褐色	
3	4	#	14.7	4.1	(20.8)	6/6	内面 外面	ナダ ヘラケズリのちナダ(部分 的に研磨痕あり)	赤色スコリア 砂粒少	良	淡褐色	二次焼成
4	6	#	-	6.1	(10.9)	(上半欠損) 4/6	内面 外面	ナダ ヘラケズリ(輪磨痕)	砂粒多	良	暗褐色	
5	5	#	-	5.4	(8.0)	4/6	内面 外面	ナダ ヘラケズリのちナダ	砂粒多	良	暗赤褐色	二次焼成 胴部より下から 遺存
6	11	埴	14.0	-	(5.9)	(下半部欠) 4/6	内面 外面	ナダ ヘラケズリ} 赤形	砂粒少	良	暗褐色	
7	7	甕	-	(6.0)	(4.2)	3/6	内面 外面	ナダ ヘラケズリのちナダ(底部 ケズリ)	赤色スコリア 砂粒少	良	赤褐色	
8	10	#	-	4.8	(7.6)	(胴上半欠) 4/6	内面 外面	ナダ(胴下半と胴上半の接 合部(疑似口縁) 両部にキザミ目 を在す) ヘラケズリ	砂粒多	良	暗褐色	
9	22	埴	胴部 最大 15.6	-	(10.6)	(口縁欠) 6/6	内面 外面	ナダ ヘラケズリ	赤色スコリア 砂粒多	良	#	スス付着
10	23	甕	11.4	-	(9.4)	(胴下半欠) 6/6	内面 外面	ナダ(口縁ヨコナダ) ヘラケズリのちナダ	砂粒多	良	淡褐色	二次焼成(器底 割落)
11	24	#	9.4	-	(10.2)	(胴下半欠) 6/6	内面 外面	ナダ(輪磨痕あり) ヘラケズリのちナダ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗褐色	
12	1	#	20.0	-	(21.4)	(胴下半欠) 4/6	内面 外面	ナダ(口縁部ヨコナダ) ヘラケズリ(中位部腹に よる浅い沈磨)	砂粒多	良	黄褐色	二次焼成あり
13	8	杯	17.8	-	(7.6)	(底部欠損) 6/6	内面 外面	ナダ ケズリのちナダ(輪磨痕残 る)	砂粒少	良	暗褐色	二次焼成あり
14	9	#	12.6	5.1	7.2	5/6	内面 外面	ナダ ヘラケズリのちミガキ	赤色スコリア 砂粒多	良	#	ほぼ完形
15	12	#	14.4	-	(5.7)	3/6	内面 外面	ナダ(口縁内外赤形) ヘラケズリ	砂粒少	良	暗赤褐色	
16	14	#	13.6	6.4	5.5	6/6	内面 外面	ナダ ナダ(輪磨痕残る)	砂粒少	良	淡褐色	完形
17	15	#	(14.2)	-	(4.7)	3/6	内面 外面	ナダ ヘラケズリ	砂粒多	良	#	
18	25	手捏ね	6.8	4.2	7.6	6/6	内面 外面	ナダ(輪磨痕あり) ヘラケズリのちナダ(口縁 内指痕)	砂粒多	良	#	完形

19	16	高 杯	16.0	- (6.0)	(幹部 6/6)	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ	赤影	砂粒少	良	#	二次焼成
20	19	#	(17.4)	- (5.0)	(幹部欠) 4/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ		砂粒多	良	橙褐色	二次焼成
21	18	#	(16.2)	- (6.3)	4/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ		砂粒少	良	暗褐色	二次焼成
22	13	#	(23.0)	- (4.1)	3/6	内面 外面	ナデ (赤影) ナデ (赤影)		砂粒少	良	赤褐色	
23	20	#	(14.4)	- (5.2)	3/6	内面 外面	ナデ ナデ		砂粒少	良	暗褐色	
24	17	#	14.4	- (5.7)	6/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ		砂粒多	良	#	
25	26	#	- 11.0 (3.4)		2/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ		砂粒多	良	橙褐色	二次焼成
26	21	#	- 12.4 (7.3)		6/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ (墨ヨ コナデ)		砂粒少	良	淡褐色	

土器観察表

遺構番号 0 2 1

探検 番号	実測 番号	種類・ 器 種	法 量 (cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考	
			口 径	底 径	高 さ							
1	1	壺	16.8	7.0	25.0	3/6	内面 外面	ナデ (輪痕あり) ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良	赤褐色	
2	2	#	-	5.2 (3.7)	(底部破片) 5/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリ		砂粒多	良	#	内面にスス付着
3	9	甌	12.9	3.8	13.3	4/6	内面 外面	ナデ (輪痕あり) ヘラケズリ (輪痕および 指痕圧痕)	砂粒多	良	#	焼成前穿孔
4	7	埴	11.4	4.2	15.0	4/6	内面 外面	ナデ (輪痕あり) ヘラケズリのちミガキ	赤色スコリア 砂粒少	良	#	二次焼成
5	8	#	10.2	2.8	11.9	5/6	内面 外面	ナデ (輪痕あり) ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良	淡褐色	二次焼成
6	11	#	-	-	2.8	(口、胴下 半欠) 3/6	内面 外面	ナデ (輪痕あり) ミガキ	砂粒少	良	暗褐色	
7	29	#	-	4.8 (0.9)	(底部破片) 6/6	内面 外面	ナデ ナデ (底部ケズリ、あげ底 風)		砂粒少	良	黒褐色	
8	4	高 杯	11.8	11.0	14.0	6/6	内面 外面	ナデ (胴内、輪痕残る) ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良	暗褐色	二次焼成 ほぼ完成
9	5	#	-	17.0 (6.5)	(幹部欠) 5/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	#		
10	6	#	-	- (6.0)	(底部破片) 5/6	内面 外面	ナデ (輪痕あり) ミガキ		砂粒少	良	#	
11	3	#	21.4	14.0	11.8	5/6	内面 外面	ナデ ナデ	砂粒少	良	暗褐色	スス付着 (テール状) ほぼ完成、二次 焼成
12	10	手揉ね	4.6	-	1.2	6/6			砂粒多	良	暗褐色	完形

土器観察表

遺構番号 0 2 3

探検 番号	実測 番号	種類・ 器 種	法 量 (cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考	
			口 径	底 径	高 さ							
1	2	埴	(9.4)	-	(12.4)	6/6	内面 外面	ナデ (輪痕あり) 外面お よび口縁内面赤影か? ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良	淡褐色	二次焼成
2	1	#	(8.4)	-	(10.7)	(胴下半欠) 5/6	内面 外面	ナデ ナデのちミガキ	砂粒多	良	赤褐色	二次焼成
3	5	#	(9.2)	-	6.6	5/6	内面 外面	ナデ ナデ (研磨痕あり)	砂粒少	良	暗黄褐色	二次焼成
4	3	杯	(14.2)	-	5.8	4/6	内面 外面	ナデ ナデ	砂粒少	良	淡黄褐色	
5	4	#	13.4	丸底	5.1	4/6	内面 外面	ナデのちからいミガキ ナデのちからいミガキ	砂粒少	良	#	

土器観察表

遺構番号 024

探出 番号	実測 番号	種類・ 形状	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ					
1	4	壺	15.0	-	(12.0)	(口下半穴) 3/6	内面 ナデ (輪痕あり) 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良 暗褐色	
2	5	#	(17.6)	-	(3.3)	(口縁部穴) 3/6	内面 ナデ 外面 ケズリのちヨコナデ	砂粒少	良 #	
3	1	#	-	4.7	(11.8)	(口上半穴) 4/6	内面 ナデ (輪痕あり) 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良 暗黄褐色	スス付着
4	2	#	-	5.4	(12.3)	(口上半穴) 5/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	砂粒多	良 赤褐色	スス付着
5	3	#	-	6.4	(12.0)	(口上半穴) 4/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良 暗赤褐色	スス付着
6	7	埴	-	-	(4.0)	(口縁反脚 下半穴) 3/6	内面 ナデ (輪痕あり) 外面 ミガキ	砂粒少	良 黄褐色	
7	6	杯	(11.2)	(5.0)	4.5	3/6	内面 ナデ 外面 ナデ	砂粒少	良 淡褐色	

土器観察表

遺構番号 026

探出 番号	実測 番号	種類・ 形状	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ					
1	1	壺	23.7	-	(29.0)	(底部穴) 6/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	砂粒多	良 黄褐色	欠損後二次焼成
2	7	#	-	-	(19.8)	(口縁及底 部穴) 3/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒多	良 暗褐色	二次焼成 口縁底部ナシ
3	3	#	13.8	-	-	4/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒多	良 黄褐色	
4	8	#	(16.4)	-	(20.0)	(口下半穴) 3/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	赤色スコリア 砂粒少	良 茶褐色	
5	2	#	14.3	-	(12.1)	(底部穴) 4/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒少	良 暗黄褐色	スス付着、二次 焼成
6	4	埴	-	-	(4.3)	(口縁反脚 部穴) 6/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちミガキ	砂粒少	良 暗黄褐色	
7	6	杯	14.4	-	6.5	3/6	内面 ミガキ (外面、口縁及内面 赤彩) 外面 ヘラケズリのちミガキ	砂粒少	良 赤褐色	
8	5	埴	9.8	-	6.2	4/6	内面 ミガキ 外面 ミガキ	砂粒少	良 暗褐色	二次焼成
9	9	杯	15.4	-	(4.0)	(口縁部 片) 2/6	内面 ミガキ (全面赤彩) 外面 ヘラケズリのちミガキ	砂粒少	良 黄褐色	二次焼成

土器観察表

遺構番号 027

探出 番号	実測 番号	種類・ 形状	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ					
1	1	壺	(16.8)	8.0	(29.6)	3/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良 暗赤褐色	スス付着
2	3	#	16.6	5.5	(29.5)	(底部穴) 5/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良 赤褐色	二次焼成 (内面 削落)
3	5	#	14.4	-	(21.9)	口縁 5/6 胴 2/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	赤色スコリア 砂粒多	良 暗黄褐色	
4	4	#	18.4	7.0	20.1	5/6	内面 ナデ (輪痕あり) 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良 黄褐色	
5	2	埴	-	-	(9.1)	(口、底 部穴) 3/6	内面 ナデ (外、口縁内面赤彩) 外面 ヘラケズリのちミガキ	赤色スコリア 砂粒少	良 赤褐色	

6	7	杯	(14.5)	4.4	6.2	4/6	内面 外面	ミガキ ミガキ	赤色スコリア 砂粒多	良	#	スス付着 痕あり
7	9	#	13.8	8.3	4.8	5/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗赤褐色	
8	8	#	14.0	-	4.1	5/6	内面 外面	ミガキ (赤彩)	砂粒少	良	赤褐色	スス付着
9	6	#	11.8	-	4.9	5/6	内面 外面	ミガキ	砂粒少	良	#	スス付着 (痕あり) ほぼ完形

土器観察表

遺構番号 0 2 8

調査 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺存度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考	
			口径	底径	高さ							
1	8	壺	(21.0)	-	(5.3)	(口縁部) 2/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良	暗赤褐色	
2	1	#	18.0	-	(4.4)	(口縁部) 6/6	内面 外面	ナデ ナデ	砂粒多	良	暗赤褐色	
3	3	埴	11.2	3.4	7.5	6/6	内面 外面	ナデ (輪痕あり) ミガキ (赤彩)	砂粒少	良	赤褐色	ほぼ完形、二次 焼成 (器面いち じくしく割)
4	2	壺	-	4.8	(2.2)	(底部破片) 4/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良	暗赤褐色	スス付着
5	5	埴	(8.0)	-	(3.1)	(口縁部) 3/6	内面 外面	ミガキ ミガキ	砂粒少	良	暗赤褐色	二次焼成
6	6	#	-	3.2	(2.7)	(胴下半分) 3/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちミガキ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗赤褐色	
7	4	杯	(15.0)	-	6.3	4/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ	砂粒少	良	暗赤褐色	二次焼成
8	7	高 杯	-	4.5	-	(胴部破片) 5/6	内面 外面	ナデ (輪痕あり) ミガキ	赤色スコリア 砂粒少	良	黄褐色	

土器観察表

遺構番号 0 3 4

調査 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺存度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考	
			口径	底径	高さ							
1	8	小 形 カメ	(12.0)	-	(3.5)	(口縁部) 2/6	内面 外面	ナデ	砂粒少	良	暗赤褐色	
2	6	(鉢)	(19.2)	-	(7.7)	2/6	内面 外面	ナデ } (輪痕あり)	砂粒少	良	暗赤褐色	
3	7	杯	(15.5)	-	6.5	2/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	暗赤褐色	痕あり
4	9	#	(17.7)	-	(3.8)	2/6	内面 外面	ナデ ナデ	砂粒	良	褐色	
5	4	#	(15.2)	-	5.4	3/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗赤褐色	
6	1	須恵器 蓋	12.4	-	4.7	5/6	内面 外面	ロクロ 回転ヘラケズリ	白色粒子 砂粒少	良	青灰色	自然釉
7	5	高 杯	(17.4)	-	(4.0)	(口縁部破片) 2/6	内面 外面	ミガキ } 赤彩 ミガキ	砂粒少	良	赤褐色	
8	3	#	-	-	(6.7)	(胴部破片) 3/6	内面 外面	ナデ (輪痕あり) ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良	暗赤褐色	
9	2	手捏ね	6.6	-	3.5	5/6	内面 外面	ナデ	砂粒少	良	暗褐色	

土器観察表

遺構番号 035

検出層号	実測番号	種類・輪	法 量(cm)			遺存度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	高さ						
1	1	甕	(22.4)	7.6	(30.0)	4/6	内面 ナデ(口縁ヨコナデ) 胴部 下部指張ナデ、ヘラケズリのちナデ 外面 胴中位ナゲ	砂粒多	良	赤褐色	底部(完成前穿孔)
2	2	甕	(15.6)	-	(10.3)	(口縁部) 4/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒少	良	黄褐色	
3	3	#	(17.2)	-	(9.4)	(口縁部) 5/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗赤褐色	二次焼成
4	5	坏	(15.4)	-	(5.6)	3/6	内面 ミガキ(口縁内外赤形) 外面 ヘラケズリのちミガキ	砂粒少	良	暗赤褐色	二次焼成
5	4	#	(13.4)	-	(4.3)	(底部欠) 4/6	内面 ミガキ 外面 ヘラケズリのちミガキ	砂粒多	良	#	二次焼成(表面剥落)
6	7	#	(16.3)	-	(4.6)	2/6	内面 ミガキ(口縁内外赤形) 外面 ヘラケズリのちミガキ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗赤褐色	
7	8	#	(13.0)	-	-	2/6	内面 ナデ(口、外面、内面、赤形) 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒少	良	#	二次焼成
8	6	#	(15.0)	-	(3.9)	2/6	内面 ミガキ(口縁内面、外面赤形)	砂粒少	良	暗赤褐色	

土器観察表

遺構番号 036

検出層号	実測番号	種類・輪	法 量(cm)			遺存度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	高さ						
1	2	甕	(17.6)	-	(5.0)	(口縁部) 3/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒多	良	暗赤褐色	口縁接合部で剥離
2	3	#	-	7.8	(15.7)	3/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	赤色スコリア 砂粒多	良	淡黄褐色	
3	1	#	-	6.8	(14.5)	(胴上半部) 5/6	内面 ナデ(輪痕あり) 外面 ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	暗褐色	スス付着
4	5	#	(12.4)	-	(10.7)	(底部欠) 4/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒少	良	赤褐色	
5	4	#	-	-	-	2/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	暗赤褐色	底部木炭痕
6	7	#	(19.8)	-	(6.7)	(口縁部) 5/6	内面 ナデ 外面 ミガキ	砂粒少	良	淡褐色	有段口縁
7	8	#	(17.2)	-	(7.3)	(口縁部) 6/6	内面 口縁内面ミガキ 外面 剥落のため不明	砂粒多	良	黄褐色	二重口縁
8	6	#	-	4.6	(5.6)	(底部部) 2/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒少	良	暗赤褐色	
9	11	高 杯	(17.9)	-	(7.1)	(杯部) 4/6	内面 ナデ 外面 ナデ	砂粒少	良	暗黄褐色	
10	12	#	(16.4)	15.2	(12.7)	(杯部) 2/6	内面 ミガキ 外面 ミガキ	砂粒少	良	赤褐色	
	13	#	-	-	-	(胴部) 4/6	内面 ナデ 外面 ミガキ	砂粒少	良	褐色	
11	14	#	(16.2)	-	(3.9)	(口縁部) 4/6	内面 ミガキ 外面 ナデ	砂粒少	良	暗赤褐色	二次焼成
12	10	#	(18.8)	-	(3.7)	(杯口縁) 3/6	内面 ミガキ 外面 ナデ	砂粒多	良	暗黄褐色	
13	9	#	(21.0)	-	(7.3)	(杯部) 5/6	内面 ミガキ 外面 ナデ	砂粒少	良	淡赤褐色	

土器観察表

遺構番号 037

検出 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考	
			口徑	底徑	高さ						
1	1	壺	14.3	6.9	24.4	6/6	内面 ナデ (輪痕あり) 外面 ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	暗赤褐色	スス付着
2	3	"	15.8	-	(17.3)	(肩下平) 4/6	内面 ナデ (輪痕あり) 外面 ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	暗赤褐色	二次焼成
3	2	"	17.8	-	(24.9)	(底部欠) 5/6	内面 ナデ (輪痕あり) 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒少	良	暗赤褐色	
4	4	"	-	5.8	(12.5)	(肩下平) 3/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒少	良	暗褐色	
5	5	埴	8.5	3.2	6.7	6/6	内面 ナデ (輪痕あり) 外面 ナデ	砂粒少	良	赤褐色	完形
6	8	高 杯	-	12.6	(6.0)	(肩部) 4/6	内面 ナデ (輪痕あり) 外面 ミガキ	赤色スコリア 砂粒多	良	暗褐色	二次焼成
7	9	"	-	-	(6.5)	(肩部欠) 5/6	内面 ナデ 外面 ミガキ	赤色スコリア 砂粒少	良	淡黄褐色	
8	6	柑	-	3.4	(10.3)	(口縁部欠) 4/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒少	良	暗赤褐色	
9	7	高 杯	-	17.5	(8.4)	(肩部) 5/6	内面 ナデ (輪痕あり) 外面 ナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	暗褐色	

土器観察表

遺構番号 038

検出 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考	
			口徑	底徑	高さ						
1	3	埴	(11.0)	-	(10.9)	(肩下平) 4/6	内面 口縁(内)ミガキ、(外)ナデ (輪痕あり) 外面 ミガキ	砂粒少	良	暗褐色	二次焼成
2	1	"	(5.1)	3.6	10.4	4/6	内面 (内)ミガキ (肩内)ナデ (輪痕あり) 外面 ミガキ	砂粒少	良	"	二次焼成
3	2	埴	(8.2)	4.6	7.7	3/6	内面 ナデ 外面 ナデ	砂粒多	良	暗褐色	
4	7	高 杯	(17.6)	-	(4.8)	(杯部) 3/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗褐色	二次焼成
5	6	"	(19.4)	-	(6.3)	(杯部) 3/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	"	二次焼成
6	8	"	-	(17.6)	(11.9)	(肩部) 5/6	内面 ナデ (輪痕あり) 外面 ミガキ	赤色スコリア 砂粒少	良	赤褐色	二次焼成
7	4	"	17.8	-	(8.8)	(杯部) 5/6	内面 ナデ 外面 口縁ハケメのちナデ、体ケ ズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	暗赤褐色	二次焼成
8	5	"	16.7	-	(7.4)	(杯部) 6/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗褐色	

土器観察表

遺構番号 039

検出 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考	
			口徑	底徑	高さ						
1	4	埴	(7.6)	3.2	(10.6)	4/6	内面 ナデ 外面 ハケメ	砂粒少	良	淡黄褐色	二次焼成
2	3	"	-	-	(7.5)	(口縁欠) 4/6	内面 ナデ 外面 ミガキ	砂粒少	良	暗赤褐色	二次焼成
3	2	甌	-	-	(19.3)	(肩下平欠) (口縁部欠) 4/6	胴上半に沈線区画(能方状区画線文) 内に縄文、体部はミガキ赤彩、内 面、ナデ、輪痕あり、口縁内面 赤彩	砂粒少	良	暗赤褐色	二次焼成
4	1	"	(20.2)	-	-	(口縁部) 3/6	口縁帯に点状縄文、肩部ミガキ赤 彩、ボタン状貼付文、内面ミガキ 赤彩、口縁部縄文	砂粒少	良	黄褐色	二重口縁

5	5	高杯	(21.6)	-	(8.9)	(杯部) 2/6	内面 外面	ミガキ	砂粒少	良	暗黄褐色	二次焼成
6	6	#	-	-	(7.3)	(脚部) 4/6	内面 外面	ハケメのちナデ ミガキ	砂粒少	良	暗褐色	円孔3ヶ所 杯部底部ナシ
7	7	#	-	-	(4.6)	(脚部) 5/6	内面 外面	ナデ ミガキ (赤彩)	砂粒少	良	暗黄褐色	円孔3ヶ所
8	9	壺	-	6.2	(1.4)	(底部破片) 5/6	内面 外面	ナデ ナデ	砂粒多	良	暗赤褐色	
9	10	杯	(14.4)	-	(5.3)	3/6	内面 外面	ナデ、赤彩 ケズリのちナデ	砂粒多	良	#	
10	8	土製品	長さ 7.7	幅 5.2	-	不明	内面 外面	ナデ	砂粒少	良	黄褐色	焼成前穿孔 ひしゃく状土器

土器観察表

遺構番号 040

探出番号	実測番号	種類・種	法 量(cm)			遺 年 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考		
			口 径	高 径	高 さ							
1	1	壺	(5.9)	-	(12.7)	(原下字知) 2/6	内面 外面	ナデ (口縁内面ハケメのちナデ) ハケメのちナデ (脚内面ナデ)	砂粒多	良	暗赤褐色	スス付着

土器観察表

遺構番号 042

探出番号	実測番号	種類・種	法 量(cm)			遺 年 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考		
			口 径	高 径	高 さ							
1		壺	18.4	6.7	24.8	6/6	内面 外面	ケズリ ナデ	砂粒少	良	暗褐色	
2	2	#	13.6	4.9	16.8	6/6	内面 外面	体ナデ、脚部ナデ 口縁ハケメ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗褐色	破損後二次焼成 焼成前穿孔
3	3	#	15.4	-	(10.8)	3/6	内面 外面	ナデ輪模痕 (口縁、内外面 ヘラケズリ) ヘラケズリ (脚ヘラケズリ のちナデ)	砂粒多	良	赤褐色	二次焼成
4	4	#	15.5	-	(28.0)	(原下字知) 4/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ	砂粒少	良	暗褐色	破損後二次焼成
5	1	壺	18.2	-	(32.4)	4/6	内面 外面	方足 (脚、内面ナデ) (口、内面 ミガキ) ミガキ	砂粒少	良	黄褐色	破損後二次焼成
6	5	塔	9.6	4.0	11.0	5/6	内面 外面	(口) ミガキ (脚) ナデ (輪 模痕あり) ミガキ	砂粒少	良	暗褐色	二次焼成
7	6	#	8.8	3.6	12.0	5/6	内面 外面	(口) ミガキ (脚) ナデ (輪 模痕あり) ミガキ	砂粒多	良	暗黄褐色	破損後二次焼成
8	7	#	7.8	-	11.5	5/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	淡茶褐色	
9	14	台付罎	-	-	(5.9)	(簾次) 6/6	内面 外面	ナデ ハケメ	砂粒多	良	暗黄褐色	二次焼成
10	11	#	20.4	-	(11.2)	(底部) 5/6	内面 外面	ナデ ハケメ	砂粒少	良	赤褐色	二次焼成
11	26	壺	-	7.2	(2.5)	(高部) 6/6	内面 外面	ナデ ヘラケズリ	砂粒多	良	暗褐色	
12	19	壺	-	3.6	(1.4)	(高部) 6/6	内面 外面	ナデ ナデ	砂粒少	良	暗黄褐色	
13	9	高杯	17.0	-	(11.3)	(脚部次) 6/6	内面 外面	ミガキ (脚、ナデ、輪模痕 あり) ミガキ	砂粒少	良	暗黄褐色	二次焼成 杯口縁接合用の 沈溝を残す
14	16	#	-	17.6	(10.6)	(脚) 4/6	内面 外面	ナデ (輪模痕あり) ナデ	砂粒少	良	#	二次焼成
15	10	#	20.4	-	(11.2)	(脚部次) 5/6	内面 外面	ミガキ (脚ナデ、輪模痕 あり)	砂粒少	良	#	破損後二次焼成 杯口縁接合用の 沈溝を残す

16	15	#	14.7	- ( 5.8)	(杯部) 4/6	内面 ナデ 外面 ナデ	砂粒多	良	暗茶褐色	
17	17	#	-	- ( 3.1)	(杯部破片) 4/6	内面 ミガキ 外面 ナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗茶褐色	
18	13	#	-	- ( 2.7)	(杯部破片) 4/6	内面 ミガキ 外面 ナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	#	
19	12	#	-	- ( 3.9)	5/6	内面 ミガキ 外面 ナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	#	二次焼成
20	27	#	-	15.4 ( 2.3)	(脚部破片) 3/6	内面 ナデ 外面 ナデ	砂粒少	良	暗赤褐色	破損後二次焼成
21	18	#	-	14.4 ( 7.7)	(脚部) 2/6	内面 ナデ(輪痕あり) 外面 ナデ	砂粒少	良	暗茶褐色	二次焼成
22	8	塀	10.1	3.2 5.7	4/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	砂粒少	良	暗茶褐色	破損後二次焼成
23	20	壁破損								破損あり

土器観察表

遺構番号 0 4 1

検出 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ						
1	8	壺	(17.2)	-	( 8.7)	2/6	内面 (口、内面ハケメのちナデ) (胴内) ナデ 外面 ハケメ	砂粒少	良	暗赤褐色	
2	9	#	(18.2)	-	(11.2)	1/6	内面 (口) ナデ、(胴内) ナデ 外面 ハケメのちナデ	砂粒少	良	#	
3	1	甕	(18.2)	-	(23.5)	口縁 2/6 (脚部) 4/6	口縁部、口唇部、肩部総目状燃赤文、胴部外面ミガキ赤彩、口縁内面ミガキ赤彩、胴内面ナデ	砂粒少	良	#	
4	2	#	-	6.4	( 9.9)	3/6	内面 ナデ 外面 ハケメのちナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	#	二次焼成
5	7	台付壺	-	-	( 4.1)	(脚部) 5/6	内面 ナデ 外面 ナデ	砂粒少	良	#	脚部付近のみ残存 胴内面にスス付着
6	4	高 杯	(16.2)	-	( 6.5)	(杯) 3/6 (脚) 3/6	内面 (杯) ミガキ(脚) ナデ 外面 ハケメのちミガキ(ミガキ赤彩)	赤色スコリア 砂粒少	良	暗茶褐色	031の⑦と接合
7	6	#	-	(11.6)	( 7.2)	(脚部) 5/6	内面 ナデ 外面 ハケメのちミガキ	赤色スコリア 砂粒多	良	暗赤褐色	同一個体
	3		(18.0)		( 7.5)	(杯部) 3/6	内面 ミガキ(赤彩) 外面 ハケメのちミガキ(赤彩)				二次焼成
8	5	#	(13.6)	-	( 3.4)	(杯部破片) 2/6	内面 ナデ 外面 ハケメ	砂粒少	良	暗茶褐色	

土器観察表

遺構番号 0 4 4

検出 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ						
1	1	鉢	(21.2)	10.1	9.5~ 9.9	2/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ	赤色スコリア 砂粒多	良	暗赤褐色	口縁は片口状を示す
2	2	杯	(13.0)	-	( 4.2)	(口縁破片) 2/6	内面 ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ	赤色スコリア 砂粒多	良	#	

土器観察表

遺構番号 0 5 0

検出 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ						
1	2	壺	(15.2)	-	( 2.4)	(口縁破片) 1/6	内面 ハケメ、ヨコナデ 外面 ハケメ、ヨコナデ	赤色スコリア 砂粒少	良	暗赤褐色	
2	1	杯	( 9.8)	-	( 3.4)	1/6	内面 ナデ 外面 ナデ	砂粒多	良	暗茶褐色	二次焼成

土器観察表

遺構番号 051

検出 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ					
1	6	罍	(22.6)	-	( 7.7)	3/6	内面 (口) ハケメ、(胴) ナゲ 外面 ハケメ、口唇部にハケメ工 具による連続キザミ	砂粒多	良 暗褐色	
2	1	壺	-	-	(18.4)	4/6	内面 ナゲ、肩部に沈線彫文、 胴面ミガキ赤影 外面	砂粒少	良 赤褐色	
3	4	#	-	-	( 9.1)	(胴上平) 3/6	内面 ナゲ、輪襷痕あり 外面 付加糸R L、およびLRに よる羽状彫文	砂粒少	良 暗褐色	二次焼成
4	5	#	-	-	(15.7)	(胴下平) 3/6	外面 付加糸R LおよびLRに よる羽状彫文 内面 ナゲ	砂粒少	良 暗褐色	内面スス付着
5	2	#	(19.0)	-	( 8.4)	3/6	外面 口縁部付加糸R L口、肩部 同彫文、胴部彫文による連続押捺 内面 ナゲ	砂粒少	良 #	
6	3	#	(14.6)	-	( 9.1)	3/6	外面 口縁部R LおよびLRの対 称彫文、胴部無紋、口唇部同彫文 による連続押捺 内面 ナゲ	砂粒少	良 #	二重口縁 二次焼成
7	9	台付壺	-	-	( 5.8)	2/6	内面 ナゲ 外面 ナゲ	砂粒少	良 暗褐色	
8	7	高 杯	-	13.4	( 6.0)	2/6	内面 ナゲ 外面 ハケメのちミガキ	赤色スコリア 砂粒多	良 暗赤褐色	6Lの①と同一 器種
9	8	埴	(14.4)	-	( 3.5)	(口縁部) 2/6	内面 ミガキ、赤影 外面	良好 緻密	良 赤褐色	

土器観察表

遺構番号 052

検出 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ					
1	1	罍	-	7.0	( 6.5)	(胴下平) 4/6	内面 ナゲ 外面 ヘラケズリのちナゲ	砂粒少	良 暗赤褐色	
2	3	#	-	5.3	( 2.2)	(底部破片) 2/6	内面 ナゲ 外面 ヘラケズリ	砂粒多	良 暗赤褐色	
3	5	埴	-	-	( 2.2)	(胴上平破片) 2/6	内面 ナゲ (輪襷痕あり) 外面 ミガキ	赤色スコリア 砂粒少	良 淡黄褐色	
4	4	高 杯	-	-	( 2.7)	(底部破片) 2/6	内面 ミガキ 外面 ミガキ	砂粒少	良 暗赤褐色	
5	2	#	-	-	( 2.8)	3/6	内面 ナゲ (輪襷痕あり) 外面 ミガキ	砂粒少	良 赤褐色	

土器観察表

遺構番号 053

検出 番号	実測 番号	種類・ 器種	法 量(cm)			遺 存 度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考
			口 径	底 径	高 さ					
1	2	罍	22.0	7.8	31.4	4/6	内面 ナゲ 外面 ヘラケズリのちナゲ (胴下 平ケズリ)	砂粒少	良 暗赤褐色	二次焼成
2	5	埴	14.3	3.4	13.4	5/6	内面 (口) ハケメのちミガキ、 (胴) ナゲ 外面 ハケメのちミガキ	砂粒少	良 暗赤褐色	
3	6	高 杯	-	-	3.6	(底部破片) 2/6	内面 ミガキ (赤影) 外面	砂粒少	良 赤褐色	
4	4	罍	-	-	(11.0)	(胴下平) 6/6	内面 ナゲ (輪襷痕はヘラケズリ) 外面 ヘラケズリのちナゲ	赤色スコリア 砂粒少	良 暗赤褐色	
5	1	甌	22.3	10.2	27.0	5/6	内面 ナゲ 外面 ヘラケズリ	赤色スコリア 砂粒少	良 暗褐色	焼成前底部穿孔
6	3	罍	15.8	6.4	14.5	6/6	内面 ナゲ (輪襷痕あり) 外面 ヘラケズリのちナゲ	砂粒多	良好 黄灰褐色	底部木蓋痕、焼 きゆがみ

### 第3節 まとめ

石掃遺跡で検出した古墳時代の住居は27軒である。それらは方形周溝墓群を挟む形で、調査区東側区域と西側区域の2地域に分かれる。いずれも、切り合った住居はなく時期ごとに小区域にまとまった分布が見られる。時期については、前期で2期、中期で2ないし3期にわたっている。

#### 1期

調査区西側区域の039、041、051があげられる。

南関東系の装飾的な壺、北関東系の壺とともに椀状高杯、小形器台が伴っている。

装飾壺は縄文、網目状然系文を地文とした鋸歯状の区画文やボタン状貼付文、単純な鋸歯状沈線文などバラエティーに富む。北関東系の壺は頸部に無文帯を設けており、やや肩のはったプロポーションを示す。縄文は附加条で羽状をなしている。口唇部には刻み目を施し、折り返し状の口縁部形態をとるものも見られる。茨城県北西部と関連の強い土器群である。椀状高杯は赤彩を施している。これらの土器は古墳時代の初頭に対比でき、大形方形周溝墓の時期と対応する可能性がある。また、銅鏝が4点出土していることも特筆すべきことで、弥生時代の形態を強く残している。

住居形態は小判形に近い隅丸の方形もしくは長方形で、前者は中央に柱穴を1か所もつだけである。後者は4本柱の構造で、壁際には板状の壁材痕が認められる。この時期にはきわめて幅の狭い周溝がめぐる住居があり、それらも板材を差し込んでいた可能性を想定できそうである。

#### 2期

調査区西側区域の040、050できわめて遺物の少ない住居である。住居形態は隅丸方形である。

#### 3期

調査区西側区域021、036、037、042さらに小竪穴である038があげられる。

有段口縁や折り返し状の口縁部形態をとる壺、球形の胴部に口縁部が「く」の字状に外反する壺、長頸および短頸の埴、深身の椀、高杯がある。高杯は杯底面に弱い稜線をつくるものと翼状に突出するものがあり、脚部は円筒部をもつものと「ハ」の字状に開くものがある。長頸埴は丁寧な作りで器面は磨かれ光沢がある。底部は小さく上底風をなしている。短頸埴も底部は平底で上底風をなす。

いずれも和泉期に特徴的な形態をとっており、該期のなかに収まる時期にあたる。

この期の住居の貯蔵穴の周囲にマウンドをもつものを多く認めるが、貯蔵穴を取り囲まず、住居中央側で支柱穴を覆うように幅広く設けるものが目立つ。

#### 4期

調査区の両区域に認められ、2つのグループが予想される。

調査区西側地域では023、024、025、026、027、028、034、035が、調査区東側地域では001、002、003、004、008、053があげられる。

器種構成において、杯の量的増加を見せる時期で、古墳中期末から後期はじめに該当しようが、各住居とも炉を用いており、カマドは設けていない。

甕は球形もしくはやや長めの球状を示し、口縁部が「く」の字状に外反するものと、強くよこなでされ外弯し、中央が若干肥厚するものがある。

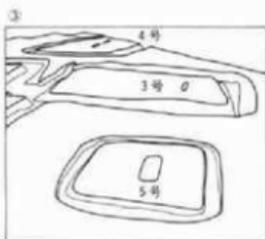
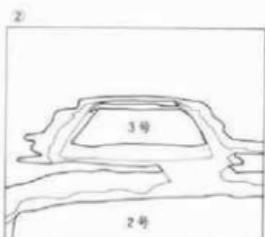
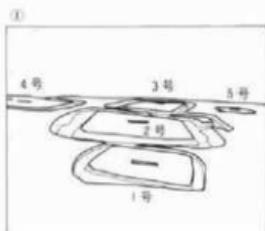
杯においても口縁部に強いよこなでを加え、外面にわずかな稜線をとどめ、端部が外弯気味に尖るものと、端部はまるみの強い内弯気味のものがある。

埴は前時期に比べ大型化するものと、小形で算盤玉状のものがあり、大形品は偏球形の体部に外反する長めの頸部がつき、底部は丸底を呈している。小形品は長頸にかかるようで底部は平底で粗雑なつくりとなる。

高杯は杯底面の稜線が形骸化し、わずかに残る程度のもが多く、脚円筒部の内部は粘土が充填されるものがある。また、丈の短い後期的な脚部も断片的に見受けられる。

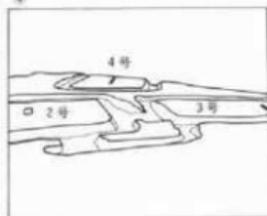
002の口縁部よこなでで外面や内面に稜線をもつ平底の碗や、004でみられる口縁部が短く外反する平底の碗、また、短い脚部の高杯、035の口縁部の直立する横俵杯的なものほど、比較的新しい要素を備えた遺物相を見せるものと、和泉的な高杯を残すものがあり、総じて、両区域の小形な住居については古手の様相を残していると考えられ、該期が2期に分かれる可能性がある。

# 写 真 图 版

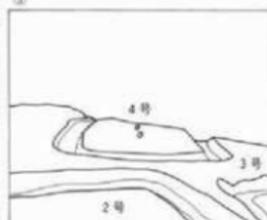




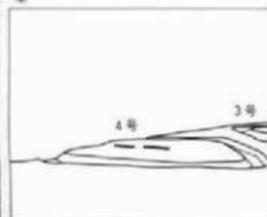
④



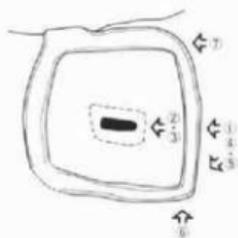
⑤



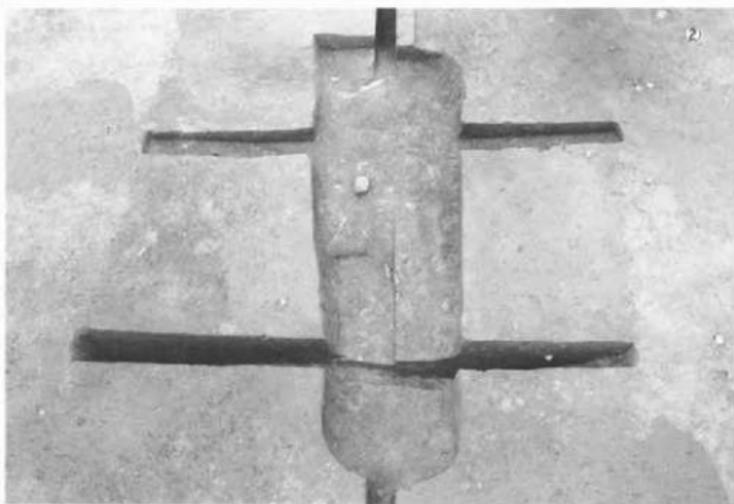
⑥



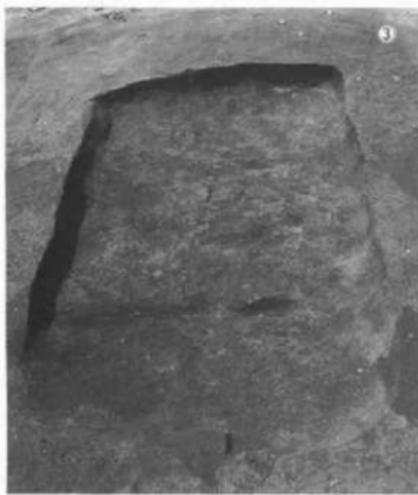
7)



1号全景

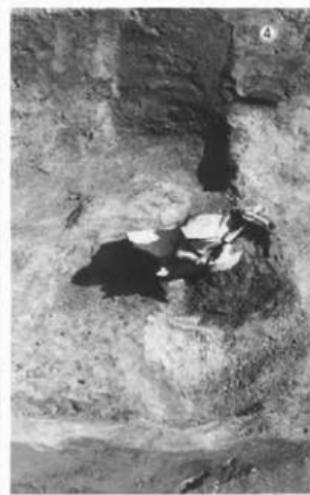


1号主体部



1号出土状况(右)

1号主体部相方(左)





1号出土状况



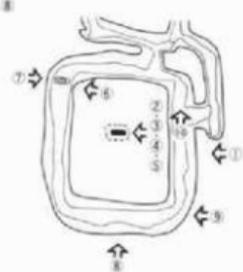
1号出土状况



1号出土状况

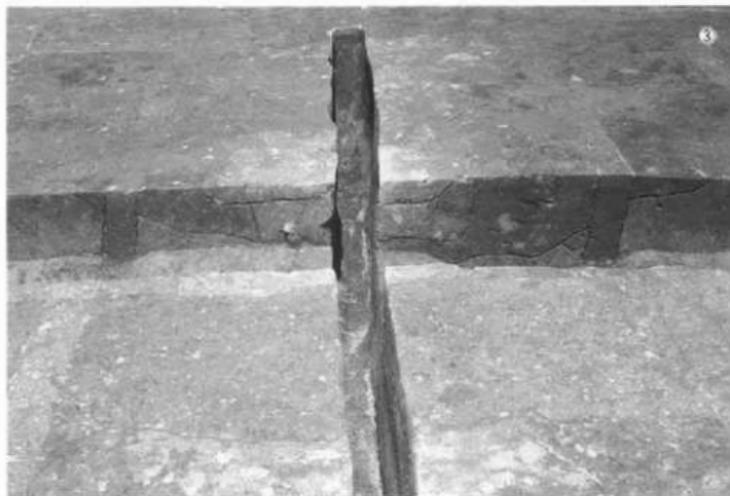


2号全景

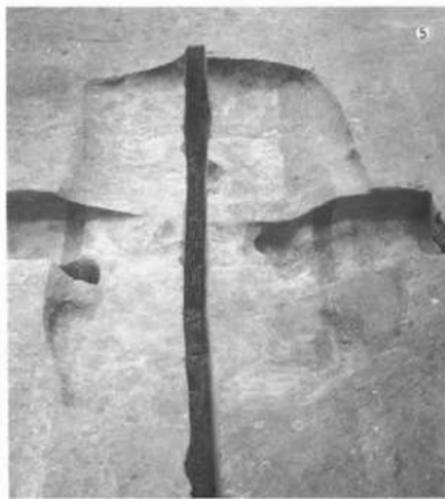




2号主体部



2号主体部セクション

主体部鉄刺出土状況(左)  
2号主体部堀方(右)

6



7



左 周溝内主体部断面(左)  
右 " " 全景(右)

8



2号出土状况

9



10



2号出土状况



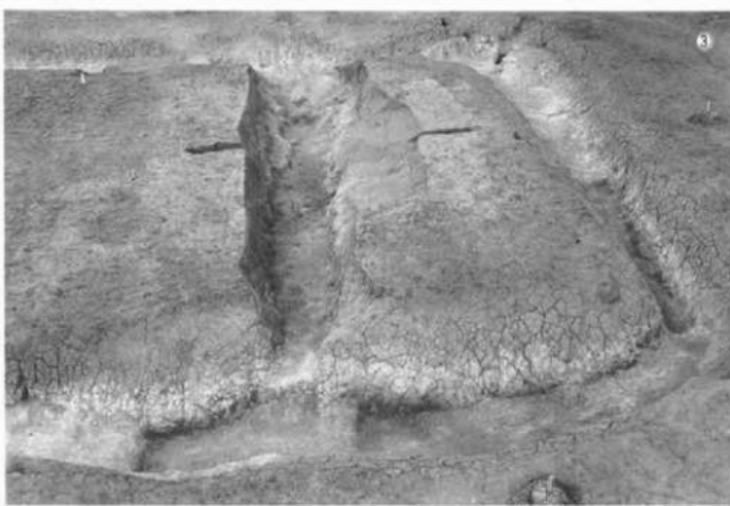
3号全景



3号全景



3号田周溝

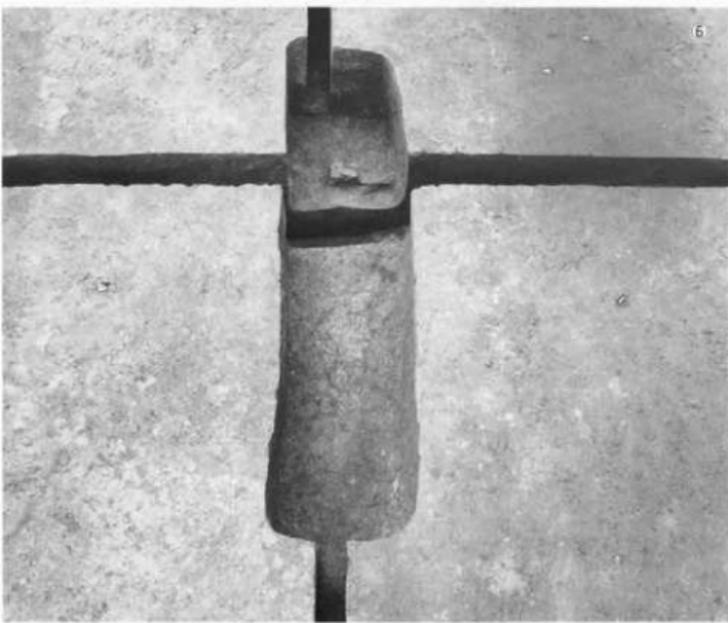




3号主体部検出状況



3号主体部断面



3号主体部



3号田圃横断面



3号有段部



3号出土状況



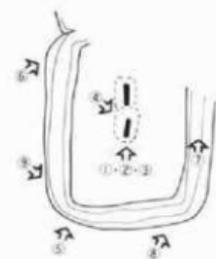
3号出土状况



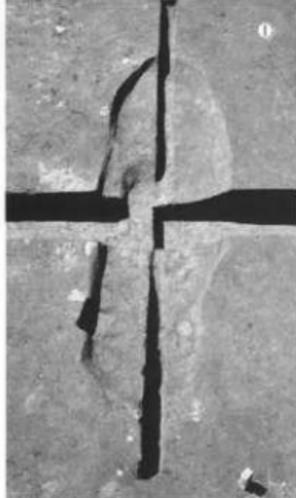
3号出土状况



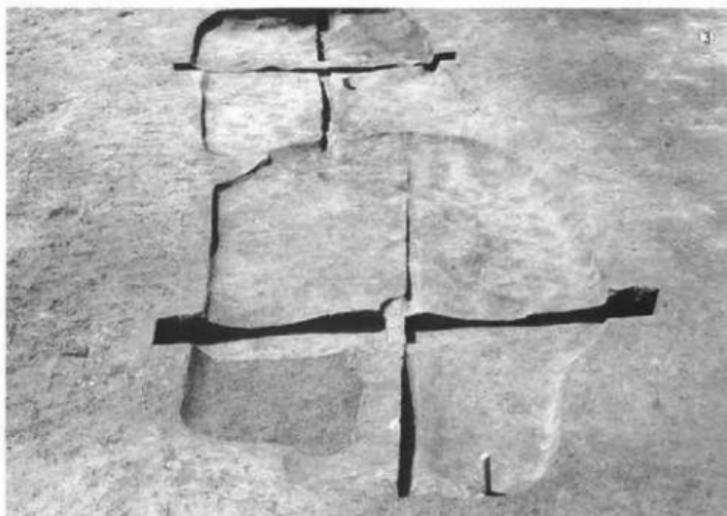
3号出土状况



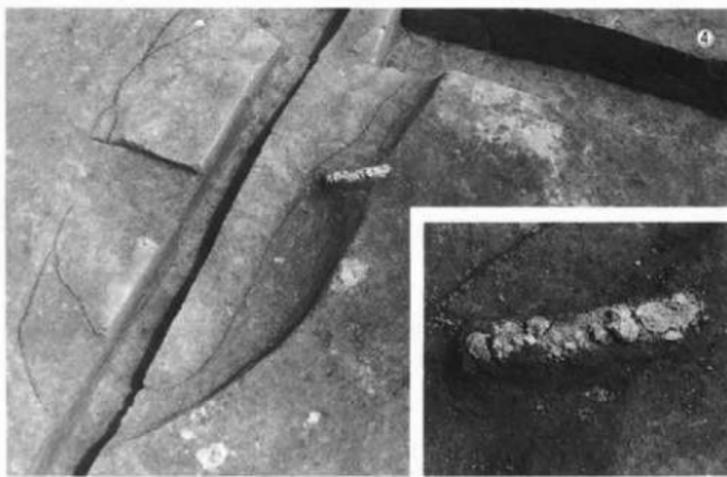
4号主体部



4号罐口方



4号铁钎出土状况

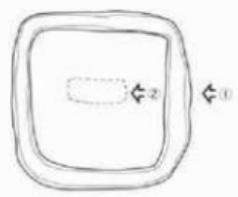




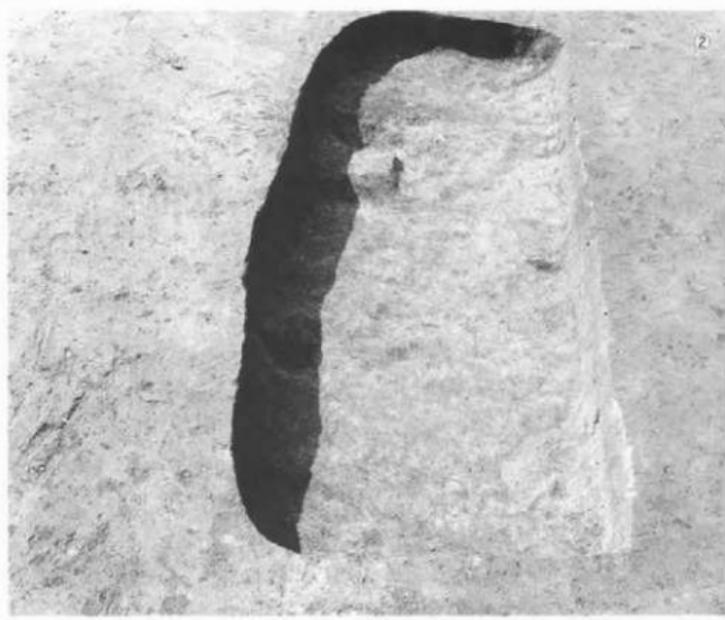
出土状况



4号出土状况



5号全形



5号主体部



2·3号池结构部





1号-1



1号-2



2号-3



2号-2



2号-4



2号-5



2号-7



2号-6



3号-1



3号-6



3号-5



3号-4



3号-3



3号-7



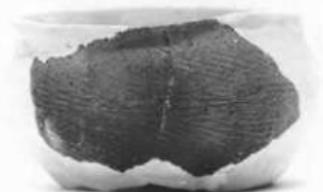
4号-2



4号-3



4号-4



4号-6



4号-5

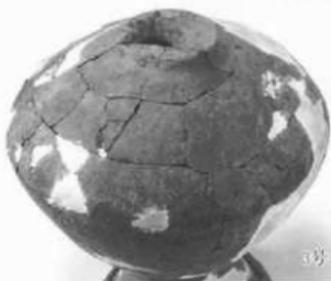
方形周溝墓遺物



龙精-1



2号-4



3号-5



2号-3



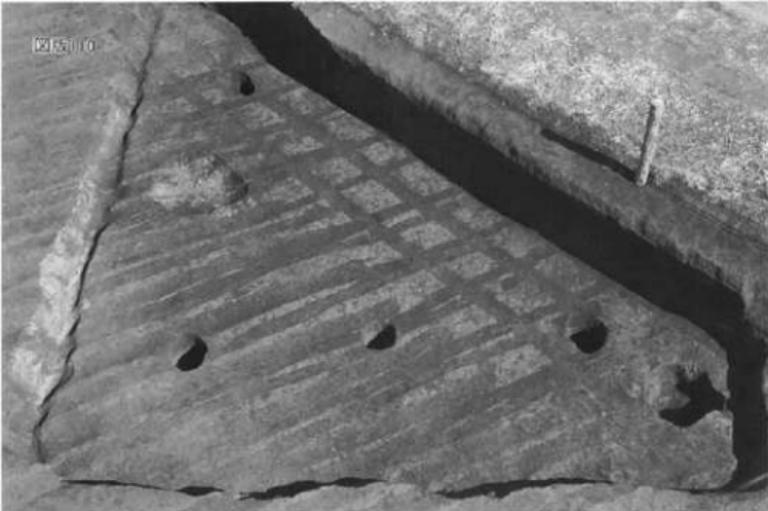
2号-4



2号



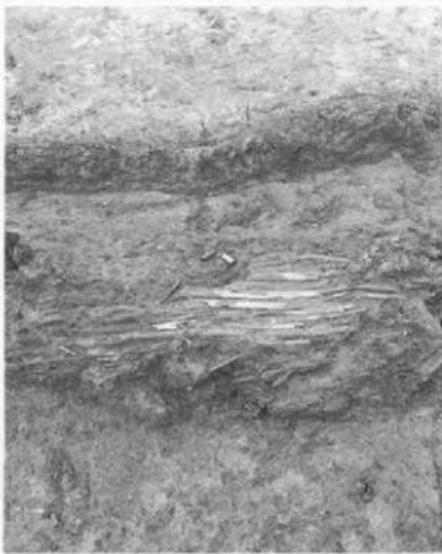
4号



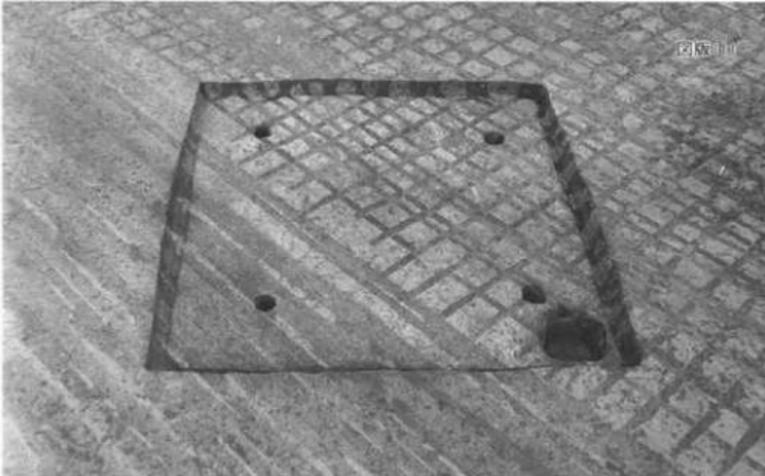
001西測



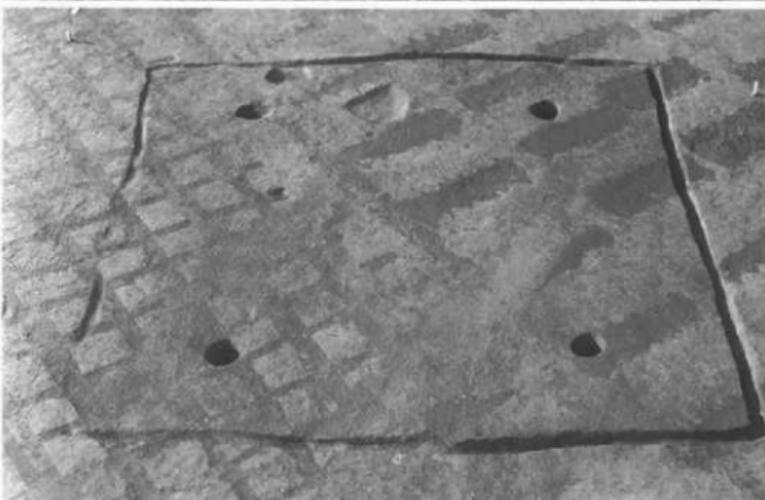
001東測



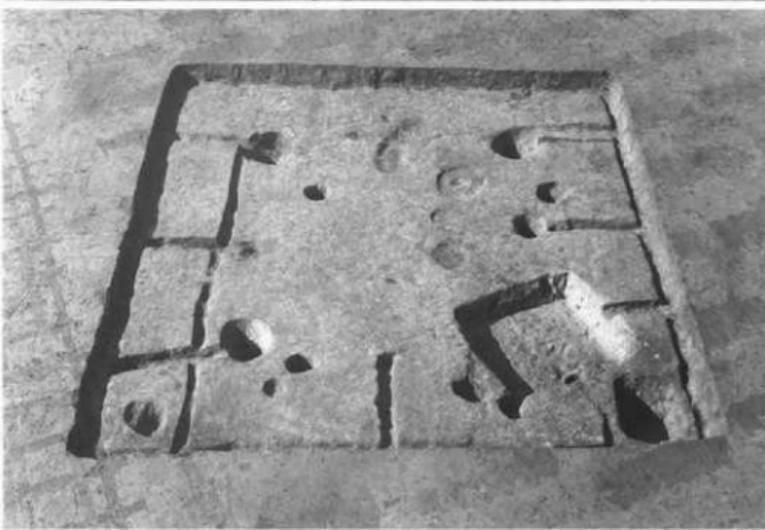
001炭化材出土狀況



002全景



003全景



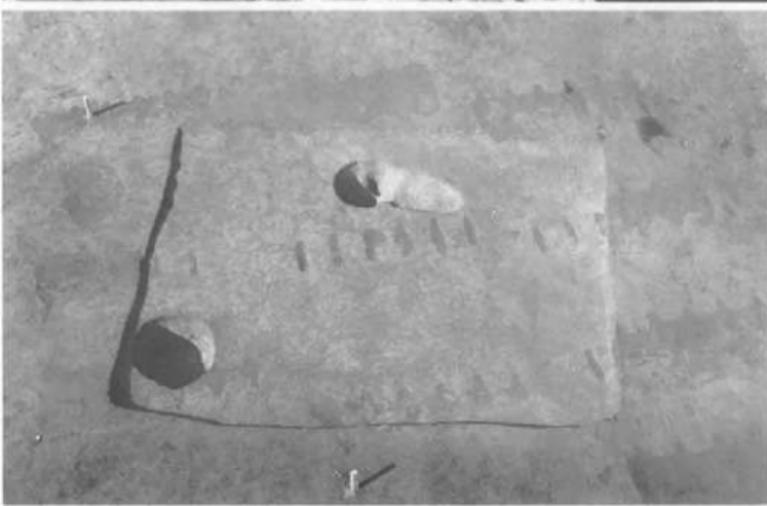
004全景



004出土状況(全体)



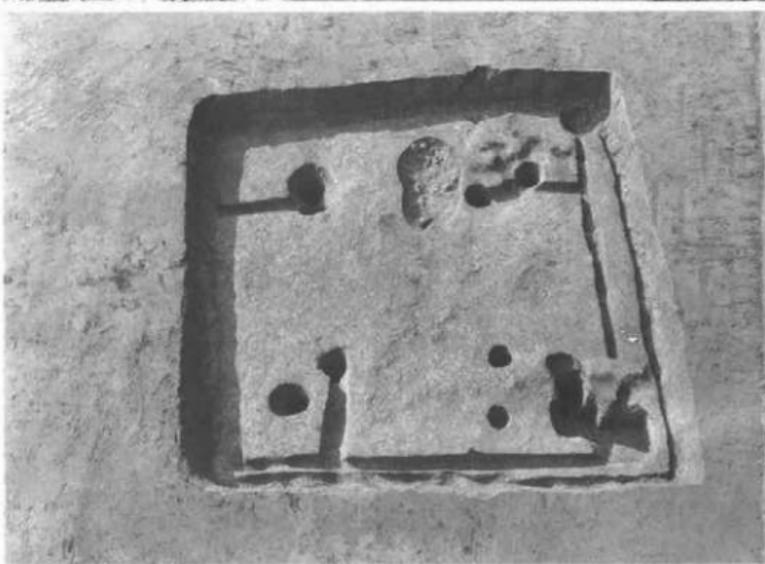
004出土状況(部分)



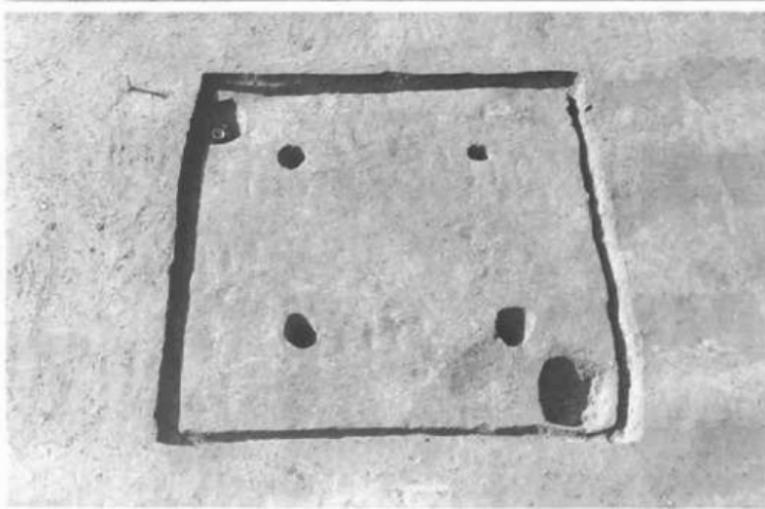
008全景



013全景



014全景



015全景



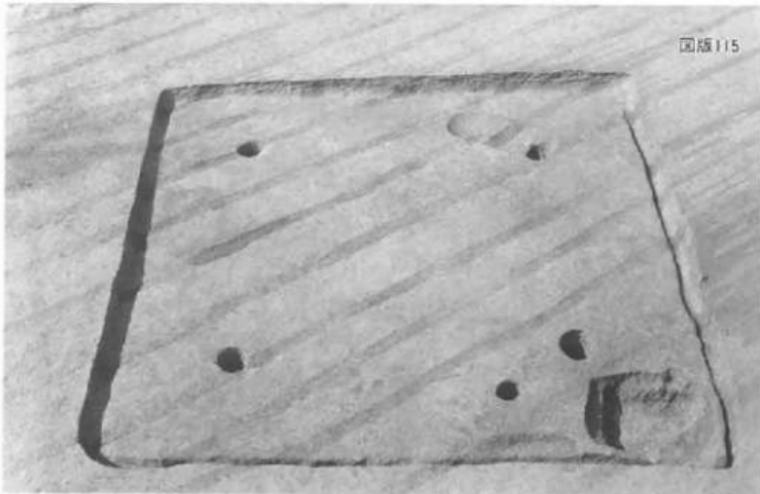
015出土状況



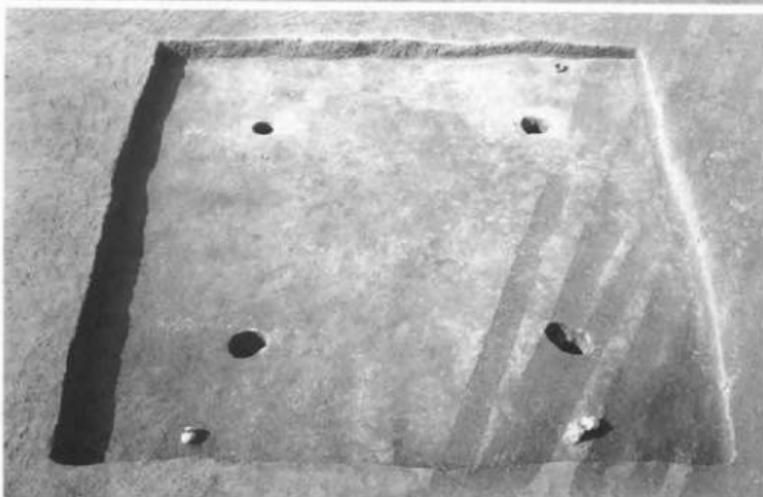
015出土状況



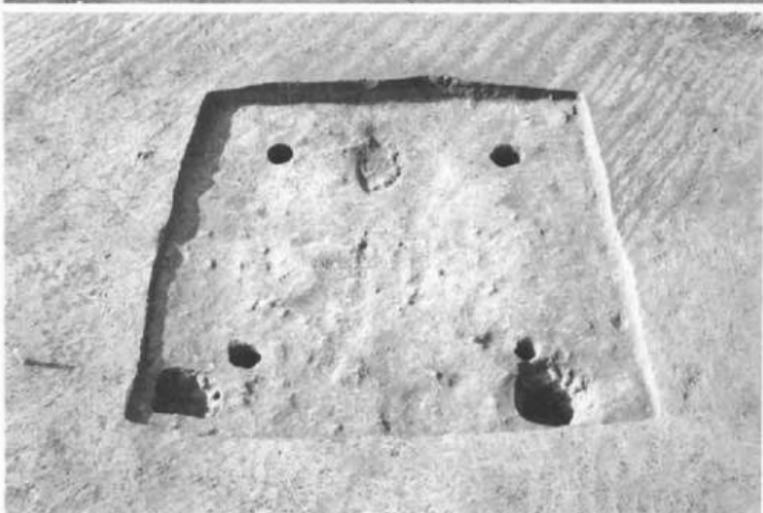
015出土状況



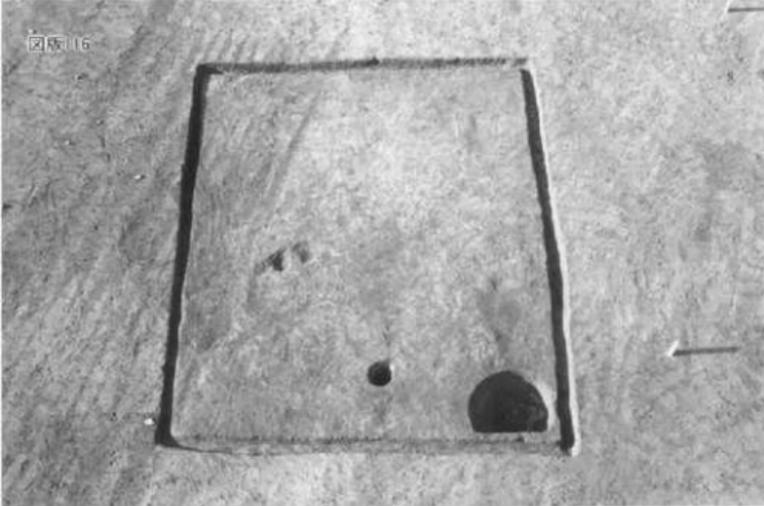
021全景



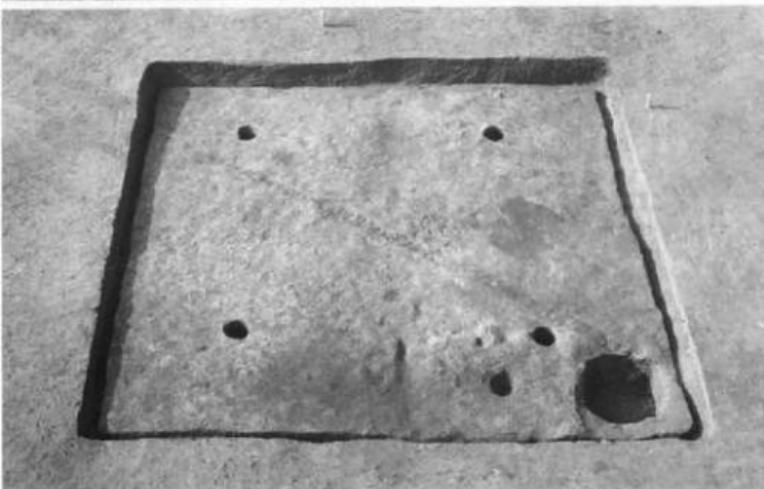
023全景



024全景



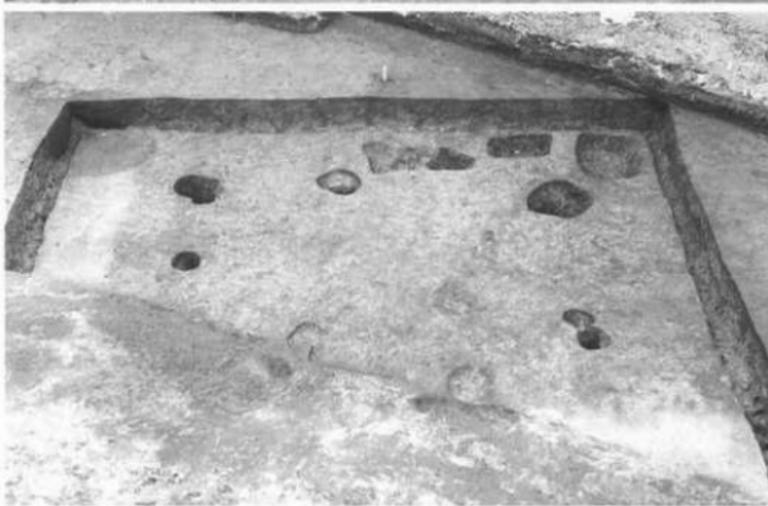
025全景



026全景



026出土状况

027 手前  
028 後

034全景



034铜器出土状况



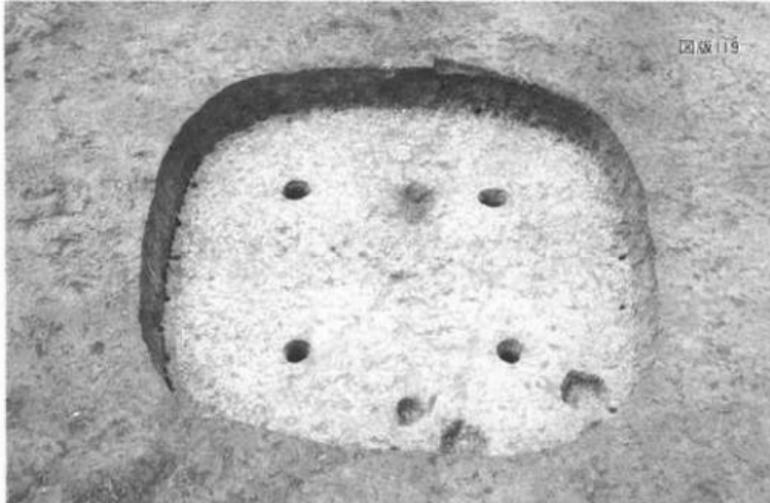
035 全景



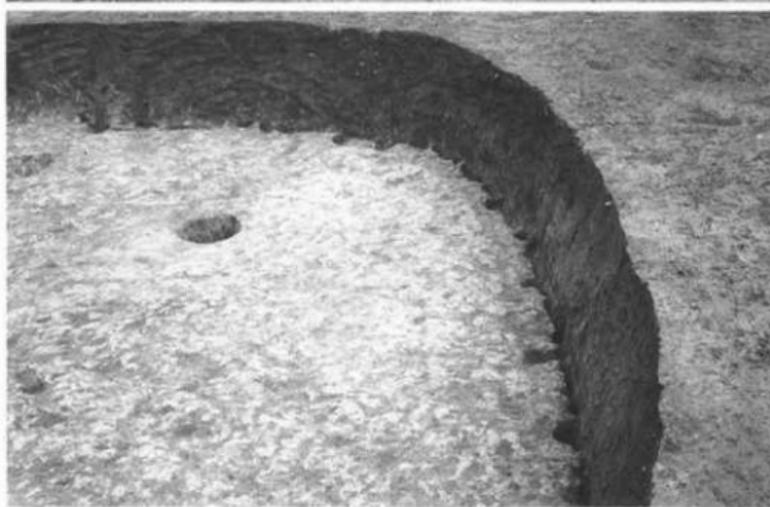
036



037



039全景



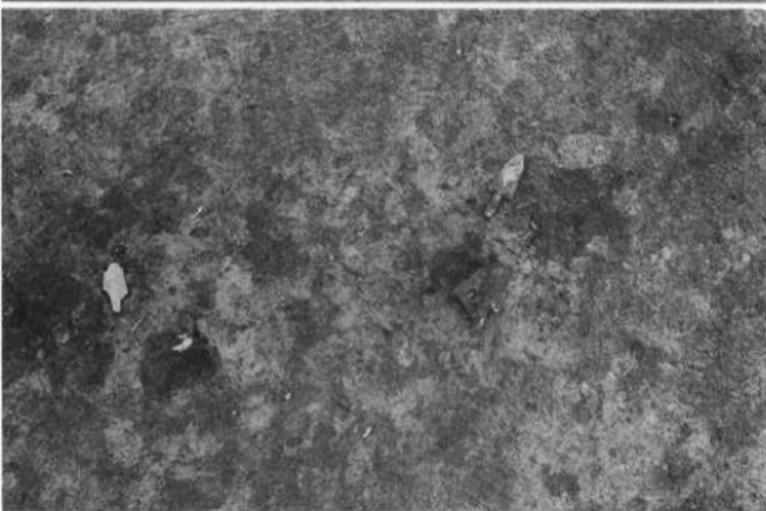
039壁材前檢出狀況



040



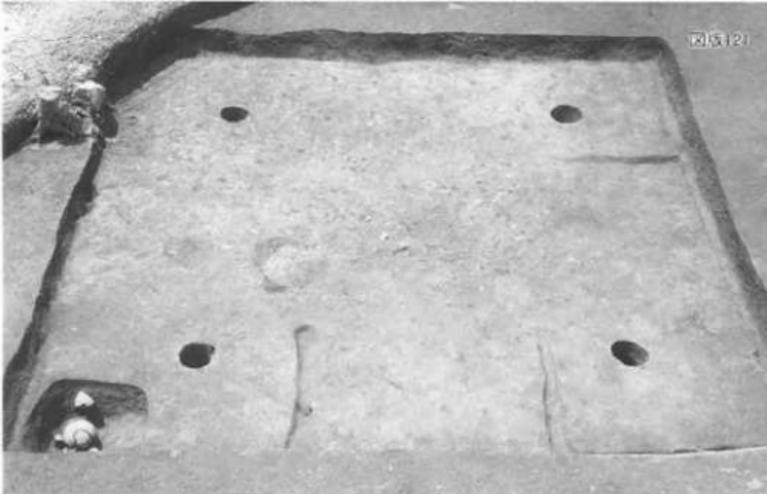
041全景



041鋼鐵出土狀況



051全景



042全景



042断藏穴





050 全景



053 全景



038 全景



052全景



6号墳全景



6号墳主体部





004-1



004-2



004-3



004-4



004-5



004-6



004-13



004-7



004-15



004-21



004-14



004-8



004-16



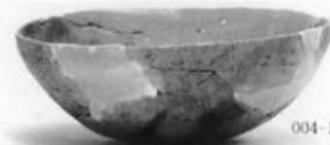
004-19



004-20



004-10



004-11



004-18



004-12



004-26



004-17



021-4



008-4





042-13



014-11



014-12



014-14



014-13



014-15



014-19



014-20



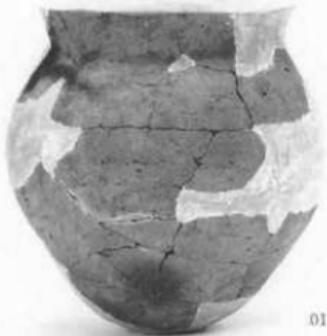
014-23



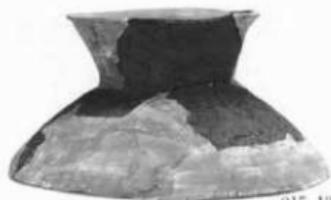
014-17



015-3



015-1



015-12



015-10



015-11



015-9



015-14



015-16



015-13



015-21



015-20



015-19



015-23



015-26



021-11



021-8



023-1



023-2



023-4



023-3



023-5



024-3



024-1



026-3



026-1



026-5



026-6



026-7



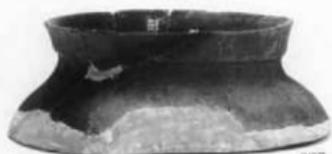
026-8



027-4



027-2



027-3



027-5



027-8



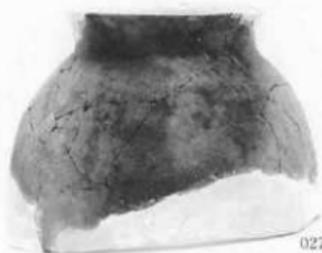
027-6



028-7



035-1



027-1



027-7



027-9



028-3



034-6



035-2



036-7



036-2



036-13



037-3



037-1



036-4



036-3



037-2



037-5



037-6



038-2



038-1



038-3



038-7



038-6



038-8



038-5



039-3



039-4



039-2



039-6



039-7



041-9



051-6



051-2



051-5



042-2



042-1



042-5



042-8



042-6



042-15



053-6



053-5



053-2



6号坑

報告書抄録

フリガナ	イシアガイセキ							
書名	石橋遺跡							
副書名	手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第255集							
著者名	太田文雄・安井健一							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県西街道市鹿渡809-2							
発行年	1994年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石橋	千葉県東葛飾郡 沼南町泉 字石橋	12305	003	35°50'22"	140°03'30"	19891201 ～ 19901031	28,290㎡	少年自然の家 建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
石橋	包蔵地	旧石器	石器集中地点 28プロック	ナイフ形石器、撚器、形器、細石刃、敲石		旧石器時代VI～VII層に良好な接合資料		
	集落跡	縄文	（竪穴住居 27軒 伊穴・陥し穴・土坑	縄文土器、石器、土偶、垂飾品		縄文時代前期初頭の集落		
	古墳	（竪穴住居 28軒 土坑 2基	土師器、須恵器、石製模造品	古墳時代中期集落が主体 前期初頭 3軒				
	墓	弥生～古墳	方形周溝墓 5基	鉄剣、ガラス玉、管玉		方形周溝墓遺物多量出土 1基は拡張している。		
	古墳	古墳	古墳 2基					

千葉県文化財センター調査報告第255集

## 石 揚 遺 跡

—手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

### 第 3 分 冊

---

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月31日 発行

発 行 千 葉 県 教 育 委 員 会  
千葉県千葉市中央区中央4丁目13番地28号

編 集 財 団 法 人 千 葉 県 文 化 財 セ ン タ ー  
千葉県四街道市鹿渡 809 - 2

印 刷 株 式 会 社 弘 文 社  
千葉県市川市市川南 2 - 7 - 2

---